振り向けば、君がいた。

菩提樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
振り向けば、君がいた。

【Ｎコード】
Ｎ０３１０Ｊ

【作者名】
菩提樹

【あらすじ】
２００×年１２月。アラサー前の私は今、引っ越しの準備をしている。
新たな人生（みち）を歩む前夜に思い出すのは、あの頃の自分と、甘くて苦くて笑えて、そして切なくて……不器用な青春の日々。そして、忘れられぬ君の姿――。
時はＪＲが発足し、平成の世が明ける少し前のお話。荒井美千子（あらいみちこ）は今までの自分を脱ぎ棄てて中学デビューを狙っていたが、ことごと

く邪魔をする男子生徒がいた。その名は尾島啓介（おじまけいすけ）。美千子の世界が彼を軸に廻り出していく。

子供でも大人でもない中学時代を迷走する、普通女子・荒井美千子の成長と、笑いと涙（？）溢れる恋と友情の甘ショッパイ青春ストーリー。

「中学生の頃、あなたはどんな日々を過ごしていましたか？」

全体的に過激な表現や発言、また小中学生並みの低レベルで下品な下ネタ、未成年の飲酒や喫煙シーン、イジメの描写などがでてきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。注）他の投稿サイトにも掲載しています。

ラジオから流れる曲は（前書き）

はじめまして！
当拙作に訪問していただきまして、本当にありがとうございます！
小説というにはあまりにお粗末なお話ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

ラジオから流れる曲は

『……という、今まさにドライブ中のK崎市K崎区のムーちゃんからのリクエストぉ！　＜ジュンスカの白いクリスマス！＞すげぇ懐かしい、俺もよく聞いてたよぉ！』

CDラジカセから曲のイントロであるギターの切ない音色をバックに、DJの軽快な曲紹介が重なった。

「……お、懐かしい」

12月の冷たく乾燥した空気にも関わらず窓を全開に開け放ち、ラジオを聞き流しながらせっせと荷物をダンボールに詰め込んでいた手が止まってしまった。しっとりとしたメロディーに聴き入ってしまう。

数時間前から聞いているラジオの番組は、リスナーからのリクエストによってクリスマスに向けての定番な曲が次々と紹介されていた。

うろ覚えの適当な歌詞を歌うことで懐かしい思い出達から現実に引き戻し、再度目の前の詰め込み作業に集中した。しかしやってもやっても作業が終わらない。

「あ～結構一杯あるなぁ」

本棚にあった書籍をダンボールに詰めていたのだが、想像していたよりもかなりの冊数に溜息が出た。

この分だとSサイズのダンボールがまだ必要かもしれないと、壁に立て掛けてある引越社のマークが入ったダンボールの束の数をチラリと確認した。

（いや、まてよ……）

いっそここは読まないものを思い切って処分するかと考えたが、既にダンボールに詰め込み終わった本を一から仕分けするのも面倒だなと顔を顰めてしまった。

今更遅い。ただでさえこれから細々した雑貨類をやっつけないといけないというのに。

毎年毎年、年末のこの時期に大掃除をするたびに要らないものを処分してきた筈なのに、何故か一年後には置くスペースがなくなるくらい物が増えているのだ。

「奥さ～ん、進んでる～？」

ノックもなしにいきなり部屋を開けたのは、一歳下の妹・真美子だった。開けたドアの近くまでダンボールがあるせいか、扉が全開できず半開きのまま上半身だけ覗かせた。

「うわっ、すっごい」

真美子はこちらを見ながら一瞬驚いた顔をした。

「……え？　その本箱にあった本、全部持っていくの？」

マジですか？　と眉間に皺を寄せている。

「う～ん、だってさ？　なんかどれも必要な気がして、暇なときに読むかもしれないしさ」

手に取った小説をペラペラめくりながら、思わず文章を目で追ってしまった。

真美子は苦笑いを浮かべながら「よいしょ」とドアで無理矢理ダ

ンボールを押して、部屋の中に入って来た。手にはペットボトルの紅茶を二本持っていた。

「差し入れ、飲むでしょ？」

「わぁ、サンキュー！」

真美子から紅茶を受け取り、ひとまず休憩を取ろうと部屋の真ん中に陣取っているベッドの上に二人で腰かけた。

ラジオから流れていた曲はいつの間にか終わり、ＤＪはリスナーからのハガキかメールを読始めている。

「本さぁ、持っていくの少しにしたら？　こんなにたくさん新居の何処に置くのよ。遠くないんだから、読みたくなったら取りにくればいいじゃん」

真美子はダンボールに詰め込んだ本を取るために、ベッドから腰を浮かせた。

「それに、暇なんて言うなら働きなよ。アルバイトでもパートでもなんでも」

お金、貯めといたほうがいいよ。

真美子は開いた本をパタンと閉じた後、ダンボールに戻した。そんなのはわかっている、お金は少しでもあったほうがよい。

「……ん～そのつもりだけど、暫くは生活慣れるのに大変だし……」

思わず気の乗らない正直な感想が漏れてしまった。それよりもこれからの新生活をじっくり味わいたいという野望……いや、願望があったから。

「なら、なおさら本なんて読んでる暇ないじゃん」

ごもっとも。

とは言わず、や、そうだけども、と言葉を濁していたら、真美子はベッドから腰を上げ窓に近づいて外を眺めた。

窓からはベッドのところまで温かな日差しが届き、そして冷たい空気と共に吹奏楽の音が聞こえてくる。市立の中学校が数十メートル先にあるのだ、土曜日でも熱心に部活動らしい。

「あ〜とうとう明日引越ですかぁ。なぁんか、あっという間だねぇ？」

真美子は伸びをした後、しんみりした声で言った。

「本当ね、呆気ないもんだよね……」

少し笑いながら妹の隣に並んで、外を眺めた。二階にある我が城から見下ろすと、小さな庭と父と兼用しているシルバーのセダンが見える。

目線を先に向ければ有名コンビニの裏手が見え、二車線の道路を挟み、我が母校である中学校の裏門があった。

顔を上げると校舎の二階と三階の廊下がバッチリ見える。それこそ目を凝らせば誰が通っているのかなんとか分かるのだ。校内放送も聞こえる。どの先生が呼び出されているかとか、下校時刻に流れる音楽と放送とか、もちろん今聞こえてくる吹奏楽の音も。

けど中学を卒業したらまったく聞かなくなってしまった。社会人になってからも相変わらず無縁だ。大体平日のその時間帯は勤務中で家にはいない。

「ねぇねぇ、この間さぁ。私が中三ときのさぁ、クラス会があったらしくてさぁ。おかしぃの」

急に真美子は口元を緩めて話し始めた。

「え？」

中三のクラス会？

真美子は「そう」と頷いた。

「ヘルプでＹ浜のデパートに入ってたらさぁ、売り場で同級生にあってビックリした。『荒井って、ここで働いてたの？！』って声かけられたんだ」

妹は某有名アパレルメーカーの店員をしていた。自社ブランドを社割で購入し、いつも小奇麗に新作を着こなしていた。勤務地は東京のＳ谷だが、たまにあちこちの売り場に手伝いに出向するらしい。

「今月の頭にクラス会があったんだって。うちにも葉書出したらしいけど、だいぶ前に区画整理で住所変わったでしょ？　だから住所不在で戻ってきたらしいんだ」

妹の言うとおり、十年ほど前に道路や区画整理の関係で我が家の周辺が取り壊しになり、市の方で用意してくれた土地と助成金で家を建て直した。

移転先は数メートル先だったが。

「あ～行きたかったなぁ、中学の友達に全然会ってなかったしぃ」

真美子はニヤニヤしてるせいか、さほど残念そうには見えない。

「けどさ、何故か中学の同級生って会わないんだよね。みんな近くに住んでるのにさ、同じ駅を使うのにさ」

そうなのだ、何故か会わない。連絡を取り合わないと会えない。偶然会う確率は高校や大学の連中よりも高い筈なのに。

「うん、不思議よねぇ？　なんでかねぇ？」

肯定するように頷くと真美子はまだニヤけた顔でこちらを見た。そのイヤらしい顔つきにソワソワしつつも気づかぬ振りをして、ペットボトルを振ってみた。中で液体の紅茶が揺れ、ポチャポチャという音が出る。

「ま、それにしても、ハガキが戻ってくるなら電話くれりゃいいのにさ！　幹事はそれぐらいのガッツを持ってほしいわ。ねぇ？」

「あぁ、まぁ、そうだよね」

気のない返事をしながら目の前の中学校から視線を逸らし、再びペットボトルのキャップをひねって紅茶を飲んだ。真美子はまだ話を続けるらしい。

「な～んか同窓会、先生も来たらしくて。社会のチンタオ先生！全然変わってなかったらしくてさ、もう孫がいるんだって！　写真見せながらデレデレだったってさ」

社会のチンタオ先生。

懐かしい名前が出てきて思わず妹の顔を見て復唱した。

「チンタオ先生？」

「そ、チンタオ先生」

妹はニンマリした顔でうなずいている。そう、彼は確かに社会科の先生だった。地理の資料に載っていた世界地図、中国にある半島の名前「青島（チンタオ）」、丁寧にルビがふられていたのを思いだした。

そこから名付けられたあだ名、「チンタオ」こと青島先生。

「……そっか。チンタオ先生って、真美子の担任だったんだ」

「そうだよぉ。オネェちゃんも担任になったことあるでしょ？　だって『チュウさんの妹かぁ』って言われたもん、フハッ！」

真美子は噴き出し、アハハと可笑しそうに笑ってる。

チュウさん――。

それを聞くと、くすぐったいような、切ないような、おかしな気持になった。

あだ名をつけた人物の顔を思い浮かべた。

昔の、中学の時につけられたあだ名、「荒井」だから「チュウ」という短絡的なあだ名だ。当時は冗談じゃなくそのあだ名にムカついたものだ。大体思春期の女の子に対して命名するあだ名ではない。でもそのおかげでクラスに馴染めた。今となっては懐かしい思い出、カワイイもんだ。

「ちょっと、もうやめてよね。……大体ね、荒井だからチュウなんて単純すぎるでしょ？　菅原だったらブンタなの？　高倉だったらケン？　バカじゃないの、本当」

含み笑いを隠さずわざと怒った振りで言うと、真美子はさらに噴きだしながら窓から離れてベッドに座った。

「フフ、まぁね。でも、もう荒井じゃないもんね、もうチュウじゃないもんねぇ」

真美子も笑顔で自分のペットボトルのキャップをひねり紅茶を飲みだした。

そう。

真美子の言うとおり、もう「荒井」じゃなくなる。もう「チュウ」なんてあだ名とは今日でおさらばだ。

吹奏楽の練習音が止んだ。

ラジオから再びリクエスト曲が流れだす、毎年この時期になると必ず流れる曲だった。

『……待ってろよ～というメッセージと共にY浜市のチュー好きさんからリクエストです！（ユーミンで恋人がサンタクロース！）オレも、チュー好き！！』

ラジオから聞こえてきたペンネームの「チュー好き」を聞いた途端、真美子と目を合わせ笑ってしまった。

「ぶっ！　やだぁ、ウケるんだけど！」

そう、まさしくタイムリーなネタ。

部屋の中に松任谷由実の独特な歌声が響き渡り、真美子は笑顔で、この歌いつ聴いてもいいよねぇと言った。

今夜。あと数時間もすれば、私にもサンタクロースが来る。

そして。一夜明ければ、松任谷由実が「旧姓・荒井」だったよう

に、愛しいサンタは私を「荒井」から新しい名字にした後、今詰めている荷物と共に彼の住む街へ連れていくのだ。

私は結婚する。

アルバム

『ワハハハハ』
『あらぁ、いやだわ、オホホホホ～』

両親の豪快な笑い声が玄関へ続く廊下まで聞こえた。
温かい居間から遮断された廊下や階段は真っ暗で薄ら寒い。玄関の横と階段の踊り場にある窓から漏れる外灯の僅かな明かりが余計に寒さを醸し出している。夕食のスキヤキとアルコールのおかげで身体と頬が火照っている為、寒さは余り感じられなかったが。

「今夜も冷えるなぁ……」

小脇に抱えている四冊の分厚いアルバムをさっさと二階の自分の部屋へ避難させるべく居間から退散したのだが、ついでに尿意もあったのでお手洗いを済ませ階段を上った。
階段を登る途中でひと際高い父の笑い声が耳に入った。

「……まーた、変なこと言ったんじゃないでしょうね……」

居間のダイニングテーブルでスキヤキを囲みながら、両親を前にして談笑しているサンタ……いや、男を心の中で悪態ついてみた。
ヤツは遠慮なく肉にガッツいていた。
母が用意した普段食卓にお目見えしない肉屋の最高級の霜降ってる牛肉。「沢山食べてね」という言葉通りに鍋の中の牛肉はヤツの口の中にどんどん消えた。
もうスキヤキの肉は完食してしまった。
席を立った時、鍋に残っているのは春菊と色の変わった白滝だけだった。アルコールも勧められた分だけ飲んでいた。今も飲んでい

る。得意じゃないくせに。こういう席だけ、友人や会社の人と飲むときだけ「飲んべぇ」に変わる。

一人暮らしをしていたあの冷蔵庫に酒の気配はなかった。あるのは常にジュース、しかも炭酸飲料。野菜ジュースを飲めと言っても聞きやしない。

二人で部屋にいるときもヤツはあまり飲まなかった、「まぁまぁ、飲んでくださいよ」と私にだけ飲ませた。ある日何故私だけがと不服を唱えると、「君、飲んだらすごいよ？　身体擦りつけて積極的なんだもの、オジサン嬉しいんだもの」と目尻と鼻の下を下げながらグラス一杯にお酒をついだ。

「……明日朝早いんだけど、大丈夫かな」

苦笑しながら残りの階段を登り、自分の部屋のドアを開けた。

＊＊＊

見なれた部屋は、カーテンが引いておらず、コンビニの看板の明りや道路の街頭の光がわずかに差し込んでいた。壁のスイッチに手を伸ばし電気をつけると、夕方にやっと詰め込み作業が終了した荷物の山が目に入った。

ダンボールの山を始め、ベッド、ドレッサー、タンス。

薄ら寒い部屋の中に所狭し荷物が積んであるのに、なんだか部屋の中がガランと感じられた。部屋の中に色というか、生活感が無くなったせいだろうか。

ベッドの上にあった蓋があいているダンボールに持ってきたアルバムを再び納めた。

「……ったく、急にこんなものを出せだなんて」

ブツブツと文句を言いながらガムテープを伸ばしたが、なんとなくその手でアルバムを取ってみた。アルバムと言っても家族の写真ではない、卒業アルバムだ。小学校、中学校、高校、短大と４つ手に持ちベッドに座った。かなりの重量だ。短大になるほどアルバムの造りが豪華になっている。一番上の小学校のアルバムは開ける気もしないので、早々と横に置く。

最初にケースから取り出したのは数メートル先にある中学の卒業アルバムだ。

「１９８●年　Y市立山野中学校卒業アルバム　絆」

私はあまり卒業アルバムを見たくないし、見せたくない人間だ。ハッキリ言ってこの世から抹殺したい。答えは簡単、自分の写真が大変不細工だからである。自分の分はいくらでも処分できるが、他の同級生の分は無理だ。卒業生全員一生このアルバムを持ち続けると想像するだけで悪寒が走る。

そんなにっくきアルバム達だが、この中学校だけは特別だった。厚い表紙を開き、真っ先に自分の顔が映っているクラスを開く。

３年６組。

自分の写真を見て溜息と苦笑が出た。何度見ても変わらない、変る筈もないぎこちない不細工顔にデコピンをした。

私は幼少の頃から身体が大きかった。

大きいうえに、太っていた。

ポッチャリと言えば聞こえがいいが、ようするになんてことはない、デブである。それが小さいころからのコンプレックスだった。特に小学校の頃がひどかった。おまけに引っ込み思案で、頭もそんなに良くない。「このままではイカン」といつも思っていたが、いい考えも浮かばず努力もせずにいた。

身体は大きく、やや太り気味、消極的で頭は中の下、しかも運動神経は鈍く、生真面目の面倒臭がり屋、暗いし卑屈っぽい。
最悪である。
これでは友達もままならない、私だってこんなやつの友達になんかなりたくない。
当然のごとく小学校の時はあまり友達がいなかった。今でも思う、その当時の自分に「しっかりしろ、努力が足りない」と喝を入れてやりたい。

それでも。
月日は人を変える。

そんな私でも今ではそれなりの大人になった。
短大までポッチャリだったが、社会人になってからは仕事のストレスと稼いだお金でスポーツクラブとエステに通い、見る間に痩せた。痩せて背が高いとくれば、あらゆる服が着こなせて得だった。不細工だと思っていた顔は意外とパーツがでかく、化粧すればそれなりに映えた。
自分でも結構努力したと思う。
良く見せるメイクを覚え、真美子から洋服のセンスや女性らしさを見習い、あらゆるお稽古事をして自分の肥やしにした。
おかげで稼ぐ給料、自分や交際費に投資してばっかりだった。今となってはＯＬの標準の貯蓄をかなり下回ってるが、後悔はしてない。
そして魅力的な女になるための大事な要素。
恋愛。
見かけは変わっても、幼少の頃からの卑屈精神&自信は皆無という性格はなかなか変わらなかった。男なんてどうでもいいと半ば諦めてなりふり構わず仕事と自分を磨く努力をしていたら、自然と男が寄って来た。

「欲しいものから心を離すと忘れた頃に願いが叶う」

まぁ、世の中そんなものらしい。

社会人になって初めてまともにした恋愛。

高校・短大と女子ばっかりだったせいか、男の人と「お付き合い」というものをしたのは社会人になってからだった。太めで不細工で生真面目だった私でも、努力すればちゃんと彼氏ができるんだ！！

……と、その当時は感動のあまりに涙なんかも出る始末だ。彼氏のいる女を羨み、いつも引き立て役、盛り上げ役に回っていた情けない役ではない。

自分が恋の主役。

デートし、手をつなぎ、キスをしてセックスをする。

学生時代に普通の女の子達が通る恋愛、小説・ドラマ・マンガに出てくるようなドキドキした恋をしてこなかったから、初めて付き合った彼に舞い上がった。彼に夢中になり、戸惑い、余裕がなく、くだらないことで大いに悩み、最後は手痛い失恋をした。今も思い出すだけで恥ずかしさと申し訳なさと情けなさと恨み事で心がグルグルしてしまう。けどそのころの私は外見はイマドキを装っていても、中身は相変わらず真面目だった。

「バージンを捧げた初カレ＝絶対結婚する人」だと思っていたのだ。

真面目と言えば聞こえがいいが、お嬢様でもあるまいし、２０代前半でこれではどうかと思う。

重くて振られるの、当然だ。

それが月日というのは恐ろしい。

史上最悪な失恋をして立ち直れないと思いきや、新しい恋人ができれば初カレのことは忘れた。今じゃ何処でどうしているかもわからない。初カレに振られてから居間で飲んでいるサンタに出会うま

での数年、デートや合コン、お見パー、週末クラブでオールなんてのも数え切れないほどやった。それこそ酒の勢いで一晩だけというワンナイトカーニバルな男もいたし、結婚する人は初体験の人どころか……まぁ、ここは控えておこう。

それなりの場数を踏み経験値を上げれば、自信もついてくる。仕事にも慣れ、大人の遊びも覚え、恋も順調とくれば、人間余裕ができるしオーラも増すのだ。

ともかく、あんな地味だった人間でも変わる。

恐ろしいほど変わる。

次のページをめくった。

3年7組。

中学のアルバムを開くと必ず見てしまうページがこの3年7組だった。

担任は箕輪。超怖かった。ゴル●13みたいな眉毛でいつもしかめっ面してた。背が低く一年中ピッタリしたTシャツを着て乳首を浮かせていたマッチョな体育教師。

ぎこちない箕輪の顔にフハっと笑いが漏れてしまった。口を押さえながら、目線はいつものところに止まった。

短髪の柔らかい爽やかな笑みを浮かべている男の子。目尻に浮かぶ皺がなんとも可愛らしい。

そして。

茶髪の五分刈りで生意気そうな笑みを浮かべている男の子。こちらは目尻に黒子がある。

自然とこちらも照れくさいようなくすぐったいような気持ちにな

り、ぎこちない笑みをしてしまう。
男子全員、きちんと白いカラーをつけた学ランを着て並んでいる澄まし顔の写真。
当時人気者と言うかクラスの中心にいるような「カッコイイ」と言われる男の子達は、真面目に制服を着ることが「カッコ悪い」とでも言うように白いカラーをつけた子はいなかった。長ランだの短ランだのボンタンだの着ていた。
二人ともいつもはカラーなんぞつけていなかったくせに、この写真はついている。

爽やか、目尻皺イケメンの「田宮」。
五分刈り、目尻黒子男の「尾島」。

初カレとは違う、淡い恋の思い出。
彼らは一生忘れられない、私の青春。

我が中学校は、ダッシュで1分

『１９８〇年　Ｙ市立山野中学校入学式』

私、荒井美千子は新たな希望を膨らませ中学校の正門、いや、裏門をくぐった。

……と言っても、振りかえった数メートル後ろには我が家があるのだが。道路で車に捕まらず、ダッシュすれば1分の中学校。

「本当、近いな」

これならギリギリまで寝れると不埒な考えをよぎらせながら昇降口に向かった。

案内に従って自分が利用する昇降口に入ると、群がる真新しい制服・上履き・カバンを身に付けた生徒達。下駄箱の自分の名前の札が貼ってある場所を確認した後真新しい運動靴を入れて、入学式前に中学校から届いた「入学式の案内」と「クラス名簿」を手に自分のクラスである1年８組に足を向けた。

我が山野中学校は３つの小学校から生徒が集まっており、新学年のクラス数は全部で１０クラス、生徒数は各クラス約５０名弱と今では考えられないくらいの生徒数だった。なので自然と小学校６年の時に同じクラスだった子と一緒になる確率は低くなる。名簿を見たら８組のクラスには、同じクラスだった生徒が自分を含め４人いた。

（別に私一人でもよかったんだけど）

ともかく消極的で暗かった私は、小学校の時の自分の姿を知っている奴が一人でも少ない方が自分の輝かしいスタートにとって都合がいいと思っていた。残りの３人には悪いが、名簿で知った名前を見つけた時には「チッ」と舌打ちをしてしまった。

そう、私は中学を境に生まれ変わろうと密かにプロジェクトを練っていたのである。

今で言うと「〇〇デビュー」っていうやつに当たるだろう。まずは積極的な友達作り。少しでも痩せるため春休み中白米のおかわりはやめた。もちろん部活は運動部希望だ。本当なら帰宅部か絵が好きなので美術部に入りたいところだが、苦手を克服しないといけない。

勉強も頑張ろうと、春休みの間に入学前に買ってもらった各教科の参考書に目を通した。特に英語。英語は皆スタート地点が一緒、小学校で個人的に習っている奴は少なかった。今でこそ小学生が英語を習うなんてのは珍しくない、むしろ幼児向けの英語なんてあるくらいだが、私たちの時代にはそんな子供は皆無に等しかった。未知なるこの教科は自分にとって新たな扉を開いてくれるかもしれない、これだけでも他の奴を出し抜くチャンス！　……と本気でそんなことを思ってた。

その頃から洋画が大好きになったことも背中を押している。小学の高学年や中学生の女の子が好んで占いの雑誌や「明星」・「平凡」などのアイドル雑誌を買っていた頃、私は洋画の雑誌「ロードショー」や「スクリーン」を買っていたのだから。

その頃の夢は通訳になり金髪碧眼と運命的な出会いの後電撃婚、ハーフの子供を産むと本気で考えていたことはサンタには内緒だ。

さて、階段を登り教室に近づくと廊下には女の子が数組仲良さそうに話している。おそらく小学校の時に仲良かった者同士なのだろう。

８組という札が下がっている教室の扉の前に立つと胸のドキドキが最高潮になった。自分の心境を割合で示すと、緊張６割、不安２割、恥ずかしさ2割。

中を覗くと半分くらいの生徒が大人しく席に座っていたり、窓から校庭を眺めていたり、……この緊張する雰囲気を読まず、友達同

士ふざけてカーテンを身体に巻きつけて笑っている男子もいる。

「……」

すでに中学に馴染んでいる大物なのか、それとも小学生の気分が抜けない単なる能天気なのか。こういう奴ってどこにでもいるんだなと思いながら黒板に目を向けると、今後の予定と教室内での指示がチョークで書かれていた。

○教室では静かにしてください。
○席は机の上に名前が貼ってあります、名簿順で座ってください。
○１０時から入学式が始まります、９時半までにカバン置き、貴重品を持って体育館に集合してください。
○入学式の後、速やかに教室に戻ってください。
○ホームルームの時に必要事項をお伝えします、筆記用具とノートを机の上に出しておいてください。
○時間割、教科書、ネームプレート、校章はホームルームの時に配布します。

席は名簿順。

予想どうりだ、確か私は女子で2番目だった。もう前の方の席になるのは仕方がない、「あ行」に生まれた宿命だ。

扉のすぐ傍にある机の名札を見たら青いペンで「石田」だった。どうやら一番端の廊下側の列は男子の席らしい。廊下から2番目の列、前から2番目の席に行くと札の上に赤い字で「荒井」とあった。ためらいがちに椅子を引くと、思ったより響いた音が出たので慌てて座った。椅子は木と金属のパイプでできている椅子、なんてことはない、小学校の時とそんなに変わらない。かしこまったまま机に視線を落とすと、小さいキズと鉛筆で書いた薄い落書き。この机が、椅子が、教室が、私の新たなスタートを切る必須アイテムとなるの

だ。

少し感動して、目を細めてしまった。

「ねぇ、ねぇ」

掛け声と共に後ろから背中をつつかれた。

ハッとして顔を上げ後ろを振り向くと、髪が長くて肌が浅黒い女の子がぎこちない笑顔を浮かべている。さっきまで自分の席の列は誰も座ってなかったのに、気付かないうちに自分の後ろの席は生徒で埋まってた。

「ねぇ、何処小？　山野？　大野？」

女の子は恥ずかしそうにしているが、積極的に声を掛けてくれた。こっちも緊張はしたものの、嬉しくて横座りをしながら答える。

「あ～、山野小です。え～と、宇……井さんは？　下山野小なの？」

机の名札を確認しながら聞くと、宇井さんと言う人は微笑みながら頷いた。

「そうそう、下山野小。クラスに同じ小学校の人少ないからさ、これからもよろしくね？」

「あ、うん、こちらこそよろしく」

教室入っていきなり声を掛けてきてくれたことがにわか信じられなかった。

クラスに知った顔が少ないとは実に羨ましいと思いつつ、ぎこちなく挨拶を返した後、まわりはどんな感じで過ごしているのか目線

を泳がせて辺りを見回してしまった。回りの連中も席の前後で何人か会話を交わしている。

とりあえず私は好調のスタートを切ったようだった。

もちろんこの程度で好調と言えるのかどうかは甚だ疑問だが、ともかく滑り出し順調である。脳内ではもう一人の自分が「やったな！」とサムアップしてウィンクをかましていた。

「し、下山野だったら、と、遠いね。やっぱバスなの？」

多少どもったが、せっかくお知り合いになった宇井さんと距離を縮めなければという一心で、会話をなんとかつなげようと必死で話題を紡ぎ取る。

「そぅ、本当はバスで行きたいんだけどさぁ、お金がかかるから歩きで行けって親に言われているんだよね。面倒だわ」

スンマセン、ダッシュで1分のところに住んでマス。

とは言わず「大変だね」と言うと、「でしょう？」と大袈裟に溜息を吐き、机にうつぶせたと思ったら頬杖をついた。先程にも述べたとおり、我が山野中学校は「山野小・大野小・下山野小」の3つの小学校が集まっており、山野小が一番人数が多い。その次に大野、下山野と続く。後々卒業アルバムを見せてもらったら、大野は４クラス、下山野は3クラスしかなかった。ちなみに山野小は６クラスもある。クラスが少ない地域ほど中学校から遠かった、下山野小の子は３０分かけて歩きかバスを利用しなければならない。以前はチャリもＯＫだったらしいが、卒業生が問題を起こして禁止になってしまった。

「山野小だから近いよね、羨ましいよ。えっと、あ～名前なんて言

うんだっけ？」

ここで自分が名乗ってないことに気付いて慌てながら「ご、ごめん！　荒井美千子です、よろしく」と頭を下げた。

「ハハハ、荒井さんか、美千子ならミっちゃんだね。私、宇井和子。宇井でもいいし、和子でもいいよ」

いきなり飛び捨てしてもいいんですか、そんなに親密になってもいいんですか？！　と宇井さんの手を取って狂喜乱舞する私。無論、心の中で。

「じゃ、じゃぁ、和子ちゃんって、呼んでもいいかな……？」

妄想を追い払って控えめに言うと、宇井和子はもちろんというように笑顔で頷いてくれた。

いいよ。

この時点で荒井美千子、サムアップから勝利の拳を空に突き上げていた。言うまでもなく、心の中で。

「ねぇ。もうそろそろ、入学式始まるよ、体育館に行こうよ」

そう言って席を立ちあがり、私の腕を取ってくれた。

席を立った和子ちゃんを見てびっくりした。なんと背が私よりも大きかったのだ。ふっくらしてるところも似ている。それを見て益々親近感が湧いた、彼女となら末長くよいお友達になれそうな気がしたのだ。ただ彼女は私と違って暗く消極的ではない、明るく前向きのようだ。オマケによくよく見ると髪もブローしてあるし、眉毛

もキチンと整えている。そして僅かにいい香りがした。

「あ、ちょっと待って」

そう言って和子ちゃんはポケットからリップと手に収まるぐらいの細長いコンパクトのようなものを出した。おもむろにコンパクトを開くと鏡でリップクリームを塗っている。極めつけはそのコンパクトを制服の上にあてていく。

鏡つきの携帯の埃取り。

ショックだった。自分の頭上に雷がピシャーンと直撃するほどの衝撃。

（この世にこんなものがあるとは……！）

目の前の「宇井和子」という人物がとてつもなく大人に見え、唖然としてしまった。

「……ん？　どうしたの？」

「い、いや。ちゃ、ちゃんと綺麗にしていて偉いな……というか、すごいなというか……」

慌ててひきつり笑いをしていたら、和子ちゃんは「やだ～たいしたことないよ」と言った。

（……いや、たいしたことあるんですけど）

同じ大きめ&ポッチャリでも一味も二味も違う和子ちゃんに一瞬劣等感がよぎるが、慌てて負の感情を消す。そんなこと気にしていたら前に進めない、私は変わらなければならないのである。こういう小技を盗み、見習わなくてはいけない！　と密かに決意をした。

（これぞ中学生！　やっぱ小学生のガキとは違うわよね！　そうよ、電車賃だって中学生は大人料金じゃない！）

またもや脳内ではバスローブを着た私が、色気を醸し出しながらリップクリームで大人と子供を分けるラインをキッチリ引いていた。

私は即効和子ちゃんに問いかけてしまった。

「そのコンパクト、どこで売ってるんですか？」

盗むどころかいきなり答えを求める荒井美千子、調子のいい乙女な１２歳。

「……ミっちゃんって、面白いねぇ」

和子ちゃんは笑いながら丁寧に教えてくれた。

販売場所は意外と近かった、中学の近所にある「大葉書店」。文房具も本も売っている我が町の唯一大きい書店。

中学に近いということは当然我が家からも近い。

最初のミッションが決まった。

大葉書店でマンガや小説、雑誌に現を抜かしている場合ではない。

家に帰った後、携帯埃取り&リップクリームを購入したのは言うまでもない。

その男、チビ猿こと「尾島」！～前編～

「おはよう！　ミっちゃん」

昇降口で靴を履き替えていると、後ろから声を掛けられた。

「お、おはよう！」

元気よく返した（つもり）相手は友達第一号の和子ちゃんだ。

「ミっちゃん、近いからいいよなぁ～、何時まで寝ているの？　うらやまちぃ」

明るい笑顔をたたえながら和子ちゃんの横から声を掛けてきたのは、同じクラスの中山幸子（なかやまさちこ）だった。

彼女は入学式の日に和子ちゃんに紹介してもらった。和子ちゃんと同じ下山野小学校出身で家も近所らしい、毎朝一緒に登校してきている。

下山野と大野小出身の生徒は人数が少ないからか、それぞれ結束力が……いや、新密度が高い。山野小の連中には同じクラスになったことがない人なんて結構いるが、他の小学校は人数が少ないため、6年間のうちに一度は顔を合わせたことがあるのである。

その為、クラスの中でも同じ小学校出身同士のグループが何組か出来上がっていた。特に女子にその傾向が強い。

最初に声を掛けてくれた和子ちゃんがいる下山野小の子が集まるグループにそのまま入れてもらった私は、珍しい部類に入る。

和子ちゃんの友達は、山野小出身の私を快く迎えてくれた。

他の小学校出身の子が珍しいせいもあって、最初は質問攻めだったが。

それでも、人と付き合うのが苦手な私としては、相手からいろいろと来てもらったほうが話題を提供しなくて済むし、間が持ってよい。

（こんなによくしてくれるなんて……）

未知なる縁故に心を弾ませ、中学校の生活がスタートしたのであった。

＊＊＊

「おらおら、オマエら邪魔なんだよ。ヌリカベみたいにデカいんだから、ちょっとは気をきかせろよな」

出た。

朝の賑やかな昇降口に響いた、まだ声変わりしていない高い声。

上履きに履き替えた私たち3人に向かって「カッチーン」とくる辛辣な言葉を吐きだす悪魔は一人しかいない。

以前の私なら「あ、ハイ、スミマセン、退かせていただきます」とショックとムカつきを隠しながらも引き攣り笑いを浮かべて素直に道を譲るところだが、今の私は違う。朝からイラっとする言葉を投げつられて黙っているほどお人好しではない。しかも味方は2人。人数ではこっちが上だ。

振りかえるとそこには、背の低い五分刈りの生意気顔があった。くっきり二重の垂れ下がった目尻には小さい黒子。

その男子の真新しい学ランは「着ている」というよりも「着られている」と言うほうが近い。

「うるさいよ、尾島！　チビ猿は黙って猿山にでも帰ってな！」

「そーよ！　『邪魔』なんて言葉、百万年早いのよ！　っていうか、声の主が小さすぎて見えないんですけどぉ？！」

えーここで出走馬の紹介をいたします。
早々とスタートを切った先行馬は、全開の瞬発力が鮮やかな仕上がり万全の下山野小出身・ブラックダイヤモンドウイ。
外から追走するのは、無駄のないシャープな走法……いや、ツッコミで好調をキープする同じく下山野出身・フローラルレッドサチコ。
そーよ、そーよ！！　……とは言えず頷きと目線で抗議を訴えるのは、スタートで大幅に崩れ流れに乗れなく詰めの甘い超逃げ腰ＮＯ．１・アライマイチクイーン。
決して「ヌリカベ」を肯定するわけではありませんが、３頭……いや３人はクラスの女子の背の順で最後尾を飾るメンバーであります。
ちなみに背の高い３人は仲良く揃ってバレー部でもあるんですねぇ。以上、パドック前から荒井美千子がお送りしました！
……などという実況中継してる場合ではない。炎ではなく下駄箱をバックに睨み合う、３頭ｖｓ１匹。

「あ～う・る・せ！　いやだねぇ、凶暴な女は。大体ドテチンとヒラメとチュウのくせに生意気なんだよな」
ホント。君達、ジャマジャマ。

大袈裟に溜息をつき心底嫌そうな顔。ふんぞり返ってシッシッと手を振りながら大きいスポーツバックを持ち直し、私たちの間を無理矢理通って行く。
さらにすれ違う時、ワザとバックをぶつけるという小技も忘れないところがまた憎たらしい。

「ちょっと、危ないじゃないの！　痛いのよ！」

真っ赤な顔をして怒鳴ったのは和子ちゃんだ。幸子女史も「あんた、サイテっ！」チビ猿のスポーツバックをバシンと叩いてる。

私も本当は言いたい、「ふざけんな、テメェ！」という台詞を。負けるな、アライマイチクィーン！　ここは後方から追い上げてビシッとさせ！　一発逆転、大穴狙え！！

「あ、あの、そのあだ名、や、やめてほしいんだけど……」

出タ言葉ハ、震エタドモリ声デシタ、マル

言いたいことの半分も言えず情けないオーラを滲みだしながら落ち込んでいると、チビ猿はこちらをチラっと見た後ヒャヒャと馬鹿にした笑いを漏らした。

ナンダ、バカヤロウ。ヤメルカ、バカヤロウ。

チビ猿は聞きたくもないモノマネをしながらさらに笑い声を上げて、上履きのかかとを踏みながら足早に教室へ行った。

ギリギリギリ……ボボボボ……

前者は心の中で響く歯ぎしりの音であって決して虫の鳴き声ではない、無論悔しいからである。後者は恥ずかしさのあまり顔から火が噴く音。

「……ったく、アイツ本当生意気！　もう行こう！！」

和子ちゃんの号令で私たち3人は、チビ猿の悪口をかますことで消化不良を解消しながら教室に向かった。

しかし、しかしである。

教室に戻っても、今のような小競り合いが繰り返されることは分かっていた。少なくともこの1年間、最低でも席替えがあるまでは。

チビ猿こと「尾島」、彼もまた同じく「あ行」に生まれた男であ

る。
ヤツの席は後ろ、つまり和子ちゃんの隣の席なのであった。

＊＊＊

教室に入るとひと際高い笑い声が聞こえた。
声の方に目をやるとチビ猿が友達と窓際で談笑している。そうかと思えばカーテンを身体を巻きつけぶら下がっている。行動が忙(せわ)しなく、まるで本当の猿のようである。
そう、入学式の日に教室で初めて見たカーテン巻きつけていたヤツは尾島だったのだ。
小学校生の気分が抜けない単なるアホだと思っていたら、どうでもいいところで頭の回転が速いアホ。しかも恐ろしいほど弁が立つ。
背も顔も可愛らしいが、油断ならぬ悪魔のような中学生。
彼はこの先3年間、良くも悪くも私を翻弄する存在になろうとは……その時は知る由もない。

その男、チビ猿こと「尾島」！～後編～

「尾島啓介（おじまけいすけ）。大野小出身。あまりにも運動神経がいいので、どこの部活に入ろうか迷ってます、よろしく！」

これは一番初めのホームルームの時の自己紹介で、尾島が言った台詞……らしい。

らしいというのは、もうすぐ自分の自己紹介が迫っている私は緊張のあまり人の挨拶を頭に入れてるほど余裕がなかったからだ。男子の一番・「石田」から自己紹介が始まり、次に隣の席の「江崎」、3番目に元気よく挨拶した男の子が「尾島」だった。

次々と自己紹介が終わっていく。

廊下側の列が終わり、2番目の女子の列がきた。女子のトップの「相沢」さんが挨拶している時点で緊張がピーク、手が震えてくる。前の相沢さんが座り、話声とおざなりの拍手が終わった後そっと席を立った。

……つもりだったのに。

立った瞬間、無情にも「ブブブ～」というイスの足と床が擦（こす）れる音がシーンとした教室に響き渡る。後ろから「ププ」という小さい笑い声が聞こえた気がしてモアっとした嫌な気持ちになったが、振り向くのもなんだし、何より余裕がなかったのでそのまま挨拶の態勢に入った。

「あ……荒井、美千子で、す。山野小学校からきましたよろしくおねがいします」

どもって歯切れが悪いかと思いきや、息継ぎもせずそのまま言葉を続けて頭を下げた。

パチパチパチ……

疎らな拍手を聞いた途端、真っ赤になっているであろう顔を俯かせさっさと座った。

（あぁ、もっとゆっくりちゃんとした挨拶したかった……）

後悔と反省を頭の中で一杯にしていると、後ろから小さい声が聞こえた。

チュウだな。

は？

訳が分からず後ろを振りかえり、挨拶しようと立っている和子ちゃんと隣のニヤニヤ笑っている男子をチラリと見る。

（そういえば……）

隣の江崎君の挨拶の時にもボソリとなにか聞こえたような気がする。

（確か「グリコ」って声が聞こえたような……？）

よく見ると後ろの男の子は色が白くて可愛らしい顔をしていた。整った眉毛がキレイに上がっているのと反対にくっきりした二重の目尻がやや下がっており、右目の横には小さい黒子。

身体全体は小さそうなのに、滲み出る存在感というか覇気というか……ようするにオーラが強い。

ああ、この子、小学校の時モテただろうな。

そんな第一印象を持ちながらボーっと見てたらバチっと目が合い、瞬間可愛らしい顔からとんでもない台詞を小声で浴びせられた。

何、見てんだよ、バカ。

チュウは前見てろ。

弾かれたように前を向いた。

心臓がバクバク言って、自己紹介前の時よりも手が震えた。いきなり、「バカ」。そのような言葉を面と向かってハッキリ言われた

のは初めてだった。昔から陰でコソコソ言われていることは分かっていた。情けないがほぼ事実だったし仕方がないと思って見て見ぬ振り、聞いて聞かぬ振りしていたが……正面から「バカ」。

ショックと悲しさのあまり喉の辺りがキュウっと締め付けられ息苦しくなった。

そのうち怒りが込み上げ、握った拳がぶるぶると震えてくるが落ち着かせるようにお腹に押し付けガマンする。

（……なによ、大体見たくて見た訳じゃない。「チュウ」なんて呟くし、自己紹介する和子ちゃんの方を見るつもりで後ろを振り返ったらたまたま目があったんだ。アンタ見た訳じゃないよ、この自己中傲慢バカ！）

心の中で後ろの男を悪態つき、心を落ち着かせようとした。

同時に嫌なヤツとクラスが一緒になったもんだと溜息が出た。暫くは席が後ろだし、和子ちゃんと話すために後ろを振り返るたびに顔を合わせなきゃならない。輝かしいスタートを切ったと思ったら、いきなり大きな落とし穴が出現……まったくイヤになる。こういうヤツは経験上無視に限る、変に対抗すると余計に調子に乗って向かってくるのだ。無視は慣れている。

（サラッと流せ、美千子！）

小学生みたいなガキに構っているほど暇ではない、大人の女は余裕を持って構えないといけないのだ。そう思いながらも、「絶対コイツより勝てるものを一つ以上見つけてやる！！」と誓った。

「……です、よろしくお願いします！」

後ろの和子ちゃんが元気よく挨拶し座ろうとするとまたもや小さい呟きが聞こえた。

ドテチン。

今度こそハッキリ耳に入った。後ろの男がまた何か呟いてるのだ。もう絶対振りかえるまいと決めていたので黙って固まっていたら、明らかに怒りを含んだ小さい声が真後ろから聞こえた。

「あんた、さっきから何言ってんの？　耳障りだっつーの」

なんと和子ちゃんは隣の席の男にキッパリ言い放ったのである。隣の男もカチンときたのかすぐに言い返した。

「うるせぇな、ドテチンは黙ってろよ。自己紹介が聞こえないだろ？」

（うるさいのはアンタだよ。）

心の中でビシっと罵倒すると和子ちゃんがそっくりそのまま代弁した。

「は？　うるさいのはアンタでしょ？　それにドテチン？　何それ？」

「お前の事だよ。見たことないのか？　『はじめ人間ギャートルズ』。それに出てくるゴリラの名前、お前そっくり」

「何言ってんの？　うるさいんですけど？　うっとぉしいんですけど？」

「色も黒いしさ、デカイしさ、まさにドテチンだよな」

「……あんたさぁ、自分の姿を見てからいいなさよ。なまっちろい下っ端のチビ猿みたいなくせしてさ。動物園でボス猿の毛づくろいでもしてろっつーの」

クスクスクス……ククク……

小声ながらもヒートアップしてくる戦いに回りの席の子が笑いを漏らした。この会話で後ろの男がブツブツ言っていたのは、どうや

ら「あだ名」を付けていたらしいことが判明した。
江崎だから「グリコ」。
荒井だから「チュウ」。
体型や見た目で「ドテチン」。
しかも本人と実際の映像とがまったくかけ離れている。隣の江崎君など震えながら下を向いて笑いを堪えているが。
（……アンタ笑ってますけど、「グリコ」って言われてますから……）
とてもじゃないが一緒になって笑う気になれなかった。
それよりも「いいぞ、もっと言ってやれ！」と無条件で和子ちゃんを応援した。ここまでハッキリ言えてしかも負けてないということは、一種の才能だと思いながら。和子ちゃんのおかげですっかり心は晴れ、低レベルなオツムの男に無駄な感情を使ったことがバカらしくなった。

「そこ静かに！　他の子の自己紹介に集中しろよ～」

ここで1年8組の担任である梨本先生の注意で後ろの戦いは呆気なく幕を閉じた。
それでも。その後も尾島の小声は止まなかったが。

それからというものの、この「尾島」という男のおかげで何人かのあだ名が勝手に決まってしまった。さすがに和子ちゃんのあだ名を面と向かっていう人は尾島だけだが、男子全員陰で言っているのは知っている。私や江崎君などは、当人達が大人しくて何も言わない（言えない）からか、それとも親しみを込めてなのか、「チュウさん」「グリコ」と平気で呼ばれる。
しばらく江崎君は尾島から、「やっぱランニングにグリコって書いてあるのか？」とか「バンザイして走ってみろよ！」とか言われ

てるし、私は英語の時間の前後に「おい、チュウ、『ディス　イズ　ァ　ペ～ン』って言えって！」と私のイスを後ろから蹴り上げながらしつこく言われた。

まったく、腹立たしいったらない。

（ちなみ平成生まれの子には馴染みが薄いだろうが、この「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｅｎ！」や「何だ、ばかやろう！」「何、見てんだよ！」はドリフターズのメンバーであった故・荒井注の有名なギャグである）

幸子女史などは和子ちゃんの席に遊びに来た時うっかり尾島の席に座ったために、いきなり初対面で「勝手に座んな、ヒラメ！」と言われた。言葉が出ない幸子女史にご丁寧にも「目が離れていて身体が細いから」という理由を付け加えることも忘れなかった。もちろんその直後、幸子女史と和子ちゃんから怒涛の反撃を受け、殴られたのは言うまでもない。

彼のあだ名をつける勢いは生徒だけでは留まらなかった。

担任の梨本先生を「リポーター」、社会の地理担当の青島先生を「チンタオ」と命名したのも彼である。

その男、チビ猿こと「尾島」！～後編～（後書き）

ここで、読み手の皆様によっては文中に不快な気分にさせた表現がありましたことをお詫び申し上げます。
本人の了承もなく、人の名前や体格、性格を面白おかしく言ったり、嘲笑したり、噂するのは、相手に精神的・肉体的にダメージを与えることがあります。
このような行為は人としてあるまじき行為であり、人の道を大きく外していると私は考えます。
これを見てる皆さまは常識ある人間ばかりで、このようなことがないことを強く確信しております。
作中の登場人物や内容はフィクションであり、架空の物語であることをご了承くださいませ。
良い子は真似をしないようにしましょうね！
また、私は幼少の頃ドリフが大好きで志村ケンは神でした！同様に荒井注がいたドリフも大好きだったんです。
彼が言った「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｅｎ！」は日本人に最も馴染んだ英語のセンテンスと言っても過言ではないでしょう。
土曜の８時は一週間のうち最も極楽の時間だったのを覚えてます。
荒井注様のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

勉強ノススメ、部活ノススメ

ジリリリリ～！！

「はい、そこまで！　筆記用具置いて、後ろから速やかに答案をまわせ！！」

先生の叫び声が、過酷な数日間を過ごした生徒達の解放とも呼ばれるざわめきと筆記用具を置く音の中を駆け抜けた。

答案用紙が次々と前の席目指して回収され、慌ててノートや教科書を出し答え合わせをする者や筆記用具をしまい帰り仕度をする者、早々と部活の準備をする者と教室内は一層騒がしくなる。

初めての中間テストが終了した。

私は一気に緊張が抜けて机にうつ伏せ、安堵のため息をもらした。

小学校と違って集中して全教科のテストが行われ、ここ数日間は教室内が試験一色に染まり、嫌が応にも勉強ムードが盛り上がって焦燥感が増した。どの先生も「ここ出るぞ」という言葉を壊れたレコードのように繰り返し、その度に悲鳴とブーイング、ノートにペンを走らせる音とマーカーで線を引く音が響き渡った。

「もっと試験に出るところ教えろ～！！」

これはこの先試験の度にチビ猿が先生に強請（ねだ）る名セリフとなる。

家に帰れば、先生のアドバイスを元に教科書、ノート、参考書を使って未知なる試験対策に取り組んだ。試験一週間前は部活も中止、職員室出入り禁止というのも初めての経験だった。こんなに真剣に

勉強と向き合ったのは初めてかもしれない。小学校の時は「勉強する」という言葉は私の辞書には存在しなかった。そこまで重要と思っていなかったし、危機感もなかった。実際にやってなくても０点を取ることもなかったし、３０～６０点を彷徨っていても親は溜息を洩らすだけで煩く言われなかった。

ところがどっこい、中学ではそうも言ってられない。３年後には高校受験という壁も控えている。中学で義務教育は終わり、その上に進学したければ否が応でも「入学試験」を受けなければならないのだ。もちろん入試一発を狙うのもありだろうが、勉強は日々の積み重ねが大事なのでなる。直前に勉強して身につくものでもない。なかには奇跡的に点数取れる人もいるだろうが、高校受験にそれでは心もとない。一瞬で丸覚えできる天才か、よっぽど運がいい奴以外ありえない話だ。

もちろん私は入試一発に掛けるつもりはなかった。

小学校の時に「本番一発」を通してきたので、その結果どうなるかは自分がよく知っている。

「小さいことからコツコツと。得意な教科にうんと力を、苦手な教科は……まぁ、それなりに！」

私は３年間守れそうなスローガンを心の中でひっそりと立てた。

＊＊＊

「ミっちゃん、部室行こうよ！」

和子ちゃんは待ってましたとばかりに席を立ち上がり、カバンを机の上にドサリと置いた。

「あ、う、うん」

簡単な連絡事項が終わり挨拶も終了すると生徒達は今度こそ本当に終わったとばかりに友達同士話をしたり、部活に行くために教室を飛び出したり賑やかになった。両隣りのクラスからも、校庭からも明るい声が聞こえてくる。

「ちょっと、最後の国語どうだった?!」

幸子女史がテストの最終教科であった国語の問題プリントをヒラヒラさせながらやってきた。

「最初の漢字の書き取りはいいとしてさ、次の問題のさ……」

「それよりもさ、この長文の問題、厄介じゃなかった?」

和子ちゃんと幸子女史は問題用紙を覗きこんでいる。私も支度が終わり、後ろの席に振り向いて問題を見た。終わったとはいえ問題を見ると頭が痛くなる。自称本好きな私だが、国語は苦手な科目だった。大体、「筆者が指す『それ』とはどの部分か」とか「筆者の気持ちは何を表わしているか」なんて問題は私に問われても知ったこっちゃないと言いたいし、そんなこと筆者しか知らんだろ! とツッコミたい。ところが試験ではそうはいかない。それが問題と言うのならば答えなければならぬのが辛いところだ。「私もここがわからなかった」と問題を指すと、お呼びでない奴が「おい、チュウ!」と横から割り込んできた。

「漢字の問題で『土産(みやげ)』が出なくて良かったな?」

チビ猿のバカにしたような声を聞いた途端、カァと顔が真っ赤になり俯いてしまった。

尾島が『土産（みやげ）』という漢字を口にしたのには理由がある。

あれは忘れもしない国語の時間。

私は先生から文章を読むようあてられた。文中にある『土産』という文字を疑いもなくそのまま『どさん』と読みきってしまったのだ。

……コイツ、間違えてるよな？

そんな教室内の空気に最後まで気付かず、数回繰り返す『土産（どさん）』。

読み終わった後、そこで初めて先生から申し訳なさそうに指摘される。

荒井。

はい？　と顔を上げると銀縁メガネの奥に浮かぶ先生の苦笑顔。

『お前が読んだ文中の「土産（どさん）」って文字な、「みやげ」って読むのな？　前もって辞書で調べておけ？』

『……』

クラスに失笑が流れること数秒。

この授業の後、その日は後ろのチビ猿に「チュウ」とは呼ばれず、「どさん」と呼ばれた。

「ちょっと！　勝手に会話に入ってこないでよ！」

「さっさと部活にでも行きなさいよ！」

恥ずかしさで何も言い返せない私の代わりに、チビ猿にツッコミを入れてくれる2人。当のチビ猿はいつものごとく、「ヒャヒャヒャ」と嫌な笑いを洩らしながら教室を退場して行った。

「……あいつ、本当、どっかの動物園に売り飛ばそうか？」

「いっそのこと野生に返すってのはどう？　外国のジャングルにでもさぁ」

2人は「でもそのジャングル、すげぇ迷惑だよね！」と尾島が出て行った方を見ながら笑った。その後いつものように私に向かって「気にすることないよ」と優しくフォローを入れてくれる。私もこのやり取りがだいぶ慣れてきたので、「ありがとう」と二人にお礼を言って一緒に問題用紙を覗きこんだ。

＊＊＊＊＊＊

中間テストという最初の大きな壁を乗り越えた頃には、クラスメート同士の緊張もほぐれてきた。

同小のグループ間の結束は未だに固いが、私もクラス全員の女子と挨拶を交わす程度には打ち解けてきていた。女子の中でも尾島のようにからかい半分ではなく、親しみをこめて「チュウさ～ん」と声をかけてくれる。不本意だが「勘弁してほしい」と思ったあだ名が潤滑油になったのは否定できなかった。

そしてクラスメイト以外で友達を広げるキッカケとなる「部活動」。

同じ小学校出身という限られた小さな和に、同じ部活と言うもう一歩踏みこんだ縁が加わる。仮入部から正式な本入部に決まり、クラスメート以外の新たな友達が加わって学校生活をより一層盛り上げた。

この「部活動」というものは小学校のそれとはレベルも規模も違

い、一種独特な世界が広がっている。これ無しでは中学生活を語れないほど重要ポジションを占める存在であり、殆どの人がこの「部活動」で初めて先輩後輩の醍醐味を十分に味あわされ、「上下関係・縦社会」というものに触れるのだ。

私はバレー部に入部した。

当初は陸上部かバトミントンに入る予定だった。何故かって？答えは簡単、運動神経の鈍い私としてはボールを使う部活はＮＧだったからだ。ボールを使う以外の運動部と言えば「水泳、剣道、体操、陸上、バトミントン」しかない。

水泳部はパス。水着なんて授業以外でお披露目する気はないし、だいいち２５メートル泳げない。

剣道部もパス。防具が臭いというし、そんな「真っ向から勝負！」なんて代物（しろもの）、私には無理。

体操部、パス！　自慢じゃないが、超ウルトラ身体が固い。自分の身体にレオタード……考えただけで恐ろしい。違う意味で「悩殺」できる自信がある、殺傷率２００％だ。

残るは陸上部かバトミントン。

バトミントンはラケットやガットでお金がかかるけど、陸上なら身一つで走っていればいいと陸上部に気持ちが傾いた時。

ここで色々な噂がまことしめやかに中１の間を駆け抜ける。

陸上部の担当顧問が、いつも朝礼で生徒を怒鳴り散らしている顰め面の３年担当体育教師「箕輪」と判明したのだ。その時点で陸上部が即効候補から外れたのは言うまでもない。

残るはバトミントン。

しかしバトミントン部には一つ問題があった。

「恐怖のＧＯＧＯランニング」

校内で有名なバトミントン部の名物運動メニューである。

「どんな恐怖だよ！」とツッコミたくなるほどのオメデタイ名前だが、内容は意外と厳しい。バトミントンの担当顧問である一之瀬先生（担当教科：２年英語、独身）が学校の周辺を「ＳＴＯＰ！」と言うまで部員を走らせるのだ。別にこれだけなら「普通のトレーニングとなんのかわりもないじゃないか」という声が聞こえそうだが、それだけでは終わらない。担当顧問一之瀬先生自らストップウォッチ片手に正門で待ち構え、クタクタになりながら通り過ぎる部員達に向かって「ＧＯ！ＧＯ！」と郷ひ●みも真っ青なネイティブ並みの発音でエールを送って部員を煽（あお）るという、なんともエンターテイメント満載なイベントなのだ。

しかも実施日が先生の気分次第で行われると言うからたまらない。三日間連続で実施という時もあれば、一か月まったく音沙汰なく忘れたころにやってくる天災的な時もある。素振りの練習中や試合をしている最中にいきなりフラリとやってきて、「正門までＤＡＳＨ！！」という号令がかかればその時点からメニューの開始だ。結果、バトミントン部員は「黒ひげ危機一髪」並みの緊張を毎日強いられなければならないのである。

小学生の時見かけた、学校の周囲をヒィヒィ言いながら走らされていた人たちは、中学のバトミントン部のお姉さんやお兄さんということがこの時判明した。

痩せるのにはちょうどいいが、エールを送られながら真っ赤な顔をした不細工のポッチャリが、ボテボテ走る姿を世間様に見せるほど私はボランティア精神に富んでいない。近所で「荒井さんところの娘さんがゼーゼー言いながら走っていたわよ」なんて噂されるのは真っ平御免だ。

私はバトミントンを本格的にやったことがないし、別に差別をするわけではないが……サッカー部や野球部などの青春一直線という感じの部活が、このメニューをこなすのは絵的にも内容的にも納得ができる。しかし線も細くていかにも温和で優しそうなイメージのバトミントン部員たちが、何故（なにゆえ）息も切れ切れになるまで走らねばな

らぬのかが疑問だった。

「たかが羽、されど羽……なのかな？」

その姿を見て、こう何というか、切ないものがこみ上げたのは私だけではないだろう。

＊＊＊

（さて困った、どの部活に入ろうか。）

真剣に悩んでいたら、和子ちゃんと幸子女史がバレー部に誘ってくれた。

「どうせなら小学校の時にやってない競技がいいじゃん？　テニスも考えたんだけど、せっかく背が高いからさ」

小学校の時やっていない競技！

ここでも私のコンプレックスを乗り越える為のキーワードを思い出し、二つ返事で和子ちゃん達と同じ部活に参加した。

そうなのだ、全員同じスタート地点に並べる競技。これこそが私が中学に求めていたもの！

デカイ身体も考えによっては役に立つかもしれない、そう自分自身に言い聞かせ意気揚々と仮入部に参加しそのまま本入部した。実際最初のミーティングの時に先輩たちと顔合わせした時、「今年の新入部員は豊作だ！」と熱烈歓迎を受けた。驚いたことに私ぐらいの背の子が何人か揃っていて、自分の知っている世界の狭さを思い知らされた。バレー部で１６０～３センチなんてそんなに高くないほうだが、中一でこの背があれば十分だよと３年の先輩は言ってくれた。コンプレックスだった体型を真正面から褒められれば悪い気はしない。ますますバレーというのが好きになれそうだった。

けど本当は……入りたい、やってみたい運動部があった。

私はバスケ部に入りたかった。

小学校の特別クラブにもあった、バスケ部。山野小以外にも近隣の各小学校には学校が主催する特別クラブというものがあった。

男子はサッカーとバスケ、女子はバスケのみ。

そのクラブに入る子達は大概運動神経がよく、クラスの中心にいるような子達だった。またそういう子しか入れないという暗黙な了解も漂っていた。私のような地味で運動神経が鈍い子は入部できる隙間もなかった。だから……中学に入ったら、もしかしたらイケルかもしれないと僅かな希望を抱えていたのだが。

仮入部の初日にバスケ部のコートに集まった新入生の顔ぶれを見た途端、そんな希望は見る間に萎(しぼ)んでしまった。

成田耀子(なりたようこ)。

いつも私のコンプレックスを刺激する女だった。そして成田耀子の取り巻き達。陰でコソコソ言っていた女達。同じクラスにならなくて安堵した顔ぶれ。変わろうと思っても、どうしても一歩踏み出せない、入れない領域。

（……どうもバスケとは縁がないみたい）

正面向いて勝負できず、結局違う畑で勝負しようと逃げるようにバスケのコートと成田耀子に背を向けた。嫌なやつがいるし、どんくさいところを見せなくてよかったじゃないかと心の中で目一杯フォローしながら。

結果論からいくと私の選択は正しかった。

バレー部は厳しいながらも楽しく過ごせたし、特別上手くはなりはしなかったが球技の苦手意識は見事に消えた。人間やればできるということを身をもって証明したからだろう。1年の終わり頃には大胆にも「これなら逃げずにバスケ部にでも入れば良かった」と思ったが、入学したての新1年生当時では一年後の自分がわかる筈も

ない。

それに、「バレー部に入った私、ナイス！！」と自分を褒めてやりたいくらい、これから迎える3年間の学校生活には部活が絡んだ様々な珍（？）事件が待ち構えているのだった。

勉強ノススメ、部活ノススメ（後書き）

何度も何度も改稿してます、毎回微妙に変わっていてすみません！…ていうか、よく読んで掲載しろよ！というお怒りの言葉は勘弁願いますｆ（＾＾；）

さてもう一人の重要人物、「成田耀子」登場です。彼女もこの先「美千子」に絡んで度々登場します、今後ともよろしくお願いします！

恋。それは、青春の象徴であり、胸をキュンとさせる切ない感情の塊。

恋。それは、暖かい日差しがふりそそぐ陽だまりの中を陽気に踊り歌う妖精の調べ。

恋。それは、突然やってくる嵐のようにすべてを奪いつくす疾風のような……

「……あっ！　ミっちゃん！」

バッコーン！！！！

「○△×☆÷〒Ω■っ！！！」

……思考が止まり星が飛んだ。つーか、目が飛び出た。

あまりにもマヌケな衝撃音、いったい何が起こったというのか。

（う、うぉぉぅぅっ！！）

下半身を襲ったあまりの激痛に前屈みになってしまった。

一瞬訳がわからぬ私にも、目の前に転がっている憎いボールで容易に想像できてしまう。先輩が打った力強いスパイクが見事に決まった！　……まではよかったが。信じられないことに、ボールがバウンドしたその勢いのまま私の股間をめがけて鋭く入ったのだ。男性「は」股間を打つと死ぬほど痛いというが、ウソだ。男性だけでなく女性「も」十分すぎるほど痛いではないか！！

「ミっちゃん！　大丈夫？」

「荒井さん！　平気？！」

コートのライン沿いに立っていた一年生やコート内の先輩達が慌てて近寄ってきた。しかし……緊迫した雰囲気とはおよそかけ離れた微妙な空気。

「クスクスクス、ククク……」

殆どのバレー部員は労わるような声を掛けながらも、今起こった事件というか……あり得ない珍事に笑いを噛み殺していることは、私にも（理解したくないが）理解できた。とりあえず激痛を堪えながら「だ、大丈夫です…」と弱弱しい声を出す。

今は笑われていることより、たとえ痛みが厳しくとも麗しき12歳の乙女が、股間に手を当てられないとこのほうがよっぽど辛い。

「やっだぁ、ミっちゃん！　本当面白いよねぇ！」

隣に立っていた和子ちゃんは素直にガハハハと豪快に笑っている。笑いをガマンされているよりも、いっそ和子ちゃんのように笑われたほうが爽快ってもんである。

女で良かった、男ならこれがホントの『珍（チ○）事件』！　……な～んてダジャレなど言えるわけもなく。私も「へへへ、ちょっと考え事を……」とわざとおどけて何事もなかったように無理して立ち上がった。膝の砂を払い股間の辺りを見ると、ブルマにボールの跡がクッキリと泥の素材でプリンティングされている。

（……マヌケだ、マヌケ過ぎる……）

たまたま、梅雨の貴重な晴れ間に行われた野外での練習。

たまたま、若干泥まみれのボールが股間に直撃。

たまたま、部活終了まで何度払っても落ち切れなかった、ご機嫌なボール模様のプリティングブルマで立たなければならない屈辱。

情けなさを通り越して、逆に笑えてくる。
それもこれも、神聖なコートの前で先輩のアタックに集中せず、邪な考えをしている自分が悪いといえば悪いが。
（そんなことより……）
女バレの部員達に笑われたことよりも、他の部活の連中が見てたらマズイと辺りを見回してしまった。
左隣の男バレ（男子バレー部）確認、特に異常なし。
右隣のテニス部確認、これまた異常なし。
陸上のトラックを挟んで後ろのサッカー部……嫌な予感がしたが、確認しないことには落ち着かない。
恐る恐る視線を向けると、一年が珍しくシュート練習をしていた。
ゴールポストの網越しに、次々とシュートを打込むためにこちらに走ってくる姿が見える。すでにシュートを打ち終わったであろう、ある男子と目が合った。「しまったぁ！！」と思った時には、時既に遅し。その男はニヤリと笑い、同じ1年部員の何人かにヒソヒソとこちらを見ながらジェスチャーでボールの形を作り、自分の股間に当てる振りをして顔を顰め、次の瞬間仲間と共に大爆笑していた。
もうおわかりであろう。ジェスチャーしてた奴はチビで五分刈り、色白たれ目の右目じりに黒子男。
（……最悪だ。本当、最悪すぎる……）

よりによって、女バレ（女子バレー部）のコートの真後ろにあるサッカーのゴールポスト。
よりによって、このタイミングで滅多に行われない1年のシュート練習。
よりによって、股間に当たった瞬間をバッチリ見ていた超ラッキーマンが、サッカー部所属のチビ猿こと「尾島」。

ガックリと項垂れ、「見なかったことにしよう」と自分に言い聞かせながらサッカー部から視線を逸らした。明日チビ猿から何か言

われようと完全無視だ。
それよりも。
サッカーのコートを隔てて、さらに向こうにある誰もいないバスケットのコートをチラッと見て安堵した。今日のバスケ部の練習が、野外のコートではなく体育館であったことを心から神に感謝した。
尾島はこの際どうでもよい。
女バス（女子バスケ）の成田耀子（なりたようこ）に見られる方がもっと最悪だ。
ましてや男バス（男子バスケ）の部員である田宮俊平（たみやしゅんぺい）に見られたら日には、この町から永遠に去らなければならないだろう……ヒュルルル～

＊＊＊＊＊＊＊

『田宮俊平（たみやしゅんぺい）、１年９組、バスケ部所属、下山野小出身、身長：１６３ｃｍ、体重：５０キロ、血液型：Ａ、好きなもの：バスケ・唐揚げ・アイス・ゲーム・週刊少年ジャンプ、嫌いなもの：アイス以外の甘いもの・にんじん・しいたけ、家族構成：両親・妹・弟、６年生の時バレンタインのチョコは５個……らしい』

以上、これが私が知りうる「田宮俊平」情報の全部（すべて）だ。
恋はある日突然やってくる。私の恋（それ）は「親睦遠足会」と共にやってきた。

＊＊＊

中間試験の前のある放課後、私は片手にノートと筆記用具を持ちながら憂鬱な気持ちで廊下を歩いていた。
『１年５組』
後ろの扉から目的の教室の中を覗き込むと、何人かの生徒が座っていた。どの教室も同じ形なのに、自分の教室じゃないというだけ

で違和感が漂う。
　軽く中を見渡し、本来居なければならないチビで五分刈りの男が不在とわかると「ヤッパリ」という舌打ちしたい気持ちと、「所詮私は代理だし、ヤツと二人よりも一人の方が楽だし」という安心感が複雑に絡まった。
　これからこの教室で何が始まるのかというと、各クラス2名ずつ「親睦遠足会」実行委員が集まっておおまかな予定や決まりごとを確認し、各担任の先生やクラスに報告する為のミーティングが行われるのだ。
　この「親睦遠足会」は1年生が最初に体験する大きなイベントである。

「イカしたマシンをチャーター、ＨＡッ！　ハイウェイ飛ばして、ビーチでご機嫌、バカンスやっちゃえＹＯ、Ｙｅａｈっ！！」

……なんてことはない。「クラス分の観光バスを貸し切って、隣県の海辺で弁当食って帰る」というただの遠足にすぎない。
　大した行事でもないのに実行委員がわざわざ集まって会議するほどの事とは思えない。「先生たちが適当に決めればいいジャ～ン♪」と思う私は、最早実行委員向きではないだろう。
（本当ツイテない……）
　何故実行委員向きではない私が、このような事態になったか聞いてほしい。

　実行委員を選出するためのホームルーム。我がクラスは話し合いや挙手……では決まらず、やや気が短く面倒くさがりの担任・梨本リポーターの案により「クジ引き」で決めることにした。生徒も声を揃えて「異議なし」。

『よ～し、手っ取り早く現在座っている隣同士でペアになってもら

うぞ！　文句はナシだ！　そのペアでジャンケンして勝った運の良い奴は、前に来てこのトランプを引けぇい！』

リポーターは「実行委員決めるなんて面倒だなぁ、オイ」という、同じ匂いがする面倒くさがりの生徒ばかりと予想していたのだろう。準備万端よろしくケースに入ったトランプを取り出し教壇に広げた。

（トランプで決めていいのだろうか？）

教頭や教育委員会が見ていたら甚(はなは)だマズイんじゃないかなと思いつつ、私は隣同士のジャンケンでアッサリと負けてしまい、運命をグリコ……いや、江崎君に委(ゆだ)ねた。

クラスの半分の生徒が教壇に立っているリポーターの元に集まり次々とトランプを引いていく。ざわつく生徒の声の中、「ほら、しゃべるな！　引いたら大人しく席に戻れ！」という先生の声が響いた。

全員席に着席し、期待と不安を抱えながら隣同士トランプを確認する。江崎君が引いたトランプは『スペードのエース』だった。周囲を確認すると、ハートかスペードのカードを見てザワザワと囁き合っている。「いったいこれから何が始まるのか？」「このくじ引きに何の意味があるのか？」と生徒達の頭に疑問符が浮かび上がる間に、リポーターは残りのトランプをシャッフルし、一枚引いて捲(めく)った。

『あ～、ダイヤのエースか。じゃぁ、赤の1だな。ハートのエースを持ってるペア。委員決定。拍手～』

『『えええぇっっ～！！！！』』

先生からアッサリ委員決定の宣告が降りると、真後ろの席からペアで悲鳴が上がった。

なんとアタリの「ハートのエース」を引いたのは「尾島＆宇井ペア」であり、ものの数分で委員が決まってしまったのだ。

エースと聞いて一瞬ヒヤリとしたが、隣の江崎君と顔を見合わせてよかったねと一安心した。

しかしクラス全員満場一致で思っただろう。このペアで大丈夫だろうか、と。

文句を言い合う実行委員の声をかき消すように、生徒達から祝福の拍手が1年8組のクラスに響き渡った。

恋せよ、女子中学生（おとめ）！？～運命へのハーフバウンド～（後書き）

「田宮君」名前だけ登場です！
美千子今回は災難でしたね。まだまだ試練は続きます、ほんの小手調べです。
バレーボールが股間に当たるという事件、実は菩提樹の実体験であります。
（小説の内容は実体験ではないですよ！）
信じられないようですが、事実です。
「何故砂のグラウンドのような地面の上を跳ね返ったボールにあんなに殺傷威力があったのか？」
体育館ならわかるんですけどね…今だに謎です。（笑）

相性が良くても悪くても関係ない。決定事項は曲げられず、実行委員は「尾島＆宇井ペア」に決まった。

『ドテチンとなんて、最悪だ』
『それはこっちの台詞だっつーの！』
『委員なんてメンドくせぇ、お前適当にやれよ』
『クジを引いたアンタが無責任こと言うな！』
『こうさぁ、そのデカイ身体をいかしてさ、サラッとやってくださいよ？』
『身体は関係ないでしょ！』

……言い合いは永遠に続いたが、決定は決定だ。
そう、決まった筈だった。
しかし和子ちゃんではなく、何故か私がこの委員のミーティングに来ている。
（てか、なんで私なの？！）
２話にまたがり、ここまで引っ張った割には答えは意外とアッサリ風味。今朝のホームルームで和子ちゃんが珍しく風邪で休みと聞き、終了後先生に呼び止められた。嫌な予感１００％。

『すまんなぁ、荒井。実行委員さ、風邪で休んでいる宇井の代わりに出てくれるか？　お前友達だろ？　相方の尾島はあんな感じだからなぁ～心配でよ。』
『……え？　でも、そんな委員、私には……』

押す、リポーター。
ホント、無理ですから！　……と怯む美千子。

『ま、そう言うなよ。あくまでも代理だから。一昨日の英語の課題、尾島と宇井にお前の答え写させたろ？　そのペナルティとしてさ。』
『ええっ？！』

威嚇射撃を放つ、リポーター。
うっわぁ～なんで？　即効バレよってる！　……危うし美千子！

『荒井は頼られてるんだよ、英語得意だし人徳ってやつだからしょうがねぇよな～！　んな訳で、とりあえず頼むよ、な？』
『……』

トドメを刺す、リポーター。
いや、英語得意はまったく関係ないッス、先生！　……もはや何ともならない美千子☆

予感的中１００％にうろたえ、なんのアクションを起こす間もなく先生は去っていく。ものの見事に押し切られる形でサクっと委員代理を引き受けさせられた。
（それにしても……なんで２人に課題見せたのわかったんだろう？？）

確かに一昨日、慌てた様子の和子ちゃんが朝「英語の課題みせて～！！」と泣きついてきた。もちろん快く見せていたら、どさくさに紛れて隣の尾島も書き写していたのだ。

今思えばあの先生のセリフはハッタリだったのだろう。大体中１の、まだ２カ月もたってない英語の内容、全員の答えがバラバラになるような訳など宿題に出るわけがない。何人かの生徒がまったく同じ訳でもおかしくないのだ。「ハメられた！！」と思った時は、もう遅かった。

どうにもならないので教室に入った。何人かの実行委員が前の席に座っている。

他のクラスは男女ペアで座っているのに、何が悲しくて代理が一人で座らなければならぬのか。どんよりした気持ちで廊下側の席に座ったら、ガラリと前の扉が開いた。

「あれ～啓介(けいすけ)じゃん、なに？　あんたも委員なの？」

自分の前の席に座っている子が扉を開けた生徒に声をかけた。

入って来た生徒は、「既にジャージ姿で部活行く気マンマンだよ、この人」オーラのどっかのチビ猿だった。「あ」とマヌケな声を出した私に向かって尾島はジロリとこちらを睨みながら教室に入り、乱暴に私の隣の席のイスを引いてドカリと座った。別に悪いことしている訳ではないが、ビクッと身体を震わせてしまう。

「うるっせぇな。明日香(あすか)は黙ってろよ」

（え？　明日香？）

尾島が大人しく委員のミーティングに来たことも驚きだったが、まさか尾島が下の名前で呼び合う異性の人間関係を持ち、そんな羨ましい……じゃない、本の中でしか見れない男女関係が実在することにビックリした。

（ほほぅ、これは……？）

意外な関係に怖いもの見たさか、好奇心がムクリと湧きあがってくる。尾島をチラ見し、続いて前に座っている女生徒に視線を向けた。

明日香と呼ばれた女生徒は嬉しそうな顔をしながらチビ猿を振り返っている。

「それよりさぁ、なーんでバスケ部じゃなくてサッカー部？　あん

た絶対バスケ入ると思ったのにさ」
　また一緒にやれると思ったのに。

　彼女はポッテリとした形のいい唇を尖らせながら大抵の男は思いっきり勘違いしそうな言葉を言い、尾島が座っている席の机をトントンと叩いた。

「いいから、前向けよ！　俺が何処の部活に入ろうと勝手だろっ？　俺様は運動神経がいいから特にバスケに拘(こだわ)らなくてもいいんだよ！」
「やぁだ、怒ることないでしょ！　フフ、ま～だ気にしてるんだ？」
　まったく、しょうがないわねぇ。

　明日香という人はクスクスと余裕の笑みで、「だまれ」と言う険しい表情の尾島を適当に流している。尾島はますます面白くないという顔をした。その様はクラスで天下を取っているガキ大将の「チビ猿」ではない。
（あらあら、あのチビ猿が軽くあしらわれているよ。……そんなことより、「気にしている」って、何を気にしちゃってるんですか？）
　非常に「気にしている」内容を聞きたいが、残念ながら私じゃ役不足だ。あぁ、和子ちゃんだったら確実に聞いてるだろうに！！
　それにしてもこの二人の間に漂う親密さ。この明日香と言う人は同じ大野小なのだろう、さらに「あれぇ～？　もしかして、ムフフ……な関係だったりするぅ？！」と思うと……自然と頬が緩んできた。心の中で思いっきりヒヒヒと笑いながら、明日和子ちゃんに報告するべきことがミーティングの結果以外に一つ増えたことにほくそ笑む。

「もったいないよな、あんなに上手いのにさ。今からでも遅くねぇよ、バスケに入れば？」

明日香さんの隣の席にいた男子生徒が振り向いた。

（……え？）

柔らかそうな短髪に日に焼けた肌、形のいい唇からこぼれる歯は白く、歯並びもバッチリきれい。何よりも優しそうな眼もとで目尻に皺をよせながら微笑んで……。

ズキューン！！！

ヒットマンに狙われた音ではない。いや、ある意味ヤラレた音ではある。

この世にキューピットが本当にいるとしたら、まさにこの瞬間その矢で打ち抜かれたと断言できる。理想の王子を思い描けと言われたら、今目の前にいる彼を描くだろう。漫画なら確実に薔薇の花とキラキラのスクリーントーンを背負っていること間違いなしだ。

尾島と明日香の存在は完全に消え去り、彼と私しかいない感覚に陥った。私の前に、いや、正確には斜め十時の方向に運命の人がっ！

『出会った瞬間に、君が運命の人とわかったんだよ』

そんなありきたりな台詞が載っている恋愛小説を読みながら「そんなのナイナイ！」と突っ込んでました、神様ゴメンナサイ。

ああ、私にはこの人しかいない！　と思っていた「リバー・フェニックス」も、小学校の時憧れだった「佐藤伸」も潮が引くように過去の男になっていく。

動悸が速くなり、顔が火照るのを感じ、身体が震え、視線が泳いでしまった。本当は飽くことなく顔を眺めたいのに、あまりに眩しく後光が差しているようで目を合わせられない。『そんなあなたにフォーリンラヴ！』な決め台詞とポージングをしている状態の私

を、一気に青ざめさせ現実に戻したのはチビ猿の一言だった。

「はぁ？　お前だれ？」

オオオィィッッ！

どこぞの野生猿は恐れ多くも運命の王子に信じられないほど失礼な口をきいた。

（もう一度ペキン原人から進化し直してこい！！）

心の中でチビ猿の頭をスリッパで叩（はた）いていると、その熱意と怨念が天に通じたのか、明日香さんがガツンとチビ猿の五分刈り頭をチョップした。

「ちょっと、あんたね～！　小学校の時に試合で何度か会ったことあるでしょ？　ほら、下山野小の田宮くん！　センターのさ！」

明日香さんは呆れた声で抗議し、隣の王子に「ごめんね、こいつ超口悪いし？」と謝っている。

「いいよべつに。けど覚えてなかったとは残念だな。俺は尾島の事印象的だったのにさ。あんなに威勢がいい奴初めてっだったし、シュート率も良かったし？」

やっぱもったいないよ。

王子は苦笑しながら言うと、隣の明日香さんも「そうよね～もっと言ってやってよ！！」と腕を組んで頷いていた。

「あ？　……あぁ～わりぃ。覚え、ねぇ」

隣のチビ猿は頭を掻きながら面倒そうな声を出すと、明日香さんに再び「本当、失礼なヤツだな」と言われた。
不貞腐れたのか照れくさいのか。尾島は両手をジャージのポケットに突っ込み、身体と首をを縮こませ、だらしなく椅子によりかかった。

「……」

わりと整った尾島の横顔を眺める。
（……ふ～ん、尾島（こいつ）もバスケ部だったのか。どうりで、ね）
どうも苦手だなぁと感じた訳がなんとなくわかった。全国のバスケ部の皆さまには申し訳ないが、私と合わない人は何故かバスケ部が多い。この会話の流れからいくと、残念ながら「田宮君」と呼ばれた王子はバスケ部なのだろう。しかし彼からは嫌な感じは受けない。是非自分と気の合う穏やかな人であってほしいと願わずにはいられなかった。

「それよりも尾島が委員のミーティングに素直に参加するなんて、めずらしいよね。アンタこういうのすぐサボるくせにさ？」
「う、うるせぇな！　……さっき『リポーター』に捕まって言われたんだよ、せっかく部活に行こうとしていたのにさ！　それに、」
こいつ代理だし、頼んないし。

（ナっ、ナンですとぉっっ？！）
野生猿のくせに器用に私を顎で指し、しかも不機嫌な声で「頼りない」とは聞き捨てならない。
バカ殿様が怒って刀を取り上げる時のバックミュージックと共にカァっと血が上り、「テメェ、いい加減にしないと叩き切るぞ！」という勢いの半分以下の抗議をしようと思ったら、再び教室の扉が

開いた。
やってきたのは実行委員であろう生徒４人。
「なんだよ～尾島も実行委員かよ～！！」
声もデカけりゃ、身体もデカイ。そんな男がズカズカと入ってきてチビ猿の首にヘッドロックを掛けていく。
「やだぁ！　後藤（ごとう）も実行委員なんだ。」
明日香さんは後藤と呼んだ図体の大きい男をバシンと叩いた。
「『後藤も』とはなんだよ！　それよりも小関と尾島、まーた、一緒かよ！　仲よろしいですねぇ？！」
ヒヒヒと笑いながらからかう後藤という男に対し、チビ猿は「っざけんな！」と顔を赤くして首にまわされた太い腕を解いている。どうやら『小関（こせき）』というのは明日香さんの名字のようだ。後藤は田宮君にも「よう！」と話しかけていた。すっかりチビ猿の周りは賑やかになり、抗議するタイミングを逃してしまった。いや、そんなことどうでもよい。
問題は後藤と言う人と一緒に入って来た他の３人。
一人は同じ女バレの「原口美恵（はらぐちみえ）」。
実はこの女も苦手だった。私に対して小馬鹿にした態度をとる、被害妄想かもしれないが。
いくつになっても苦手な奴というのは、不思議なことに態度や仕

草で臭う。お互い言葉を発しなくても、なんとなく分かってしまうのだ。

「尾島も小関も久しぶり～！」

原口美恵は私をアッサリと無視しながら、隣の尾島と明日香さんに嬉しそうに挨拶していた。チビ猿は素っ気なく「おぅ」と返し、明日香さんは「ありゃ～大野小元バスケ部揃ったねぇ！」と笑顔で返している。

なるほど。

（……この原口美恵もバスケ部だったのか）

同じく苦手意識を抱いたのも頷ける。

そして、もう一組。

「田宮も小関も委員なんだ？　やった！　バスケ部率多いね～」

気のせいではない。王子にだけ思いっきり可愛らしい笑顔で微笑んだのは、なんと「成田耀子」だった。

（原口美恵に成田耀子……最っっ悪や！）

当然のごとく、この女もしっかりと私をスルーした。まぁ、小学校の時と変わりない。例え声を掛けられても挨拶もしたくないし、こっちからお断りだけど。

でも。

最後の一人は違った。

「８組の委員は尾島かよ！　それに荒井も委員？　元６年４組率も多いな」

そう笑って声を掛けてくれたのは、数分前過去の男になった「佐藤伸」、その人だった。

恋せよ、女子中学生（おとめ）！？～恋はある日突然に～（後書き）

登場人物が多くなってきました。やっと「田宮君」登場です。
小関明日香、原口美恵、成田耀子、佐藤伸、後藤…共々、よろしくお願い致します。

恋せよ、女子中学生（おとめ）！？～揃った顔ぶれ～

「８組の委員は尾島かよ！　それに荒井も委員？　元６年４組率も多いな」

黒いツンツンヘアーの佐藤君は笑みを浮かべながら、切れ長のキリっとした目をさらに細くしてこちらを見ていた。

私はみんなの注目を受け、顔を赤くしながら「う、うん」と引き攣り笑いでぎこちなく返す。

自分にとって特別な人、しかも田宮＆佐藤というダブルの視線を浴びて照れ臭さと嬉しさが混じったなんとも言い難い気持ちだった。

一言で表すと「もう、まいっちんぐ！」、そんな懐かしい名セリフがピッタリだ。

久しぶりに会う、佐藤伸君（さとうしん）。

彼は仲良く並んでご登場した成田耀子（なりたようこ）と共に小学校５、６年と同じクラスだった。勉強は普通だったが、「顔良し・性格良し・スポーツ良し」という3拍子揃った持ち主で、いつもクラスを引っ張っていく明るい男の子だった。

しかもそれを鼻にかけることなく、始終面白いこと言いってはおどけてばかりの実にフランクな人柄。

彼が得意とするモノマネはアイドル・お笑い芸人から担任の先生や校長先生までと幅広く、そうかと思えばクラスの男子を集めて「お楽しみ会」の度に当時「風見しんご」が踊って流行っていた「ブレイクダンス」を練習して披露。

（現在では「ブレイクダンス」と言うと、ナイナイの岡村やガレッジセールスのゴリが踊っている姿を浮かべる人が多いと思うが、私達の世代はなんと言っても「風見しんご」である）

芸人真っ青の多才ぶりであった。

小学校の時に「顔良し」はもちろんだが、「スポーツ万能&面白い」というのは間違いなく「頭がよい」よりも確実にモテる要素であり、最高のステイタスである。しかも差別なく皆に優しいとくれば、「天上天我唯我独尊」という言葉以外になにが当てはまるというのだろう?

彼が所属していた特別クラブのサッカーが試合をすると5割増しで女子のギャラリーが増えた。6年4組ではもちろん、学年で1、2位を争うモテっぷりだったのだ。

そんな彼は当然、私にも優しかった。

偶然にも彼と隣の席になった時、こんな私にでも熱心に話しかけてくれ笑わせてくれた。私も一緒になって彼と笑った。

『なんだ、荒井って普通じゃん。結構しゃべるんだ?』

『……』

(普通って……いったいどういう噂が飛び交っているんですか)

たかだか「普通の女の子じゃん」と認めてもらっただけだが、その言葉は私を満たし、十年近く生きてきた中で幸せな瞬間ベスト3に入った。

他の人達はさておき、彼だけには迷惑かけないよう頑張った。席が隣同士の時は一切忘れ物はしなかったし、宿題も毎週行われた漢字テストも頑張った。体育で同じ班の時は出せる力を振り絞った。そうするといつも「荒井、やるじゃん!」とお褒めの言葉をいただいた。

でもそれ以上の事は何もしなかったし出来なかった。

何故なら成田耀子とその取り巻きの視線が、ポッチャリの身体を貫通させるほど鋭く恐ろしかったから。

バレンタインのチョコも渡せず、最後にサイン帳を書いてもらうこともできず、もちろん気持ちを打ち明けるなんぞとんでもない。

そのまま静かにフェードアウトして卒業。

後悔してないと言えばウソになる、けど今となってはそれでよかったと思う。確かにあれは恋と言えば恋だったが、どちらかというと憧れや尊敬、感謝の念に近かった。まるで絶対服従に近い弟子と師匠のような気持ち、例えば「アニキと呼ばせて下さい！！」みたいな感じ。

その証拠に田宮君と出会った瞬間、佐藤君は過去になってしまったのだから。

＊＊＊

揃いすぎたメンバーの顔ぶれを見て、私の気持ちはヤヤどころか大分複雑だった。

詳しく心情を説明せよと言われたら迷わずこう答える、「盆と正月ではなく、結婚式と葬式が同時に来た」と。

方（かた）やお釈迦様も真っ青な後光が指す眩しいツートップの田宮＆佐藤。もう一方は閻魔も黙るほどの負のプレッシャーをかけてくる悪魔トリオの尾島、成田＆原口。「一度に揃いすぎだろ！　面倒だからまとめて出したな、オイ！」とどっかの作者に文句を言いたいようなこの展開に、私は心の中で派手な溜息を洩らした。

「……なんだよ。『チュウ』と『カッコ』って一緒のクラスだったのかよ？」

チビ猿は佐藤君と私の方を交互に見てる。

（し、信じられん……！！）

山野小ナンバー1ともいわれるほどのモテ男を訳の分からぬ「あだ名」で呼んだ挙句……成田耀子、原口美恵、しかも田宮君や佐藤君の前で「チュウ」と呼びやがった、この類人猿！！

「その『カッコ』ってのさ、やめろよな、尾島」

佐藤くんは「しょうがねぇなぁ～」という顔で苦笑いしながら通路を隔ててチビ猿の横の席に座った。

「それにチュウってなんだよ？　荒井のことか？」

（スンマセン。佐藤君、ダメ押しで確認しないでもらえますか？）

「そうだよ、『荒井』だから『チュウ』。間違ってねぇだろ。俺って才能があるからさ、ポロっと発揮されちゃうんだよな？」

（チビ猿よ。私のあだ名ぐらいで発揮されるような才能なんぞ、ポロっと犬畜生にでも食わせてしまえ！）

そんな私の心の叫びも空しく、「だからどうした」的な態度の大きい尾島を囲み回りはクスクス笑っている。

「やぁだ、『チュウ』だって！　上手いこというね、尾島！」

原口美恵は遠慮せず私をチラリと一瞥して、クククと笑った。

「ほんと。お前、相変わらずだよな～」

デカイ後藤も笑いながら賛同している。

和やかな雰囲気がチビ猿を中心に広がり、和気あいあいとしたグループが出来上がりつつあった。そのネタの元である私は若干蚊帳の外っぽいが。

「でもさ、『チュウ』はともかく、なんで佐藤くんは『カッコ』なの？」

（「チュウ」はともかくって、アンタ……）

成田耀子は私の事などどうでもいいよと言わんばかりに話題を変

えた。

田宮君や佐藤君に微笑みかけるのと同様、キラキラな笑顔をチビ猿に振りまいている。しかも自分が可愛く見えるだろうと計算尽くしの角度ピッタリにチョコンと首を傾げながら。

佐藤君を「カッコ」呼ばわりしたチビ猿が人の輪の中心に来る人物と判断したのだろう。一瞬にして見分けるこの力…こういうところは抜け目のない女なのだ。不本意ながら、何故か6年間も一緒のクラスだった私にはわかる。

（大概の男はこの笑顔にヤラれるんだよね）

半ば呆れて成田耀子を見たが、そんなことはおくびにも出さない。これ以上ないくらい関係は最悪だし、さらに悪くなるのも恐ろしい。関わり合いになるのはゴメンだ。

尾島は愛想の良い成田耀子に対して鼻の下を伸ばすかと思いきや、ジロっと見ただけで佐藤君のネームプレートを指した。

「書いてあんだろうが」

「え？」と成田耀子をはじめ、チビ猿のまわりにいた人が一斉に佐藤君の胸元を見た。

『佐藤（伸）』

ネームプレートにはそう書かれていた。

（やだ……もしかして！）

「ブっ！」

いつもはチビ猿の言うことなんぞ笑わないよう細心の注意を払っていたつもりなのに、不意打ちで笑いのツボを刺激され思わず吹き出してしまった。

「そこ、荒井ウケすぎ。」

佐藤君は口をとがらせながら「確かに間違ってないけどさ」と苦笑している。

それと同時に「お前も『チュウ』のくせに笑うんじゃねぇ」とチビ猿がいつものニヤついた声で、俯いて笑いを押さえている私の腕をバシっと叩いた。

我が中学校は制服には学年色のネームプレートの着用が義務づけられている。しかしそんなのを守るのは1年だけで、2年以上になると検査の時以外全員外してしまうのだが。ほとんどの人は「名字のみ」なのだが、数人例外がいる。その例外に当たるのが、一般に「多い名字」と言われる人達だ。

例えば。

「石井」「石川」「加藤」「川口」「斉藤」「高橋」「田中」「中村」「村田」…などがそれに当たるだろう。

そういう名字に当てはまる人は、稀に同じクラスの中に自分と同じ名字の人がいることがある、それを区別するために名字の後に下の名前の頭文字を所謂(いわゆる)「(　)…カッコ」でくくり小さくネームプレートに表記されるのだ。

先生方も同じ名字である二人を区別するために、大体下の名前で呼ぶ。

これが男女の違いなら「石井、男の方!」とか「高橋、女の方!」となるのだが、これが同性の場合はさらに次のような方法で呼ぶ。

「加藤!　(正治(カッコしょうじ))のほう!」とか「中村!　(明美(カッコあけみ))のほう!」……という具合だ。

佐藤君はまさにその例であり、サッカー部でそう呼ばれていたのであろう。ようするに尾島はさらに略して「カッコ」と呼んだのだった。

「そっか！　なるほどねぇ～！」

いち早く気付いた明日香さんが「キャハハ」と屈託なく笑い、まだハテナ印が浮かんでいる他の人に丁寧に説明して全員が「あ～そうか！」とさらに笑いが湧いたところで和気あいあいの空気は終了した。

教室に実行委員担当の先生が到着し、「親睦遠足会」のミーティングが始まったからだ。

ミーティングはそんな難しいものではなかった。「親睦遠足会」の全体的な流れ、遠足中の注意事項、期日までに各クラスで決めてほしいこと、また追加したい希望を各クラスでまとめて報告すること、持ち物や遠足中に出される課題などの説明を受けただけだ。

（ますます集まる必要がなかったんじゃ……）

そうは思いながらも大人しく説明の捕捉事項を配られたプリントに書き込んだ。それは明日キッチリ和子ちゃんに引き継ぎをする為であって、決して隣のチビ猿から「ちゃんと書きこめよ？」と偉そうに命令されたからではない。

ミーティングが終わった途端に尾島は、「チュウ！　くれぐれもドテチンに引き継ぎ頼むぜ！」とデカイ態度と声で言い捨て、部活に飛び出していった。

私は恥ずかしさの余り、こっちに注目している実行委員達に背を向けそそくさと教室を後にした。

田宮君と別れるのはチョッピリ名残惜しかったが仕方がない。とりあえず顔は知ってもらったし、彼がなんと隣のクラスの１年９組でバスケ部所属の下山野小出身ということも分かった。本来の目的とはだいぶズレているが、十分実りあるミーティングだったと思えば、「代理を引き受けたのも悪くなかったかも」と心を弾ませている自分がいる。

贅沢を言えば、最後のチビ猿の一言とデカイ態度さえ無ければもっとよかったのだが。

＊＊＊

廊下を歩きながら、チラチラと「実行委員」のプリントを見直して漏れがないか確認していたら、階段を下りてきた担任の梨本リポーターと偶然出くわした。

「お、グッドタイミング！　実行委員、どうだった？」
「あ、さ、先程終わりました」
「すまんな～荒井。そういえばアイツちゃんと行ったか？」
「え？」
「尾島だよ」
「あ、はい。来ました」

私の答えに先生はホッとした顔になった。

「そっか！　や、尾島に一声掛けようと思ったけど、見つかんなくてなぁ。そのまま電話で呼び出されちまって。なんだ、万事ＯＫだな！　よかった、よかった！」

御苦労さん！　と先生は私の肩をポンポンと叩くと職員室の方に向かうのか、階段を下りて行ってしまった。

「……」

先生の背中を見ながら思い出すのは、教室に来た時の尾島の不貞腐れた顔。頭の中をグルグル回る声は、明日香さんの問いかけと面倒そうに返した尾島の台詞。

『それよりも尾島が委員のミーティングに素直に参加するなんて、めずらしいよね。アンタこういうのすぐサボるくせにさ？』

『う、うるせぇな！　……さっき『リポーター』に捕まって言われたんだよ、せっかく部活に行こうとしていたのにさ！　それに、こいつ代理だし、頼んないし』

おそらく深い意味はないだろう。本当に頼りないから心配して来たのかもしれない。それこそ必要事項が洩れていたらこの場合責任を負うのは尾島自身だ。

それでも。

少しだけ、あくまでもほんの少しだけだが、心が温かくなった。

（……ペキン原人からクロマニョン人くらいには進化させてもいっか）

運命の相手を見つけ、意外な男から思ってもない優しさに触れた私は、スキップしたい衝動を抑えつつカバンを取りに教室へ戻った。

こうして私達は出会った。

波乱に満ちた私の中学生活は、このミーティングから本格的に回り出した。

彼らとの出会いは偶然なのか、それとも会うべくして出会った縁だったのか……それは今でもわからない。

それこそ神のみぞ知るというやつだろう。

それでも。

もし、もし……この日一日だけ、やり直しができるチャンスを与

えられたとしたら。
この日が今後の中学生活、いや、人生を分かつ分岐点だと知っていたら。

私はどういう選択をするだろう。

そのままミーティングに出ただろうか。
それとも――――この日は学校を休んだだろうか。

ＧＯ，ＧＯ，親睦遠足会！～前編～（前書き）

食事中の人には不適切な表現があります、要注意！
「大丈ブイ！」という寛大な方のみどうぞ。

GO，GO，親睦遠足会！～前編～

「皆さま、おはようございます！」

バスガイトさんがお辞儀をしながら元気よく挨拶すると、１年８組の生徒は騒ぎ声を上げながら「おはようございま～す」という気の抜けた挨拶をバスの中に響き渡らせた。

「……当、アズマ観光バスをご利用頂きありがとうございます。今回ガイドをさせてもらいます、私は坂本、運転手は岸田、最後まで安全運転で参ります。どうぞよろしくお願い致します」

「ハイ、ハ～イ！！　バスガイドさんて独身ですか？」

「彼氏いんの？」

「先生なんてどう？」

ガイドさんが笑顔で挨拶を終わらせた途端、次々飛び交うお約束な質問。もちろん先陣切った奴は一番前に座っているチビ猿だ。先生の「黙って座ってろ！」という言葉も、ガイドさんの苦笑いも、浮き立つ生徒達の前には何の効果もない。

今は梅雨に入る前の６月上旬。中間テストが終わって身も心も解放され、空を見上げるとまさに「親睦遠足会」に相応しい快晴日。

山野中学校の１年生を乗せた１０台のバスはＣ県に向けて渋滞もなくスムーズに進んでいた。

＊＊＊＊＊＊

「遠足実行委員」のミーティングの二日後、和子ちゃんが登校して来たので、会議の内容をキッチリ引き継ぎした。

和子ちゃんは申し訳なさそうに「本当、ゴメン」を繰り返した。

私としても思いがけない出会いがあったのと、まんざら悪い仕事でもなかったので、「気にしないで」と安心させた。……と思いきや、会話を聞き横から口を出す類人猿、約一匹。

『ドテチン休むからな～！　おかげでこっちはとんだトバッチリだったぜ。な、チュウ？』

（アンタは何もやっとらんだろうが……）

そういう冷ややかな視線を送る私と「ちょっと、アンタ！　ちゃんと会議出たくせに、なんで引き継ぎするのが代理のミっちゃんなのよ？！」と凄む和子ちゃん。

『お～怖い、怖い！　君達、そんな顔していると男が寄りつかないぜ？　いや、違うな。それ以前の問題だな』

ハッハッハ～と尾島の大きい笑い声に和子ちゃんは「もう話すのも億劫だわ」とあからさまに机を離して、私に引き継ぎの続きを促した。私も和子ちゃんに習い、尾島を無視して何事もなかったかのように淡々と説明を続けた。

その後も、実行委員の仕事でこの二人は揉めに揉めた。

「ケンカするほど仲が良い」と周囲に冷やかされてはいたが、両者曰く「相手がコイツに限ってそれは死んでもあり得ない」とのことだった。

一番問題になったのは、「バスの席順」を決める方法だった。

仲の良い者同士で座ればいいという和子ちゃんの意見に対抗するように、いつもは面倒なことはゴメンという尾島が、「せっかくの親睦遠足会にそれじゃ意味ネェだろ！」と珍しくやる気マンマンな意見をぶつけてきたのだ。

梨本先生（リポーター）には、尾島の態度は好意的に映ったらしい。

『そうだよな？　やる気の出た尾島の言うとおりだ。男女仲良くペアで座ったらいいじゃないか！　せっかくの親睦会だしな！』

『『……』』

尾島は「親睦を広める為に仲の良い者同士で座わらない」と言っただけで、「いっそのこと男女ペアで仲良く座っちゃおうぜ、ホゥッ！！」とまで話は飛んでいない。「や、そういうわけではなくてですね…」と二人が否定するのも聞かず先生は、

『そーか、そーか！　そんならまたクジで決めるか？　トランプ貸すぞ？』

……とそのまま話が進んでしまった。

二人のフォロー役として命名された私は彼らの横で静かに溜息を吐いた。

そんな訳で、我がクラスでは本来の目的を果たしていないトランプのクジ引きで席が決まった。

最初はクラス全員「え～！！」と複雑な反応だった。それはそうだろう。まだ中学生活始まって間もないというのに、浮かれるイベントでいきなり男女の急接近。「そんなぁ～」「やだぁ」と文句を言いながらなんとなく嬉しいけど恥ずかしいと思う複雑なお年頃。

席順が決まるたびに悲鳴が上がり、思春期の甘酸っぱさが教室に漂う。しかも尾島がここぞとばかりに教壇の上から焦らすように発表し、照れ臭さを更に煽った。

たかだかバスの席順でこの盛り上がり。その様子はさながら数年後に合コンで流行る「殿様ゲーム」並みだと言えばおわかりいただけよう。

男子は密かにクラス1、いやおそらく学年でも1、2を争うぐらい守ってあげたいような美少女、「島崎由美」の隣を誰がゲットす

るかで盛り上がりをみせていた。

『か～っ！　アダモちゃんの隣はグリコかよ！！』

特等席をもぎ取った勝利者（ｗｉｎｎｅｒ）は、控えめな江崎君。悔しそうに言ったチビ猿も密かに「島崎さん」狙いだったらしいが、残念なことに彼と和子ちゃんは実行委員仲良く揃って一番前の座席と決まっていた。

アダモちゃんと呼ばれた島崎さんは「もう、その呼び方やめてよねぇ」と可愛く尾島に抗議をしている。これがまた厭味でなくマジな可愛さなもんだから、尾島も「『ハ～イ』って答えろよ！　それにちゃんと『ちゃん』付けしてるだろぅ？」とシャレも交えながら鼻の下を伸ばしていた。

（……他の人と態度が違うぞ、オイ）

私を含め女子全員はそういう視線でチビ猿を一瞥していただろう。何故可愛い島崎さんまであだ名をつけるのかと問いかけたところ、「うるせぇな、だから特別に『チャン付け』だろうが。丁寧だからいいんだよ！」とにべもなく吐き捨てられた。

もともと「アダモちゃん」はそれで一つの固有名詞ではないのかと思ったが、あえて訂正はしなかった。

＊＊＊＊＊＊＊

「道路を進むよどこまでも～♪」

……と替え歌よろしく、バスは今のところ問題なく目的地まで走っていた。が、人生思わぬところで落とし穴というものは存在するのである。それはバスが発進して一時間弱の時だった。

「え～テステス！　マイクのテスト中、マイクのテスト中！　あ～

皆さま、これからお待ちかねの『おやつタイム』に突入したいと思います！　皆様ふるって御参加……じゃない、この時間を使ってますます隣同士の親睦を深め、さらにこの中から将来結婚まで続くカップリングが誕生することを願って終わりの挨拶に返させていただきたいと……あ、こら！　ドテチン、マイク取るな！」

最後の方はマイクで放送されなかったが、生徒の高揚した気分を盛り上げる「おやつタイム」の号令がチビ猿から発せられると、笑いと共にバスの中は湧いた。みんな「待ってました！」と言わんばかりに、カバンの中からおやつの袋を取り出す音と菓子独特のイイ匂いが辺りに充満する。

「っるせぇな、わ～ってるよ！　あ～オホン、え～失礼しました。では改めまして、おやつの時間は今から３０分、時間厳守とさせていただきます。ゴミは各自お持ち帰りです、こちらもあわせてお願いします。ちなみにバナナはおやつに入りませんので持ってきた方は食べれません、ご了承ください。みなさん持ってきてないですね？！　……って言っても、男子全員前にバナナがぶらさがってい……キィィィン！！」

和子ちゃんが真っ赤な顔をして再びマイクを取り上げた。弾みにマイクがスピーカーに近づいた為、派手なノイズと共にチビ猿の独断演説は強制終了した。

チビ猿の下ネタに男子は異常な盛り上がりを見せ、女子は顔を赤らめながら「やぁねぇ？」恥ずかしそうに文句を言っっている。

（……実行委員の仕事ノリノリじゃないの……）

私は周囲の湧いた雰囲気から一人冷めた表情で周りから叩かれているチビ猿を眺めた。

大好きなチョコポッキーに視線を落とし、隣の野口（のぐち）君に「いる？」とポッキーを差しだすと「……いらない」と小さい声で言われた。

あれ？　と野口君の顔を良く見ると真っ青である。
（これはもしかして……）
まさに「オレ、バスに酔っちゃってます」の見本のような状態。
もう一押しすればエチケット袋が絶対必要なのは明らかだった。頼りなさそうに窓によりかかりながら痩せてひょろ長い身体を縮めている。その姿は心なしかいつもより存在感が薄い。ここで吐かれては堪らないと思い、反射的にカバンから自作のエチケット袋を取り出した。

「あ、あの、野口君！　これ、持ってたほうがいいんじゃない？遠慮なく吐いていいから、そのほうが楽になるから。よ、酔い止め飲んできた？」

野口君は前者の問いに黙って従って袋を受け取り、後者の問いに首を振って答えた。
私も小学生低学年頃までバスに乗ると吐いていたので、野口君の辛さは身にしみるほど良く分かった。こういう時「なんとか吐かずに済まそう」とガマンしないで、なるべく早い段階で思いっきり吐いたほうが良い。いずれにしても最終的には嘔吐するし、どっちにしてもみんなから「こいつゲロった」と思われるのだから。
野口君の朦朧とした目つきに「これはマズイ！」と先生か実行委員に一応酔い止めをもらう為、声を掛けよう立ち上がったその時。
野口君はエチケット袋に顔を突っ込んだ。

「おえェェェ～」

遠慮ない派手な音と共に放たれる僅かな異臭。

「せ、先生！　和子ちゃん！！」
「わぁ！　ノグティーがゲロったぞ～！！」

私が普段の倍の声で前方に声を掛けたのと、周囲の男子が騒ぎ出し、女子が「え～?!」と顰め顔になったのが同時だった。「どうした?」とリポーターとバスガイドさんが慌てて来てくれて、その後に実行委員が続いてくる。

「あちゃ～!　ノグティー、またかよ!　まさか、お前酔い止め飲んできてなかったのか?」

尾島の呆れた問いに野口君は力なく頷きながら、「……たまたま薬が切れてて……一応朝ご飯抜いて来たんだけど……」とヨレヨレな声で答えた。

尾島は周囲に窓を少し開けろと指示し、「コイツ、いつもこんなだから」と真面目にリポーターとバスガイドさんに説明しながら野口君を前の席に移動させようとした。

「おらおら、お前らは菓子を食ってろよ!　もうゲロ吐きそうな奴いねぇな?!」

もらいゲロ、すんなよ!!

尾島のおどけた一声でシーンとしていたバスの中は再び笑いに包まれ、元の賑やかなおやつタイムに戻った。

その間に野口君はあれよあれよと先生とバスガイドさんに支えられながら前に連れて行かれ、一番前の尾島の席に座らされさと思ったら、バスガイドさんから冷たいおしぼりと酔い止めをもらうなど和子ちゃん達の介抱を受けた。

この野口君、後から聞けば大野小の名物常習犯らしく、6年間バスに乗車する度に期待を裏切らず吐き続けた。毎度毎度「絶対酔い止め飲んでこいよ!」と念を押され、毎回毎回薬を飲んでくるにも

関わらず、だ。さすがに中学に入ったら進言してくれる人は誰も居ないし、本人も油断したのだろう。実際バスに乗り込んだ野口君は遠足の高揚気分も後押しして元気だったし、私とも普通に会話していた。本人も「もしかしたらこのままイケルかも？」なんて希望を持ったのだろうが、残念なことにそれは一時間弱で見事に散った。

さらに彼は胃が弱いだけでなく腸も弱い。

常にトイレとお友達で、中1男子のトイレットペーパー使用率の９０％が彼で占めていると言っても過言ではなかった。彼が初めての場所に行く時も最初に確かめるのは、「何処にトイレがあるのか」らしい。噂によれば近所の公共施設、スーパー、最寄りの沿線の全ての駅のトイレの場所を頭にインプットしてるのだという。そんな出先でアクシデントに見舞われない為にも、常に携帯するのはポケットティッシュ。公私共々彼のカバン、身につける服には常にティッシュが常備されている。

「野口はいつもティッシュを持っている」、略して「ノグティー」。

数年後爆発的に人気の出る国民的アイドルの「キムタク」よりも、先駆けて省略されたあだ名を持つノグティー。名付け親はどっかの類人猿。

しかも野口君は次の年の春より後（のち）の「国民病」とも言われる花粉症を患（わずら）い、更にティッシュの消費量を増やした。

その数は健康な中学男子生徒が3年間、ナニで使うティッシュの量より多いという伝説を残したのである。

GO，GO，親睦遠足会！～前編～（後書き）

お食事中だった皆さま、不適切なシーンがありましたことお詫び申し上げます。「アダモちゃん」懐かしいです。ドリフも好きですが、「ひょうきん族」も私の世代にとって外せません。「ペイ！」といいながら暴れていたアダモちゃん、おもしろかったなぁ。個人的には「ひょうきんベストテン」が好きでした、西川のりおの「リアルオバQ」もツボ。

GO，GO，親睦遠足会！～中編～

引きずられるようにして連れて行かれた野口君の心配をしつつ前方を見ると、実行委員と先生が何やら話し合いをしていた。急に尾島がヒヒヒと笑い、座っていた補助席を立ち上がって椅子をたたむ。こちらを指してカバンを抱え「あとは頼むぜ、ドテチン！」と片手を上げながら、「こら、勝手に決めんな！」と文句を言う和子ちゃんを振り切ってドカドカと狭い通路をやってきた。

「おらおら、チュウ！　お前窓際に移れや」
「え？」

いきなり私の席のところに止まり手を振って「席を詰めろ」という仕草をした。

なんで実行委員の君がここに座るんですか？　という顔をしていたのだろう、私の呆けた顔にチビ猿は外国人よろしく「ヤレヤレ」とわざとらしい仕草で首を振った。

「あのですねぇ。俺の席にはノグティーが座っているんですよ？オマエは皆のために頑張って実行委員をこなしている俺様に一人寂しく補助席に座れって言うのですか？　それがクラスメートである荒井美千子さんのご意見ですか？」

冷たい、実に冷たい！

大袈裟な溜息きを吐きながら、「どう思います、この扱い？」と周りに同意を求める声に慌てて席を空けた。

「それでいいんだよ。詫びなんて気にするな、そのポッキ―半分でガマンしてやる」

チビ猿は袋の中から菓子をゴッソリ抜き取り隣に座った。
それからは「お前何気にサボってんじゃねぇよ！」と次々文句を言う周囲の男子から五分刈り頭を撫でられ叩かれるという歓迎を受け、そのお礼として「うるせぇな！」と奪い取ったポッキーを武器に叩き返している。あっと言う間に群れ同士ジャレ合う類人猿達、さながら密林のジャングルと化すバスの中。
しかも偶然に通路を隔てて座っているゴールデンペアのグリコ&アダモちゃんに「これお近づきの印（しるし）に俺から。食えよ、遠慮なんかするな」と自分も3本いっぺんに食べながら残りの折れたポッキーを押しつけた。「あ、食っていいのはアダモちゃんだけ。グリコは当然ポッキー持ってきてるだろ？自分の会社なんだから」という憎い台詞を付け足すのも忘れなかった。

＊＊＊

「あ～気持ちいいね！！」

目の前に広がる海は、太平洋。爽やかな潮風を受けながらノビをするのは山野中・1年8組の乙女達。
やっと「悪臭・騒音・汚染」……という公害極まりない3重の落とし穴から這い上がった私は、ここぞとばかりに新鮮な空気を思いっきり吸い込んだ。

「まったく、チビ猿（アイツ）超ムカつくんだけど！！」

砂浜に下りていく間も和子ちゃんはバスの中の一件を思い出してるのか、怒りを復活させた。海に向かって「バカヤロー」と青春の雄叫びではなく尾島への愚痴をこぼしている。それもそのはず、「親睦遠足会」で肝心な親睦を深めるどころか仕事をチビ猿に押し付

けられ、ノグティーのマンツーマンケアで疲れきっているのだから。
幸子女史は「本当、災難だったよねぇ」と私と和子ちゃんの方を見ながらフフっと口元に手をやった。

「もう！　幸子はいいよなぁ。実行委員交替してよ！」
「そ、そうだよ。なんなら、幸子ちゃん、帰り座席交換しない？」
「あ、両方ゴメンだわ。どっちも最悪だし？」

和子ちゃんと私は呑気に笑う幸子女史に文句を言うと、幸子女史は笑いをかみ殺しながら「あ、ポップコーン髪についてるよ」と私の髪を触った。私は悪霊を払うかの如くバサバサと髪を振り払い、慌てて有害物質を落とす。その様子を見ていた幸子女史は笑いを我慢できずとうとう吹き出した。
笑いごとじゃ済まされないくらい、最悪なバスの旅。
座席を交替してからというものの、隣のチビ猿は前後隣の男子を相手に持参したポップコーンを鼻に詰め、「くらえ！」と言いながら鼻息でポップコーンを飛ばし不評を買った。そのうちエスカレートして尾島の友人であり偶然にも前の席に座っていた諏訪君と「鼻息でどこまでポップコーンが飛ぶか」と前方の席へポップコーンの飛距離を争ったり、終いには嫌がる隣のグリコに無理矢理鼻にポップコーンを詰めさせ、競技に強制参加させるなどムチャクチャなことをしていた。
おかげで隣に座っている私は尾島に対する反撃のポップコーンまみれ。しばらくポップコーンの匂いが鼻について、あたかも自分がポップコーンを鼻に詰めている感覚になりムズムズする始末。……しばらくポップコーンが食べれそうもない。
そんな私の思いとは裏腹にバスの中は大賑(おおにぎ)わい、クラス1の美女・アダモちゃんも幸子女史も面白がって飛距離争いを一生懸命応援していた。
この大騒ぎを「納得できない」と思ったのは、落ちたポップコー

ンを片づけなければならないバスガイドさんや実行委員の和子ちゃん、チビ猿ＶＳ周囲の男子のポップコーン合戦でトバッチリを被(こうむ)った私、ロクでもない生徒達を持った担任のリポーターだけだろう。

砂浜に下りた生徒達は各クラス毎に集まり、先生と実行委員から連絡事項を受けた。

実行委員のミーティングに参加して初めてわかったのだが、この「親睦遠足会」は「ただ弁当を食って帰る」だけのイベントで終わらなかった。全クラスに「親睦遠足会で学んだ事」という課題が与えられていて、砂浜の動植物の観察やこのイベントでどれくらいクラスの親睦を深めたかという感想などの結果を、学級新聞という形で模造紙にまとめて廊下に張り出し発表しなければならないのだ。

『遠足で親睦を深め、さらにその密度を濃くちゃおぅＺＥっ！』

「親睦遠足会」後のアフターケアも万全と言わんばかりに駄目押しの学級新聞。しかもこの学級新聞の仕上がりで、そのクラスの密度・協力体制・やる気などの特徴が分かってしまう。

例えば。

挿絵や切り絵、細かいカメラワークでカラフルに仕上げるクラス。

真面目に砂浜の動植物を本で調べて丁寧に説明し、本物の新聞のように見るからに活字の多いクラス。

調べる内容はそっちのけで、個人個人の感想を寄せ書きのように書くクラス。

「あきらかに手抜きだな、オイ」というような写真ばかりのクラス。

……などなど。

どちらにしても新聞作成の完成度は、「実行委員」の腕に全て掛っているのである。

和子ちゃんは相方が『サル目・一応ヒト科・クラス一のアホ属』なので、期待もせず完全無視を決めたらしい。「アイツと相談してたら、中学校卒業してしまう」という捨て台詞と共に早々と勝手に係を分担してしまった。面倒なことがキライというチビ猿も「課題」に関しては足を突っ込むことなく、和子ちゃんに押し付け……じゃない、一任した。

押しが強く、ある意味豪快に人を引っ張っていく力のある和子ちゃんは、問答無用で各分担をクラス全員に発表した。クラスメート達は若干不服があるようだったが、「文句があるやつは、新聞作成の総責任者になってもらう」と本当に実行しそうな益荒男ぶりの台詞を吐いたので、クラス全員首を縦に振るしかなかった。

お楽しみのランチタイムまで「親睦遠足会」の課題の為解散になり、生徒達がそれぞれ与えられた仕事をこなす為に散らばっていった。我がクラスは海&岩場は女子が担当し、簡単な海&砂浜はチビ猿率いる男子の担当だ。

8組の女子達は岩場と岩場の隙間にたまっている水の中の魚を見て様子を書き出したり写真を撮ったりした。

まだ6月だというのに、すでに気温は初夏並みの暑さ。太陽がジリジリと照りつけていて、生徒達は次々とジャージの上着を脱いで半袖の体操着姿になっていく。

どこもかしこも砂浜には生徒達の浮かれた声が飛び交い、男子など課題そっちのけで裸足になり、海に足を浸してふざけあっていた。女子も負けず劣らず友達同士しゃべったり、写真を撮り合っている。我がクラスの女子は真面目なのか全員集中して課題用の記録を書き留めたり写真を撮ったりしていた。

「こっち、写真はOKだから。もうそろそろ終わりにしよう。相沢さん、ミっちゃん、そっちどう?」

和子ちゃんがカメラをポケットに入れ、散らばっていた8組の女子に声を掛けた。

相沢さんと私はクラスの女子が観察した岩場の様子をノートに書き留めていた。相沢さんは「こっちOK！」と和子ちゃんに合図をし、私も全て書き終わり顔を上げてOKのサインを出すと和子ちゃんは「女子の仕事終了～御苦労さまでした！」と頭を下げた。和子ちゃんの言葉で女子全員「お疲れ様～！」と挨拶をし、解散になった。

女子は2カ月の付き合いにも関わらずチームワークはバッチリだったので30分もかからず仕事が終わったが……男子はどうだろう？

和子ちゃんは非常に心配になったらしい。元々責任感の強いタイプだし、新聞が岩場ばかり記事になってもアカンと思ったのか、和子ちゃんはチビ猿に念を押す為に足早に砂浜へ向かった。

チビ猿達はすぐに見つかった。

何故なら和子ちゃんや私が砂浜にレジャーシートを引いてリュックを置いていた場所に居たからだ。

しかも他のクラスの連中（全部女子）に囲まれ仲良く談笑していた。そうかと思えば江崎君に何やら命令して私達の荷物の写真を撮らせている。その姿を見てさらに尾島を囲んでいる生徒達が笑った。

「……何、アレ？」

「ちょっとさぁ、なんかヤな感じだよね」

「やっぱ、真面目にやってないじゃん。尾島」

「宇井、なんか言った方がよくない？」

8組の女子達は眉根を顰め、ヒソヒソ囁き合う。そうこうしているうちに和子ちゃんと荷物を置いてある女子達はズンズン尾島の輪に向かって歩いていった。私も慌てて後に続く。

「ちょっと、尾島！　アンタ、課題の資料集め終わったんでしょうね？こんなところで何してんのよ？」

和子ちゃんの一声で尾島達は談笑をやめて、こちらを振り返った。尾島の友人である諏訪君を筆頭に８組男子は「うるさいのが来た」という顔をし、他のクラスの女子達は一人を除いて「何このオンナ？」という顔をした。その一人というのは同じ女バレの原口美恵（はらぐちみえ）だった。

（うわぁ……なんでいるの？　男子にうつつを抜かす前に実行委員の仕事してろよ！）

顔を会わせたくないので、一番後ろのポジションからそっと成り行きを見守った。どうもあのミーティング以来、原口美恵の視線が厳しいのは絶対気のせいではない。

「あ、そっか。宇井も尾島と一緒のクラスだったっけ？　大丈夫大丈夫、尾島ちゃんとやってるよ。さっきから写真撮ってるよ。本人は命令だけだけど」

原口美恵は茶目っけたっぷりに尾島をフォローしつつ、チョッピリけなす。しかし和子ちゃんにとってそんなフォローは焼け石に水だ。

和子ちゃんは「あ、そう」と原口美恵をソツなく適当に流した。しかし後方から確認しても「原口（アンタ）は引っ込んでて、私はこの野生猿にガツンと注意したいのよ！」オーラが立ち昇っているのがわかる。

「そうだよ、どこ目ぇつけてんだ？　今スクープを激写中なんだから邪魔すんなよ。題して『これが環境汚染の実態だ！　砂浜にポイ捨てされたゴミ達』ってぇの、どうだ？」

尾島が私達の荷物を差しながらニヤニヤした顔で言うと、原口美

恵をはじめ他のクラスの女子は「ひど～い」と言って笑いを噛み殺した。諏訪君達は屈託なく笑っている。

ピシッ。

心霊現象のラップ音でもなければ、ＳＭの女王様が振り上げるムチの音でもない。

８組女子周辺の空気が固まり、顔が強張った。あの和子ちゃんも黙って拳を握っている、気軽に文句を言える程度の怒りではないのは明らかだ。

雲ひとつない真っ青な快晴に海から吹く潮風は爽快。私達は親睦を深める為に他県の海まで出向いているとゆうのに。

今この周囲を取り囲んでいるのは、昼ドラの愛憎劇場も真っ青なくらい修羅場が始まりそうな空気。とてもじゃないが「親睦会」には程遠く「速崩壊」と言ったほうが近い。それに逸早（いちはや）く気付いたツワモノは江崎君だった。

「……お、尾島君。それマズイよ……」

「何言ってんだよ。そう言うグリコが写真撮ったんじゃねぇか？」

「えぇ？！　いや、だって、尾島君がヤレって言うから……」

江崎君はこちらを見ないようにコソコソとチビ猿に抗議している。

「オレなんか悪いことした？」と、このツンドラ気候な空気を読んでないのか読めないのか、そんな尾島に対して私は怒りを通り越して厭きれてしまった。

（いっそのこと、原口美恵と共に仲良くゴミにまみれて環境汚染になってしまえ）

私は男子は放って置いて自分達で砂浜の観察をしようと提案する為和子ちゃんの傍に行こうとした時、柔らかく可愛らしい呑気な声が後ろから聞こえた。

「あれぇ？　宇井ちゃん、どうしたの？」

声を掛けたのはトイレから戻って来たアダモちゃんだった。

この方もある意味空気を読まない。天然丸出しでこの微妙な空気をザックリ切り込んできた。学年１の美少女出現という「うねり」に、場の空気は微妙に違う方向へ流れを変え始める。

「……島崎、聞いてよ。尾島達、ここにある荷物、ゴミとして環境汚染だって学級新聞に発表するんだってさ。島崎の荷物も入っているのにねぇ？」

怒りで何も言えない和子ちゃんに変わって、尾島達に冷ややかな視線と共にすかさず答えたのは幸子女史だった。

「え～！　それっ、ヒドぉ～い」

アダモちゃんは眉根を寄せ可愛く口を尖らせたが、その言動に迫力は無い。本気で怒っているんだか何だかわからない態度で腕を組んでいる。

しかし男性諸君には思った以上の効果があったようだ、その証拠に一斉に鼻の下を伸ばした。

その瞬間野生猿もビックリなほど俊敏に動いた尾島は、私達の荷物の背後にバラバラに落ちていた空き缶を寄せ集めた。

「いや、なんだ、ジョークだって！　ほら、『この荷物……の後ろに捨てられてた空き缶』を写真に撮ってたんだよ。な？　グリコ？」

尾島はすばやく立ち上がり、他の男子同様デレっとした顔をしてグリコの肩を抱き寄せ同意を求めた。そのグリコも例に漏れず鼻の

下を伸ばして一生懸命頷いている。

「やだぁ、そうだったんだぁ？　それって紛らわしいんだからぁ、もう～」

「「「「「……」」」」」

アダモちゃんは満面な笑みでポンと尾島の腕を叩いた。

天然で愛らしい素のツッコミに男子は「やっぱ、紛らわしかったか？」とニヤニヤ笑い、尾島は再び江崎君に「グリコ、この環境汚染の写真でバッチリスクープだ！」と空き缶を寄せるように砂浜に置いて写真を撮るよう促した。

（オイオイ、そりゃ完璧に『捏造（ねつぞう）』だろうよ……）

一方、８組女子はその様を唖然とした気持ちで見つめ、尾島の良すぎる機転とアダモちゃんの態度に闘争心を完全にもがれた。

この場で一番面白くないないのは、原口美恵をはじめとする他のクラスの女子達だろう。突然の美女出現に、尾島をはじめ男子全員の心を一気に持ってかれたのだから。

特に原口美恵はアダモちゃんをギロリと突き刺す視線で見ていた。悲しいかな、その視線は学年１と言われる美女を突き刺す威力はおろか逆に弾かれている、それどころかアダモちゃんとチビ猿の間にも入れない御様子だ。不謹慎にも原口美恵の顔を嫉妬で歪ませたこの事態にヒヒヒと心の中で笑ってしまった私は、密かに８組の女子に頭を下げた。

GO，GO，親睦遠足会！～後編～

「そっちのハンバーグとアスパラ巻き交換しない？」
「わぁ、サンドイッチおいしそう！」
「へへへ、紅茶に砂糖入れて凍らせてきたんだぁ」

遠足のメインイベントであるランチタイム。レジャーシートを寄せ合って各自の弁当を披露し合う生徒達。頭上から照りつける日差しの強さは相変わらずだったが、海から吹く柔らかい風は心地よく、砂が吹き飛ぶ心配もない。

数十分前にチビ猿がもたらした嵐は跡形もなく過ぎ去り、すっかり和やかな風景に戻った。さすがに和子ちゃんも8組の女子達も、お弁当の前では燃え上がった闘争心も沈下した……かのように見えたのだが。

食べ終わった後に残っているお菓子を広げ、女子特有のオシャベリタイムが始まった途端、和子ちゃんは再びイライラの迷宮へ迷い込む。どうやら怒りの炎が再熱してしまったらしい。話は部活の先輩の事や先生の事が話題だった筈なのに、いつのまにかバスの中の出来事にすり替わり、何故か最後には尾島の「空き缶捏造事件」の話題に戻ってきてしまったのだった。

「あんの、野生猿（バカ）！　絶対最後の仕事は奴に全面的に押し付けてやる～！！」

和子ちゃんはたった今口に入れたばかりの飴を、まるでチビ猿に見立てるように思いっきりガリガリ噛み砕きながら、最後の仕事の為に勢いよく立ち上がった。「アハハハ」と引き攣った笑いをした私と幸子女史は、和子ちゃんが鼻息を荒くさせながら、海でお互いに水を掛けあって青春を謳歌している尾島達の方へドスドスと向か

うのを黙って見送った。尾島は既にずぶ濡れになっており、これから最後の仕事があるのも忘れているようだ。後方で「実行委員、今すぐ集合しろぉ！！」と拡声器で召集を掛けている先生の声が聞こえ、前方には身体の大きい和子ちゃんがチビ猿を引きずっている姿が目に映った。和子ちゃんの境遇を同情しつつ「やっぱり実行委員、代理程度で済んでよかったなぁ」と心の中で胸を撫でおろした。

＊＊＊

「親睦遠足会」の実行委員である生徒が、担当の先生から何やら説明を受けゴミ袋のようなものを渡された後、各クラスの元に戻って来た。

生徒全員が各自持参するように言われていたスーパーのゴミ袋に、拾ったゴミを入れるようにと実行委員が指示をすると、生徒達は解散になった。この遠足の締めであるクリーンアップ活動・「砂浜に落ちているゴミを拾う」という奉仕活動が始まった。数人適当にグループを組んで、砂浜に落ちているゴミを拾って次々と袋に入れていく。

（この頃はゴミの分別は現在ほど厳しくなく、粗大ゴミ等以外はほとんど一般のゴミとして捨てていた。リサイクルの良さが見直されたのは最近の話である）

この砂浜は関東周辺に住んでいる人が来るにはちょうどいい場所なのか、落ちているゴミの数も思った以上に多かった。空きびん、空き缶、ティモテやママレモンなどの空き洗剤プラスチック用品。「……なんでこんなものが？」というような、熊の木彫り人形だとか狸の置き物まである始末。とうとう思春期真っ最中な中学生を興奮……いや、動揺させる、とんでもないゴミまで出てきた。

「うわぁ！！」

聞きなれた男子の奇声の方向に視線をやると、巨木や古いボートが積み重なっている辺りで「類人猿とその仲間達」が興奮した面持ちで騒いでいる。

「オレ、外人の初めて見た……」
「うほぉ、スッゲェなぁ！！」
「普通捨てるか？！　もったいねぇよなぁ……」
「これゴミとして捨てるのか？」
「おい、こっち見ろよ！」
「おおっ？！」
「これ、ヤバくね？」
「やっぱ、デカいよなぁ……」
「俺は日本人のほうがいいなぁ」

チビ猿や諏訪君達の抑えきれない興奮振りからいくと、どうやらそうとう大物らしい。そのうち深刻な面持ちでコソコソ顔を寄せ合い話し合っている。その声に引き寄せられた男子や先生達が近付くと更に騒ぎが大きくなった。それを鎮めようと先生が焦った様子で「こら、オマエら！　これは没収する！　さっさと他のゴミ集めろ！」と声を張り上げた。

「先生ズルイ！」
「ゴミじゃない、まだ使える！」
「ネコババする気だな！」

チビ猿達の力強い叫びも空しく、男子生徒達は「大物のゴミ」を取り上げられ強制的に解散させられた。

チビ猿達が見つけ出したのは、なんとエロ本（プレイボーイ・しかも洋物）だったのである。こういうゴミが砂浜に落ちていたことも疑問だが、何故よりよって尾島（あいつ）が見つけ出すのか……計り知れな

い負のパワーを宿しているのか、ロクでもないものを引き寄せる人物なのか。少なくとも「超問題児」であることを証明する材料になったのは間違いあるまい。

「……」

私はアホなクラスメートの騒ぎから視線を逸らし黙々とゴミを拾いを続けた。和子ちゃんも幸子女史も離れたところで一生懸命拾っている。

本来私は面倒くさがりな気性なのだが、一度気分が乗り出すと徹底的にやらないと気が済まない性格であった。根が真面目なせいもあって、「このビニール袋一杯になるまでゴミを拾ってやろう」という野望を掲げながら砂浜のゴミをゲットすることに集中する。しかも見る間にゴミのない海岸になっていく様は見ていて気持ちがいい。

（ああ、私ってイイことしてるじゃん？）

たかだかゴミ拾い（しかも生徒全員）、人として当たり前な行為に優越感に浸る私。こんな真面目な姿を是非あの人に見てほしいなぁという下心バリバリな気持ちで辺りを見回すと、目的の王子様はすぐに目に入った。

恋する女は、意中の人を即座にロックオンするセンサーを持っているらしい。そんな技、誰に教えられた訳でもないのに……易々とターゲットは目の中に入ってしまう。

田宮君はジャージのズボンをまくりあげながら裸足で友達とゴミ拾いをしていた。スラリとした身長、爽やかな笑顔。（多分。若干遠いのでハッキリわからない）恋愛フィルター越しのせいか、ゴミを拾うその仕草までも3割増しで素敵に見えた。

ガン見している姿を悟られないよう、且つ抜け目なく瞳に焼き付けようとする。……が、悲しいかな、こういう時同時に見たくもないものまで見てしまう。

同じ実行委員の小関明日香さんとそのお友達が彼に走り寄り、笑顔で会話をしはじめた。それは何ともイイ雰囲気、…同じ男女の和やかな会話でも先程のチビ猿達と原口美恵が談笑してた時とは大違いで、数倍温かく感じられた。

（やっぱり、人柄ってこういうところに出るんだろうなぁ……）

一人で妙に納得しながら、「私も9組になりたかったなぁ」と心の中で溜息を吐く。和子ちゃん達と過ごす8組に不満があるわけではない、今まで私が過ごしたクラスに比べたらお釣りがくるほど素晴らしい筈なのに。好きな人と一緒のクラスなんて心が浮ついてまともに生活できないし、遠くから眺めている方が気兼ねしなくていい……なんて思っていた筈なのに。

最初は目に入るだけでいいと思い、そのうち一緒に会話できればいいと思い、さらに隣にいれたらいいと思い、自分のことだけを見てほしい……と願う。人間の欲望は果てしなく、尽きることがないのである。田宮君の隣にいる自分の姿を想像したが、実際目の前にいる二人の姿が強烈なのか、上手く想像できなかった。

「スキアリっ！！」

「っ！！」

背中から大きな声がしたと同時に、思考が中断し目の前の景色がブレた。「やられた！」と思った時には膝を折り曲げ尻を突き出したへっぴり腰丸出しの可笑しな恰好になっていた。

（……コ、コノヤロぉ！！）

男女関係なく無防備なところを背後から「膝カックン」をカマす大胆な奴は一人しかいない。常に己の欲望のまま突き進み「大成功！」と得意そうに笑っている類人猿を、憎しみフィルター越しの5割増し鋭い眼光で睨んだ。

「……あ、あのさ！　こういう子供染みた真似は、」

「あっ！　啓介～！！」

やめまてくれますか、という台詞を言う前に、チビ猿に向けた小関明日香さんの可愛らしい呼びかけで遮られた。彼女は満面な笑みでこちらを歩いてくるのに、チビ猿は「ゲゲっ！」と嫌な顔をしながら慌てて踵を返し諏訪君の元へ行こうとする。

「……」

逃げるように去っていく尾島と、それを追いかける嬉しそうな小関明日香さんの姿を黙って見送った。

＊＊＊

バスの窓に寄りかかり、対向車線を走っていく車と流れる景色を黙って眺めていた。

先程までバスの中は騒がしかったが、今はもうナリを潜め静かだった。思った以上の気候の良さと心地よいバスの揺れは、疲れ果てた生徒全員をあっと言う間に夢の国へ誘う。隣をチラリと見たら、尾島も例外なくグッスリと爆睡中だった。いつもの生意気そうな表情とは打って変わり、白い顔をうっすら日焼けさせながら可愛らしい寝顔でスヤスヤと呑気に寝ている。

出来ることならヤツの額に「肉」という文字か鼻毛や瞼の上に目を書いてやりたいところだが、そんなことはできる筈もないので（残念ながらペンもない）脳内想像だけで満足しておいた。

コトン。

窓の方を向いた途端、隣の尾島がこちらに寄りかかって来た。

「!?」
（ちょ、ちょっと、勘弁してよ！）
肩を動かして気付いてもらおうとしたが、尾島は全然起きる気配がない。
「……ハァ」
これが田宮君なら「ようこそおいでくださいました！」と三つ指ついて御出向かいしたいくらい大歓迎だが、現実は「チビ猿」。どう念じたところで隣の顔は一行に変わらない。しつこく何度も肩をゆすっても起きないので、そのうち諦めてそのままにしといた。どうせ周りも寝ているし、そのうち気付くだろうと思ったところで完全に意識が途切れ、山野中に戻ってくるまで私は完全に夢の住人だった。
なかなかいい夢を見ていたのに、突然オデコを「パチン」と叩かれ、寄りかかっていたものが無くなりガクっと身体が傾く。無理矢理現実へ引き戻され、寝ぼけた私に向けられた第一声は、チビ猿の呆れた台詞だった。
「起きろ、チュウ！　……オマエねぇ、人に寄りかかるなよな？腕が折れるだろ！　しかも涎！　垂れてるぞっ！！」
＊＊＊＊＊＊＊
「親睦遠足会」は無事終わった。
課題発表の学級新聞も無事仕上がり、廊下に張り出された。我がクラスの新聞は、新聞の中央に大きく楕円を描き、その中に海辺の写真と簡単な動植物の紹介を書きこみ、楕円の外には「親睦遠足会」

の感想を一人一人書き込んでもらって全員の手で新聞を作り上げた。もちろん和子ちゃんが撮った岩場の写真も、チビ猿プロデュース＆グリコ撮影の「空き缶捏造」の写真もしっかり掲載された。

しかし、それだけではもちろん終わらない。最後の最後で巨大な落とし穴が待ち構えていた。

新聞が無事に書き終わり、廊下に掲載された日の放課後。部活が終わった遅い時間に、チビ猿の友人・諏訪君が余計な細工を新聞に施（ほどこ）したのだ。

それは。

ノグティーが先生とバスガイドさんに引きずられていく後ろ姿、グリコが鼻にポップコーンを無理矢理詰められている姿、チビ猿が「プレイボーイ」を先生に取り上げられる劇的瞬間、そして……尾島と私が互いに寄り添って涎を垂らしながら爆睡している写真が、巧妙（こうみょう）且つさりげなく新聞の隙間に貼りだされていたのである。しかもご丁寧に犯罪写真のように目を隠し、どうでもいいコメント付きで。

放課後から次の日生徒が登校してくるまでの数時間の間、無防備に廊下に晒（さら）された数枚のスクープ写真。諏訪君は余計な写真を晒（さら）された被害者達と実行委員によって怒涛の集中攻撃を受けた。特に実行委員2人から強烈なとび蹴り（尾島）とグーで殴られ（和子ちゃん）、ちょっとした騒ぎになったのは言うまでもない。

GO，GO，親睦遠足会！～後編～（後書き）

ママレモン、ティモテ、知ってますよね？え？知らない？　……おかしいなぁ（笑）。

ところでティモテの金髪オネェさん、今どうしているんだろう？

憂鬱な夏休み

「期末テスト返すから、静かにしろ！！」

興奮して落ち着かない生徒達を一喝しながら、梨本先生（リポーター）は出席番号順に名前を呼び始めた。

やっと悪夢の期末テストが終了し、次々とテストが返却された。その結果は……まぁまぁ満足できるものだった。苦手な理科や国語は中間テスト同様あまり芳（かんば）しくなかったが。それは、まぁ、仕方がない。いくら頑張ってもやる気の出ない、苦手な科目と言うものはあるものだ。かわりと言ってはなんだが、数学と社会はいい出来栄えだった。特に英語は相性が良かったのか、気合の入れ方が並みじゃなかったからか、戻って来た答案は予想以上のものだった。

しかも教壇から、リポーター直々に「クラスで最高点だ、よくやったな」とお褒めの言葉も追加されたではないか！

たかだか中一の１学期の期末テストで一位はたいしたことはないかもしれないが、落ちこぼれ成績を取り続けてきた私には十分すぎる結果だった。

「……さすがチュウだけあって、英語はすごいな」

余計な感想が斜め後ろから飛んできたが、無視だ。勉強に関しては点数をとった者が勝ち。

（フフン、負け犬。いや、負け猿は後ろで吠えてろ！）

頬を染めながらも胸を張って堂々と答案を取りにいった帰り、小６の時に同じクラスだった子の顔がチラリと見えた。

まるで信じられないという表情。

その顔を見た時、心の中でガッツポーズを取った。この時ほど心が爽快になり、歓びを噛みしめたことはない。

テストの答案用紙が全て帰ってくる頃には、生徒達の気持ちは夏休みに飛んでいた。

どんな評価の通信簿が返されるかという不安はあるものの、中学生活初めての夏休みが待ち構えているのだ。夏休みをどう過ごそうかと考えるだけで、全ての憂いを吹き飛ばすほどの長い休み。例え、それがほぼ部活動で占めると分かっていたとしても。

「やっと1学期が終わったぁ！　2学期の席替えでこの尾島（バカ）とも、おさらばだぁっ！！」

本人の目の前で遠慮なくルンルンに浮かれまくる和子ちゃんに対して、私の気持ちは「とうとう夏休みが始まってしまう……」とあまり喜ばしくないものだった。

確かに夏休みの宿題を除けば、起床時間は自由だし、強制されて勉強する必要はないし、プールやら田舎に帰省やらで楽しいことの目白押しなのだが……。

（あ～あ、田宮君と9月までサヨナラかぁ）

田宮君の姿を見れない長い休みなんて、「チャーシューめん」の「チャーシュー抜き」に匹敵するほどの味気なさだ。

休み時間やお昼に行くトイレと手洗いの度に、9組の前を通るのが一日のうちで唯一の楽しみだった。偶然廊下であったり、部活の帰りで姿を見かけたり、月曜の朝礼で整列する時に隣同士になる貴重な時間が、9月までお預けなんて……なんという拷問だろう。

彼に恋してからと言うものの、私の中学生活はバラ色に変わった。

「自分の生活の全てが、好きな男性を中心にして回る」女の典型的な見本を突っ走っていたのである。

＊＊＊＊＊＊

「よ〜し、１５分休憩！！」

バレー部顧問の岩瀬先生が休憩の号令を掛けると、コートの中にいた先輩達は「疲れた……」「やっと休憩だ……」とフラフラになりながら、コートを出て冷たい麦茶が入っているビバレッジークーラーに群がった。１年生も先輩達に続いてコートを離れる。

「あ〜暑い、暑過ぎる……」

隣で和子ちゃんが手で仰ぎながら空しくぼやいた。冗談ではなく本当に暑い。午後３時、体育館の中は相変わらず蒸し風呂のようだった。全員顔が真っ赤で、汗だくだ。タオルをオヤジみたいに首に下げてＴシャツの中に入れているし（むしろそのままブラの下にまでタオルを通したいくらい）、指定体操着の子は汗を限界まで吸い込んだ布地が乾いて塩が噴く始末だ。

全員倒れるように地べたに座り込み、少しでも涼をとるため、体育館の扉に密集し風を受けようとひしめき合っていた。先輩のなかには体育館の床に寝転がり、火照る頬を地面に押し付けている者もいた。その姿に乙女の恥じらいの欠片もない。

残念ながら扉からは涼しい風が吹くことはなく、熱風が僅かに流れてくるだけ。体育館から見えるグラウンドには、この時間でも真夏の太陽が容赦なく照りつけ、眺めているだけで余計に暑さを煽られた。さっきまで砂埃を上げながら走り回っていたサッカー部員もいない。

しかし、もう少しの我慢。あと2時間ほどでこの一泊二日のキツイ合宿が終了しようとしていた。

「ねぇ、もうそろそろ空いてそうだからさぁ、外で水飲んでトイレ行かない？」

幸子女史は外から帰って来た数人の1年生の方を差しながら囁いた。素晴らしい提案に私も和子ちゃんも頷き、立ち上がった。本当は汗を出し切ってしまって尿意はないのだが、外で水を飲むのは大賛成だ。

「冷たい麦茶を飲みたいなぁ」とビバレッジクーラーのほうに視線を向けるが、ここは気を使って後輩は水道水で済ますのが得策だ。

「麦茶＝先輩」、「水道水＝後輩」。

麦茶だけではない、他にも上げればキリがないほど目に見えない暗黙のルールが女バレだけでなく他の部活にも漂っていた。２１世紀に入ってからの中学の部活事情は知らないが、少なくとも８０年代後半であるこの頃は、先輩後輩の上下関係が異様に厳しかったのである。

例えば。

一つ、先輩と廊下ですれ違った時は、立ち止まってキチンと挨拶をしなければならない。

一つ、コートの中に入る時は、必ず「失礼します」と言って入らなければならない。

一つ、登校する時は部活指定の靴を履かなければならない。

一つ、靴下は長く、短いのは二年生、超短いのは三年生から。（私達の時代はルーズソックスなどの長いものよりも、くるぶしが出るくらい超短いのが「クール」とされていた）

一つ、1年生は学校指定体操着でなければならない（土日・祝日、夏休みなどは白いＴシャツＯＫ）、白いＴシャツ（ブランドなどのロゴワンポイント入りＯＫ）は2年から、3年はどんなＴシャツでもよい。

一つ、1年生は大きめのジャージを着てはいけない。

一つ、1、2年生の髪の色は黒のみ。地毛で茶色の人は、黒に染めるべし。無理なら親からの証明書を提出しなければならない。

一つ、1年生はカーラーやコテを使って髪の毛を派手にセットし

てはいけない。
一つ、カラーゴムは禁止で黒か茶か紺、カラーゴムやリボンやボンボン付きは2年になってから。
一つ、1年生は色つきリップはダメ、無色透明でなければならない。

……などなど、数え上げればキリがなかった。
おそらく心の中では先輩も後輩も、「バカバカしい」とは思っていたに違いない。しかし生徒達は代々この厳しいルールを我慢し、ご丁寧に守り続けているのである。決められたレールを踏み出すアウトローな奴は「生意気だ」の一言で片づけられ、なんらかの制裁を受けるのが決まりだった。大概の生徒は怖くて決められた枠からはみ出ることは滅多にないのだが。

＊＊＊

体育館の外に出るとムアっと熱い空気が全身を覆った。垂れてくる汗も一気に蒸発ほどの熱気だ。体育館周辺を覆っている補強したばかりの新しいコンクリートに容赦なく日差しが照りつけ、熱と共にキラキラと反射していた。グランドの方を見ると暑さで蜃気楼のように揺らいでいるように見える。つい先程撒いたばかりのスプリンクラーの水も完全に干上がっており、気休めにしかなっていない。
ぼんやり見ていたグラウンドから手元に視線を移し、水道水の蛇口を捻って温(ぬる)い水を飲んで顔を洗うと僅かだが涼しくなった。

「ミっちゃん、先にトイレ行ってるね」
「あ、うん、すぐ行く」

和子ちゃんと幸子女史は「暑い暑い」と降り注ぐ太陽光線を避けるように体育館の中に入って行った。

ガコン

体育館に続いている校舎の扉が開き、和子ちゃん達と入れ替わるようにして出てきた5人の男子生徒達。

（……げっ！）

オヤジのように首にタオルを巻いたまま豪快に顔を拭っている勇ましい姿を見られ、慌てて首に巻いたタオルを引き抜いた。しかも、ある男の姿をバッチリ捉えてしまった自分が憎い。このままタオルで顔を隠しフェードアウトしたいところだが、どうみても不自然極まりない。

（さっさと体育館に戻れば良かった……）

なんでこんな地味な場所から出てくるのか。

そんな意味を込めた不躾な視線に「昇降口は閉まっていて、この扉のすぐ近くに裏門があるからに決まっているだろ！」と言う類人猿の厳しい視線が返って気がして、心の中で舌打ちをしてしまった。

「よお！」

荒井、久しぶりじゃん。

真っ黒に日に焼けた男の子。

ツンツンヘアーだった髪の毛は少し伸びたが、相変わらず切れ長の目を細めながら人懐こい笑顔はいつものまま。サッカー部であり、元クラスメートの佐藤伸君（さとうしん）。

馴れ馴れしく「久しぶり！」……なんて答えることはできないので、曖昧な笑いを浮かべながらチョコンと頭を下げた。

彼の台詞からわかるように、佐藤君は中学に入ってからも思春期特有の「恥ずかしさ、照れ」などとはおよそ無縁だった。知り合いとすれ違う時や顔を合わせる度に、男女問わず爽やかに挨拶をしていた。それが同じサッカー部員であろうが、成田耀子（なりたようこ）であろうが、

荒井美千子であろうがお構いなしだ。彼にしたら相手がクレオパトラでも、マンドリル並みの顔の持ち主であろうとも関係ないのだろう。

面白いだとか顔がイケてるという噂は相変わらず飛び交っていたけど、なによりもモテることを鼻に掛けず人を差別しないところが「人気者」である最大の理由だった。結果、佐藤君は中学でも「学年一のモテ男」という地位を守り続けている。

「……カッコ！」

隣にいたチビ猿は佐藤君に強い語気で声を掛けたが、私にはいつものように「一言モノ申す！」……どころか、目が合うとすぐ視線を逸らした。

（おや？）

定番となりつつある嫌な笑いを浮かべもせず気難しい表情。ここころなしか顔も赤い。他のサッカー部員に「いこうぜ」と顎で裏門の方を差し、歩き出した。

何か言われると身構えていた私は、予想外のチビ猿の態度に「あれれ？」と拍子抜けしてしまった。

（暑さにでもヤられたのか？　それとも腹でも壊しているのか？……ノグティーじゃあるまいし、まさかね？）

そんなチビ猿の態度とは裏腹に、他の３人は顔を見合わせながら私を見てニタニタ笑っていた。すぐにチビ猿の後を追いかけ何やら耳打ちをしている。チビ猿は無言で３人の頭を軽く平手で殴った後、４人で忍び笑いをした。

（……な～んか、やな感じだな……）

「なんだぁ、あいつら？　……ごめん、またな、荒井！」

佐藤君は訳が分からんという表情を浮かべてチビ猿達の後を追い

かけた。サッカー部達の背中を見送りながら、いつもと違う違和感に眉をひそめる。
なにか引っかかる。
「……あ、そっか！」
違和感の正体がわかり、思わず独り言が漏れてしまった。
尾島だ。色の白かった彼もさすがに連日の部活動のせいか真っ黒になり、佐藤君と同じく髪も少し伸びていたのだ。
それに。
背が低かった筈なのに、私と同じくらいの背丈の佐藤君の隣に並んだ時、大きな身長差が感じられなかった。
（もうそろそろチビ猿は卒業か）
昨夜の女の子同士のお話（今で言う恋バナ、ガールズトークか）で盛り上がった話題の内容がふと浮かび上がり少し複雑な気持ちになったが、部活の休憩時間が終わりそうなことを思い出し慌てて体育館の中に入ると……。
思わぬものが目に入った。
「っ？！」
体育館入口の正面の壁にあにある全身鏡。鏡の下の方には「昭和５０年度・山野中学校卒業記念」と書かれた文字が所々消えかかっており、その上に映っている自分の姿を見て固まってしまった。
嫌でもバストに視線がいってしまう。
そこには。
最近キツイなぁと思って、新調したばかりのピンクのDカップブラが、くっきり浮かび上がっていたのだ。思った以上に白いTシャツは薄い素材であり、おまけに汗でスケスケだった。

真夏の合宿の夜～前編～

「んでさ。荒井って、尾島とどうなってるのよ？」

どうしてこういう話になってしまったのか。

とんでもない台詞を言い出したのは、１年の副部長を引き受けている「奥住（おくずみ）さん」で。彼女のからかうような笑みに対して、苦虫を噛み潰した顔をしてしまった。

それはチビ猿達にスケスケブラを見られた前日の話、私達バレー部の一泊二日の合宿の夜のことだった。

場所は職員室のある校舎の３階の教室、時刻は消灯時間が迫る９時近くだった。学年ごとに３教室に分かれ、所狭しと敷き詰めた貸布団の上で顔を寄せ合って女の子が話題にすることと言えば一つしかない。

なんとなく気の合う同士で固まっているメンバーには、和子ちゃん、幸子女史、１年の副部長の「奥住さん」、彼女と仲の良い「光岡（みつおか）さん」と「加瀬（かせ）さん」（奥住トリオと命名した）。そして同じ山野小出身でバレー部に入ってから親しくなった、大人しくて控えめな「茅野（ちの）さん」ことチィちゃんだ。

初めは３年の部長の松野先輩が、どうやらサッカー部の部長と付き合い始めたらしいという話だった筈だ。

それなのに……。

「……あ、あの、奥住さん。それ、ありえないから」

「また、またぁ！　親睦遠足会の新聞に貼ってあったスクープ写真！」
「すんごく寄り添って眠ってたもんねぇ？」
「指を絡めて手をつないでたんだって？」

（んな、ワケ、あるかいっ！）

奥住トリオの畳みかけるような言葉に軽い眩暈を覚え、盛大な溜息を吐いた。いったいどこをどうしたらそんな噂になるのだろうか？　とうに忘れ去られたと思っていた昔の話を引っ張り出されて頭が痛い。

「……あ、あれは諏訪君が勝手に脚色したんです。尾島との間にはヤマシイことは一切ありません！」
「え～！　本当に？　でもさぁ、尾島が荒井にチョッカイ出してるところ結構見かけるんだけどなぁ？」

私は余計な期待を持たせぬようにキッパリハッキリ言ったので、奥住さん達は残念というより、おもしろがるような口調で口を尖らせた。奥住さんは7組だ。8組と体育が合同なので、そういう場面をよく見かけるのだろう。

「ま、尾島も諏訪も、『大野小隊・ロクでもないんジャー』のメンバーだもんねぇ。大体そんなところか」

奥住さんはフハっと吹き出して、仲の良い2人に「ねぇ？」と同意を求めている。光岡さんも加瀬さんも頷きながら笑っていた。

『大野小隊・ロクでもないんジャー』

ここで説明しよう。

この小隊は大野小名物のお騒がせ5人組の通称で、どっかの戦隊名のように正義の味方では断じてない。むしろショッカーなどの下っ端悪役メンバーというほうが正しい。

「尾島＜オジマヌケ・赤＞」を筆頭に、「桂＜バカツラ・黒＞」、「星野＜アホシノ・青＞」、「諏訪＜オタンコナスワ・黄＞」、「後藤＜ゴトンマ・桃＞」で形成されている、どうでもいいグループの名前なのである。

幸子女史が、「何故センターの赤が小さい尾島で桃のポジションがデカイ後藤君なの」と聞いたら、「つっこむところはそこじゃないでしょ！」とトリオに返された。おそらく悪者オーラの差だろう。最早コメントする気力も失せる。それよりも、ご機嫌なあだ名をもれなく引っ提げてポージングを取る5人の姿を思い浮かべた自分が悲しい。

「もう尾島（あのバカ）の話題はやめようよ～、気分悪いし！」

和子ちゃんは心底ウンザリという表情をしながら思いっきり嫌そうに言うと、「和子は尾島がキライだもんねぇ～」と幸子女史は苦笑いをし、これにはチィちゃんも笑った。

「……けど、荒井さん、気をつけたほうがいいかもよ。尾島って結構モテるから、目をつけられると……厄介」

笑いを止めて囁くように言ったのは、対極線上に数人で固まっている集団の方に目配せした、神経質そうな加瀬さんだった。光岡さんも真顔になって真剣に頷いている。集団の中心には原口美恵（はらぐちみえ）がいた。奥住トリオも大野小出身だが、原口美恵とは特別仲が良い訳ではなく顔見知り程度で、どちらかというとそりが合わない。

「モテると言うより、極一部が勝手に入れ込んでるの間違いじゃないの？」
「……やっぱ原口って、尾島狙いなんだ」
物好きだなという表情を隠しもせず言った和子ちゃんと真剣な表情の幸子女史に、奥住さんは腕を組んで力強く頷いた。
「大野小の間ではすごい有名な話。あんだけあからさまだと周囲にバレバレだし、尾島も気付いている筈なんだけどね～」
「その割には原口に対して態度素っ気ないんだよ」
光岡さんは気の毒そうに肩をすくめて、原口美恵のほうに視線を流した。彼女達の話によれば、原口美恵がバスケ部に入らずにバレー部に入ったのも尾島絡みだと教えてくれた。
「尾島、絶対バスケやると思ってたのにさ。何故かサッカー部だし」
「だから原口もバスケ部入らずにバレー部に入ったんだよ」
「バレー部とサッカー部って、ほら、伝説があるでしょ？」
奥住トリオは顔を赤らめて声をひそめた。
ここでこの話の発端になった、「3年の部長の松野先輩とサッカー部の部長の菊池さんが付き合っている」という話に戻る。
我が中学校にはいくつかの伝説があった。
「伝説」というからにはそれなりに信憑性があるわけで。それが「恋」に関するものだから、年頃の中学生の間で騒がられていた。
その一つが、「バレー部（女）とサッカー部はカップルになる確率が高い」というものだった。しかも「部長同士だとなお確率が高い」というオマケ付きで。
（そんなことのために原口美恵（あのオンナ）は、バレー部に入って1年の部長を引き受けたのか……。ご苦労なこった）

キツイ意見のようだが許していただきたい。大体そんな浮かれた伝説のためにバレー部に入部して1年の部長を引き受けた彼女に、パシリ扱いされる私の身にもなってほしい。女としては共感ができるが、一緒に部活をやる身分としては傍迷惑な話だ。大体私がそんな噂を知ったのはここ最近だった。それを原口美恵は入学当初から伝説の情報をＧＥＴしていた事実もスゴイが、その執念にも頭が下がる。

勝手な私は心の中で、「バレー部（女）とバスケ部（男）はカップルになる確率が高い」というほうが断然良かったと自分に都合のいいことを愚痴った。まぁ、こんなこと考える時点で私も原口美恵の事は言えない。

それにしても……。

「で、でも尾島ってさ、９組の小関明日香（こせきあすか）さんとアヤシイんじゃないの？」

私の何気ない一言に全員の視線がこちらに集中した。同意を求めるよう幸子女史と和子ちゃんに目配せをして、３人で「……だって、ねぇ？」とヒソヒソと囁き合う。

「は？　なんでそうなるの？」

キョトンとした顔の奥住さんが気の抜けた声を出したので、私は慌てて親睦遠足会のミーティングの時の話を説明した。もちろん名前で呼び合ってることも。それを聞いた奥住トリオも顔を見合わせ、「それ誤解だよ」とハッキリ言った。

「あの二人、家が隣同士で幼馴染なんだよ。ていうか、それ以前に小関と尾島は従兄妹同士だし。第一もし付き合ってたら、原口美恵が黙ってる筈ないでしょ」

イトコ？

イトコって、あの「親戚の」イトコ？

あまりにもアッサリと「２人が何故あんなにも親しいのか」という理由が簡潔に返ってきたので力が抜けた。和子ちゃんは「な～んだ、そんなオチだったのか。つまらん」とチビ猿を攻撃できる唯一の情報が全くのガセだったことに、あからさまにガッカリしている。正直私もガッカリだった。

「え～？　なになに？　尾島と小関のこと気になるぅ？」

奥住さんがとんでもないことを言い出したので、「ち、違うって！！」と慌てて否定した。

冗談ではない。

逆に私としては、小関さんには尾島に積極的であってほしかった。それにはそれなりのワケがある。

９組で、部活で、田宮君を見かける度に、何故か隣に小関明日香さんがいるような気がするのだ。その結果、尾島の隣は「原口美恵」ではなくて、「小関明日香」のほうがより好ましいし、ありがたい。

「……そ、そうじゃなくて。できれば、是非ともカップルであってほしかったなぁと思って。だ、だって従姉弟同士って結婚できるでしょ？　問題ないでしょ？」

私のそうであってほしいという願望と誤解を解こうとしている必死の言い訳を、奥住さんは何を勘違いしたのか、「まぁまぁ照れるな！　とりあえずそういうことにしておいてあげるから」と言って肩をポンポンと叩かれた。和子ちゃんと幸子女史は苦笑いをしている。私の台詞の本当の意味を知っているからである。

「安心していいよ、荒井！　小関は完全なシロ！　それより尾島のこと、知りたいでしょ？」

「……」

（……真剣にそんなこと、どうでもいいんですけど……）

奥住さんは私の内なる叫びも知らずにニヤニヤ笑いながら、この当時なら水素爆弾並みの（現代ならテポ〇ンか）情報を投下した。

尾島（アイツ）にはね、好きだった子にこっぴどく振られた過去があるんだよ。

真夏の合宿の夜～後編～（前書き）

少々ヤンチャな暴れっぷりシーンや軽いイジメの描写があります。Ｒ－１５には引っかからない程度だとは思いますが…。設定上外せませんので、ご了承下さい。

真夏の合宿の夜～後編～

奥住さん達が小学校5年の夏休み明けに、大阪から一人の女の子が、尾島率いる『ロクでもないんジャー』や原口美恵（はらぐちみえ）のクラスに転校してきた。

その転校生は色が白くてスラリと背の高い、可愛いというより中性的で綺麗な女の子だったそうだ。

残念ながらその転校生は山野中にいない。彼女は1年くらいしか大野小におらず、再び転校してしまったからだ。

尾島は転校してきた彼女を、ある日を境に何かと目の敵にしていた。そのある日と言うのが、体育でバスケがあった日で。男女混合試合をしたときに、尾島と原口がいるチームと対戦していた転校生のチームは、尾島達を完全に封じ込めて大勝してしまったのである。

その転校生は天才的にバスケが上手かったのだ。

「尾島を負かした」という情報を聞きつけた小関明日香（こせきあすか）さんは、特別クラブのバスケ部に彼女を誘った。

彼女は快く入部したが、尾島達や原口美恵達のイジメ同然の心ない態度で一週間も経たずにバスケ部を辞め、その延長でクラスでも孤立した。運悪く彼女に好意的だった小関明日香さんは、違うクラスだったから。

学年で一番バスケが上手かった尾島は、そのプライドをズタズタに傷つけられた。

それからというものの、なにかとその転校生のことを「関西弁をしゃべる」だの「男女」だのと言って難癖をつけた。奥住さん達から見れば、尾島達はその転校生を目の敵と言うより「キライキライも好きのうち」もしくは「好きな子に振り向いてほしくて、ついついイジメてしまう典型的な素直になれないアホガキ」丸出しだったらしい。もう、それはそれは見てる方が憐れに思うほどの熱心さで。

それを気に入らない原口美恵とその取り巻き達が、嫉妬&対抗心メラメラで転校生を無視しハブ攻撃をした。そのトバッチリを受けないように見て見ぬ振りするをする、その他のクラスメート達。また、担任がひ弱そうな若い新任の先生だったものだから、クラスは最悪の状態になり、酷い有様だったという。

大人しい転校生はどんな仕打ちにも黙って耐えた。

私にはその気持ちがわかりすぎるくらいわかった。言い返せば相手が余計に調子に乗ってくる奴らだと分かっていたのだろう。しかも「関西弁」などで対抗しようものなら、これでもかとそこを突いてくるメンバーだ。

しかしそのイジメも、1年も満たないうちに幕が閉じる。彼女は再び大阪へ転校することになったのだ。

梅雨が明け、茹(う)だるような暑さが始まった、6年の1学期が終わる終業式。

その事実を先生から告げられたクラスメートは驚愕し、なんとなく気まずい雰囲気にシーンとなった。その日の帰りの会まで転校する事をずっと黙っていた彼女は、一言「お世話になりました」と言っただけで、あとは無言だった。

黙って帰りの支度をする転校生に、複雑な思いで見送ることしかできないクラスメート達。かろうじて頼みの綱である担任も不在なせいで、思いっきり暗雲立ち込める空気の中。

何を思ったのか、尾島は黙って教室を出ようとした転校生の背中に大声で、「なんで転校すること、言わなかったんだよ!」と詰(なじ)った。クラスメートも固唾を飲んで見守る。

突然好きな女の子が居なくなってしまう悲しさ。しかも「さよなら」も言わずに。

尾島の気持ち、わからなくもない。

しかし彼女にしたら「なんで転校すること、言わなかったんだよ!」と詰られたところで尾島の行動を理解できないし、したくもないだろう。

彼女は振り向いて暫く背の低い尾島を見下ろした後、他のクラスメートを見回し、俯いた。俯むいた顔には、転校してきた時には短かったサラサラな髪が彼女の表情を隠すように覆っていた。次の瞬間、頭を上げたそこには、うっすらと涙を浮かべながらも怒りに燃えた瞳と鬼のような形相があった。綺麗な分だけ、それは恐ろしかったらしい。

『……なんでアンタらに転校のこと言わなアカンの……。黙って聞いてりゃあ、調子に乗ってあんだけイジメくさって、ようそこまでえらそうなこと言えるわ！　それに今だから言うけどな、このドチビ！　そないにバスケで負けたのが悔しかったなら、つよぉなって、男らしくバスケで勝負してこいや！　腐った女みたいに口だけはペラペラとしょーもないことを言いよってからに……二度とその顔私の前に晒すな！　あんたら全員、今度私の前に現れたりしたらっ、シバいて道頓堀に沈めたるっ！！』

転校生は華麗な容姿とは程遠い「横山ヤ●シ」も真っ青なドスの効いた声で、一年間の鬱積を晴らすかのように一気に怒鳴り散らした。そこには「大人しくてなにも抵抗しない可憐な転校生」の姿は何処にもない。

あまりにも衝撃的で声も出せず呆然としている、尾島とクラスメート達。

シーンとした空気を破った鋼の心臓の持ち主は、『ロクでもないんジャー』の中でも一癖あって雰囲気の怖い&悪っぶている、桂君だった。

『……はぁ？　なんだよオマエ、急にキレてさっ。バカじゃねぇの？　大体オマエだってさ、』

ガンっ！！

ガタンッ、ガシャーン！！

桂君が文句を言い終わらないうちに、派手な音と女子の悲鳴が教室に響き渡った。

なんと彼女はスカートにも関わらず、傍にあった机を見事な長い脚で蹴り飛ばすというトドメを差し、ギロリと睨んで桂君を黙らせたのだ。

『「オマエ」って、気安く呼ぶなやっ！　このハゲっ！！』

ホンマ、ガキくさいアホな連中ばっかで、かなわんわっ。

浪花の転校生はそう吐き捨てると「清清した」と言わんばかりにスッキリとした表情でクルリと踵を返す。最後の最後でＵＳＡ並みのハリケーンをブチかまし、尾島に「大失恋」という苦い置き土産を残して教室を退場した彼女は、肩を怒らせながら大野小を去った。

＊＊＊＊＊＊＊

「……と、いうわけよ」

奥住さんが人差し指を得意そうに振りながら話を締めると、７人は複雑な視線を絡ませた。まるでその現場に居合わせたかのように、全員ダンマリである。

「……転校生、スゴイし。けど、ちょっと切ないねぇ」

最初に幸子女史がしんみり呟いたのに対して、すぐに気を取り直し「自業自得でしょ！　本当お子様だわ」と手痛い意見を返したのは和子ちゃんだった。

私も尾島と転校生の別れのエピソードには、和子ちゃんと同意見

だ。気の毒だけど。

尾島達クラスメートに言い訳の余地はない、と思う。が、もしかしたら、彼女にも何か問題があったのかもしれない。どちらが悪いかというのは愚問だ。それこそ過ぎてしまったことは、どうしたってやり直しがきかないのだから。

それでも。

彼女が一年間受けた仕打ちを思うと、尾島に同情の余地は無いと思う私は、冷たいだろうか？

恋というのは厄介で、人の心はとにもかくにも難しい。

（小説を読んで恋に恋をして空想に耽っている方が楽だし心が傷つかずに済むのかなぁ。それで満たされるのかと言われれば、「否」だけど）

「大体ねぇ、そんな手痛いしっぺ返しをされたっていうのに、尾島（あのバカ）、心を入れ替えるどころか反省した形跡が全く見られないっていうのはどういうことよ？　全然ガキのまんまじゃん！　第一同級生なんて子供だよ、子供！　全然良さがわかんない。やっぱ恋する相手は年上じゃないと！　その点少年隊のヒガシなんて最高！　ね、チィちゃん？」

和子ちゃんは目をハートマークにさせながら「尾島なんてどうでもいい」と言わんばかりにサラッと話の方向を変え、熱烈ファンである「少年隊」がいかに素晴らしいかといういつもの持論を披露した。チィちゃんも少年隊ファンなので「もちろん」と笑顔で頷いている。

その後は「1年の男子で誰が一番カッコイイか」という議論になり、これには白熱した意見が飛び交った。結局「同級生はオヨビじゃない」という和子ちゃんを除いた全員が、「1組のサッカー部の佐藤伸君が一番素敵」と意見が一致したところで、議論は終了した。

タイミング良いのか、見回りに来た岩瀬先生が「早く寝ろよ！明日しごくぞ！！」という声が廊下に響いた。

全員各布団に戻り、教室の電気が消え、明日の練習の為に目を閉じた。でも、なかなか眠気は訪れてはくれない。尾島の苦い失恋話を聞いたせいなのか、それとも肝心な自分の恋が「進展の兆し全くなし」と落ち込んでるせいなのか。

閉じた瞳を開いて教室の窓から見上げた夜空に描くのは、愛しい人の笑顔。

（田宮君……全然顔見ないなぁ）

夏の星座に並んで田宮君の爽やかな笑顔が、いつのまにか尾島の顔に変わった。

（出てくんなよ！！　……ったく、サッカー部はよく練習一緒になるのに、なんでバスケ部と練習かぶらないかなぁ？！）

夏休みに入ってから田宮君の顔を一度も見ていないという事実に気分はもやもやして一行に晴れなかった。同じ体育館を使うから練習が重なることは皆無なのはわかっていても、せめて前後で練習が重なってもいいじゃないかと文句を言いたい。女バレの練習の前後は男バレとかバトミントンかとか卓球とか体操部ばかりで、バスケ部に当たったことが一度もないのだ。

（神様のイジワル！！）

群青色の空に向かってしっかり文句を言ったところで、瞼が重くなった。

＊＊＊＊＊＊＊

余談だが、部活の合宿はこの年を最後に無くなってしまった。

何故なら、私達の後に女バスが合宿をしていた時、不審者が中学に侵入して警察沙汰になったからである。

２年の先輩が深夜にトイレで起きた時、夜中の学校の恐ろしさに友達を起こしてトイレまで付いてもらった時のことだ。

扉をしつこく叩く音と呻き声が階下から聞こえてきた。抜群のロケーションなだけに、女バスの２年生達は悲鳴を上げて自分達が寝ていた教室に戻る。同時期に同じ物音をバスケ部顧問も聞いていた。声のした方に向かうと、ベロンベロンに酔っ払ったオヤジがクダを巻いて扉をガンガン叩き文句を言っていたのだ。すぐに警察に通報され、泥酔オヤジは２人の警官に抱えられながら学校から連れ出された。まだ酔っ払いだから良かったものの、これが刃物を持った変質者だったら冗談では済まされない。男子ならまだしも年頃の女子中学生を預かる学校側としては、不祥事があってはならぬと判断したらしく、泊まり込みの夏合宿は一切禁止になってしまったのだった。

真夏の合宿の夜～後編～（後書き）

ここで関西在住の乙女の皆さまにお詫びを申し上げます。…という私も実は関西在住だったりなんかします。

笹谷さんの恋愛事情～前編～

夏休みが明けて体育祭が終わると、季節は秋へと移り変わっていった。

次のイベントである文化祭の話題がボチボチ出てきたある日の放課後。

バレー部の部室である2年1組の教室の窓からは、灰色の空が見える。暑くもなければ寒くもない穏やかな気候だが、湿った臭いが僅かに感じられた。幸いにもまだ雨は降り出してはいない。朝見た天気予報では、夕方から夜半にかけて雨になるのかもしれないとアナウンサーが言っていた。もうそろそろ振り出す頃だろう。窓からはテニス部のボールを打っている音や後輩達の掛け声が聞こえてきた。

そんなバレー部の部室に、生徒が2人。

私と同じバレー部の1年生である「笹谷（ささや）さん」は、貴重品等の荷物見張り当番として、窓際に肩を並べて座っていた。

ハッキリ言って笹谷さんとは最近までロクに話もしたこともなかった。何故なら笹谷さんは「原口美恵（はらぐちみえ）」の友人の一人で、その原口美恵と仲のよろしくない私とも当然犬猿の仲だったからだ。

それがどうしたことか。

夏休み明け頃、笹谷さんは原口美恵とケンカをしたらしく、原口グループを抜けた。彼女は奥住トリオの一員である「光岡（みつおか）さん」と一緒のクラスでもあるので、奥住トリオといることが多くなった。その関係で最近私や和子ちゃんとも仲良くしているというわけである。……といっても、急に気安く話ができるほど距離が縮まったわけではない。笹谷さんはいつ原口美恵と元のサヤに戻るかわからないし、ここは付かず離れずが無難だと顔には出さずとも心の中で身構えていた。笹谷さんはそんな私の心を知ってか知らずか、私達の

グループに入っても実際私とは特に親しく口を利くことも無かった。あんだけあからさまに原口美恵から敵対心を向けられている私に、「気の毒だね」とも、その原因になっている「チビ猿」のことも、原口美恵の事は悪口どころか話題にもしない。

そう、この時までは――。

「荒井さんのところ、何やるの？」

笹谷さんは爪を一生懸命磨きながら顔を上げずに聞いてきた。一瞬何の事かわからず、英語の単語の意味を調べていた辞書から頭をあげ、眼をパチクリしながら笹谷さんの方を見る。

「……え、何って？」

「ほら、文化祭。確か内容の提出、締め切り今日までだったでしょう？」

「……あぁ、うん。一応決まったよ。け、結構揉めたんだけど……」

私はその時の様子を思い出しながらぎこちなく笑うと、笹谷さんは爪にフゥっと息を吹きかけ、こちらを見た。

笹谷さんは顎より少し伸びているサラサラで綺麗な茶色の髪をワンレンにしている。確か先輩に「少し髪が茶色いね」と注意されていたが、ギリギリラインなので、親の承諾書を提出しお咎めなしと聞いた。背は私と同じくらいだが、彼女はスラリとスタイルが良い。切れ長で奥二重の瞳も髪と同じ茶色。どう見ても私達と同じ中学１年には見えず、大人っぽい。そんな彼女は茶色い瞳を黒板の方に彷徨わせた後、コクンと息を飲んでニィっとした笑顔を作った。

ガタン

爪磨きを机に置いて椅子を座り直した。

「……あのね」

「？」
「ごめんね、荒井さん」
「えっ？」
「あの、一度ちゃんと謝りたかったんだ。それだけなんだけど……えーと、本当にゴメンナサイ」

急に頭を下げ殊勝に謝られてビックリした。
文化祭の内容とは違う言葉に一瞬なんのことだかわからなかったが、彼女の言いたいことをすぐ理解した。おそらく今まで私に対して取った態度の謝罪だろう。特に嫌がらせを受けた訳ではなく、許すも何もないのだが。ただ一言素直に謝られればこちらとて悪い気はしない。私は警戒心を解き頷いて少し微笑んだ。笹谷さんも私の笑顔の意味がわかったのか、照れ臭そうに「ゴメンね、急に」と笑った後、話題を元に戻した。

「それで、文化祭。８組は何するの？」
「あ、うちの第一候補は劇をやることになって、」
「え～！　何やるのぉ？」
「あの、その、映画知ってる？……『バック・トゥ・ザ・フューチャー』……」
「え？　映画？　……名前だけは聞いたことあるような……」

イマイチ理解をしていない感じの笹谷さんを見て、「そうだろうなぁ」と心の中で苦笑した私は、得意分野である洋画の話題を喜々として説明した。

『バック・トゥ・ザ・フューチャー』

それは近年公開され爆発的に大ヒットした映画名である。
マイケル・Ｊ・フォックスが演じる主人公こと『マーティ』が、

思わぬアクシデントで友人である博士が作ったタイムマシンに乗りこんでしまい、過去に行ってしまうというお話。現代に戻るまでのハラハラドキドキ感といい、自分の存在を消さないように両親をカップルにさせる奮闘ぶりといい、アイデアも斬新ながら音楽もイケてるという非の打ちどころない作品。またタイムマシンとして改造された『デロリアン』が、シルバーボディのガルウィングという超クールな車なのだ。（美千子談）

笹谷さんは、「そんな話だったんだ。名前だけは知ってたけど、以外～」と感心して頷いている。それもそうだろう。この年頃の女の子が洋画を映画館まで足を運んで見る人は少ないと思う。親、兄や姉に大の洋画ファンがいるならまだしも。女子中学生がファンになる対象の多くはジャニーズなどの「アイドル」であり、映画はその「アイドル」が出演していたものや、薬師丸ひろ子や原田知美が演じる「角川映画」の邦画か、アニメ映画が人気の時代であった。もちろん洋画もヒット作はあったが、視聴対象年齢は大人向けばかりだったように思うし、しかも現代のように溢れかえるほどの宣伝と公開数があった訳ではない。上映館も総合娯楽施設に隣接している大型映画館などではなく、圧倒的に小さかったものが多かったし、しかも今のように綺麗ではなかった。そういう御時世もあって、女子中学生が外国のアクターに熱を上げる子は自然と少なかったように思う。友達になった子に洋画の話題を出しても、「？」マークが返って来るだけだった。現に目の前の笹谷さんも、「マイケル・Ｊ・フォックス」というアクターについての説明をしても、おそらく興味も湧かないし、わけわからないだろう。

「あ……いや、でも、決まっただけで。体育館の舞台が使えるかは今日の抽選次第だけど……」

「そっかぁ。なら、抽選会、当選するといいね。それにしても荒井さんって、映画詳しいんだね？　好きなんだ？」

「うん！　今はこの人達に夢中でさ」

いそいそと雑誌の切り抜きが挟まっている下敷きをとり出す。海外アクターの切り抜きが丁寧に並んでいる「メイドイン美千子」の力作だ。自慢じゃないが、中学進学と同時に通い出した知り合いの英語塾の先生から入手した、アメリカのアイドル雑誌の切り抜きまであった。そこには、なんとこの時点ではまだ日本で認知度が低い（ほぼ無かったと言ってもよい）ブレイクする前の「リバー・フェニックス」が微笑んでおり、当時としては激レアものだったと確信している。そこを力強く指さす。

「このひと！　これから絶対人気出るから！　すっごいファンなんだぁ」

「へ、へぇ……そうなんだ。……けど、文化祭さ、そんな難しそうな内容を演じるの、大変じゃない？　荒井さんがアイデアを出したの？」

「大丈夫？」と眉間に皺を寄せる笹谷さんに、「え？　い、いや、違う！　私じゃないよ」と慌て手を振りながら否定した。

＊＊＊

数日前の「結構揉めた」ホームルーム。

文化祭というのは必ずなんらかのテーマがある。もちろん我が山野中学校も例に漏れずテーマを与えられていた。

『明日へ繋がりゆく日々＜過去・現在・未来＞』

今年のテーマがそれだ。

文化祭の催し物をなににするかと話し合うホームルーム。

2学期になっても、通路を挟んで私の斜め後ろの席に落ち着きやがったチビ猿は、「どうせなら目立つ劇がいいんじゃね？」と意気揚々と無責任な発言をした。体育館を使う劇の枠は各学年1クラスだというのに。

尾島は『はじめ人間ギャートルズ』を押した。「なんだよそれ？！」という周りの呆れた意見にも関わらず、尾島は更に一言こう付け加える。

『オレが「ゴン」をやってやるから、宇井、「ドテチン」を頼んだぜ！　心配すんな、マンモスの肉、分けてやっから！』

メデたくチビ猿と遠い席に離れた和子ちゃんに対して、久々五分刈りに戻った頭を振り返り堂々とサムアップで合図する自称「ゴン」こと尾島（アホザル）。教室に冷やかしの声やら笑いが響く中、綺麗にセットされた自慢の髪を揺らす勢いで立ちあがった和子ちゃんは、すかさず冷めた声で吐き捨てる。

『言いだしっぺの尾島に、一番責任の重い総監督を希望します！！』

もちろん、「尾島よ、ふざけてないで、真面目に考えろ！」という梨本（リポーター）先生の一喝で、『はじめ人間ギャートルズ』はアッサリと却下された。当然だろう。大体文化祭のテーマと全然接点がない。かろうじて「過去」という部分が、かぶっているだけではないか。

そこで最近覚えの新しい『バック・トゥ・ザ・フューチャー』が候補に上った。意外なことに、この名前を上げたのも尾島だった。担任のリポーターも担当教科が教科だけに、「おお？！」と窓に寄りかかっていたヤル気のない身体を起こして、嬉しさを隠せない様子だ。

（類人猿、ナイスアイデア！！）

大好きな映画の名前が思わぬ人物から飛び出し、私も興奮してし

まった。自称洋画ファンとしては大賛成だ。映画の内容も文化祭のテーマからかけ離れている……訳でもない（？）ので、そのまま勢いに任せて、「1年8組版・『バック・トゥ・ザ・フューチャー』」と決定した。

＊＊＊

「……そっかぁ、尾島（マヌケ）かぁ。相変わらず無責任なヤツねぇ。どうせ諏訪（オタンコナス）も面白がって『ヤレヤレ！』って言ったんでしょ？」

ギクリ。

図星だと顔に書いてある私に、笹谷さんは「プっ」と吹き出し、キャハハやっぱり、と笑いを大きくした。

「アハ、アイツら、全然成長しないし。まだバカばっかりやってるんだ」

笹谷さんは笑いが廊下に漏れるとマズイというように口を手で覆い、笑いを堪えていた。確か彼女は5・6年の時、原口美恵と共に尾島達『ロクでもないんジャー』と同じクラスだったと聞いた。その当時と重ねているのか、面白くて仕方がないというように身体を震わせている。

「フフっ、あ～おっかしぃ！　……あ、知ってると思うけど、私、尾島や諏訪と小六の時一緒のクラスだったの。なんとなくその姿が目に浮かぶんだけど、尾島がねぇ～」

ふーん、そっかぁ。

やたら「納得」と言いたげな言葉を連発する笹谷さん。頬に掛る

茶色い髪をそっと指ですくい、パラパラっと落とすと「あ、枝毛」と言って、指で枝毛の髪を摘みながら学生カバンのポケットに手を伸ばして小さいハサミを取りだした。

「……でもさ、なんか、尾島が映画の名前を出したの、わかる気がする……」

そっか、そんなに……なんだ。尾島は。

そっと枝毛を切りながら呟いているので、自然と声は小さくなり聞き取りにくい。切った枝毛をハラリと床に捨て、茶色い瞳をキラリと輝かせながらこちらをしっかり見た。私は訳がわからず、「何が好きだって？　映画を？」という顔で笹谷さんの目を見る。でもそんな話聞いたことがない。

「えっと……尾島って、映画あんまり好きじゃない筈なんだよね？前、みんなで一緒に映画館行ったときに、アイツだけ完全に熟睡。本人も苦手だって言ってたし。それが急に『バック・トゥ・ザ・フューチャー』だなんて……」

ホ～ント、可笑しいんですけど。

なんでだろう。

まだニヤついている笹谷さんの意味深な視線と弧を描いている口元を隠すように当てている拳を見て、心臓の鼓動が僅かに速くなる。正直この空気は居心地が悪い。視線を逸らしたいのに逸らせない。この先、笹谷さんが言う言葉は、ややこしくなるような、冗談で済まされないような……気がして。嫌な予感がした。

笹谷さんの顔の向こうに見えるのは、僅かに開いている教室の窓。

そこから聞こえてくる生徒達の声が二人きりの教室に滑り込んでくる。

空は相変わらず灰色だが、雨はまだ降り出してはいない。

笹谷さんの恋愛事情～前編～（後書き）

新キャラ、笹谷さん登場です。

笹谷さんはこの後浮かべる辛そうな表情とは無縁な悪戯っぽい顔で、ニヤリと笑っている。その顔つきは、心なしかチビ猿に通ずるものがあり、背筋に悪寒が走ってしまった。

「……少しは成長したのかな、あのマヌケは」

「……」

スッと真面目な顔に戻り感慨無量な面持ちで窓の方に視線をやる笹谷さん。その横顔を見ながらなんとなく落ち着かない様子の私。

人との縁って本当に不思議だ。

昨日までは交わす言葉が少なかった筈の人とこうして親密に会話をしている。しかもその内容は、ちょっと込み入ったものになりそうな雰囲気だ。

「ま、小学校の時よりかは格段の進歩か。方向性は間違ってないけど……」

マダマダかな。

さっきから笹谷さんは独り言のような、そうでないようなことを言い、「本当にお子様よね？」と私に同意を求めるように、こちらを向きながら苦笑混じりの親しみのこもった笑みを向けた。男なら確実にダラしなく顔が緩む可愛らしい顔を向けられたところで、正直なんと答えていいかわからない。

「しかも荒井さん、『桃田（ももた）』に少し似てるしさ。特に横顔、時々ドキっとしちゃうんだよね」

（え？……桃田？）

何処かで聞いたことがあるような名字……だった筈だが、思い出せない。それに、妙になんか引っかかる。モヤモヤした煙のようなものが頭に中を立ち込めていく。

「それよりね……荒井さんって、好きな人いるでしょう？」

『桃田』という名前が気になって、「何処で聞いた名前だっけか？」とウンウン頭を捻って考えていたら、思わぬ方向から剛速球並みの質問が頭を貫通し、思考が止まった。

頬が徐々に熱くなっていく。おそらく顔は真っ赤だろう。

某クイズ番組だったら、笹谷さんは「はい正解！」と机を叩きながら言うキンキンの一声と共に、もう1段階上の席に座れるほどズバリな直球。これが数年後の私の性格なら、「もちろん！　リバー・フェニックスに決まってるジャン、ＹＯ！！」とラッパーよろしく手を前に突き出しポージング付きで即答できるが、この時は「山野中学校1年8組出席番号2番の控えめな女子中学生」でしかなく、この頃は「ラップ」の「ラ」文字ですら世間での認識度は超低い。

だからといって、この話題は避けたいとハッキリとは言えないし、オマケに笹谷さんとはお互い蟠り（わだかま）が取れたと言っても、ついさっきの話だ。すぐに、

「私の好きな人は、1年9組のバスケ部の田宮君です！」

……なんて堂々と宣言できるほど進展したとは正直思えない。それに好きな人の名前は、まだ和子ちゃんと幸子女史にしか教えていなかった。

「……あぁ、いいのいいの！　別に無理矢理聞こうって訳じゃなの。けど、好きな人って『尾島』じゃないでしょう？　むしろ苦手な感

じ？」

笹谷さんの言葉にハッとして顔を上げた。

今まで「尾島となんかあるでしょ？　アヤシイ～」とふざけて言われたり、仲を疑われて睨まれたことはあれども、「尾島のこと、好きじゃないでしょ」と正面から理解してくれたのは和子ちゃん以来だった。思わず盛大に頷こうと思ったが、彼女の表情が寂しそうな苦いような感じだったので引き攣った笑みしか出来なかった。

「あ……えー、うん。ど、どちらかと言えば苦手、かもしれない……」

笹谷さんは言いにくそうに言葉を濁している私に、気分も悪くせずに頷きながら「そっか」と息を吐いた。例え私にとって尾島は嫌な奴でも、笹谷さんにとっては元クラスメート。映画だって見に行くほどの仲間みたいだし、もしかしたら男女の域を超えた大親友かもしれない。そんな彼女の前で遠慮なく「そりゃもう、超絶苦手っつうかぁ、むしろ嫌いの域なんっスよぉ（笑）」と軽々しく肯定するのは憚（はばか）られた。

でも。

こうして笹谷さんに「私と尾島はなんでもない」と認識してもらえたのは喜ばしいことだ。そういう噂が広まれば少しは「原口美恵（はらぐちみえ）」の心も穏やかになるだろう。いや、是非ともそうなってほいしい。そうすれば私のバレー部でのポジションも過ごしやすくなると、知らず知らずのうちに都合の良い計算が働いてしまった。この際、笹谷さんから原口美恵にその旨を伝えてもらえればもっと確実なのだが、生憎彼女達は絶交中である。だからこそこうして笹谷さんとも話す機会もあったのだが……。

「……やっぱ、そうだったんだね。ま、あいつの性格じゃぁ、ねぇ

？」

本当に仕方がない連中ばっかだね、と肩を竦めて溜息をついている笹谷さん。その姿は本当に厭きれているという訳ではなく、しっかりものの姉がどうしようもない弟を見守るような感じだ。

「本当『ロクでもないんジャー』のメンバーってどうしようもないから。ニブイというか、ホント子供と言うか……。今ならわかる、『桃田（ももた）』の言うこと間違ってない、ガキくさいアホな連中かも」

その瞬間、頭の中で笹谷さんが言ったある名前がパチンと弾けた。

『桃田』

……そう、思い出した。彼女の名前は確か「チビ猿」に苦い失恋を体験させた浪花の転校生の名前じゃなかったか。

（しかも笹谷さん、私に似てるって言わなかったっけか？）

「……荒井さん、どうしたの？」

おそらく険しい顔をしながら固まっている私に向かって、笹谷さんが訝しげに聞いてきた。「なんでそんなに顰め面なの？」と軽く眉根を寄せている彼女に、慌てて「なんでもない」と手を振って答える。

「さ、笹谷さんはどうなの？　誰か好きな人はいるの？」

『桃田』という名前は気になったが、それを聞けば尾島が失恋したことを知っていると笹谷さんに白状するようなものである。それに尾島のことに興味があると誤解をされたくないし、話題から逸れる

チャンス！　と、焦りながら逆に笹谷さんに話題を振ってみた。

「……え？」

笹谷さんは慌てた様子でどもった。茶色い目がキョロキョロと忙しなく動きだし、そわそわしている様子。

（……あ、ヤバい。マズったか？）

こちらこそ笹谷さんのことは言えないらしい。今日親しくなった地味な私に、恋の話を突っ込まれるとは思わなかったというような感じだ。答えたくなければ答えないでいいし、曖昧に濁されても構わないと、「あ、ごめんね、やっぱり今の無し」と訂正しようとしたら、以外にも笹谷さんは息を整え、ガッツリ乗って来てくれた。

「あ……うん。実は……ね」

笹谷さんは否定もせず、曖昧に濁しもせず、ハッキリと好きな人の名前を言った。

その名前を茶色のサラサラヘアと涼しい目元を持つ、大人びた笹谷さんの口から聞いた時は、耳を疑い思わず「えっ？」と最大に眉を顰めて聞き返してしまった。

『桂　龍太郎』

お気付きの方もいるだろう。彼は『大野小隊・ロクでもないんジャー』の一員であり、クールで一匹オオカミを彷彿させる黒のポジションを名乗る人物である。

「通称・バカツラ」

その通称を呼べる人物は極々一部に限られている。私の知っているメンツでそのあだ名を堂々と言えるのは、「2人しかいない」と

言えばおわかりいただけるだろうか。もっとも、彼は既に『大野小隊・ロクでもないんジャー』を脱退しているというのが正しい。

桂君は入学してから一週間も経たずにその名前を校内に轟かせ、知る者はいない程目立っていた。

それも悪い意味で。

入学式の翌日から髪と細く整えられた眉を黄金色（こがねいろ）に染め、制服は規格外の代物をお召しになり、極めつけは同じ匂いのする素行のよろしくない上級生との派手なお戯（たわむ）れ。仲間が駆けつける前にその上級生を思いっきりボコってしまった。後藤君ほどのガタイ（なんと１８０センチ！！）ではないが、決して名前負けしていない筋肉質な体格と背の高さ、さらに空手の段を持ってらっしゃるヤンチャな桂君には、それ相応の大物がバックにいることもあり、さらに「不良」という肩書に拍車をかける。

そのバックの名前は『山野中の鬼夜叉（おにやしゃ）』。

この付近を統括している「伝説の裏番」と呼ばれ、裏番どころか、むしろ堂々と表番だよ！……と言いたいほど、『山野中の鬼夜叉』の肩書を持つ「桂寅之助（かつらとらのすけ）先輩」は、なんと桂君の三つ年上のお兄様でいらっしゃったのだ！　在学当時、「山野中きっての史上最悪のワル」とまで呼ばれた桂先輩に、教師も親も手を焼いていた……どころか丸焦げだったようだ。その桂先輩は弟である桂龍太郎君が入学するのと入れ替えに無事山野中を卒業され、その後は「美園工業高校」と言うおよそ名前とは程遠い、荒くれ者が多く進学する高校に通っていらっしゃるとのことだ。

『山野中の鬼夜叉』を身内に持つ、桂龍太郎君。

中学に入学して早半年。ほんの少し前はランドセルをしょっていた人物が、数いる先輩方を押しのけて山野中のボスを若干１３歳で襲名。「オマエ、本当に中１かっ？！」という無敵な彼の目の前には、敵はおろか、開けて道ができる今日この頃である。

そんな強面の桂君とお互い廊下で「よぉ！」とか「おぅ！」とか、なんの躊躇もなく挨拶を交わす尾島を含めた「ロクでもないんジャー」の姿に、私を含めた周囲の生徒達は畏怖と尊敬の眼差しを送るのであった。

笹谷さんの恋愛事情～中編～（後書き）

某クイズ番組の名前、わかったかな？

笹谷さんの恋愛事情〜後編〜

（笹谷さんと桂……君？）

どこをどうしたらそうなるのだろう？　いくら小学校の時に同じクラスだったとはいえ、こんな大人っぽい綺麗な笹谷さんが、どうしてあの桂君なのか？　クールというところは二人とも共通してるような気もするが、笹谷さんにはどちらかというともっと大人っぽく落ち着いた人が合う気がする。不良と言うより頭脳明晰な大人……そう、年上がシックリくる。

思いっきり不可解な顔をしている私に、笹谷さんはバツが悪そうに目線を下げた。

「あ……桂君って、あの桂君……だ、よね？」

あの桂君ってなんだよ！　と自分で言っておきながら自分でツッコむ、荒井美千子。

笹谷さんは顔を伏せたまま頷いた。今度は笹谷さんの方が顔を真っ赤にしており、その姿は見た目以上に乙女で、むしろ彼女のようなクールな子が真っ赤にしてるとあまりの新鮮さにグッとくるってもんである。

（……しかし、桂君……）

恋は十人十色。人それぞれ顔が違うのと同じで多様であり、自由だ。いや……自由なのだが。

（何故、桂君！？）

「あ、アイツ、すごい噂が飛び交ってるけど、本当は違うんだよ？　上級生を殴ったのも、多勢に無勢で仕方なかっただけでっ！」

私がよほど歪んだ顔をしていたのだろう。笹谷さんは桂君の印象を少しでも良くしようと、頬を赤く染めながら力説してくる。そんなに彼の事が好きなのか。彼女の一生懸命な説明をとりあえず神妙な面持ちで聞いた。

彼女の話だと、以外にも桂君は友達思いで、弱い者には手を出さないらしい。裏番長であった彼のお兄様も、見た目より気さくな人物だという。

（いやいやいや……桂兄弟の長所な一面を訴えられたところで、なんの特典にもならないし。それに私には一生縁がないと思う。いや、ここは是非とも縁が無いことを祈りたい！）

例え笹谷さんの言うことは本当だとしても、「火のない所に煙は立たぬ」という諺があるではないか。それに、嫌な噂が立っているのは事実であって、その噂の中には女の子が眉を顰めるような内容も含まれていた。それを彼女は知っていて「好き」と言っているのか。そう考えていると、笹谷さんは私の心を読んだのか、急に顔を曇らせ始めた。

「……本当は優しいんだけど……ここ最近なんかオカシイの。なんだか素っ気ないし……。それに……晴美（はるみ）先輩との噂が立ってるでしょう？」

笹谷さんは眉毛をハの字にして目を潤ませている。まさにその「噂」を考えていただけに、こちらもどう返していいか困ってしまった。私は見た目辛気臭い雰囲気のわりには、そういう雰囲気になることが苦手だ。彼女の悲しそうな表情を吹き飛ばすように明るく言った。

「や、でも、う、噂でしょ？　実際に3年の晴美先輩と一緒にいるところ見たことないし！　あの人、色々な男子と噂があるし、ましてや付き合ってるなんて……ねぇ？　そ、素っ気ないのも、笹谷さ

んのことを思って変な噂が立たないようにしているんだよ！　ききききっとそうだよ！」

どもりながらも慌てて捲し立てた私に、笹谷さんは寂しくクスっと笑いながら「ありがとう」と言った。

「……でも、3年の晴美先輩と付き合っているのは本当かも。これ内緒だけど、夏休みに美恵……原口なんかと桂の家に遊びに言ったら、晴美さんと家から出て来たの。私達、そりゃハッキリ付き合おうって言った訳じゃないけど……上手く言ってるかと思ったのに……」

だって、キスまでしたのに……。

ドッカーン！！

あまりの衝撃的な告白に目を剥く美千子、乙女な13歳。

（つーか、中1で実際キスした人物を初めて見たよ、オイ！！）

そんなこと、今日仲良くなったばかりの人に言っていいのだろうか？！　ということを目で訴えても、当の笹谷さんは俯いたままだ。

笹谷さんとのことはさておき、確かに桂君は3年の晴美先輩と恋仲だという噂が飛び交っていた。またこの晴美先輩が、この年頃には珍しい程の恋多きクセ者で。学校では1、2を争う、いやおそらく学校1の色気とボディを持つモテ女だったろう。アダモちゃんのような純情な美少女、天然な可愛さではなく、自分を良く知り計算された可愛さ。不良ではないけど真面目でもない、ちょうどよいポジションをキープしつつ、イケてる女を演出。3年になってからは最上級生という立場と桂君の彼女の位置を確保したので、やっかみによる女生徒からの嫌がらせは無くなったようだが、1、2年の頃はそれはひどかったらしい。

そんな学校1のモテ女こと晴美先輩と裏番長な桂君。

二人の付き合いは親密であり、『毎度おさわがせします』も真っ青な、「中学生にはまだ早いんじゃないか」と真っ赤になるような、「そんなところまで行き尽くしているんだぜ、俺達！」な最強カップル。

（それが本当なら桂君は二股をかけたということか……。晴美さんと「ムフフ」なことをして、一方で笹谷さんともキス……）

「……私、本気だったのにな……」

いつの間にか笹谷さんは顔を片手で覆いながら涙声で訴えている。その姿を見た私は、桂君に対して沸々と怒りが沸いてきた。桂君が「裏番」というのはこの際置いといて、大体中学1年生の分際で二股なんていい度胸である。いくら強面の不良だからってなんでも許されると思ったら大間違いだ。ここは女子プロの皆様（特にダンプ松本様熱烈希望）に竹刀で御仕置されても文句は言えない。さすが「チビ猿」の親友といったところだろう。

「……さ、笹谷さん。こう言っちゃなんだけど、笹谷さんにはもっとイイ人がいると思う。なにも桂君でなくてもいいと思う。もっと……大人っぽい年上の人が合うよ。笹谷さん綺麗だし、桂君にはもったいない。私は絶対、そう思う！」

私は笹谷さんと桂君が親密な友達だったという関係もすっかり忘れて、思わず熱のこもった声でキッパリ訴えた。他人の色恋事にはあまり頭をツッコミたくないし、たいして興味もない私でも、同じ女としてここは黙ってはいられない。こんなこと、実際桂君当人に聞かれたら「えらいこっちゃ！！」だが。

笹谷さんは綺麗な茶色い目に大粒の涙を溜めながらこちらを見上げジッと見つめた後、無理して精一杯笑った。やだ、荒井さん。……すごい嬉しいんだけど」と言いながら指で目元を拭い、グスグス

鼻を啜る。

その時。彼女のある部分を見て、ハッとして息がつまった。

気付けば雨の臭いが教室に漂ってきた。彼女の心を写すように、ポツポツと降り始めた雨。それは次第に強さを増し、校庭で部活をしていた生徒達を校舎の中に押し込めていく。いまだ涙を拭っている彼女。衣替えしたばかりの長袖のセーラー服の袖元から見え隠れする手首。

そこには――。

手首の内側に貼ってあるのは絆創膏であり、茶色いシミが滲んであった。

笹谷さんは私が何処を見てるのかわかったようだ。私は動揺しつつも何も言わなかった。その代わりに慌ててハンカチを取り出そうとする彼女にティッシュを差し出し、彼女も黙ってそれを受け取る。

騒がしくなる廊下。生徒達の声が近付くと、笹谷さんはティッシュで素早く涙と鼻水を拭いシャンと背筋を伸ばした。若干目が赤いものの、いつもの涼しげで綺麗な笑みに戻り、静かに「ありがとう」と言ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊

この放課後の数日後、笹谷さんは原口美恵（はらぐちみえ）と何事もなかったかのように言葉を交わすようになる。が、昔のような友情を復活させることはなく、距離を置いたまま疎遠になった。

それと同時に、笹谷さんと桂君の恋も、残念ながら「友達」以上には進展しなかった。それどころか、言葉を交わすことも無くなり、険悪になっていく。

私達が中2に上がる前、笹谷さんは桂君への想いを抱えつつも、一つ上のサッカー部の先輩からの告白を受け入れ、山野中の「伝説」通り、公認のカップルとなった。それでも、彼女はずっと桂君のことを想っていた。直接彼女からハッキリ聞いた訳ではなかったが、少なくとも私はそう思っている。

結局桂君は、噂通り晴美先輩と付き合っていたようだ。

でも、桂君が色気たっぷりの年上の女の人に引かれるのは、仕方がないことなのかもしれない。納得はできなかったが。まぁ、この頃の中学生男子の心と身体の事情を、同学年の女の子に理解しろと言われても無理な話だろう。

そんな二股を掛けた桂君。でも、私は気が付いてしまうのだ。彼が笹谷さんの姿を見かけるたびに、視線を追っていたことを。彼女のことを忘れずに、ずっと気にしていたことを。それを知るのは、もう少し後なのだが、それはまた別の機会にお話ししたい。

そして、私と笹谷さんはこの放課後を境に急に親しくなった。

それは和子ちゃんや幸子女史とは違った種類の親密さであり、言葉では説明できないような奇妙な縁だ。四六時中一緒にいるわけではない。けど、一緒に入れば心地良い関係。滅多に会わない親族のような人。

彼女はこの先、私が大変な目にあうにも関わらず、変わらない友情を示してくた。彼女自身も大変で不安定な時期だった筈なのに、黙って見守ってくれた。

ある事情で彼女とは一時期離れてしまうのだが、不思議と彼女との縁は切れず、数年手紙のやり取りが続いた。その手紙が途絶えても、年賀状と暑中見舞いで近況を報告しあった。その後お互い社会人になり、彼女が結婚した時に、涙の再会を果たすこととなる。まさかこのような形で彼女と縁が続き、ババァになるまで友情を育む存在になろうとは……この時は想像もつかないのであった。

笹谷さんの恋愛事情～後編～（後書き）

今回はホロリとしたお話でした。けど、こんな中学生いるんかいな？私はノホホンと過ごしていたからなぁ、きっと知らないところで色々あったんだろうな…あったんだ、と思いこんで書いてます。イマドキの中学生はどうなんでしょ？

それにしても…今の若いモンは「毎度おさわがせします」わかるかな。当時もそうだけど、今じゃもっと問題になるほどキワドイ内容だったと思う。中山美穂のお宝映像アリ、そして異様に盛り上がった女子プロ全盛期の時代であります。

初めての文化祭？

＜１１月６日（木曜日）　ＡＭ．１０：３１　体育館舞台・本番第１幕＞

「チロリアン？」
「そりゃ、お菓子だ」
「デカメロン？」
「そりゃ、少年隊の歌じゃよ」
「わかった、デトロイトだろ！」
「オマエな。そりゃ、アメリカの都市名だっつーの」
「じゃぁ、これだ！　デストロイヤーだな？！」

そう言いながらプロレス技をかけているエセ主人公『マーティ』と、「バ、バカモン！　デロリアンじゃ……ギブギブ～！！」と叫び、本当に技を受けて痛そうにもがきながら舞台の床を叩く、頭も恰好も忠実に表現している『ドク』。
いかにも「手作り！」満載の舞台の上で、無駄にスポットライトを浴びながらプロレスに戯（たわむ）れる２人。

ワハハハ～！！

拝啓、ロバート・ゼメキス監督様。
信じられないでしょうが、こんなしょーもない劇に対して笑いの渦が湧きおこっています。マジで。
我がクラスメート達が知恵を絞って台詞をアレンジしてるとはいえ、「林家キク●ウでも言わないようなダジャレに反応するとはなにごとか！」と、舞台袖からそっと観客席に座って呑気に笑っている生徒達に一喝したい気持ちを必死に抑える私。

薄暗い舞台裏。近くでは総監督である「片岡君（かたおかくん）」が、何故か全員『ランボー』にしか見えないオバはんズラを被り、銃ではなく大型ハリセンを持ったテロリスト達に舞台に出るよう指示している。（ピコピコハンマーの予定だったが、予算の関係上、大型ハリセンになった）

「ロッキー」のテーマ曲に合わせて出て行く、上半身裸の若干ひ弱なランボー達。なんだかんだと一悶着ありながら、赤のダウンベストならぬ「ちゃんちゃんこ」を着た主人公が「デロリアン」へと飛び乗っていく。

メチャクチャな演出だが、以外にも客には好評だ。

クリスマスの派手な装飾品を付け、どう見てもリアカーにしか見えない「デロリアン」は、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」の映画音楽とは程遠い「吉幾三の『おら東京さ行くだ』」のテーマ曲に乗って発進する。主人公の『マーティー』は、「デロリアン」を一生懸命引いている黒子とグレ子の2人に対してトナカイのごとくムチを振り、さらに笑いを誘った。

『……こうして主人公・マーティーは、博士の発明したタイムマシンに乗り込み、東京……いや、過去へとタイムスリップしたのであった』

吉幾三の快活なラップと歌声が流れる中、体育館に響く和子ちゃんのやけにしっかりとしたナレーション。最早映画の原型から程遠い「デロリアン」の姿と奇抜すぎる音楽に涙する私とは裏腹に、予想以上の生徒達の拍手喝さいとヤジを受けた我が8組。

こうして無事、第1幕を閉じようとしていた。

＊＊＊＊＊＊

＜10月13日（月曜日）　PM．3：38　1年8組・文化祭ミ

ーティング＞

「やっぱさぁ、映画通りの話じゃ芸がないわけよ？ちょっとはアレンジを加えないとさぁ」

わかるかね、君達？

偉そうに人差し指を「チッチッチ」と振り、学級委員・文化祭実行委員・主なキャスト・裏方の代表数名を目の前にして意見をするのは、不本意ながら主役の『マーティ』を演じることが決まった男。またの名を8組のお騒がせ者である「類人猿」こと尾島。

「……それはいいけどさ。そう言う尾島は何か具体的な案があるのかよ？」

大江千里のような大きめの黒ぶちメガネを上げながら聞き返すのは、私と違って正真正銘・生粋の真面目さでキリッとしている成績優秀な「片岡君（かたおかくん）」であり、「学級委員」且つ「総監督」を務める人だ。

「当たり前だろう、つるちゃん！」

ピクリ。

尾島の向かい側に座っている「つるちゃん」こと片岡君の太い眉がヒクついた。

こんなふざけたあだ名を付けたのは、もちろんこの尾島（バカ）だ。別に片岡君は油ぎってるわけでもなく、「プッツン」してるわけでもない。名字が「片岡」と言うだけ。「片岡＝鶴太郎」、故に「つるちゃん」。

何とも安易な命名で、私や江崎君と同じパターンなのが逆に憐れである。

尾島はわざと「プッツン」させる為に呼んでるとしか思えないほど、真面目な片岡君にも毎度毎度絡んでいた。明らかにイラっとしているのに無表情を決め込んでいる片岡君を見て見ぬふりをする尾島。机の上に広がっている資料を指し、片岡君に対抗するようにわざとキリッとした表情で説明して行く。

「実際さ、映画と同じ内容のものを作るとなると、まず１００％無理があるだろ？　そこで！　セットや小道具は一から作るんじゃなくて身近にあるもので済ますんだ。大体さ、デロ……リ……だっけ？　ま、いいや。ともかくあのタイムマシンだってカッコイイけど、かなり厳しいだろぅが？　だからさ、なんか他のもので代用しようぜ。こういうのは身の回りにある物のほうがウケるんだよ。例えば事務のオッサンが使ってるリアカーとかな？」

ヒャヒャヒャといつもの笑いに戻しながら、「な？」と右隣の諏訪君（わくん）に同意を求めている。ライバルの『ビフ』役を演じる諏訪君はたいして面白くもなさそうに「そうか～？」と、どうでもいい様子だ。尾島は左隣に座っている「尾島ニ無理矢理引ッ張リ出サレタ被害者其ノ一」である『ドク』役の江崎（グリコ）君に、「なっ？　そう思うよな？！」と肩を強く叩いておどし……いや、説得している。

「で、でもさ。事務のオジさん貸してくれるのかな？　……あれを体育館の舞台に上げるの大変じゃない？」

バスの中でもないのに弱弱しい声を上げたのは、主人公の父親役である『ジョージ・マクフライ』こと野口（ノグティー）君。彼もまた「尾島ニ無理矢理引ッ張リ出サレタ被害者其ノ二」であり、文化祭本番はまだ先だというのに、既に目が泳いで落ち着かない様子だ。今からこんな状態では先が思いやられる。

「そんなんは、なんとかするんだよ！　それよりノグティーよ、今からそんなに緊張して本番大丈夫か？　どうでもいいけど、文化祭前夜と当日朝は絶対飯抜いてこいよ！」

尾島の見勝手だけどもっともすぎる辛口な意見に全員苦笑した。ノグティーは「俺、別に裏方でもよかったんだけど……」と納得しかねるという風に小さく抗議をしている。彼の気持ちもわからなくはないが、まったくもって適任すぎるキャスティングの為、ここは是非とも内臓に気合を入れて頑張ってもらいたい。

「大変だけど、おもしろそう～！　意外とウケるかもよぉ？」

可愛く尾島の意見に賛同するのは、主人公の母親の『ロレイン』を演じる「尾島ニ無理矢理引ッ張リ出サレタ被害者其ノ三」の島崎（アダモ）さん（ちゃん）だ。毎度毎度のことだが、彼女の無防備な笑顔にこの場にいる男子の顔が緩む。無論片岡君とて例外ではない。

「やっぱし？　さっすが、アダモちゃん！　可愛い子は一味違うなぁ～」

照れもなく思いっきり嬉しそうに頷く尾島と、「やだぁ、尾島君ったら相変わらず上手いんだからぁ～」と何気に尾島の言葉を否定しないアダモちゃん。２人の間には花が咲き乱れている草原が広がっており、ウフフ、アハハハ～♪と手をつないで無邪気に踊っている「ハイジ＆ペーター的な景色」が垣間見える。それとは反対に、他の人達には「……まただよ、この二人」という空気が流れ、隣の諏訪君などは「バカバカしい」とだらしなくイスに寄りかかった。

「ゥオッホン！！　……あ、え～と、他のみんなはどうだ？　監修の荒井はどう思う？」

「は？　わっ、わたし？！」

片岡君が急に話を振ったので、尾島とアダモちゃんの世界を適当に流していた私は慌てて頭を上げた。既に全員の視線がこちらに集中している。しかも尾島からは「なんだぁ？　なんか文句あるのか、テメェっ？！」という内容の熱い視線……どころでない熱光線ビームを目から発射中。「ここはやっぱりさ、映画に忠実にいこうよ！」という私の控えめな意見は陽の目を見る前に瞬時に破壊されてしまった。まぁ、この人数の前で言えるような勇気があれば、入学当初から「類人猿」ごときに苦労はしない。不本意ながらも、ヤツの意見を肯定するような言葉しか出なかった。

「え、まぁ……確かに『デロリアン』を実際作るとなると……限られた材料ではちょっと、大変かも……しれない」

「ほれみろ！！　ま、当然だよな～。つーことでさ、やっぱここはリアカーにしようぜ？　もちろんそれだけじゃつまらないからさ、各自家にあるクリスマスの飾りつけでもすりゃ、ちっとは映えるだろ」

（そういう問題か！！）

アダモちゃんの時とは打って変わって、私に対してはいつもの強気で畳みかけるような発言に戻る尾島。余りの豹変ぶりに言い返す気力すら出てこない。毎回私がこのような扱いを受けているので、間違っても「尾島と荒井はアヤシイ」という噂を8組の連中は誰一人として信じちゃいなかった。

（おかげで最近噂も下火気味。バンザイなことこの上ない。……ないんだけどさ……）

それでもイマイチ納得いかない。「いったい私が何をした？　えぇ？！」と一度チビ猿を締めあげたいところだ。先日の笹谷さんのあの意味深な言葉はいったいなんだったのだろうか。やっぱりあれ

は彼女の勘違いというところなのか。
（…ま、それはいいとして）
そんなことよりも、心の中でものの見事にショボくなった「デロリアン」に落胆を隠しきれない、監修・荒井美千子。一方、細かい設定や台本作成を仰せつかった私の賛成ともとれる意見を得て、一気に機嫌良く話を進めるチビ猿。
さらに勢いに任せて「衣装は赤いダウンベストじゃなくてさ～、赤いチャンチャンコでよくね？」だの、「いっそのことテロリストはランボーにしちまおうぜ」だの、「台詞ももっと捻ってさ～こんなのどうだよ？」など、人がさんざん苦労して集めた資料や台詞を書き出した台本に勝手に付け加えていく。
そのうち他の人からも次々とアイデアが出て来て、いつのまにか多くの意見が飛び交い、私以外の生徒達は盛り上がっていた。今回ナレーションをやることになった和子ちゃんも珍しく、全員和気あいあいとなった尾島の意見に反対する様子はない。
だいぶどころか、かなりオリジナルからかけ離れた「バック・トゥ・ザ・フューチャー」。それもまたクラス全員が協力して作り上げる文化祭の醍醐味の一つと言われれば、私の細かな意見などは無粋というものだろう。
（……ロバート・ゼメキス監督、ホントスンマセン。どうか、どうかお許しください…）
私はクリスチャンではなかったが、心の中で天を仰いで十字を切った。

初めての文化祭？（後書き）

ここで映画ファンの皆様にお詫び申し上げます。しょーもない内容でけしからん！など、お怒りだとは存じますが、広い心で見守って下さるとありがたいです。

さて、文中の「プッツン」、流行語大賞にも選ばれたある意味すごい言葉です。プッツンと言えば、片岡鶴太郎の「鶴ちゃんのプッツン５」でございます。これも大好きな番組でした、ほんと懐かしいですねぇ。

初めての文化祭？

＜１０月２９日（水曜日）　ＰＭ．０４：１７　体育館舞台・リハーサル＞

ダンダンダン、ガコン。
ナイシシュー。
（……）

「おーい、黒子とグレコ、試しにリアカー引いてみてくれ」
「江崎！　尻向けるな！　もっと観客側に身体向けろよ」

期待を裏切らず真面目に声を張り上げて指導するのは、黒ぶち眼鏡の片岡君。出演者達にあれこれ指示し、どギツイ台詞も笑って言おうものなら容赦なく激を飛ばす鬼総監督化している、らしい。

ダンダンダン、キュキュ、バン、ダンダン。
（……）

「尾島と諏訪、もっと中央に寄ってくれるか？」
「声小さいぞ、ノグティー！！」

これ以上ないくらいに丸めたボロボロの台本を振りながら、唾を飛ばす片岡君。普段のキリリと落ち着いた雰囲気とは最早かけ離れている、ようだ。

「片岡がクラスメートをあだ名で呼ぶところ初めて見たよ」
「ほんと、なんか思ったより熱いよね……イメージが崩れた」

普段の様子から想像がつかないくらい豹変している片岡君の姿を見て、舞台袖でボソボソ囁き合う女生徒達。

ダンダンダン、ガコン。……ダンダン
ナイシュー
（……）

「普段真面目な人ってさ、一度熱くなると手がつけられないって言うじゃん？　怒らすと怖いっていうし。確か山野小だよね、片岡って。やっぱ昔からあんなに真面目だったのかな？　ねぇ、ミっちゃん。……ちょっと、ミっちゃん！」
「えっ？」

急に肩を叩かれた私は、慌てて舞台に引いてある幕の隙間から視線を戻すと、呼びかけられた声の方に振り向いた。叩いたのは和子ちゃんで、その横には幸子女史が「聞いてた？」という顔でこちらを見ている。

「え？　あ、か、片岡君ね。すごいよね、こんなに真面目に指導してくれて、さすが学級委員」

咄嗟にアハハハと誤魔化し笑いをしてしまった。耳に入って来た話題にかろうじて答えたつもりだが、後半はまったくもって聞こえていなかった。和子ちゃん達には悪いが、現在私の全てを支配している関心事は、舞台で演じられているショボい劇やそれを熱く指導している片岡君などではなく、分厚い幕の向こう側で繰り広げられている神聖な部活動に他ならない。
ほんの数メートル先で行われている、バスケ部のシュートやパスの練習。
ナイスなタイミングでブッキングした、我が８組のリハーサルの

使用日とバスケ部の体育館使用日。こんな間近で堂々とバスケ部を見れる機会はそう滅多にないことだし、次何時めぐってくるかわからないほど貴重な時間なのである。できることならこの幕を全て開け放って観察したいところだが、ボールは飛んでくるわ、お互いの気が散るわ、せっかくの劇の内容が漏れるわで、仕方なく中カーテンを引きさらに幕を下していた。監修などという立場でなけりゃ、出番のない出演者や裏方のようにのんびりと上のベランダからバスケ部の練習姿を拝みたいところだ。

「そっかぁ、ミっちゃんは幕の向こう側が気になるよねぇ？」

幸子女史の意味深な声にドキっとして慌てて人差し指で「シーっ！」と言いながら、スパイのように辺りをキョロキョロ見回す。本気で焦っている私の思いっきり挙動不審な態度に、和子ちゃんと幸子女史は「ククク」と笑った。幸いにも周りにいた女子は少ないし、ほとんどは舞台に集中しており、尾島達の言う台詞に笑っている。

『大丈夫だって！　周りは気付いてないよ。ていうか、ミっちゃん、思い切りアヤしいし……』

『どれどれ？　田宮（たみや）、部活でてるんだぁ。超ラッキーだったね』

『……うん』

こそこそと顔を寄せて囁き合う、ヌリカベ……ではなく乙女な３人。

私は頬を染めながら和子ちゃんと幸子女史に微笑み、再び幕の隙間からバスケ部の方を覗く。和子ちゃん達も後ろから同じように覗いて……というより大胆にも舞台袖から身体を出した。私もここぞとばかりに２人に続く。

『けっこう部員少ないね』

幸子女史の言うとおり、部活に参加している生徒は少なかった。3年は既に引退しているし、文化祭が間近なので部活は自由参加なのだろう。顧問の先生も不在なせいか、部活特有の緊迫した空気は流れておらず、練習も流している程度だった。

人数も少ないので、広々と体育館全面を使っているコート。しかも男バスのシュート練習に使っているゴールは舞台側。1年2年もごちゃ混ぜに並んで次々とドリブルしたと思ったら、片手でボールを器用にカゴに入れていく。おそらく「レイアップシュート」というやつだ。順番が回って来た田宮君も、キレイなフォームで身体をフワリと浮き上がらせボールをリングに入れた。絵になる完璧なシュートの様（……おそらく。良くバスケを知らないので確証はない）に思わず胸の前で両手を合わせ、感動の溜息を漏らしてしまった。

『……こりゃ、重症だね』

『ホント、完璧に目がハートになってるよ、ミっちゃん』

『それにしても、田宮ねぇ。確かに1年男子のなかではマシな部類だけどさ、けっこうボーっとしてるよ？　半分天然入ってるし』

何故同い年の男子を好きになるかなというニュアンスのキツイ意見を披露したのは和子ちゃんだ。以前にも述べた通り、和子ちゃんは同年代の男子生徒に対して評価が厳しい。「男は絶対年上の大人でなければならぬ！　ガキはお呼びでない！」という揺るぎない信念を掲げており、少年隊のヒガシのような完璧な男がアベレージでは、そりゃお呼びでないだろう。否が応でも厳しくなるのは当然と言えば当然なのだが。

『……和子さん、相変わらず同学年の男子に厳しいッスね。それよりもさ、ミっちゃん。前から言おうと思ってたけど、田宮の事そんなに好きなら、「仮ネーム」書いてもらえばいいじゃん？』

頼もうか？
「ええっっ？！」

仮ネーム。

それは山野中の恋愛事情において重要アイテムの一つである。
我が中学校では、制服に学年色のネームプレートをつけるのが校則で決められているのは、９部を読んだ読者はご存じであろう。各自一つしか学校から配布されないので、万が一にも紛失した場合には、近くの大葉書店で注文しなければならない。新しいネームが出来るまでの間は、簡易性の手書きの名札である「仮ネーム」を付けるのが決まりであった。
その「仮ネーム」。どういう経路かは未だに不明なのだが、好きな相手に「仮ネーム（それ）」を渡して名前を書いてもらうというのが、当時生徒達の間で流行していた。手っ取り早く言えば、「仮ネームを書いてください」と言うことは「あなたのことが好きです」と告ったも同然であり、ラブレターなんぞ渡すよりも遥かに効果が高いアクションだったのだ。
しかもその「好きです」のランクが、友達から本命までと幅広くアバウトだったのも生徒達に安心感をもたらした。ガチガチのマジ本命のような重い空気を臭わすことなく、「ねぇ、ちょっと、これ書いてくれない？」と軽く頼むことで照れ臭さを誤魔化せるという、なんとも都合のイイ代物だったのである。実際に仲の良い女の子同士で交換している人もいたし、憧れの部活の先輩に頼む（同性同士を含む）人もいた。中にはコレクションのように仮ネームを収集している物好きさえもいた。（当時のレアアイテムは、もちろん桂兄弟の仮ネームである）
バレンタインや卒業の時にもらう第２ボタンや本ネームのように季節限定ではなく、「年中無休の２４時間ＯＫ！」というイイ気分のコンビニのようなお手軽さ。これでは生徒達の心を鷲掴みするの

も無理はないだろう。

幸子女史の思いがけない提案に、「スタードっきり（秘）報告」で仕掛けられた芸能人のような大声で反応してしまった私。慌てて自分でも口を押さえたが、和子ちゃんや幸子女史にも「ちょっと！声大きい！！」と横から手を伸ばして口を押さえられた。しかもシュート練習が終わってコートの中央に集合しているバスケ部員が、私の声に反応してこちらを振りかえる。もちろんそのメンツに田宮君も入っており、女子の中には小関明日香（こせきあすか）さんも成田耀子（あのオンナ）も入っていた。カーッと顔全体に血が巡り咄嗟に俯く。

「いたっ！！」

幸子女史が叫んだと思ったら、自分の頭にも「パコン」という爽快な衝撃音を感じ、痛みで頭を押さえてしまった。和子ちゃんも「いったぁ！　ちょっと、痛いじゃないのよ！！」と文句を垂れながら、すごい勢いで後ろを振り返った。

（え？　ちょ、ちょっと、なに？！）

頭を押さえながら後ろを見ると、真後ろに整った顔があって不覚にもドキっとしてしまった。そこには、細く丸めたクシャクシャな台本で後頭部を叩きながら睨んでいる「チビ猿」が約一匹、仁王立ちしていた。

少し前までは見下ろしていたのに、最近は生意気にも目線の高さが近いせいで「チビ猿」から卒業しそうな勢いだ。よほどの成長期なのか。食べる量も半端ではなく、親御さんには弁当を2つ用意してもらっているらしい。朝錬の後早弁、昼間にもう一個弁当を取り出してかっこんでいる。その他にもコンビニで「ナイススティック」だの「まるごとソーセージ」だの「アップルパイ」などを買ってきてはムシャムシャと食べていた。

（黙っていれば結構イイ顔なのに……。おまけに性格が温厚で、も

う少し背が高くて、頭が良くて、私に優しければ言うこと無しだな）

しかしそれは最早「尾島」ではない。自分の都合のいい妄想に慌てて叱咤し反省をした。ましてや愛しの田宮君（ダーリン）が傍にいるというのに、なんていうことを考えるのだ！まだまだ修行が足りぬぞ、荒井美千子！！

尾島は学校指定のジャージではなくサッカー部専用の白とブルーのジャージを着用しており、足元は相変わらず踵を踏んだ汚い上履きだった。

「……オマエらな。人がせっかく部活休んで劇に集中してるっちゅうに、なに呑気にバスケ部なんか見てるんですかっ？！　特にチュウよ、そんな大声出せるんなら、監修としてつるちゃんと一緒に唾飛ばすぐらい指導したらいかがですかねぇ？」

ブチッ。

（……コ、コノヤロ……）

確かに尾島の言うことは一理ある。が、果たして私が指導したところで、この「リアル磯野カツオ」が大人しく従うかどうかは、それはまた別の話である。一瞬キレそうになるも、今はそれどころではない。なによりバスケ部の視線をどうにかしなければならないし、ましてやどもりながら怒る姿など田宮君（ダーリン）に見られたくなかった。引き攣り笑いを浮かべながら「そうッスね、ささ、舞台稽古に戻りやしょう、親分」と下っ端チンピラよろしくさっさと舞台袖に促そうとする前に、和子ちゃんがすかさず尾島の頭を叩き返した。

「野生猿はイチイチうるさいのよ！　第一ミっちゃんが言ったこと、アンタ今まで一回でも聞いたことあんの？　一度も従った事ないじゃんっ！」

「そうよ！　私らだけじゃなくて、他の子もベランダから見てるでしょうが！　男のくせにネチメチと細かいんだから……尾島って絶

対うるさい小舅になるタイプだよね」
「「ホントサイアクぅ～」」

まるで狩人のように息の合ったハモり方でまとめる2人。
和子ちゃん、さすが私と尾島の関係を見極めている！……と言いたいところだが、素直に喜べないのは何故であろう。幸子女史も未来の尾島の姿を見通せるその千里眼に頭が下がる。尾島は途端にヒクリと顔を歪ませ、台本を叩く手を止めた。

「……じゃぁなんですか？　男は細かくちゃいけない法律でもあるんすかっ？　人のことうるさい小舅呼ばわりする前にさぁ、自分が嫁にいけるか心配しろ、このヌリカベ！　このままだとアンタら全員ババァになるまで独身決定！　間違いねぇよ、賭けてもいいね」
「「なんですってぇ？！」」

いつものようにヌリカベ組と類人猿がギャンギャン言い争いを始めたので、これはいよいよ舞台袖に引っ込まなければと3人の姿をバスケ部員から隠すようコートに背を向け、身体を押して退場しようとした私。それを止めたのは、以外にも背後から聞こえてきたボールを弾ませる音と低い声だった。

尾島ぁ！

4人とも声のする方を向けば、集団で固まっているバスケ部員から離れて軽くドリブルして近づいてくる背の高い男子生徒。ジャージの色からして2年生であることは間違いない。

「暇ぶっこいてるなら、ちぃっと顔貸せや？」

疑問形のわりには否とは言わせない命令口調。誰かさんにも負けないくらい気が強そうで、恐ろしいことにニタニタ笑っているその表情は1年後の尾島の姿のようだ。この顔は見たことがある。もちろん密かにバスケ部を遠くから眺めているので、自然と目に入るのだが、それだけじゃない。この先輩は入学当初、何回か8組に顔を出しては、尾島のことを呼び出していた。

その後ろのバスケ部の集団では、一人の女生徒が「コートに下りてきなよ」というよう手招きしながら笑っている。こちらもやっぱり2年生だ。

呼ばれているのは尾島一人。その尾島は。

「チっ……」

嫌そうに小さく舌打ちをした後、横を向いて溜息を吐いた。

初めての文化祭？

＜１０月２９日（水曜日）　ＰＭ．０４：３１　体育館・バスケットコート＞

尾島ぁ！
暇ぶっこいてるなら、ちぃっと顔貸せや？

バスケ部の２年生の声に、尾島は近くにいた人達にしかわからない程度の舌打ちと溜息を吐いた。
これには私達３人も自らの怒りを納め、「上級生に対してそれはマズイのではないですか？」というように顔を見合わせる。当の尾島は何とも思っていないようだが。

「……別に暇じゃないッスよ、辺見先輩（へんみせんぱい）。御覧の通り、文化祭のリハーサルなんです。俺一応主役だし？」

尾島はさすがに上級生相手だからかいつものようにニヤニヤ顔ではなく、苦笑いをしながら肩をすくめた。「辺見先輩」と呼ばれたバスケ部員は舞台まで近づき、ボールをダンと舞台に置きそれに寄りかかる。

「なーに言ってんだよ。女子３人に囲まれて仲良くチチクリあってんじゃねぇか？　ホント、相変わらずだなぁ、オマエ」
「こ、こんなヌリカベみたいな奴らに囲まれても嬉しくもなんともありゃしませんよ！　どうしたらチチクリあってるように見えるんですかっ？　辺見さん眼医者行った方がいいんじゃないっすか？！」

尾島の大声にバスケ部員数名吹き出した。

「ヌリカベ」という時点で和子ちゃんと幸子女史の目が釣り上がる。もちろん私も例外ではないが、なんせ2年生の前なので今の時点では3人とも言い返すことができない。それよりも、私は先輩に対して後輩らしからぬ尾島の態度にハラハラしてしまった。奴の心臓には毛が生えているのだろうか。それとも野生猿としてのパワーなのか。辺見先輩と言う人は、尾島の台詞に気を悪くするどころか、「そうムキになるなって」とニヤニヤ笑いながらボールをポンポン叩いた。

「それよりもさぁ、これから試合すんだけど、男子9人しかいねーのよ。一人足りねぇんだ。ちょっとだけだから、オマエ出」

「ヤですよ！」

尾島は辺見先輩が言い終わらないうちに即答した。心底嫌そうに返答されたのにも関わらず、ニヤニヤしたまま上目づかいで見ている辺見先輩。これにはあからさまに尾島も腕を組みながら溜息を吐いた。

「男子がいなけりゃ、女子部員にかわりに出てもらえばいいでしょうが。……飯塚（いいづか）さん！！男子の試合、出てくださいよっ！！」

尾島は躊躇いもなくバスケ部の集団に声を掛けると、手招きをしていた2年の女生徒が「やなこった」というように顔の前で手を振った。手を振った飯塚先輩と呼ばれた人は、「5時で部活終わるし、どうせ1試合くらいしかできないんだからいいじゃん。出なさいよ？　それとも腕鈍ったから恥ずかしいのぉ？」と笑う。飯塚先輩の挑発するような意見に続くように、「尾島、降りてこいよ！」とあのデカイ後藤君もデカイ声で嬉しそうに手招きした。後ろに控えている満面な笑みの小関明日香（こせきあすか）と田宮君（たみやくん）も頷く。

（うわぁ！）

気の乗らない尾島には悪いが、笑顔の田宮君を見れて一瞬胸を弾ませる私。それとは反対に尾島は超不機嫌オーラを増加し、私の幸せオーラも容赦なく弾き飛ばしていく勢いだ。「ＹＥＳ」の返事をしないで黙っている尾島。辺見先輩は意味深に目を細め、「それともさぁ」と身体を起こして器用にボールを指先で回した。からかうようにゆっくりと口角を上げる。

「オマエさ、本当にバスケやりたくないわけ？　……それってマジであの女のせ」

「わかったよっ！！！」

再び辺見先輩が言い終わらないうちに、尾島の鋭い一声がそれを遮った。

あまりの大きな怒鳴り声に、一瞬シーンと静まり返る体育館。「一体なんなの？」というふうにビックリしている和子ちゃんや幸子女史。８組のキャスト達も「なになに？」と次々と幕から顔を出した。辺見先輩の声が聞こえなかったのか、「あの一年生、なんで怒ってるんだ？」というようにバスケ部の連中も固まっている。

私も自分が怒鳴られたようにビクッと心臓が跳ねた。が、「あの女」と聞いた時点でわかってしまった。尾島の一喝した気持ちに気付いてしまった。

ある名前が頭の中をかすめ、笹谷さんとあれこれ話をした先日のことを思い出す。聞いてもいないのに、「どうでもいいんだけどね」と言いながら彼女が話してくれた、奥住さんから聞いた話とは違った視点での『浪花の転校生』と尾島の話を。

『本人はすっごい否定してたけど……もう、本当に好きだったみたいなんだよね、桃田の事。夏休み明けてもね？　無理矢理カラ元気で頑張っちゃって。けどみんながいないところでは思いっきり落ち込んでるんだもん。まぁ、私達にも原因あったから？　……なんか可哀想で、ね。桃田も仲の良い女子がいれば少しは違っていたかもしれないけど……って、これ、私が言える立場じゃないね。さすがに尾島も正月明けごろにはいつもの元気を取り戻してたけど、でもよほど心に堪えたのかなぁ……結局あんなに好きだったバスケもやめちゃうし。辺見さん、熱心にバスケ部に勧誘したのねー。なんかサッカー部に入っちゃうし。ねぇ？』

チラリと見た笹谷さんの顔が、「バシン！」という衝撃音で消えた。

尾島は持っていた台本を床に叩きつけると舞台から飛び降り、辺見先輩からボールを奪い取った。傍から見てもわかる過ぎるぐらい顔が赤く、ギロリと効果音付きの迫力で上級生を睨んでいる。まるで怒り猿のようで、いつものおふざけ半分とは違う本気モード。直接睨まれているわけでもないのに、「桂龍太郎」に引けを取らないくらいの眼力に震え、握る手に力がこもる。

（……そ、そりゃ、触れられたくない過去のネタを出されちゃ、怒るの当然だよね……）

例えこの男が私にとって好ましい人物でなくても、好きな女の子との苦い思い出を無理矢理引っ張り出され怒り心頭の姿に、キュゥっと胸が締め付けられた。同時に人の傷に土足で踏み入る大人げない辺見先輩に対して不快な気持ちになってしまった。

「やれやれ尾島！　辺見サンなーんか伸しちゃえってんだ？！」

上から急に大声が振ってきて、全員声のした方へ振り向いた。

尾島を煽ったのは、いつのまにかベランダに上っていた「諏訪君（すわくん）」だった。声は軽いふざけた感じだけど、眼は……笑ってない。諏訪君の隣には島崎（アダモ）ちゃんと仲の良い友達がいる。一斉に「尾島く～ん、頑張ってぇ～」と呑気な声援を送り、まるで緊迫した空気の中を通りすぎるアホウドリのようだ。

「おい、尾島……」

総監督の片岡（つる）ちゃん君が私達の隣に並び、ケンカが始まりそうな雰囲気を察して心配そうな声を上げた。いつもなら威厳たっぷりの片岡君でも、上級生にガンを飛ばしている尾島に対して意見を躊躇している様子だ。

「……片岡。もうリハーサル、俺の出番ねぇよな？」

尾島は辺見先輩から一寸の視線も逸らさず唸るような低い声で、片岡君に有無を言わさないように黙らせた。尾島は主役なので出番がないなんてことはほとんどない。片岡君はアダモちゃんのピンクの声援にも反応しない尾島の厳しい口調と、久しぶりに本名で呼ばれたこの異常な事態に「あ、ああ……」と息を飲むように頷いた。

「……そーこなくっちゃ！　決まりだな？」

辺見先輩は尾島の眼光に一瞬怯み、「やべぇ、本気で地雷踏んだか？」と緊張したものの、すぐに挑戦を受けるような表情に戻った。それも何故か徐々に悪戯っ子のような笑顔。尾島が乱暴にパスしてきたボールを難なく受け取り「おしっ！　試合すんぞ！　1年対2年でやるから、飯塚、審判頼む！」と次々指示して行った。不安そうなバスケ部員達も辺見先輩の声で散らばっていく。

せっかくのリハーサルが、違う流れになりつつあるこの状況。

私達は顔を見合わせて「どうしよう……」という無言の視線を交わした。体育館がザワつきだす。勇敢にも和子ちゃんは、ジャージを脱いで乱暴に舞台の上に置く尾島に「あ、あのさ……先生来たらさすがにちょっとヤバくない？」と屈みこみながら小声で言った。

「あぁっ？！」

尾島は超不機嫌な声で和子ちゃんを見上げた。

先程みたいな恐怖の眼力は多少なりとも軽減しているが、険しい目つきと眉間に深く刻み込まれた皺が「男の戦いに女が口出しすんな」と物語っている。尾島の迫力に押されて言葉を飲みこんだ和子ちゃん。「関わらないでおこうよ……」と私が肩を叩こうとした時、尾島と視線があった。

――その時の私は、どのような顔をしていたのだろう。

不安そうな苦い顔をしていたのか。

気の毒そうに憐れんでる顔をしていたのか。

それとも、「そんな争いごとよそでやってくれ」という顔だったのか。

尾島は眼を見開き、動揺したように揺らめかせた。

でもそれは一瞬の出来事で。すぐに口を一文字に引き締め、背を向けた。

尾島が1年生のバスケ部員の方へ駆け寄ると、真っ先に後藤君の胸ぐらを掴んで何か言った。後藤君は慌てて首を振り顎で女子部員の方を差すのと、田宮君達1年生の部員が2人の間に入るのが同時だった。尾島が女子部員の方を見ると小関明日香（こせきあすか）さんが飯塚先輩の後ろに隠れる。後藤君は小関明日香さんの方へ険しい形相で睨んでいる尾島の肩を叩いて、田宮君達を交えて軽く円陣を組んだ。

話し合いが終了すると尾島は一人眼をつぶりブツブツとつぶやきながら、首や手首足首を回して身体をほぐしだした。一通りの柔軟が済むと散らばってドリブル、パス、シュート練習を始める。離れたところでは辺見先輩が、1年の方をチラチラ見ながら2年の部員と真剣に話し合いをしていた。

（あの辺見さんと言う人、「あの女のせいでバスケやめたのかよ」って言いたかったんだろうなぁ……）

尾島の事がまだ諦められないらしい辺見先輩。あれは完全に尾島にバスケをさせる為の挑発だ。尾島もそんなのいつものように笑って流せばいいのに、と思った。本人もそんなこと百も承知、だと思う。

バスケのコートをぼんやり見つめた後、足元にある尾島のサッカー専用のジャージと叩きつけられたクタクタな台本に目を落とした。台本を叩きつける程、今まで見たことない迫力のガンを飛ばす程、過去に囚われている尾島。

（……結構苦労して作った台本だったんだけどな……）

あたかも自分が叩きつけられたような気分になったのは、多分被害妄想だろう。

こんなモヤモヤした気持ちになるのは、「文化祭」の準備のせいで普段と違う生活パターンだからに違いない。

ましてや――。

どうでもいいと思っていた尾島が、いまだに『桃田』との思い出を忘れられないことにイライラしてるなんて……絶対、気のせいに決まってる。

初めての文化祭？

＜１１月７日（木曜日）　ＡＭ．１１：１４　体育館舞台・本番最終幕＞

「ドク、よかった！　無事だったんだね！」

無事に未来から戻って来た『マーティー』は、テロリスト達に大型ハリセンで叩かれている『ドク』を助け出す為、本人の得意技である跳び蹴りをお披露目した。ひ弱なテロリスト達は出番が終わったとばかりに舞台袖へ逃げこんでいく。

「ドク、ドク！　生きていて良かった！」

「マ、マーティの手紙のおかげで、このとおり無事じゃ……」

『ドク』は着ていた白衣の前を開き、胸を守るように付けていた「お椀」を見せた。この後、ズラの上に被っていた「安全第一」とあるヘルメットを外し、ここでお互い熱い抱擁を交わし「メデタシ、メデタシ」でエンディングを迎える筈。

……が、ここで問屋がおろさないのは、８組の運命なのだろうか。

ヘルメットを取った拍子に、勢い余ってズラをも一緒に取ってしまう、江崎（グリコ）君。

一瞬固まる舞台上の２人。唖然として袖で待機している出演者とスッタフ。ざわつく観客達。

（バ、バカヤロ～！！）

江崎君の粋なアドリブの計らいで、当の本人も尾島もすっかりセリフを忘れている御様子。こちらを見た尾島と目が合った。舞台袖の私が「固まってないで、セリフをシャベろよ！」というジェスチャーをするのを見て、ハッと我に返ったようだ。江崎君ったらズラも一緒に取っちゃったよ♪事態にか、私の必死の形相にかわからないが、尾島は必死に笑いを押さえながら「バカ！　取れたぞ！」と小声で江崎君にズラを被せる。しかも被せたズラの方向がキッカリ９０度違うとはどういうことだろうか？　この期に及んで「ウケ狙い」なんかしてどうする！

「ククク……あ～いやぁ、無事でホント良かったスねぇ？　プハッ！　え～なんだ、ビックリした。いきなり髪フサフサになった……って違う！　イヤイヤ、グリコって本当におもしれぇなぁ～！　ま、メデタシメデタシ！　ヒャッヒャッヒャ！！」

「……そ、そうか？　ハハハ……」

若干台本と違う台詞を吐きながら笑って誤魔化そうとする２人（うち一人はマジ笑いで、もう一人は引き攣り笑い）。

舞台袖にいる私や片岡君に向かって『なんでもいいから早く最後のナレーションしろよ！！』と涙目で訴えている。「どうみたって今のあなた達、素丸出しですよね？」の８組の動きに、以外にも観客は大喜びだった。

「宇井、最後のナレーション！　中川はカーテン引くよう急いで伝えて！」

真面目な片岡君は笑うどころか慌てて周りに素早く支持して行く。幸子女史は拳で笑いを堪えながらなんとか頷き、奥の舞台装置を管理している放送部の方に駆け寄った。同時に和子ちゃんの笑いを我慢する震え声のナレーションが響く。私は次第に湧いてくる笑いの

拷問に耐えながら、他のスタッフに舞台に上がる準備をするよう慌てて奥に引っ込んだ。
　和子ちゃんのナレーションに合わせるように、左右から自動で引かれるカーテン。体育館に響く生徒達の笑いと拍手。残念ながらこれで終わりではない、これから出演者紹介のフィナーレが残っているのである。

「練習通り並べ！」

　唯一笑っていない片岡君の声に従い、完全にカーテンがかかっている舞台にクラスメートをひきつれて戻って来た私は所定の位置に立つ。出演者を中央に囲むように次々とスタッフも並んだ。全員無理矢理笑いを堪えているような変顔になりながら、宝塚のフィナーレのように鈴付きの星とボンボンを持って待機。一番端の片岡君が奥に合図すると「ジョニー・Ｂ・グッド」の曲の冒頭であるギターの音色が体育館に響く。カーテンの向こうで再び沸き起こる拍手。曲に合わせてカーテンが開け放たれると、拍手の音が倍になって舞台に滑りこんできた。

＊＊＊＊＊＊

＜１１月７日（木曜日）　ＡＭ．１１：４３　体育館舞台傍出入り口・本番終了後、それから～＞

「あ～、笑い死ぬかと思った」

　尾島のこの意見は、その時８組全員の意見だったにちがいない。自分達の出し物が無事終わって、興奮というより笑い醒めやらずである。尾島を中心にあれだけ熱心に笑いのアイデアを出した演劇が、江崎（グリコ）君のズラ一つでオイシイところを全てを持って行かれたという

事態に、いろんな意味で全員腰砕けである。諏訪君（すわくん）などは相当ストライクゾーンど真ん中だったようで、フィナーレが終わって幕が下りた途端、舞台にしゃがみこんで床を叩き「ヒーヒー」言いながら涙を流していた。

「ったくよぉ、ワザとだろ？　本当は狙ってたな？　俺を出し抜くとは隅におけねぇなぁ！」

当の江崎君（グリコ）は、そんな尾島の台詞と暴力と共に、称賛なんだか非難なんだかわからない洗礼を受けていた。顔を赤くしたり青くしたり忙（せわ）しない江崎君（グリコ）。彼は瞬く間に８組の注目人物となり、一躍人気者に躍り出ることになる。

＊＊＊

「尾島ぁ～お疲れ様！　すっごい面白かったよぉ！」

数時間後には焼却炉行きになる手作りのセットを、次々と体育館の舞台傍の出入り口から外に運び出されているところに、数人の生徒達が押し掛けてきた。こんな鼻にかかった可愛らしい声は男の声である筈がない。この声は毎日部活でも聞かされている声、しかも私に対するときとはえらいトーンが違う。声の方を振り向くと、案の定原口美恵（はらぐちみえ）と取り巻き連中が尾島や諏訪君達を取り囲んでいた。尾島他出演者達は、衣装そのままで出入り口と舞台を忙しなく往復していたので、その目立つ恰好を目敏く発見したのだろう。

（早速来たよ……）

次の部は２年生が演じる出し物が控えている。なるべく急いで片づけなければならないのに。出入り口で固まっている迷惑な連中に、「あんたら邪魔だよ」と言ってやりたいが、あいにくそんな度胸は１ミリも持ち合わせていない。

幸子女史もその「キャピキャピ」雰囲気に気がついたのか、『……なんなの、あのハーレムは？』と厭きれた様子で眼を細め、和子ちゃんに目配せをした。和子ちゃんは目玉をグルリと一周しただけで、『そんなの知るか』と言うようにプイっと無言で片づけの方に専念する。

先週のリハーサル以来、和子ちゃんは心底尾島と関わりたくないらしく、接触を避けていた。せっかく尾島の為に忠告してやったというのに、「あぁっ？！」という台詞に加え、ご丁寧にも「ガンたれ」付きで返されたらそりゃ怒るのも当然である。

……というのは理由の一部であって、本当はそれだけではなかったが。

結果的に「野生猿」なんぞに負けたという悔しさと、尾島の並みはずれた運動神経を眼の当たりにして思わず感心してしまったから、らしい。「私としたことが、一生の不覚！！」と言いながらも、相当ショックだった様子。「まぁまぁ」と励ました幸子女史も尾島を見直したようだった。彼女は和子ちゃんとは違って、試合の後素直に尾島に走り寄り、「アンタ、すごい！」と褒めたそうだから。

＊＊＊

――辺見先輩率いる2年生と尾島を交えた1年生の試合。

ジャンプボールの為にセンターサークルに入ったのは、辺見先輩。対して1年生のチームは以外にも大きい後藤君（ごとうくん）ではなく、一番背の低い尾島だった。

睨み合う2人の頭上に向けて飯塚さんがボールをトスした瞬間、飛び上がる2人。

背丈では完全に負けている筈なのに。信じられない高さを飛んだ尾島は、辺見先輩と同じくらいの手の位置でボールを触った。その瞬間ボールが弾かれ、ボールは田宮君（たみやくん）の手に収まり、2年生を振り切りながらゴールに向けてドリブルをすると全員弾かれるように後

に続いた。一番最初にゴール下に来たのは尾島。田宮君のパスを受けるが2年生のディフェンスが立ちふさがる。そのままシュートの態勢に入る！と思わせ、ボールを持つ手を背中にまわして斜め前方にいた後藤君にパスした。フェイク、しかも速い。まるで背中にでも眼があるかのようなノールック。そのボールはしっかりと後藤君の手に収まりシュートをリングに向けて打つ。

ボールがガコンとリングに入ると諏訪君の口笛と歓声が体育館に響いた。「おりゃぁっ！！」とハイファイブをする後藤君と尾島。女子のバスケ部員からも称賛と溜息が漏れた。

「……」

唖然としてしまった。

体育の授業のようなボテボテ満載の試合ではなく、流れるような試合展開。その後も、中学生のバスケの動きとは思えない尾島に、只只息を飲むばかりだった。

＊＊＊

「ねぇ、ねぇ、一緒に写真を撮ろうよ！」

原口美恵はここぞとばかりにカメラを取り出した。尾島や諏訪君達はまんざらでもなさそうに「しょうがねぇなぁ」とぼやく。その声に原口美恵は嬉々として顔をほころばせ、取り巻きに「お願い、写真撮って」と渡してしっかりと尾島の隣に並んだ。

あのリハーサルの時に、尾島がバスケの試合をしているという噂を嗅ぎつけた原口美恵は、いつものように取り巻きを連れて体育館の中まで押し掛けてきた。もしかしたら、リハーサルを見たいが為に体育館の周りをウロウロしていたのかもしれない。文化祭の準備

をしている時も時々８組まで覗きに来ていた。あいにく顔見知りの生徒は、同じバレー部で天敵第一号らしい私を筆頭とする馬が合わない連中ばかりだったので、堂々と入れなかったようだが。

彼女は頬を染めて、恋する乙女全開で尾島を応援をしていた。その姿は女の私から見ても素直に可愛いと思ったし、好感が持てた。

原口美恵は尾島がバスケをする羽目になった理由に気付いてない、と思う。辺見先輩の言葉を聞いていたのは私達３人だけで、本当の意味を理解したのはおそらく私だけだったと思うから。

……もし、理由（それ）を知ったら原口美恵はどう思うのだろうか。それでもやっぱり尾島一筋なんだろうか。

＊＊＊

「すげぇ演劇だったな」

制服のズボンに手を入れながらハーレムに声を掛ける生徒。山野中で彼を知らない人はいないくらい爽やかな３年生。爽やかさでは佐藤君や田宮君（ダーリン）も負けていないが、彼に比べて少し幼く見えるのは、やはり２年のブランクがあるからだろう。

ハーレムの中央にいた尾島に声を掛けたのは、サッカー部の元部長である「菊池（きくち）さん」だった。その後ろには元女バレの部長「松野（まつの）さん」がいる。噂のカップルの登場に１年８組の生徒は僅かに色めき立った。

尾島は菊池さんに「チワッス！！」と元気よく挨拶し、原口美恵も「松野先輩、お久しぶりですぅ！」とニッコリ微笑んでいた。松野先輩はおっとりとした控えめな人で、バレーをやっている割には背もあまり高くない。それでも先輩が繰り出すフローターサーブはなかなか力強かったのが印象に残っている。とても見た目では想像つかないほどの重いサーブだ。

松野先輩は原口美恵に挨拶を返した後、私や和子ちゃんに気付きこちらに寄って来た。和子ちゃんは頬を上気させ元気よく「お久しぶりです！！」と丁寧に頭を下げて挨拶した。それもその筈、和子ちゃんは松野先輩を大がつくほど尊敬しており、いつもサーブやアタックの指導をお願いしていた憧れ同然の人だった。私も同じように頭を下げると、「久しぶりね」と松野先輩は笑った。

「劇見たよ、面白かった」

松野先輩はそういうと私をジッと見てフフフと笑った。先輩から好奇心一杯の視線を浴びてどうしていいかわからず、モジモジしながら「あ、ありがとうございます……」と再び頭を下げる。

「監修・脚本のところに荒井さんの名前が書いてあるからビックリしちゃった。なんか思ってたより、ユニークな人だったんだね？」

「……え？」

一瞬なんのことかわからずポカーンと松野先輩を見ていたが、暫くするとジワジワと嫌な予感が足元から這い上がり、終いにはカーッと顔が熱くなった。この時感じた「嫌な予感」は見事的中する。確かに校内に貼られたポスターと各生徒に配られたパンフレットには、「監修・脚本　荒井美千子」と名前が堂々と掲載されていた。

私はこの後、全校生徒に「あのくだらない台詞とアレンジしたストーリーを考えたのって荒井さんなんだ。なんだが見た目と違って、超以外～」という不名誉な印象を植え付けてしまったのである。

＊＊＊＊＊＊＊

約一ヵ月間という長い時間を掛けて準備した文化祭、２日間はあっと言う間に過ぎていった。

私達の劇は初日の一番早い時間帯だったので、自分達の出し物が終わると文化祭をゆっくり楽しめた。もちろん田宮君のいる9組にも堂々と入室。

……幸子女史と和子ちゃんに挟まれ、多少へっぴり腰気味だったが。それでも好きな人の教室に入れるというだけで、顔が崩れてニヤけてしまう。席はどの辺りに座ってるんだろう？　とか、どこのロッカーなんだろう？　とか、どの記事を書いたのかな？　とか。まるで事件を捜査する刑事のように眼を皿にして辺りを見回す、ちょいとアヤシイ荒井美千子。両脇の二人は生温かい視線を送った後、「先教室戻ってる～」と9組を出て行ってしまった。

9組の展示品を熱心に見ていると、廊下が騒がしくなった。聞こえてきた声にトキメキ温度が上昇し、そして下降する。

展示してある張り紙の隙間から見えたのは、田宮君だった。……とその後ろには後藤君やその他のメンバー（おそらくバスケ部）、そして最後に諏訪君と尾島。

あのバスケの試合から田宮君と尾島は挨拶を交わす仲になった。それも声を掛けるのは十中八九、田宮君からだ。私は尾島のポジションが非常に妬ましく、二人が顔を合わせている現場を見るたびに、見えないところから密かに覗き見しながらハンカチを噛み引っ張る始末である。

教室内に所狭しとぶら下がっている模造紙に隠れながらコソコソと出口の方に向かう。田宮君と顔を合わせたいが、もれなくどうでもいい顔ぶれまで付いてくるのはイタダケない。絶対何か言われそうだし、しかも強力な味方が不在とくればここはすぐにでも撤収に限る。

……その他に理由などありはしない。

リハーサルだった、あの日――。

私は最後までバスケの試合を見ることなく、途中で体育館を抜けた。

私達が体育館で立稽古をしている間、８組の教室では体育館組と別れてセットの作成をしている生徒が数名いた。さすがに一度見に戻った方がよいと片岡（つるちゃん）君に話しかけ、舞台の袖に引っ込む。

「いいの？」と試合をしている田宮君の方を目配せしながら和子ちゃんが声を掛けてくれたが、私は首を振り「ちょっと様子を見てくる」と舞台を降りた。

体育館フロアーにつながる扉を開けると、バッシュが床に擦れる音やドリブルの音、声援が大きくなった。静かに扉を閉めて体育館の端をそっと歩きだす。私はコートも見ずに、黙々と前を向いて歩いていた。

バカだ――。

せっかく田宮君の試合をしている姿が見れるというのに、こんなチャンスもしかしたら二度とないかもしれないというのに。

けど、もう一人の自分がこうも言っていた。早く教室に行かないといけないし、片岡君や文化祭実行委員の子はすでに応援に夢中だから、と。

ムキになっている尾島、

一生懸命応援している原口美恵、

諏訪君の高い口笛の音、

眼を輝かせて男子部員を追う小関明日香、

田宮君の名前を連呼する成田耀子、

満面な笑みで尾島に抱きつく後藤君、

そして、尾島と笑顔でハイタッチをする田宮君。

例え前を向いていても、コートの方を見ていなくても、眼の端に

映ってしまう。気配でわかってしまう。

様々な思惑が交差している熱いバスケットコート。スコア表の後ろを、そして小関明日香や成田耀子がいる女子部員の後ろを通り過ぎる。ひっそりと空気のように。

私は一度もコートの方を見ることなく、体育館を後にした。

タイガー&ドラゴン～虎編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

タイガー&ドラゴン～虎編～

「おい、そこのボイン！」

低いがハッキリとした声が店内に響き渡った。

それぞれの思惑を浮かべた顔を寄せ合って座っていた5人は、声の主がいるカウンターの方へ向く。どう見ても5人以外に客はいないので、私達に声を掛けたことは間違いないらしい。

「ボインのくせに無視すんな。のんびり座ってないで豚玉とミックス玉、運べや！」

数年後、流行語大賞にもノミネートされる「セクハラ」という言葉で訴えられても文句を言えない台詞と共に、ドンとお好み焼きのタネが入っている器が低いお店のカウンターに置かれた。

「ボイン」と言う言葉に、鉄板がひいてある机を囲んで座っていた私以外の４人が一斉にこちらを見た。注がれる視線の先は、祖母の手編みである白いタートルネックのセーターを思う存分盛り上げている私の豊満なバスト。

どういう状況なの？　と思う読者の方々も多いだろう。ハッキリ言って、どうしてこんな状況なったのか私（こっち）が聞きたい。

ただ今絶賛成長中である「デカイ胸」を指摘され、フルフルと震えるほどこっぱずかしかった。赤い顔のままカウンターの方を睨む……が、数秒でリタイヤ。とても対抗できる相手ではないと悟った私は、黙って立ちあがり座敷から降りる。床に置いてあるお店のサンダルを履いた。

「……ちょっと、なんでミっちゃんが運ばなきゃなんないのよ？！　私達はお客なのよ！　従業員らしくお金もらってる分の仕事しな

さいよ！」
「そ、そうよ！　こっちまで運びなさいよ、このエロ店員！！」
「……だって、お兄ちゃん」
「……」

和子ちゃんはその正義の塊のような心ゆえに堪えられなかったのだろう。男の不遜な態度にたまりかねて、封印を解くように一気に行動に出た。それに幸子女史も続く。まるでどこぞで聞いたような会話が飛び交っているが、生憎相手は「類人猿」ではない。

５人の女子中学生から非難の言葉と視線を浴びているのは、カウンターの中でスゴイ勢いでキャベツの千切りをしながら煙草をふかしている愛想の悪い男。とても飲食店の店員には見えない身なりと態度の青年。

「ピーチクパーチク、うるせぇぞ、ガキ共！　オラオラ、オッパイ星人もチャッチャと運んで、そのでかいボインにヘラ挟みながらお好み焼き焼けや！　……あぁ、チィちゃんは何もしなくていいでちゅよ？　可愛い君はオイラの為に微笑んでくれるだけでいいからね？」

青年はプッと短くなった煙草を流しに吐き捨て、４人に抹殺しそうな強面の睨みと強烈な文句をおみまいし、１人に蕩けるような満面の笑みと口説き文句を捧げた。口は「超」が付くほど悪く、「～からね」なんて言葉使いが世界一似合わない男だが、身なりは背が高くなかなかの男前だ。

……ただし、その真っ赤に染め上げた髪と耳にズラッと並んでいるピアスさえ無ければ。

「態度が違い過ぎるじゃないのよ、この給料泥棒！！」

「ホント信じられな〜い、このスケベピアス男〜」
「……だ、だって、お兄ちゃん」
「……」

どう見積もっても「素行の悪い不良」にしか見えない相手に、ヘラを振りあげながら大胆に文句を言う和子ちゃんと幸子女史。「お兄ちゃん」と言ったのは笹谷(ささや)さんで、和子ちゃん達と青年の会話に必死で笑いを堪えていた。茅野(ちの)さんことチィちゃんは予想を反し、頬を染めて黙って俯く。「……ここは青褪めるところでは？」と突っ込みたいが、空しいのでやめた。

「バカヤロッ！　男は全員ドスケベなんだよ！　大体な、スケベを粗末にするやつはスケベで泣くって昔の人も言ってるだろぅが！？
……ま、オマエらみたいな色気のないガキ共には到底理解できねぇだろうけどな〜」
「「なんですってぇっ？！」」

赤髪ピアス男はハッ！　と鼻で笑いながら器用に手元を動かし、私達が注文したお好み焼きのタネを次々と準備していく。
（……スケベでなくて1円玉の間違いでしょーが）
ムカつく誰かさんにソックリなのが余計癇に障る。絶対身内だと思い笹谷さんにこっそり聞いたが、どうもそうではないらしい。やたらと眼を泳がせ曖昧な言葉で濁していたが、ハッキリと「尾島(マヌケ)に兄はいない」と言った。
それにしても、この扱いの差は酷過ぎる。和子ちゃん達はまだいい。けど私はいきなり「ボイン」。いくらなんでも初めて顔を合わせてから1時間も経っていない年下の女子中学生を「オッパイ星人」呼ばわりするとはいかがなものか。
いつものごとく表情に出さず心の中で思い切り舌打ちし、非常に歪んだ得意の外面(そとづら)スマイルでいそいそとカウンターに近づいた。器

を持って席に戻ろうとする私の背中に、エロ店員はすかさずトドメを刺す。

「こらボイン。顔、ブサイクになってるぞ」

＊＊＊＊＊＊＊

秋の色鮮やかな紅葉が散り、吐く息が白く変わり始め、日に日に冬の景色が濃くなっていく１２月。

セーラー服や学ランだけでは登下校が厳しくなり、制服の上にジャージや学校指定のコートに袖を通す生徒達が多くなり始めた、そんな冬のある日。期末試験が終わった後の部活の帰り、和子ちゃんが言った提案が事の発端だった。

『ねぇねぇ、試験も終わったことだし、ここらでパーっとやらない？　クリスマスも近いし！』

まるで無事にプロジェクトが完了し、打ち上げをやる会社員のような口調の和子ちゃん。期末試験から解放された私達の中に反対する者はいない。幸子女史がマフラーを首に巻きながら即効でナイスなアイデアに飛び付く。

『いいね、それ大賛成！　私達でクリスマスパーティーでもしようよ！　……って、終業式の日がクリスマスだよね？　終業式の後って、部活？　年末も部活、正月明けも部活……』

幸子女史の言葉に全員溜息をついた。そう、私達中学生の運動部に休暇などというものは存在しない。一年中というわけではないが、盆暮れ正月以外はほとんど部活なのが現状なのである。そりゃぁ部活が楽しくないってわけではないが、季節は大人も子供も心が弾む

１２月。こういう時期にお楽しみを求めてソワソワするなというほうが無理な話だ。

『でもさ、岩瀬（いわせ）が練習今年は２７日の午前中までって言ってたでしょ？　なんならその後集まってパーティーしない？　クリスマスは過ぎちゃってるけど年末の忘年会って感じでどうかな？』

５組の下駄箱から靴を持ちながら言ったのは笹谷（ささや）さんだった。相変わらず綺麗な茶色いワンレンで髪の毛が秋よりも少し伸びている。部活中は先輩が髪を括れとうるさいのでおとなしく従っているが、結び目の跡が気になるらしく一生懸命手櫛で伸ばしていた。

『それイイじゃん、貴子（たかこ）！　誰かの家に集まる？　それぞれ持ち込めば安く済むし？』

和子ちゃんはウキウキと明るい表情で笹谷さんの意見に賛同した。「貴子」というのは笹谷さんの名前で、１０月初旬に私と仲良くなり始めてから、笹谷さんは和子ちゃんとも意気投合したようだった。２人が心を通わせるキッカケとなったのは「オシャレ好き」という点であり、ファッション雑誌を広げては「あーでもない、こーでもない」と議論を交わしている。ちなみに今笹谷さんが着ている学校指定のコートとカバンは五つ年上である彼女のお姉さんのお下がりであり、デザインが一新したものを身につけている山野中の在校生のものとは若干異なる。もう既に手に入れることはできない使いこんでイイ感じのヴィンテージアイテムを２つ身につけている笹谷さんは、何処からどう見てもオシャレ上級生そのもの。違う意味で女の子達の注目の的であった。

『じゃぁ何処で集まろうか？　……２７日って確か土曜だよね？あ～父親が年末の休みに入るから、ウチは駄目かもしれない』

幸子女史は腕を組みながら、みんなはどう？　と振り向いた。これには全員「あ、うちもそうかも……」と難色を示した。それ以降になると年末正月とみんなの予定が合わないということになり、全員眉根を寄せる。

『でもせっかくだから、みんなで集まりたいよね？　来年の今頃は『ア・テスト』の準備しないといけないだろうし……』

隣の7組の下駄箱の前で靴を履いていたチィちゃんの「ア・テスト」という言葉に、5人は顔を曇らせ項垂れた。

アチーブメント・テスト、略して「ア・テスト」。K県の中学2年生は必ず通らなければならない試練。そうなのだ、気分的にクリスマスや年末を気兼ねなくのんびり過ごせるのはおそらく今年だけだろう。2年生は「ア・テスト」、3年になるといよいよ「高校受験」が控えている。

『……あのさ、家でパーティーがダメなら外で食べない？』

笹谷さんの言葉に皆眼をパチクリした。笹谷さん以外の4人が「どうする？」というような顔を合わせた。もちろん私は構わなかったが、外となるとお金がかかるのが難点だ。全く無いというわけではないが、中学生の限られたお小遣いの中で食べれる物と言えば、ファーストフードくらいしかない。しかもこのローカルな地元にはそんな気の効いたお店どころか、フードコートがある大きいスーパーすら無かった。そば屋かラーメン屋がいいとこである。ファミレスも隣町の国道のほうまで自転車で走らなければならない。

『私の近所に安くて美味しいお好み焼き屋さんがあるんだ。そこ顔見知りだから、ランチ終わった2時以降にちょっと開けてもらって、

少しだけお菓子を持ち込ませてもらうの、どうかな？』

『『『それにしよう！』』』

「この案件は全会一致で可決されました」というように、予算委員会に出席している議員並みの拍手をかます5人。安くて、おいしくて、さらに持ち込み可。しかも貸し切り状態とくれば「OK！」という言葉以外出てくる筈もない。

それからはトントン拍子で話が進んだ。場所の予約などの大まかなプロデュースは笹谷さんに任せ、他の4人がお菓子などの持ち込みを担当した。最近母親の影響でお菓子作りを始めたので、私の「す、過ぎちゃったけどクリスマスにちなんだお菓子でも作って持って行くから」という言葉に、チィちゃんも「じゃぁ、せっかくだから私もなにか作ってこようかな……」と乗ってきたので、ますますパーティの話は盛り上がりを見せたのだった。

＊＊＊＊＊＊

そして27日当日。

午前中は部活に専念し、一旦家に帰ってから「お好み焼き屋」から近い区民センターの前で待ち合わせということになった。本当は部活の後そのまま直行したかったが、制服や学校指定のジャージでお店をうろつけば校則違反になる。

部活で汗をかいたというわけではないが、気分的にシャワーを浴びてみた。急いで着替え、祖母が編んでくれた手編みのセーターに袖を通す。少しラメが入っている素材でお気に入りの一着だ。クルリと回りながら鏡を見る…と、嫌でも胸のあたりに視線が行ってしまった。

最近益々大きくなってきたバスト。

小学校の時もかなり大きいかなと思っていたけど、中学に入ってから少し身体が締まるのと反比例するように盛り上がっている気が

した。和子ちゃん達は羨ましいと言うが、この年頃にDカップの胸など邪魔にはなっても、全然役に立たない。肩は凝るわ、走る時胸は揺れるわ、オバサン用の可愛くないブラになるわでまったくいいことがないというのが現実だった。役に立つのは……え～そのなんというか、大人の男女限定の話である。けど今日はパーティー、特別な日なので解禁だ。ジーパンも止めて某私立の制服のように緑のチェックのスカート（もちろん下にはブルマ）と紺のハイソックスを履く。

（……ちょっと胸が目立つけど、女の子ばっかだしかまわないよね？）

このときの判断の甘さを数時間も経たないうちに後悔する羽目になるとは、この時は夢にも思わない。

昨日の夜焼いた粉砂糖をふんだんにふりかけた「シュトレン」をアルミホイルに包んだ。チィちゃんはケーキを焼くと言っていたので、私はパンにしてみた。なかなか地元のパン屋でも売ってないようなものをと母親と相談した結果、ドイツのクリスマス用のパンにしたのだ。パンを静かにカバンに入れてダッフルコートを着こむ。寒さも吹き飛ばすほどのウキウキした気持ちで自転車に跨った。何故にそんなに気合が入っているのか？　と言われると少し照れ臭い。小学校までロクに友達を作らなかった私は、初めての友達とのパーティーにとっても浮かれていたのだ。

自転車を急いで走らせ、待ち合わせの区民センターに着くと既に全員揃っていた。

心なしか全員オシャレをしているように見えたのは、決して気のせいではないだろう。やっぱりちょっと気合いれてきた良かったと、心の中で安堵のため息をついた。オシャレ上級生の笹谷さんや和子ちゃんはもちろんのこと、幸子女史もチィちゃんも色つきリップだし。しかもボンボンのついたゴムやポニーテールなどして髪型も全

員バッチリである。かくゆう私もムースを付けてサイドを流してみた。……ドライヤーが無いので椅子の上にのっかり暖房の強風に眼をシバシバさせながらのセットだったが。まぁ、結果が同じならば、過程はこの際どうでもいいのである。

『すぐそこなんだ。申し訳ないけどお店の前道路だし自転車置くスペースないから、区民センターにおかせてもらおう。たしか夕方遅くまでやっているから』

笹谷さんがそう言うと全員自転車を施錠し、区民センターを後にした。

区民センターは市立図書館やスポーツ施設、大きい広場やグラウンドも併設されているので何度も来たことがあるのだが、大野小の学区であるそこから先の場所には足を踏み入れたことがなかった。オノボリさんのようにキョロキョロと辺りを見回しながら歩く。どうやら笹谷さん以外のメンバーもそうらしい。持参したお菓子やジュースの種類、トランプ持ってきたよ！　などの話をしながらお店の前に到着すると、全員照れ臭いような緊張したような顔を見合わせた。

紺色の暖簾には江戸文字の書体で「お好み焼き　まるやき」と書かれてあった。

その奥にはいかにも年季入ってます！　というような木製の枠に曇りガラスの引き戸。引き戸の真ん中に垂れさがっている「準備中」の札。一瞬見た感じではお好み焼き屋というより居酒屋というほうが近かった。しかし扉の前にいる私達の鼻をくすぐるのは、僅かに漂うソースの焦げた匂い。昼食を食べていない５人を一斉にニヤけさせる、なんとも憎い香り。

『こんにちは！』

引き戸を勢いよく開けたのは笹谷さんだった。
笹谷さんの後に続いて「オジャマシマース」と４人の乙女達が続いて中に入る。中は思ったよりも広かった。長い鉄板を囲んでいるコの字型の低いカウンター、１０名ほど席があり、狭い通路を挟んで座敷にテーブルが３席ほどある。

『……オイオイ、外の札見えねぇのか？　ただ今「まるやき」は準備中ですがな』

低いやる気のなさそうな声が帰って来た。
声の主は、カウンターの席にだらしなく踏ん反り返っている男。机一杯にスポーツ新聞をひろげ、どこぞの巨乳美女がパンツいっちょでオネダリのポーズをしているスケベな記事を読みながら、煙草なんぞをふかしている。

『『『『『……』』』』』

男はだるそうにこちらを振り返り、口と鼻から煙を吐き出した。

タイガー&ドラゴン～虎編～（後書き）

文中にある「ア・テスト」についてすこしお話を。
これは神奈川県で行われていた制度だったみたいです（８０年代当時）、私は後に全国制度ではいと聞いてびっくりしました。
２年の３学期に主要教科５科目に加え、音楽・美術・体育・家庭教科と９科目のテストをまるで受験本番さながらのような形式で実施。恐ろしいことにこのテストの結果云々で、下手すれば３年に上がる前に志望校がほぼ決まってしまう代物だったのです。個々の気持ちはどうであれ、「３年になってから受験に本腰」なんて呑気なことを言えなかったのが、当時神奈川県在住の中学生の実態でした。この制度は９０年度の中ごろまで続き、色々と問題があった為、１９９７年に完全撤廃になったそうです。ま、そうだよね～。

タイガー&ドラゴン～虎と蝶編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

タイガー&ドラゴン～虎と蝶編～

『……あんだよ、貴子（たかこ）じゃん』

男は煙草を灰皿でもみ消し、ユラリと立ち上がってこちらに近づいてきた。鮮やかな赤い色の短髪に耳の周辺を彩っているのは無数のピアス、しかも背が高く威圧感あり。その姿はまるで生身の人間を襲うゾンビ……のような迫力。

『な、なんで、とら……いやっ、そうじゃなくてっ！　あ、そうだ！　お、お兄ちゃんがいるのっ?!』

『はぁぁ？　そんなの見りゃわかるだろ、バイトに決まってますがな。最近金欠でよぉ～、オマエも早く大人になってオレに貢いでくれや』

『バカなこと言ってないで、蝶子（ちょうこ）さんは?!』

いきなりヒモ宣言した赤髪ピアス男は、私達が来ることを知らされていなかった様子。

仕方なく笹谷さんが説明すると「あんだと?!　……ったく、あのジジィ、また言い忘れてたな！」と悪態付いた。その怒鳴っている姿は、まるで地獄の閻魔大王そのものだ。笹谷さんは滅多に拝むことのできない不良を目の前にして固まっている私達に気付き、「あ、この人、大丈夫だから、危害加えないから、取って食ったりしないから！」と慌てて弁解らしき言葉を捲し立てた。

『おい、そりゃどういう意味だ?!』

『部活の友達なの、うんとサービスお願い』

笹谷さんは華麗にスルーして、赤髪ピアス男に私達を紹介した。

「サービスなどいらぬから、普通の店員とチェンジ可能かな？」…
…なんて台詞は心の中だけで留めておく。
逆に赤髪ピアス男を私達に紹介する時は「この店のオーナーである『蝶子』さんの甥っ子さんで、ん～なんて言ったらいいのかな。私にとってはお兄ちゃんみたいなもんで……」となんとも歯切れの悪い言い方で、何故か視線を逸らしている。
私達は笹谷さんの曖昧な言葉よりも、目の前の不良が強烈過ぎて「……あぁ、そうなんだ……どうぞよろしく……」としか言えなかった。ご丁寧に身体を９０度曲げて挨拶する私達。赤髪ピアス男は満足したように「ん！」と頷いたが、次に放った一言はこれだった。

『ホー、貴子のダチねぇ。こりゃまたずいぶんと地味なダチだな、オイ』

これには４人の引き攣り笑いも固まった。
（……そりゃアンタから見たらこの世の人間は全て「地味」かろうよ……）
心の中で吐き捨てていたら、「ん～でもこのチビッ子ちゃんは可愛いね～お名前はなんでちゅかぁ？」と大柄な４人とは違って１４８センチしかないチィちゃんに迫っていた赤髪ピアス男が、急にギラっとこちらを睨んだ。

『おい！　そこの女！！』

全員ビクっとして直立不動の姿勢を取った。まさかとは思ったが、男は私を指さしている。「えぇ？！　思考を読むなんて反則ですがなっ！」と思ったが、そんな筈はない。超能力者でもあるまいし。お好み焼きにありつける前に根性焼きでもされるのかと、冷や汗を垂らしながら一応周りを見回し「……私？」というように自分の事をそっと指差した。

『そうだ！　オマエ、いくつだ?!』
『え?』
『え?　じゃねぇよ、いくつだって聞いてんだよ!』
『あ……13、です』
『バカヤロウ、オマエの年齢なんか興味ねぇんだよ！　オッパイのサイズに決まってんだろぅが、もっと空気読めよ!!』
『……は?』

赤子相手にしか聞かない衝撃的な言葉を、質問に織り交ぜながら偉そう言う男。そして間の抜けた疑問形で返してしまった私。
余りの迫力に、ここは素直に「Dカップでございます」と答えたほうが得策かなと心の中で折り合いをつけた時、奥の暖簾がフワッと揺れた。
いきなり出てきた白い物体にギョッとした。
物体は人間で、白い割烹着を着た大柄な女の人だった。赤髪ピアス男の背後に音も立てず能面のような無表情で近寄っていく。

『「は?」じゃねぇだろうよ?!　これだから最近のガキはなっちゃいないって言われんだよ……ま、貴子のダチだし?　初対面だからとりあえずその失礼な口のきき方だけは許してやる。オレの見解だと、Dカップってところか。だがよ、もうちっとスリムになれ?　痩せたらもう1度出直して来い!!　今日は……しょうがねぇなぁ〜、ちっとだけ俺様が相手してやるか。とりあえずそのボインを触らせ』

次の瞬間、衝撃的な映像が繰り広げられた。

グワ〜ン!!

ドリフのコントで上からタライが落ちてきた時の音が響き渡った。
見事にへこんでいる銀色のお盆を持つ大柄な女の人。声も出ず震えながら蹲る赤髪ピアス男。それ以上に言葉の出ない、山野中学校1年女子バレー部員5名。

『ぢょっとぉぉ！　お客様になんて口、きくのぉぉっっ？！』

掠れた低い濁声が店の中を通り抜けた。
こうして、「過ぎちゃったクリスマスパーティー」というより「この場を過ぎ去りたい乱交パーティー」というほうがシックリくる時間が幕開けとなったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊

（……くそぉ、このろくでなしの不良め！）
ブサイクというトドメをさされた私は、怒りを我慢しながらタネが入っている器を机の上に置いた。多少なりとも自覚があるだけに言い返せないところがまた悔しい。もし本当にサンタクロースというものがいるのならば、「どうか赤髪ピアス男の息の根を止めることができる最強の武器を靴下に入れてくれ」と念じるところだ。

「お兄ちゃぁん、ダメよぉ？　女の子相手に『ボイン』とか『ブサイク』なぁんて言っちゃぁ～」

艶めかしい濁声が奥から聞こえてきた。
厨房とフロアーを仕切っている暖簾をかき分けて出てきたのは、不良にお盆を叩きつけた年齢不詳の大柄な女の人。手にはジュースとグラスをのせているお盆を持っている。
おくれ毛を少したらしながらアップにしているふんわりとした茶金の髪。アイシャドーは真っ青、そしてマスカラバリバリの色っぽ

い流し眼。真っ赤なグロスを塗ってあるポッテリとした唇。上唇の近くには色気を醸し出す黒子。もちろん顔には皺一つ見当たらない。極めつけは、色は浅黒いがキメ細やかな肌とこれでもかというボンキュッボンの豊満なボディ。

私の「ボイン」など足元にも及ばない大きい胸が割烹着をさらに盛り上げている。その下は超ミニのラメスカート……なのだが、割烹着に隠れているので後ろを振り返らないと見えない。その姿はまるで男性が一度は夢見る「ハダカエプロン」そのものだ。そのさきはむっちりとした太ももだけど、キュッと締まった細い足首。

どっからどう見ても……いや、完全に所謂世間で言うところの、「ベティちゃん」にしか見えないのだが……何かがおかしい。

さっきから気になっていたのだが、首のところの盛り上がっている喉仏はいったいどういうことなのか。しかも女の人にしては若干声が低いし……まさか、いやいや、そんな、ねぇ？

とりあえず現時点でハッキリわかっていることは、暗い夜道で積極的に出会いたくない部類の人物であろうということだ。

「べつに顔が『ブサイクだ』とは言ってねぇ、『ブサイクになってる』って言ったんだよ」

「……」

問題は決してそこではない。

赤髪ピアス男は豊満ボディのベティちゃんにピクリとも反応せず、小指で耳をほじり、一度眼で確認した後フッと汚物を飛ばした。飲食店にあるまじき行為を堂々とするその姿に、言葉も出ない女子中学生5人。

「そ・う・い・う・問題じゃないのぉぉっ！　……本当にお兄ちゃんはしょうがないわねぇ。ごめんねぇ？　こんな店員でぇ。……あとできっちりオ・シ・オ・キ、しておくからぁ」

ゆるしてくれるぅ？

私の前で胸元をグッと寄せながら前かがみで迫る涙目のベティちゃん。「オシオキ」と聞いていかがわしいことを思い浮かべてしまった私は異常だろうか。

「あ……いえ。お、お気遣いなく……」

私は引き攣りながらもなんとか笑顔で返した。

ベティちゃんは、「もぉうっ、イマの若い子は、デキてるのねぇぇぇ～？　お兄ちゃんに見習わせたいわぁ」と男を落とすようなウィンクを投げつけ、鉄板の火をつけてくれた。あまりの迫力に、笹谷さん以外の４人は若干引き気味。

「こ、こっちこそ、好き勝手言っちゃってるし。気にしないで？　蝶子さん」

笹谷さんは涙をぬぐいながらベティちゃんに向かって言うと、「まっ！　タカコちゃんったらぁ～。そぉねぇ、お友達もどんどん、お兄ちゃんに注意してやってぇん？」と再び熱いウィンクをかまし、獲物を目の前にして舌舐めずりするジャッカル……いやいや、悪戯っぽいスマイルを浮かべた。

「ホラァ、お兄ちゃ～ん、せっかくだから焼いてあげなさいよぉ。こんなに可愛い子がそろって、ウハウハなのにぃぃ、ねぇぇ？　あ～あ、たまにはこぉいう子を連れて来てほしいぃわぁぁ。そぉそぉ、聞いてよぉぉ？　この間なんかぁ。お兄ちゃんったら、私よりぃ年上っぽいホステスさぁん、お店に連れてきてぇ、イチャイチャしてたのぉよぉ～？！」

「ありゃホステスじゃねぇよ、センコーだ。ジジィ」

ヒュン！！
ガァっ～ン！！！
グァン！　シュンシュンシュン…

何か銀色のものが目の前を横切り、金属同士がぶつかる派手な音が店内に広がった。

「……へ？」

目の前に広がる光景は。
ベティちゃんがカウンターの方へ向いて何か投げた後のような腕を伸ばしている態勢と、赤髪ピアス男が金属製のお盆を取り上げて確実に攻撃を防いだ姿。そのお盆にはクッキリと窪んだ跡があり、鉄板の上ではヘラが空しく音を立てながら回転している。
猛獣……ではなくて、人間2人が睨み合うこと数秒。

「もうぅぅ、この子ったら、何言ってるのかしらぁぁあっ！　本当にぃどうしようもないんだからぁぁ。ごめんなさいねえぇ？　こんなヤツぅ、無視無視ぃっ！！」

ベティちゃんはクルリと私達の方へ向いて、「本当、デリカシーのなぁい野蛮な男ってぇ最低ぇっ！！　や～ねぇ～」と悩ましい溜息を吐いた。笹谷さんも「そうそう！　家に女なんか連れ込む二股男って最低！！」と誰のことを思って言ってるんだか、酷く不機嫌な態度で吐き捨てている。
2人とも何事もなかったかのようにしているけど、今確実に「人」が狙われた。
（スイマセーン、ここで殺人未遂事件が行われましたよー！！）

「「「「…」」」」

ヘラをなんの迷いもなく投げつけたベティちゃん。先生をたらしこんで連れ込んでいる赤髪ピアス男。非日常的な光景そっちのけで別な男を怒っている笹谷さん。

他４人は「この店のお盆のストック数、大丈夫なのかな？」と心配することと、ダンマリングを維持する以外に何ができるというのか。

タイガー&ドラゴン～虎と蝶編～（後書き）

本当、何ができるというのか。いや、できることは何もない。（漢文重要句形の反語形の用法より）勉強になって、イーネッ！！

タイガー&ドラゴン～虎と蝶と乙女達編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

タイガー&ドラゴン～虎と蝶と乙女達編～

「かんぱーい！」

華やかな掛け声と共にグラスが鉄板の頭上で合わさり、ガツンと当たった勢いで飲み物が少し鉄板の上に落ちた。水分の蒸発する音と水蒸気が熱々の鉄板から登る。もちろん飲み物の中身はアルコールではない、中学生らしくコーラやオレンジジュースで乾杯だ。

やだ～零れちゃった、という声と乙女達の笑い声が店内に響き渡った。

「やっだぁ、零れちゃったぁ♪」

「「「「「……」」」」」

後から色っぽいオカマ声で調子を合わせる赤髪ピアス男に、冷ややかな視線を送る女子中学生5名と、鬼の形相で睨んでいる年齢性別不詳のベティちゃん。

鉄板があるテーブルを囲むのは女の子5名だけの筈が、知らぬうちに7名になっているのはどういうことか。只でさえ5人でも席が一杯なのに、さらに大柄な2人が座っているせいかギュウギュウで密着度が高い。

（……どうでもいいけど狭いな）

「ちょっとぉぉぉ、な～んでビールなんか飲んでるのぉっ？　アンタ高校生でしょうがぁぁぁ！」

「「「「えっ？！」」」」

そういうベティちゃんはすでに水割りだ。いや、そんなことより。ベティちゃんの言葉に笹谷さんを除く中学生４人は驚いた。いや、

さっき「センコー」とか言っていたので学生だとはわかっていたが、どうみても２０歳位に見える。専門学生か大学生だと思っていた私は正直ビックリだった。反応が気に入らないのか、途端に細い眉を歪める赤髪ピアス男。

「あぁっ？　なんだその反応は？！　それは『うわぁ～大人っぽくてステキ！』って意味か？　『うわぁ……オヤジっぽくって最悪……』って意味か？！」

赤髪ピアス男以外全員眼を彷徨わせ、ジュースを飲む振りをしながら視線を逸らす。どう考えても後者だろ、という無言の訴えを察してほしい。

「おい、ボイン！　どっちだ、答えろ！」

「『ステキ』のほうです」

（神様仏様ごめんなさい。即効で大嘘ついたことをお許しください。そしてどもらず速答できたことに感謝します）

……中学生になってから何度嘘をついたことか。神棚と仏壇のお供え物を増やしておこうと、この瞬間心に決めた。

全員そっと笑いを堪えているが、ベティちゃんだけは『本当にごめんねぇぇぇ』と両手を合わせながら口だけ動かして謝罪を送ってきた。「そうだろ、そうだろ！！」と満足そうに頷くこの赤髪ピアス男は、笹谷さんとチィちゃんの間に座り、まるで飲み屋のホステス扱いだ。ずぅずぅしくチィちゃんの肩に腕など回している。しかも一気に飲み干したグラスをわざわざ私の方へ差し出し、「もう一杯つがんかい」と顎で指図する始末。

私は「何が悲しくてこんな奴に酌などせねばならぬのだ」オーラを隠すように無表情を装い、無言で瓶を持ち上げグラスにビールを注いだ。断じて臆病風に吹かれた訳ではない。

「ささ、可愛子ちゃんたちぃぃぃ！　お兄ちゃんなんかぁ、ほっておいてぇ、ジャンジャン食べてェェェ？」

よいしょぉぉ！　と焼き上がったお好み焼きをひっくり返しソースを塗るベティちゃん。途端に「ジュゥゥ！！」というソースが焦げるイイ匂いが広がった。お客である5人はパァァっと笑顔になり「イタダキマース！」と声を揃えた。やっと本来の目的にありつけた私達は頬を緩ませ、エロ店員が「おう、心して食え」と言い終わる前にお好み焼きをさっさと口に運ぶ。お腹が空いてた分、いつもよりお好み焼きが特別な御馳走に感じられた。

「オイシィ！！」を連発する私達に向かって、さらに蕩けるような満足顔で頷きながらかいがいしくお好み焼きを切り分けるベテイちゃん。その姿は親鳥がせっせと雛鳥に餌をやっている姿にちょっと似てるな、なんて思ってしまった。

「……それにしても未成年のくせにどうどうとお酒飲むなんて、本当信じられない」

「貴子（たかこ）、それがお好み焼きを作ってやった俺様に対する態度か？！　それにな、オレんちの飲み物は昔からアルコールのみって決まってるんだよ」

「焼いたのは蝶子（ちょうこ）さんで、と……お、お兄ちゃんじゃないでしょ。それに飲み物がアルコールのみってどんな家なのよ」

不良な赤髪ピアス男に遠慮なくツッコむ笹谷さん。普段はクールで落ち着いている雰囲気なのに、どうやらこっちが素なのか言いたいことを言っている。それにしてもさっきから気になることが一つあった。「おにいちゃん」がどもりがちで、最初に「と」などの言葉が入る。

……私のどもり癖が移ったのだろうか？

「そうだよねぇ？　貴子の言うとおり！　材料切っただけじゃん」
「本当、材料切って混ぜただけだしぃ、ねぇ？」

和子ちゃんや幸子女史は早くもこの異常なメンバーに馴染みつつあった。普段同じクラスに2人もお騒がせがいるからだろう、十分免疫がついたのかもしれない。赤髪ピアスな不良男を軽くあしらった上に、「蝶子さんのお好み焼きって、とっても美味しい～」と完全にナメている。2人に挟まれている蝶子さんも「あらぁぁ、うれしぃぃわぁぁ」と顔を赤くし、「あらためてカンパーイ♪」などと3人でグラスを合わせているし。赤髪ピアス男は「ケッ！」と言った後ビールを一気飲みした。

「それにしてもよぉ、貴子。オマエ、『まるやき』に来るの久しぶりじゃね？　しかもいつものメンツと違うじゃん。あの『猫なで声』のダチはどうした？」

私の前にグラスをズズイと出しながら言ったエロ店員の言葉に、全員ピタリと動きが止まった。
何故か『猫なで声』という部分でダチの名前がわかってしまった。おそらく和子ちゃん達も同じろう。「赤髪ピアスのくせに上手いこというな」と感心しつつ、「その話題、笹谷さんの前ではタブーですよ、ダンナ」と言う代わりに、相変わらず無言無表情なままグラスから溢れるほどビールを注がせてもらった。

「あぁっ？！　こらぁボイン！　あぁ～もったいねぇことを……」
「大変申し訳ございません」

私の非常に控えめな態度に固まっていた笹谷さんはクスっと笑い、こちらを見て「良くやった！」というようにウィンクをよこした。

赤髪ピアス男は心底悲しそうに手にこぼれたビールを性懲りもなく舐めている。

「……別にいいでしょ。大体、美恵（みえ）は私じゃなくて他が目当てなようですし？　それに中学になったら交友関係を広げないといけないですからっ？！　大体、と……お兄ちゃんが言ったんじゃん、『いろんな女を見ろよ！』ってさぁ」

「オマエ、そりゃヤロー共に対しての心得であって、女子の皆さんに対して言った訳ではないですがな」

「この際どっちでもいいですがな」

手酌でジュースを乱暴に注ぐ笹谷さんの不貞腐れた態度に、苦笑する赤髪ピアス男。「そぉねぇ、友達は多い方がいいわぁぁ。もぉちろんっ、男も女もねぇぇ？」とこの場を和ませるようにベティちゃんが菩薩顔で頷く。

（男も女も多い方が……いいのか。そりゃ、そうだよな）

どちらにしても私は笹谷さんがとっても羨ましかった。

見た目と人格はどうであれ、赤髪ピアス男やベティちゃんみたいな学校以外の「外の世界」の縁を持ってるし、今は原口美恵（はらぐちみえ）とは疎遠になっても、かつては互いの恋を励まし合う親友同士だったのだ。

オマケにグループ交際みたいなことまでしていた。相手が例えあの類人猿や裏番であろうとも……って、あ、あれ？

……裏番……。

……なんだか、妙な不安が広がるのは気のせいだろうか。

「そうそう、原口以外にも交友関係広げることはいいことだと思うよ？　せっかく3つの小学校から生徒が集まってきてるんだからさぁ」

和子ちゃんは笹谷さんの言うとおり！　というようにキッパリ言い切った。「原口ってだれだ？」という赤髪ピアス男に、「美恵のことよ。紹介して2年も経ってるんだから名前ぐらい覚えてよ」と笹谷さんは素っ気なく返す。

「でもさぁ、私、最近原口見てると気の毒になってくるんだよねぇ……」

幸子女史がお好み焼きを細かく切り分けながらボソリと呟いた。

「え〜なんでよ？　別にあのバカ一筋で幸せそうじゃないの」という和子ちゃんのキツイ意見に、幸子女史は苦い笑みを浮かべながら肩をすくめた。

「それが誰にでもわかるくらいハッキリしているから、余計にねぇ。尾島もいい加減なんか行動してあげればいいのにって思うよ。あれじゃ蛇の生殺しじゃん。気が無いならスッパリ断ってやりゃあいいのにさ。どう見たって原口は本気だけど、尾島はその気ゼロだもん」

幸子女史の意見に和子ちゃんを除いた女子中学生4人はなんとも気まずそうな顔をした。当たっているだけに、だ。あれだけ積極的なアプローチを受けて気付かない男は相当ニブイ奴だし、救いようがないと言うべきだろう。もし田宮君がそんなに鈍かったら……ハッキリ言ってやりきれない。

「ま、いいんじゃない？　原口だってキャアキャア言ってる間は夢

見れるし？　尾島（バカ）も言われてる間が華だともいうしねぇ？　そっか、素っ気ないお騒がせ者の尾島とアプローチ全開で猫なで声の原口美恵か。考えてみればすっごいお似合いじゃん！　根性が似たもの同士っぽいから？　チョイとキッカケさえあれば案外コロっとまるく収まるかもよ？　この際2人が無事カップルになった暁には祝杯あげてやろうよ！　少なくとも奴らの相手になる筈だった、何の罪もない未来の伴侶を2人救ったことになるんだからさぁ～」

「「「「「「……」」」」」」

本気で「よし、景気良く前祝いだ！　尾島と原口、そして明るい日本の未来の為に、乾杯！」と叫び、高々とグラスを上げる和子ちゃん。

赤髪ピアス男もベティちゃんも「宇井和子の真の姿」を垣間見たのか、今度は2人がダンマリングである。

「…あ、オイラ、夜の準備始めちゃおうっかな～」と逃げる……いや、席を立とうとする赤髪ピアス男。それを逃がすまいと「あ、あら、やった～！　と……お兄ちゃん、遠慮せずもっと飲んで！」と無理矢理座らせる笹谷さん。そして、和子ちゃんの奴当たり先の恰好な的を確保しようと、「ささ、遠慮せずどうぞ」と自ら進んで赤髪ピアス男のグラスに酒を注ぐ私。

「あ、エーとぉぉ……みんなの話からいくとぉぉ、もしかしてぇぇ、『ケイクン』と知り合いなのかしらぁぁん？」

「テメェは大人しく座ってろ！」という男らしい目つきで赤髪ピアス男を睨ではいるが、口元は口角上げながら言う器用なベティちゃん。さすが店長、どんな時でも営業スマイルを忘れない。

「ケイクン？」と眉根を顰める女子中学生4人に、笹谷さんが「あ、尾島（マヌケ）のことだよ。まったくもって似合わないけど」と捕捉してくれた。

怖いくらいすぐさま反応したのは和子ちゃんだった。

「はぁぁっ？　『ケイクン』？！　……蝶子さん。どう見たって『ケイクン』なんて面（つら）じゃないでしょ？　全国の『ケイクン』に失礼でしょ？！　ＢＡＫＡ（ビーエーケーエー）だとか類人猿だとか野生猿なんかで十分でしょっ？！　むしろ猿に申し訳ないでしょっ！！」

「お、落ち着いて、和子！」

「か、和子ちゃぁぁん、大丈夫ぅぅぅ？！」

震える拳をダンっと机に叩きつけながら怒鳴る和子ちゃんを、慌てて宥める幸子女史とベティちゃん。私も「尾島の話題」を逸らすべく、先程から気になってたことを、ここぞとばかりに笹谷さんに聞いてみた。

「あ～！　そ、そういえば、さっきから気になってたんだけど。笹谷さんとお、お兄さんって、本当の兄弟じゃないんだよね？　どういった御縁で？　近所の知り合いなんですか？　山野中の卒業生なら、先輩ですねぇ！！」

一気にしゃべった。

噂好きな近所のオバサンみたいな言い草だが、これだけ言葉が出れば上出来、私もやるぅ！　と称賛を自分に送る。

しかし、笹谷さんの顔を見るとたちまち気まずそうに眼を泳がせた。赤髪ピアス男は呆れてるんだが、怒ってるんだが、悲しんでいるんだが、なんともいえない複雑な表情でこちらを見ている。「え？　もしかして、やっちまった？」的な雰囲気に、自画自賛タイムは瞬時にして消え去った。

「あ～え～と、実は……」

笹谷さんはグラスを静かに置きながら息を整え、全部言い終わる前に口を挟んだのは、赤髪ピアス男の悲痛な訴えとベティちゃんの高笑いだった。

「なんだよ、ボイン！　まさかとは思ったが、オマエ俺が誰だか本当にわかんないわけぇ？　マ・ジ・でぇっ？！」

「オホホホホォォォ！　やっだぁ～超ウケるんだけどぉ～！　あ～あぁ、もうお兄ちゃぁ～んって大して有名じゃないってわけぇねぇぇ？　やっぱ卒業しちゃうとぉぉ、『裏番』なんて効力失っちゃうのかしらぁぁ～？　『鬼夜叉』が聞いてあっきれちゃうぅ～！　そういえば今は『龍ちゃん』の時代だもんねぇぇぇ、ホント、笑えるわぁぁ～！！」

「黙ってろっ、このクソジジィ！！」

ガッキーィン！！

鉄板の真上でヘラが交差し火花が散った。

２人とも親の敵！　と言わんばかりに睨み合い、手をプルプルさせながら押し問答を続けてる。

（隊長、予定通り和子ちゃんの意識を尾島から逸らせはしましたが、別の問題が発生です！　どうやら「ジジィ」と言う言葉はベティちゃんにとって禁句用語らしいことが判明しました！）

……と川口探検隊長に報告するように心の中で叫ぶ荒井美千子。

そんなことより、ベティちゃんの言った言葉が頭の中で反響し、「まさか……」と忘れかけた不安が広がった。気分は「ちょっとちょっと、奥さん！　今のきいたぁ？！」に近い。

笹谷さんはオホンと咳払いをして居住まいを正した。いまだ頭上で攻防戦を繰り広げ、若干押され気味である赤髪ピアス男の方をあらためて紹介するように手を差しだす。

「え～こちらのエロ店員は今年の春、山野中を卒業された先輩でして。忘れ去られた『伝説の裏番』もしくは『山野中の鬼夜叉』こと桂寅之助（かつらとらのすけ）先輩です」

「こぉらぁ、貴子ぉぉっ！　『忘れ去られた』は余計だぁっ！！」

虚しく叫んだのは赤髪ピアス男。……そして、

「……なにやってんだよ、兄貴と蝶子は」

「ドテチンてめぇ……さっきから黙って聞いてりゃ、何が『猿に申し訳ないでしょ！』だぁ？！　ふざけんなっ！！」

湧いて出てくるというのは、こういうことだろう。

笹谷さんの衝撃的な告白とエロ店員の雄たけびの他に、クリスマス・パーティーには決して相応しくない顔と声がゾロゾロと奥の暖簾から出てきたのであった。

タイガー&ドラゴン～虎と蝶と乙女達編～（後書き）

川口探検隊長、覚えている人いらっしゃいますか？当時水曜スペシャルの番組を見たときはマジ衝撃的でした。あの時の心躍る娯楽番組、今の時代に求めるのは無理だろうなぁ。

タイガー&ドラゴン～龍と猿の群れの襲撃編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

暖簾をかき分けて出てきた数名のメンツは、決して冬休みに出会うことのない、いや、出会いたくない顔であった。

「正面の引き戸からではなく裏口から侵入する奴がいるか、この卑怯者！」

……という想定外な出現に、５人の乙女たちは口をポカンと開けたままだ。

いや、もはやこのショックの原因が、

「衝撃の事実！！　エロ店員は、忘れ去られた『伝説の裏番』こと桂寅之助（かつらとらのすけ）先輩だった！」

なのか、

「謎の生物発見！！　不時着した星（まるやき）は『猿の惑星』だった！」

……か、わかりません、隊長！！

「ちょ、ちょっと……なんでアンタがここにいんのよっ？！」

「そ、そうよ！　この店『ただ今準備中』の筈でしょうが？！」

「あっらぁ～？　アンタ達、今は乙女限定の貸し切りよぉぉぉ？！　ムサイ男共は出て言ってちょ・う・だ・ァァい！！」

ガッキン！！

和子ちゃんと幸子女史はすぐ我にかえり、謎の生物達のヘッドで

ある尾島（おじま）に文句を言った。それにベティちゃんが心強い援護をしながら、赤髪ピアス男から目線を離さずに渾身の力を込めてヘラを一押しした後、勢いよく離した。熾烈を極める攻防戦は一応引き分けに終わったが、まだ「ハァハァ」言っている怪獣……いや、虎と蝶（モスラ）はお互い睨み合っている。

「じゃぁ、なぁんで蝶子と寅ニィはいるんだよ」
「しっかも地味な中学生侍らしてんじゃねぇよ」

ベティちゃんに向かって無謀な発言をする『猿の惑星のリーダー』こと尾島と、どこぞの不良なエロ店員と同じことを言う、忘れ去られていない現在の『裏番』こと桂龍太郎（かつらりゅうたろう）。

一方、忘れ去られた『裏番』こと赤髪ピアス男は、自分の立場も危ういくせに呑気に大爆笑だ。

尾島と桂龍太郎の余計なひと言は、「兄弟って通じ合うものがあるんだな、とっても不思議～♪」とどうでもいいことを思ってしまった宇宙一オメデタイ私と、チィちゃん以外の女性（？）陣に、一気に怒りの炎を焚きつけた。ベティちゃんと笹谷さんの手からヘラが二本、龍と猿に向かってに勢いよく飛んだのは当然といえよう。

＊＊＊

「あの『山野中の鬼夜叉』がコレ？」

和子ちゃんはそう言って赤髪ピアス男を疑いの目で指差した。笹谷さんとベティちゃん、類人猿達は頷いている。……どうでもいいが、人数が増えすぎて座敷はギチギチだった。ギュウギュウどころの騒ぎではない。私達女子中学生が5名、ベティちゃん、大野小隊ロクでもないんジャーのヤロー共、そして。

「そうそう、コレが忘れ去られた『裏番』なんだよぉ」

私達のお好み焼きを「ちょっと頂戴ね？」と頬張りながら言ったのは、なんと小関明日香（こせきあすか）だった。

ようするに振って湧いたメンバーは６名だったのである。後藤（ごとう）君と小関明日香がいたので、「もしかしたら田宮（たみや）君も？！」なんて思ったが、残念ながら思うだけで終わってしまった。

あれからどうなったかというと、ベティちゃんと笹谷さんが投げつけたヘラがゴングの合図となり、激しい宇宙大戦争が始まった。主な登場人物は、ベティちゃんと筆頭とする和子ちゃんと笹谷さん、対抗するのは尾島と桂龍太郎と諏訪（すわ）君だ。まとまりのない勝手な言い合いが悪口合戦に変わり、流血者が出る前にそれを止めたのは、最後に出てきたリスみたいに小さくて、唇ポッテリのショートカットな可愛い子だった。小関明日香が「ハイハイ、そこまで」とパンパンと手を叩きながら両者を宥め、一時休戦状態になったのだ。

「こらぁ、明日香！　『忘れ去られた』は余計だ！！」

何度も訂正し悪あがきを繰り返す、赤髪ピアス男こと桂寅之助（かつらとらのすけ）先輩。

彼は予定外の客が増えた為、ベティちゃんによって強制的に厨房へ追いやられた。エロだろうが飲食店に相応しくなかろうが、店員は店員である。給料をもらってる限り文句は言えない。ていうか働け。

「いやだって、まさか、ねぇ？」

「こ～んなドスケベだなんて、聞いたことないよねぇ？」

「私、強面の部下１０００人連れてるって聞いたんだけど、どこにもいないじゃん。っていうか、いるの類人猿だし？」

「チェーンソーで人を切り刻むって話だけど、実際切ってるのキャ

ベツだし？」
「そう言えば身体に筋肉強制ギブスを巻きつけて日々励んでるって聞いた。しかもモヒカンだったって！」
「そうそう！　そのモヒカンで人を刺すって聞いたよ！！」

寅之助先輩は「一体どんだけ俺は凶暴なんだよ！」と言わんばかりの酷い言われように、苦虫を噛み潰したように顔を歪めて口を尖らせた。

「オイオイ、ガキ共……そんなの真に受けんじゃねぇよ！　第一モヒカンでどうやって人を刺すんだよ？！」
「あぁ、威力、なさそうですよねぇ」
「結構マヌケですよねぇ」
「……コノヤロ」

「ハイハイ、わかってますよ」と適当に流す、和子ちゃんと幸子女史。

私は思わずモヒカン姿の桂寅之助が、不良相手に殺傷力ゼロの凶器を突進させているマヌケな姿を想像してしまい、ホワッと生温かい笑いが出てしまった。私の想像していることがわかったのだろうか。寅之助先輩は私に向かって「今すぐその想像を止めないと、全員の前でそのチチ揉んでやるぞ、オラァ！」というような目で睨んできた。

しかし、である。

本人目の前にして言いたいことを言っている和子ちゃんと幸子女史、気まずい顔で俯いている私とチィちゃんは新一年生であり、噂でしか「桂　寅之助」を知らなかったのだから仕方がない。しかも和子ちゃん達が言った事は実際に広まっている噂話だったのだ。

「それよりも貴子ちゃん、今日はどうしたの？　『まるやき』にお

菓子なんか持ち込んでさぁ。しかもいつものメンバーと違うじゃん？」

小関明日香が遠慮なくお菓子に手を伸ばしながら屈託なく聞いた。

再び固まる女子中学生組。さっきから度重なるデジャブな現象にいい加減私は頭が痛くなってきた。笹谷さんは既に落ち着きを取り戻し、普段通りのクールで落ち着いた雰囲気で髪を掻き上げながら、小関明日香をジロッと見上げた後お好み焼きをつついた。

「……別に友達は誰だっていいじゃない。明日香には関係ないでしょ？　過ぎちゃったけどクリスマスパーティーっていうことで、こうしてみんなでワイワイ食べてた訳」

（……あ、あれ？）

私は内心驚き一杯の気持ちで笹谷さんを見た。

いつもクールで落ち着いている彼女。人当たりも良く大人っぽい雰囲気で余裕があるのに、何故か少しイラっとしている。私の知っている限りでは、仲の良かった原口美恵（はらぐちみえ）と小関明日香の関係は良好だった気がする。そうなると自動的に笹谷さんともいい関係を築いているかと思ったのだが、そうではないのだろうか。しかしそんな疑問も次の瞬間吹き飛ばされてしまった。

「女同士でクリスマスかよ、色気ねぇの」

「「違いねぇ！」」

『まるやき』の店内温度が5度下がった。

色気ねぇと、とんでもないことを言ったのは、金髪でこれまた兄と同じく煙草をふかしていた桂龍太郎だった。余計な相槌を打ったのは尾島と諏訪君。

「お、お猿さん達、なんていうことをっ！」

……とは言えなかった。笹谷さんの方を見ると桂龍太郎を凍死させる程の冷ややかな冷気をまとっている。温度が下がった原因はこれかぁと納得！　……している場合ではない。

「ちょっとぉ、そんな言い草ないじゃん？　あんたらだってムサイ男がさみしく5人揃ってお好み焼き食べに来てるんだからさぁ」

（おっとぉ、小関さん、ナイスフォロー！）

小関明日香のクリティカルヒットに胸をなでおろす私。それにしてもあの桂龍太郎に意見を申すとは、この小関明日香も侮れない。まぁ、尾島の親戚だというし、口と度胸は遺伝なのだろう。ありがたいことにロクでもないんジャーの分のお好み焼きのタネが出来上がったようで、寅之助先輩が「できたぞ～」と器を次々とカウンターに置いた。

（さっすが『元裏番』！　だてに不良のヘッドやってないよこの人！　空気読んでるぅ～）

「おら、ボイン！　菓子食ってないで、運んでくれや」

即効前言撤回。

（さっすがありがたくない言葉を店内に響き渡らせた、空気を読めないあの赤髪ピアス男を地獄に送ってよろしいでしょうか、神様！）

思春期真っ最中な男子生徒と女子生徒がこちらを凝視する中、笹谷さんに続くように一気に零下を身にまとう私。お供え物より呪いの藁人形のほうが先だなと本気で考えていたら、またもやベティちゃんが「そうそうぅぅ、ジュース補充しなくちゃぁぁぁ」と冷蔵庫に行く振りして、ナチュラルに寅之助（もう呼び捨てで構わぬ）の背後にまわった。

何のためらいもなく、お盆を上から下へ振り落とすベティちゃん。

「あんたぁぁぁ！　いい加減にしなさぁぁい！！」

ベティちゃんの攻撃をまともにくらった寅之助を見て、僅かに留飲は下がった。が、出てしまった言葉は取り消せない。ニヤけた顔でボソボソ囁く男共の姿に恥ずかしくて俯いてしまった。何を思ったか、小関明日香がズズイと近寄って私の隣に座り、ジィっと私のバストを凝視している。

「ねぇ。ちょっとだけ、いいよね？」

質問と言うより確認と言った感じで小関明日香は手を伸ばした。

「え、何を？」と聞く前にいきなりとんでもないことが身に起こった。

ガシっと私の胸を掴んだ、小関明日香。

「×●△◆@☆÷・＊っ？！」

悲鳴を上げる女子中学生と目を丸くする男子中学生の皆さん。

「うわぁお、本物だよ！」

（そりゃそうだろう、何が悲しくて偽物をいれなければならぬのか……って違う！　そういう問題じゃない！）

まだモミモミしている明日香さんは「やわらか～い」と屈託ない

笑顔だ。

「あああああの、ちょっと！！」

「どけ、明日香ぁ！　次は俺に触らせろぉぉぉ！！」

「あ……へっ？！　ババカッ、やめろっ、明日香！　寅ニィもマズイだろ！！」

参加しようとしてきた寅之助と慌てて止めにはいる尾島。小関明日香は手を離して「本当にやわらかいんだねぇ～うらやましいぃ～」と目を輝かせながら屈託ない笑顔全開でジィっと胸を見ていた。動悸が激しくなり言葉が出ない、というか出てこない。

（荒井美千子、中学１年で「ＡＢＣ」のＡをすっ飛ばしていきなりＢまで行きました。しかも初めての相手は女性です！）

思わず胸を庇いながら心の中で未来の夫に事後報告＆謝罪していたら、さらにスゴイ言葉が店内に響き渡った。私のボインを揉まれた事態なんて足元に及ばない程の爆弾が、前触れもなくいきなり投下されたのだ。

小リスちゃんは両手で胸を揉む仕草をしながら小悪魔的な微笑を湛えて言った。

「ねぇねぇ、龍太郎。やっぱ晴美先輩（はるみせんぱい）も、これくらい胸デカイの？」

タイガー&ドラゴン～龍と猿の群れの襲撃編～（後書き）

美千子、胸揉まれ、ピーンチ！！

タイガー&ドラゴン～リスの暴走編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

タイガー&ドラゴン～リスの暴走編～

「ねぇねぇ、龍太郎。やっぱ晴美先輩(はるみせんぱい)もこれくらい胸デカイの？」

『まるやき』の店内温度がマイナスまで下がった。

一瞬にしてシベリアの大地と化した店内。下手すればバナナでクギが打ててしまうほど、モー●ル1もビックリだ。

吹き荒れる目に見えないブリザードに全員固まり、数ミリも動けなかった。

「ネェさん、ここでは史上最悪の禁句用語ですがなっ！」と、たとえ小関明日香(こせきあすか)に忠告したところで、時既に遅い。和子ちゃんと幸子女史、チィちゃんは顔を真っ赤にしてるが、その他は真っ青だった。私の「ボイン」など忘れ去られて一安心……どころではない！

（考えろ、考えるんだ、美千子！）

緊急サイレンが鳴る頭の中で死ぬ気で知恵を振り絞った結果、ふと今日のテーマである「クリスマスパーティー」というキーワードを思い出した。人間絶対絶命ピンチの場面になると、意外な力が発揮されることを身を持って学んだ瞬間である。

「あ～！　そうだぁ～すっかり忘れてた!!　チィちゃん、確かケーキ作って来たんだよね?!　せっかくだから皆で食べません?!　蝶子さん、冷蔵庫の中ですかぁ?!　チィちゃんもいいよね?!」

シーンとした店内に空しく響き渡る私の声とパチンと手を合わせる音。遭難した雪山で山小屋を発見した時のような声を出した私は、縋るようにベティちゃんの方を見た。ベティちゃんもこの不穏な空気を察したのか、「アイわかった、ガッテン承知！」というように頷き、「そうそう、チィちゃんがもってきてくれたお菓子出さないとねぇぇぇ!!」と素早く冷蔵庫からケーキの箱を出す。

「えっ？　ケーキ?!　楽しみィ♪」

爆弾発言の主である小関明日香は天然ちゃんなのか、自分が言った台詞などとうに忘れ「ケーキ、ケーキ♪」と浮かれている。しかも「よかったね～啓介（けいすけ）も甘いもの好きじゃん?」といまだ固まっている尾島（おじま）を呑気にチョンチョンと突いていた。

（……そっか、尾島は甘いものが好きなのか。そういえばよく菓子パン食べてるもんなぁ……って違う!!）

なんでこいつらにケーキをやらんとならんの?!　とブツブツ文句を言い始めた和子ちゃんを「まぁまぁ」と宥めながら、そぉっと笹谷さんを盗み見た。

「……」

そこに座るのは、美しい雪女が一人。

目で人を殺せるというのはこのことかもしれない。それも非常に危険な意味で。

絶対零度の視線で桂龍太郎（かつらりゅうたろう）を睨んでるのもそうだが、その延長線上にいる小関明日香にも容赦ない氷結光線を送っていた。膝の上でギュウっと拳を握り、怒りを抑えている。

不本意とは言え、原因の一部に私の「ボイン」が噛んでいるので居た堪れなくなった。笹谷さんは手首に絆創膏を貼るほど思いつめていたのに。彼女の苦しい恋心を逆なでするような事を言う、小関明日香と桂龍太郎に複雑な視線を投げつけることしか出来ない自分が不甲斐ない。

桂龍太郎はもう少し笹谷さんに思いやりのある態度をしてもいいんじゃないか、小関明日香に至ってはもう少し女性として言動に慎みをもってもらいたい、と思ってしまった。

正直、同じ天然でもまだ「アダモちゃん」のほうが人畜無害だし

可愛らしいと思う。
（多分小関さんは、桂龍太郎と笹谷さんのこと知らないんだろうけど……さぁ）

ベティちゃんは営業二重スマイルでケーキの箱を持ってきた。店内はすっかりクリスマスムードに移り変わり、とりあえず内心安堵のため息をついて笹谷さんの方を見たら、大きく息を吐き、引き締めた顔を上げてこちらを見た。「ゴメン、もう少しで殺るところだった……」というような弱弱しい笑みに、私は「いいのいいの」と笑った。

「はぁぁい、チィちゃ～ん」

ベティちゃんがチィちゃんにケーキの箱を渡すと「え、でも、そんな大したもんじゃ……」と小さい声でいいながら顔を赤くし手で箱を抑えた。みんなが注目する中、そっと箱を開けるとそこにはなんとも可愛らしいケーキが鎮座していた。

綺麗にデコレーションされたブッシュ・ド・ノエル。

丸太の形をしたクリスマスのケーキで、ロールケーキの上にチョコレートのクリームでデコレーションしてあり、普通の丸いケーキよりも手間暇がかかるものだ。しかもキリ株の上にはフルーツが乗っており、雪に見立てた粉砂糖が振ってあってなんとも豪華な一品である。

「うわぁ～！」

それこそ有名ケーキ店に劣らないあまりの完璧なクリスマスケーキに、一同歓喜の声が上がる。これには男子中学生共も「すげぇな」

と感心と称賛の溜息を漏らした。いつの時代も料理上手というのは男性の心を鷲掴みするものだ。「超ウマソ……」とケーキを凝視している尾島に、チィちゃんの顔はケーキの上に乗っているイチゴのように真っ赤になった。

「あの、お口に合うかどうか……」

「そんなことないよ、すっごい美味しそうじゃん！！」

小さな声で謙遜するチィちゃん。小関明日香は「今日はラッキー！」と無邪気に喜んでいる。ベティちゃんが「それじゃぁぁ、切りましょうかぁぁ！でもぉ……なんだか人数分切るとなると難しいわねぇぇ？」と試行錯誤しながらケーキに包丁を入れた。女の子たちは甘いものを目の前にしてホクホク顔だ。

この時点で「晴美先輩」などという言葉は宇宙の彼方に消え去ってしまい、もう二度と戻ってこないだろうと、やっと安心できた。

……しかし。

（……どうしよう……アレ）

私は自分のカバンが置いてある方をチラリと見た。その中には昨日焼いた「シュトレン」が入っているのだが、この状況では非常に出しずらい。チィちゃんのケーキの前に出せば良かったと早くも後悔しはじめた。元々ケーキとパンでは違うものだし比べるものではない、とはわかってはいるけど……どう見たってこのケーキの後に私の「シュトレン」は厳しい。

「「「「「オイシィ～！」」」」」

チィちゃん以外の女性陣（？）は小さく切り分けられたケーキを頬張り、ご満悦顔だ。男性諸君も一口で食べ終わってしまい、「ウ

マイな」と食べている。あの桂兄弟でさえでもだ。想像以上に貴重な光景を見れてなんとも摩訶不思議なクリスマスパーティーである。

（……こりゃ、このまま知らんふりする方がいいな）

せっかく作ったけど、このまま出さずに持って帰ろうと決めた。

この後で出してもシラけた雰囲気が漂いそうだし、それこそなんか言われたら今度こそ立ち直れない。ただでさえ「ボイン」などと呼ばれているのに。幸いにもみんなは、私がお菓子を持って行くと言った事を覚えてない様子だ。

（そうそう、知らんぷり！）

「足りねぇな。おっそうだ！　おい、ボイン。確かオマエもなんか持ってきたって言ってただろ？　すぐに出せや」

無情にも閻魔大王が、か弱い乙女を地獄へと突き落した。

（神様、あなたは何処にいるのですか？　ていうか、存在するのですかっ？！）

今日はよほどの厄日らしい。閻魔大王の言葉にビクっと反応し、壊れている機械のようにギギギと声の方に向いた。どうでもいい時には人の思考を読むくせに、肝心なところで役に立たぬ男・桂寅之助（かつらとらのすけ）は、「ん？　どうした、はよださんかい」というように図々しく手を差し出している。

「そうだよ、ミっちゃんも作ってくるって言ってたもんね」

「え～うそぉ？！　今日はトコトンラッキー！　楽しみィ」

和子ちゃんや小関明日香の声に後戻りできなくなってしまった荒井美千子、ピンチでボインな１３歳。

……何故いつもこのような事態になってしまうのか、原因があるのならぜひ教えてほしい。

（尾島（アイツ）が絡むと本当ロクなことが起きない、どうしてくれよう……）

心の中で理不尽な奴当たりをしながら「ハハ……」と疲れた笑みを浮かべ、少し後ろに移動した。カバンの中からアルミホイルに包まれたブツを取り出して、そっと机の上に置く。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」

一体中身はなんだというような顔が一点に集中している。あのケーキの後では「シュトレン」に関するウンチクを述べたところで敵う筈もないので、黙ってアルミホイルの包みを開けた。そこにはケーキを同じく長細くて粉砂糖がふんだんにかかった白い物体がチョコンとあるだけ。

全員無言で眺めており、シーンとした空気が辺りを包む。予想通りの反応に落ち込むどころか妙に納得してしまった。

「……これなぁに？」

一番に沈黙を破ったのは小関明日香であり、ジロジロと眺めまわした。私は「パンだよ」と短く答え、ケーキを切った包丁を取り、ちり紙で刃の部分を拭ってパンに刃を当てた。通常のパンより固めでお菓子に近いパンなので、普通のパンより切りやすい。切れ込みが入ると辺りに洋酒の香りが広がった。ささっと適当に切り分けて、お好きに取ってくださいというようにアルミごと前に差し出した。

「え～これがパン？　なんか普通のと違う～何入ってるの？　干しブドウ？」

「……ラム酒付けのドライフルーツとナッツだよ」

「え～じゃぁ、フルーツケーキなの？」

「ちょ、ちょっと違うんだけど……」

小関明日香の素っ気ない質問に遠慮がちに答えた。明らかにチィちゃんのケーキよりもトーンダウンしているが、それも仕方がないというものだ。私も彼女の立場だったら、同じ事するかもしれない。むしろ無理矢理褒め称えられるほうが余計に落ち込む。

でも、次の言葉にはさすがに閉口した。

「あ～残念。わたし干しブドウとかドライフルーツ苦手。洋酒もダメなの、ゴメンねぇ。ほら、啓介、アンタ大好きなんでしょ？」

小関明日香はアルミホイルからパンをヒョイと摘みあげ、尾島の前にグッと差し出した。

『アンタ大好きなんでしょ』

彼女の言葉にドキっとしてしまい、顔が赤くなっているのを見られたくなくて少し俯いてしまた。訳もなく何故か心の中がホンワリ温かくなった。それがなんなのかわからないけど、一人でも口に合う人がいればそれだけで作って来た甲斐があったというもんだ、とスカートの上でそっと汗ばんだ手を握る。

「へっ？！　……べ、別に、大好きなわけねぇだろっ？！」

「え～だってあんたブドウパン大好きって言ってなかったっけ～？」

「……ブドウ、パン……？」

「そうだよ、しかもナッツも入ってるよ？　アンタの好みばっかじゃん、食べてあげなよぉ。せっかくミっちゃんが作ってくれたのにさ～」

「……あ、いや、パン、な……。や、でもよぉ、これまわり砂糖だらけじゃねぇの。……虫歯になっちまうつーの！」

息が、

「……」

ヒュッと、止まってしまった。

『大好きなわけねぇだろっ？！』
『食べてあげなよぉ』
『虫歯になっちまうつーの！』

……今日一日、色々言われてきたけど、これはさすがに堪えた。

いや、いつも通りの展開だ。尾島からはいつも酷いことを言われている。今に始まったことじゃない。それこそ入学した時から続いていることで、こんなこと日常茶飯事だった。

普段なら誤魔化し笑いなどをしながら、心の中で愚痴っている。実際にさっきまで出来ていた筈なのに。

今回だけは、無理だった。

何故か怒りで頭に血が登るどころか、逆に音が聞こえるほど血の気が引き、身体の芯が冷えて寒くなった。悲しみを通り越して虚しくなってしまった。

握る手に力が籠り、目頭が熱くなり、身体が震え出して、喉がキュウっと縮みだしたのだった。

タイガー&ドラゴン～リスの暴走編～（後書き）

小リス、大暴走。

モービル１の宣伝、いまだに衝撃的で心に残っています。数秒しか映らないコマーシャルなのに、あれだけのインパクトを残すってすごい。ＣＭ作る人に改めて頭が下がる思いです。

タイガー&ドラゴン～穏やかな星と鷹（貴）の逆襲編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

「ほらぁ～」
「しつけぇんだよ、明日香は！」

尾島と小関明日香（こせきあすか）は私のパンを押し問答しながら、仲良くジャレ合い出した。その様子をみながら「ヤレヤレ」だの、「絶対尾島に食わせろ」だの、男子生徒が尾島に掴みかかる。「バカ、てめぇら、いい加減にしろ……明日香ぁ！！」と真っ赤な顔して大声で抵抗する尾島の口に、笑いながらシュトレンを入れようとする小関明日香。

「こ、こらぁぁ、アンタ達ぃぃぃ！　せっかく人が作ったものをなんてことするのぉぉぉ？！　暴れるならぁぁ、店を出なさぁぁい！！」

最年長らしく、諭しながら類人猿達を注意したのはベティちゃんだった。

だが彼らにとってはいつものことなのか、なかなか止めない。さすがにベティちゃんもイライラした様子で、「いい加減にしねぇと、店から放り出すぞ、ゴラァ……」と可愛らしい声ではなく、こっちが素じゃないかというドスの効いた声を出した瞬間、この騒ぎに終止符を打ったのは店内に響く派手な音だった。

バン！！

音の方を見ると、笹谷さんが両手で机を思いっきり叩いたようだった。

おそらく最後の一線を越えてしまったのだろう。笹谷さんは雪女を通り越して般若のような顔だ。これには溢れてきた涙も引っ込ん

だ。前に座っている和子ちゃんの目にも炎がメラメラと燃えている。……せっかく話を逸らす為に、なんとかケーキの話題を絞り出したというのに。何故か友達の怒りを倍にしてしまった事態に、もう知恵も声も出てきやしない。

（マ、マズイ……）

とうとう笹谷さんが大声をあげそうになった時、「ガタン」と椅子が動く音が響いた。

さっきから尾島達とは離れてカウンターでマンガを読んでいた人物が立ち上がった。その男の子はフラリと寄ってきて、小関明日香の手からパンをスッと取り上げる。

「腹減ってるから、俺が食う」

「でも砂糖は勘弁」と机にあるアルミホイルのところまでやってきて、トントンと砂糖を振り落とし口の中に入れた。モグモグと頬張りながら静かに食べる姿は、ユッタリと草原で食事をしている馬を連想させた。

あまり知らない顔の男の子だった。

けど、学校で何度か見たことはある。時々尾島達と一緒にいる子だ。多分この男の子が「大野小隊ロクでもないんジャー」の5人目のメンバーなのだろう。尾島も諏訪君も（野球部は全員短い）髪の毛は短いが、こちらは正真正銘の坊主で色が黒い。鼻筋がスッと通っていて、目はそんなに大きくなくつぶらな瞳をしていた。この男の子の存在が薄くなりがちなのは、どう見ても他の4人が強烈すぎるせいだ。4人とは正反対の穏やかでおっとりとした空気を纏っている彼は、後で言うところの「なごみ系」というのがぴったりだっ

た。

「……あんま甘くねぇよ、啓介（けいすけ）。普通に上手いじゃん。けど、これがパン？」

「こりゃ、『シュトレン』だな。確かドイツのクリスマスパンだろ」

「つぶらクン」の疑問に答えたのは、なんと赤髪ピアスな桂寅之助（かつらとらのすけ）だった。

意外な展開で目の前のブツの正体が判明したことに、全員の驚いた顔が赤髪ピアス男に集中した。私も例外に漏れず「え？！」という声を発すると、「はんら、ホインほのはおは？！　ホへはひっへしゃハスヒんはい？！　（なんだ、ボインその顔は？！オレが知ってちゃマズイんかい？！）」とパンを食べながら凄む、桂寅之助先輩。

「こ、これ知ってるんですかっ？」

「あったりめーよ！　……って、いやな？　学校の購買部にくるパン屋の可愛い娘っ子とクリスマス間近にお近づきになってな？　これが小股の切れあがった情の深いイイ女でよぉ～。熱い営（いとな）みの後にその娘っ子とこの『パン』シュトレン』を食べながら愛のピロートークを……って何言わせんだ、ボインは！！」

「……」

純情な私には、赤髪ピアス男が言った言葉の意味がよくわからなかったが、少なくともこの男がセンコーの他にも校内にいる女に手を付けており、兄弟揃って二股をするロクでもない人物であることは分かった。

それにしても、もっともキリストから遠い男・桂寅之助が『シュトレン』を知っているとは驚きだ。私は我に返ってここぞとばかり「つぶらクン」にウンチクを説明する。

「そ、そう、桂先輩の言うとおりで、ドイツのクリスマスパンなの。日持ちするように粉砂糖をふんだんにかけるんだけど、今回かけすぎちゃって……。どちらかと言うと、パンというよりお菓子に近いの。でもパンに使うイーストが入ってるから……」

つぶらクンは「ふうん」と別に興味なさそうな返事をして、「明日香の分もらう」ともう一個取って砂糖を落とした。これには零れおちそうだった涙もすっかり干上がり、「ははっ、ありがたき幸せ！」とひれ伏す代わりに、自然と満面な笑顔が出てしまった。「つぶらクン素敵！！」と喋ったこともない相手なのに一気に惚れてしまうほど、感情が天まで急上昇した私も大概単純だ。

「……ていうか、寅ニィ。お好み焼き、まだ？　オレ腹減った」
「……ていうか、カズよ。残念だが俺様の身体はこの世の全ての女の心と身体を焼きつくすのが専門でよ、ヤロー共のお好み焼きにまで手がまわねぇんだ。よって腹が減っていたら、テメェらで焼くように。以上！！」
「……」

「カズ」と呼ばれたつぶらクンの切実な訴えを、憎い台詞で跳ね返す、桂寅之助先輩。

桂寅之助先輩の言葉には心底厭きれてしまうが、なんだか無性に可笑しくて笑ってしまった。さすが『元裏番』、3年早く生まれているのもあって、あの尾島を筆頭とする猿の惑星軍団もグゥの根も出ない様子だ。それと同時に尾島があんだけ悪ガキなのも、妙に納得してしまった。桂寅之助の側にいれば、嫌でも口も態度もデカくなるってもんである。「数年後はエロ店員のようになるのか……」と思うと、自分の中学生活にいささか不安がよぎるが。

寅之助先輩とつぶらクンのおかげで険悪になりそうな雰囲気はす

っかり過ぎ去り、私の気分もしっかりと上昇した。ベティちゃんも苦笑だけど営業スマイルに戻っている。和子ちゃんや幸子女史も私のパンに手を伸ばしながら「そーよ、そーよ！」「自分で焼きなさいよ！」といつもの強気発言まで出だした。

「星野（ほしの）～ここで一緒に食べよう。寅ニィの代わりに私が焼いてあげるよ」

なんと笹谷さんは般若から一転して後光が差す女神顔で、お好み焼きのタネが入った器を持ちあげた。つぶらクンは「いい、自分で焼く」とアッサリと辞退したが、「まぁまぁ遠慮せずに呼ばれなさいよ」とつぶらクンを無理矢理座らせ、自分たちの鉄板の上でお好み焼きを焼き始めた。男性諸君の「一幸（かずゆき）ズリィぞ！！」という文句に、笹谷さんはギロリと尾島達を睨んだ。

……まだ雪女は健在だったらしい。

「あら、こちらは『地味な中学生』ですもの。よほど自分に自信がおありになる方々には小関さんにでもやってもらったらいかがですか。やだ明日香何気に逆ハーレムねとても羨ましいー」

「ちょ、ちょっと、貴子ちゃん、余計なことを……」

笹谷さんのちっとも羨ましくないような心がこもっていない棒読みのセリフに、小関明日香は焦り出し、尾島と桂龍太郎の顔が歪んだ。しかし女神の御仕置はこれだけでは終わらない。最後の決定的なトドメを刺しにかかった。

「しっかし、せっかく美千子が焼いたパンなのに酷いことするデリカシーのない連中よねぇ。美千子も遠慮しないでガツンと言ってやればいいのよぉ。あ、でもこんな『ガキ臭いアホな連中ばっか』じゃ怒る気にもならないかぁ！　ね、美千子？」

「え……えぇっ？！」

（どうやら女神ではなく、魔王降臨の間違いみたいです）

今までの恨みつらみを一気に晴らすように、一発逆転サヨナラホームランを隣の類人猿達の席に叩き込んだ笹谷さん。思いっきり意味深な流し眼で尾島の方をチロリと見た後、私に満面な笑みで同意を求めた。お菓子だのジュースだのつぶらクンに奉仕をしていた私は、矛先が自分に回ってきたので慌てて引き攣った笑みを漏らした。本当は「んだんだ！」と一緒に厭味の一つでも言いたいが、そうするとこの後正月明けが恐ろしい。これ以上尾島に標的にされるのも勘弁である。

「あ……の……」

「うんうん、わかってる！　美千子は優しいもんねぇ？　私だったら確実に『机を蹴り飛ばしたいくらい』ムカつくところだわぁ。……あっらぁ？　皆さんどうしたのぉ？　顔色悪いわよぉ？　ほらぁ小関さ～ん、さっさとお好み焼き焼いて、『傷ついている』……じゃなかったわ、『顔色が悪くなるほどお腹すいている』だった！超失礼な男子生徒を元気づけてやんなさいよぉ」

私が一緒になって厭味を言わないところまで計算づくした魔王の言葉は、尾島達を黙らせるには十分すぎる効果を発した。

この時点で試合終了のゴングが鳴り、圧倒的なＫＯ勝ちで笹谷さんの勝利に終わった。

事情がイマイチ読めない和子ちゃんと幸子女史はハテナ顔をしながらも、尾島をダンマリングさせた笹谷さんに「良く言った！！」とお褒めの言葉を投げた。ベティちゃんと桂寅之助は、笹谷さんの態度に見慣れているのか、「ここでチャチャを入れたらこっちに火の粉が降りかかる」と言わんばかりに黙って大人しく飲んでいる。

チラリと隣の席を見ると尾島と「バチッ」と目があった。

尾島のテーブルでは小関さんがブツブツ文句いいながら人数分のお好み焼きを焼いていた。尾島はパッと目を逸らしバツが悪そうな、不機嫌そうな顔をした。当然だ、人がせっかく作ったものをあれだけ粗末に扱えば、気マズくなるってもんだ。

あの時はどうしようもなく悲しかったが、今はもう立ち直ってる。……多少心の奥は燻っているけども。

（少し可哀そうかな……）

過去をほじくり返され、複雑で元気のない尾島の顔を見て気の毒になったが、すぐそんな気持ちは吹き飛んだ。

バカバカしい。大体この場合気の毒なのは、折角作ったものをオフザケの小道具にされた私の方だ。勝手に過去に囚われた尾島を心配する義理などない。

（……別に尾島なんてどうでもいいし？　……そうだよ、私の輝かしい未来と日本の為に、いっそのこと原口美恵と小関明日香と両方仲良くしてもらって、慰めてもらえばいいじゃん！　この際二股でも三股でも、私が許す！！）

心の中で思いっきり愚痴ってはいたが、何故か無性にイライラした気持ちはなかなかおさまらなかった。嫌な感情を一掃するためにトイレにでも行っておくか！　と、席を立った。

「焼きが甘い！」

無事に嵐が去ったと安全確認をした桂寅之助先輩は、ビシッと笹谷さんにお好み焼きの指導をしだした。どさくさに混じって、チィちゃんを侍らしながらビールを注がせている。「うるさい！」と怒鳴る笹谷さんと頬ずえをつきながら「……腹減った」と呟くつぶらクン。その姿を見て笑っている和子ちゃん達。すっかり和んだ風景になり私もちょっと微笑みながら、座敷を降りた。

（桂先輩って、本当はいい人なのかもね。噂って当てになんないんだな）

そんなことを呑気に思いながら尾島達の席を通り過ぎた時、「待てボイン！！」と桂寅之助先輩が声を掛けた。
（……この『ボイン』さえなけりゃ、もっといいのだが……）
それに振り向く私も私である。

「勝手に何処へ行く？！」
「……え？　何処って……その……（トイレの方へ向かっているのだから察しろよ、エロ店員）」
「ションベンの帰りに冷蔵庫からビール持ってきてくれや」
「……（わかっているなら聞くなっ、この『元裏番』！）」

私は怒りを抑えながら仕方無く頷いてトイレに向かったその時、また「ボイン！！」と呼びとめられた。いい加減ムカついてジロリと睨みながら振りかえり、「なんでしょうか……」と低い声で聞いた。
ニヤリと笑った寅之助が言った言葉はこれだった。

「パンツおろすの手伝ってやろうか？」
「けっ、結構です！！」

今日一番の怒鳴り声を上げ、真っ赤になりながらトイレへ駆け込んだ瞬間、寅之助のギャハハハという笑い声とお盆が振り落とされる音、そして「この、変態！！」という女性陣の声がドア越しに聞こえた。

タイガー&ドラゴン～穏やかな星と鷹（貴）の逆襲編～（後書き）

ロクでもないんジャーの最後のメンバー、青担当・アホシノこと「星野一幸」登場。

タイガー&ドラゴン～可愛いリスにご用心編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。（オマケに労働基準法、食品衛生法なども無視してるかも…）Ｒ１５ではありませんが、ＰＧ１２ぐらいになるのかなぁ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

「うわぁ、寒い！」

『まるやき』を出たとたん、冷たい北風が乙女の間をすり抜けていった。その風は乙女達に「名残惜しさ」を再確認させる風だ。今まで暖かい場所でお好み焼きを食べていたお店の方をチラリと見たが、「行きますか」と言った和子ちゃんの合図で仕方なく歩き出した。その和子ちゃんの声にも珍しく寂しさが潜んでいる。

あれから夜の開店時間まで、私達は持参したトランプで盛り上がった。明らかに確執があった私達と類人猿達も、ベティちゃんの取りなしでゲームで勝負ということになり、トランプで対戦するうちにそんなことも忘れてしまっていた。

一喜一憂しながら、過ぎちゃったクリスマスパーティーを楽しんだ中学生達。

現にゲームでエキサイトした私達の身体と心はまだ熱を持っており、最後には帰るのが名残惜しかったくらいだ。尾島達はそのまま『まるやき』に残っているが、私達は夕方遅いので後ろ髪を引かれる気持ちで先にお暇することにしたのだった。

区民センターに向かって歩く私達の頭上には、澄み切った満天の星空が広がっている。冷たい空気の中を白い息が立ち昇っていた。

「さ、笹谷さん、今日はありがとうね？」

私は隣を歩いている笹谷さんにお礼を言うと、笹谷さんは「やだ、こっちこそ！」といつものクールな笑みをした後、申し訳なさそうに眉毛をハの字にした。

「あ……それより美千子には申し訳ないことをしちゃった。……寅ニィが、失礼な口きいてさぁ。それに尾島達も予定外だったし。しかもアイツらのせいで余計な仕事を……私からも謝る、ゴメンネ」

笹谷さんが頭を下げて謝ったので、「いいよいいよ」と慌てて返した。確かに桂寅之助（かつらとらのすけ）、口は悪いが、人柄は……悪い！　もっと悪い！！

（くそぉ、あのエロ店員め！！）

私は怒りの鉄拳を空に突き出したい衝動に駆られた。

＊＊＊

女子が仲良くトランプを始めた時、エロ店員は夜の準備の為にゲームから一人追い出されたのが気に入らなかったのか、文句を言わない（言えない）私がたまたま席を立ったのをいいことに、強面の顔でねめつけながら店員助手を強要してきた。

しかも尾島がタイミング良く「寅ニィ、メシ追加！」と注文しやがったせいで、食べ盛りの中学生男子が「こっちも」と次々と追加しだしたのだ。

『おらおら、早速仕事だ！　ボサッとしないで手始めに注文聞いてこい、ボイン！！』

『腹が減ってるんだ、早くしろよ、チュウ！』

『……（こいつら絶対いつか殺（や）ってやる……）』

無理矢理割烹着を着せられたうえに、注文聞きまでさせられた、荒井美千子。お好み焼き屋の筈が、何故か揃っているご飯や味噌汁、お茶漬け、おしんこなどを運び、全員にお茶やらジュースを配給して回る始末。終いには鉄板で焼きそばまで作らされる羽目になったのだった。隠し味に七味トウガラシをまるごと一本入れられなかっ

たのが非常に心残りだ。
　男性諸君のお腹が一杯になり注文が終わって食器も片付くと、今度は夜の開店準備の為に無理矢理コキ使われ出す、荒井美千子。さすがに頭にきた私は、いつもの静かで大人しい可憐な女子中学生の仮面を剥ぎ、相手が『元裏番』だったことも忘れて言い返してしまった。

『こらぁっ、もっと細かくキャベツ切れや！』
『こ、これが精一杯です！』
『そんなにデカいボインだからキャベツもまともに切れないんだ！』
『胸は関係ないです！』
『よかろう。今すぐそのけしからんボインにサラシを巻いてやる、こっちにこい！』
『は、犯罪です！　（つーか自分の口にサラシ巻け）』
『なにおっ?!　そっちこそ中一のくせに犯罪まがいなボインしやがって！　それよりも、自分の口にサラシ巻けって言ったな?!』
『えっ?!』
『オマエの顔はダダ漏れなんだよっ！』
『ひひひ、人の考え読まないでください！』

　やることなすこと逐一こんな感じで、まるで売れない夫婦漫才かおバカな師匠と弟子のコントのような掛け合いである。そのうち「ミっちゃぁぁん、いっそのことぉぉぉ、この男の嫁にこなぁぁい？」と、最初はエロ店員に怒っていたベティちゃんからも勧誘を受けたほどだ。「あ、私にはもったいない御縁で」と丁重にお断りさせていただくと、「こらぁ、ボイン！　『私にも選ぶ権利があるんで』って、そりゃどういうこった?!」と思考を読んだエロ店員からお叱りを受けた。これには全員爆笑だったが、こっちはちっとも笑えない。
　最後の最後までこんな調子が続き、店を出る時などは、「スリム

になってFカップになったら来て良し！」というお言葉を賜ったが、「今度は絶対不在を確認してから来てやる」という満面な笑みでベティちゃんにのみ頭を下げた。

こうして意外な形で『元裏番』と知り合った私。

もう二度と会うこともなかろうと思っていたこの男が、この先思いがけないところで縁があるとは……。人との繋がりというのは、自分が思った以上に摩訶不思議で、複雑に絡んでいるもの、らしい。

＊＊＊

「ほ～んと。寅ニィがあんな感じだから、アイツらにも悪い影響がねぇ……」

笹谷さんの溜息に私は「ハハハ」と引き攣った笑いをした。

（……影響されすぎだろ、あの類人猿め！）

想像した通り、尾島はあの桂寅之助をえらい慕っているらしく、それこそ幼稚園入る前からの親分子分の関係だそうだ。尾島には以外にもお姉さんがいて、そのお姉さんが寅之助先輩と同級生ということもあり、桂兄弟と大変仲がよろしいらしい。しかし尾島のお姉さんは山野中には進学しなかった。なんと頭がすこぶる良い優等生だった為、女子大まである有名私立のお嬢様学校に進学したと聞いた時は、さすがにぶっ飛んだ。世の中って平等じゃないんだなということも、この時学んだのだった。

尾島は桂龍太郎以外にあのつぶらクンとも幼稚園からの縁だった。諏訪君と後藤君は小学校からの縁で、後藤君はバスケ繋がり、諏訪君はつぶらクンと『リトルリーグ』という野球繋がりで親しかった。五年生の時に同じクラスになった五人は、自然と仲良くなったという。ちなみにつぶらクンは、野球部には入らずそのまま外部の、それはそれは厳しい『シニアリーグ』に属する野球バカだということだ。

原口美恵達（はらぐちみえ）は、そんな尾島達の仲間に五年生の同時期から加わったんだそうだ。笹谷さんも五年の時からの縁なのかとおもいきや、原口美恵より古かった。小学校一年の時にこの地に引っ越してきた笹谷さんは、その頃は極度の引っ込み思案だったらしく、なかなかみんなと馴染めなかったところを、五歳年上のお姉様のおかげで尾島達と一緒に遊ぶようになったのだという。

『紹介するよ、アタイの可愛い妹だ。寅之助、くれぐれもよろしく頼むよ、しっかり面倒見てやんな。もしなにかあったら……わかってるんだろうなっ？！』

『……』

小学生で既にこの迫力を身に着けていた、笹谷さんのお姉様。

越してきたその日に近所のガキ共の総大将となり、桂寅之助ですら敵わなかったというのは知る人ぞ知る有名な話だそうだ。そのままお姉様はスケバンの名をほしいままにしたが、号泣する部下に惜しまれつつも中学を卒業したと同時に引退した。その後のお姉様は、彼女の事を知らない都内の私立へ通って華麗なる高校デビューを果たし、可憐な女子高生を演じているとのことだ。もしお姉様の過去をバラした者は、お姉様を心酔する部下によって逆にバラバラにされるとの噂が流れているのは、あながち嘘でもないらしい。私はこの時、笹谷さんが何故クールで大人っぽく、余裕のある落ち着いた雰囲気があるのか、なんとなく理解した。

＊＊＊

「……そ、それにしても、後半は賑やかになったね。どうなるかと思ったけど……」

桂寅之助にしてやられた事よりも、類人猿達が乱入してきたこと

よりも、小関明日香の問題発言の方があまりにもすごかったので、こんな言葉が出てしまった。別に悪口を言いたいわけではないが、それほど本当に焦ってしまったのだ。もうあんな生きた心地がしないのは勘弁である。

小関明日香も尾島の親戚なので、小さいころから彼らと一緒だったという。彼女はあの人懐っこい性格のおかげか思春期特有の難しい年頃などとは無縁なようで、いつも尾島達の後にくっついていたらしい。どうやらそれは今でも現在進行形のようである。

「でもさぁ。結局、尾島（マヌケ）、美千子のパン食べてたじゃん？　まったく素直じゃないんだから。ねぇ？」

私は笹谷さんのニヤニヤ笑う顔にカァっと身体が熱くなった。

……そう、意外な出来事が一つ。

私が忙しなく片づけている間、ふと見ると私のパンが入っていたアルミホイルが私達の席から消えていた。何処に行ったのかと見渡すと、全部食べられて空になったアルミホイルが、さっきまで食べていた尾島の席のところに置いてあったのだ。エロ店員の命令で食べ終わった食器を回収しに尾島の席に行くと、そこは食べカスと粉砂糖が落ちていて汚い。

『……』

つぶらクンの時も嬉しかったけど、何故かその倍以上の嬉しい気持ちが広がった。

もうこの席には誰も座っておらず、尾島と和子ちゃん達は今まで空いていた三つ目の席で白熱した戦いを繰り広げている。私は一人汚い食器の後片づけをしていたが、全然苦にならなかった。むしろルンルンと鼻歌が飛び出す勢いだった。

……そのせいで、「余裕があるな。よし、次は食器洗いだ！」とエロ店員に仕事を追加されたのは納得いかなかったが。

（そっか、やっぱ食べてくれてたんだ……）

なんだか妙に高揚する気持ちと頬が緩むのを、笹谷さんに悟られるのが恥ずかしくて必死で押さえた。

「でも、美千子」

「は、はい？」

笹谷さんは前を向いたまま、そっと声を顰めた。

数メートル先では和子ちゃん達3人が今日のパーティーの感想を言い合っている。『元裏番』がどうのとか、蝶子さんがステキだのとか議論している後ろ姿。私達は前から視線を外し、同時にお互いの顔を見合った。

笹谷さんの表情は楽しかったパーティーの余韻はすっかり消えうせ、怖いくらい真剣な顔だった。

「……あのさ、『彼女』には十分気を付けてね？　油断しちゃダメ」

絶対に気を抜かないで。

笹谷さんの声は低くて固い。険しい表情を貼りつかせながらまだこちらを見てる。そのまま笹谷さんは『彼女』がまだいる『まるやき』の方へ振り返った。私も遠くなったお店の方へ視線を追う。

笹谷さんが言う『彼女』が誰なのかはなんとなくわかったが、言ってる意味がわからない。

「え？　そ、それは……」

「基本的にはね、イイ子なのよ。問題は自分の『お気に入り』が他の人と友達以上になりそうなのを嗅ぎつけると容赦ないのよね」

「……どういう……」

意味なのかと聞く前に、暗い夜道でキラリと目を光らせながら、笹谷さんはこう言った。

「厄介なことにね、自分が一番じゃないと納得できないのよ、あの可愛いリスは。そうとう手強い相手よ」

明日香に比べれば、美恵なんてまだマシね。

そんなバカな……と思った。

しかし、この先の中学生活で、私はその言葉を身を持って知ることになるのだ。

タイガー&ドラゴン～可愛いリスにご用心編～（後書き）

小リスこと小関明日香、彼女の真の姿はいかに?!

RUN・乱・ラン♪？

「ちょ、ちょっと！」
「が、我慢できない……」
「つーか、無理！　ありえない！！」

ただごとではない台詞が、この場にいる中学生全員の口から漏れていた。……ていうか、こういう言葉しか出てこない、と言うほうが正しい。

何故なら歯がガチガチと上手くかみ合わないほど極寒で、しかも唯一の望みである日差しはおろか、空はまるでグレーの絵の具を溶いた水を間違って画用紙にぶちまけたのような曇り空。

季節は冬真っ只中である2月。屋外の現在の気温は5度以下。半端なく寒い。

「こらぁ、シャキッとしろ、シャキッと！　もうそろそろ2年男子スタートするぞ！！」

競技場がある大きい公園の一角で拡声器でアナウンスして回っているのは、3年の男子保体担当教師、箕輪（みのわ）先生だった。思いっきり北風が吹いているにも関わらず、いつものように乳首が浮くほどピッタリとしたTシャツの上に薄手のジャージ前全開と言う姿で、堂々と闊歩している。現在行われている競技に興奮しているのか、顔が赤く、生き生きとした表情。

「あ～あ、帰りたい……」

思いっきり嫌そうにボソリと呟いたのは、和子ちゃんだった。

学年色のジャージの上に、女バレ専用のグレーと刺し色でピンク

が入っているシャリジャージ（歩くとシャリシャリ言う防水防寒用のウィンドブレーカー）を着ているにも関わらず、身体を縮こませ、ブルブルと震えていた。

「本当、こんな日にわざわざ曇りになんなくてもさぁ。……しかも雪になりそうじゃん」

同じような格好で寒さと戦いながら空を見上げるのは、幸子女史。しかも学年色のジャージと体操着の下には、渋々借りた母親の毛糸のチョッキと父親のズロースが装着してあるとのことだ。「親に無理矢理押し付けられたせいで、ありえない恰好をしてきた」と朝一番に悔しそうに舌打ちをしていた。言わなければわからないのに、あまりの寒さに思わず口が滑った模様。

しかし私も似たようなもんだった。ポケットにはカイロも入っているし、それだけではなく祖父の腹巻きに挟んで腰とお腹にカイロを当てている。

「……ちょっと、ミっちゃん、大丈夫？」

和子ちゃんが心配そうな声に、私は芝生に座って膝の上に乗っけていた顔を起こした。「ミっちゃん、顔色悪いよ…」と呟く2人。私は2人に弱弱しい笑顔で「大丈夫」となんとか立ち上がった。ゆっくり立ち上がったつもりが、フラリとよろける。

（……ハァ。結構キツイな……）

どうして私達はこんなに寒くて凍てつく大地に立っているのか。それは、これから5キロのマラソンコースを走らねばならないからだろ、と自分で問うて自分でツッコむ荒井美千子。

今日は山野中の3学期のメインイベントである、「校内マラソン大会」の日であった。

山野中では1学期に遠足や郊外活動（修学旅行を含む）、2学期に体育祭と文化祭、そして、3学期には合唱コンクールとマラソン大会、球技大会が行われる。マラソン大会と球技大会は毎年交互に行われており、今年はマラソン大会の年だった。男子が約7キロ、女子が5キロのコースを学年ごとに別れて順番に走る。でも実質走るのは1、2年だけで、3年はウォーキング可だ。これは受験を控えた3年の為の配慮であり、心理上受験前に勝負事でハッキリ勝ち負けをつけぬ為の対策であった。

私達の年代は運悪く在学中に2回マラソン大会をすることになるのだが、このマラソン大会がかなりの曲者なのだ。

「山野中大マラソン大会」、別名「部活対抗体力合戦」

別名が付く通り、マラソン大会とは表向きの名前であって、要はどの部活が体力的に優秀な人材が揃っているかという、しょーもない部活同士の戦いなのである。

大体部活動はそれぞれ趣向も意図も異なるので、比べて競うのは基本的に無理な筈だ。「しかし体力は別！」というのが運動部の顧問や保体の先生たちの持論であり、体力の度合いを比べるには、「走る」が最も手っ取り早いと考えているのだ。もちろん、正確な体力測定云々を抜きにしての話だ。

このイベントになると、部活の部員同士……というより、顧問同士が火花を散らす。

正真正銘、マラソン本業の陸上部を担当している3年体育教師の箕輪（みのわ）。

「恐怖のＧＯＧＯランニング」で名を馳せている、バトミントン部顧問こと2年英語担当・一之瀬（いちのせ）。

サッカー部の顧問で、同じく2年担当体育教師の堂本（どうもと）。

野球部顧問で普段はおとなしい国語古株教師なのに、「こっちが

本業じゃないか？」と噂されるほど、部活の野球となると途端に厳しくなる二重人格の住友爺（すみともじい）。

特にこの４者は並々ならぬ情熱を注いでおり、「隔年２月限定鬼の四天王」と呼ばれるほど、マラソンに掛ける気合の入れようったら尋常ではないらしい。

が、迷惑なのはその顧問をもった部員達である。それ以上納得できないのは、運動部でもないのに巻き込まれ気味の文化部の生徒達だろう。

「ミっちゃん。あまり辛いようなら、先生に言った方がよくない？」

「でもさ、あの『沖（おき）』が生理くらいで休ませる？」

「問題はそこだよね」

私は非常にありがたいことに、生理二日目というなんとも「グッジョブ！」なコンディションであった。

（くそぉ、いつもは生理不順なくせに、マラソンする今日に限って規則正しく２８日周期ピッタリにお客が来るってどういうこった？！）

やはり立っているのが辛くて、項垂れるのと同時にまた座りこんでしまった。

そうなのだ。心配してくれる２人言うとおり、プールじゃない限り、あの「沖先生」は生理ごときでマラソンを棄権させるなんてことは絶対にしない。１年女子保体の担当「沖先生」は、箕輪と同じく非常に生徒に厳しかった。まぁ、保体の先生は極度に厳しいか、フランクで面白くて生徒に人気があるかどちらかではないだろうかと私は思っている。そんな沖先生は生理痛ぐらいではビクともしないうえに、「月一回の出血くらいなんだ！　運動して思う存分垂れ流しとけ！」などとピンクの口紅を塗っている口から唾を飛ばすようなお人だ。

「……だ、大丈夫。なんとかいける……かも」

私は膝の上に頭を乗っけながら、縮こまった。「ミっちゃん、頑張れ！」と2人は私を挟むようにピッタリ寄り添ってくれる。この年頃女子特有のジャレ合いに「フフフ」と笑い声を上げる3人。

「……それよりもさぁ、来週のバレンタイン！　ねぇ、ミっちゃん？」

気分がすぐれないものの、心はドキっと反応してしまった。

そう、来週の土曜はバレンタインなのだ。女の子にとっても男の子にとっても1年でもっとも落ち着かないメインイベント。もちろんチョコをあげたい相手はいる、が……。

「本当に、田宮（たみや）にあげないの？」

幸子女史が具体的な名前を言ったので、カァっと顔が赤くなってしまった。コクンと頷くと「なんで～？！」と不満そうな声を上げる。

「……だ、だって、見てるだけでいいし。チョコなんて恥ずかしいし、告白する勇気なんて、とても……」

私が声を小さくして言うと、「え～！　やってみなけりゃわからないじゃ～ん」と幸子女史が残念そうに口を尖らせた。私は苦笑しながらまた膝の上におでこを乗せた。

本音を言わせてもらえば、そりゃ私だって……という気持ちは、ある。できればチョコを渡したいし、告白もしたい。けど、相手はあの田宮君。

（普通に無理だよ）

最近の女子情報網の中で、「爽やかだし乱暴じゃないし背が高いし、イイ感じだよね」というのが、田宮君について聞く噂だった。佐藤君や類人猿ほどではないにしろ、笑うと目尻の皺がなんとも可愛らしいということもあって結構人気が高い。あの成田耀子（なりたようこ）が狙っているという話まで伝わってきている。私に言わせてもらえば、「みんな、気付くの遅すぎですからっ！」と全女生徒共に喝を入れたいくらいだ。

「そうだね、いいんじゃない？　無理することないよ。本人が告白しようと思った時でいいんだからさ。周りが騒いだり、おせっかいしたら上手くいかなくなるよ」

和子ちゃんは優しい声で言いながら腰の辺りをさすってくれた。

そう、和子ちゃんは「好きなら告白は本人の口から言うべし！」という硬派な考えの持ち主で、よっぽどの事がない限り橋渡しなどを引き受けないし、そういった行為が嫌いだった。「お願い、一緒についてきて？」だとか「ねぇ、代わりにお願い！」などの代理を頼む女は、「ケッ」と鼻毛以下の扱いをする厳しいお方である。その関係で入学当初、尾島目当てで和子ちゃんに近づいた原口美恵（はらぐちみえ）と上手くいかなくなったくらいだ。でも、私には絶対持ち合わせていない、その揺るぎない態度に羨ましさと眩しさを感じる今日この頃である。

それに田宮君に関しては今のところ眺めているだけで十分お腹が一杯というのも正直な気持ちだった。もれなく付いてくる成田耀子と争う気力はこれっぽっちもないし、まず勝てる気がしない。

……そして、小関明日香（こせきあすか）。

（なんだかなぁ……）

彼女は何故かいつも田宮君の傍にいる。もちろん同じクラスで同じ部活だから、当たり前と言われればそれまでなのだが。どうもあのクリスマスパーティー以来、私は彼女が苦手になってしまった。笹谷さんの言葉を聞いたせいもあるかもしれない。

『問題は自分のお気に入りが他の人と友達以上になりそうなのを嗅ぎつけると容赦ないのよね』

あのリスのような可愛らしさに潜んでいる毒がいかなるものなのか、私にはまだ理解できない。しかし、あの天然爆弾発言を思えば、近づかない方が無難であることはわかる。どちらにしろ厄介な相手ばかりが、気になる人の周りをウロウロしているのは確かだ。縄張りをマーキングしている手強い獣達の領域に近づくほど私もバカではい。

（成田耀子、小関明日香、それに原口美恵かぁ。……って、あれ？　何故、原口美恵？？？）

最後に出てきた関係のない名前。別に彼女は田宮君狙いではない筈。

訳がわからず辛い頭を捻って考えてはみたがすぐに止めた。第一それどころではない。なんせ腰とお腹が痛い。心なしか頭痛がひどくなってきた。

（薬飲んできたけど、大丈夫かな）

心配になってお腹を摩ると、後ろからトンと背中を叩かれた。

「ちょっとぉ、寒いから私も入れなさいよぉ」

背後から声を掛けたのは、笹谷さんだった。

長くなった茶色いサラサラのワンレンを二つに括って、唇にはリップが塗ってあるらしく濡れているように光っている。もちろん笹谷さんも女バレ専用のシャリジャージ上下を着こんでいた。

「あら？　美千子、どうしたの？」
「ほら、アレだよアレ」
「今日二日目だって」
「……あちゃー、薬飲んだ？　私持ってるよ？」

笹谷さんは眉根を寄せながら私の前に座った。私は「大丈夫、一応飲んできた」と再び顔を上げ、溜息を吐いた。ともかく早くこんなマラソン大会などを終わらせて、家で横になりたかった。こんな凍えた芝生の上では横にはなれない、凍死してしまう。

拡声器を通して「2年男子、スタート地点に集合しろ！」という箕輪の声が辺りに響き渡った。またその声が辛い身体によく染み渡るからやり切れない。

「あ、そうだ！　ね、ね、貴子、昨日どうだったの？　やっぱ日下部先輩に告白されたの？！」

斜め下に見えるグラウンドのマラソンスタート地点に集まっている男子生徒を見ながら、幸子女史が声を弾ませて笹谷さんの肩を叩いた。

「えぇ？！　……昨日って、その……」

笹谷さんはほんのり頬を染めながら声を段々と弱めていく。そんな可愛らしい彼女の身体に、「このぉ、羨ましい奴め！」「し、幸せ者～」「詳しく聞かせなさいよ！」と私達はふざけて一斉に抱きついた。笹谷さんも「きゃぁ～助けてぇ～」と調子を合わせて暴れだす。

「あ！　ね、見て！　あそこ、日下部（くさかべ）先輩いるよ！　ほら、貴子、手を振ってあげなよ！」

幸子女史がスタートラインの前方にいた上半身だけ白とブルーのジャージを着たサッカー部の集団の方を指さして叫んだ。「ほら！」「え、いいよ…」と幸子女史と笹谷さんが押し問答していると、サッカー部の集団の方がこちらに気付いたらしく、何人かが日下部先輩を叩いたり肘鉄を食らわせながら、逆に私たちの方を指さした。

「やった、気付いた！　せんぱ～い、頑張って下さ～い！　……ってほら、貴子も！！」

幸子女史は立ち上がって2年のサッカー部男子に向かって声援を送ると、笹谷さんを無理矢理立たせ前面に押し出した。笹谷さんは「え？！　ちょ、ちょっと」とグラウンドに背を向けそうになるのを、3人でガシリと身体と腕、足を押さえつけて、代わりに笹谷さんの腕を振った。日下部先輩は照れ臭そうに片手を上げるだけだったが、顔は嬉しそうだった。

周囲のサッカー部員から、さらに激励の一撃を受ける日下部先輩。

そのうち箕輪の「位置について、ヨーイ！」の声が響き渡り、「バン！！」というピストルと共に2年の男子が一斉にスタートを切った。男子は競技場のグラウンドを一周した後、外に出て公園をグルリと囲む5キロのマラソンコースを1周半するのだ。

「始まったね」

笹谷さんがホッとしたようにポツリと呟くと、私達も溜息を吐いた。

「……日下部先輩って、素敵よねぇ」
「文句無しの満点よね、なんせ落ち着いているし？」
「きょ、今日はメガネじゃないんだね」
「うん、サッカーの試合と走る時はコンタクトなんだって」
「「「ちょっとぉ、いつのまにそんな情報をっ？！」」」

幸子女史、和子ちゃん、私の順で感想を漏らすと、笹谷さんがポロっと答えた。すぐさま食らいつく3人。キャァキャァ騒ぐ4人は恋に一喜一憂する乙女な中学生そのものである。そんなピンクな雰囲気のおかげで私の身体も少し熱くなり、痛みは多少和らいだ……気がした。笹谷さんの顔を見たら、頬を染めているし、まんざらでもなさそうな顔をしている。

（……良かった。笹谷さん、もう桂君のことは過去になったみたいだね）

かつては手首に絆創膏を貼るほど桂君のことを思いつめていた笹谷さん。

晴美先輩（はるみせんぱい）と桂君の噂はこの頃になると揺るぎないものに変わり、最近では卒業する晴美先輩との短い学校生活を満喫するため、かなりの頻度で一緒にいる現場を目撃することが多くなった。

しかし、私から言わせてもらえば、桂君は晴美先輩に言いように

操られているだけのような気がしてならない。どうみても晴美先輩は、彼女の立場やポジションにハクを付けるためだけに、桂君を利用してるとしか思えないのだ。その見返りにお楽しみな時間がもらえれば、それはそれで年頃の桂君にとっては十分魅力ある取引になるのかもしれないが。

（まったくもって不潔だけどね。でももう笹谷さんには関係ないよね？　日下部先輩の方がう～んと素敵だし！）

競技場を出ていく2年男子の後ろ姿を、なんとなく目で追った。

先頭を陣取っているのはサッカー部のジャージである白とブルーの集団。その中心にいる日下部先輩。

現在2年生である彼は、成績優秀だけではなく、サッカー部の副部長と生徒会の役員を務めており、「優等生」を模範にしたようなお方である。

3年の元部長の菊池先輩のようにすこぶる爽やかで明るいってわけでもないし、特別顔がイケメンってわけでもないのだが、黒目が大きく優しい目元をしており、キラッと光る（ように見える）八重歯が魅力的の男子だった。普段は銀縁のメガネをしてるが、スポーツの時になるとメガネを取ってしまう。これがまた女生徒には堪らないらしく、後で言うところの「萌え」をつくと言ってもいいだろう。メガネ特有の大人っぽい真面目なお固い雰囲気から、メガネを取った途端、スポーツを得意とするヤンチャな少年っぽい可愛い雰囲気に１８０度変身してしまうのだ。それに加え、女の子が近付くと困ったような弱ったような照れ臭そうにする姿に、女子生徒の十人中十人が母性本能をくすぐられ完全にヤラレてしまうとの噂だった。また、山野中一のイイ女・晴美先輩が言い寄ってもビクともしなかった、というのが彼の女子人気にさらに拍車を掛けた。

そんな影で絶大な人気を誇る日下部先輩が見染めた女生徒が、目

の前にいる笹谷貴子である。

彼は頭も人柄も雰囲気も良いだけではなく、女の目の付けどころも相当肥えた眼力をお持ちのようだ。キッカケは去年の秋の運動会。体育祭委員であった笹谷さんは、生徒会役員と一緒に仕事をする機会があり、そのときに日下部先輩とお知り合いになったとのことだった。

山野中の『伝説』通り、サッカー部である彼は、バレー部員の中でも抜きんでて綺麗系で大人っぽいクールな雰囲気の笹谷さんが、スピーディー且つ出しゃばらない仕事ぶりと痒い所に手が届く心気遣いに、完全ノックダウンされたらしい。

体育祭が終了した辺りから、バレー部の方をサッカー部の集団がチラチラ見ては日下部先輩をからかっていたが、それはどうやら笹谷さんが目当てだった模様。3学期に入ったとたん、日下部先輩が笹谷さんに猛烈アタック！……とまではいかないが、サッカー部から転がって来たボールを笹谷さんが拾うと、日下部先輩自ら取りに行くという光景が目に付き、廊下や部活の帰りに顔を合わせると積極的に挨拶するまで行動に出てきた。そしてとうとう昨日、部活の帰りに、笹谷さんだけサッカー部の2年生数名に拉致されてしまったのだ。

「んで、やっぱ、昨日、告白されたの？」

幸子女史の言葉にグッと息を飲む2人。一方笹谷さんは顔を真っ赤にした。それだけで答えを出したと言ってもよい。

「「「告白されたのね？！」」」

3人が大きい声で一斉に叫ぶと、笹谷さんは既に茹でダコ状態で湯気が見えそうな頭を、コクリと縦に動かした。その姿はギュゥっ

と抱きしめたいほど可愛くて、女の私でさえも「ハートにズキュン☆」ものだった。さすがに身体が本調子でない私も和子ちゃん達と共に「キャー！！」とさらに騒いだ。静かにしてと人差し指を唇に当て慌てる笹谷さん。

「え、え、じゃぁ、カレシ決定なの？！」
「……あ、いや、そういうんじゃ……」
「どういうこと？　告白されたんでしょ？！」
「そう、なんだけど……」

笹谷さんは幸子女史と和子ちゃんの迫る意見に困ったように微笑んだ。

静かに話し始めた笹谷さんによれば、サッカー部2年数名に拉致られはしたが、それは日下部先輩が頼んだ訳ではなく、周囲が煮え切らない日下部先輩を見かねて、笹谷さんと2人っきりにしたかっただけらしい。

日下部先輩は笹谷さんに「なんか……情けないんだけど、アイツらのおかげで一緒に話せて嬉しい」と言ったそうだ。とりとめのない話を少しした後、とうとう日下部先輩は「君が好きだ」と告白した。お互い真っ赤になりながら黙っていると、「あ、でも、そんなすぐ付き合ってくれっというわけじゃなくて、最初は、友達から。色々話をするだけでも……」と欲求不満な飢えている野獣を匂わすことなく、なんとも健全で清い男女交際希望を前面に押してくれたのだ。

盛り上がりを見せる展開に、「ギャー！！」とパワーアップした興奮で騒ぐ乙女なヌリカベトリオ。

「で、で、貴子はどうなのさっ？！」
「なんて答えたの？！」
「え？　……それは」

鼻息の荒い2人の質問に笹谷さんが答えようとしたところで、拡声器から出るあの「キィィィーン」という不快な音が響き渡った。

いいところに水を刺すのは、お呼びでない体育教師・箕輪。

「1年女子！　もうそろそろ準備しろぉ！　今のうちトイレ済ませろよ！」

超デリカシーのない言葉を周囲に振りまいている箕輪の声で、一気にピンクな雰囲気が空と同じグレーに塗り替えられてしまった。少しはマシになったお腹の痛みが再びぶり返してくる。どうやら痛みが和らいだと思ったのは気のせいだったらしい。

「あ～もう！　いいところなのにぃ」

思いっきりボヤく幸子女史に笹谷さんは苦笑いをしながら「まぁまぁ」と言った。後で詳しく報告するように！　と3人から迫られた笹谷さんは、観念したように笑って頷いた。ひとまず笹谷さんの恋の行方話は休戦に持ち込み、私達はマラソンの準備をし出した。

「……それにしても、美千子大丈夫？　トイレ行っておいたら？」

笹谷さんがシャリジャージの下を脱ぐと顔を覗き込んだ。私も同じくフラフラになりながら下を脱ぎ頷く。部活用のジャージ着用可だが、上下着てしまうと学年がわからなくなるので、上着のみ残す。一枚脱いだだけなのに、本格的に寒い……。

「ちょ、ちょっと、トイレ行ってくる」

「あ、私も行くよ」

ハァと一息溜息を落としてトイレの方へ歩きだしたら、笹谷さんも隣に並んでくれた。和子ちゃん達は私達2人分のジャージを持って、向こうで待ってるからと下の方へ降りて行った。1年の女子らしき生徒もボチボチ競技場のトラックに降り始めている。私と笹谷さんは「急ごう」とトイレがある体育館の方へ歩きだした。

＊＊＊

用をたしてナプキンを変え、トイレの洗面所で手を洗うと幾分か気分が和らいだ。これで少しは持ちこたえられるかもと自分を励ましながら腰を摩る。

「それにしても二日目なんて、最悪だね。美千子も生理痛重いの？」

私は首を振った。いつもならこんなに生理痛も酷くないし、不快感が少しあるだけだ。生理不順で周期が長い筈なのに、年に数回キッカリ28日周期で来る時がある。その時だけ生理痛が重く出血も多いのだ。普段生理痛が軽い分この当たり日の痛さが尋常ではない。それを笹谷さんに言うと、「そっかぁ」と頷いた。

「さ、笹谷さんはどう？　やっぱり重いの？」

「うん、私は28日ピッタリに来るよ。しかも二日目なんて最悪、薬ないともうダメ。腰痛くてオバァさんみたいになるもん。量も多いしナプキンじゃ不安だから…」

笹谷さんはヒソヒソ声で『多い日はタンポン使わないと安心できなくて』とこっそり打ち明けてくれた。ギョッとした顔で笹谷さんを見ると、ん？　とした表情している。『わ、私、使ったことないの』と囁くと、あぁと納得したように笑った。

「中学生じゃ使っている人、少ないよね。うちは姉貴が使ってるから、自然とね」

私はハハハ……と力なく笑い、ポケットからハンカチを出して手を拭った。

さすが笹谷さん。こんなところまでススんでいるとは、どうりで大人っぽい訳である。私なら考えられない。だってアレをアソコへ……と変な想像しただけで赤くなるどころか、さらに気持ち悪くなってしまった。

（ダメだ、別の事考えよう……今はマラソンに集中だよ。あと数時間持ちこたえないと……）

頭の中で大好きな「元●が出るテレビ!!」を思い浮かべ、ビートたけしと高田純次の何とも言えないド・ストライクなコメントを無理矢理記憶から引っ張り出した。なんとか気持ち悪さから気を逸らすように精一杯気分を盛り上げる。

「ねぇ、ねぇ、美千子は来週どうする？　チョコ、上げないの？」

精一杯盛り上げたおかげか。薄ら笑いまで出てきたところで、笹谷さんが肩を押しながら聞いてきた。

「え？」

笹谷さんの方へ向くと、彼女は意味深な顔をして体育館の入口の方を目配せした。

RUN・乱・ラン♪？（後書き）

新キャラ、日下部先輩登場。「天才たけしの元気が出るテレビ」、これも大ヒットした番組ですね！見たことがない方は、機会があったらＹｏｕＴｕｂｅなどで検索してみてください。ビートたけし先生と高田純次先生若い！！「こんな○○はいやだ」シリーズに大爆笑した記憶があります。それと「ダイブッコン」（漢字忘れました）、あまりのバカバカしさにむしろ神がかり的なものを感じます。

RUN・乱・ラン♪？

そこにはかなり大きい人だかり……というより、大まかな2つのかたまりが合わさっているという感じの、賑やかな集団が目に入った。

集団はうるさい2年も3年もマラソンで出払っているので、堂々とベンチに座って寒さから非難しているらしい。

……体育館などの施設の中にはトイレ以外入ってはいけないというのに。

片方の塊には派手な赤と黒のジャージを着ているバスケ部の集団だった。もちろんその中には田宮君（たみやくん）もいた。そして小関明日香（こせきあすか）や成田耀子（なりたようこ）も。

もう一方は白とブルーのジャージ。その中心人物は言わずと知れた野生猿で、佐藤君（さとうくん）も一緒だ。他の部活のジャージもチラホラ混じっているが、その一つにグレーとピンクのシャリジャージが数名いる。こちらは原口美恵（はらぐちみえ）とその取り巻き連中だった。

マーキング中の猛獣が揃っているせいなのか、それとも生理中だからか。急激に気分が下降し、腰が痛くなった。せっかくの高田純次大先生のコメントも効果が薄れていく。

（和子ちゃん達、来なくて大正解だな）

隣の笹谷さんも、嫌な連中がいるなという複雑極まりない顔をしている。私は首を振りながら苦笑いで返した。

「そ、それ、さっき幸子女史からも言われたよ。でも、やめとく」

「告白しなくてもさ、チョコだけあげたら？」

「ん……だけど、ほら……」

田宮君の周りにいるバスケ部女子の人だかりに視線をやると、「あぁ……彼女らね」と今度は笹谷さんが苦笑した。

「そ、それに見てるだけで十分だし。どちらかというと、目の保養っていうか……」
「確かに。田宮君って笑うと可愛いよねぇ。目尻の皺がさぁ、背も高くなってきてるしね？」
「そ、そうなの！　クシャリとした笑顔を初めて見たあの時は、さすがのリバー様も霞んじゃったよ」

私が後半興奮気味で言うと、「やだぁ、美千子ってば」と笑った。私達は顔を見合わせてあらためてフフフと笑う。
（まだ私には告白なんてなぁ……。もっと痩せて、もっと自信がついてからでないと。それに私にはリバー様がいるし！）
将来伴侶になるであろうリバー様似の、金髪碧眼である未来の夫を思い浮かべ妄想を繰り広げると、再び気分が高揚して来た。なかなかいい調子である。

「そ、それよりもさ。昨日和子ちゃんと話してたんだけど……」

私は昨日笹谷さんが拉致られた後、３人で話し合った話題を彼女に告げた。
昨年暮れにお世話になった『まるやき』の店長こと「蝶子（ちょうこ）さん」に、お礼としてチョコを上げてはどうかと話が出たのだ。決して、「蝶子さんって男だよね？」という意味ではない。あくまでも休憩時間を開けてくれた感謝のしるしし、としてだ。笹谷さんは顔をパァっと綻ばせて盛大に頷いた。

「蝶子さん、きっと感激して泣いちゃうわ！」
「そ、そう？　……でさ、来週の祝日に集まってチョコ作らないかって言ってるんだけど。ちょうど試験休みに入るから、１４日の土曜日の午後にでも渡しに行こうかって」

「……え？　土曜日？」

笹谷さんは急に気まずそうに声を弱め俯いた。頬が薄ら赤くなった様子にさすがの私もピンときた。バレンタイン、試験一週間前で全部活動停止、しかも土曜で午後はフリー。

「……あ、も、もしかして、日下部（くさかべ）先輩？」

「へっ？！　あ……あの」

下からのぞいて言うと、笹谷さんは恥ずかしそうにしながらも観念したのか頷いた。「実は……」とモジモジしながらキョロキョロ辺りを見回し、お預けになった笹谷さんと日下部先輩のその後を教えてくれた。私は一足早くお宝情報をＧＥＴのようだ。

『土曜の午後……一緒に図書館で、勉強しないかって』

『えっ？！　さ、早速デートですねっ？！』

『……そう、なるの、か……なぁ』

『そ、そうですがな！』

興奮した面持ちだが、逆に声を顰める２人。

さすが日下部先輩、勉強と言う大きな盾を掲げて、しかもバレンタインの日に初デートを誘うとは……なかなかの策士である。私たちはヒソヒソと話しながら、ざわついている集団の横を通り過ぎ、外に出ようとしたところをある声が呼びとめた。

「ちょっと、ちょっと、貴子ちゃん！！」

呼びとめたのは、あの「小リス」こと小関明日香だった。

興奮したような大きな声が響き渡り、それぞれ固まって談笑していた集団も話を止めて、小関明日香の方へ注目した。

シーンとした空気が体育館入口を通り抜ける。
小リスは満面な笑みに小悪魔的なスパイスを口元に湛えながら、ズンズンとこちらに寄ってくる。私はその笑みを見ただけで、背中が寒くなり気分が悪くなってしまった。無性に嫌な予感がして……こういうときの予感は何故か当たるのだ。

「ちょっと、聞いたよ、貴子ちゃん！　あの日下部先輩から告白されたんだってぇ？　付き合うの？！」

彼女の大きな声は体育館入口付近に響き渡った。

その場にいた全員の息を飲む音が聞こえた……気がした。
が、次第にざわつく生徒達。「え？」「うそ？」「日下部先輩と笹谷さんが？」などの声が僅かに聞こえてくる。
（なななな、なんで小関さんが？！）
こんな昨日の放課後出来立てホヤホヤのショッキングネタ、ニュース速報でもなけりゃ知り得る情報ではない。小リスはお宝情報どこから仕入れてきたのだろうと感心しつつも、私も笹谷さんも固まったままだった。

「ね？　ね？　どうなの？」

当の小関明日香は屈託ない顔をしていた。
……無垢な顔をしているが、私にはそれが薄ら寒く感じた。背後から黒い羽と細くて先が鋭利な尻尾が見えるのは気のせいではない。
彼女に対し、怒鳴りたい気持ちが沸々と湧いてきた。顔が強張るのが自分でもわかる。

本人のなんの了解もなく、あんな大きな声で皆の前で披露していい内容では決して、ない。

普通の神経ならばありえない。ハッキリもしない噂話なんて、本人目の前にして大声で言っていいことではないし、もし確かめたかったらこっそり聞くのが礼儀ってもんだ。ましてや後方の集団の中には……。

集団の中には、知っている顔ぶれも数名いた。

彼女の友人であった原口美恵もいるし、そして「ロクでもないんジャー」のメンバーもいた。もちろん、あの桂龍太郎（かつらりゅうたろう）までご丁寧に揃っている。

原口美恵は口に手を当て、ショックを隠せない様子だ。尾島、諏訪君（わくん）、後藤君（ごとうくん）にいたっては、目を見開いたままだった。

では、桂龍太郎は？

「……」

一言で言うなら、「ヤバイ」である。

冷えるような目で笹谷さんを見ている……というより、睨んでいた。

（おいおい……不良なら、マラソン大会くらいバックれろよ！　こんな時に限って何故ご丁寧に参加している？！）

無論心の中だから言えることであって、実際はその姿を見るだけで怖い。

ここに和子ちゃんがいないことが悔やまれた。小悪魔に対抗できるパーティーとしては私では役不足だ、しかもコンディションが非常によろしくない。激しくなる腹痛腰痛を抱えながら必死にここからの撤収方法を考えていたら、箕輪（みのわ）の事を思い出した。そうだ、もうそろそろ1年女子のマラソンが始まる。ここでくつろいでいる皆さんには、あのアナウンスは聞こえなかっただろう。「もうそろそろ集合時間だって箕輪が言ってたよ」と口を開こうとする前に、ある声に遮られた。

「へぇ～生徒会役員さんとねぇ。地味な中学生同士お似合いじゃねーの？」

絶対言ってはいけないこの世の禁句用語が、絶対言ってはいけない人の口から出た。

こんな大勢の前で、とんでもない発言をしたのは、命知らずの『裏番』こと桂龍太郎。笹谷さんと桂龍太郎は、途端に全員から好奇心と驚愕の視線を受けた。

（ど、どうして？）

笹谷さんから離れて行ったのは彼の方だった筈だ。

なのに元彼女の恋を応援するどころか、こんな非難まがいの言葉を吐くしかできないなんて。

私は怒りと同時に、そんなことしか言えない桂龍太郎がとても気の毒になった。

笹谷さんはギリっと歯を食いしばり、グッと拳を握った。彼の殺人光線ビーム並みの視線を真っ向から受け、それに負けないぐらいの凍結ビームをお見舞いしている。

両者の間に目に見えない火花が激しく散った。
瞬く間に辺りがいっぺんに地獄と可する体育館入口。灼熱のマグマや血の池、針の山などが私には見える。けどそれは数秒で、急に笹谷さんはフッと笑った。

「……あら、やだ。悪いけど桂君にだけは言われたくないなぁ。あなたと晴美先輩から見たんじゃ、どう見たって全校生徒はみんな地味でしょよ」

厭きれたような、しっかりとした余裕のある笹谷さんの声。
（お、お見事、笹谷さん！）
「確かに」という無言の答えが、この場にいる全員から聞こえた。しかも笹谷さんは口元だけニヤリと弧を描いていおり、『裏番』はその暗雲たち込める笑みに一瞬ギクっとした……ような気がする。笹谷さんの氷結光線は、もうすでに存在しないかのように龍からあっさり逸れて、子リスに移動した。小関明日香をチョイチョイと呼ぶ笹谷さん。「え？」とウキウキした様子で笹谷さんに近付く小関明日香の耳に、そっと何かを囁く。

小関明日香の顔が最初笑顔だったのが、その内笑みが消え、強張り始めた。

笹谷さんがスッと小リスから顔を離すと、小関明日香はたちまちギラリとした眼で笹谷さんを睨んだ。　その姿はさすが親戚同士、類人猿の本気モードを彷彿させる。ぜひこの顔を後方に控えている集団の皆様に見ていただきたいが、残念ことに小関明日香は彼らに背を向けていた。一方笹谷さんは小リスのそんな睨みはビクともしないどころか、意味深な笑いを浮かべ、小リスの肩をトントンと二度叩いた。

「というわけで、そこんとこヨロシク、小関さん。さ、いこうか、美千子」

笹谷さんはポカンと見守ったまま動かない集団と、いつも通りの表情に戻そうとしている小関明日香に冷たい一瞥を残し、私の腕を取り体育館の扉を開けた。

緊張の糸が切れたようにザワザワと話をする集団。こちらを睨んだままの桂君とその横で何か囁く尾島達。そして、「ちょっと、なんて言われたの?!」「やっぱ日下部先輩のこと本当なの?」などと小関明日香に走り寄るバスケ部員達が見えた。

RUN・乱・ラン♪？（後書き）

貴子は小リスになんと言ったのでしょうか。その内容はいずれ出てくる…かもしれない（＾＾；）

「さ、笹谷さん！」

小走りする笹谷さんの後を追いかけ、隣に並んで顔をそっと覗きこんだ。まっすぐ前を睨んでいた笹谷さんは、唇をきつく噛んでいた。

「……」

私はその顔を見た途端、胸が締め付けられ、不覚にも自分が泣きそうになってしまった。

（バカ……私が泣いている場合じゃないのに……）

何故か無性に自分のことのように悔しかった。女子プロ並みに腕力と勇気があれば、あの場にいた小関明日香（こせきあすか）と桂龍太郎（かつらりゅうたろう）の頬を張り飛ばして、ギッタギタにしてやりたいくらいだ。脳内で二人の胸倉を掴んだところで、笹谷さんはとうとう足を止めて俯いてしまった。

「……ホント……もう、やだ……」

やっとの思いで絞り出した、笹谷さんの呻く声。

聞くだけで苦しくなってしまうその声に、我慢できずにとうとう私の方が先に涙が出てしまった。

（……笹谷さん……まだ、桂君のことを）

おそらくそういうことなのだろう。

桂龍太郎はほんの好奇心程度で笹谷さんにチョッカイ出したのかもしれないが、笹谷さんは本気で彼が好きだったのだ。それなのに桂龍太郎の方から一方的に離れて行き、しかもちゃんとした別れの言葉もないまま有耶無耶になってしまった。中途半端に断ち切られ、

いまだ心の中で燻っている相手を忘れようと思っても、「はいそうですね」とできるほど人間都合よくできていない。
それなのに。桂龍太郎は、絶対言ってはいけない冷たい言葉で、いまだに想いを秘めている笹谷さんを突き放してしまったのだ。

「……美千子」
「……うっ……」
「私……多分、日下部先輩と付き合うことになると思う……」
「……ぅん……グスッ」
「もう、桂なんて知らないし、関係ない。だから、前に言ったこと、忘れてくれる？　……日下部先輩のこと応援してくれる？」
「……」

笹谷さんは顔を上げて私を見た。その茶色い瞳に怒りと悔しさと悲しさと寂しさと……そして、涙をためて。
私にできるのは……。

「た、貴子……」
「……！！」
「わ、私、去年言ったよね……覚えてるかな？」

私は一呼吸おいて、ハンカチで涙と鼻水を拭いながら言った。初めて笹谷さんと近づいた、あの秋の日のことを思い浮かべながら。

「『大人っぽい年上の人が合うよ。笹谷さん綺麗だし、桂君にはもったいない。私は絶対、そう思う』って。わ、私、あの時から意見変わってないから。日下部先輩は桂君とは違う。おお大人っぽい年上だし、絶対イイ人だ、よ。それに、た、貴子にちゃんと『好きだ』って言ってくれた」
「……美千子……」

私は頑張って鼻水を啜りながら一気に言った。ここでハッキリ言わなければ、いったいいつ言うのだ、というように。初めて笹谷さんのことを名前で呼んだりして、ちょっと恥ずかしかったけれど。照れ臭さを誤魔化すようにぎこちなく笑うと、彼女は涙をホロリとこぼし、慌てて袖で拭った。

「……ありがとう」

笹谷さんはお礼の後に、「……でも。日下部先輩、人気あるから、大丈夫かなぁ」と苦笑した。

確かにそうだ。あれだけ人気がある日下部先輩、例え公認の仲になったとしても、ヤッカミが多そうだ。桂龍太郎にしろ日下部先輩にしろ、大物ばかり相手で笹谷さんもなかなか難儀な人生を歩んでいる。

「だ、大丈夫。和子ちゃんや幸子女史もいるし。……わ、私じゃ、あんまり役に立ちそうもないけど……」

「そんなことないよ、頼りにシテマス」

笹谷さんは涙目だけど悪戯っぽい表情をすると、やっとお互い頬を緩め、微笑みあった。

「おい！　そこの1年、もうそろそろスタートだぞっ」

急に声を掛けられ、2人ともビクッとした。なんと薄手ジャージ姿の箕輪がこちらにズンズン歩いてくる。私達2人は一気に背筋を伸ばし「ハ、ハイ！！」と即答し駆け出そうとしたが、何を思ったのか笹谷さんはくるりと方向を変え、箕輪先生の方に近づいた。

「先生！」
「ん？　なんだ？」
「体育館に1年生が大勢いました！　休んでいるみたいです」
「なにぃ？　本当かっ！」
「はい、まだいると思います！　注意しようとしたのですが、時間がなくて……」
「そうか、わかった！　オマエ達は早くグラウンドへ行け！」
「はい！」

笹谷さんの言葉に箕輪は目を吊り上げ、ドスドスと肩を怒らせながら体育館に向かった。「フン、イイ気味！」と、笹谷さんは静かに吐き捨て意地悪い笑みを浮かべた。唖然としながら笹谷さんを見たが、箕輪が体育館に消えると、これから起こることを想像してしまい、私は思わず吹き出してしまった。
（佐藤君と田宮君には気の毒だけど、しょうがないよね）
さらに笹谷さんは体育館に向かってアッカンベーをしたので、私はお腹も痛いのを忘れて爆笑してしまった。
ささやかな復讐を果たした2人は、「あ～スッキリした」と言いながらグラウンドの方へ向かったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊

ハァ、ハァ……。

誤解しないでほしい。
これは電話越しに聞こえる変態男の喘ぎ声でもないし、満員電車の中で背後にピッタリくっつく痴漢の興奮した声でもない。
この声はれっきとした、荒井美千子の喘ぎ声である。しかも糖度はゼロ。どちらかというと非常に辛いシチュエーションの中で醸し出される声であった。

（つーか、もうダメ……）

女子1年のマラソンがスタートして、そろそろ30分……が経過している、多分。

初めは緊張で気分の悪さがなんとなく誤魔化されていたけども、グラウンドから出てマラソンコースに入った途端、お腹と腰の痛みが増してきた。また前方から吹きすさぶ北風がさらに拍車を掛ける。和子ちゃんや貴子の励ましを受けながら、先頭とはいかなくてもなんとか中堅どころの集団についてこれたが、開始10分を切った辺りでもう限界だった。

『ミっちゃん、大丈夫？』

『さっき沖（おき）がいたでしょ、戻って先生に言ってこようか？』

『なんか、顔色真っ青だよ……無理しない方がいいよ』

和子ちゃん達だけでなく、奥住（おくずみ）トリオまでが私に気を使ってくれた。

おかげで全員の足が止まってしまっているその横を、どんどん通りすぎる他の生徒達。その中には赤と黒の派手なジャージのバスケ部や原口美恵達の集団がいた。彼女たちはチラリと見ただけで、我関せずと通り過ぎて走っていく。

（……くそぉ、なんかムカつく……。けど、今はそれどころじゃない）

自分の身体は自分がよくわかっている。もうこれ以上無理して走ったら、おそらく倒れるだろうと自覚した私は、みんなに先に行くよう言った。どうしようと顔を見合わせる彼女達。貴子と和子ちゃんは反対したが、私としては、特に貴子には、あの通り過ぎた原口美恵と小関明日香に絶対負けてほしくない。それに、ここにみんな立っているだけでは何にもならないし、どんどん1年女子は先に行ってしまう。

『ご、ごめん。私はゆっくり歩いてゴールするから、やっぱ先に行ってくれる？　と、途中で待機している先生に事情話すし……ね？』

私が何とか笑いながら言うと、みんなは渋々ながら頷き「絶対先生に言うんだよ！」と言って先に走って行った。最後まで心配していた貴子は、「一緒に歩く」と言ってくれたが、私は首を振り、そっと前方を促し「ま、負けるな！」と密かに声援を送った。貴子はハッとしたように前を見据えて「了解！」というように頷き、絶対無理しないようにと強く念を押してダッシュした。

（が、頑張れ、貴子！）

多分、日下部先輩は上位に入るだろう。１０位以内に入れば全員の前で一緒に表彰を受けられる。是非とも貴子には日下部先輩と一緒に並んでもらいたかった。それなのに私のせいで足を引っ張ってしまった……と、申し訳なさで一杯になる。

女バレの友人達の背中にエールを送りながら一人解放された私は、長いであろうゴールまでの道のりを思い溜息を吐いた。

（いかん、ここでボンヤリしていたら、余計具合が悪くなる……）

ほとんどウォーキングに近い走りでなんとか前進するが、前方の集団から距離が広がるばかり。そのうち文化部の生徒達にも追い抜かれ、とうとう最後尾コースとなってしまった。

（うわぁ、最後尾でドン尻決定だ。……けど、ここで無理しても）

キリキリとお腹に痛みが増し、腰はこれ以上ないくいらいダルくなり、なんだか寒気もした。これだけ外が寒けりゃ当たり前といえば当たり前だが。

もう足を動かすのも辛く、私はとうとう足を止めてしまった。

マラソンコース沿いにずっと張り巡らされている低い木の柵に手をついて腰掛け、息をつく。前屈みになり膝に肘をついて手で顔を覆った。こうして座っていれば、先生が来てくれるかもしれないと

思いつつ、あとゴールまでどれくらいあるんだろうと、指の隙間から落ち葉が敷いてある地面をぼんやり見つめた。

ザッザッザッ……

遠くから、落ち葉を踏む音が微かに聞こえてくる。

その音は規則的で早い。歩いているより走っている感覚だ。

（……？　もしかして、和子ちゃん達が先生に知らせてくれたのかな）

先生が来てくれたかも、と期待で胸が膨らみ急に安心し気が緩んだ。

何故和子ちゃん達が向かったゴールの方向からでなく、出発した競技場のトラックの方角から聞こえてくるのだろうか？　と不思議に思ったが、そんなどちらでもいいことはすぐに消えた。多分沖先生だろう。ともかく誰か来てくれたことにホッとして、ワザと顔も上げずにそのまま疼くまったままにした。もちろんそれは本当にシンドイということもあるが、「もう麿（まろ）は走れぬぞよ、ヨヨヨ……」アピールというなんとも小賢しい悪知恵の為でもある。

とうとう規則正しい足音は止んで、私の目の前に止まった。

ハァハァと乱れた呼吸音が聞こえる。

助かった、と思って目を開けたその視界に入って来たのは、沖先生が着ていたジャージではなかった。自分と同じ学年色のジャージ。深い紺に白のラインが入っている見慣れたジャージ。

一瞬、まだ私の後方に1年女子が走っていたのかと思ったが、履いている靴はどう見ても女子のサイズよりも大きい。

ビックリして顔を上げるのと、上から声を掛けられたのが同時だった。

「大丈夫、荒井さん」
「？！」
「……でもなさそうだな、顔色悪い」
「……あ、え」

声を掛けてくれたのは、１年男子。

年末にお知り合いになった、つぶらクンこと「星野（ほしの）君」だった。

（何故こんなところに星野君が?!）

訳がわからずパニックになった。

しかし、すぐに今日のマラソンの予定が思い浮かんだ。1年女子の後、最後の滑走者が1年男子。時間差でスタートした筈なのに、ここに星野君がいるということは……。

（まさか、男子の先頭?!）

後ろに男子が続いている気配はない。ということは、ブッチギリでトップを独走していたということだ。

（す、すごい、星野君！　……じゃなくて、こりゃ、ヤバイ）

呑気に感心している場合ではない。

星野君がここにいるということは、もうすぐ1年男子もやってくる、ということだ。こんなヨレヨレの姿を男子に見られようとは……さすがにそこまで考えていなかったので、余計に血の気が引いた。それにここで星野君を足止めさせては、せっかくトップを走っているのに申し訳ない。私はなんとかお腹の痛みを抑えて微笑んだ。

「だだだ大丈夫……ちょっと調子が悪くて。ごめんね、せっかくトップ走っているんでしょう？　もうすぐ他の子が来ちゃうから、構わず先に行って?」

「そんなのいい。それより先生呼んでこようか、さっき、沖がいたから」

星野君は少し眉根を寄せながら、覗き込んできた。

あまりにも顔が近付いたのでギョッとし、慌てて「いいよいいよ」と首と手を振ってのけぞった。女性特有の止む負えぬ事情で具合が

悪いところを、何が悲しくて男子生徒にわざわざ先生を呼んできてもらわねばならないのか。それに生理の独特の嫌な臭いがしてるんじゃないかと気が気でないので近付いてほしくない。ここはなんとしても他の1年男子が追い付くまでに、先で待機している先生に事情を話して、棄権しなければ。星野君からジリジリ離れつつ立ち上がろうとした。

その時である。手がニュッと伸び、おでこにフワリと柔らかい感触を感じた。

（……大きい手だな……って、アホんだらっ！　私ったら何を？！）

星野君の手の感触が心地よくて一瞬ウットリした私だが、すぐに自分がどういう状況にいるか一気に我に返り、ボンっと顔が熱くなった。星野君はまだ私の額に手を当てて、難しい顔をしている。

「あ、あ、あ」

「やっぱ熱い。やめておいたほうがいい。沖に言ってくる」

おでこが熱いのは、ＹＯＵのせいですがな！

……とウッカリ言いそうになってしまいそうになるのをギリギリ寸止めした私、エライ。

「やっ……あ、あのっ！　本当に大丈夫ですからっ！！」

声を裏返しながら慌てふためいていると、競技場の方からザザザザという落ち葉を踏みつける音と、ゾワリとものすごい殺気を感じた。

何故だか周囲の温度が冷ややかになっている。「あ、あれ？　気温が下がった？」と腕を摩ると、星野君が「待ってろ」とザッと落

ち葉を蹴り今まで走って来た方向に踵を返そうとした瞬間。

遠くから聞きなれた声が耳に入って来た。……というか、槍のように耳に突きささった。

「おい、一幸(かずゆき)！！」

緩やかなカーブを描いている道の向こうから、白とブルーのジャージを着た1年男子が、猛スピードで走ってきている。

「あ、啓介(けいすけ)」

「●△◆×@%&¥っ！！！」

（ゲゲゲゲゲ、ゲロンパっ！　……いやっ、な、な、なんでこんな時にっ？！）

今の今まですっかり忘れていた。あの男、スポーツだけは動物並みに優れているということを。マラソンとて例外ではなかったらしい。

こっちに突進してくる類人猿……いや、腹をすかせたというより腹の虫がおさまらない的な『グリズリー』の憤怒(ふんぬ)の形相を見て、このまま倒れて死んだフリをキメたかった。

（それか今すぐにでも『マタギ』を呼んでくれ、頼む……）

尾島は私達の前で止まり、膝に手をつきハァハァ息をついた。息を整えた後、キッと顔を上げる。なまじ可愛らしい整った顔だけに、怒ると半端なく怖い。月一の出血という事態だけで、どんどん騒ぎが大きくなっていくのは何故なのか。

（ヒィィ……な、なんで私が睨まれないとアカンですたい……）

もう方言もごっちゃ混ぜな程、焦る荒井美千子。

もしやさっき体育館に箕輪を送り込んだのは、私と貴子だというのがバレたのだろうか？

それとも「俺の親友の足を止めたのはテメェかっ？！」と熱い友情を炸裂しているのか？

まさか！　先日の合唱コンクールの時の本番で、尾島の指揮も見ず、音を外したのがバレたのか？！

（いやいや、そんなアホな！）

心当たりが一杯ありすぎて、どれに当てはまるか皆目見当つかない。腹と腰の痛みではなく、別な意味で冷や汗をかいていると、尾島は私と星野君に怒鳴り始めた。

「オ、オマエらぁ……何やってんだよ、ここでっ！」

「ちょうど良かった。啓介、先に走って先生に知らせてくれ。もしかして誰か立ってるかもしれないから」

「は？　知らせてくれ？　……って、なにをだよっ？！」

「荒井さん、熱がある。このまま放っておけない」

「っ！！」

……ななな、なんで俺がっ！

一瞬尾島は厳(いか)つい表情を崩し、驚いた様子でチラっとこちらを見たが、すぐに「なんで俺が、そんなことせにゃならんの」みたいな口調になった。星野君はその澄んだ瞳でジッと尾島を見た後、「そう」とアッサリと言った。

「荒井さんここで待ってて。俺、沖呼んでくるから」

「はぁっ？！　沖って……今から元来た道、戻るのかよっ？！」

「俺シニアだから順位なんて関係無いし」

「なんで、おまえがそんなことっ！　一緒に走って先にいる先生に言えばいーだろーが！！」

「どれくらい先に先生が立っているかわかんないだろ？　それより沖に言った方が確実だし、そんなに遠くない」
「っ！！　やっ、け、けどよ……どうして」
「啓介も早く行けよ、もうそろそろ他の連中もくるぞ。『5位以内に入る』って、明日香や原口達にも宣言してただろ」
「へっ？！　そそそんなんどうでも……って、あっ、おい！　チョイ待てって！！」

星野君は尾島の掛け声も聞かずに、クルリと踵を返して競技場の方へダッシュした。どんどん遠ざかる星野君の背中。あっと言う間に姿が見えなくなった。

＊＊＊

尾島は星野君の背中に呼びかけても無駄だと悟ったのか、「なんだよ……」と舌打ちをして、こちらに向き直った。

「……」
「……」

……稀に見る気まずい状況である。
しかも尾島の顔は眉間に思いっきり皺が寄っており、非常に怖い。まるで蛇に睨まれたカエルのように、一歩も動けなかった。先程の体育館での貴子と桂龍太郎（かつらりゅうたろう）の時よりも酷い。こんなのは年末の小リスちゃんの爆弾発言以来だ。
（な、なんで、こんなことに……）
星野君が沖先生に呼びに行ってくれたのは確かに助かったが、来るまではここから勝手に動けないのが辛い。
さて、この絶対絶命の大ピンチからいかにして脱出するか……と考えた結果、とりあえず尾島には先に行ってもらうのが一番だとい

う答えが出た。この際気を使ってもらうなどという贅沢は言ってられない。それでなくとも今は具合が悪いのだから。不本意だが、ここは原口美恵（はらぐちみえ）の『猫なで声』を見習って、「このまま気にしないで走って」と柔らかい口調で言えばいい。なによりも事を穏便に済ますのが得策だ。

そうだ。それがいいに決まっている。

このまま走れば尾島は確実にトップだろう。

原口美恵達に宣言した通り、尾島は確実に『5位以内に入る』ことができる。

（……けど、ヤだ）

私はなんだか無性に腹立たしく、そして……ひどく悲しかった。

こんなところでヘバッている自分が惨めだった。

尾島に好かれてないのは十分わかっている。それはさっき尾島が言った台詞でも明らかだ。それなのに私はこの男に何を期待しているのだろうか。こんな時ぐらいは、星野君の半分とまでは言わないから、ちょっとの優しさを見せてほしかったなどと思ってしまうなんて。

そんなこと、無駄なことなのに。

（なんかもう放って置いてほしい。てか、なんでこんなに辛いのよ……）

私は今にも涙がこぼれそうになる顔を見られたくなくて、「早くこの場からいなくなって」と俯きながら必死で尾島にテレパシーを送ったが、尾島は黙ったまま動かなかった。
やっとの思いで息を呑み、仕方なく口を開く。

「……あ、あの」
「あぁっ？」
「！！　……あ、その、めめめ迷惑掛けて……ごめんなさい。……先行って。サッカー部って上位に入らないとマズイ」
「イイんだよっ、そんなことは！！　……それよりも」

……なんでアイツが……額に……手ぇ……

尾島は私の素っ気ない言い方にカチンときたのか、最初は大声で怒鳴ったが、そのうち声を小さくして、ゴニョゴニョ訳のわからないことを言い出した。その声はとぎれとぎれで全然聞き取れない。
（……ヤバイ、こりゃ本格的に具合悪くなってきた）
もう尾島の小言を聞く体力もなくなり、悪いと思ったが座っている柵から身体をずらしズルズルと地面に座り込んだ。

「あ！　お、おい、大丈夫かよ……」

（……大丈夫の訳、ない）
既に文句を言える気力も残ってない。さすがに尾島も私が本気で気分が悪いと悟ったのか、心配そうな声を出した。出来ればもっと早くそのしおらしい態度を見せて欲しかったと思い、この際もっと大袈裟にしてやるかと意地悪な心がムクリと起き上がった。いつもしてやられているのだから、これくらいは許されるだろう。このまま心配させるもよし、無視して行っちゃうもよし、と半ば投げやりな態度で、私はワザと辛そうな表情を作り（実際に辛いのだが）、

目を瞑って足を抱え膝の上におでこを乗せた。

その時。

頭上から聞こえたのは、ジャっとジッパーを下(おろ)す音。

ふわっと頭の上に何かがかぶさった。身体が一瞬温かくなり、視界が暗くなる。

僅かに鼻をくすぐるのは、洗濯洗剤の香りと自分以外の人の匂い。

（……え？　……ええええっっ？！）

ガバっと頭を上げると、頭に覆われた布が背中の方に落ちて肩に引っかかった。肩に視線をやると、そこには白とブルーのサッカー部のジャージ。

唖然とした表情で尾島を見上げようとしたときには、尾島は学年色のジャージ姿で背を向けて走り出していた。

「あああああのっ！！」

ジャージ(これ)、どうして？！　と言おうとした時、尾島がクルリと後ろを振り返った。

「しょ、しょうがねぇから、オレ様の俊足で先に立っている先生に知らせてやる！　ありがたいと思えよっ？！　とりあえず寒いから、

そのジャージ着てろ！　遠慮すんな、あくまで親切心であって、間違っても礼など期待してるわけじゃねぇからな！！　ちなみに俺は菓子パンと『キャベツ太郎』が大好物だ、覚えとけっ！！！」

「……」

尾島はビシッとこちらに指をさしながら、実に恩着せがましい言葉と図々しい要求を催促し、終いにはどうでもいい情報を置き土産した後、再びゴールに向かってダッシュした。

私はものすごい勢いで走って行く尾島の後ろ姿を、見えなくなるまで見送った。

後ろから見た彼の耳と首が真っ赤だったのは、普段全然使っていない親切心を出したせいなのか、それともただ単に寒い中を走っていたせいなのか。

（……とりあえず、一応気を使ってくれたってことだよね？）

尾島の取った行動をあらためて思い返すと、さっきまで私を支配していた、惨めさや悲しさなどはどこかへ飛んで行ってしまった。

それどころか尾島に対して、このままトップまで頑張れ！　などと思ってしまった。たとえそれが、原口や小リスちゃんを喜ばせる結果になったとしても、だ。

野外の気温は5度以下、しかも2月の曇り空。……本当は寒い筈なのに。

尾島のジャージ一枚羽織っただけなのに。

私の身体は信じられないくらい温かくなった。それに自分以外の人肌の香り。不思議と尾島の匂いは不快じゃなかった、むしろ……ギュッとジャージを抱き寄せたい気分になってしまった。

（男の子って、こんな匂いなんだなぁ）

思わずクンクンとジャージの匂いを嗅いでしまったが、ハッ！と我に返った。

（へ、変態じみたことをしてもうた！）

急激にカーッと身体中が熱くなる。
（わ、私ったら、なにをバカなことを！　今のナシナシ！！）
誰も見ていないというのに、顔の前で手を思いっきり手を振るその姿は、傍から見ればちょっとイタイと思う。少し深呼吸をして、なんとか落ち着かせようとしたが、やることなすことドンドン深みに嵌る勢いに、恥ずかしさで身体は熱くなるばかり。
そのうち意識が朦朧としてきた。
身体は着実に具合が悪くなっているというのに、わずかに残る意識に不快感は無く、雲の上に浮かんでいるような夢見心地だった。

ただのお礼

「えええぇぇぇ！　ほんとううぅぅにいぃぃ？！」

数か月ぶりの強烈な……いや、感動の再会を果たした私達。
女子中学生からのチョコを手にしながら、目の前で星一徹（ほしいってつ）のような男泣き……いやいや、感極まって号泣してるのは、『まるやき』のオーナーこと蝶子（ちょうこ）さんだった。おかげですっかりアイメークが落ちて、マズイことになっている。

「「「「「年末は本当にありがとうございました」」」」」
「まぁまぁそんなぁぁぁ、ほんとにイマドキの若い子はぁぁぁ……オネェさぁん、涙デチャッタァァァ！！」

5人そろって頭を下げると、蝶子さんはレースのハンカチをおもむろに取り出し、「ブッ・ビィーッッッ！！」と豪快に鼻をかいだのであった。

今日は試験前で部活のない土曜日、待ちに待ったバレンタインデーである。
和子ちゃん達と計画した通り、5人全員で蝶子さんにお礼を兼ねてチョコ手渡しに来たのだ。ランチが終わった頃の時間に滑り込んだ『まるやき』は、まだランチの名残が漂っており、お好み焼きの匂いが充満していた。
どうやら今日はエロ店員はいない様子。それもそうだろう、今日はなんてったって、恋人達の日。こんな日にあの男が一人寂しくバイトに勤（いそ）しんでいるとは考えにくい。
（二股かけて、修羅場になってたりして……フッ）
心の中で2人の女から袋叩きにされている桂寅之助（かつらとらのすけ）の姿を浮かべ、

ニヤっと笑ってしまった。まぁ、そうなっていたとしても、それもいい薬だろうと一人納得する。世界中の女を焼き尽くすより、己の節操なしの態度を焼き尽くしてしまえばいいと思う、荒井美千子。

それでも、一応5人全員、桂寅之助用に仕方なくチョコは持ってきていた。億が一にもお店にいた場合、ベティちゃんだけにチョコがあって、エロ店員には無しなどと言えば暴れるかも……と物騒なことを貴子（たかこ）が言ったからだ。あんなデカイ図体の男に暴れられでもしたら、か弱い女子中学生5人だけではひとたまりもない。あれだけ怖い噂が立っている男だが、構ってもらえないと（特に女性から）捻くれる性格らしいのだ。しかも恨みがましく何年も覚えているというから大人げない。まるで子供である。一生会うつもりもなかったが、さすがに今後外で出会った時に気マズイ思いするのは嫌なので、後腐れないように一応作って持って来たのであった。

明らかにベティちゃんの物とは差があり、「どう見ても、ＴＨＥ☆義理」とわかるものだが。

「……あの、みんなごめんね？　私、もう行くね？」

そんな悪魔な思考をパチンと弾くように、貴子の可愛い声が遠慮がちに響いた。

あいかわらずファッション雑誌から飛び出たような素敵な格好で、時計を見ながらソワソワしている。その理由をわかっている他の４人は、途端にニンマリとした顔をした。

「あらぁ、どうしたのぉぉぉ、タカコちゃぁぁぁん？」

「蝶子さん、恋ですよ」

「デートらしいですよ」

和子ちゃんと幸子女史の近所の奥さん口調にベティちゃんは目を剥き、「まっ！　いつの間にぃぃぃぃ？！」と奇声を発した。

「なんてったって、日下部先輩だもんね」
「大人で、落ち着いていて、頭もいい！　運動神経も文句なし！！」
「貴子ちゃんと日下部先輩なら、お似合いだよね？」

チィちゃんの意見に他の女子中学生3人はウンウンと頷くと、ベティちゃんは貴子の顔を一瞬ジッとみた後、なんとも寂しそうな複雑な顔をして苦笑した。

「そぉぉぉ。タカコちゃんは、素敵な人見つけちゃったのねぇぇぇ……。あーあ、みぃぃんんな、どんどん大人になっちゃっうからぁぁ、寂しくなっちゃうわぁぁぁ」

ベティちゃんが両頬に手を当てながら盛大な溜息をつくと貴子は徐々に真っ赤になり、「も、もう！　私、行くから！！」とそそくさと踵を返し、『まるやき』の扉を開けて出て行ってしまった。その後ろ姿を追うように続く私達。『まるやき』の入口から顔を出して、「頑張れ！」「よ、色女！」などの声援を貴子の背中に送った。

これから貴子は近くの区民センターに隣接している図書館で、日下部先輩と勉強会という名の「初デート」なのだ。彼女のカバンの中には勉強道具の他に、手作りのチョコが忍ばせてある。それでも貴子はギリギリまであげようかどうか迷っていた。それこそ、『まるやき』に来る道のりの途中も。

『な、なんか、告白受ける気マンマン……なんて思われちゃったりしないかなぁ』

……なんて年頃の可愛い恥じらいを気にしながら。

私達は「絶対そんなことありまへん！」と強く否定した。おそらく日下部先輩も今日という日を意識しているだろう。和子ちゃんな

ど、こんな日に持って行かないなんて、失礼すぎる！　と逆に説教する始末だ。

『ほ、ほら、勉強教えてくれるお礼……って言ってもいいんじゃない、かな？　絶対先輩喜ぶよ』

『……そう、だよね？』

私の言葉に貴子は安心したように頷き、いつものクールな笑みでなく、女らしく柔らかい笑みでフワッと笑ったのだ。その女神のような美しい表情を見て、私はあらためて「恋のパワーって本当にスゴイんだな」と思ってしまった。今の桂龍太郎（かつらりゅうたろう）では、貴子にこんな笑顔をさせることはできないだろうと思ったから。

図書館に向かって走って行く貴子は、過去の恋と決別し新たな未来に向かって飛び立つ、愛の翼を持った天使そのものだった。

＊＊＊

「貴子ちゃん、もうチョコ渡したかな……」

『まるやき』の帰り道、区民センターの横を通り過ぎながらボソリと呟いたチィちゃんの声に、私達４人は割と最近に建設されたアイボリー色のタイルで覆われている図書館の方を見上げた。

貴子の背中を見送った後、私達はベティちゃんにエロ店員宛のチョコを渡してくれるよう頼んだ。時間があれば本当はお好み焼きでも食べて行きたいところだったが、すでに「準備中」の札もかかっているし、来週は試験。少しでも勉強時間が惜しい為、「食べていきなさいよぉぉぉ」と言いながら引きとめるベティちゃんの気持ちだけありがたく頂き、早々お暇することにしたのだ。

「大丈夫だよ、貴子なら上手くやるって」

「そうだよね。あ～あ、私も早くチョコを上げる本命が欲しいなぁ！」

幸子女史の実感のこもった言葉に、私達は「ホント！」と一斉に頷いた。

貴子は今どんな気持ちで日下部先輩の隣に座っているのだろう。好きな人はいれども、チョコを渡す勇気がない私は、素直に貴子が羨ましかった。チョコを上げたい相手が喜んで受け取ってくれるなんて、とっても素敵なことだ。

「……ミっちゃんも田宮（たみや）にあげればよかったのに。あんなチビ猿なんかにあげないでさぁ」

私は幸子女史のからかう様な口調にドキっとして、カァっと真っ赤になりながら俯いた。

「……あ、あれはチョコじゃないよ。……ただのお礼だし……」

私は言い訳がましい言葉を言いながら、先程まで中身が入っていた、畳んである紙袋をギュッと握った。

＊＊＊＊＊＊＊

マラソン大会だった先週。

私は尾島のジャージを羽織りながら地面の上でボーっと暫く座っていた。さすがにジャージに袖は通すことはできなかった。そこまでずうずうしのはいかがなものかと思ったし、もし……ジャージがキツかったらちょっとショックだなという考えが過ったからだ。

そのうち数名の1年男子の滑走者がやって来た。彼らはマラソンコースの端で蹲る私を見てギョッとした様子だったが、すぐに走り

出して行ってしまった。その後にすぐ、星野君と沖先生がやってきた。それと同時に、ゴールのほうからも先生が来てくれて私を解放してくれた。

尾島は宣言した通り、本当に知らせてくれたのだ。

沖先生が私の額に手を当てると、相当熱かったらしく、慌てた様子で車を回してくれた。先生がそのまま病院に直行してくれた時は、高い熱と生理痛のダブルパンチのおかげで、吐き気に寒気と大変だった。「もしやインフルエンザ？」と心配になったが、ただの風邪だと診断されたときにはホッと胸をなでおろした。試験前の大事な時期なのにも関わらず、祝日まで学校を休む羽目にはなったが。

後から和子ちゃん達にマラソンの事を聞くと、バレー部1年女子で唯一貴子だけ１０位以内の表彰組に入ったとのことだった。しかも日下部先輩と同じ8位という結果だったのだ！　原口美恵と小関明日香を抜いたと聞いて、私は自分のことのようにバンザイ三唱してしまった。

一方尾島は最後までトップを独走し、そのまま1位でゴールした。沖先生を呼んでくれた星野君は遅れをとったにも関わらず、後半ぐんぐんと巻き返し、１０位に食い込んだらしい。それを聞いた時、私は申し訳なさと後悔で一杯だった。沖を呼びに戻らなければ、そのまま1位を狙えた筈だったのだ。

沖先生に連れて行かれる時、朦朧とした意識の中で、星野君に「ごめんなさい」「ありがとう」を繰り返しはしたけども、あの程度で1位の可能性を台無しにしたことが帳消しになるとは思えなかった。

されどお礼……だけども

「もう～ミっちゃん、気の使いすぎだよ！　星野君は大賛成だけどさ、野生猿には必要ないでしょ？！　大体アイツ図々しいんだよね！！」

和子ちゃんは一気に不機嫌そうな空気を身にまとい、吐き捨てるように文句を言った。和子ちゃんが図々しいと言ったのは、祝日明けに登校してから昨日まで、尾島が私に余計な言葉をしつこく浴びせるのを見ていたからだ。

『あ～腹減った！　俺、菓子パン超好物なんだよなぁ』
『すげぇ寒かったのに、チュウにジャージを貸しちまったばっかりに、俺が風邪をひきそうになって……』
『キャベツ太郎って、どこらへんがキャベツなのか知ってるか？　あの青いやつ、どうみたってアオノリだろ？』
『本当、稀に見るダッシュで先生呼びに行った俺って健気だよなぁ～』

……最初にお礼を言わなければならない星野君より先に、登校一番で尾島に頭を下げたというのに。ハッキリ言って、「恩着せがましい」の一言以外何が当てはまるというのか。

三学期になっても私の後ろの席に落ち着き、年間通して後ろから小言を言われる羽目になってしまった私は、とうとう昨日の帰りに後ろを振り向き、「大変申し訳ございませんでした。お礼はキッチリさせていただきます」と宣言してうるさい小言を黙らせた。

『は？　どうしてもお礼したいって？！　そうかぁ～そう言うなら、仕方ねぇよなぁ！』

『……』

尾島はワザと目を大きくしてすっとぼけてはいたが、その小さいお顔には、

「オレ様に礼をするのは当然だろ！　忘れやがったら、末代まで呪ってやるからな。覚悟しとけ！　フハハハハ！！」

……などという文字が首筋にまで書かれていた。

非常に不本意だったが、相手が悪魔なので早々にあきらめた。それにお礼をしたかったのは事実だったし。でもそれは尾島がうるさかったせい、ではない。他に理由があったからだ。

それは心の底から本当に申し訳ないと思った星野君に、お礼をするキッカケができたということだった。

本来ならばイの一番に1組まで出向いて、星野君に直接頭を下げてお礼をするべきであるが、マラソン大会から日にちが経ち過ぎている上に、のこのこお礼などを言いに行って星野君があらぬ冷やかしの対象になってはならぬと判断したからだ。間違っても私なんかと噂なんかになってしまえば、恩を仇で返すことになる。だから尾島がお礼を強請って来たのは、それに便乗して星野君にもお礼できる絶好のチャンスだったのだ。

私はいまだブツブツ文句を言っている和子ちゃんを宥めるように、もっともらしい言い訳を口にした。

「で、でも、後々怖いし……。星野君にあげて尾島にあげないと、なにされるか……」

「ま、そりゃ一理あるわ。あいつネチネチ恨みがましそうだもんねぇ。なんだかエロ店員とそっくりじゃん？　弟は桂君じゃなくて、

実はチビ猿のほうだったりして！」

幸子女史が大胆発言すると、それ大いにありえるよねと和子ちゃんは笑いだし、チィちゃんは苦笑いをした。大仕事を終えて、嬉しいような緊張がほぐれたようなホッとした気持ちだった私も一緒になって笑い、手元の紙袋をチラリと見た後、もっとも緊張した『まるやき』の帰り際を思い出した。

＊＊＊

私は、もうひとつ重要な頼みごとをベティちゃんに頼む為に、一歩前進して紙袋からラッピングしたものを取りだした。中身はそれぞれ手作りの菓子パンと駄菓子、である。

パンは母親にも手伝ってもらい、手間のかかるデニッシュを焼いた。カスタードクリームも手作りし、その上にフルーツを載せてマーマレードジャムも丁寧に塗った。自分で言うのもなんだが、快心の一作だ。

そして、尾島の方にはしつこく押す「キャベツ太郎」を一緒に入れた。星野君には貴子から好みのお菓子をリサーチしておいた。

『た、貴子。星野君て、どんなのが好きなのかな？』
『え？　好みのタイプ？　やだぁ、もしかしてっ？！』
『ち、違うよ！　好みのタイプじゃなくて、好みのお菓子なんだけど……』
『なーんだ。でも星野はオススメだよ？　野球バカで無愛想だけどね。あ、友達もロクな奴がいないな』
『あ、あの、そうじゃなくてですね……』
『フフ、わかってるって！　どうせマラソン大会のお礼でしょ？しっかし、見かけによらず星野もやるわね。やっぱ、苦労してるか

らかなぁ……』
『苦労？』
『あ、いいの、いいの！』
『？』
『え、えーと。そう！　星野って5人兄弟の長男なんだよね』
『ええっ？！』
『ビックリでしょ？　そんなわけだから星野、面倒見がいいんだよね』
『……へぇ、そ、そうなんだ』
『そうよ！　どっかのロクでもない他の小隊員とは大違いなんだよねっ！！』
『……』
『あら、やだ、私ったら。あぁ、星野の好みのお菓子だよね。たしか……酢昆布じゃなかったかな？』
『……なるほど（シブイな）』
『そうなの、見た目も中身もやることもシブイんだよね。でも野球してる時とか結構カッコイイよ？　諏訪（オタンコナス）いわく、職人みたいな構えでバッターボックスに入るらしいし。もしその気になったら、橋渡ししてあげるから？　試合見に行きたいならいつでも言ってね？』
『……ハハ』

職人みたいな構えってどんなだろうと思ったが、とりあえず試合観戦は辞退しておいた。何気に私の思考を読んだ貴子もニヤニヤした顔しているところを見ると、からかい半分なのだろう。しかし、星野君がそんな大家族なんて、驚きだった。きっと優しくて面倒見がいいお兄さんに違いない。とりあず星野君には「都こんぶ」を一緒に入れておいた。迷惑だと思ったが、せっかくなので、余った生地で小さいクロワッサンもどきを焼けるだけ焼いて一緒に付けた。

今日のメインイベントは、あくまでもベティちゃん（プラス桂寅之助）にチョコを渡すことだった。しかし……ベティちゃんに申し訳ないが、どちらかというと、こちらのほうが私にとってメインイベントとなってしまった。

『あ、あのぉ……』

『うぅんん？　なぁぁにぃぃ？』

『星野君と尾島…君って、今日お店に来ますか？』

『カズくぅぅんとケイくぅぅん？　来るわよぉぉぉぉ、呼んでもぉぉなぁぁいのにぃ、週末ぅぅほっとんどぉ来るんだからぁ！　……ってぇ、あれぇぇぇ？　やっだぁぁぁ、もしかしてぇぇぇ？！』

ベティちゃんは真っ赤な私の顔と手に持っているラッピングしている二つのプレゼントを交互に見た後、ニンマリ笑った。思いっきりアイメイクが落ちている妖艶の微笑みというものは、バタリアン並みに恐ろしい。

『やっ！　ち、違います！　チョコじゃなくて……そ、その、お、お礼っていうか……』

『おれいぃぃ？』

『は、はい！　マラソン大会のお礼と言って渡していただけますかおねがいします！！』

息継ぎもせず一気に言って頭を下げ、はてなマークを頭につけているベティちゃんに、お礼にいたるまでの過程を簡単に説明した。尾島と星野君には大変お世話になったので、そのお礼もかねて……という言葉で締めると、ベティちゃんは「あらぁぁぁ、そんなのいいのにぃぃぃ！」と息子の活躍を喜びつつも「そうだろ、そうだろ」と親バカを隠せない父……母親のような口調をした。

『わかったわぁぁぁ、じゃぁ、渡しておくからぁぁぁ』
『お、お願いします！』
『でもぉぉ、直接渡した方がぁぁいいんじゃなぁぁい？　あの子たちもぉぉ、よろこぶわよぉぉ？』
『い、いえっ！！　めめめ滅相もない！！』
私は慌てて首と手を振って、風が起きるほど否定した。

実を言えば、学校に登校するまで私は、「尾島ぐらいには、渡せるかも」なんて呑気に構えていた。
……が、その余裕は見事に吹き飛んでしまう。何故なら、今日学校で尾島はバレンタインチョコの嵐を受けていて、渡す隙すら無かったからだ。
クラスメートの女子に数日前から「俺はチョコが大好きだ！　１４日受けてたつ！！」宣伝してまわったいた尾島。それを聞いて「クラス全員の女子が尾島に？　まさかねぇ？」と思っていた私だが、予想は大外れだった。大穴よろしく、尾島は私たちヌリカベトリオ以外の女子全員からチョコを受け取っていたのだ。それに加え、他のクラスの女子から何度も呼び出されていたのは、正直驚きだった。
確かに尾島は顔がいいし運動神経も良かった。加えて文化祭では主役、マラソンをやらせりゃ１位、オマケに秋のバスケの試合のせいで、バスケ部の２年からもチョコを渡される始末。
よくよく考えてみりゃ、私や和子ちゃん以外の女子には至って態度が普通だ。それどころか巧みな話術で女の子を軽くからかい、逆に彼女たちの乙女心をくすぐるほどだ。楽しい話題で周囲を和ませ、言葉づかいは乱暴だが基本的には優しい。これではいくら頭と口と態度が悪かろうが、モテる筈である。
……わかっていたつもりだった。けど、本当に「つもり」だった、

らしい。

私は苦手意識がある上に、尾島から毎回小言を言われているせいで軽く流すようにしていた為、あまりよく見えていなかったのかもしれない。

その現実をあらためて突き付けられた私は、目の前が真っ暗になるほどの衝撃を受けた。尾島は私のことが相当気に入らないんだなぁと実感してしまった。あそこまで邪険に扱われ続けたことに、それを今まで耐えていた自分に、落ち込むどころか滑稽すぎて笑いたくなってしまった。

客観的に自分の位置を確認してしまった私は、嫌な緊張と震えが湧きあがってしまったのだ。

それだけではない。尾島がチョコを渡される姿を見るたびに、段々とお礼をする気が萎んでしまった。まだ高をくくっていた登校したばかりの朝に、さっさと渡せばよかったと後悔した。朝、尾島が得意の悪魔顔でニヤリと笑いながら私に声を掛けようとしたあの時に。その時ちょうど尾島は他のクラスの女子からの呼び出しだされていたけど、無理にでも押しつければことは済んだのだ。

それなのに。なんで私は、フイっと明後日の方向を向いて無視してしまい、完全にタイミングを逃してしまったのだろう。

おかげで一日中後ろから「お礼はどうしたよ、あの言葉は偽りか？！」というような無言のプレッシャーを受け続けた。某アニメのニュータイプも真っ青なほどのプレッシャーに、後ろを向く勇気が出てこなかった。別になんてことはない、「ハイ、どうぞ」と軽く渡せばそれで済む筈なのに、どうしてもできなかったのだ。

（……べべべ別に今日渡すと言ってないし！）

私は苦しい言い訳で自分を納得させつつ、帰りに尾島が原口美恵から呼び出しを受けている間に、和子ちゃん達とそそくさと教室を

出てきてしまったのだ。
それは断じて逃げたという訳ではない。貴子のデートの時間に間に合うようにベティちゃんのところに行こうと約束していたという理由があったからだ。それに、学校で二人に渡せば、あらぬ誤解を招きかねない。とくに尾島。これだけモテる男とこれ以上面倒なことに巻き込まれるのは御免だし、とてもじゃないがそんなこと私には超無理と思い込んだ。
……思い込ませた。

学校の校門を出る時、お礼すら渡すことのできない自分が、もどかしくて情けなかった。

おそらくこういうところが尾島の癇に障るのだろう。
けど尾島にとってあのお礼の請求は、からかいのネタにすぎないのだ。
星野君の分をベティちゃんから渡してもらう予定だったので、ついでに一緒に渡してもらえばそれでいいと、私は前向きに気軽に考えることにしたのだった。

＊＊＊＊＊＊

後ろを振り返り、遠くなった『まるやき』の暖簾を見た。来月一杯でこんな気の張る生活ともお別れなんだな、と考えながら。
2年に進級し、尾島とクラスが離れてしまえば、私には波風が立たない平凡で平和な日々が訪れるだろう。尾島も私のことなど気にもかけないだろうし、「あ、そういえばこんな奴いたっけか」程度で忘れてしまうのだろう。余計な騒動に巻き込まれず、部活や仲の良い友人に囲まれ、ちょっとした恋に焦がれる……そんな普通の中学生活を送りたかった私には、それは嬉しいことの筈だった。

それがどうしたことか――。

心の奥底ですごく寂しいと思っている自分が確かにいた。

もしかしたら尾島と一生接点が無くなるかもしれない可能性に、まるで冬の海に一人で立っているような悲しさと切なさが押し寄せた。胸が締め付けられるこの感情が、今日一日尾島に対して感じた自分の気持ちが、一体どういうものなのか……。私はこの時気付くことができずにいたのであった。

☆登場人物≪中学1年編≫　ネタバレありです☆（前書き）

！！注意！！

中1編を全部読んで無い方は、ネタバレ全開です。

☆登場人物≪中学1年編≫　ネタバレありです☆

★主な登場人物★

●荒井美千子（あだ名：チュウ、ミっちゃん）
本編の主人公。山野小出身・バレー部所属。8組。
身体が大きくポッチャリなのと豊満なバスト（現在Dカップ、さらに成長中）が悩みの普通な女の子。何故か無駄な苦労が多い。
中学デビューを狙っていたが、実際あまり上手くいっていない。尾島から何かとチョッカイ出される（ほぼイジメ）日々。
映画好きで金髪碧眼に弱い面食いだが、現在「田宮俊平」に熱烈片思い中！　……の筈。

「長いものには巻かれろ、がモットーです。ともかく平穏な日々が欲しい……」

●尾島啓介（あだ名：チビ猿、野生猿、類人猿、他色々）
美千子のクラスメート。大野小出身・サッカー部所属。8組。
背が低く色白の可愛らしい男の子だが、性格は悪魔。ややたれ目のハッキリ二重に右目尻に黒子があり、頭は五分刈り。
クラス…いや、学年一の問題児。あだ名の命名を生きがいとし、元大野小バスケ部で運動神経はいいが、その他はアホ。
甘いものが好き、特に菓子パンには目が無い様子。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の赤担当・通称オジマヌケ。

「別に、バスケ部入らなかったことは後悔してねぇ。や、だって、これからの時代、サッカーだろ？　目指せマラドーナだろ！？」

●宇井和子（あだ名：ドテチン、和子ちゃん）

美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。８組。
何事にも大柄な性格で、クラスを引っ張っていく姉御肌だが、その実は身なりにかなり気を使う年頃な女の子。
少年隊のヒガシの大ファンであることが判明。尾島とは犬猿の仲。

「ともかく、あと少しの我慢！　２年になれば、あの尾島（ばか）とはオサラバだよ！！」

●中山幸子（なかやまさちこ）（あだ名：ヒラメ、幸子女史）
美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。８組。
痩せてスラッと背の高い女の子。美千子が女史と呼ぶだけあって、頭がいいらしい。
宇井和子とは御近所さんで、小さい頃からの幼馴染。

「和子ってば、男子の基準レベル高すぎるのよねぇ」

●笹谷貴子（ささやたかこ）
大野小出身・バレー部所属。５組。
髪の毛と目が茶色い、落ち着いた大人っぽいオシャレな女生徒。
原口美恵と仲が良かったが、ケンカして疎遠になり、その後美千子と友情を育むことになる。
桂龍太郎が好きだが……。

「男で二股する奴は最低よ！　しかも家に連れ込むなんて……言語道断！！」

●茅野陽菜美（ちのひなみ）（あだ名：チィちゃん）
山野小出身・バレー部所属。７組。
おとなしい女生徒で身長１４８センチ。少年隊大好き。

「最近お菓子作りにハマってます。もう少し背が欲しいかなぁ」

●田宮俊平（たみやしゅんぺい）
美千子の思い人。下山野出身・バスケ部所属。９組。
程よく日に焼けて、目尻に皺を寄せて笑う様が爽やかな男の子。元下山野小バスケ部。
学年でもモテ男に入る部類。

「尾島、もったいねぇよ。バスケ部に入ればいいのに」

●桂　龍太郎（かつら　りゅうたろう）
大野小出身・一応柔道部所属だが幽霊部員。６組。
山野中の「伝説の裏番」と恐れられた『山野中の鬼夜叉』こと「桂寅之助」の弟。
現在は兄の後を継いで「裏番」を襲名中。こちらは違う意味で学年（学校）一の問題児。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の黒担当・通称バカツラ。

「ギャンギャンうるさい女も地味な女も勘弁」

●諏訪英行（すわひでゆき）
大野小出身・野球部所属。８組。
尾島の悪友、もちろんアホ。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の黄担当・通称オタンコナスワ。

「巨乳が好み、けどデカければいいってもんじゃない。全体的なバランスが大事なんだよ」

●後藤洋（ごとうひろし）

大野小出身・バスケ部所属。２組。
声も身体（１８０センチ）もデカイ尾島の悪友。元大野小バスケ部。
何も考えない能天気な性格だが、根がまっすぐで友情に厚い。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の桃担当・通称ゴトンマ。

「バスケ、バスケ、バスケ！バスケ最高！！」

●星野一幸（ほしのかずゆき）
大野小出身・外部でシニアリーグに所属。１組。
５人の中では一番落ち着いて（？）おり、必要以外しゃべらず、無口の野球バカ。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の青担当・通称アホシノ

「……腹減った」

●小関明日香（こせきあすか）
田宮俊平と同じクラス。大野小出身・バスケ部所属。９組。
明るくてポッテリとした唇の小さくてリスみたいな可愛らしいショートカットの女の子。元大野小バスケ部。
尾島、桂、星野、笹谷貴子とは、下の名で呼び合う古い仲で幼馴染でもある。尾島とは従姉弟で家も隣同士。
問題発言は天然なのか、計算なのか？

「啓介をからかうと、本当面白いのよねぇ～」

●成田耀子（なりたようこ）
美千子の天敵。山野小出身・バスケ部所属。２組。
モテ男には敏感で、自分を良く見せる才能はピカ一。しかし嫌いな奴には容赦なくプレッシャーを掛ける女の子。元山野小バスケ部。
小学校の時は「佐藤伸」命だったが、今は「田宮俊平」に乗り換え

か。

「佐藤君もいいけどぉ、田宮君も素敵！　本当迷っちゃうぅ」

●原口美恵（はらぐちみえ）
美千子の天敵其の2。大野小出身・バレー部所属の1年部長。1組。
尾島大好き女の子。何かと美千子を小馬鹿にし、尾島と親しい？美千子が気に入らない様子。
元大野小バスケ部。

「尾島、サッカー部の部長、やるかなぁ……」

●佐藤（さとう）　伸（しん）（あだ名：カッコ）
美千子や成田耀子の元クラスメート。山野小出身・サッカー部所属。1組
「顔良し・性格良し・スポーツ良し」と3拍子揃った、元山野小サッカー部所属で学年一のモテ男だった、中学でも記録更新中。
切れ長の目のキリッとした精悍な顔立ちで、いわゆるお醤油顔。

「『カッコ』って言うの、やめろよな」

●江崎君（えざきくん）（あだ名：グリコ）
山野小出身・バトミントン部。8組。
温和で大人しい性格が災いしてか、尾島にコキ使われている。
文化祭によりポイントUP。

「誤解しないでくれ、別にワザとズラ取ったわけじゃないんだ！　た、たまたま偶然に！！」

●島崎（しまざき）さん（あだ名：アダモちゃん）

下山野小出身・体操部所属。８組。
学年一の美少女、天然で空気を読まない。

「もぅ、尾島君ったらぁ、本当に調子いいんだからぁ～」

●野口(のぐち)君（あだ名：ノグティー）
大野小出身・バレー部所属。８組。
花粉症＆お腹と腸が弱く、痩せ形でひょろ長い身長の男の子。
常にティッシュを携帯。

「最近妙に鼻水が出るんだよな、なんかの病気かな？」

●片岡(かたおか)君（あだ名：つるちゃん）
山野小出身・理化部所属。８組。
真面目で成績優秀。眉毛が太くて黒い大縁のメガネをした男の子。
尾島のおふざけにはとことん無視。

「尾島の言うことを気にしているわけではないけど、断じて僕は脂ぎってるワケじゃない！」

●奥住(おくずみ)さん
大野小出身・バレー部所属の１年副部長。７組。
奥住トリオのリーダー。
ベリーショートで活発な女生徒、噂好きのミーハーな性格。
尾島と美千子の間を「怪しい」と睨んでる。「原口美恵」とは肌が合わない。

「絶対あの二人怪しいわよ、私のカンは外れたことないのよ！」

●光岡(みつおか)さん

大野小出身・バレー部所属。５組。
奥住トリオの一員。

「とりあえず原口が部長だと何かとやりにくいのよね……」

●加瀬（かせ）さん
大野小出身・バレー部所属。１０組
奥住トリオの一員。細面の神経質な性格。

「尾島ってそんなにいいかな？　騒がしいし、イマイチ理解できないんだけど」

＊＊＊＊＊＊＊

★その他の登場人物★

●日下部（くさかべ）　孝司（こうじ）
山野小出身・サッカー部所属、現副部長。
生徒会役員も務めている優等生。現在２年生。
笹谷貴子のことが好き。

「君が、好きだ」

●桂（かつら）　寅之助（とらのすけ）
大野小出身。
桂龍太郎の三つ年上の兄。
口が悪く、どうしようもないエロだが、かつては『山野中の鬼夜叉』『伝説の裏番』など様々な肩書を持ち、かつては山野中の先生と生徒達を震撼させた不良。
現在は赤髪ピアス姿で「美園工業高校」へ通学中、通称『美園の赤

鬼』。
お好み焼き屋「まるやき」でバイトしている。

「お好み焼きより、この世の全ての女の心と身体を焼きつくすのが専門なんだよ、俺様は」

●蝶子（ちょうこ）さん
桂兄弟の伯母であり（？）、お好み焼き屋「まるやき」の女性オーナー（？）

「デリカシーのない男って、サイッテェェェ。好みは高倉健みたいな渋い男よぉぉぉ」

●辺見先輩（へんみせんぱい）
大野小出身・バスケ部所属、現部長。
尾島や後藤が所属していた大野小バスケ部の先輩。現在2年生。
尾島を熱心にバスケ部へ勧誘していた。

「女のせいでバスケやめるなんて、本当バカじゃね？」

●晴美先輩（はるみせんぱい）
下山野小出身・手芸部所属だが幽霊部員。
山野中一のモテ女、現在3年生。
桂龍太郎の彼女。

「完璧なボディが自慢です♪　将来はアイドルを目指してるの！」

●桃田（ももた）
尾島や原口の元クラスメートで、1年しか大野小いなかった、浪花の転校生。

尾島の初恋の相手で、苦い失恋を味あわせる。

「ガキ臭いアホな連中は、淀川にでも沈んどけや！！」

●梨本先生（あだ名：リポーター）
美千子の担任。
面倒なことが苦手な中一英語担当の独身教師。

「面倒なことはとりあえず勘弁だな。ていうか、俺のクラスの生徒、英語の成績悪すぎだろ？！」

●菊池先輩（きくちせんぱい）
３年生、元サッカー部部長。

●松野先輩（まつのせんぱい）
３年生、元女子バレー部部長。

●岩瀬先生
バレー部顧問。

●箕輪先生
３年担当体育教師、陸上部顧問。

●一之瀬先生
２年担当英語教師、バトミントン部顧問。

●青島先生（あだ名：チンタオ）
１年担当社会科教師。

＊＊＊＊＊＊＊

★今後の出演予定人物★

●東　雄臣（あずま　ゆうじん）
●荒井　真美子（あらい　まみこ）
●安西　新（あんざい　あらた）
●伏見　かおり（ふしみ　かおり）
●伴　丈一朗（ばん　じょういちろう）
●渡部　遥（わたべ　はるか）

「ミチ、全然食べてないじゃないか。エビチリもっと食べろよ」
好きだろう？

円卓の中華テーブルに座っている私の左隣の少年は、すっかり声変わりした低い魅惑的な声で言った。あと数年も経てば、彼の父親のようにすばらしいバリトンの声色になるに違いない。

「……あ、ありがとう」

俯いて言うのも失礼なので、彼の方に向けば、両親譲りの罪な甘いマスクをこちらに向けていた。なんの曇りもない笑顔でニコッと笑っている。その顔を見てドキッとしたが、すぐ嫌な感じで心臓がドッドッと響くのが自分でもわかった。

（「好きだろう」……かぁ）

その言葉は、彼との距離が暫く開いていたと感じさせるのには十分な言葉だった。確かにエビチリは好きだった。しかし今は昔のようにガっつくほどのものではない。

ふと向こうの彼の隣に座っている妹・真美子の厳しい視線とぶつかった。その眼は「ズルイ！」と言ってはいるが、私だって好きでこんな想像以上の好意を受けている訳ではない。むしろ驚いているくらいだ。

……理由を問いただしたいほどに。

「昔は俺といい勝負で食べてたじゃないか。ほら、遠慮するなよ」
「……」

昔大好物だったその朱色の塊が、今日は美味しそうに見えない。

そもそも食すら進んでないのは、油の多い中華料理はダイエットの敵！　という理由だけではなく、別の理由が大きいということは明らかだ。　円卓をそっと回し、エビチリの大皿を自分の前で止めて、レンゲですくい自分の皿に盛った。

次々と料理がチャイナドレスを着たキレイな女性店員によって、中央の円卓に乗せられていっては下げられていった。まだ料理が残っているお皿はそのまま、自分の前を、そして3組の家族の前を通過していく。

何度も何度も。

――その日は、突然来た。

朝は神々しいまでの太陽の光が町全体を照らしていたのに、日が傾くにつれて灰色の雲が太陽を覆っていく、ある春休みの出来事だった。

＊＊＊＊＊＊＊

「……ただいま」

見慣れている、茶色い古めかしい玄関のドアを開けながら、ホッと息を吐き小さく呟いた。

身体を見下ろすと部活用のシャリジャージに水滴がいくつも付いていた。部活をやっている途中に降ってきた雨。もう3月の下旬だというのに、体育館から外に出ると、冬のように寒くて、吐く息も白かった。近いし、面倒だと思って折りたたみの傘もささずにダッシュしてきたが、思った以上に髪の毛がしっかり濡れてしまい顔に張り付いている。タオルを持ってきてもらおうと母親を呼ぼうと思ったが、ふと足元に目がいった。

「……？」

家族の靴以外のものが、何足か並んでいる。どうやら客がきているらしいのだが、その靴の種類に一瞬眉根を寄せてしまった。

ベージュの細いパンプスと大きくて黒い革靴、革靴よりも少し小さいサイズで、大小のスニーカが2組。

パンプスと革靴はピカピカに磨かれており、中学生の私でもわかるほど有名なブランドのシューズであった。スニーカーの方は適度に履きこなしている感じだが、特別汚れているというわけでもない。当然我が家のものではないのだが、何故かパンプスと小さい方のスニーカーは何処かで見たことがあるような感じなのだ。

（はて、何処だったっけか？）

それも極最近のような気がする。とりあえず濡れネズミのままではお客の前では出れないと思い、見かけた場所を記憶の底で探りながら、仕方なくカバンから汗の染みたタオルを出して髪の毛とジャージを拭いた。

一通り拭いた後、カバンを持って台所に入ると、コロコロと鈴をころがしたような笑い声がした。

この声は絶対我が家族が出せる声ではない、お客の方だろう。

笑い声の主の顔とベージュのパンプスが一致した瞬間、見知らぬ靴の持ち主である人物達の顔が頭の中をサッと横切り、急に心臓が高鳴り出した。

笑い声と重なるように、渋くて低いバリトンの美声が聞こえてくる。

（ま、まさか……！）

「美千子？　帰ったの？」

カバンを椅子において、慌ててボサボサになった髪の毛を整えながら、挨拶をしに居間の方へ向かうタイミングを図っていたら、向

こうから声を掛けられた。

「あ！　ハ、ハイ！」

フーっと息を整えた後、恐る恐るビーズの暖簾をくぐり「こんにちは」と言いながら顔を出すと、母親と対面するように綺麗な女性と精悍で逞しい男性が座っていた。

女の人は、肩まで伸ばした茶色い髪を内巻きにカールしており、上品なアイボリーのツイードのスーツ姿。清楚という言葉がピッタリで、ほっそりとした身体によく似合っている。いつもはラフな格好しか見たことが無いのだが、それでも十分綺麗だった。しかしそのよそ行きな格好は余計に美しさを際立たせいる。

男の人の方はグレーのスーツにストライプのワイシャツ、紺のネクタイ姿。髪の毛も短くサッパリと整えられているが、こちらは色が黒い。キリリとした眉毛に彫りの深い顔だが甘いマスクで、まさしく「色男」という言葉以外何が当てはまるというのか。

その2人はどことなく顔つきが似ていた。2人そろって座っている姿も佇まいも、良い意味で実際の年齢を感じさせないほど若々しく、爽やかで美しい。この雰囲気をあえて表現するならば、この年に話題になったコカ●ーラのＣＭの澄み切った歌声と出演者達が醸し出す空気と同じと言えばおわかりいただけるだろうか。

「こんにちは、美千子ちゃん。今日は部活？」

女の人は日本人離れしている彫りの深い顔をこちらに向けて、洗礼された笑顔をこぼした。そして、視線を少しズラすと、隣にいる男の人と目が合った。

ドキンと心臓が跳ねる。

「久しぶり、美千子ちゃん。バレー部に入ったんだってね、お母さ

んから聞いたよ。いやぁ、本当に大きくなったなぁ。暫く見ないうちに女らしくなっちゃって、オジさんビックリだよ……子供の成長って早いんだなぁ」

男の人は眩しそうに目を細めながら目尻に皺を湛え、優しい笑顔で頷いた。

「……」

……いつまでも変わらないその慈しみ溢れる温かな笑顔。小さい時に初めて見た、見た瞬間に抱いた時と変わらない憧憬が胸に蘇る。

「しかも英語も相当頑張っているそうじゃないか。聞いたよ、安西先生から。成績すごくいいんだって？　感心だな」

その言葉を聞いた瞬間、私の目の前に壮大な道が開けた。それはまるで、モーセの十戒の一場面のように。……もしくは、廊下を歩く桂龍太郎のように。

この時私は心底勉強を頑張ってきてよかったと思った。そう、この世でいちばん尊い言葉を、神から啓示されるってこんな感じかもしれない。この時の私の瞳は相当潤んでいたに違いない。私はそれを誤魔化す為に「……ありがとうございます」と頭を下げた後、精一杯笑顔を浮かべた。

「もう、兄さんったら、相変わらずなんだからぁ。ホラホラ、美千子ちゃん顔が真っ赤じゃないの！　オジサンなのにイヤぁねぇ？　ごめんなさいね、美千子ちゃん、レッスン滞っちゃって。来週からは新しい家の方に来てね？　時間は変わらないから」

「は、はい！　……もう引っ越しの方は、終わったんですか？」
「そうなの、週末にやっと片づけが終わってね？　これからは近くになったから、通いやすくなるわよ」

ブラウンの瞳を隠すようにウィンクした女の人は、「あらためて、よろしくね？」と笑った。私も慌てて「こ、こちらこそ、2年の英語もよろしくお願いします」と頭を下げた。

「美千子、今日は安西先生の引っ越しと東（あずま）さんの海外転勤のお祝いを兼ねてみんなで一緒に食事に行くことになったから。着替えてね？」

母のその言葉を聞いた途端、パァっと嬉しさが込み上げた。このメンバーで、しかも目の前にいる男性と一緒に食事するなんて何時以来だろうと思いつつ、母がいつもよりめかし込んでいるのはそのせいかと、この時わかった。……が、後半に聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。

「…え？　て、転勤？　海外？」

東小父さんは外資系のメーカーに努めており、国内外あちこち飛びまわっている。それでも県内から拠点を移すことはなかった、それが……。
（……ああ、そっか。もうここにいる理由が無くなったから、なのかな）
まだ未成年の中学生で、子供の自分が恨めしい。だからと言って、大人なら彼を引き止められるのかと問われれば、それも絶対ありえない。そもそも私にはとやかく言う権利どころか、こうして会うことも無かったのかもしれないのだから。それが彼が転勤する前に一目会えるなんて……奇跡に近い。そして、今度こそこれが正真正銘

最後かも知れない。
（……なにがなんでも髪の毛を乾かし即効マシにつくろわなければ！　そして、少しでもいい印象残しておかなくちゃ！！）
「ああ、新君（あらた）とね、雄臣（ゆうじん）君、二階の真美子の部屋にいるから、挨拶してらっしゃい。２人ともうちにくるの本当に久しぶりだもの」
母親はこの２年間、例え耳にしても心の動揺を悟られないようにしてた名前を言った。娘の気持ちも知らない呑気な母は、「フフ」とおっとりとした笑いをして目で天上の方に視線を流した。
「……」
（アラタと……雄臣……）
その名前を聞くと、今まで高揚していた気分が萎み足が僅かに震え、再び心臓の鼓動が速く打ち出した。しかもその鼓動は心躍る嬉しさは秘めていない、迫りくるような複雑な動きだ。久しぶりで緊張しているせい、ではない。
非常にパスしたいところだが、挨拶は常識人としてしなければならない。私は動揺を隠しながら頷いた。できることなら、このまま居間にいて東小父さんを眺めていたいが、そうもいかない。私は大人３人に頭を下げてそっと居間を出た。母親の「ケーキ頂いたから、後で食べなさい」という背後からの声に慌てて返事を返しながら、少しでも髪を乾かしてマシな姿になろうと洗面所の方へ足を向けた。
＊＊＊
高速でタオルを動かした後に鏡を覗き込むと、髪の毛はあちこち跳ねあがり、ボサボサのボンバーヘッドになっていた。櫛で髪の毛を撫でつけて少しでもマシになるように形を整える。肝心な時にド

ライヤーがないなんて……残ってるお年玉を使って思い切って買ってしまおうかと鏡の向こうの自分に問うた。

（そうだよね、4月からは先輩にもなるし。いつまでも暖房の前でセットするなんて悲しすぎるってもんだよ）

でも欲しいのは今この瞬間。お客がいる、しかも東小父さんのいる居間の暖房でセットなど絶対無理だ。

（……前もって教えてくれればいいのに。きっと父さんが急に決めたんだな）

確かに嬉しかったが、タイミングが悪い。もっと晴れた日でおめかしバッチリの私を見て欲しかったと憂鬱な気分になった。せめて鏡に映っている、自分の顔の頬にあるニキビがなくなってからが良かった、とフゥと息を吐いた。

これ以上やっても良くならないとこまでマシに整え上げ、洗面所を出た。そっと廊下を歩き階段の前に立って上を見上げると、微かな話声が聞こえてきた。その声のトーンからして、楽しく盛り上がっている。

「はぁ」

（このまま無視して自分の部屋に直行したい）

楽しそうにしている中に入って行くのが躊躇われた。ただ挨拶するだけなのに。邪魔だって思われないかな……と、嫌な「黒い記憶」が心の奥底から隙間を縫うように漏れだす。腹の中でゴチャゴチャ言うのは得意なくせに、肝心なところで「黒い記憶」が邪魔をして口が噤んでしまうのだ。

彼とは最後に会ってから2年も経っている。きっと……いや、多分大丈夫。私だってそれなりに成長しているのだ。

（ちょっと挨拶したら、すぐ部屋に引っ込もう。いや、急いで着替えて下でケーキ食べた後、お茶のおかわりを淹れて居間に運ぼうかな……）

そうすれば東小父さんを見れるし、「イイ子」をもっとアピールできるかもなどと下心を一杯にして、軋む階段を登った。

その時、部屋のドアがガチャリと開いた。

「やっぱり、ミチだ」

ドアノブに手を掛けたまま、入口から顔を出したのは背の高い少年だった。

傍にある小さい窓から光を受け、濃いブラウンの長めの髪の毛が明るい金茶に輝いている。見下ろす彼の瞳の色は実は黒ではない、東小父さんと同じ濃いグレーであった。圧倒的な力強い光を背負う、彼の父親と同じ類まれな容姿を持つ少年。こちらを見下ろしている優しそうな笑顔は、最後に別れた時と全然雰囲気が違っていた。2年と言う時間が彼を成長させたのだろうか。与えられた時間は同じ筈なのに、自分とは全然違う。いや、周りの中学生達とは違う大人びた雰囲気を漂わせていた。

「久しぶりだね、ミチ」

「……雄……あ、東くん」

第一声はマズマズだった。幸いにも声は震えていない。

少年は長年変わらない呼び名で呼んでくれた。それに対して私は、とてもじゃないが「雄兄ちゃん」と昔のように呼べなかった。それでも懐かしさと切なさと苦しさと……一言では言い表せない感情が渦巻いて胸が一杯になった。彼と過ごした幾日かが頭の中を高速で過ぎ去っていき、最後に顔を合わせた場面がピタリと停止した。その映像と目の前の顔が重なるのを振り払うように頭をさげ、「お、お久しぶりです」と先輩にするような他人行儀な挨拶をしてしまった。

「……」

彼はスッと真顔になり黙って見下ろした。そんな彼を見てマズかったかと一瞬ビクついたが、今の私にはこれが精一杯だと思い直した。彼が何か言いたそうに口を開いた途端、彼の後ろから2人顔を出した。

「おかえり、ミチ」
「おかえりなさい」

子供っぽい表情が残る真面目そうな男の子と、楽しい会話を中断されて怒っているのか、妹の真美子の不機嫌そうな声。

「……ただいま」

おそらく私の顔は、先日までクラスメートだったどっかの猿相手に見せる不自然な笑顔以上に引き攣っていただろう。私は「ご、ごめんなさい、着替えるから」とそそくさと階段を上り、自分の部屋へ逃げ込んでドアを静かに閉めた。

「東」方神起な男たち～前編～（後書き）

コー●CMはＹｏｕＴｕｂｅで見れます←
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ＸＦｉｃｃｒｍＱｐＨ８＆ａｍｐ；ｆｅａｔｕｒｅ＝ｒｅｌａｔｅｄ

「つーか、アイツ信じられないよね。せっかく超難関校の私立に受かったのにさぁ。なんで山野中？」

妹の真美子（まみこ）は勝手に私のベッドの上で寝そべりながら、私の大事なアメリカのアイドル雑誌を乱暴にペラペラと捲っているようで、不快な音が聞こえる。

（そりゃアンタの為でしょう）

……とは言えない。そんなこと言えばアラタの立場が無い。私は「羨ましい奴め」と声には出さないで口だけ動かした。英語の参考書を目で追いながらながら、真美子がこれではアラタが報われないなぁと、少し頼りない生真面目そうな少年の顔を思い浮かべた。

「そ、それよりも、真美子。私の雑誌、もっと大切に」

「ま、アラタはどうでもいいわ。それより雄兄ちゃん！　４月から一緒の中学校なんて信じられない！　なんだかドキドキしちゃうし、絶対モテちゃうよね……」

真美子はアッサリと無視してバシンと雑誌を閉じた。ガバリと身体を起こした後正座をし、「神様、雄兄ちゃんに変なムシがつきませんように！　そして、どうかワタクシめと両想いに！！」とウンウン唸りながら胸の前で十字を切って、腕を伸ばしてながらアラーの神に祈るように身体を伏せた。

その姿を黙って眺めていると、ジロリと睨まれた。

「ちょっと、なに？　その眼！　言っとくけど、オネェちゃんにも絶対渡さないからね！　姉妹でも手加減なしだから！」

「……可哀想に、アラタ」

「え？」
「べつに。そ、それよりも、もう彼女くらいいるんじゃないの」
「あのね……『遠くの恋人より近くの幼馴染』だよ。わかってないなぁ、オネェちゃんは！　ま、オネェちゃんは、どうせ東オジサンのほうだもんね」
「……あ、あのさ、祈る神様一つに絞ったら？　二股かけたら、願い事叶わないよ」
「ちょっと、そんなこと言ってる場合？！　あんだけイイ男なんだから、なるべく多く祈っとかなきゃ！」
「……」
「そうそう、こうしちゃいられない。夜更かしはお肌の敵だわ。オネェちゃんも早く寝た方がいいよ、またここにニキビできてるし？」

真美子は自分の頬を指さしながら、私の意見をサラリと無視した。こちらにチラッと顔を向けた後、長くて綺麗な黒髪を揺らしながら部屋から出て行く。

「……そう思うなら、先にお風呂入らせて欲しいんですけどね」

また今日も真美子の長風呂の後なんだろうなぁ、と半ば諦めた気持ちで真美子が出て行ったドアに背を向けた。鍵付きの机の引き出しを凝視した後、鉛筆立てに手を突っ込んで鍵を取り出し、引き出しを開けた。そっと奥にしまったままのフォトフレームを取り出す。ついさっきまで楽しく食事をしていた面々が写っている写真を眺めながら、立ちあがってベッドに寝転がった。

＊＊＊＊＊＊＊

フォトフレームの中に映っているのは、大人が６人、子供が４人。大人６人のうちの２人はうちの両親だ。

私の父はこの年代にしては背が高く、顔はなかなかの男前だった。最近では髪の毛が薄くなってきており、そのことを気にしているらしいが。母は父よりも2つ年下で、どちらかというと平凡な主婦だ。唯一自慢できるところがあるとすれば、料理がなかなかの腕前であるというところか。

華やかな父と地味な母。

何故この組み合わせで結婚したのかと、子供ながらに疑問に思うことがあったが、それは最悪な形で判明することになる。ようするに、私が母のお腹に宿ったからだ。いわゆる両親は後に言う「授かり婚」だった。

地味な専業主婦でヒッソリとしている母に対して、父は非常に人目を引き社交的だ。普段は仕事が忙しく、接待にゴルフに飲み会とサラリーマンの王道を駆け抜けていた。それ故、私も真美子も幼少の頃は滅多に遊んでもらえず、家族サービスをされた記憶が無い。

日本のサラリーマン事情だと思って仕方がない……などと思っていたら、その実は只でさえ少ないプライベートな時間を、自分の付き合いに優先して充てていたからだと後になってわかった。

父は底抜けに友達付き合いがよく、いつも誰かしらに呼び出されてはいそいそと出かけていた。普通、仕事の疲れを癒すのは家族との団欒である筈なのに。若くして結婚したせいもあるのか、何故か仲間が優先で家族はいつも二番だった。一時期子供の目から見てもひどかった時がある。大人しくて控えめな母は、そのことをよく理解しているのか見て見ぬふりしてるのか……黙って父を見送っていた。私は横でその母の寂しそうな顔見ると我がままを言えなくなり、口を噤んでしまったのを覚えている。

だがある時、父は気付くのだ。娘2人が自分に全然懐いていないということを。たまにうちにいても「なんで居るの?」という目で見ていることを。

さすがに「こりゃマズイ」と思ったのだろう。それからの父は己の行動を省みて反省し、家族と過ごす時間が多くなった。いや、多

くなったというより、自分の付き合いに家族を連れて行くようになったと言うべきか。ようするに家族ぐるみでの付き合いがスタートしたわけである。

そのおかげで、父は家族からの株は上がった。特に真美子からは「お父さん、大好き！」と抱きつかれ、デレデレ顔だった。私も同じように嬉しくて、苦手だった父と打ち解けた感じになった筈なのだが……ある出来事がきっかけで、なんだかんだ理由をつけてあまり顔を出さなくなってしまった。母もそんな私を心配して、一緒に家に残るようになり、父は真美子だけを連れて行くようになった。この写真はそうなる前の一枚であり、最も仲の良いメンバーが揃っている。その頃の私は両親の前でぎこちなくとも笑っているし、妹の真美子などは父親譲りの整った顔で、バラのような笑顔だ。

中央に立っていた両親の左隣の男女に視線を写した。

そのうちの一人が、夕方挨拶した女性だ。彼女の名前は「安西（あんざい）・グレース・マリ」。

現在私が通っている英語塾の先生である。先生は名前の通り、アメリカ人と日本人のハーフだった。先生の肩を抱くように立っている小柄な男の人が先生の旦那様で、安西小父さんだ。その2人の前に小さい男の子が、私といい勝負のぎこちない顔付きで立っていた。

安西夫婦を足して2で割ったような可愛らしい顔立ち。クオーターなのでやはりどこかに外国の匂いを感じさせながらも、髪と瞳は黒い。そしてこの写真の中では一番背が低かった。

彼の名前は「安西新（あんざいあらた）」。

安西家の一人息子で、真美子と同い年の男の子だ。安西小父さんは大学で英語の講師をしており、マリ先生は翻訳や通訳の仕事をしている傍ら、個人的に英語塾も開いている。そんな優秀な血を引いたアラタは当然頭もよく、この春なんと超難関校であるK成中学に受かったと言うのだ。それを先生から聞かされた時は、素直に「おめでとうございます！」とお祝いを述べた。が、帰って来たのは苦

笑だった。

『それがね？　あの子、急に行かないって言いだして。引っ越しが決まった途端急に合格蹴っちゃったのよ』

『は？　……な、なんで？　せっかく受かったのにですかっ？！』

『そうなの。記念で受験はしたけど、よくよく考えたら電車通学する時間がもったいないから、ですって。ま、そんなのは嘘だと思うけどねぇ』

『あああの！……あ、いえ、ス、スミマセン……』

『！！……あら、いやだ、美千子ちゃんが謝ることないのよ。ま、本人がよくよく考えたことなのでしょう。自分の人生だしね？　今回は残念だったけど、高校からという手もあるし。それに中学からあんな東京の方まで通わせるのもね？　アラタには塾で頑張ってもらうことになったから』

『……そう、ですか』

『そういうわけで、アラタ、山野中行くことになったからよろしくね？　美千子ちゃんも真美子ちゃんもいるから安心だわ～。ほらあの子ちょっとシャイでしょ？　知り合いが誰かいれば心強いし』

『……あ、あの……私じゃ役に立たないけど、真美子ならきっとアラタの力になってくれると思います』

『あら、それなら息子も喜ぶわ』

安西先生はパチっと可愛らしいウィンクをしてくれたが……。

私は写真を眺めながらアラタとマリ先生の気持ちを思い、溜息を吐いた。先生は明るく言っていたが、内心とても残念だったに違いない。中学からK成に通えば、公立中学では絶対味わえないしっかりとした教育と、約束された将来が待っているのだから。行きたくても行けない人が多いと言うのに、それをアッサリ蹴ったアラタがスゴイというか命知らずというか。同時にその真の意味を知っている私としては複雑な気持ちになった。

「真美子……責任重大だぞ」

アラタも真美子も気持ちは一方通行。よく小説や漫画に出てくるそように幼馴染同士の恋なんて、現実そう上手くはいかないものだ。

そして、最後の家族。

両親の右隣には、やはり一組の男女が立っている。2人とも綺麗な顔立ちで、美男美女という言葉がぴったりだった。男の人は「東・ルーサー・健人（ケント）」。

東小父さんは、マリ先生と双子の兄妹であり、父と東小父さん夫婦は大学からの友人でもあった。父もそれなりにモテたというが、この東小父さんには敵わないだろう。

父に手を引かれながら、初めて東小父さんを見上げた時のことは今でも胸に焼き付いている。その時の衝撃と言ったら、悪いが田宮君やリバー様の比ではない。この世で初めて美しいものに触れた感動に近かった。彼は目尻に皺を寄せながらニッコリと笑い、私の目線に合うようにしゃがみこんで、頭の上にポンっと手を置きながらそっと撫でてくれた。それはまるで、今まで日陰のように生きてきた野花に、思いがけず美しい蝶が舞い降りてきたような光景だ。

『……やっと美千子ちゃんに会えた。お母さんに似て、とっても可愛らしいね。お父さんに似なくて良かった、良かった』

『おい、そりゃどういう意味だ？　それよりも俺の娘に手を出すな！』

『早く大きくなって、雄臣（ゆうじん）のお嫁さんにおいでね？』

『こらこら、無視すんな！！』

『いやいや、こりゃ将来が楽しみだよ、オジサン』

『ちょっと待て！！』

東小父さんはハハハ～と笑いながら父の言葉を無視して、私を軽々抱きあげてくれた。その時耳元で「……私、オジチャンのお嫁さんになりたい」と言ったのは2人だけの秘密だ。

東小父さんはそれはそれは私を可愛がってくれた。親以外、親戚も近所の人も大体私より妹のほうを向いて「あら、こちらのお嬢さん、とっても可愛いわね」と言われ続けていた私は、すっかり東小父さんに心を許し、父よりも懐いたのは仕方ないと思う。おそらくあれが初恋だったに違いない。

それからというものの、テレビや街で外国の人を見かけると、すぐ目を追ってしまうクセがついてしまった。外国の匂いがする、東小父さんや安西先生の家に行くのが楽しみになってしまった。子供達は玩具やゴッコ遊びや外遊びをしているというのに、私だけはいつも、外国の絵本や洋書、雑誌を眺めては未知なる世界に夢を馳せていたのだ。

そして、時々東小父さんを盗み見ては、ホウっと溜息をついていた。私の洋画好きや英語好きは、全てこの東小父さんに繋がっている程、東小父さんは私の「理想の世界」そのものだったのだ。いや、「理想」などという言葉では片づけられないかもしれない。彼は私にとって「神」というものに近かった。眺めるだけで、傍にいるだけで心が洗われる存在だ。

それは、迷える子羊が祈りを捧げる十字架のイエスのように。座禅を組む修行僧を導く仏陀のように。

大袈裟だが、それぐらい尊い存在だったのだ。

そんな東小父さんの横にいる権利を与えられるのは、それ相応のものでなければならない。今でもハッキリ思いだせるが、東小父さんの奥さんである「東多恵子（あずまたえこ）」さんはとてもキレイな人だった。父や東小父さんと同級生で一緒の大学だった彼女は、在学中４度ともミスキャンパスに選ばれるほど容姿端麗才色兼備な人で、ありとあ

らゆる褒め言葉は欲しいままだったらしい。大学卒業と同時に結婚した東小父さんと多恵子さんは、その時には「雄臣」と言う名の神の子を授かっていた。そんな二人は誰から見ても理想のカップルだった。

けど、私はこの多恵子小母さんが苦手だった。

初めは東小父さん同様、憧れだった。

多恵子小母さんは、綺麗で気配りが効いて……全てにおいて完璧だった。理想そのもの、こうなりたいという女性像に近かったのだ。

しかしその夢のような憧れは、出会ったその日に砕け散った。

彼女が私を見る目は、東小父さんと真逆な冷たい眼差しだった。

真美子はとても可愛がるのに、私には気を使っているフリをする多恵子小母さん。

しかも皆が見ていない時に急に素っ気なくなる態度、そしてそれをひた隠しにしていた。幼稚園の頃からイジメられ体質だった私には、彼女の態度といじめっ子の態度のそれと変わりないのはすぐわかった。そんなの被害妄想だ、子供のくせになにがわかると言う人もいるだろう。けど子供だって同じ人間だ、バカじゃない。少なくとも無条件で可愛がられているかそうでないかくらいは肌で感じるものなのだ。

『美千子ちゃんも……母親じゃなくて、悟（さとる）に似れば良かったのに。気の毒ねぇ』

（「悟」って、お父さんを呼び捨て？）

彼女は私に聞こえてないと思ったのだろうか。

みんなが見ていない時に、大人しく本を眺めている私の背に向かって残念そうに言ったのだ。私はそれを聞いた時、初めは訳がわからず全身硬直して呆然としてしまった。ショックが抜けると底知れぬ悲しさと行き場のない怒りがカッと体中に燃え広がった。最初に抱いた憧れが強かった分、あの時の言葉では言い表せないような衝撃は一生忘れないだろう。

その一言をきっかけに、私の足は東小父さんの家から遠のいた。

例え多恵子小母さんから嫌な態度を受けようと、東小父さんに会える事といろいろな外国の絵本で帳消しだった筈なのに、だ。

そして、珍しく安西先生の家に遊びに行った時、ちょうど来ていた多恵子小母さんが私だけではなく、さりげなく母も除けもの扱いしていることにも気付いてしまった。しかも東小父さんの前で、うちの父にベタベタしながら甘える多恵子小母さん。その姿は人の神経を逆なでするような、ザワリとした嫌な感触を直接心臓に当てられたようだった。しかもうちの父親は困った顔をしながらも、多恵子小母さんにいいようにさせたままなのだ。それどころか、必要以上に気を使ってマリ先生を手伝い、黙って悲しそうにしている母の顔に全然気付きもしない。

仲のいい親友同士、楽しい時間を共有する集まりが、私にはまるでド素人の茶番劇に感じた。こんな痛い劇、誰が好き好んで自分も混ざらなければならぬのか。

それからは「行かない」とゴネ続ける私を、父親はなんとも言えない顔で見ていたが、そのうち真美子だけを連れて行くようになった。

しかし――月日が経ち、そんな子供を交えた家族ぐるみな付き合いも、意外な形で結末を迎えることになる。

2年前、突然多恵子小母さんが病気で亡くなったからだ。

その前はいろいろ大変だった。うちの父親はよほど東夫婦と仲良かったのか知らないが、病院に通い詰めだった。私も家族で一度だけお見舞いに行ったが、やせ細った多恵子小母さんの身体を見て多少は同情はしたものの、悲しいなんて気持ちなど湧かなかった。しかも「ある会話」を聞かされたのでは、同情した気分を返して欲しかったくらいだ。

それは、私がトイレに立ち、父と真美子が売店へ言った時のことだった。

＊＊＊

広い病院をうろついてトイレを見つけ、用を足して戻ってくると、多恵子小母さんの病室の中から声が聞こえた。その声色からして、あまり感じがよくない。私は入って行くのを躊躇い、その場で突っ立ったまま聞き耳を立ててしまった。

『どうせ、イイ気味だと思ってるんでしょ』

『……そんな』

『私の事嫌いなくせにわざわざ見舞いに来るなんて、そんなに健人の感心を引きたいわけ?!　奪い返したいわけっ?!　結婚してからも周りをウロチョロウロチョロ、目ざわりなのよ!』

『……』

『悟も可哀そうよ!　健人の傍にいたい為に、自分の友達に未練タラタラな女に引っかかった揚句、ご丁寧に妊娠までさせられてしまって!　悟は優しいから後に引け無くなったのよ!　大体、あの美千子って子、本当に悟の子?!　全然似てないじゃないの!!　あんた達2人揃って健人と悟にベタベタベタベタ……本当にムカつくわ。あぁ、そういうずうずうしい点、美千子は絶対アンタの子ね。それが雄臣(ゆうじん)の嫁!?　冗談じゃないわ!』

『……子供のことは、どうか……』

『……うるさいのよ……私に説教しないで!　もう二度と来ないで!　アンタの顔なんて見たくないの!!』

私はその場から逃げだした。

気がつけば病院の中庭のベンチに何十分も座って、途方に暮れていた。

それからは、どうやって家に帰ってきたのか覚えていない。記憶があやふやなのだ。もう小学校高学年だったので、来た通りの道を引き返し、持っていたお小遣いで切符を買って一人で電車に乗って

帰ったのだろう。その日はなぜ勝手に帰ったと、両親からひどく怒られた。

それからの私は、家での口数が減った。両親の顔を見ると、多恵子小母さんの顔と言葉がチラついて、まともに会話ができなかった。そんな私を母は心配そうにしてたが、「思春期だろ、心配するな」と一言で片づけてしまう、父親。

（……あぁ、そうか。そういうことか）

あの時、多恵子小母さんは言った。私は本当に父の子かと。母は結婚しているのにもかかわらず東小父さんを慕っていると。

父親と上手くいかないのも、多恵子小母さんが素っ気なくするのも、東小父さんが母似の私を可愛がるのも、ちゃんと理由があったのだ。

それは想像以上にショックを与えた。

男女の違いを「性教育」という形で知り始めたばかりの多感な年ごろだった私には、耐えがたい事実だったから。よくよく考えればそんな昼メロのようなことあるはずもないのに、すっかり私は多恵子小母さんに振り回されていたのだ。

私はますます家でも学校でも暗くなってしまい、一時期家族とは挨拶だけで多恵子小母さんが亡くなるまで、まともな会話すらなかった。

後になってよく思うことがある。この頃から中学卒業する頃にかけて、よく道を踏み外さなかったと。大人しい性格で、自らダークサイドを歩く勇気も無かったのが幸いしただけだ。たまたま運が良かっただけ。とりあえず少年鑑別所にお世話になるようなことにはならなかったが、それと引き換えに過度のストレスによるどもり癖、いわゆる「吃音症」が発症してしまった。

短い入院生活を送った多恵子小母さんは、クリスマスを迎える前

に亡くなった。

彼女の死を父から聞かされた時は、涙すら出なかった。むしろ彼女が亡くなったことで、あの時聞いた会話も全て無かったことのように感じ、胸をなでおろしたほどだった。母は泣いていたが、何故あんだけ罵られた上に、自分を嫌っていた女の為に泣くのかと、その気持ちが全く理解できなかった。ただ残された東小父さんや雄臣が気の毒だっただけだ。

お葬式は冷たい雨が降る寒い日にひっそりと行われた。

弔問客がやけに少ないと思ったのは、来るのは大学の友人関係や東小父さんの親戚関係の人ばかりで、多恵子小母さんの親族関係はいなかったからだ。この時に初めて私は、偶然聞いた東小父さんの親族のヒソヒソ話で、多恵子小母さんが天涯孤独の身であったのを知る。彼女は子供の頃に両親を亡くし、施設で育った後、大学入学を奨学金制度という形で勝ち取り、苦労を重ねた人だったとのことだった。

私は多恵子小母さんのもう一つの顔を知り、式の間中、多恵子小母さんに向ける感情をどのようにすればいいのかわからず複雑な気分だった。残酷にも、私の中では多恵子小母さんへ憧れは微塵も残っていなかったから。

人が亡くなったというのに、ボーっと考え事をして涙を流さない私を、雄臣は睨んでいた。

雄臣は両親の素晴らしいところだけを全部受け継ぎ、この世に受けるべきして受けた「神」に選ばれた子だ。東小父さんに似た顔、二人の優秀な頭脳を譲り受け、並みはずれた運動神経、異国を思わせる容姿と身のこなし。そして、紳士でやさしい性格。

ただし、極度のマザコンで、気に入らない人間には容赦ない二重人格だったが。

私は彼が苦手だった。東小父さんと仲良くしているとすぐに邪魔

するように割って入ってきた。それはまるで、東小父さんが「俺と母親のもんだ」というように。

逆に東小父さんに近付かなければ、私にも普通に優しかった。初めは多恵子小母さん同様一目見て憧れを抱いたが、すぐに判明したそんな雄臣の性格が、彼の背後に見える多恵子さんの面影が、どうしても馴染めなかった。よくよく考えてみれば、東小父さんに「顔が似ている」だけで、彼はまったく別の人間だ。

父の付き合いに顔を出さないようになってから、彼の態度が段々と硬化し始めた。多恵子小母さんのように素っ気なくなる、雄臣。少しずつ狂い出した歯車。

最後の決定打が、多恵子小母さんのお葬式での私の態度だった。お通夜の後、人気のないところでぼんやり座っていたら、雄臣が来ていきなりグイッと乱暴に立たされた。強張った表情をしながら、泣きはらした赤い目で睨まれた。

『こんなところで、なにしてるんだよ』

『……』

『ミチは、泣きもしないんだな』

『……』

『マミは泣いていたのに……』

『……』

『そういえば、ミチは全然見舞いにも来てくれなかったもんな』

『……』

『どうせオマエにとっては父さんだけだもんな？　……母さんの言うとおりだ。母子(おやこ)揃ってこんな薄情な奴らと付き合ってたなんてさ、父さんも悟小父さんも見る目ねぇよな。しかも俺の嫁？　アホらし』

『……』

『……もう俺たちに二度と近づくな！』

雄臣は低い声で吐き捨てた後、みんながいる方へ行ってしまった。

私は何も言い返せず俯いたまま動けなった。
私は悔しくて悲しくてやりきれなくて、この時初めて泣いた。お葬式の時には一滴も涙が出なかったというのに。
東小父さんに冷たい奴だと思われたに違いない、嫌われたに違いないと思うと、涙が流れた。多恵子小母さんには一生嫌われたまま、存在を否定されたまま会うことがないという事実に、涙が止まらなかった。しかし例え本当の事を雄臣に言ったところで、複雑だった気持ちを伝えたところで、ママっ子だった彼が私の言葉を聞く筈もない。信じる筈もない。
好きでこんな立場に生まれた訳ではないのに……どうしてこうなってしまったのだろう。

それから私は二度と東親子に近付かなかった。

＊＊＊＊＊＊＊

目尻からこめかみに温い涙が落ちて行く。
久しぶりに思い出した嫌な記憶。振り払うように慌てて指で拭った。ベッドから身体を起こし、写真を抽斗の奥に乱暴に押し込んで、音を立てて閉め、鍵をかけた。

写真の中の雄臣は、東小父さんと多恵子小母さんの前に立って笑っていた。あの頃は彼も、何も知らない私も、幸せだった。それが無情にも、月日は残酷な方向へと流れて行った。

今日顔を合わせた時や食事をした時、彼の態度は出会った頃に近かったと思う。2年前の憎しみが籠った感情は見えなかった。
……あの巧妙に作られた仮面の下はわからないが。
（嵐が来る）
窓に叩きつける雨と風の音を聞きながら、来月からアラタだけで

なく、雄臣も山野中に通うことになると思うと、正直複雑な気分だった。

『父さん、仕事が忙しいって言うし。それに、母さんも日本で眠ってる』

これは、雄臣が食事の時に言った言葉だ。

東小父さんは仕事が忙しい上に頻繁に移動するというので、最低中学卒業するまでは安西先生のところで居候することになった、雄臣。

それを聞いた父は「えらいぞ！　さすが男の子だな」と、もう中学3年生になる彼に対して小学生にするような口調で褒めた。真美子も目を輝かせ、飛び上がらんばかりの喜びようだ。

『アラタとマミ、それにミチもいるから、心強いよ。4人で仲良くやっていこうな？　オレは中学最後の1年間だし』

親たちの信用をしっかり握っている容赦ない笑顔で力強く言われたら、誰が「とっても胡散臭いので、私は無視していただいて結構です」などと言えるだろう。

私は多恵子小母さんが亡くなった時と同じように無表情ではなかった。あれから2年が経ち、やっと傷が癒え、類人猿に鍛えられた私は、「よろしくな、ミチ」という雄臣に、「よ、よろしくお願いします」と愛想笑いを浮かべて頭を下げられた。

『美千子ちゃん。すまない……雄臣を頼むよ』

食事会の後にさりげなく私の側に来て、真剣な顔で言った東小父さん。

彼の増えた目尻の皺を眺めると、この2年本当に1度も会わなか

ったんだなという実感が湧いた。あれだけ憧れた人でも、会わなければ自然と忘れていくものなのだなと思った。私は曖昧に微笑んで頷いたが、おそらく期待には添えないだろう。大好きな東小父さんに応えたい気持ちは十分にあったが。

（大体学年が違うし、そんなに接点がない筈。たったの1年だ。もう、絶対に雄兄さん、いや、『多恵子小母さん』に振り回されたりしない）

東小父さんには申し訳ないが、私は密かに心に誓った。

引き出しから目を逸らし、結露がひどい窓に近付いて水滴を手でグイッと拭った。

ますます強くなる暴風雨。

外で吹き荒れる嵐に、私は嫌な予感を感じた。

春の訪れと共に突然「東」からやってきた風。その風はまさしく「神」が起こす凄まじい神風となり、私の周囲を根こそぎ巻き込んでいくのだが、この時の私には想像もつかなかった。

「東」方神起な男たち～後編～（後書き）

美千子結構キツイです。冷めて、るのかな？こうして見るとスゴイ小学５年生やな……。コメディ路線を求めていて、シリアス苦手な方、スミマセン。ｍ（＿）ｍ　でもこれ書いてて、親のあるべき行動を再確認させられちゃったりして。

幼馴染というより、ただの知り合い～前編～

春。桜が舞い散る４月。この季節がくるたびに、新たな気持ちになる。

ほんのひと月前までは、それこそ卒業式の時には、「なごり雪」の歌がピッタリなほど寒く、薄暗い空の下で３年生を送り出した山野中学校も、学校の周囲を取り巻く桜の木が初々しい新入生を歓迎したのは記憶に新しい。

現在私がいる頭上には、先日まで咲き誇っていた淡い桃色の花びらの代わりに、新緑の葉が生い茂り眩しい程だった。その葉を揺らす風も穏やかで、冬の影はもう無い。空を見上げれば、澄み切った青空が目に飛び込んでくる。春のなんともいえない空気が、あまりに気苦労を重ね過ぎてポッチャリ度が若干下がった全身を覆う。

「……って、ちょっと！　荒井さん、聞いてるの？！」

「へ？　ハ、ハイ？！」

不機嫌な声で我に返った。

目の前の集団は私がボーっとしているのがわかったのだろう、全員顔を強張らせていた。先頭にいる少しキツそうな顔の女の人が、ズズイと一歩近寄って来る。

いけないいけない、目の前の厄介事から思わず現実逃避をしてしまった、荒井美千子。現在進級して中学２年生である。

「だ・か・ら！　東（あずま）君って彼女がいるのかって聞いてるの！　それにアナタの妹、ちょっと東君に馴れ馴れしくない？！　いったいどういう関係なのよ？！」

鼻息を荒くしながら、勝手な意見を捲し立てる女。

（そんなの知るか。気になるなら、真美子（まみこ）に直接聞けよ！）

……とは言えません、絶対に。

そんなことを言ってしまったら、絶対この集団からリンチ決定である。ここはいつもの通り、適当に誤魔化して穏便に済ます得意の方法が手っ取り早い。

「あああ、あのですね……雄、って、いや、え、えーと！　あ、東先輩のことは、私もよく、その、知らなくてですね……」

女子の皆さんは「雄」の時点で目がつり上がった。その形相は、下手したら2年になってから益々迫力とハクが付いた桂龍太郎（かつらりゅうたろう）より恐ろしい。

「知らないってどういうことよ?!　アンタら姉妹と東君は幼馴染っていうじゃないのよ！！」

（そこまで知ってるなら、「どういう関係なのよ」って、聞くなよ……）

溜息も文句も必死で飲み込んだ。

そもそも何故私はこんなところで貴重な昼休みを過ごしているのか。先生にプリントを届けに行った筈が、何故呼び出しの定番である体育館裏で3年の女子に囲まれないといけないのか。誰でもいいから教えて欲しい……というより、救ってほしい。

2年に進級してから一か月も経っていないというのに、こういった呼び出しが今回で5度目だった。しかもありがたいことに、毎回毎回違うメンバー。

思い起こせば、初めて集団に囲まれたのは始業式が始まって一週間後だった。

＊＊＊

体育館裏のゴミ焼却炉にゴミを捨ててたら、前触れもなくいきなり囲まれた。

何がなんだか訳わからず、怖くてパニックになり、今にも泣きそうで言葉も発せないほどショックだった。一番先頭に立っていたのは、新3年女子の中で一番可愛いと噂されている、女子バスケ部の錦戸(にしきど)先輩。いくら可愛い顔でも、上から目線で「アンタ、東君のなんなのさ！」とドスの効いた声で詰られれば、普通の人は泣く。

が、天は罪のない「ザ・普通女子」を見離さなかった。

超運がいいことに、女子バレー部の部長である新3年生・平畑(ひらはた)先輩達が、こんな人気のない体育館裏にもかかわらず、偶然にもたまたま通りかかったのだ。思わぬ強力な助っ人が、錦戸先輩の前に立ちふさがる。私そっちのけで、火花を散らしながら睨み合う女子プロ……いや、3年の先輩方。既に私の頭の中ではリングアナによって彼女達のリングネームがコールされていた。

赤コーナー〜、リングに咲く華麗な毒花ぁ〜、ラフレシア・錦戸ォォォォ！！

続いて、

青コーナー〜、小粋なロープの魔術師ぃ〜、アマゾネス・平畑ァァァァ！！

山田君、座布団1枚荒井美千子にやって！！

……なんて自画自賛してるうちに、試合開始のゴングが早くも鳴り響いた。

『ちょっと、あんた達、うちの後輩を囲んで何してるのよ！』

『う、うるさいわね、ちょっと荒井さんに用事があっただけよ！』

『ちょっとの話の割には、荒井さん怯えてるじゃないのっ？！　大体、こんな人気のないところで寄ってたかって、何の騒ぎよ？』

『そ、それは、だから……た、頼みごとがあったからよ！　別に何もしちゃいないわ！！』

『フン！　どうせあ・ず・ま・君、のことでしょ？！　荒井さんは単なる幼馴染って言ってるじゃない！　そんなに気になるなら、直接東君にでも聞けばぁ？』

『そ、そんなのあなた達に関係ないでしょ！！　もう、行こう！！』

金魚のフンのようにゾロゾロと退散していく、錦戸お姉さま率いる女バス軍団。私は一気に気が抜け、その場でフラついてしまった。

『ちょっと、大丈夫、荒井さん？！』

バレー部の先輩達は慌てて私の腕を支えてくれた。私は違和感を覚えつつも、脳内で密かにリングコールをしたことを心の中で詫びつつ、助けてくれた平畑先輩達に深々と頭を下げてお礼を言った。違和感と言うのは、年が一つ違いの先輩はなんとなく先輩後輩というより、ライバル意識の方が近くてお互い近寄りがたいものがあったのだが、今この場にいる先輩達からはそんな雰囲気は感じられなかったからだ。

（……なんだ、平畑先輩達って結構優しいんだな）

感動半分安心半分で、これ以上ないくらい低姿勢で礼を述べ続けながらこの場を退散しようとしたら、平畑先輩にガシリと腕を掴まれた。

『ちょっと、待った！』

『へ？』

『あのさ。荒井さんって、実際のところ、東君とどうなの？』

『え……』

『あれだよね、ただの幼馴染なだけ、なんだよね？』

『……』

『東君って、スポーツ何やってるの？　……サッカーやらないのかな？』

『…あの』

『ん、もう、荒井さんったら！　全部言わせないでよ！　あ！　そうそう、とりあえずこれ、お願いできるかな？』

そう言いながら握らされたものは、未使用の仮ネーム。

（……ま、所詮そんなもんだよね……）

アマゾネス先輩に対して勝手に期待したのはこっちで、相手に非はない。むしろ勘違いして感動したほうが悪い。いや、都合よく助けが通りかかるなどと、偶然などと、世の中そんなに甘くないということが分かっただけでもヨシと、納得しなければならないこともあるのだ、人生というやつは。

＊＊＊

そんなこんなで、このような呼び出しが5度目ともなってくると人間嫌でも慣れる。いつもの通り「いや、東先輩（ヤツ）とはただの知り合いです、まったくもって関係ないですから」アピールをすれば、相手は言いたいこと言って、最後に「東君に近付くな」か、「情報お願い！」か、「これ渡しておいて」と手紙や仮ネームやプレゼントを無理矢理押し付け、勝手に撤収するのである。

3年女子のコンコンと続きそうな説教を神妙な面持ちで聞く振りをしたが、今回はそういうわけにはいかなかった。心の中は「もうすぐ予鈴が鳴る、こっから教室まで遠いし、しかも次の時間は英語の一之瀬（いちのせ）だよ」とイライラが募るばかり。早くもソワソワし出した。

「恐怖のＧＯＧＯランニング」でお馴染のバトミントン部顧問、今年も2年英語担当になった一之瀬先生は、マラソンの時だけ巻き舌発音で生徒を煽るかと思いきや、授業でも思う存分生徒に対して恐怖心を煽っていた。本鈴が鳴った瞬間に席についていなかった者に

は、その場で厳しい御仕置が待っているのだ。

「……って、アナタまた聞いてないでしょ、荒井さん。もしかして私達の事ナメてるっ？！」

ハッとした。

顔を上げると、先程よりもさらにキツイ歪んだ顔。ヤバイ！　と思った時は、もう遅かった。

（あわわわ、こりゃマズイ！）

怒鳴られるか、叩かれるか……と覚悟したその時。

丁度私の頭上にある、体育館二階の放送室に当たる窓がガラっと乱暴に開いた

窓から素行のよろしくない強面の顔と金髪を覗かせ、追い打ちを掛けるように低い不機嫌な声が女生徒達に襲いかかる。

「……さっきから、ピーチクパーチク、っるっせえんだよっ、ブス共！！」

幼馴染というより、ただの知り合い～中編～

ハァハァ……

目的地である自分の教室の前で立ち止まり、全力で駆けて来たせいで乱れた息を整えた。

「2年1組」

よりにもよって、新しい教室は体育館から一番遠くてボロい校舎の端だった。唯一救いだったのが一階の教室だということだが、それも今この状況では意味がない。何故なら廊下にはもう誰もおらず、この時点で予鈴はおろか、本鈴も鳴り終わって授業が始まっていたからだ。僅かに一之瀬の声と2年1組の生徒の声が聞こえた。

一之瀬のいつものように良すぎる発音で、

“Ｂｅ　ｑｕｉｅｔ！　Ｐｌｅａｓｅ　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｔｅｘｔ　ｂｏｏｋ！”

という声が響いている。

「……最近、本当にツイてない……」

思わず小さい声で呟いてしまった。

（春の嵐と共にやってきた「神風」と再会してから……って、まてよ。いや、中学に入って「類人猿」に会ってから……、いやいや、それ以前の小学生の時も！！）

そこまで考えたところで無理矢理思考を中断させた。ようするに、生まれて物心ついてから、ツイテないことだらけだったことに気付

いてしまったからだ。どうやら今に始まったことじゃないことを悟り、落ち込むのは後にして、とりあえず目の前の災難を突破しようと決めた。ここでウジウジしたところで、時間が無駄に過ぎゆくだけで、一向に解決せず事態は悪くなる一方だ。

（けど、教室の中には……ハァ）

頭の中をチラつく数名の顔。その顔達（メンツ）を思い出して、最大の溜息を吐いた。

（ああ、どこか遠くへ行きたい……それも私のことを知らない、最果ての『網走』辺りに……いやいや、この際北方領土でもシベリアでも！！）

ありったけの願いを込めて祈ったがやめた。大体そんなこと叶う筈もない。

グッと腕に力を入れて、覚悟したように思いっきり！　……ではなくて、そっとクラスの後ろの扉を開けた。静かに開けたつもりなのに、建てつけが悪いのか、「カラカラ、ガコっ」と大きい音を立てて開く引き戸。

その音に気付いて一斉にこちらを見る、2年1組の生徒達と一之瀬先生。

「……あ、あの、遅れて、スミマセン……」

扉の前で小さい声で謝罪する私を見て、一之瀬は眉をひそめた。

「本鈴はとっくに鳴ってるぞ？」

「ハ、ハイ、スミマセン……」

「名前は？」

「あ、荒井です」

“ＮＯ，ＮＯ！　Ｅｎｇｌｉｓｈ！！”

「！！　……マ、“Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｍｉｃｈｉｋｏ　Ａｒａｉ！”」

扉を閉めるや否や、その場で慌てて姿勢を正して答えた。この時点で教室内に忍び笑いが響き渡ったが、一之瀬の御仕置タイムが既に始まっているので、ここは無視して大人しく従った。一之瀬先生は本鈴が鳴った時点で席に座ってないと、英語での受け答えを要求し、しかも発音が良くないとしつこく繰り返しの刑に処するのだ。恥ずかしいなどと言って黙っていたり、適当に流していると、授業中立ちっぱなしの刑が追加される。

「オーケー、ミス・アライ！　こういう遅れた時、英語でなんて言うかわかるか？」

「……あ……、“Ｉ’ｍ　ｓｏｒｒｙ　Ｉ’ｍ　ｌａｔｅ．”」

「グッ！　その通りだ。次回から気をつけろよ？　ま、“Ｂｅｔｔｅｒ　ｌａｔｅ　ｔｈａｎ　ｎｅｖｅｒ．”だ。ミス・アライ、“Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｐｕｔ　ｔｈｉｓ　ｓｅｎｔｅｎｓｅ　ｉｎｔｏ　Ｊａｐａｎｅａｓｅ？（日本語に訳せるか？）”」

「……サ、サボるよりは遅れた方がまだマシ……」

「エクセレント！！　おぉ？！　よくわかったな、グッジョブ！　ミス・アライ」

“Ｔａｋｅ　ｙｏｕｒ　ｓｅａｔ（席に着け）！！”

どうやら一之瀬の期待に応えたようで、胸を撫で下ろした。

（……ハハ、やっぱ安西先生のところで習ってて正解だよ。先生、ありがとう！！）

心の中でお礼を言いながら、そそくさと席の一番後ろを通る、の

だが……。たちまち生徒達の声でザワザワとする教室。その中から、

「ほら、やっぱり……」
「英語習って」
「幼馴染だって」
「あずま」

という囁き声が耳に飛び込み、好奇心と殺気の混じった視線が突き刺さっていると気付いた時は、非常にマズいポカをやったと悟った後だった。

（シマった……。「わかりません」と言っておくんだった～！）

後の祭りである。

どうやら今の受け答えは、最近自分に降りかかっている事態を煽り更にややこしくさせたらしい。私は「ここはどこ？　わたしはだれ？」と全ての記憶を無くしたかのように、教室に充満する異様な空気に気付かないフリをしながら、窓側から2列目の一番前である自分の席に向かって通路を歩いた。

ポンポン

叩かれたのは、左腕。

なるべくそちらを見たくないのだが、無視するわけにはいかぬ。チラリと見れば、腕を叩いた主、ベリーショートで好奇心旺盛な目をクリクリさせた女の子が「すごい！」と口真似だけした。なんとか引き攣り笑いをしながら視線を上げると、彼女の隣にいる、ある男と目があった。瞬時に熱くなる私の頬。

男はだらしなく学ランのボタンをとめず全開にしており、カラーをつけていない。しかもガクランの下はカッターシャツではなくて、校則違反である派手な真っ赤なTシャツだった。中1までは、いや、進級して始業式までは、好奇心旺盛なヤンチャな目をした悪戯小僧

そのものだったが、ここ最近子供っぽさが微塵も感じられない程、冷ややかな目つきをしていた。

彼は鋭い眼光で睨んだ後、その五分刈りより少し伸びたオサルさんみたいな頭をフイっと窓の方に視線を移した。……まるで、おめぇの顔なんぞ見たくねぇ、というように。

「……」

私は我に返り、負けじとスッと黒板の方を向きながら、一番前の自分の席に向かった。

机の中から英語の教科書やらノートを出して、鉛筆を握る。その握る手は僅かに震えているが、気にしないことにした。そもそもベリーショートの彼女の隣にいる男とは、始業式の翌日から一度も口をきいてない。それは、なるべく平和に生きる為には、重要不可欠なことだ。それよりも、同じ教室の遠くの方に座っている『猫なで声』の彼女からの厳しい視線が緩くなったことに逆に感謝しなければならない。もともとこれが正しい関係だし。

（……だからって、あからさまに無視、か）

もう中学1年の時のように、振り向けばすぐ後ろに居るわけではない。冷たく感じる視線も、とりあえず今は3席分の距離が開いたおかげで、居心地悪くならずに済んだ。

気を取り直し、ノートに下敷きを挟もうと手に取ると、その下敷きには私を慰めるように微笑んでいる海外アクターの雑誌の切り抜きが挟まれていた。彼らの金髪は、2人の男性を嫌でも思い起こさせた。

一人は現在山野中の女子の心を独り占めし、安西家に居候している3年の東雄臣（あずまゆうじん）。

彼の少し長いブラウンの髪は、日差しを当てると金髪のように見える。その100%ナチュラルな色は校則違反はおろか、生徒も先

生をも虜にした。もちろん、顔も体格もしぐさも頭脳も、だ。特に英語。彼のネイティブ並みの発音と会話力はこの頃の中学生には脅威と言っていい。そんな雄臣、全てが神の恩恵を受けているかの如く……なのだが、私にとっては絶対的に迷惑な存在になりつつあった。

もう一人は、ある意味雄臣とは対極の立場にいるだろう。

私の腕を叩いたベリーショートの彼女の隣に座っている、冷たい目をした男の親友だ。不良にもかかわらず、ここ数年賑わせている「リーゼント&剃り込み」や「ＰＵＮＣＨ☆（アイパー）」でもない、忘れ去られた兄と同じく短髪だった。しかし髪を不自然なくらい真っキンキンに染めているので、まっとうな道を大幅に逸れている。もしや兄弟揃って同じ床屋なのだろうか。これで身内がもう一人青く染めていたら信号機だなとどうでもいいことを思ってしまい、慌ててバカな考えを振り払った。ともかくそんな彼は、２年になっても山野中の「裏番」として学校一の問題児の名を独り占めしている。

教科書を読む一之瀬の良すぎる発音を聞き流しながら、頭の中は別な映像が再生されていた。それはほんの十数分前の体育館裏の出来事。

この授業に完全に遅れる原因になった、「桂龍太郎（かつらりゅうたろう）」との短いやり取りだった。

＊＊＊＊＊＊＊

『……さっきから、ピーチクパーチク、っるっせえんだよっ、ブス共！！』

ギャァギャァ騒いでんじゃねぇ！　寝れねぇんだよ！！

山野中裏番の怒声が体育館裏を突き抜けた。

蜘蛛の子が散る様に逃げて行った、３年のオネェ様方。予想外の演出に私は唖然とし、マヌケ面のまま首を逸らし頭上をポカーンと見上げていた。窓枠に手を掛け見下ろしている、悪役商会のような迫力あるその顔と金髪の頭を。

逃げ遅れたと思った時には、既に３年の先輩達の姿はない。残るブスはこの場に一人。

……ということは？

（え？　え？　ももももしかしてこの落とし前、私がしなきゃならんのっ？！）

３年オネェ様の集団リンチなど足元に及ばないような絶対絶命のピンチに、頭が真っ白になった。裏番の快適な睡眠を邪魔したのは大変申し訳ないとは思うが、決して私が望んでやったことではない。

私はハハと無理矢理笑い、顔を仰いだまま体育館の壁伝いに校舎の方へ移動した。

ヒュッ！！

『●□＄▼×@％＆っ？！！』

気が付けば、大きくて黒い物体が頭上を舞い、目の前に着地している。青い空をバックにしながら、彼のヤンキー使用の極太ズボン（またの名をボンタン）がムササビのように膨らんだ光景は、最近見た怖い映像の中でもベスト３に入るだろう。

（にににに、二階から飛び降りたぁぁぁぁっ！！）

窓枠から顔を出していた筈が、いつのまにか裏番は強面の恐ろしいその顔を、ドドンと目の前に近付けていた。しかもほぼ眉毛ナッスィングの睨みを利かせた鋭い眼差しをギラギラさせながら。

（オオオオ、オーマイガッ！！）

あり得ない出来事続きに驚愕して声も出ず、ショックの為か力が抜けてその場に座りこんでしまった。

『……おいおい、泣くんじゃねぇよ。別にとって食いやしねぇっつうの』

桂龍太郎はショックのあまり地面にへたり込んだ私に合わせるように、目の前でヤンキー座りをした。睨みながらも少し困った顔をしている。意外なことにその顔は涙目で謝罪する「蝶子さん」に少し似ていた。親戚だから似てるのは当たり前なのだが……なんかこう、複雑だ。でもそのおかげで少し余裕を取り戻し、あらためて自分が泣いていることに気が付いた。ハッと我に返り、慌ててポケットからハンカチを出して涙をぬぐう。

（とととととりあえず、睡眠の邪魔をしたことを詫びる……べきだよね？）

そうだ、今後憂いを残さない為にも、今なすべき最も重要なことは「謝罪」だ。貴子の事を思うと口惜しいが、正直今はそんなことを言ってられない。

（貴子、ゴメンね……私はまだ生きていたいの！）

『あ、あああの……』

『あぁ？！』

『ヒッ！　（こわっ！）ヒッ、ヒック……そそその、ですね』

『あんだよっ？！』

『ススミマセンっ！　かかか快適な睡眠を邪魔して申し訳ありませんでしたぁっ！』

『……』

ガバッと上半身を伏せ完全土下座の謝罪に、桂龍太郎はしばらく黙っていたが、そのうち大きな溜息をついた。そっと顔を上げると、

彼はヤンキー座りのままで、三年の女子が退散した方を見ながら金髪頭の後頭部をボリボリ掻いている。

『オマエさ』
『ハ、ハイ！』
『見てると無性にムカつくんだよな』
『えっ？！』
『イライラするってゆーか』
『そそそそんな！』
『……こんな鈍くさい奴のどっこがいーのか……ぜんっぜん、わっかんねぇんだよなぁ』
『へ？』
『なーんか、歯がゆいしよぉ』
『！！　……ままままさか、ワタクシのせいで、頭が痒、い？』
『はぁっ？　……ちげーよっ！　頭掻いてるのはそういう意味じゃねぇ！！』
『ヒィッ！　ス、スンマセン！！』
『いちいちビクビクすんな！　……ったく、これだから呼び出し食らうんだっつーの。大体さ、ボイン、ここに呼びだされるの、三回目だろ？　いい加減に学習しろやっ？！　毎回毎回人が寝てるときにギャーギャー騒ぎやがって……』

本当は五回です、オヤビン！
……とは言えない。しかも何気に「オマエ」から「ボイン」になってるぞと訂正したいところだが、とりあえず事態をややこしくしない方が好ましいので、ここはグッと堪える。桂龍太郎は膝に手をついて「よっこらせ」と立ち上がった。その時無情にも予鈴が体育館裏に響き渡った。
（ゲゲっ、マズい！　本鈴まで時間が……）
ここはダッシュで逃げ切るべきか。それともう一度涙でも鼻水

でも流してボンタンに縋りつくように謝り、さっさと解放してもらうべきか。

プライドもなにもあったもんじゃないが、この際贅沢は言ってられないのである。前者は難しそうだし後々呼び出されてもシャレにならないので、後者でいこう！　と決意して彼を見上げたら、以外にも桂龍太郎は私の腕を取ってグイっと引き上げた。

『！！』

『きったねーな。泥、ついてるぞ』

『ハハハイ！　ももも申し訳ありません！！』

いったい誰のせいやっ！！

……ではなく。非常に心温まる忠告に慌てて姿勢を正し、スカートの泥を手早く払った。意外な心遣いにほんの少しだけ感動したにも関わらず、心の中では「遠いお空へ飛んでいけ」と恩知らずな言葉を吐く、荒井美千子。動かない二人の間に不自然な沈黙が流れる。しかも裏番は動くどころか、腕を組んだままこちらをジッと睨んだままだった。おかげで私の中の恐怖計測器の針がマックスをふり切ってしまい、測定不可能な状態だ。チビりそうなのを我慢していると、裏番はメンチを切ったまま……いやいや、双眸を細めながら口を開いた。

『ボインさ、実際あの三年と、どうなのよ？』

『え？』

『噂の東雄臣って奴だよ』

『……』

余計な御世話だ、と思った。

それに彼との関係を説明するのは、はっきり言って難しい。簡潔に答えられるのは「親同士が知り合いで、幼馴染という関係だった」

というだけだ。むしろ仲が悪かったと言っても、今の雄臣の態度じゃ、それを信じてくれる筈もないし、なんで？　と詳しく根掘り葉掘り聞かれれば、その背後にある事情も説明しなければならない。こんな複雑で個人的な事情、人に説明するのも億劫だし、大体説明する義理などない。それが例え三年のオネェ様方だろうが、裏番だろうが変わりはない。

唇を噛みしめたまま黙っていると、桂龍太郎はハッと鼻で笑い、

「ま、オレにゃぁ、どうでもいいこった」と吐き捨てた。

『気があるなら別にいいけどよぉ、ないならビシっと態度で示せよ。じゃねぇと男はつけあがるぜ？』

『気がある……って、とととんでもない！！！』

『それにしちゃぁ、始業式の日、アイツと二人で仲良く登校してたんだって？』

『仲良くっ？！』

『しかも教室までお迎えにきたらしいじゃねぇか』

『お迎えっ？！』

『イチャイチャしながら校内をグルグルしてただろー』

『い、イチャイチャぁっ？！』

『幼馴染にしちゃぁ、随分ベタベタと慣れ慣れしかったよなー』

『ごッごッ誤解であります！　た、ただの知り合いです！！』

『ほー、『嫁に来い』とまで言われた、知り合いねー』

『ほぁぁっ？！　なななんでっ？！』

『言ってたそうだぜ。東先輩、ご本人様が』

『ヒョエーっっ！』

私はビックリして飛び上がった。

……確かに、始業式の日は二人で登校した。でもそれは初日だから一緒に行こうと誘われたからで、深い意味はない。しかも我が家から学校までは至近距離なので、一緒にいた時間はせいぜい数分だ。

そもそもこんなに近いのに、一緒に行く必要性があったのかどうか疑問だ。こんなにややこしくなるとわかっていれば、絶対ドタキャンを決行していた。それに始業式の後、雄臣がわざわざ私の教室に来たのも、こっちは予想外の出来事だったのだ。

呑気に2年1組の教室を覗きながら「ミチ！」と私に声をかける、お色気垂れ流しの雄臣。

これ以上ないぐらい焦りながら彼を廊下へ引っ張り出し、「ななななんで来るの?!」と怒りを押し隠して問いただせば、教室の位置に慣れる為だとふざけた答えが返ってくる始末。決っしてお迎えなどではない。

『ついでに学校案内してくれないか？　学校の様子もざっときかせてくれると助かるんだけどな』

絶対効果をわかってやってるだろ……という完璧なスマイルで返ってきた時にゃぁ、卒倒しそうになった。そんなことクラスメートに聞けよ！　と言う前に、そのまま引きずられるように一緒に校内を軽く見て回った学校案内。それも決して二人だけじゃない。雄臣のフェロモンに引きつけられるように友人達も続いてきて、気がつけば大所帯だった。どうみてもあれはイチャイチャベタベタなどとは無縁だ。少なくとも私だけは。

『……その様子だと、嫁はガセじゃねぇのか』

『ややや、ガ、ガセです！　思いっきりガセです！　あああありえません！　雄臣とは幼馴染というより単なる知り合いだし?!　嫁なんて遠いはるか昔親が勝手に言ってたことでとっっっくに無効だし?!　そそそれに大体私には、雄臣より好きなっ!!　……って、じゃじゃじゃなくって、いまどき許嫁なんて時代錯誤っすよねぇ?!　ナハ、ナハ、ナハハハハ～!!』

タ●チャンマン風に誤魔化してみた。
あぶないあぶない。一体私は裏番相手に何を熱く言い訳しようとしたのか。「好きな」と叫けびながら咄嗟に頭に思い浮かんだ顔がありえない人物だったので、途端に顔が熱くなり焦った。いや、裏番の顔を見て怒鳴っていたから、思わず目の前の男のダチの顔などを思い浮かべてしまったのだ。
不細工な愛想笑いをしながら目を泳がせていると、「雄臣より、ねぇ」と桂龍太郎は、あきれ半分からかい半分のような苦笑いをしながら肩を竦めた。

『なんでもないなら、そうハッキリ言えっつーの。だからややっこしいことになるんだよ』
『……』

私はガックリと項垂れてしまった。
（そうだけどさ……）
そんなことわかっていた。でもそれができれば苦労はしないのだ。それに毎回毎回何でもないと言ってるのに、全然話を聞いてないのは三年女子の方である。大体幼馴染と言えば全てが友好な関係とは限らないのに、何を誤解してるのか。私と雄臣の組み合わせではどう見ても釣り合わないことは火を見るよりあきらかではないか。私はすっかり気が抜けてしまい、目の前の男が全然無関係の裏番・桂龍太郎ということをすっかり忘れてしまって、恨めしそうに見上げてしまった。

『……あんだぁ、その顔はっ？　言いたいことがあんなら、ハッキリ言えやっ！！』
『っ！！　めめめ滅相もない！！　雄……いや、あ、東先輩とは本当になんでもないんですよ？』
『そんなこたぁ俺に言ってもしょうがねぇべやっ？！』

『そ、そうっスよね！』

確かにそうである。こんなこと裏番に言ったところでなんの解決にもなりゃしない。

（……それにしても、雄臣め！！）

私の知らないところで彼は何を言いふらしているのか。怒りが沸々と湧きあがり、余計なことを言ったらしい雄臣が憎たらしくてしょうがなかった。いくら私のことが気に入らないとは言え、このような嫌がらせはあまりに酷過ぎる。雄臣は私の平和な生活を、真綿で首を絞めるようにジワリジワリと崩壊させたいらしい。どうりでこんなに頻繁に呼び出しくらうのか原因はわかったが、こんな生活に一年間耐えられるかと不安は募るばかりでハァとため息が出てしまった。

『まぁ、なるべくさっさとケリつけろや。でないとこっちまでトバッチリが来てしゃーねーんだわ』

『え……？　ト、トバッチリ？』

『ったく、外でも店でも暴れやがって……機嫌が悪いったらありゃしねぇ。おかげで蝶子が泣きだすしよぉ』

『……な、なぜ、蝶……子さん？』

『うるせぇ！　全部ボインがハッキリしねーからじゃねーかっ！！』

『ヒィッ！　そそそそんな！』

『ともかく！　二度とここで騒ぐなっ、わかったな？！』

『ううぅっス！』

『それからよ』

『え？』

『どうでもいいけど、本鈴鳴ったぞ』

『！！』

今度こそ私は桂龍太郎を置いて、超ダッシュで自分の教室に向か

った。

幼馴染というより、ただの知り合い～後編～（後書き）

美千子、ほぼ子分と化してます。

カラカラカラ……ガコンっ！

「「「「「「「「キャーッ！！」」」」」」」」

古く建てつけの悪い扉を開けると、乙女達の悲鳴が教室内にこだました。

開けた当人である私も驚いてその場で固まってしまったが、教室内にいる友人たちが私の姿を見て目を見開いた後に安堵のため息をつくと、こちらもホッと息を吐いて扉を閉めなおした。

「……あ～びっくりした、『ミチ』か！　すっごいタイミングで入ってくるんだもん、驚いた～」

幸子女史は大袈裟に言った後、机の上に顔を伏せた。そしてすぐに焦った様子で貴子と和子ちゃんに向き直ると再びふーっと息を吐く。

「さっすが！　２人とも、１０円玉から指離してないしぃ」

幸子女史が言うと、和子ちゃんと貴子は生真面目な顔で当然というように頷いた。

「……ちょ、ちょっと、幸子ちゃん、その『ミチ』ってヤメテよ……。せっかく騒ぎが治まっているのに」

「まーいいじゃないの！　どうせ私達だけだし？　ウルサイ３年も

いないしね。それよりも今まさに東先輩のこと聞いててさぁ？　そしたら、応えてもらってる途中で荒井ちゃんが入ってくるんだもん」
超ビックリした～。

私の言葉に応えたのは、トリオのリーダーである奥住さんだった。
好奇心旺盛な目をクリクリしながら私を見てたけど、すぐに和子ちゃん達の手元の方に視線を移した。

「……やっぱ、来てるねよね。荒井ちゃんがこのタイミングで入ってくるあたり、信憑性大きいよ」

奥住さんのムードあるヒッソリとした言葉に全員ゴクリと唾を飲み込んだ後、机の上に乗っている1枚の紙と10円玉、そして10円玉を抑えている2人の指を凝視した。私もさっきまで座っていた席にそっと腰かけ、紙に書かれていた鳥居やひらがな、「はい・いいえ」の文字を目で追う。2人が押さえている十円玉は「み」の文字で止まっていた。

「な、何を聞いてたの？　奥住さん」
「『東先輩』の好きな人」
「……」
「……これさ、『みちこ』って言おうとしてたんじゃない？　だって、だって……10円玉が！！」

そこで奥住さんが音を立てて席を立つと、全員再び悲鳴を上げた。
私は一人冷静に、そんなアホなと溜息を吐いた。

＊＊＊

気候がいい5月下旬の放課後。

本来ならば部活に勤しんでいる筈の時間帯であるが、珍しく雨が降りだしたので、野外での練習が中止になり、室内でトレーニングをした後早々解散となった。こんなに部活が早く終わるのは、３年とバレー部顧問の岩瀬が修学旅行で出払っているからであり、２年の天下のお陰だ。すでにバレー部の後輩と２年のほとんどは下校していた。……私たちを除いて。

「ちゃんと紙、破っておかないとね」

貴子は今まで使っていた物騒な紙を音を立ててビリビリと破いている、「あ～怖かった」と呟きながら。

幸子女史は、答えを望む者に真実を導いてくれる……好奇心をそそるようなイベントをやるキッカケとなった、『とんねるず』の２人がポージングしている本を手に取った。おもむろにカバーを外すと、裏表紙には貴子が破っている紙に書かれたものと同じ絵図が描かれている。私も一緒になってその裏表紙を覗き込んだ。

「奥住って、『とんねるず』好きだったんだ？　けどさ、カバーの裏にこれはちょっと怖いよね……」

「そうなんだよ、私も買った後、何気なく表紙を取ったら出て来てさ。ビックリして本落としちゃったわ」

本の持ち主である奥住さんはそう言いながら、使っていた１０円を財布にしまおうとしたが、「そういえば……この１０円って、二日以内に使わないとマズイんだっけ？」と慌てて取り出した。

「あれ？　その日のうちにじゃないの？」

「私は３日以内だと思ったけど」

情報があやふやである。

まぁ、この手のものは噂が噂を呼び、確かな情報もなければ信憑性も薄い。和子ちゃんが「一応今日中に使ったら？」とアドバイスをすると、奥住さんが「そうだね」と頷いた。

私は教室の空気がなんとなく籠った感じで気持ち悪かったので、窓を開けに席を立った。

今私達がいる教室は、学校の校舎の中でも一番端の古くて小さく、不気味な雰囲気が漂う2階建ての建物の中にある。二階に理科実験室と準備室、そして第二音楽室があるからかもしれない。ちなみに一階は教室が2クラスと生徒会が使用している教室があり、計6つしかなかった。古いせいでどの扉も建てつけが悪く、窓を開けるのにも苦労する。思いっきり力を込めて開けると「ピシャン！」と言って窓が開き、湿気を含んだ空気が教室に入り込んできた。水を含んだ土の匂いがするのは、窓の下に花壇があるからだろう。すっかり晴れて夕日もでている空を眺めながら爽やかな空気を吸い後ろを振り向くと、バレー部の部室でもあるこの「2年1組」には、5人の女子バレー部員が本を覗きこみ、2人の生徒が談笑していた。

「それにしても、3年がいないってすごい開放的だよね～。それも今日で終わりかぁ」

本から目を離し、伸びをしたのは奥住さんだった。

彼女は引き続きバレー部の2年副部長を引き受け、噂好きの性格は相変わらずである。去年までは「尾島と荒井が怪しい！！」と豪語してたのに、2年に進級した途端「荒井と東先輩は怪しい！！」に変わった。よって彼女が振りまく噂の信憑性は、先程盛り上がったイベント同様に薄い。2年に進級する時、どんな人とクラスが一緒になるかとドキドキしたが、2年1組の名簿の先頭に自分の名前を発見した後、すぐ近くに彼女の名前があった時は喜んでいいのかどうか……ちょっとだけ不安になったことは内緒だ。

「そっか、今日帰ってくるもんね、3年生。『東先輩』ようやく来週見れるジャン！　ね、和子？　『ミチ』？」

ニンマリとした顔で言う幸子女史の言葉に、途端に顔を歪める私。何度訂正しても『ミチ』と呼び続ける彼女は、今はもう「東先輩」の大ファンだ。

始業式の日に「同じクラスで良かったね～」と奥住さん、光岡さんと手を取り合って喜んでいたその時、雄臣がこの教室に来た。私が慌てて雄臣を廊下に引っ張りだして彼を無理矢理この場から撤収させようとしていたら、一番遠いクラスの筈なのに、目をハートにした10組の幸子女史が背後霊のように後ろに立っていたのだ。憐れにも「わ、私も一緒にお供させて下さい！！」とフェロモンにやられた犠牲者第一号となり果て、屍状態となる。

「えぇ？！　そ、そうだね」

話を振られた和子ちゃんの顔は真っ赤だった。

それは廊下から差し込む夕日に照らされて……というわけではない。第一この教室まで夕日は届いてない。和子ちゃんは途端にモジモジし出し、慌ててエチケットブラシを取り出して制服を撫でつけた。いつもは「男は年上の大人でなければならぬ！」という強気な発言をしていた和子ちゃんだが、雄臣の話題になると途端に大人しくなる。どうやら雄臣は和子ちゃんのアベレージを軽く超えたようだ。彼の前では借りてきた猫のように大人しくなり、挙動不審であった。

同じく始業式の日、廊下で奥住さんや幸子女史達を渋々雄臣に紹介してたところ、ホームルームが終わって出てきた隣の2年2組の生徒達が全員固まってこちらを見ていた。その塊りからスーッと幽霊のように出てきた和子ちゃん。その後ろから貴子、加瀬さんが、幸子女史同様「雄臣フェロモン」に引き寄せられるように近づいて

来たのだ。その絵図らは、まるで美しい花に群がる昆虫のようだった。
普通こういうシチュエーションの場合、男女逆のような気もするが……。

「それにしてもミチコったら、あんな『最終兵器』隠してるんだもの。初め見た時はビックリしちゃったよ」

貴子はプーっとワザとふくれながら、和子ちゃんに「ねー？」と同意を求めていた。和子ちゃんも顔を赤くさせたまま、腕を組み「ウンウン」と頷いている。

「イ、イヤ……だって、実際2年も会ってなかったし！　すっかり忘れていたし！　親同士が知り合いってだけだし！　大体雄…ああ東先輩と何にもないし！！」

私はいつものようにどもりながら慌てて弁解すると、私以外の昆虫……いや、女子七名が一斉に吹いた。

「ハイハイ、わかってるって。『ただの知り合い』なんでしょ？」
「『ミチ』って、東先輩のことになるといっつも力入れて否定するよねー。ちょっと東先輩可哀そうだよぉ。それに貴子も和子も、もう怒ってないって、ね？」

奥住さんが全然信じてない表情をしながら肩を竦め、次に幸子女史は貴子と和子ちゃんに確認するように聞いた。貴子も「そうそう、怒ってないって！」と膨れ顔を崩し、笑いを漏らした。
私は心底安堵しながら、雄臣との学校案内が終わった後の事を思い出した。
蕩けた顔をした七人が雄臣の後ろ姿を見送り、見えなくなった途

端一瞬にして「鬼」に変わったときのことを。

最高で最悪のクラス？（後書き）

ミチコ達がやっていたのは「コッ●リさん」です。（怖くてなんとなく伏せ字です、わざと小説上に名前を出すのも控えました。今でも巷の中学生さんや小学生さんはやるのかな？）確かとんねるずの「ホルマリン漬け」という本の裏表紙にこの絵図が書かれていたと私は記憶しています。現在その本を手にすることが難しいので違っていたらゴメンなさい！！（＿人＿）その際には訂正します。

最高で最悪のクラス？

私はまだ何人か残っていた和子ちゃん達のクラス・2年2組の教室に無理矢理連行され、「さぁ、吐け、吐くんだ！！」と『なまはげ』達に詰め寄られた。

『あんなイイ男の存在を黙っていた、わるいごはおめぇが？！』

机をバンバンと叩き、デスクライトをかざされるがごとく、7対1の事情聴取が始まる。

『ちょっと、なんなの、あのお方は？！』
『どういう関係なの？！』
『なんで今まで教えてくれなかったの？！』
『んで、どこまでいったの？！　A？　B？　思い切ってCかっ？！』
『『『『『『オイっ！』』』』』』

最後の奥住さんの鼻息を荒くしながら言ったきわどい質問は置いておいて、それ以外の質問に納得いくまで応えるよう要求された。

私はなるべく簡潔に、しかも嫌な「黒い過去」は触れないように答えた。

あれは個人的なことだし、私の醜い影の部分を知られたくなかったし、それに勝手に過去の雄臣とのやりとりを言う気にはなれなかったのだ。第一信じるてもらえる可能性は限りなくゼロに近い。

私の説明にみんな半信半疑の様子だったが、必死こいて縋りつくと「わかった、わかった」と許してくれた。それでも貴子と和子ちゃんは「一言言ってくれればいいのにぃ！　友達でしょ？！」と、お怒りが暫く続いてしまったのだが。

私はシュンと落ち込む半面、彼女達が私と真剣に友達として接してくれていることに、本気で怒ってくれたことに感激してしまいジーンとしてしまった。怒られているにも関わらず心が温かくなってしまった。はにかんでいる私を見て、「ちょっと、いったいどうしたんだ？　もしかして怒られて喜ぶＭ体質か？！」という彼女達にそのことを正直に告げると、逆に黙ってしまい……照れ臭そうに「しょうがないなぁ～」とお怒りを解いてくれたのだ。

けれど、「東先輩とヤマシイことは一切なし！」という言葉は全面に押し続けた。ただでさえ上級生からヤッカミを受けてるのに、友達まで信じてもらえなくなったら元も子もない。

「それにしても荒井ちゃん、先輩からの呼び出し無くなって、よかったねぇ？」

光岡さんが愛読書の「Ｍｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」という占い雑誌をペラペラめくりながら言った。

「やっぱ、あんな裏番に『喝』入れられたら……ねぇ？　あの男が教室にいるだけで怖いもん。ねぇ、チィちゃん？」

「……う、うん。いるといないとでは１０組の雰囲気全然違うんだよ……。よくミっちゃん、耐えられたね、スゴイ」

「あんな裏番」と一緒のクラスである幸子女史とチィちゃんは、お互い顔を見合わせて気の毒そうな視線でこちらを見ると、私はあの日の事を思い出しブルルと震えた。

＊＊＊

５回目の呼び出しを受けている最中に、怒鳴り散らしながら登場した、桂龍太郎。

それ以来3年女子からの体育館裏への呼び出しがピタリと止んだのだが、ありがたくない噂がその日の放課後に山野中を駆け抜ける。

『裏番の次なるコレ（小指）は、荒井美千子らしい』

史上最悪のピンチである。

一体誰が本鈴間近の時間がねぇ時に、体育館裏などを呑気に見ていやがったのか。

私が泣きながら裏番に土下座して浮気していたことを謝罪していただとか、裏番は荒井の腕をねじり上げながら、次やったら外国へ売り飛ばしてやると睨んでいただとか……。

合ってるんだが間違っているんだか、肝心なところが非常に歪んでいる事実が流れたのだ。

どうしたら説教以外なにものでもないあの時の会話が、いきなり「カレカノ」の修羅場の現場になってしまうのか。

これには私も「ムンクの叫び」のようになった。雄臣の次は裏番……つくづく荒井美千子も不幸な女である。けれどもこの噂はすぐ下火になった。素行の悪い3年男子の先輩達が、ひやかし半分で桂龍太郎に真実を問い合わせたところ、

『あんな鈍くさくて地味な女、死んでもお断りだ！　今度そんなふざけた事を言った奴はその場で地獄を見せてやるぜっ、夜露死苦！！』

……というような内容を、殺気を伴いながら思いっきり親指を下げて宣言してくれたおかげである。オマケに裏番は、興味本位で騒ぐ生徒達に熱光線（デビルビーム）もお見舞いしてくれた。

『もしかして私に対して失礼なことを言ってやしませんかね？』

……的な桂龍太郎の発言には、噂を即効沈下させた優れた手腕に免じて大目に見てやることにした。

が、実際は腸が煮えくり返りそうだった。誰が好き好んであんなデビ●マンみたいな男と噂にならなければならないのか。それこそ死んだってお断りだ。人の愛を知り、その優しさに目覚め、正義のヒーロー並みに更生してから出直してこい！　と言いたい。

噂の放課後、少し機嫌が悪かった貴子の態度も次の日には軟化し、逆に私の評判が「鈍くさくて地味な女」に成り下がった事を怒ってくれた。

……なんとなくわだかまりは残るが、結果オーライである。

それでも貴子には裏番との会話は事細かに説明しておいた。「そ、そんなのどうでもいいしっ？！」と言っていたが……非常に大事なことだ、……うん。

＊＊＊

「あ、あのときは本当ヤバくて……ここ殺されるかと……」

私は震えを抑えるように机に手をついて俯いた。私が本気で怯えている姿を見た乙女達は、貴子以外ゴクリと再び息を飲んだ。貴子は「もう大袈裟だよ、あんな奴怖くないって！！」と怒ってはいるが……あの恐怖はその場にいた者でないとわからないだろう。

「だっ、大丈夫！　今、荒井ちゃんの星座見てあげるから！　えええええーっと、●●座だよね？！　今年の運勢は？　『前半は……荒れた海の上に漂う子船のように……浮き沈みが激しく……翻弄され……非常に……苦しみ……ま……す』……って」

「「「「「「……」」」」」」

光岡さんは急いで愛読書（バイブル）を捲り今年の運気を見てくれたが、「大丈夫！」と豪語した割にはあまりにイタイ内容に段々声が小さくなっていく。

シーンとした教室には、それを黙って聞くことしかできない乙女達六名と翻弄されまくっている子船が一艘。

「こっ、こんなの占い占い、大丈夫大丈夫！　これから絶対運気上がるって！　続きあるし？！　……えっとね、『苦しみますが、後半は穏やかになり嬉しいことも重なるでしょう。人によっては、人生を委ねられる大きい船のような存在の人と接近できます。前半の苦しさに打ちひしがれず、諦めないで努力していきましょう！』だって！　ほら、すごいよ、良かったねぇ？！　えーとそれからなになに？　『特に異性関係ではモテモテ期が到来しますが、……意中以外の人に甘い顔は現金です……キッパリとした態度をしなければ……争いごとが大きくなり……取り返しのつかない事態となる……可能性が……大……で……す』……」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

微妙なモテモテ期が来ている、顔面蒼白のいたいけな女子中学生にトドメを刺す驚異の占い雑誌、「Ｍｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」。

「……アハ、アハハ……えええええーっと！　あらぁっ、解決方法があるよ！　『異性に対してハッキリした態度は必要ですが、かえって争いごとを招く恐れが……あります。……無理に出過ぎず、大人しく嵐が過ぎるのをジッと待ちましょう』……って、かなり微妙。ややや、そそそそうだ！　『ラッキー・キーワード』！　え～』湖、公園、バンドエイド、ハチマキ、手袋、数字の５、星』かぁ。あ、まだある。『手のお手入れ』だって！　荒井ちゃん、今日から手のお手入れだよ！　気合入れなきゃ！　って、荒井ちゃんって結

構手がキレイだからあんまり必要ないよね??」

最後の最後でフォローらしきことができてあからさまにホッとしている光岡さんの褒め言葉は置いといて。私は飢えているライオンが獲物に飛びつくが如く自分の席に戻り、ノートを開いてラッキーキーワードを書き出した。

「えええええーと、『手のお手入れ』だよねっ?!　そそそれに『湖、公園、バンドエイド、ハチマキ、手袋、数字の5、星』っと!」

全員の憐れみの視線を一身に受けながら、ご丁寧に復唱し真剣に書いていると、奥住さんが「あっ!」と言いながら、ポンっと拳を掌に打った。

「『湖』?!　ちょっと、湖と言えばさぁ、早速キーワードが御登場じゃないの?　だって来週私達、湖にいるじゃん?」

ニンマリと笑う奥住さんに、全員つられるように「あっ!」と声を揃えた。

私も思い出した。

来週、確かに私達は『湖』にいる。2年の遠足の為に。

最高で最悪のクラス？（後書き）

デビルマンの歌、覚えてらっしゃいますか？この歌を水木一郎アニィや佐々木功並みに感情こめて歌える男の人に本気でトキメキを感じる菩提樹です。それと、「Ｍｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」懐かしいです！ちなみに本当にあった占い雑誌ですよ？現在は休刊中です。あ、もちろん文中の占いの内容はフィクションです、「Ｍｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」に罪はありません！ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

最高で最悪のクラス？

新年度に入って初めて迎える学年行事が「遠足」である、我が山野中。

１年はバスで隣県の海へ。３年は２泊３日の「京都・奈良へ修学旅行」。そして２年は、１泊２日の「富士五湖へキャンプ＆レクリエーション」と決まっていた。生徒達の間では「寺ばっか見学する修学旅行より数段マシ」と毎年好評な、この２年の遠足。中間考査も終わった２年生の間では、この話題で持ちきりだった。

これをキッカケに男女が急接近しちゃいますかぁ？！

……な、「ドキドキお泊り遠足」。「桃色ハプニング」が起きそうな予感に心が浮つく生徒達。特に女子。何故なら、山野中の伝説の一つに、この遠足を機会に恋が成就する可能性が高いと噂されているからである。

それに各クラスの保体の時間などは、キャンプ初日に催される「クラス対抗大縄跳び大会」の練習で盛り上がっていた。

キャンプの醍醐味である「自主炊事・カレー作り」に並んで催されるメインイベントで燃えるぜっ！！

……な、「クラス対抗大縄跳び大会」。これには並々ならぬ意欲を注いでいる生徒達。特に男子。何故なら、優勝したクラスには、なんとカレーの肉が３割増しになるからである。

この時点でこの年頃の男子と女子の成長度の違いが垣間見えるが、多分気のせいだろう。

「キャンプといえばさぁ。そっちの2組（クラス）、今日の縄跳びの練習どうだった？」

奥住さんがキラッと目を輝かせながら聞くと、和子ちゃんも怪しい光を目に湛え奥住さんを見た。

「……そういう1組はどうなの？　全員の息がピッタリと合っているのかしら？」

奥住さんと和子ちゃんは腕を組み、「フフフ」と不敵な笑みを浮かべながらお互い牽制している。

この会話から「桃色ハプニング」より「カレーの肉3割増し」に傾いているように見えるが、絶対気のせいだろう。……たぶん。

「こっちは運動神経バッチリなのが揃っているからね。多分そちらさんには負けないわよ？」

「あ～ら、どうかしら？　そりゃ男子限定の話じゃなくって？　要は女子の部で勝てばいいのよ。それに男子なんかに頼っていたら、あの尾島（バカ）、絶対女子にまで肉を回さないでしょうねぇ？」

火花を散らす2人に、まぁまぁと言いながら宥めたのは幸子女史だった。

「2人とも落ち着きなよぉ！　ま、残念だけど、男子の部は1組で決まりだね、多分。ちょっとすごいのが揃いすぎだもんさ。なんてったって野生猿を筆頭に運動部のホープが集中しすぎ」

ねぇ？　と幸子女史が私に向かって同意を求めると、私は動揺を隠すように曖昧に笑った。

野生猿。

「本当、1組ちょっと揃いすぎだね。一体何を基準に選んだのかな？　他のクラスの女子からもブーイング上がってたよ、『絶対1組が良かった』って。私には気持ちが全然わからないけど」

騒がしい男子が苦手という加瀬さんは厭きれた様子で肩を竦めると、奥住さんは「いや、そうは言ってもねぇ？」とニヤニヤしながら答えた。それを見てあからさまに眉根を寄せたのは和子ちゃんと貴子だ。

「加瀬ちゃんの言う通り！　女子全員眼が腐ってるんじゃない？　どこをどうすれば『1組が良かった』になるのかね？　あんなロクでもない尾島（バカ）がいるクラス、どっこがいいのか全然わかんないよ。『史上最高のクラス』って言うけど、私にとっちゃ『史上最悪のクラス』だわ」

「それ、私も同感」

「私も」

2人に続いて迷わず即答し、溜息を漏らしてしまった私。

全員一斉にこちらを見た。なんとも言えない表情をしている顔から視線を逸らし再び深い溜息を吐く。和子ちゃんと貴子が気の毒そうな顔をしながらこちらに寄ってきて、そっと肩を抱いてくれた。

「……ミっちゃん元気出して？　1組じゃなくて、2組だったらよかったのにね。あんな連中と一緒だなんて、本当に気の毒だよ」

「狼の群れに生息する羊みたいだもんねぇ。美千子、辛くなったら、いつでも2組においでね？」

「……ううう、あ、ありがとう……和子ちゃん、貴子！　多分遠足の時即効行くかも」

「なんなら10組においでよ『ミチ』！　『裏番』がいるけど、チィちゃんもいるし、ね？」
「そうそう、幸子ちゃんと二人で待ってるから」
「さ、幸子ちゃん、チィちゃん……ううう、あ、ありがたいけど、気持ちだけ受け取っておく、かも……」

半べそ掻きながらヒシっと抱きあう5人に、歪んだ顔でツッコミを入れるのは奥住さん。

「ちょっと、ちょっと！　荒井ちゃん、そりゃないよ?!　私達がいるじゃん！　そりゃぁさぁ、尾島にまとわりついてる原口と、田宮君と佐藤君にベッタリな成田耀子は相変わらず小ウルサくて荒井ちゃんを敵視してるし？　その尾島は荒井ちゃんを完全無視だし？　おまけに『ロクでもないんジャー』を中心に男子は騒がしくて授業中超迷惑だし？　……って確かにロクなクラスじゃないな」

頼みの綱の奥住さんにまでそんなことを言われ、私は顔を歪ませてガバっと机にうつぶせた。本気で涙が出そうな私を慌てて宥める和子ちゃん達。慰めてくれるのは非常にありがたいが、厳しい現実はどうあがいても変えられない。

そう。2年に進級した私を待っていたのは、地獄だった。

新クラス名簿の中に尾島の名前を見かけた時、ガン！　っという衝撃を全身に受けた。漫画なら2トンの錘が頭上に落ちてくるベタな展開だ。その前までは何を血迷ったのか、「寂しいかなぁ」なんて思っていたのに。あれは単なる勘違いだったのだろう。その証拠に始業式の朝一番に類人猿と顔を合わせた時、ニヤリと例の悪魔顔で微笑まれた時、意味もなく「人生終わった……」と思ったのだから。

しかし、悪夢はそれで終わらなかった。

最高で最悪のクラス？

史上最高のクラスと噂された、1組。
しかし、私にとっては史上最悪なクラスとなった。

本格的な氷河期は始業式の翌日からである。
突然尾島のいつもの調子でからかうような言葉が一切無くなった。
それは尾島が一晩で改心したというオチでもなんでもない。その証拠に他の女子には相変わらずいつもの調子だ。尾島は私限定で「声かけるんじゃねぇ」と冷たい目で睨み、誰から見てもわかるほど避けるような無視攻撃になったのだ。信じられないことに、始業式の翌日から一言も口を聞いていない。今でもだ。その尾島の態度が恐ろしい程クラス全員に浸透し、雄臣や桂龍太郎の件がさらに追い打ちを掛け、私の存在は好奇心と腫れものに障るような扱いで浮きまくっていた。それは同じクラスで頭は超がつくほどいいが、変人と呼ばれているオカッパメガネ&歯列矯正の「伏見(ふしみ)かおり」、通称「ブキミちゃん」に次ぐ扱い困難な存在と化している。
雄臣のことで心に不安を抱えていた私にとって、2年のクラス編成はせめて無事に平穏な1年を過ごせるかどうかの大事な要素だったのに……。

葛籠(つづら)の蓋を開けたら金銀財宝ではなく魑魅魍魎の生き物が出てきてしまったという現実。

1組の男子の名簿にバーンと書かれていた「尾島啓介」という名前に続き、その名簿をずっと下まで目で追えば、「後藤洋」「佐藤伸」「諏訪英行」「田宮俊平」そして「星野一幸」。
男子の名前を見て、一部「ドッキーン!!」と心臓が高鳴った私だが、女子の名簿に「成田耀子」「原口美恵」の名を発見した時点

で、高鳴りを通り越し心肺停止した。
やっと自分の羽を使って世に飛び出そうと巣立った幼い野鳥が、舞い上がった途端猟銃でズドンと容赦なく撃ち落とされた瞬間である。
禁猟区を犯した密猟者達に、「クラス編成ヲ見直サナイト、学校ヲ燃ヤス！」と放火魔も真っ青な予告文を学校へ送りつけようかと思ったくらいだ。例えプラス要素がとてつもなくデカくても、それにマイナスを掛ければどんな答えもマイナスになるのが自然の法則ってもんである。
（……くそぉ……何が悲しくて１０クラスもあるっていうのに、私がいる１組に「ロクでもないんジャー」のメンバーが４人も集中していて、天敵が２人もいなけりゃならんのよっ！！）
転校したい、切実にそう思った。
いや、佐藤君ましてや田宮君に罪は無い。けど現在の尾島と仲がよろしいという時点で完全にアウトだ。よって、いくら好きな相手だろうが、私に優しくしてくれただろうが、すでに過去の出来事。その証拠に彼らとは同じクラスになってから一度も口をきいていない。
唯一救いだったのが……幸子女史とチィちゃんには悪いが、小関明日香と桂龍太郎が一番遠い１０組（それでも小リスはしょっちゅう遊びに来る）ということだけ。奥住さん、光岡さんが一緒のクラスだったということだけ。
「元気だして、『ミチ』！　例えクラスの中で『ミチ』が浮いていても、私達は絶対味方だよ！！」
「そうだよ！　例え田宮君が、いや、クラスの男子全員が荒井ちゃんに対してよそよそしくてもさ、荒井ちゃんには東先輩がいるじゃん！　こうなったらもう東先輩と付き合っちゃえよ！　笹谷ちゃん

と日下部先輩、荒井ちゃんと東先輩、いっそのことグループ交際なんてどうだっ?!　山野中のモテ男2人、仲よさげだしねぇ?」

「「「「「「おい!」」」」」」

幸子女史の後に続いた奥住さんの無責任な発言に全員突っ込んだが、それ以上に確信をつくような疑問を投げてきたのは、光岡さんだった。

「……それでもさぁ、奥住。あの尾島の態度は異常じゃない?　どう見たって普通じゃないでしょう?　あ、でも逆に好かれても大変なことになること、間違いなしだけど」

光岡さんは心配そうな不安そうな、どちらにしても浮かない顔をしながら言った。

「ん〜そりゃあそうだけどさ。尾島って昔からあんなもんじゃなかったぁ?」

奥住さんは別になんてことはないと首をかしげた後、すぐに目を見開き、さも今自分が考えついたことが正しいというようにニヤリと笑い、頷きながら言った。

「ははぁ……ようするにさ、尾島は悔しいんだよ。だってさ、今まで好き勝手いじくってた文句の言わないお気に入りのオモチャの、本当の持ち主が現れちゃった訳だからさ。しかも!　その持ち主は、幼馴染と言う超強力な絆を引っ提げた超絶完璧な男ときたもんだ!　これじゃぁ面白くないの当然じゃん?　尾島の出る幕、全然ないもんねー。それこそ『尾島』じゃなくて『お邪魔』?　やっだぁ、私ったら上手い!!」

「「「「「「……」」」」」」

アクセルをめいっぱい踏み込み、暴走する奥住さん。

「今ならわかるよ、あんだけ荒井ちゃんが尾島のことなんでもないって否定し続けた理由。あれほどのイイ男がいたなら当然だわ。もう、いいよ尾島なんてさ、ねー荒井ちゃん？　そのうちあの男も自分の至らなさに気付いて大人になるさ！　そうやって大人の階段を登る訳だよ！　ま、どう見たって今の尾島は階段を突き落とされたって感じだけどねっ！　やっだぁ、私ったら何気に冴えてるぅ～」

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

和子ちゃんを遥かに凌ぐ大物がここにいた。

勝手に階段から突き落とした隣の席のお猿さんとは普段結構ヨロシクやってるのに、本人がいなければいないで好き勝手なことを言ってる、何気に冴えた奥住さん。心の中でそんな奥住さんを感心しつつ、「そうか、私はオモチャだったのか」と複雑な気持ちで一杯になった。

「……でも、羨ましいな。ミっちゃん」

ボソリと小さい声が聞こえた。

声の主は、ようやく１５０センチになった、小さくて、元裏番お墨付きの可愛らしい、お菓子作りの得意な女の子。

（……羨ましい？　なんで？　どこが？　クラスで超浮きまくってるのに？）

「……え？　オ、オモチャにされてることが？」
「やっだぁ『ミチ』！　こういう場合さ、着目点、そこじゃないでしょ？　しかも何気に『オモチャ』って、いかがわしいでしょ！」
幸子女史の意味深な顔とツッコミに瞬きをするものの、意識はチィちゃんに向いていた。ここにいる乙女達全員が茅野陽菜美（ちのひなみ）に注目する。
幸子女史が「ホラホラぁ～、言っちゃえば？！」と言うと、チィちゃんの顔は真っ赤になりながら、はにかんだ、やわらかい笑顔になった。
それは、貴子が日下部先輩を見るような、真美子が雄臣を見るような、まるで……恋している時の女の子の顔。
「私も、1組になりたかったんだよね」
突然の意味深な告白に、数人の乙女が奇声を上げ、チィちゃんに群がった。歓声や悲鳴や笑い声が教室に響き渡る。
私は大きく目を見張り、呆然としてしまった。
そんな私の横顔を、この雰囲気に不自然なほど冷静な顔で見ていた貴子。
その姿が目の端に映っていたが……この時の私は、彼女の視線に気が付く余裕がなかった。
から騒ぎをする乙女たちの仲間に入るまで、私は思ったよりも長い時間を要した。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～英語塾処安西家編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～英語塾処安西家編～

「今日はここまでにしましょう」

安西先生の言葉でホッと一息をつき、テキストから顔を上げた。

「学校の方の教科書はかなり進んだわね。美千子ちゃん、予習してきてくれるから飲み込みが早くて助かるわぁ」

先生からお褒めの言葉をもらい、私は少し頬を染めて「い、いえ、そんな」と返した。

中学生から通い始めた、安西先生主催の英語塾。

月日というものは本当に早いもので、週一回の割合で先生のお宅で個人レッスンを受けるようになってから1年2ヵ月が過ぎた。

『海外へ出て金髪碧眼と結婚する！　そしてハーフの子を産む！！』

小さいころから秘めていた野望を成就するため、英語の成績をアップしようと決心した中学生に入る前の私。

中学の授業まで待てないと思った私は、母に頼んで暫く交流が滞っていた安西先生にアポを取ってもらった。多恵子小母さんのお葬式以来、東一家と関係することは避けていたのだが、知識が無けりゃ何処から手をつけていいかわからなかった私には、背に腹は替えられなかったのだ。

（安西小母さんに勉強の事聞くだけだし、これぐらいはいいよね…）

電話でよかったのに、わざわざ家に招待してくれた安西先生。久

し振りに先生の御宅にお邪魔した私は、懐かしさの為に鼻の奥がツーンとしてしまった。見慣れた筈のマンションがやけに小さく、そして狭く見えた。それは私が少し大きくなったせいなのだろう。

1年以上御無沙汰した私を安西先生は快く迎え入れてくれ、色々と相談に乗ってくれた。

オススメの英語の参考書や辞書、勉強方法などを事細かに説明してくれ、英語を勉強していくうえで最終的にどういう目標を持っていくのか……などを話し合った。

もちろん、邪な野望はそのままバカ正直には言わず、『留学を考えている』という言葉で伏せたが。

それを聞いた安西先生は嬉しそうな顔でウンウンと頷いてくれた。多少後ろめたさが残ったものの、留学は最終目標に到達するための過程の中に入っていた項目だったので、間違っちゃいない！　……と言い聞かせた。日本にいるだけでは外国人の方々と出会えるチャンスは少ないし、ましてやリバー様クラスの上物は特に厳しい。外資系大企業に勤めている東小父さんクラスの人と出逢うにもそれなりの英語力が無ければ無理である。

『それなら美千子ちゃん、一生懸命勉強しなきゃね』

『ハ、ハイ！』

『そうねぇ……もしよければ、週一回くらい私のところに来ない？　実は私も主婦ばっかり対象の英語塾……というよりも勉強会なんだけどね？　中学生なんて教えるの初めてなんだけど、中学英語は基礎の基礎だから、一緒に勉強できればお互いためになるし楽しいと思うの。もちろん学校の勉強だけでも、他の学習塾でも構わないけど……どお？　お試しって感じで、ね？　もっと英語を身近にするような勉強を一緒にやりましょうよ！』

当初は安西先生も私もそんなつもりは全くなかったのに、いつのまにか先生はその案がお気に召したようだった。私も飛び付きそうになったが、咄嗟にある男の顔が浮かんだせいで、口から出そうになった言葉を飲みこんだ。とりあえず両親に相談してからということになったのだが、結局安西先生のところに通うことになる。

結果は先生のおかげで英語の成績は絶好調。それに安西先生の勉強以外の外国の話は非常に興味をそそられた。そのほか私の大好きな外国のアクターのことで大いに盛り上がったりと、毎回楽しい時間を過ごせた。それに外国の雰囲気が詰まった安西先生の一室にいるだけでも、学校での鬱積が解消されたから。

安西一家が私達の街に一軒家を買い引っ越ししてくるまでは、休日に母が車で送り迎えしてくれた。今は平日の夜に変更になり、自転車で通えるありがたい距離になったというのに。

非常にやっかいな問題が付いてくるとは、まったくもって予想外であったし、ましてや……自分が波乱万丈劇場を地で行くとは思ってもみなかったのだった。

＊＊＊

「来週からは教科書は読み上げだけにして、構文の暗記テストと文法を進めちゃおうっか。さっき言った場所の構文、暗記してもらっていい？」

私はハイと言って力強く頷いた。

最近の私は、益々英語に力を注いでいた。理由は簡単、淡い恋やささやかな青春を満喫するということをすっかり諦めたからだ。

クラスで……というより学校で浮きまくっている私に、相変わらず尾島率いる男子の態度は素っ気なかった。その中には田宮君や佐藤君の名前も入っている。そもそも彼らは素っ気ないと言うより、私の存在すら眼中にも入ってない様子だ。オマケに天敵の成田耀子

と原口美恵、この二人大いに気が合うらしく、タッグを組んで尾島を中心としているグループにベッタリで、私を視界に入れさせないものだから余計に、だ。これではいくら田宮君に恋心を募らせたところで、成就する可能性はゼロ……というより、嫌がられる可能性の方が大きい。別に好かれようとは思っていないが、嫌われるのはさすがに耐えられなかったので、このまま静かに恋を終わらせようと決めた。

今の私に残されているのは、長年温め続けてきた「あの野望」だった。

中学一年の時はなんだかんだありながらも楽しく過ごせたので、すっかり野望が薄れてしまっていたのだが……ここにきて再確認、俄然やる気が漲ってきた。

ある意味ふっきれた私は、先生に積極的にアプローチを開始し、わからないことはすぐに先生に聞いた。本当は身近な友達に聞きたいのだが、幸子女史は遠いし、クラス1の秀才はあの「ブキミちゃん」こと「伏見かおり」。自分のことは棚にあげて、さすがに私も近寄り難い。だからといってこれ以上塾に通う余裕は我が家にはない。……約一名、勉強という点で非常に頼りになる男がいるが、ヤツだけは大金積まれても遠慮したい。そうしたら、残る望みは先生しかないのである。とりあえず目標は普段の成績を上げることと、「ア・テスト」対策だ。

お陰で中間テストの結果は十分納得いくものだった。英語はなんと満点で、その他の教科もぐんぐんと結果が伸びていた。下手したら「ブキミちゃん」に追いつく勢いである。勉強という点も、浮いているという点も。

ただ、彼女と私と決定的に違う点は、彼女は見かけの不気味さから考えられないほど、ハッキリと物事を言うところだった。それが教師をも怯ませる理にかなった正論で、問答無用で痛いところを突いてくるという厄介なモノなのだ。

正真正銘正論正当を貫く、学級委員且つ生徒会役員を務めている

「ブキミちゃん」。

しかもそれだけではない。彼女のバックに控えるのは、正真正銘権力がある家柄とステイタス。地元の大地主で伏見病院の娘である彼女。市会議員の祖父を持ち、親戚一同揃いもそろって医者の家系。市の医師会の会長を筆頭に、大小問わず地元の大きい企業や名のある団体の理事には必ず「伏見」の名前ありという、伏見一族の本家の一人娘であった。この辺の大きい家は、十中八九「伏見」という表札が掲げてあり、この伏見家より大きい家を建ててはいけない、という暗黙の了解が漂ってるくらいだ。……それに、よくない噂もチラホラある。「８９３」のような風貌な方が伏見家に出入りしているというブラックな噂だ。

これでは、さすがの天敵女子二人も１組男子も叶わない。それは尾島とて例外ではなかった。

（……そうよ、留学するためには英語だけじゃダメよね。まずはいい高校へ行って、いい大学に入らないと！）

私の野望に応えてくれた中間テストの結果は、少しだけ寂しい心を救ってくれた。

全ての鬱積は拭えなかったけれども、教室では奥住さんや光岡さんがいるし、放課後になれば和子ちゃんや貴子がいたから、それで十分だった。

……それに、唯一態度が変わらない男子がいた。星野君だ。

彼は私に話しかける時、よそよそしい態度はおろか、周囲に流されず淡々として普通だった。それは私に限ってではなく、「ブキミちゃん」を含めたクラス全員に対してそうだったのだが。それでも、私にとっては十分すぎるほど嬉しいことだった。

「ちょっと大変になるけど頑張りましょうね？　気合入れてやっち

ゃいましょう！」

安西先生の言葉に現実に引き戻され、私はハッと先生の顔を見た。先生はニッコリとした笑顔で頷きながらテキストを片づけ始めている。私も慌てて広げていた教科書やノートを閉じて勉強道具をカバンにしまい込んだ。

トントン。

部屋のドアが叩かれたので、先生が「ハーイ、今終わったわよ」と答えるとガチャリとドアが開いた。開いたドアから新しい空気が流れてくると共に、一人の男の子が顔を出した。無駄に甘い笑みを浮かべている。

「先生、コーヒー入れたけどどう？　よかったらミチもどうだい？　それに修学旅行の土産、渡したいんだ」

いえ、帰らせてもらいます。

そう言う前に、「そうね、美千子ちゃんの分もお願い。カフェオレにしてあげて？　すぐ下に行くから」と安西先生が頼んでしまった。雄臣は「ＯＫ！」という言葉と極上スマイルを残して階下へ降りて行った。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～帰宅道中警報発令編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

「……お、お邪魔しました」

長居をし過ぎだ。

コーヒーを飲むだけの筈が、先生と雄臣の修学旅行話に付き合わされた。熱いカフェオレを無理矢理早く飲んだと言うのに……火傷したかいもなく、気付いた時にはすでに夜の7時を過ぎていたのだ。しかも明日から2年の遠足。途中で不機嫌そうなアラタの「もう長話やめたら、母さん」という一言がなければ、8時過ぎになっていただろう。私はホッと息をつき、そそくさと挨拶をして安西家を退散しようとした。

「すっかり話しこんじゃったわぁ。明日から遠足なのにゴメンネぇ、美千子ちゃん。そうそう……」

安西先生が耳元に口を寄せてそっと囁く。

『真美子ちゃんに風邪お大事にって言ってね？　それと……申し訳ないけど、ちゃんと予習をしてくるようにって、言ってくれる？』

安西先生の申し訳なさそうな言葉に私は恥ずかしくなり、カァと赤くなりながら、「……す、すみません」と頭を下げた。

妹の真美子は英語がどうも苦手のようで……せっかく一緒に安西先生のところで英語を習い始めたというのに、予習をおろそかにしていた。彼女の場合英語を習うというより、他の目的で安西家にきているようなものなのだが、さすがにそれを大っぴらにするつもりはないらしい。まったく困った妹である。

「ミチ、これ、持って行って」

靴を穿き、挨拶をして玄関を出て行こうとしたら、アラタが紙袋を渡してくれた。中を覗くとオレンジやレモンが入っている。その意図にピンときてアラタの顔を見ると、心なしか顔がほんのり赤い。

「あ、ありがとう……。必ず真美子に渡すから」

アラタの心遣いに感動し、引き攣り笑いではなく自然に出た笑顔で真美子の代わり素直にお礼を言うと、「べ、別に、マミだけじゃねぇし！　ミ、ミチも食べなよ」と照れ臭そうに益々顔を赤くした。その様子を見て、私は真美子がとても羨ましくなった。こんなに心配してくれる男性がいたら、私だったらきっとホロリと絆されてコロリと傾いてしまうに違いない。それなのに、真美子は何故雄臣なのか。真実を「知らない」というのはなんと気楽で、残酷なことなんだろう。

そんなことを思っていたら、今まで部屋着だった筈が、どう見たってわざわざ着替えましたよね？　という雄臣が時計をつけながら玄関まできた。嫌な予感ゲージが徐々に上昇していく。

「ミチ、遅いから送っていくよ」

結構です！！

……とは噛みつかず、「だ、大丈夫、自転車だし！」と慌てて否定した。

冗談ではない。ただでさえ外で一緒に歩くのは避けているのに。しかも2人っきりだなんて……誰か知り合いに目撃されたらエライことである。それにこれ以上学校に居づらくなるのは正直キツかった。まだ痴漢に襲われる方がマシ……な気がしないでもない。

「そうね、雄ちゃん、送って行ってあげてくれる？　大分遅いし、人気がないところもあるしねぇ」
（せせせ先生！　余計な心配は無用です！！）
「オレも行こうか？　帰り雄兄さん一人になるだろ？」
（アラタ、エライ！　ナイスアシスト！！　むしろ君が来てくれっ！！！）
「大丈夫だよ、オレも自転車で行くから平気」
（なら私も一人で平気だろっ？！）

私の必死の叫び（心の中）も空しく、雄臣はさっと靴を履き、苦い顔のアラタと満面な笑みで手を振る安西先生に「行ってきます」と残して、私の腕を引っ張りながら玄関を出てしまった。

＊＊＊＊＊＊＊

「……」
「……」

閑静な住宅街を自転車を引きながら歩くのは、中学生男女2人。

その2人に静かに月の光が注いでいる……のだが、決してロマンチックな雰囲気は醸し出していない。

男の方は家を出た途端、それまで顔に張り付いていた愛想笑いという仮面を取り外し、言葉はおろかまるで息もしてないような能面顔だった。その無表情さが夜の静寂な空気に浮かび、すれ違う人がいたら恐ろしさで道を開けるだろう。

一方、女の方も口を噤んだままだった。こちらは息をしてないというより、この雰囲気に押されて息ができないと言っていい。男の纏う闇に飲み込まれぬよう、必死に距離を取りながら隣を歩いている。

（……はやく、はやく家に着いてくれ！）

必死に願いはするが、雄臣の歩みはゆっくりだった。

門を出て自転車を走らせるかと思いきや、彼は有無を言わさず自転車を引いて歩くという行動に出たのだ。マッハ並みの超高速回転でペダルを漕ぎ、即効で帰ろうかと思ったのに……お陰で私も歩かざる負えなくなった。普段は何の変哲もない道のりが、三途の川を渡るような恐怖を感じるのは、私の気のせいだろうか。そう考えながら進んでいると、雄臣は私が通るいつもの道のりから一本逸れた道を進んだ。

（あ、あれ？）

おろおろしている間に、雄臣は先に進んでしまう。私がどうしようか迷っていると、やっと雄臣は振り向いた。

「……なにしてんだよ、早く来いよ」

「や、だ、だって、そっち、遠回り……」

「こっちの方が明るくて道が広いだろ？　……もしかしてミチはいつもそっちの暗い道の方、通っているのか？」

私は頷いた。その方が山野中付近まで続く大通りへの道に近かったからだ。多少木々がうっそうと生い茂っているお寺と墓場の近くを通るが、普段は数秒で通り過ぎるから問題ない。そうすると雄臣は眉根を寄せながら息を吐いた。

「危ないだろ。次から遠回りでも安全なこっちの明るい方を通れよ。いいから行くぞ」

雄臣はそう言って再び歩き出した。

（……なによ、いつもは時間が早いし明るいもん。それに自転車に

乗ってさっさと通ればいいじゃん。それに……そっちは行きたくないんだよ……）

雄臣の背中に向かって心の中で文句を吐いたが、雄臣は振り返ることなく歩き続ける。

（もう！　あぁ……どうか、どうかだれにも見られませんように！　特にアイツらはいませんように！！）

私はハァとため息をついた後ゴクリと唾を呑み、天に祈りながら後ろに続いた。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～神ノ正体御開帳編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～神ノ正体御開帳編～

雄臣の少し後ろに並ぶように歩いていると、彼は不意に忍び笑いを漏らした。暫く続いた気まずい雰囲気も、会話を交わしたことによって多少和らいだ気がする。あくまでもほんの少しだが。

見慣れた場所に出た。この辺りは去年の暮れとバレンタインの時にも通った場所だ。

アンラッキーなことに、安西小父さんの新しい家は大野小学区の住宅街の中にあり、区民センターよりさらに奥まった場所にあった。さっきの暗い道を通れば、区民センターの付近を避けて大通りに出ることができるのだが……。かろうじて救いなのは、例のお好み焼きの前を通らずに済むことだ。

（……それでも油断はできない。ヤツらと鉢合わせする事態だけは絶対避けないと！）

「……さっきからなにソワソワしてんだよ、キョロキョロしてるぞ」

「えっ？！　い、いや、別に、なんでも……は、早く行きま、せん？」

「せっかくだからゆっくり行こうぜ。気候もいいし」

「で、でも遅いし、遠いし、自転車に乗った方が」

「確かに自転車じゃないとちょっと遠いよな。やっぱ安西叔父さんのところじゃなく、無理言ってミチの処に居候すればよかったかな」

「……え……はっ？！」

「なんてったって学校から近いだろ。実際そういう話もあったんだぜ？　悟小父さんは賛成してくれたけど、父さんが猛反対したんだ」

（当たりまえや！！）

冗談ではない。何故そこまで我が家が東一家の為にしてやんなきゃならんのだ。この場合東小父さんが猛烈に正しい。

学校でも家でも一緒なんて……考えただけでホラーもんだ。翌年の某滋養強壮ドリンク剤のキャッチコピーである、「２４時間、戦えますか？」を地で行くなんて死んでもゴメンだし、命がいくつあっても足りやしない。第一私は中学生であって、ビジネスマンではない。

父も父である。いったい何を考えているのだろう。年頃の男女を同じ屋根の下で住まわせるなんて……いくらなんでもハレンチすぎる。いや、例え天地がひっくり返ろうとも、この世に雄臣と２人きりしか生き残らなかったとしても、彼とだけは「間違いがない」と断言できるが、人間の感情に絶対という言葉は無いに等しい、と思う（この場合被害者はもちろん私だ）。そもそも、それ以前に雄臣ほどの色男がこんな地味で鈍くさいのに手を出すとは考えにくいし、それこそ彼女には困ってないだろう。

いつの間にか区民センターまで来ていた。

隣接している公園にある照明が、チラッとこちらを振り向いた雄臣の顔を照らす。

「それに、ミチの前では気を使わなくて済む」

……楽なんだよ、素のままを出せるからな。

青白い彼の顔は、ゆっくりと能面の「小面」のように微笑んだ。

「……」

修羅がいる。

形の良い口元は弧を描いているのに、目は笑っていないその顔に「神」は宿っていない。むしろ「鬼神」を連想させた。眩しい照明が当たっている濃いグレーの瞳から出る眼力は、鋭利な刃物のように研ぎ澄まされており、獲物を易々と捉え決して逃さないことを物語っていた。

狼に追い詰められたウサギのように、ガタガタ震えだす私の身体。その反応が可笑しかったのか、それともお気に召したのか……雄臣は薄笑いのままだ。

「そう言えば、ミチとこうして2人っきりで話すのって、母さんの葬式以来か」

震えているウサギの喉笛を捕えている狼は、息の根を止めるようにその顎に力を入れて一気に噛み砕いた。

今まで一緒に話す場面は幾度もあったけど、その時は周りに人がいたし、お互い痛い過去には触れないよう避けていたと思う。特に私は細心の注意を払っていたし、極力2人きりにならないようにしていたから。

『……もう俺たちに二度と近づくな！』

そう言った時の雄臣の姿が思い出され、私は恐ろしくなって彼から目を逸らした。

「まぁ、俺がミチにあんな酷い事言ったから……当然といえば当然か。あんときはガキだったからな。それでもあの後、結構反省したんだぜ？　きっと傷つけただろうなって」

雄臣は自分の自転車を片手で支え、もう片方の手を伸ばして私の自転車のハンドルを……私の手の上から握った。その手の感触はあの日の気温のように冷たい。

「ミチの、そのどもる癖、以前は無かっただろ？」

彼の静かな言葉にビクッと震え、唇を噛みしめる。

「悟小父さんが言ってたよ。母さんのお葬式辺りからだって。よっぽど強いストレスがあったんだろうって言うから……俺のせいなのかなって。申し訳ないって思ったんだ。けど、近寄るなってあれだけ強く言った手前、謝りにも行けなくてさ。……ずっと苦しかった」

私の手を握っている雄臣の手に力がこもり、熱を帯びてくる。

「……それが、父さんの転勤が決まって、安西叔母さんのところに挨拶に言った時に、叔母さん満面な笑顔で言うんだぜ？　ミチが、最近頑張ってるって。中学校楽しいみたいって」

私は反射的に手を引っ込めようと思ったが、私の手を握る彼の手の力が強すぎて動かなかった。

「もしかしてミチにとって、俺たちのことが、俺の傷つけた言葉が、過去になって、忘れてしまったのかもって思ったら……嬉しかったんだ」

雄臣は手が食い込むほど強く握りしめた。私は痛さに顔を歪めギュッと歯を食いしばり、この拷問に耐えた。

――2年半前の12月、冷たい雨が降るあの冬の日。

あれだけダメージを受けたにも関わらず、目の前の鬼神に再会するまですっかり忘れていた自分が恐ろしい。顔を合わせない日々が続き、新しい中学生活に慣れようと悪戦苦闘していると、不思議と辛い思い出は風化されてしまっていた。

「……もう一度やり直せるって。昔みたいに戻れるって。だから、父さんについて行かず、こっちに来たんだ」

この時私は、自分の行動の甘さと迂闊さに死ぬほど後悔した。

何故雄臣を取り巻く世界に接触してしまったのか、と。

何故あの時の出来事を一時でも忘れてしまったのか、と。

そして……悟ってしまった。

目の前の鬼神・修羅は、あの過去を一瞬でも忘れた私のことを決

して許しはしないのだ、ということを。

「それに、ミチを立ち直らせた、そんな中学生活を覗いてみたかったんだよ」

薄ら微笑む、雄臣と言う皮を被った「鬼神」。

（この男……絶対ヤる気だ……）

目の前の「鬼神」は昔から二重人格だった。それも気に入らない相手には容赦なく徹底的に打ちのめすのだ。

「……そんな顔するなよ。大事な妹には何もしやしない。これでも成長したんだぜ？　ただ兄貴として、幼馴染として、元許嫁として……ミチを見守って行きたいし、あの時の償いをしたいと思ってるんだ」

――だから、俺をミチの世界から追い出すな。

徐々に見開く私の瞳に映る雄臣の顔は、残酷なまでに神々しく、鬼気としていた。

私の中で、困惑と焦燥と恐怖と憤りと……グチャグチャに感情が混ざり合っていたのにもかかわらず、その人間離れした姿に魅入ら

れてしまった。

この時私たちは、お互い違う意味で青白い顔をしていたと思う。

十二分見つめ合い、そして、睨み合っていた。下手したら殺気を伴うほど緊迫した状況であっただろう。

だから、ここが危険地帯だということもすっかり頭から抜けていたのだ。

ましてや――。

今いるこの場所が、明るい照明のお陰で公園のバスケットコートから丸見えなどと、そこに人影があったなどと、気付くことができずにいた。

ヒューっ！！！

高い口笛の音が張り詰めた空気を引き裂いた。

「よぅー東ぁ！　噂の幼馴染と夜のデートかよっ！！」

恐る恐る声の方を向けば、目に飛び込んでくるバスケットコート。そこには、数人の男女がこちらを見ていた。

私は突然降りかかった忌々しき事態に、驚愕のあまり身動きとれずに突っ立ったままだった。だから、背を向けている雄臣の様子に気付かなかった。

彼の端正な顔立ちが一瞬険しくなり、すぐに挑むような、残忍な微笑を浮かべたのを――。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～公園内籠球区画編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～公園内籠球区画編～

「よぅー東ぁ！　噂の幼馴染と夜のデートかよっ！！」

一瞬言われている意味がわからなかった。

……というか、言われた言葉に身体が拒否反応を示し、脳が勝手に一体どこの御国の言葉だろうかという処理をした。いや、どちらかというと宇宙人からの暗号通信だろうか。

脳内が許容範囲オーバーでショート寸前、顎が外れそうなほど驚いている私を置き去りに、雄臣はあろうことか自転車のスタンドを立てて、公園に張り巡らされている低い金属の柵を長い脚でまたいだ。

（ちょ、ちょっと！　なんでいちいち相手すんのっ？！　ここはさっさと手でも振って退散だろうがっ！！）

「なにしてんだよ、８時近いのに。補導されるぞ！」

あわわわ……と慌てふためく私を無視して、雄臣は注意と言うより、厭きれた様子でバスケットコートに向かって声を上げた。

「うるせぇ、別に学校帰りじゃねぇよ。それにこんな時間に堂々とデートをしてる奴に、言われたかねぇし！」

声をかけてきた男は笑い、照明の眩しい光をバックにボールを小脇に抱えながらこちらに近づいてきた。

この声と雰囲気、以前にも感じたことがある。

そう、去年の文化祭のリハをしたときの体育館の時と一緒だ。やっと雄臣の手から解放された私の右手を見ると真っ赤になっており、ジンジンしている。その痛みと雄臣の手の感触を振り払うように息

を吹きかけ手を振っていると、逆光のせいで不鮮明だった男の顔が明らかになった。

（……3年バスケ部キャプテン、辺見先輩……）

「こんな遅くまで、練習かよ。熱心だな」

「もうすぐ大会が始まるからな、少しでも時間が惜しいんだよ。それより東だってこんな夜遅くにデートですかぁ？　女子共に知れ渡ったら、大変なことになるぜぇ」

辺見先輩の言葉に手の痛みが吹き飛び、凍りついた。

「そりゃこっちのセリフ。そっちだって人の事言えないだろ？　あそこに『飯塚さん』、いるし」

雄臣はこっちを黙って見ている集団に向かって顎で差しながら、からかうような笑みで辺見先輩を見た。途端に辺見先輩は「う、うるせぇな！」と顔をほんのに赤くして抗議した。

「そ、それより！　いい加減オマエもバスケ部に入れよな？！　そうだ！　もし入部したら、今日見たことは忘れてやってもいいぜ？　学校で噂されたら、東もそっちの幼馴染も困るだろう？」

（雄臣、今すぐバスケ部に入ってくれ。そして一緒に練習してろ！　私はとっとと帰らしてもらう！！）

期待を込めて雄臣を見たが、彼は口を歪めて笑っただけで、何も答えなかった。

その時、私はふと思った。

そう言えば何故、雄臣はバスケ部に入らないのだろう。確か彼は小学校の時からバスケを続けていた筈、しかもかなりの腕前で、学

校のクラブだけではなく外部のクラブチームに入っていた筈だ。でも、今回の引っ越しの際、外部のクラブチームは遠くなったので辞めたと聞いた。だから学校のバスケ部だけでも入るかと思ったのに……よりによって入った部活は、あの「ブキミちゃん」も所属する地味な生徒が集まった、『英語・英文タイプ部』。しかも女子ばかりの中に雄臣男一人という黒一点状態だ。

そのおかげで、新3年生が不在だったこの地味なこの部活に、我が妹を含め、女生徒がいきなり集中しだした。2年生にもかかわらず、すでに部長の地位を獲得していた「ブキミちゃん」は、邪な入部希望者駆除……いやいや、対策の為か、毎回日本語絶対不可のディベートを実施し、入部希望者の度肝を抜いた。日本語を少しでも使ったものはペナルティが加算される。学年を問わず、ペナルティ1ごとに高校入試用の必須構文を5、単語を10を丸暗記しなければならないという厳しいものだ。そして入部したからには、英検を必ず受けることを必須条件に加えた。これでは、英語に対して真面目でやる気のある人物しか残る筈がない。もちろん結果は、「ブキミちゃん」の圧勝で試合終了。妹を含めた邪な入部希望者は『英語・英文タイプ部』を去った。

＊＊＊

「別に俺は噂なんてどうでもいいけど。第一、彼女は安西先生の英語塾の帰り道で、夜遅いから送ってるだけの話しだし」

「そんな言い訳で女子共が納得するかよ。なぁ、一緒にバスケやろうぜ？　あんな英語部に入って、腕鈍らせることねぇだろ？　そりゃぁオマエにとって学校の部活じゃ物足りねぇかもしんないけどさ。オマエとさ、ほら、あそこにいるデカイのと小さいのがいるだろ？

かなりの腕前なんだよ。これだけいれば神奈川、いや関東、下手したら全中狙えるかもしれねぇんだ。部活掛け持ちがキツイならさ、俺からも顧問に頼んで、気が向いたときだけでいいからさっ。顧問

も絶対それでいいって言うって！　……つーか、英語部ってそんなに大変じゃねぇだろ?!　絶対悪いようにはしないから、な?　頼むよ！」

片手だけで手を合わせるような仕草をする、辺見先輩。彼の台詞の中に聞き捨てならぬ言葉をいくつか発見した気がした。

（あんな英語部って、そりゃないんじゃない?！）

英語をバカにされたように感じ、ちょっとムカっときてしまった。第一、あの英語部に居られる人物は、かなりの英語力がなければ無理だと私は睨んでる。雄臣がいなければ、私が掛け持ちを考えたいくらいだ。

（それに……「デカイのと小さいの」って……）

私はなるべくバスケットコートにいる集団にピントを合わせないようにしていた。さっきからひしひしと感じる最悪の事態と殺気から必死に現実逃避をしていたのだが……。気候の良い涼しい宵なのに、背中と脇に嫌な汗をかいているのがハッキリと感じられる。

「……まさか、オマエも女がらみじゃねぇだろうなっ?　そんな理由で辞める奴はアホだ！　しかも才能ある奴に限って、そんなことほざくなんざぁ、我慢できん!！」

辺見先輩は雄臣から私の方に視線を移し、ジロッと睨んだ。

私は恐ろしさに身体が硬直し、慌てて「私のせいじゃありません！」と首と手を高速で振った。雄臣はそんな私の様子が可笑しかったのか、フフっと笑いながら肩をすくめた。

「俺だって別にやりたくなくて部活に入らないわけじゃないんだぜ?　膝がさ、結構厳しいんだよ。お遊びなら構わないけど……本格的にやるとなるとドクターと相談しないと、な」

「えっ?！」

私は思わず大声をあげながら雄臣の顔を見ると、彼は困ったような寂しいような表情をして私を見降ろした。

（……そんなの、知らなかった……）

外部のクラブチームは辞めたとは言ってるけども、土日地元の方に出かけていると聞いたので、てっきりクラブの方に顔を出しているのかと思っていたのだ。

だって、雄臣はそれはそれはバスケが好きで、小学校の時から練習一筋だった。何故なら東小父さんがかつてバスケをやっていて、名選手だったから。悔しいが、彼のバスケをしている姿はさすがの私でも称賛のため息が出るほどだ。ハッキリ言って、尾島の比じゃない、と思う。……そのおかげで、一時無謀にも私もやってみたいと思ってしまったのだ。そうすれば、東小父さんに少しでも近づけるかなと思ったから。

（父さんにだって……）

無性にやるせない気持ちが湧いてきたので、考えるのを止めた。

結局自分のやる気と実際の運動神経、そして雄臣と成田耀子……その他諸々の事情を天秤にかけ、バスケの道から遠のいてしまったのは私自身だし、今となってはそれで良かったと思っている。なんせバレー部に入って、マイナスの要素はあれども、プラスの方が大きかったから。それにバスケ部なんぞに入ってたら、今頃退部届を出していただろう。

……けど、雄臣はどうだろう。

父親に尊敬の念を抱いていた彼は、父を超えるといつも意気揚々と亡き母親に語っていたのに。それさえも道が断たれようとしている。

「なんだよ。ミチ、そんな顔するな」

「……だ、だって……」

「いいんだ。これも運命だよ。身体が動かないんじゃ、仕方がない。

諦めも肝心なんだ、時には」

遠くを見つめながら言う雄臣の言葉に、さすがの辺見先輩も苦い顔になった。

「……それに、運動部じゃ、土日に女と遊べなくなる」

珍しく同情的な気持ちを寄せていたのに。

急にニヤリと笑いながら私の方を見て言った雄臣の言葉に、感傷的でしんみりしていた空気が一気に殺気立った。

「……てめぇ、やっぱ女絡みじゃねぇか！　おい、幼馴染、どういうことだ？！」

「ちちちち違います！　私は関係ありません！　だだだ第一、私も土日部活です！！」

私の慌てて弁解した言葉に、雄臣は堪え切れず吹き出した。

……どうやら完全に遊ばれているらしい。

（くそぉ……呑気に笑っているその顔を、苦痛で歪ませたい！　私の同情した気持ち、返せ！！）

「ククク……冗談だよ。それに、そこのデカイのはバスケ部で見たことあるけど、隣の小さいの。彼は確かサッカー部で、バスケ部じゃないよな？　日下部が言ってたぜ、『絶対尾島をバスケ部にはやらない』ってな」

雄臣がからかうように辺見先輩の後ろの方に目配せすると、ハッとして私も辺見先輩もその視線の方に目をやった。いつのまにか、私達三人の傍まで来ていた、数人の男女。

「すみませんねぇ。その小さいのがバスケ部じゃなくてサッカー部で」

地獄の底から轟かせるような声を出したのは、小さいほうの尾島だった。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神修羅対斉天大聖編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神修羅対斉天大聖編～

「……デートならオレらに構わず、2人でとっととどっかに行ってくれませんか？」

練習の邪魔なんですよねぇ。

とうとう出た。「ロンギヌスの槍」並みの征服力を持つ男が。

勇敢にも、その槍を持って神（イエス）に攻撃を仕掛けているのは、クラス一無謀で悪魔のような男でなく、悪魔そのもの。またの名を、釈迦にケンカを売る怖い者知らずの孫悟空……じゃなくて、類人猿。

一方、ケンカを売られている神……ではなく、どちらかというと鬼神・修羅は、後輩の失礼な口のきき方に怒りもせず、フッと笑った。その笑い方に親愛の意味は籠められていない。

（……むしろ思いっきりバカにしてらっしゃいますよね……）

長年裏の顔を見続けてきた私にはわかる。尾島も野生すぎるカンで瞬時にそれを察知したのだろう。見る間にタレ目がつり上がり、瞳孔にメラメラと仄暗い炎が点火された。その炎（じょうねつ）、ぜひとも明日の遠足のキャンプファイヤーまで大事にとっとけよ、と言いたい。

（……そんなことより、逃げよう。ここはどう見たって逃げるのが得策だろ）

こんな妖怪同士の争い、しかも厄介な親玉クラス。まともな人間が敵う筈もないし、積極的に参加する必要もない。こんなところでグズグズしていたら、こっちが煽りを食って殺（や）られてしまう。

……けれども。

（「2人でとっととどっかに行ってくれませんか」、ですか……）

私の頭の中で尾島の台詞が何度もリピートしていた。

そりゃ、尾島に嫌われていることはわかっているけど……そんなことわざわざ他人に言われる筋合いもない。それよりも何故バスケをあれほど避けていた尾島が、こんなところで呑気に練習などしてるのか。しかも大人しく練習してれば良いものを、なんでこんなところにまでご丁寧に顔を出してくるのか。

……そもそも、彼がいちいち文句を挟んでくる原因は、一体何なのだろうか？

（私、尾島に嫌われること何かしたのかな？　裏番のお墨付きなほど、地味に生きている私が？　それともただ気に入らないだけ？）

「……」

――ただ気に入らないだけ。

（……キツイな……）

それをあっさり認めるには、心にかなりのストレスと痛みを伴った。

もし「気にらない」というのが本当の理由だとしたら、とっても悲しいことだし、もはやどうにもすることはできないと思ったからだ。そりゃ、世の中全員に好かれることはまずありえない。実際私にも苦手な人は沢山いる。けれども、その感情をいちいちむき出して接するほど、もう子供じゃない。

（……嫌なら、放って置いて欲しいのに。……なんか疲れた。とっとと帰ろう）

本気でそう思ったので、天然ボケをカマすようにわざと時計を見

て、

『もう八時すぎそうなんで、アッシは先に帰りやすぜ、ダンナ。あとは妖怪同士よろしくやって下せぇ。むしろ相討ちになってることを望みますぜ、ゲヘヘ』

と雄臣に一言言おうかと思った、その時。

「あ～ミっちゃんだぁ！　噂の東先輩とデートなんて、やるぅ～！！　ね、啓介？」

出てこなくていい処まで首を突っ込む、妖怪・ろくろっくび……いや、小リスこと小関明日香が、絶賛炎上中の尾島の後ろからひょっこり登場した。

「……ほ～んと。こんな夜遅くよくやるよなぁ～。明日キャンプだってぇのに、お熱いですねぇ～。それとも一晩会えないから？　ちょっとの時間でも逢瀬ってことですかねぇ？！」

尾島の槍（セリフ）が真っすぐ心臓に突き刺さった。

勢いよく刺さった槍は簡単に抜けないほど深く抉りこみ、傷つけられた痛みは悲しみと憎悪の感情となって全身を蝕ませた。

（……な……なによ……！）

私は急に息が苦しくなり、新鮮な空気を求めて鼻と口を少し開け

ながら、呼吸を忙しなく繰り返した。その間にも喉が締め付けられ、心臓の辺りがズキンと痛む……というか動悸がどんどんと激しくなっている。

小リスの余計な発言と孫悟空の厭味、しかも2人は似たような顔に憎たらしい笑みを浮かべており、それ以外の外野は冷やかし笑いをしていた。

（……ふ、2人仲良く一緒に燃えてしまえ……揃って……揃って、この世から消えてしまえ！！）

完全に切れた。

一気に疲れが吹っ飛び、私の身体にも怒りの炎が焚きつけられ、全身に力が漲った。

（……そうだ、そうだよ！）

何故、小リスや尾島なんぞにここまで言われて黙ってなきゃならんのだ。

何故、3年の女子や裏番なんかに説教されねばならんのだ。

何故、クラスでひっそりと縮こまる様に生きないとならんのだ。

何故、気に入らないというだけで、クラスメートに無視攻撃されて卑屈にならないといかんのだ。

何故、雄臣や多恵子小母さんにあれだけ言われ、遠慮しないといけないのだ！！

（間違っている！　絶対、間違っている！！）

こういう場面こそハッキリと言わねばならない。人生決めねばな

らないところをビシっと決めなくて、いつ決めるというのだろう?!

武者震いが体中を駆け巡る。

震える拳をギュッと握り、刺さった槍を無理矢理引っこ抜くように心臓に手をやった。大体、こんな槍、大したことないではないか。たかが猿の如意棒もどきに傷つくほど、無駄に苦労している訳ではない。

私はゆっくり顔を上げ、ギラっと尾島と小関明日香を睨んだ。

一瞬、尾島がビックリしたように目を見開いた。彼の瞳が動揺し、怯んだ気がしたが気のせいだろう。その証拠に生意気にも真っ向から睨み返し、怒りの炎はいまだにその目に宿ってる。

(いーじゃないの……その炎(ケンカ)、買ってやろうじゃないのさっ!)

出会ってから、早1年と2カ月。まともに真正面から対抗するのは、初めてではないだろうか。その自信がさらに拍車を掛け、後先考えず憎悪と共に「一言物申す!!」の態勢に入ろうとした時。

雄臣の弾んだ華やかな笑い声がそれを遮った。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神修羅対足軽編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神修羅対足軽編～

雄臣の華やかな笑い声が夜の公園に響いた。

（なななんなのよっ！！）

私は勢いを削がれたことに完全に頭にきて、今度は雄臣の背中の方を勢いよく睨んだ。

雄臣は私の殺気に気付いたのか。ゆっくりと振り返り、挑戦を受けるように好戦的な笑みを浮かべ、こちらを見下ろした。お互いの目から炎が出て、導火線を舐めるようにバチバチと伝い、中央で一気に弾ける。

「ハハハ、困っちゃうよな。デート、デートって、なんだか照れるよ。な、ミチ」

「……そうよね。なんの冗談かしら。これのどこがデートなんでしょう」

「幼馴染って本当微妙だよな。いくら言っても全然信じてもらえないし。みんな本の読み過ぎじゃないか？それともさ、よほど俺たちお似合いのカップルなのかな」

「……ホ、ホホホ、お戯れを。私なんかとてもじゃないけど、雄兄さんに釣り合わないってもんですわ」

「釣り合わないって、大袈裟だなぁ。恋は自由だし釣り合う釣り合わない関係ないんだよ。だれに強制されるものでもないしね」

「……私には雄兄さんは過ぎる人ですよ。それより真美子の気持ちに応えてあげて。もしかして……彼女いるの？　きっといるわよね？」

「俺はマミもミチも同じくらい好きだよ、兄としてね。大事な妹じゃないか。ずっと見守っているよ、約束する」

「本当に？　真美子と何かあっても、泣かすようなことはしないでね。あの子はまだ中1なの、姉として泣く姿は見たくないわ」
「わかっているよ。大丈夫、大事な妹を泣かすもんか。父さんや天国の母さんの名に誓って、絶対だよ」
「一生よ？」
「当たり前じゃないか。これでも紳士を心掛けているつもりだよ。父さんに習ってね」
「そうよね、小父さま、とっても誠実な人だもの。雄兄さんもきっときっとそうなると信じてる」
「ありがとう。ミチは優しいな。いつも俺の歩む道を応援してくれる。感謝してるよ。是非期待に応えないといけないよな」
「いいのよ。こんな私だけど、東小父さまにしっかり頼まれているし役に立ちたいの。それに妹として兄を応援するのは当然でしょ」

　血の絆を超越した麗しい兄妹愛。
……というより、血反吐が出るサムイ三流芝居。

正式に訳すと、

『ハハハ、そんな顔するなよ！　いいじゃないか、デートにしておけば』
『冗談はその意地の悪い性格だけにしてくれる？　それにこれのどこがデートなのよっ？！』
『いちいちムキになるなよ。どうせ幼馴染って答えても、だれも信じないだろ？　昔からそうなんだから、いい加減適当に流せよ。それよりもさ、よっぽどみんな俺たちをくっつけたいみたいだぜ？』
『ホッホッホ！　そのギャグ笑えない。あまりに寒くていっそスベルわ』
『ここはどうだい？　期待に応えて付き合ってみないか？　幼馴染から恋が芽生える、結構王道だろ？』

『悪いけどその気は全く無いの、雄兄さん。真美子と彼女さんに悪いわ。いるんでしょ？　１００人くらい』
『この際マミも一緒で構わないよ。俺は平等にみんな愛せる、約束するよ。考えてみないか？』
『できれば真美子の夢、壊さないで上げて。あの子はまだ中１なの。姉として心が痛むわ』
『そうか、そりゃ残念だな。結構いいカップルになれるかと思ったのに。……やっぱり、父さんには敵わないのかい？』
『一生ね』
『速答かよ。つれないな。これでも父さんに近付けるよう、努力してるんだぜ？』
『私は一般女子らしく、健人小父さまのような、まともで誠実な人が希望なの』
『ありがたいお言葉、感謝するよ。それならご期待に応えて彼女一筋にしておこうか。もう少しで俺もまっとうな道を踏み外すところだったぜ。是非止めてくれた礼をしないといけないよな？』
『結構よ！　こんなどうしようもない他人様だけど、東小父さまによろしく頼まれているし。不本意な妹という立場として、どうでもいい兄の間違った道を正すのは当然でしょ？』

……となる。

以上が殺気を伴いながら長い間鍛錬を重ねた鉄壁の防御で跳ね返す足軽と、余裕綽々で戦いを仕掛ける鬼神修羅の会話の全てだ。本音と建前に若干誤差が生じているが、この際外野は棒読み大根役者並みの建前だけで、本音は知らなくてよい。大体当事者二人の問題だし。

暫く睨みあっていたが、先にこの試合から撤収をしたのは、雄臣の方だった。

「……と、いうわけで。残念だけど、ミチと俺はただの幼馴染で、お熱くも冷めてもいない。ましてや逢瀬でもない。だから安心していいよ、尾島君」

雄臣は完全に置いていかれ気味の唖然としているその他大勢の方に向かって、ひどく真面目な表情と声で言った。しかし私にはわかる、必至に笑いを堪えていることを。鼻がピクピクしてるし。一方、急にふられて我に返り、慌てたのは尾島だった。一瞬キョトンとした顔をした後、カァァと真っ赤な怒り猿のような顔になる。

「ハァッ?!　な、な、なんだよ、そりゃっ！」

「こ、言葉通りだよ」

雄臣はとうとう堪え切れず、爆笑し始めた。まったく何が可笑しいのか、「いやいやいやいや」と膝を叩いたている。

さっきまで緊迫した空気が流れていたのに。

見目麗しいイケメンが涙を流しながら「ヒーヒー」一人で爆笑しているこの事態に、その他大勢はどうすることもできず、辺りを漂う微妙な空気の流れを感じることだけ。

「アッハッハ！　……ごめんごめん、ククク、い、今更なんだけど、俺、彼女いるんだよね？　前の中学校に。だからミチは本当に違うよ？　……それに、俺、とっくの昔にミチに振られてるし。な、ミチ？」

雄臣はなんとも朗らかな顔で、どうでもいいことをのたまった。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～妖怪大決戦終結後編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～妖怪大決戦終結後編～

「……疲れた」

お風呂から上がってやっと一息つくと、私はベッドにダイブした。

（今日は本当に……本当に本当に本当に本当に史上最悪な厄日だよ！）

枕に顔を埋め、溜息を吐くと、顔全体が自分の吐いた息で温かくなる。暫く埋めていた顔を横にして、机の上に用意してある明日のキャンプの荷物を見上げた。

「よりにもよって、キャンプの前日。よっぽど運が悪いだろ、私」

明日休みたいと思った。今日の疲れが風邪を引き起こし、高熱の状態にでもならないだろうか。とりあえず明日、尾島や後藤、小関明日香に会いたくない。

（絶対、明日のキャンプの夜、話のネタにされるな……）

それでも、心は僅かに軽かった。

雄臣に彼女がいると判明したいま、これで忌々しい噂は解消されそうだ。それに自分の感情を押し隠し、ビクビク生きてきた今までと違って、ちょっとの勇気で雄臣にあそこまで対抗できるとは……私もやればできるのかもしれない。これも全て中学生になってからできた友達と「尾島」という名の試練のお陰だ。

そうだ、第一勇気が出たキッカケは尾島の余計な一言だった。よくよく考えてみれば、あの時理性が吹っ飛び、前後見境いなく怒鳴ろうとしたではないか。

「よくそんな勇気でたな……」

中学1年まではあんなの日常茶飯事だった。
久しぶりの嫌味におそらく過剰反応したのだろう。それか雄臣のせいでよっぽど虫の居所が悪かったのか。結局尾島への怒りの矛先は雄臣に変わってしまったが、この際結果良ければ過程はどうでもよい。今日をお手本に、これからはこの調子で勇気を持って対抗しなければならない。
（これでも少しは成長してるんだよね。それにしても雄臣め、今後どうやってこの1年を乗りきって行こうか……）
私はベッドの上で胡坐をかきながら今日の出来事を頭から追い出し、ウンウン唸りながら、今後の妖怪退治のプランを練った。

＊＊＊＊＊＊＊

あれから私達は、もう夜の8時を過ぎて図書館も閉館しているし、区民センターの職員さんがチラホラ出てきたので、「万が一学校に通報されたらイカン」ということで解散になった。
その直前までは、「彼女いるんだぜ、オレ！」宣言した雄臣に、辺見先輩や飯塚先輩達3年から質問責めだった。

『なによ～、やっぱ彼女いるんじゃないの、東君。それならそうと早く言いなさいよねっ？　こんな2か月も引っ張っちゃって。錦戸も、東君の彼女さんも可哀想じゃん』
『そうだよな。てっきりそこの幼馴染と本当にデキてるかと思ったぜ。ま、そんなわけないか』

（そこの幼馴染とそんなわけなくて、スミマセンねぇ……）
思わず尾島流に悪態付いてみた。無論心の中で。
すぐさま「マル秘！！　美千子のイ・ケ・ナ・イ☆ブラックリスト～迷わず瞬殺したい人間達～」に、3年バスケ部部長・辺見と名前を書き込んだのは言うまでもない。

まったく、雄臣も雄臣だ。彼女がいるならいると、さっさと初めから教えてくれればいいのに。2ヶ月間、あることないこと噂された私の方が、錦戸先輩（ラフレシア）や雄臣の彼女よりよっぽど可哀想だ。

『それにしてもぉ、ミっちゃん、東先輩振ったんだぁ？　もったいな～い』

どうでもいいところに着目するのは、小リスじゃなくて小悪魔こと小関明日香。「小」という字がトリプルで付く癖に、吐き出る言葉と声は「小」なんて控えめどころか、厚かましく無駄に音量がデカイ。しかも今言った言葉はどう頑張って受け止めても好意的には聞こえない。むしろ、『こんなイイ男振るなんて、アンタ何様？』という風に聞こえる。

『雄臣の見かけに騙されてると、痛い目に合うわよ。外見は素晴らしくても、中身は真っ黒焦げで食えないから。アンタみたいにね！』

……という視線をお見舞いしてやった。普段なら引き攣った笑いをするが、今日はさすがに私も気分が悪く頭にきていたので、そんな気遣いは出来なかった。よくよく考えてみれば、そんな必要もないし、答えてやる義務もない。

ご丁寧にも黙秘権を貫く私の代わりに小リスの疑問に答えたのは、雄臣。要らぬ情報を投下し、私の怒りをさらに煽った。

『アハハ、振られたって言ったけど、すげぇガキの時だよ。ミチは俺じゃなくて、俺のオヤジが好きなんだよ。なんてったって初恋だもんな、ミチ？』

『ちょ、ちょっと！』

『いやぁ、初めて会った時、オヤジがさぁ。ミチと俺を結婚させるのどうのとか言ったら、ミチ、なんて言ったと思う？　俺じゃなくて、オヤジの方がいいって言うんだぜ？　さすがの俺も子供ながらにショックだったよ。つれないよな、ミチ』

『……』

なんという地獄耳であろう。

東小父さんと2人だけの内緒の秘め事で、淡い桃色の思い出だと思っていたのに……。どうやってあの時の会話を聞いたのか。さすが妖怪親玉クラス、普通に人間ではない。

益々殺気立つ私を置いて、幼い思い出話に和む雄臣と、尾島以外のその他大勢。

『え～そんなに東先輩のお父さんってステキなんだぁ。見てみた～い』

小リスの言葉に、雄臣は笑顔で頷いた。身内の自慢なんて、この年頃なら絶対にやらないが、雄臣がやると厭味にならないのだから不思議である。そんな彼は機嫌がいいのか、次々と言葉が出るようだ。

『俺から見ても頭くるほどね。あんな身内持った俺が可哀想だよ。特にバスケやらせりゃ、天下一品だし。な、ミチ？』

『……そうだったかしら』

『よくいうよ、ミチのオヤジさんだってそうじゃないか！　なんてったって、強豪●●大学のバスケ部のポイントガード、且つキャプテンだったもんな？　確かキャッチフレーズが……そう！　甘いマスクで恋もボールも自由自在！！』

『……ハハハ、いえいえ、お恥ずかしい過去ですよ。今はただのしがないサラリーマンですよ。普通のオヤジですよ！』

『そんな事言うなよ、悟小父さん可哀想じゃないか！　せっかくだからミチもバスケやればよかったのに。きっとオヤジさん喜んだぜ？　そういえば、マミも辞めちゃったもんな。なんでかな？』

『さぁ、どうしてでしょうねぇ……』

そう。素直な真美子は誰かさんの為にバスケットを始め、小学校の特別クラブのチームに入っていた。

が、入った小学5年生の1年間は大変だった。何故なら、当時小6だった成田耀子とまったく気が合わなかったからだ。真美子と成田耀子、お互いそれなりに自信があってメチャ気が強い者同士。上手くいくわけがない。この点に関してだけは不思議と気が合う私たち姉妹。成田耀子をツマミに、軽く一晩談義がイケる。

真美子は成田耀子の嫌がらせに決して負けなかった。もともとバスケ部の間で小学5年と小学6年の仲が悪いことが幸いして、何度も食らいついては必死に対抗していた。しかし最終的には真美子に軍配が上がる。どうやら父親の血筋が目覚めたらしく、一年もしないうちにレギュラーの座を実力で勝ち取り、成田耀子と同じ土俵に上がったからだ。まぁ、正規の試合には「チームワークが乱れるから」と試合には出してもらえなかったようだが。それでも成田耀子が卒業し、真美子がキャプテンになった途端、山野小は結構強くなったという話だ。

そんなバスケの実力十分な真美子なのに、中学の部活は英語部に敗れた途端、何故かアダモちゃん率いる和み美女系の可憐な体操部。理由は、

『はぁ？　バスケ？　ちょっと、雄兄さんが入らないのになんで成田耀子のいるバスケ部入らなきゃならないのよ！　バカバカしい。それにね、バスケはある程度極めたからもういいの。それより体操部よ！　見た？　このレオタード、可愛いくない？　私のナイスなプロポーションにピッタリでしょ？　むしろ私が着ないとレオター

ドが泣くってもんよ。この姿、雄兄さん見たらきっとイチコロだわ！　リンダ、困っちゃう～』

……だそうだ。

英語部で惨敗したにも関わらず、すぐさま立ち直り、次の作戦で雄臣を狙い撃ちするリンダ。脱帽である。

目の前の雄臣は真美子がバスケを辞めた理由をわかっているのか、いないのか。しきりに頭を捻りながら「どうしてだろうな？」などと言っている。呑気なもんだ。ここは大人しくリンダに狙い撃ちされてしまえ。

『どっちにしてもオヤジさんガッカリしてたぜ？　娘両方ともバスケやらないんだもんな』

『……本当、何故でしょうね。非常に残念ですわ。でも真美子は体操部楽しいみたいですよ。一度くらい（レオタードを）見に行ってあげてはいかがですか。（そして体操部に変態扱いされろ）私も何故かバレー（の方）が（何十倍も）楽しいんですの。今度生まれ変わったら、考えてみるわ（きゃないだろっ！）』

ホホホ～

ハハハ～

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

どう見ても不自然に笑い合う私達二人に、またもや黙りこむ、オーディエンス達であった。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神的心中未理解編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

『なんだよ。そんなに怒るなよ、ミチ』

肩を怒らせながら自転車を引く私の背中に、からかうような声を投げる雄臣。肩越しにジロリと睨むと、雄臣は「わかった、わかった、謝るよ」と言ったが、口だけでどう見ても誠意は感じられない。

『……』

もう一生関わりたくないというようにフイっと正面を向くが、雄臣は本性を隠さなくていい人物と二人きりで気を許しているのか、怒る様子もなく再び忍び笑いをこぼした。

『まぁ、誤解が解けて良かったじゃないか。これでミチも少しは学校で過ごしやすくなるだろ？』

『……は、初めっから、彼女がいると言ってくれれば、こんな目に会うこともなかったのでは？』

『それじゃぁ、面白くないだろ』

『お、面白くないって……』

『初めてミチの教室に行った時さ、アイツすんげぇ睨んできたんだよ』

『え？　熱いクソゲーになんて飽きたんだよ？』

『すぐピンときてな』

『スカドンのコーナー？』

『確かに恋は障害がデカイほうが燃えるし、ライバルがいると張り合いが出るよな』

『密かにコーヒーはジョナサンの方がイケるし、フォルクス、ガスト、バーミヤンか迷うよな？』

『こりゃ本腰入れてやるかって思ったんだ』
『コリアンホンコンヤンバルクイナでホモったんだ……って、ちょっと、雄兄さん大丈夫？』
『おい。そのセリフ、そのまま熨斗つけて返すぜ。……そっか、ミチは気付いてないのか。奴も気の毒にな、敵ながら同情するよ』
『は？』
『いや、いいんだ。奴のことは永遠にそっとしといてやれ。ま、気付いてもこれまた一興だけどな』
『一休？』
『……いい加減にしろよ。トンチ効かせてどうすんだよ。どうせなら愛の言葉を聞かせろ。いい加減中二になったんだから、恋愛のスキルをアップさせろよな』
『おっしゃる意味がまったくわかりません』
『いいだろう。スキルアップ作戦その一だ。今日ミチを送ったのは他でもない。例の昔からの約束、まだ無効じゃないってことを言いたかったんだよ』
『……へ？　……はぁっ？！』
『喜べ。オヤジ同士はそのつもりらしい』
『ちょちょちょっと！　まさか、嫁がどうのこうのって話じゃないでしょうね？！　そそそれに雄兄さんの方から冗談じゃないって断ったじゃ……とっくの昔に無効でしょ？！』
『残念ながら、そんな過去の事忘れたよ。それに償いするって言ったろ？　もし嫌なら抵抗しても構わないぜ。その方が達成した時の喜びが倍になるし、なんせ俺は個人の自由と基本的人権を尊重する男だからな』
『……とてもそういう風には見えないんですけど……』
『ま、うかうかしてるうちに東美千子になってたというのがオチだな。東が嫌なら俺が荒井になってもいい。この際名字はどっちでもいいだろ、同じア行だし。そんな大した問題じゃないよな』
『バッバババカなこと言わないでっ！　そそそそんな償い、いらな

い！　じゅじゅじゅ十分大問題でしょ？！　そそそれにさっき彼女いるって！』

『目障りで気に入らないライバルにはな、少し牽制した後甘い情報で油断させておくんだよ。トドメは目一杯高いところまで持ち上げたところを、思いっきり叩きつけた方が威力があるんだ』

『……あのですね……訳わかんないんですけど。わ、私が聞いた質問の答はっ？　付き合ってる彼女はどうするんですかっ？！』

『残念ながら、どんな天才でも未来の事はわからないんだ。それに今付き合ってる彼女は単なるライクだよ、セックス込みのな。ラブじゃない』

『……（何気に最低だな、オイ）』

『誤解するな。ミチの期待に添えるような男になる為に必要な過程なんだ。暫く目を瞑ってくれ。ヤキモチはいくら焼いてもいいけどな、間違っても警察沙汰は勘弁してくれよ』

『……（最低と言うより、ここまできたらもはや外道だな）』

『一緒に中学生活が送れるのもあと１０ケ月か。俺が行く高校のランクまで目一杯成績上げろ。先に行って待っててやるから』

『……私まだ中二になったばかりで、ア・テストもまだなんですが』

『それまでは秘密の清い関係でいこうぜ。いくら親公認って言ってもな、この手の印象は大事だからな』

『……（親公認の前に、私の意見聞けよ）』

『いいか、間違っても俺をミチの中から追い出そうと考えるなよ。そんなことしたら、俺の気に入らないリストに真っ先にミチの名前が載るぜ？　そうすると自動的に学校に居れなくなる。俺の威力、この二ヵ月で十分わかったよな？』

『……その威力、なにか間違ってるような……』

『とにかく、明日のキャンプは気をつけろ。こういうイベントになると浮かれて気が緩むバカがいるからな。桃色ハプニングなんてふざけた伝説もあることだし、用心に越したことはない。ったく、ただでさえミチは中２の身体じゃないっていうのに……。そうだ！

言い忘れるところだった。キャンプに行ったら、大浴場に入るな。あそこは死角があって、外から覗けるんだよ。この目で確かめたから間違いない』

『……私の記憶が正しければ、雄兄さんは確か今年の3月まで他校だった筈では……』

『言っとくけどな、わざわざ見に行ったわけじゃない。俺だってそんなに暇じゃないんだ。たまたま前の学校も去年そこでキャンプしたんだよ、その時確認した。驚くほど丸見えだ』

『見たんスか……』

『バッチリな。今回は生理と言って、個室シャワーにしておけ。おっと、それから夏のプール授業も生理とか理由付けて全部休め、わかったな』

『……普通に無理なんスけど……』

『そこは気合いでなんとかしろよ。いいか、ミチ。良く聞くんだ。人間にはな、時に死ぬ気でやらなきゃならない場面があるんだよ。スキルアップ作戦その二だ、覚えとけ』

『プールごときで、どんな場面ッスか、それ』

『明日は残念ながら、俺は付いて行ってやることができない。だから貞操はガッチリ自分の力で守るんだ。絶対一人で行動するんじゃない、常に誰か友達といろ。間違っても男に愛想振りまくなよ？そうだ！　念の為にコレを渡しておく。痴漢撃退用の警報機だ、紐を引っ張れば音が鳴る。俺だと思って常に肌身離さずもっておけ。本当はスタンガンにしようかと思ったが、そこまで大袈裟にすることはないだろ。……ッチ、油断はキャンプの後にすりゃよかったなぁ。少し早かったけど、まぁいい。この二ヶ月、奴の態度からして、そう急にコロっと態度は変えられないだろからな』

『やっぱり言ってる意味、良く分からないッス』

いい加減日本語でしゃべってくれと言う前に、コンパクトサイズの警報装置を私の手に握らせる雄臣。そこで我が家についたので、

会話は強制的に終了した。

＊＊＊＊＊＊

（……一体、あの男は何をしたいのだろう？）

目的がわからない。とりあえず当面の目標は、あの傲慢で自分勝手な妖怪をなんとかすることなのだが、なんとか出来るほど簡単なレベルじゃないのが厳しいところだ。

（一緒の学年じゃなくて、本当によかった！）

どうせあの男は先に卒業してしまう。そしたら何処へ行こうとこっちの勝手だ。念の為、雄臣が転校できないところを狙えばいい。

（そうなると……やはりここは女子高か！）

冴えている。

さすが普段使いで試練に立ち向かっている、荒井美千子。絶好調だ。さっそく英語に力を入れている女子高を探さねばならない。キャンプから帰ったら大忙しである。

（女子高から女子大に進み、海外へ高跳びだな。いや、この際高校出たらいきなり留学っていうのもアリだろ！　そうなると、私立高校に、留学費用……ウチ、お金大丈夫かな？　こりゃ早めにアプローチ……って、うちの家族にバレないようにしないと！　バレたら完全にアウトだ）

悪いがウチの両親や安西先生、学校の先生も信用できない。

（万が一のことがあれば、『最終防衛ライン』を引こう。あの言葉を使えばいい。……被害が大きくなりそうだから、なるべく使いたくないけど…）

今のところは、ギリギリまで極秘に事を進めることを決心した荒井美千子であった。

――ちなみに。

帰って雄臣の修学旅行の土産を開けてみれば、「家族全員で食べてください」と、八つ橋のお菓子と漬物だった。ここまでは良い。問題は個人的な土産だ。開けた瞬間、私と真美子は文字通り固まった。

真美子には京都のペナント、私には「奈良」、「大仏」と書かれた提灯。

「「……」」

ご丁寧にも二人揃って金閣寺のミニチュア模型がオプションでついていた。

どうみてもいやがらせにしか思えない私は、普通の神経だと思う。それとも、性根が腐ってるのだろうか。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神的心中未理解編～（後書き）

「スカドンの奇人変人コーナー」を知っていますか？知っていたら、同志ですね、フフフ。ちなみに「ガスト」はまだこの頃には世に出てなかったかも。提灯のネタは創りました。本当にあるかどうかは不明です。でもありそう。奈良、大仏という字がセットの提灯を見かけた方は、ご一報ください。m（＿＿）m

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？

「ふわわわわぁぁぁ～」

大きな欠伸が出た。

オマケに涙も出る。それもこれも完全に寝不足のせい……と、目の前にある玉ねぎのせいだ。

（あ～あ、対策練ってたら、寝るの夜中になっちゃったからな）

楽しくもないのだが、せっかくのキャンプだというのに、すべて雄臣（バケモノ）のせいである。……まったく、ろくな男じゃない。いやその前に人間じゃなかった。この場合「ろくな妖怪じゃない」が正しい。

「それにしても……」

私の前には野菜がてんこ盛りに置いてあった。

それもこれもキャンプの自主炊事・カレー作りのためなのだが、私の班のメンバーが一人もいないのだ。

私以外は、何故か全員釜戸の準備と飯盒焚きに行ってしまい、カレーの具材を切る人が私以外誰もいなかった。しかもかなり時間が経ってるというのに、全然調理場に帰ってきやしない。どうでもいいが、ついでに肉の量が考えられないくらい少ない……。

（くそぉ……絶対、尾島（あのバカ）のせいだ！　縄跳び大会で１位になったのはテメェ一人だけの力じゃないくせに！）

キャンプの目玉商品……じゃなくて、メインイベントその１である「クラス対抗大縄跳び大会」。

男子の部は圧倒的に１組の勝利で終わった。

大縄を回し、一人ずつ縄の中に入り、全員入った時点で引っかからずに飛んだ回数を競う。三回勝負で合計数が多いクラスが勝ちと

言う、平凡なルールだ。1組の大縄の回し手を後藤君と佐藤伸君が担当し、縄に入る先頭は尾島だった。この場合、最初に入る奴が一番キツイ。全員が入るまでずっと飛ばないといけないからだ。しかも回し手に近いから飛ぶ縄の高さが上がるし。けど尾島は息が上がった様子もなく、平然とした顔で飛んでいた。その勇ましい雄姿に女生徒達から黄色い声援が上がる。原口美恵と成田耀子を中心に。

一方女子は可もなく不可もなく……五位という順位に落ち着いた。今回私は積極的に回し手に立候補した。これが結構キツいのだが、それをも凌ぐ重要な理由が二つあったからだ。

一つは胸が揺れるから。

「なにをふざけたことを……」とお怒りになる方がいらっしゃるかもしれないが、胸が大きい十代前半の人にとっては死活問題である。決して自慢などではない。全校生徒が見てる前で、胸を揺らしながら飛ぶのは拷問以外なにものでもない。

実はこの件に関する「御指導」が、意外な人物から意外な形でやってきた。今朝、早朝6時と言う迷惑な時間にも関わらず、一本の電話が我が家に鳴り響く。

『……はい？』

『俺だ』

『……どちらの俺様でしょう……』

『時間がないから手短に言う。昨日確認し忘れた。今日の縄跳び大会、ミチのクラスの大縄の回し手はだれだ？』

『……えーと、後藤君と佐藤君？』

『あのな、野郎の方はどうでもいいだろ。女子の方だよ』

『……鈴木さんと私』

『なんだよ、スナック菓子の名前が揃って回し手かよ。まぁいい。取り越し苦労だったみたいだな。回し手じゃなかったら、どんな手を使っても回し手になるよう忠告しようかと思ったんだ。まだそっ

ちの方がマシだ。なんせバストの揺れが少ない』

『……』

『いいか、念の為サラシを巻いていけ。サラシがなけりゃ、ガッチリスポーツタイプのブラだ。ほら、あれ、ベージュの色気が無いヤツがあったろ。それをつけていけ、いいな？　間違っても薄くて可愛いピンクのレースのブラなんかしていくなよ！』

チン

返事をする前にそっと受話器を置いた。

（……変態め、いつの間に……！）

電話口で怒りがこみ上げたが、ここは自分の為でもあるので、大人しく従った。お陰で、胸の件はバッチリだった。この電話がくるまで、「キャンプだし、誰に見られるかわからないし」とフラレ……じゃなく、浮かれ気分でロックンロールな勢いで、生地が薄めの可愛いピンクのレースが付いているブラをしていたからだ。

あともう一つの理由は、自分のせいで引っかかったら、天敵になにか言われるか、わからなかったから。それでも、あの天敵のグループ達は、

『もっと大きく回してくれればいいのにぃ、そうすればもしかして勝てたかも、ね～』

……と、尾島達率いる男子にわざと聞こえるようにさりげなく文句を言っていた。背の高い私が腕一杯力一杯使って回していたと言うのに。私は今さらなのでサラッと流したが、鈴木さんが気の毒だった。そもそもあの天敵グループは練習の時も全然やる気なんてなかった。理由は、髪のセットが乱れるから、だそうだ。奥住さん達一部が頑張ったけれども、女子の半分がアレでは結果が5位で当然だ

ろう。
　ちなみに女子の試合の結果は、学年で最もスクラムが強い2組が一位となり、女子の部の肉三割を掻っ攫った。しかも男子の一位である運動部粒揃いの1組より遥かに多い数を飛んで。そんな肉食系2組女子一同は草食系2組男子の皆さんから拍手喝采を受けていた。
　2組のリーダーである和子ちゃんと貴子の顔がわざわざ1組の方を向いて、

『あらぁ奥さま～、1組男子の大縄跳び、見ましたぁ？』
『見ましたザマスよ！　なんでも運動部ホープが粒揃いザマスって？　ねぇ？』
『なんだかそのようですわねぇ。でもその割には……フフ、大した実力じゃないようですわぁねぇ？』
『そうザマスねぇ。なんせ……女子に負けてるザマスものぉ～！　オホホホ～』
『あらやだ奥さまったら～あんまり笑うと気の毒でございますわよぉ～』
『そうそう、奥さまっ！　いいことを思いついたザマスわ！　いっそのこと、粒揃いというより、カス揃いと改めたほうが親切ってもんじゃありませんザマスこと？』
『やっだぁ奥さまったらぁ～、1組男子がおかわいそうですわよぉ』
『『オホホホホ～』』

……というような、上から目線且つ鼻で笑っていたとしても、それは勝者の特権というものである。
　お陰で屈辱的な敗北を味わった尾島は、今にも湯気が出そうなほど顔を真っ赤にしながら怒っていた。ま、それも仕方なかろう。人間それぞれ違う形で試練というものはあるのだ。ヒヒヒ。

＊＊＊

私は玉ねぎから包丁を上げ、戦利品らしい薄っぺらく色の悪い肉を摘んで持ち上げた。
（……ま、私はカレーの肉が好きじゃないから少なくていいけど。どっちかというと、肉は別添えがベストよね。衣サクサクのカツを添えるのが王道ってもんよ。しかもこの肉、思いっきりまずそうだしな……）
まな板の上に置いて、勢いよくダンッと切る。
「なぁ、これどうするんだ？」
「やだぁ、切りすぎちゃったぁ～」
隣の班から声が聞こえてきた。
「……」
他の班は和気あいあいとしながら、みんなで手分けしてカレー作りをしているというのに。
ベタな嫌がらせに溜息が出た。
（やることが子供（ガキ）なんだよね。まぁしょうがないか、メンバー全員尾島や原口の手下だしな）
……しかし。
いくら強がりを言ったところで、寂しさは拭えなかった。さすがにこの班ごとのカレー作りの時は、違う班の奥住さんや光岡さんのところには行けないので、このまま頑張るしかない。
（……上等だよ。去年の暮れから料理の腕を上げた私の包丁さばきを唸らせてやろうじゃないのさ！！）
忘れもしない去年の暮れ――某お好み焼き屋の某不良店員にコキ使われた私。
お菓子作りはもとより興味があったが、キャベツの千切り極意の

厳しい洗礼を受けてから、料理にも目覚めた。
（まぁ、単なる悔しかっただけなんだけど）
キッカケはなんであれ、私はあの時から包丁を持つ快感を覚え、自分の手で食材を自由自在に切り刻む……じゃなかった、思った通りの形に変化するのがすっかり楽しくなってしまった。今では料理も定番なものならある程度できるようになった。中二に上がってから、勉強に打ち込む他に自分の弁当も作りも始め、料理の腕を上げるのに躍起になっている荒井美千子。
（高校出たら、一人暮らしじゃい……絶対あの街を出てやるけんのぉっ！）
私の心は既に未来へ飛んでいた。壮大な夢を胸に秘め、叶えるまでは絶対故郷に帰らんと後にする……というより、天敵や妖怪のいる地元に二度と戻ってくるもんかと旅立つ勇者の心境だ。それには一人暮らしの為の生活能力がなければならない。家事炊事はどうしても必須になってくる。
そんなことを考えながら超高速でタマネギを切っていたら、涙が出てきた。

「うっうっうっ……ズズズ」

玉ねぎが目にしみて涙が出てくるついでに、鼻水が出てきた。
さすがに材料に入るのはマズイと思った私はポケットからハンカチを出して、目と鼻水を拭った。ついでに思いっきり鼻をかみたいが、乙女がこんなところで醜態をさらすわけにはいかぬ。
（……う～クソ、もどかしいなぁ！　チーンとティッシュで鼻かみたい！！）
グズグズと鼻にいつまでもハンカチを当ててたら、周りからヒソヒソと話声が聞こえた。何気にそっちの声の方を向けると、隣の班の子と目があった。その子はなんとも気まずそうに視線を逸らす。

「？」

違う方向を見ると、目があったその子も同じような仕草をした。訳がわからずぐるっと辺りを見回したら、全員視線を逸らしたり、気の毒そうな眼をしていた。

「……」

私は下を向いて、黙ってその憐みの視線を耐えた。

おそらく周囲は私が泣いていると思ったのだろう。ハッキリ言ってこの手の類は、一番性質が悪いと思う。「気の毒だけど、それを助ける力がない」というやつだ。まだ尾島や原口、成田耀子のわかりやすい行動の方が救われる。……どちらにしても決して気分のいいものではないが。

私はそっと溜息を吐いた。

（いかんいかん、外国へいけば最初はもっと孤独感が襲ってくる筈だ……それに慣れる為の修行修行。言葉が通じるだけマシ。周りは全て埴輪だと思えばいいんだ）

一心不乱に野菜を切った。だいいち料理は一人でやる方が捗るのだと思いながら。あっと言う間に切り揃えられ、ボールに山盛りになる野菜達。最後のジャガイモにとりかかろうとしたら、後ろから声かけられた。

「……あれ、他の連中は？」

低い強張った声にハッとまな板から顔を上げ後ろを見ると、星野君が立っていた。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

「……ごめん。他の連中、もうとっくに来てるかと思ったのに」

星野君は器用にジャガイモの皮を剥いた。

しかもピーラーじゃなく包丁で。おまけに薄く剥かれていて、まるで板前さんのようだ。

（しかも私より上手い……）

「……あ、い、いいのよ。ほら、料理って、一人でやったほうが早いでしょ？　それにもう終わるし……。そ、それより星野君、とっても上手だ……ね……」

「家や『まるやき』で手伝わされてる。だから自然と上手くなった。そういう荒井さんこそ上手い、これなら他の班に追いつける。去年の暮れに見た時はあんまり上手じゃなかったけど、練習した？」

私はウっと言葉を詰まらせた。

どうしようかと思ったが、相手が穏やかな星野君であることと、去年その現場に一緒にいたことを思い出し、小さく頷きながら思い切って理由を言ってみた。

「……あ、あの、内緒、ね？　あの時、桂君のお兄さんに『下手くそ』って言われたのが……悔しくって……」

そっと小声でささやくように言うと、以外にも星野君は声を上げて笑った。つぶらな瞳がなくなり、目尻にくっきりと皺ができている。その姿を見て少しギョッとしてしまったが、心に温かいものが広がった。その目尻の皺を見て、不覚にもドキっとしてしまった。

（星野君も目尻に皺ができるのか……。私って、目尻に皺ができる

人に、弱いんだなぁ）

　完全に目尻皺フェチだ。そう言えば田宮君も目尻に素敵な皺ができる。……その特徴に引かれる理由は一つしかない、「東小父さん」の影響だ。

（その小父さんと同じ皺ができる雄臣にはどうしてトキメかないんだろう？　やっぱ人柄の問題よね）

「荒井さんって、見かけによらず負けず嫌いなんだな。よっぽど練習した？」

「……あ、う……ん。……かなり」

「ハハ！　もしかして、いつも持ってくるあのうまそうな弁当って、荒井さん、自分で作ってる？」

「え？！　……あ、い、一応。も、もちろん前日の残りモノとかもあるけど」

　どうして弁当の中身を知ってるのか？　と聞こうとした。何故なら私はいつも昼食時になると、奥住さんや光岡さんと一緒に２組へ行くからだ。たまに貴子達や幸子女史達が来て１組で食べる時があるが、ほぼ間違いなく教室内が険悪なムードになるので滅多にないし、たぶん二年になってから５回も満たないと思う。

「たまに貴子達が昼飯の時に１組に来ると、美味しそうだって騒いでるから目立つ。貴子達がおかずの取り合いしてただろ？」

「……」

　私は後ろめたくて、星野君の澄んだつぶらな瞳から目を逸らしてしまった。

　和子ちゃん達が私のお弁当の件であれだけ騒いだのは訳がある。あまりにも私の評判が落ちていたので、なんとかその汚名を挽回しようと、

『荒井さんって、お弁当自分で作ってるのね！　スゴーイ！　しかもおいしそうぉ～』

などという「荒井美千子はデキル女」をアピールする演技を披露してくれたのだ。ここで断わっておくが、決して嘘を言ってる訳ではない。弁当も自分で作ってるし。ただ、一緒に食べているチィちゃんの弁当の方が、ハッキリ言って豪華でカラフルだ。

この星野君の発言で、和子ちゃん達の作戦は見事「大成功！！」なのが証明された。しかし、星野君みたいな善良な市民を罠に嵌めるこの作戦、きっと罰が当たる。１組でお昼を食べるのを止めようと、この時私は決心した。

……が。

（……けどそうすると……チィちゃんの件が……ハァ）

そうなのだ。もうひとつ、雄臣に続いてその厄介な問題を抱えているのが辛い。

私は知らず知らずのうちに星野君の言葉を聞かずそっと溜息をついていたようだ。星野君の「荒井さん！」の声で我に返った。

「っ？！　ごごごめん！　なに？」

「……ジャガイモ、千切りになってる」

「え？　……ああっ！　ヒ、ヒエっ！！」

「『ヒエっ』って……。しかも、超薄いし」

星野君私が話を聞いていなかったにも関わらず、ペラペラのスライスしたジャガイモを摘みあげながらまた笑った。私はさらに顔が熱くなり、もうなにも言葉が出無かった。

（は、恥ずかしい……。確か『体育館裏説教』の時も裏番に言った

気がする……って、あ、あれ？）
　ジャガイモを摘んでいる星野君の腕に擦り傷があって血が滲んでた。それも結構大きい。

「あ、あの……」
「ん？」
「腕が」
「え？　……ああ、これさっき釜戸を作ってるときに……」

　私はポケットの中に絆創膏が入っているのを思い出した。ラッキーアイテムと聞いて以来、いつも肌身離さず持っている。包丁を置いてポケットを探ると案の定あった。

「星野君」
「え？」
「こ、これ、よかったら、使って」
「……」
「ふ、普通のだから。キャラクターじゃないから」

そう言ってみんなに見えないようにそっと渡すと、星野君は絆創膏をジッと見た後、「……ありがとう」と言って受け取った。

「……そういえば、あのお礼もまだだった」
「え？」
「かなり前だけど。『マラソン大会のお礼』、確かに蝶子からもらった。ありがとう」
「……え？　ええっ？！　あ、あああれね……」
「お礼が遅くなって、ゴメン」
「そそそんなの、いいよっ」
「……それにしても、よく俺が酢昆布好きなの、わかったな」

「ああ……あれは、貴子に、ちょっと……その……」
「そっか。……パン上手かった。それと、いっぱい小さいパンが入ってた。あれって……」
「あ、御兄弟が多いって聞いたから……も、もしかして、迷惑、だった?」
「いや、実を言うと小さいのはほとんど下に上げたんだ。というより取られた」
「そ、そう。よかった」

私は安堵のため息を漏らし、迷惑じゃなかったことにホッと胸を撫で下ろした。もう一度律儀に小さくお礼を言ってくれた星野君の心遣いが嬉しくて、「こちらこそ本当に助かったから」と笑顔で返すと、星野君は「あんなのたいしたことない」とパッと俯いてジャガイモを切り始めた。……私もなんとなく恥ずかしくなり、慌ててジャガイモ切りに専念した。
(……同じ班に星野君がいて、本当に良かった。カレーの方もなんとか間に合いそうだし)
いつの間にか野菜が切り終わっていた。さっさと作ってしまおうと野菜のボールを持とうとしたら、星野君が「俺が持つ」と言ってくれた。

「俺が運ぶから、荒井さんは油を隣から借りて来て」

星野君は軽々と野菜が入ったボールを持ちながら言うと、ササッと行ってしまった。私はその後ろ姿に向かって慌てて頷いて、隣の班の方へ振り返った。

そうすると、隣の班の人たちが慌てて自分たちの油をさらに奥の班に渡してしまったのだ。

「！！」

（ちょ、ちょっと……）

「……」

さすがにこういう行動は堪えた。

私は一瞬どうしようかと固まったが、ここでこのままボーっとするわけにはいかなかった。コンロのところで星野君も待っている。このままジッとしていても何も解決しない。ヨシ！と気合入れて、油を渡された班のところに向かった。

しかし、その班は――。

そこは、どういうわけか厄介な天敵揃いの班だった。平等にということでクジ引きで決めたと言うのに、どう見ても裏工作しただろ？　というメンバーばかりだった。逆にそのメンバーの中に星野君が入っていなかったのが不思議なくらいだ。

（……埴輪、埴輪、目の前にいるのは全部埴輪。あの鬼神修羅よりはマシ。昨日の修羅場を、あの時の勢いを思いだすんだ私！）

自分に言い聞かせながら、油が置いてある班の調理場に近づいた。

ヒュッと息を吸い込む。

「あ、あの……」

やっとの思いで出した声。蚊の泣くような声で話し掛けると、全員の動きがピタリと止まった。

「……」

こちらを振り返る無数の目。しかも……どう見たって温かい親しみのこもった視線ではない。むしろ、冷やかで感情が籠ってない。

――思い出してしまった。そして、あらためて思い知らされてしまった。

「嫌い」「気に入らない」という感情を直に受けるということが、とても辛くて悲しいということを。

（……同じだ。目の前にいる連中は、あの人と同じなんだ……）

こんな時に最悪な事実に気付いてしまった。

過去の辛かった時期のさまざまな想い出が…少しずつ闇の底から浮上する。

私は足が震えて、その後一言も言葉が出てこなかった。

彼らの友人である星野君とついさっきまで朗らかに会話していた分だけ、余計に辛さが身に染みた。しかも相手は無言を決め込んだまま。後藤君や諏訪君、原口美恵や成田耀子も。彼らの親玉である尾島などは、ソッポを向いたまま、こっちにすら顔を向けていない。

そして、田宮君も。

まさか彼にまでそんな態度をとられるとは思わなかった。

いや、薄々は気付いていた。ただ「勘違いかもしれない」と僅かな希望に縋りついていたのだ。しかし、今この瞬間、その希望も打ち砕かれてしまった。

（……もう、ダメだ……）

黙ったまま動かないでいると、尾島がニンジンを乱暴にまな板の上に置いた。その音で、情けないほどブルッと身体が震えた。

その音を合図に、尾島の班の人達はまるで私の存在が見えないかのように、それぞれの作業をし出した。「早くそっち切れよ」とか「こんな感じでどう～？」とか呑気に会話し始めたのだ。

（……文句を言われ方が、昨日の方が、まだマシだ……）

何か言われれば、それに対抗できる。しかし、なにも言われなければ、無視されれば、対抗する術がない。ただの独り善がり。独り相撲だ。

目の前が段々とかすみ、ボヤけてきたので咄嗟に俯いた。

目から零れ落ちないように、必死で涙を堪えた。

（……もう、いい。もう、たくさんだ）

私はやっとの思いで足を動かした。尾島の班のさらに奥にある、

奥住さんや光岡さんの班に借りればいいじゃないかと思いついたからだ。勇敢にも挑んだ自分の行動に激しく後悔しながら。

そんな私を止めたのは、女性にしてはハスキーな声だった。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

私を止めたのは、女性にしてはハスキーな声だった。
その声は容姿を裏切らない程不気味で低かったが、ハッキリと調理場に響き渡る。

「モモタさん」

一瞬何を言われているかわからなかった。

「『モモタさん』、これ使って？　うちの班終わったから」

ハスキーボイスの主であるブキミちゃん……じゃない、「伏見かおり」は、私の前に立ちはだかり、長い前髪とメガネ越しに私を見上げた。ギラっと歯列矯正を光らせながら滅多に見せない笑顔で、私の目の前に油を差し出した。

「……え、え？」
「だから使っていいわ、『モモタさん』」
「あ、あの……」
「うちの班もう使わないから、『モモタさん』」

ブキミちゃんはまだニヤリと笑ったままだ。

「……」

ショックだった。

自分に存在感がないことは重々承知していたが、まさか名前を間違えられるとは思わなかったから。

「ほら、早くしないとカレー作り間に合わないわ、『モモタさん』」

「……あ、あの……伏見さん、私……『モモタ』じゃ……ないんだけど……」

やっとの思いで絞り出すように声を出したが、……これを自分で言うのはあまりに辛かった。

しかも周囲から絶対笑われると思ったが、この先違う名字のまま覚えられるのはそれ以上にキツイ。それも「ブキミちゃん」に。

（い、いくらなんでも、酷いよ……私、モモタじゃな、い……って……モモ……タ？）

「……」

――モモタ。

それは、足元から徐々に冷気が上ってくる感覚。まるで流氷の上に立ってるような過酷さ。その冷気は頭の天辺や指先、爪にまで浸透した。

この恐ろしい事態を切り裂いたのは、成田耀子の笑い声だった。

他の班からも僅かに笑いが漏れている。

「やっだぁ、伏見さん！　酷くない？　名前、違うわよぉ～。『モモタさん』なんて、冗談キッツぅ～」

成田耀子がわざわざブキミちゃんの肩をポンと叩くと、彼女は大胆にも汚れを落とすように、肩に置かれた成田耀子の手を振り払った。ニヤリとした笑いを引っ込め、ジロッと睨みながら。

「肉触った手で気安く触らないでちょうだい。普通洗ってから触るのが礼儀じゃなくて？　非常識よ」

ブキミちゃんの言葉に、周囲の笑いが止み、シーンとする調理場。

「なっ？！　……ちょ、ちょっと、失礼ね！　ねぇねぇ、酷くない？　この……ひ……と」

成田耀子の険しい声が段々と萎んでいくのがわかる。

なぜか。答えは簡単だ。

尾島を取り巻く一部の連中が、口をつぐんだまま顔面蒼白だったからだ。異様な空気にさすがの成田耀子も察したらしい。

「あれ？　何やってるんだ？　全員手ぇ止まってるぞ。……って、荒井どうしたの？」

その声は、どうやら釜戸から戻ってきたらしい、尾島の班である学年一のモテ男・佐藤伸君だった。

彼から声を掛けられたのは、一緒のクラスになってから初めてじゃなかろうか。しかも、佐藤君はこの空気にいまだに気付いていない。佐藤君が現れたことにより、成田耀子は微妙な空気から息を吹き返し、佐藤君に甘い口調で愚痴を言った。

「ね、ねぇ聞いてぇ、佐藤君！　伏見さんったら、ひどいのよぉ！　荒井さんのこと『モモタさん』なんていうのよっ！　……そうよ、伏見さんこそ非常識じゃない！　荒井さんのことを『モモタさん』って、名前間違えるなんてさ！　大体『モモタさん』なんて人、このクラスにいないじゃん、ねぇ？」

事情を知らないのか、成田耀子は何度も何度もＮＧワードを繰り返す。

「は？　名前を？　……伏見、いくらなんでもクラスメートの名前を間違えるなんて失礼だろ。二ヶ月も経ってるんだぜ？　大丈夫、荒井？　それよりなんかうちの班に用事があったんだろ？」

「……あの……油を、借りようと……」

私は誰にも目を合わせないように俯いたまま震えた声で答えると、佐藤君は「なんだ、持ってけよ。いいよな？」と班の人に聞いた。その問いに尾島は答えない。もちろん原口も後藤も諏訪も田宮君も。答えたのは成田耀子だった。

「え～伏見さんのところが貸してくれるって言うからそっち使ってもらおうよ。私たちも使うから、荒井さん、悪いけどごめんねぇ～？」

成田耀子が全然悪く思ってない口調で言った。

「……あらやだわ、そうでした。『モモタさん』じゃなかったわ、『荒井さん』でした。ごめんなさい。『荒井さん』、ほら、油持って行って？」

「……」

今まで黙っていたブキミちゃんが、学年一モテ男の佐藤君に注意されたにも関わらず、さらにニヤけた顔で私に油を押し付けた。その顔は、成田耀子同様、どうみても反省している様子はない。

その時――。

ダンっ！！　と派手な音が調理場に響き渡った。

原口美恵の小さい悲鳴が上がった後、デカイくせに後藤が不安そうに「……おい、尾島」と声をかける。

尾島は包丁を振り下ろし、ニンジンをまな板の上に串刺しにしていた。

その姿は地獄か天国か、ジャッジを下す閻魔大王の姿だ。そして、問答無用で今すぐにでもブキミちゃんを冥府へ引きづり込もうと、鋭い牙と爪を剥いていた。

（……ママママズイだろ、こりゃ……）

一方ブキミちゃんは余裕の顔だった。

尾島のジャッジを真正面から迎え討ち、歯列矯正の歯をいまだ隠さず、滅多にお目にかかれない薄ら笑いを惜しげもなく披露している。

（？　……もももしかして、この人……！）

まさか？！　と思った。しかし、私の考えを裏付ける発言が、とうとう目の前のブキミちゃんから発せられる。

「……そうですわね、佐藤君の言うとおり、『モモタさん』なんて、

失礼だったわ。やだわ、ワタクシ『荒井さん』が昔のクラスメートの『モモタさん』とすっごい似てたから、うっかり間違えてしまいました！　……ねぇ？」

ブキミちゃんは私の方は一切見ずに、尾島や原口の方を見てニヤニヤしながらハッキリと言った。しかもたっぷりと時間をかけて。その後私の方を向いて、キューティクルが素晴らしいオカッパをサラッと揺らしながら「ごめんなさい」とニヤリと一笑しメガネをクイっと上げる、ブキミちゃん。その後「フッ、フフフ……」と不気味な笑いを残して、自分の班へ戻ってしまった。

＊＊＊

「……なんだ、アイツ？　訳わかんねぇな？　あ、おい、尾島も危ねぇから、包丁まな板から抜けよ！　荒井、ごめんな？　気にするなよ。俺、去年一緒だったからわかるんだけど、伏見ってちょっと変わってるんだ。けど悪い奴じゃないからさ」

佐藤君はいまだにこの雰囲気に気付かず、穏やかな声で励ましてくれた。

荒れ果てた大地に降り注ぐ、久し振りに見た佐藤君の爽快スマイル。

威力が絶大すぎる彼の笑顔は、あまりにも眩しすぎて直視できない。私の身体は嬉しさのあまり、一気に温泉に浸かり解放されたようにフニャフニャになってしまった。

（……佐藤君はやっぱり佐藤君だったんだ。変わってない、頼れるアニキだ！　……若干、ピントがずれてるけど）

今まで私は、成田耀子という障壁のせいで佐藤君に自分の存在を目に入れてもらえないと、人のせいばかりにしていた。考えてみれば、佐藤君とは同じクラスで息を吸っているというだけで、委員や

部活などの接点が一つもなかった。大体男子とは用がなければ会話を交わすなんてことはまずない。それは一年の時も同じだった筈だ。……一人を除いて。それなのに私は、恋人でもあるまいし……「一言もしゃべってくれない」と僻んでばかりで、相手ばかりを責めていたのだ。

（……そうだ。佐藤君はいつだって普通だった。それを私ったら、どこまで根性が曲がってるんだろう……）

知らず知らずのうちに責めていた佐藤君に申し訳なくて、自分がとても恥ずかしくなった。今の心境は、穴があったら入りたい、この一言に尽きる。

それに、ブキミちゃん。

あんなことを突然言った意図はわからないが、彼女は大野小で、もしかして尾島と一緒のクラスだったのかもしれない。最初は名前を間違えられてとてもショックだったが、結果的には助けられた。……でも。

助けられたのだが、何故かスッキリしない。心の奥底にモヤモヤが残っている感じだ。それは決してブキミちゃんに対してではないのだが、では一体何に対してだと聞かれれば説明できないものだった。

（本当、いったい何なんだろう？　……でも、あとで伏見さんにはお礼は言った方がいいよね）

私はブキミちゃんのいる班を見た。彼女の隣には奥住さんと光岡さんがいて、３人でなにか話している。

意外な味方かどうかわからないが、奥住さんと光岡さん以外に助けてくれる人物が出現し、少しだけヤル気と元気が出てきた。不穏な噂はあるし、まだどんな人か謎で、このモヤモヤが解消されていないけれども。

（そうよ、私自身も実際囁かれてる噂とはかけ離れてるし。真実は

自分の目で確かめないとわからないよね。今度、勉強のことでも聞いてみようかな）

私は隣から刺さる成田耀子の厳しい視線にも負けず、佐藤君にだけ頭を下げた。実際、彼の顔を見てどももりもせずにお礼を言ったら、「大したこと、してねーし」と笑顔で言ってくれた。

単純にもすっかり立ち直った私は、星野君が待つ自分の炊事場へ戻ろうとした時、未だに固まったまま荒れた大地に立っている尾島達の姿を目に入れてしまった。

少し前に心を埋め尽くした絶望に近い感情、モヤモヤした訳のわからない感情が湧きあがった。

「……」

私はこの時決心した。絶対尾島達と関わらないことを。

相手も無視なら、こっちも無視だ。例え何を言われても、完全に無視だ。それに限る。それにこのキャンプが終われば、もうすぐ夏休み。クラス内で協力しなければならない行事は二学期の文化祭まで皆無だ、その文化祭だって内容による。その他の体育祭や合唱コンクール、球技大会は委員になりさえしなければ、大したことない。

（三年になれば、今より最悪のクラスになることは絶対にあり得ない。私は今、試練の中にいるんだ）

早く三年に、そして卒業がくればいい……そう思いながら私は、尾島の姿を目から追い出すように瞳を固く閉じた。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（後書き）

ブキミちゃんこと「伏見かおり」、これからもどうぞよろしくお願いします！

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

私はこの時、後悔をしていた。雄臣の忠告をすっかり忘れていたことを。

……確か、「一人で行動するんじゃない。常に誰か友達といろ」と言っていた。まだ２４時間経っていないというのに、どうして私はこんな大事な言葉を忘れていたのか。

私はついさっき、決心をしたばかりだった。本気で尾島達と関わるのを止めることを。

……数時間前、カレー作りをしている最中のことだ。２４時間どころか、半日も過ぎていないというのに、どうして私はこんな危険な事態に巻き込まれているのか。

声を出したくても出せない私の前で、懐中電灯の僅かな明りの中で口に人差し指を当てて静かにしろという仕草をするのは、数名の男子達。そして、私の腕や身体を抑え込み、口を塞ぐ物騒な男は、その男子達のボス猿である――。

『静かにしろ、チュウ！　大声を出したらどうなるか……わかってるんだろうなっ？！』

尾島の鋭い声が、耳元で囁かれた。

＊＊＊＊＊＊＊

話は少し前に遡る。

不穏な雰囲気で始まった冒頭の直前まで、私は穏やかな……でもなかったが、普通にキャンプを過ごしていた。

「荒井ちゃん、私達大浴場に行ってくるね！」

洗面セットを抱えながら、満面な笑みで大部屋を出る奥住さんと光岡さん。

遠足のメインイベントその二、三である、カレー作りとキャンプファイヤーも終わり、生徒達は未だ興奮冷めやらぬままだ。この後のガールズトークに備え、大浴場へ向かって行った、我が1組女子。私は引き攣った笑いを湛え、「い、いってらっしゃい……」と弱弱しく手を振った。

（……ごめん、2人とも！　その大浴場、死角から驚くほど丸見えらしいけど、うちのクラスはお風呂の順番が早いから、きっと大丈夫！　……だと思う。男子がたどり着く前に上がれるよ！　……多分）

心の中で精一杯土下座しながら、大部屋で一人自分の洗面セットを抱え、彼女らの後ろ姿に向かってエールを送った。

「さて、私も行こうかな」

私は一人大部屋を出て、大浴場とは反対側の廊下を歩いた。

これから向かう個室シャワーは、団体用の宿泊施設の中ではなくて少し離れたバンガローやテントが密集しているところにあった。もちろんこれを使うのは女子だけだ。言わずと知れた女性特有の事情の為であって、こちらに男子がくることはまずない。

妖怪からの垂れ込み情報により、今回は個室シャワーを使うこと

にした私。
　別にインチキをしたわけではない。実際本当に生理だった。……ほとんど終わりかけだったが。この際そんなことは問題じゃない。なんせ自分の身体がかかっているのだ。こんな胸だけ発達してあとは大したことない身体を見たって仕方がないとは思うが、一応私だって女の子である。やっぱり全裸を見られるのは抵抗があった。他にも生理の人がいますように！　……と心から願ったが、我が1組では、個室シャワーを使う希望者がなぜか私一人。成田耀子や原口美恵らはこっちを見てヒソヒソ言っていたが、無視した。別に彼女らの全裸が見られようが、見られまいが、私にはどうでも良かったからだ。

＊＊＊

「……一人で行かないといけないけど、しょうがないよね」

　私は懐中電灯を付けながら一人寂しく呟いた。しかも大浴場は温泉らしいのだが、全裸ウォッチングの餌食にはなりたくない。仕方なく月と星が夜空に瞬く満天の頭上を眺め、ロマンチックな気分に浸ろうとした。
……が、ロマンチック以前に。
（……暗い、それにしても暗過ぎる……）
　宿泊施設玄関を背にして裏手の方にまわり、静かに歩き出す。施設がある周辺はかろうじて明るかったが、少しでも離れてしまうと真っ暗闇だった。バンガローに続く細い道に明かりはなく、手元にある懐中電灯と遠くに見えるバンガローがある辺りの明かりが頼りだ。
（ううう、怖いよ）
　ガタガタ震えながら、鬱蒼とした茂みの間に続く細い道を恐る恐る進んだ。

（……つーか、なんで今まで女子風呂が丸見えという事実がバレなかったのか、そっちのほうが怖いよ。どんだけ男子の間で秘密厳守なんだ！）

女子風呂の外に覗きスポットがあるらしい、今回のキャンプ宿泊地。だが実際は、男子と女子の寝泊りする棟が別という、思春期対策を施した施設だった。オマケに男子の棟と女子の棟の間にたちはだかる、「広くて暗いグラウンド」という小憎らしい障害物付き。その結果、年頃の男女がお泊りと言うアダルティーなシチュエーションで「ノルマンディー上陸作戦」……ではなく、「桃色ハプニング大作戦」を遂行しようものなら、そのグラウンドを突破しなければならなかった。

しかもこれが只のグラウンドではない。周囲に明かりはおろか、敵襲対策の為にグラウンドの周囲を、今年二年の男子保体、且つ１０組の担任に着任した箕輪（ヒトラー）を筆頭としたナチスドイツ軍が、交代制でウロウロしている超厄介な代物なのだ。

毎年この包囲網を突破するのが連合軍である男子生徒達の、その奇襲を迎え撃つのがナチスドイツ軍である教師達の、それぞれの腕の見せ所となっており、この攻防戦が名物な二年の遠足キャンプ。

見つかれば一晩じゅう正座の刑に処せられた上、反省文を書かせられる刑が待ち構えているのに、なぜそんな危ない橋を渡ってまで女子の元に男子がやってくるのか？

それは、この世に人が誕生した時から繰り返される歴史、男と女の身体に深く刻み込まれた本能……という高等な理由かどうかはわからないが、少なくとも、映像や紙面ではなく目の前で「生全裸」がタダで拝める至福の時間が待ち構えているとなれば、そりゃ別ってもんだろう。

告白が成就する伝説か肉三割増しか……精神的な恋愛面に関しては、女子生徒の方の成長度に軍配があがるが、肉体的な欲望面に関

しては、俄然男子生徒の成長度に軍配があがるのがこの年頃の特徴である。

（つーか、アホ過ぎるだろ。でもそんなすぐには、ねぇ？　いくらなんでも来れないよ、ねぇ？）

たとえ女子の大浴場に覗きスポットがあろうとも、まずグラウンドを突破しなければそれも無理なのだ。時間帯からして、まず我がクラスはセーフであろう。……後半のクラスは怪しいが。

これでも私は全女生徒の操を守るため、事前に先生に報告しようと思ったのだ。だが、事実かどうかわからないし、宿泊施設にケチつけるようで、とても実名で進言する勇気はなかった。誰から聞いた？　と詰問されても困るし。もしガセだった場合恥ずかしい。ただ私にできることは、「一人でも多くの人が生理になりますように」と祈ることと、自分の身の安全を守ることだけだった。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

「あ～さっぱりした」

髪をクリップで止め、オヤジのように手ぬぐいを首に巻き、カレーのような煤のような匂いからやっと解放された私は、石鹸の良い匂いに包まれる心地良さを存分に味わった。個室シャワーは想像通り狭かったが、誰の目も気にせず一人たっぷりと時間をかけてシャワーを浴び、ゆったりとした時間を過ごすことができたから問題なしだ。一晩浴槽に浸かれなかったところで、どうということはない。

個室シャワーの入口に待機していた女子の保体の沖先生に一言挨拶してから、女子の宿泊棟の方へ向かった。私は個室シャワーに来たのが思いのほか遅かったようで、他のクラスはほとんどもう使い終わっていた。

『今年はシャワー使う子、少ないわね』

『……』

沖先生の一言で今年は犠牲者が多いことが判明したが、もうどうしようもない。私は「ハハハ」と笑うしかなかった。

（……それより、早く戻ろう）

一度通ってきた道とはいえ、暗くて薄気味悪いことには間違いない。早歩きで女子の宿泊棟に向かった。それに、２組の和子ちゃんのところへ遊びに行くことになってるのだ。さすがに男女の棟はわかれているので、消灯まで自由行動の間は「他クラスのところへ行っちゃいかん！」とは学校も厳しく言わない。私としては十分すぎるほどの待遇だ。

（やっぱ、和子ちゃん達に昨日のこと、報告しないといけないよね……）

雄臣に彼女がいることが判明した今、まだ傷が浅いうちに告白しておいたほうがいい。それにすぐバレることだし。なんせ三年のバスケ部の連中やあの小リスも現場にいたのだから。

（まったく、厄介な連中だよ。二度とあの公園の傍は通るもんか！ラッキーキーワードに確か……公園が入っていたけど、全然ダメじゃん！）

光岡さんには悪いが、まったくもって当たってない。「湖」も入っていたが、今日の様子からみると完全に大ハズレである。ラッキーどころか、最悪の展開になりそうだった。

（そうだよねぇ、全部が全部占い通りになるわけじゃない。……やっぱ、『ラピス』でも買わないとダメなのかなぁ？）

雑誌の合間合間で登場する、幸運アップのアイテムが載っている広告達。その中でひと際多い宣伝数と読者の喜びの声が大袈裟な『ラピス』の購入を一瞬考えたが、辞めた。そんなんで幸運が舞い降りれば、人間苦労はしない。

全てを悟った身体に夜風が身に染みた。

「……ちょっと、寒いなぁ」

さっきまで火照った身体ははいつの間にか冷えていた。6月上旬といえども、夜は冷える。お風呂上りに薄手の部屋着のままでは風邪をひきそうだ。せっかく身体を洗ったのに…この上にカレーの匂いがしみ込んだままのジャージを着るには忍びないが、一旦立ち止まり、懐中電灯で照らしながら袋からジャージを取りだした。案の定カレーと煤の匂いが満載だった。その匂いを嗅いだ時、カレー作りのことをふと思い出した。

ブキミちゃんから油を借りた私は、さっさと炊事場に戻ろう振り返ると、そこには頭一つ大きい険しい顔の星野君が仁王立ちしており、心臓が飛び出しそうになった。

『油ごときでこんなに時間かけてんじゃねぇ！』

……などというお怒りのご様子だったのかわからないが、ともかく私は本気で焦り、なるべく明るい調子で『ああ油借りたよ？』と星野君に引き攣りスマイルを見せた。それよりも普段穏やかな星野君の顔をこんなに気難しい顔にする私の行動って一体……などと落ち込んでしまった。あんな恥ずかしくて情けない場面を見られるとは計算外だったが、そこはどんな辛い時も起き上がってきた不屈の精神を目一杯発揮し、精一杯気分を持ち上げるだけ持ち上げ、カレー作りに勤しんだ。

尾島はもうどうでもいいし、田宮君のことも仕方がないと諦めた。けれども全員平等の学年一モテ男子・佐藤君や、ましてや穏やかな星野君にまで嫌われたくない。嫌われたらそれこそ再起不能だ。

その努力の甲斐あってか、カレー作りをしながら他愛ない話をしているうちに、星野君の顔もいつもどおりに戻ったので、一安心した。しかも、肉がショボイ量のカレーのわりには、なかなか良い出来栄えに2人揃って歓びの声を上げた。終わった頃に他の班の人が戻って来たとしても、それはそれで良かった。だって、星野君と2人で作ったカレーは、意外と好評だったから。

まぁ、カレーはどの状況で誰が作っても間違いなく上手い。

（……星野君みたいな人は、きっと彼女を大事にするんだろうなぁ。言葉は少ないけど、なんかこう、温かいし。神様は絶対そう言う人に幸運をもたらすよ。つーか私が神だったら、普通に幸せなレールを引いて上げちゃうし！）

あんだけ星野君を不機嫌にさせたくせに、生意気にも上から目線で彼の人生を応援する荒井美千子。そんな人の応援より、自分の中学生活心配しろよという神の声が聞こえてきそうだ。

（将来は野球選手なのかなぁ……いっつも放課後ダッシュで帰るもんね。ところでシニアってどれくらいスゴイんだろ？　確かとっても厳しいって聞いたけど、あの住友爺の指導より厳しいのかな？　多分高校は甲子園常連の強豪校に行くよね？　将来はプロ野球選手で、ゆくゆくはキレイな女子アナと結婚かぁ。星野君だったら、見持ちの固くてお嬢様タイプがお似合いだよね）

その星野君はいまだ中学生なのに、人の人生設計を組み立ててはその内容に納得する荒井美千子。間違いなく私の心配などいらぬ星野君の将来より、オマエの現在の立ち位置を心配しろよという神の声……というより、キー●ン山田様の声が聞こえそうだ。

適齢期を迎えた息子を心配する出しゃばったオカンの如く、「星野君には、絶対悪い女に引っかかって欲しくないわぁ」とウンウン頷きながら暗い夜道を歩いていると、ふとある事実を思い出した。

（……でも、既に引っかかっているかも。あの小リスが纏わりつく限り、星野君の彼女、絶対苦労するだろうなぁ。星野君優しいから、無碍にもできそうにないし。こりゃ厳しいかもね。そうなると、他の４人も可哀想にねぇ）

ロクでもない連中だけど、これから先のことを考えると、なんだか気の毒になった。今はいい、けど人は必ず大人になる。いずれ自分の道を決め、それぞれ旅立つ時がくるのだ。ずっと今の関係のままでいられることは、絶対にあり得ない。……その時になったら、彼らは一体どういう選択をするのだろうか。そして、どう心に折り合いをつけるのだろう。

（……って、私ったら何を考えているんだか。それこそ彼らにしたら余計な御世話ってもんよね）

私の未来への道は既に決まっている。夢に向かってひたすら突き進む為に、今と言う時間を全て注ぎ込む事が良いことなのか。それとも、彼らのように、未来のことなど考える暇がないほど今を楽しいく生きることがいいのか。完全に僻みなのはわかっていたけども……果たしてどちらが幸せだろうかと考えずにはいられなかった。

私はいつの間にか立ち止まり夜空の星を眺めながらそんなことを思った、その時。

ザッ！

この場に相応しくない物音に我に返り、全身が硬直した。

（……あ、あれ？）

確かに音が聞こえたのだが、今は聞こえず辺りはシーンとしている。

「ま、まさかね……？」

私は「ハハハ」と一人笑って、恐怖に染まる自分の心を鼓舞した。だからといって、音がした草むらしき方角へ懐中電灯を照らす勇気はない。

（……ややややだぁ、きっと気のせい……よね！）

洗顔セットが入っている袋をギュッと握り、私は宿泊棟に向かって早歩きで歩き出した。

ザザザッ！

私の歩調に合わせて、今度こそ確実に聞こえてきた。
（……まままさか、幽霊なんてことはっ？！）
そんなことある筈がない。あっていいわけがない。だからって、このまま腰を抜かす余裕もあるわけない。
（ちょちょちょちょっと！　覗きスポットのほかに、心霊スポットがあるなんて聞いてないよ！！）
涙目を前方の女子宿泊棟へ向けた。ゴールはすぐそこだ、早くこの場から逃げ出そうと走りだした、その瞬間。

ザッという音と共に、後ろから無数の手が肩や腕に触れた。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？

人は本当に恐ろしい場面に遭遇すると声が出ない、そんなことを聞いた気がする。

「っ！！」

悲鳴を出したつもりなのに、声にならない空気のようなものが喉を取って口から洩れただけだった。

心臓の鼓動がガンガンと鳴り出し、夢中でいくつもの手を振りほどこうと暴れると、手に持っている懐中電灯の光があらゆるところを照らした。とうとう洗面セットと共に地面に落ちた拍子に消えてしまう。

（う、うそぉっ？！）

同時に後ろから両腕と口をガッチリ塞がれると、やっと声らしきものが出た

「ムムムうぁっ！！　（だだだれかっ！！）」

宿泊棟の窓から差し込むぼんやりした明かりだけが頼りの真っ暗闇の中、私は無理矢理横の草むらの方へ引きずられて行った。空しく響くいくつかの足音と私が引きずられる音。私はこれから自分の身に起こる最悪な事態を想像して震えあがり、必死にもがいた。

（ままままさか、そんな！　この小説、たしか年齢制限してないわよねっ？！　良い子の皆さんが読む、清く正しい全年齢向けの小説でこんな破廉恥なことあっていい筈ないわよねっ？！）

「貞操の危機」という文字が頭を過り、マジで逃げないとヤバイと

渾身の力を込めて動かすがビクともしない。それどころかますます建物から離れていく始末。見えない相手との攻防の中で、息は上手く吸えず、心臓が嫌な感じで収縮と拡張を高速で繰り返す。とうとう感情の高ぶりが最高潮に達し、出したくても出せない慟哭が別の形で目から溢れた。

涙の粒がいくつも落ちると、私の口を塞いでいる主が一瞬身体を震わせ手を緩めた。その隙をついて大声を出そうと息を吸い込んだ途端、私の身体を押さえていた腕と口を塞がれていた手の力が一層強くなり、ギュゥっと抱きしめられた。

（ヒィィィ～もう、もうダメ！！）

とうとう覚悟をするように、こっちもギュッと目を瞑ると……。

耳裏、次に耳へとなぞるように柔らかい感触を感じた。それはフワッとしたマシュマロのような感覚。

「ッ！！」

その生温かい得体のしれない何かに、思わず恐怖の震えとは違う種類の感覚が身体を走り抜ける。

『……めん、な……もし……ぇから』

（え？　え？　ななななにっ？！）

聞こえるか聞こえないか微妙な大きさの囁きが聞こえ、ゾワっと鳥肌が立った。そして、わずかにカレーとスナック菓子のソースの

匂いが……？

（キャベツ太郎……）

こんな非常事態に、どうでもいいスナック菓子の名前が頭の隅に過った。そして生暖かい感触が首筋に強く押しつけられ……。

（あっ！　ヤ、ヤダ……イヤ……ン……イッ？！　ィデデデ～っ！！）

押しつけられたと思いきや、急にガブリと首筋を噛みつかれ、離れたその時。

目の前でパッと明かりが灯り、亡霊のような顔が映し出された。

「●△＄＆％＃@π÷っ！！！！！」

私の意識はそこで途切れ、完全にブラックアウトした。

＊＊＊

ボンヤリとした意識の中。

ペシペシ……。

（……なに？　頬になにかが当たっている？）

重い瞼を開けると何か人のようなものが天井に映っていた。

手を動かすと天井に居る人間も同じような仕草をしている。どう

やら天井は鏡張りらしいことが判明したが、なぜこんなところに鏡があるのか。
普段用途するには使いづらい場所ではないか。

『……私？』

どうやら映っているのは自分の姿らしいのだが、薄い部屋着を着ていた筈なのに、何故か芸子のような着物姿だ。派手な天涯のついた丸いベッドの上に着物を着ている自分がゆっくりと回っている。いや、回っているのは私じゃない、ベッドそのものが回っているのだ。オマケにムーディー満載で、無駄に薄暗い。

（……つーか、ここ何処よ？　確か私、キャンプ場にいた筈では？）

目をぐるりと回し、少し起き上がると……どう見てもチンピラ風情の男が、いきなり視界に入ってきた。

（ヒィィッ！！）

ビックリして仰け反ると、目の前の男はニヤリと笑いながら人の上に跨ってきた。
その男は白いスーツの上下に紫のシルク素材の派手なシャツをインし、薄い色のレイバンなサングラスとゴールドチックなアクセサリーを嫌味な感じで身につけ、下品な笑いを浮かべていた。
手にしている諭吉の束で、私の頬をもったいぶるようにシバく。
一瞬見たときは元裏番かと思ったが、よく見ると……チンピラは桂寅之助というより尾島啓介だった。
どうでもいいが、その格好、意外としっくりキテるぞ。

『やっとお目覚めかい！　ったく、手間取らせやがって……まぁえ

ぇわ。ほんなら早速熱い営みといこうや？　とりあえず……まずはそのボインで「パフパフ」やな。へッへッへ！』

『はぁ？！　なななんでアンタがここに……って、パフパフぅ？！　なな何寝ぼけたこと言ってるの！！』

『寝ぼけてるのはオマエの方や！　ホレ、束が二つあるで～？　一晩でこれなら、文句あらへんやろっ！』

『ダダダメ！　そんなはした金程度で……じゃなかった！　お、乙女の身体をお金で買うなんて最低よ！　人間じゃないわ！　どどどいてよっ、この人でなし！』

『ホォ～よぉわかったのぉ？　そうや、ワシは人間じゃおまへん……人間の皮を被った化け物や！』

『自分で言っちゃったよ、この人！　……今更だけどこれって夢よねっ？　夢ならこっちのもんよ！　取り巻きがいない今がサシでヤるチャンス！　日ごろの恨みつらみ、カレーの屈辱を晴らしてくれるわっ！』

『ななんやっ、急に！　ちょ、アワワワ……そないな怖い顔せんといて、な？　やっ、だから、ちゃう、ちゃうねんって！　あれはな？　俺と言う男がおるくせにオマエが勝手に星野（かずゆき）とイイ感じでようやっとったから……。だだ大体なぁ！　俺のお気に入りのオモチャのくせして、雄臣だの、龍太郎だの、一幸だの、浮気したのはそっちやん！！　……って、そないに怒らんでもぉ～。あれはその……そう！　こう、お仕置きしとくかっ！　……て、感じで、やな……』

『お仕置きってなによ！　それにいつアンタが私の男になったのよっ？！　勝手なことばかりぃ～！　お気に入りのオモチャのわりには、よくもあれだけ飽きもせずに可愛（いためつけて）がってくれたわねっ？！　もうアタマきた……問答無用で成敗してくれるっ！』

『わっ、こらっ、ホテルの備品投げるなやっ！　わわわわかった！　謝るから落ち着かんかい！　とりあえずここはこの束2つと、俺の熱い大砲で勘弁してくれや、な？』

『オバカ！！　そんなんでこの一年二ヵ月の鬱積が勘弁できる訳ないでしょっ！　大体そんな熱い大砲を持っている人はね、自ら大砲なんて言わないもんよっ！』

『……鈍臭くて地味な割には、言うことごっつぅキツイやんけ……』

『アンタにだけは言われたくないわっ！　それにそんな二百万程度で熱い営みができると思ったら大間違いよっ！　……そう、慰謝料と操を合わせて最低でも二億よ！　それくらいサクッと大盤振る舞いしなさいよっ！』

『……オマケにえらいガメついのぅ……』

『悪いけど、私は金髪碧眼と出会うために全てをかけてんの！　これから留学費用諸々でお金が必要なのよ！　……って、ちょ、やめ、汚らわしい手でそんなっ！　いきなりっ、アッ、ダメッ、もっと優しく……料金二億、キャッシュ前払いでヨロシク』

『ヒッヒッヒ、そうそうキャッシュ前払いせなアカンな！　……って、オイ！　まだ何もシとらんわっ！　それに金髪碧眼ってなんやっ？！　なによりも二億はどう見ても高すぎるやろっ！　もっと勉強せぇっ！』

『フッ、見た目も小さけりゃ懐も小さい男ね！　それにここまできたら、もうヤッたも同然でしょ！』

『んなアホな話、あるかいっ？！　しかも見た目も小さいって何気に失礼なやっちゃな……言っとくけどな、オマエよりは大きいわいっ！　……5ミリやけど……って何気にギャグ路線に逸れてムード台無しじゃ！　え～いクソッ、仕切り直しじゃわいっ！　喚くなやっ、こっちは大枚はたいてるさかいっ！　大人しく覚悟せぇ！！』

『あ～れぇ～御無体なぁ～……って回り過ぎて……気持ち……わるい、オエェ～』

『アホ！　こんなイイ雰囲気な場面で吐くなやっ～！！』

私はチンピラに帯を解かれ、グルグルと回り……しかもベッドもグルグルグル……。

今までたまった恨みつらみを吐きだして心は軽く爽快だったが、ついでに胃の中も軽くなりそうな勢いだ。
（うぅ、カ、カレーが……！）

ペシペシ！

（カレー……いや、顔はやめな、バディバディ……って、三原順子姉さんも言ってるでしょうが！）

バチッ、バチッ！！

（本気で、地味に痛いんですけど……）

遠くの方で誰かの声がする。それもドスの効いた声が。夢の筈なのに何故か頬の辺りに感じる、リアルな鈍い痛み。

『……きろ、ボイン……』

（ちょっと、そのボインがいま貞操の危機に晒されそうに……）

『オイ、オイッ！　起きろ、ボイン！』

その声と肩を揺さぶられて完全に覚醒した。
ハッと目を開けると、そこには諭吉の束を持ってるチンピラ……ではなく。懐中電灯を下から照らした、ある意味立派なチンピラ候補である、裏番の顔がドーンと目の前にあった。

「ぎゃぁ、んぐぐぐぐ！！！！！」

ゴンッ！！

『いてぇっ！』
（いったぁ！）

悲鳴の途中で再び口を塞がれ、慌てて起き上がろうとしたら、後ろのに居た人物に頭をぶつけ、目から星が出た。

『バカッ、落ち着け、ボイン！』

恐る恐る目を開けると、裏番の姿をした亡霊……ではなく、亡霊のような裏番・桂龍太郎が相変わらず懐中電灯を下からかざしたまま、「静かにしろ！」と鋭く言い放った。
……どうでもいいが、亡霊ちっくなヤンキーはそれはそれで恐ろしい。
目を見開いたままその亡霊を見上げていると、目が暗さに慣れ、彼の周囲に何人か人がいるのがわかった。薄暗いながらも、そのメンツが誰だかわかると途端に震えが襲ってきた。
（ままままさか、リンチ……とか……じゃないよねっ？！　カレーの時の腹いせ……って、あれは私のせいじゃないでしょうがっ！）
炊事場の件で復讐をされる！　とガクガク震えていると、後ろから聞き覚えのある低い声が聞こえてきた。

『……ドウモ、コンバンワ。ゴ機嫌イカガデスカ、荒井美千子サン』
『！！』

普通に挨拶されているのに、何だこのプレッシャー。
口を押さえられているにも関わらず、無理して後ろを振り向けば、

見覚えがある……どころではない。ついさっきまで（夢の中で）二億円払わず私の貞操を無理矢理奪おうとした、忘れたくても忘れられない「ザ・悪魔」が、眼光を鋭く放ちながらか弱い乙女を羽交い絞めにしていた。

『ほひはっ（おじま）！！』

『おっと！　……随分と暴れてくれたうえに、気絶をしたと思いきやご丁寧に寝言や頭突きまで……イテーうえに、世話が焼けるったらありゃしねぇ！　……デ、ゴザイマスネ。荒井美千子サン』

『んむむごぉぁっ～！！』

暴れる私に、シーっと一斉に口に指を当てる、数名の亡霊……ではなく男子生徒達。

夢の続きにしては性質が悪すぎる。しかし、背中の感触が「こんどこそ現実だよん☆」と物語っていた。夢同様張り切って悪魔に応戦したいところだが、モノホンの尾島は……こう、なかなか、手強そうだった。

『静かにしろ、チュウ！　大声を出したらどうなるか……わかってるんだろうなっ？！』

史上最悪な展開だ。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（後書き）

※パフパフ…ドラゴン●ール参照。
一部健全な良い子の皆様には相応しくない表現がありましたことを深くお詫び申し上げます。ｍ（＿＿）ｍ
ちなみに、チンピラの姿は一見見「ねずみ先輩」のような姿を想像していただければ幸いです、ポッポ。そして、夢の中の関西弁は意味はありません。ただ雰囲気を醸し出す為使ってみただけですｆ（＾―＾；）菩提樹は関西がじもぴーではないので、文法の使い方が正しいとは限りません、ご了承ください。
また、今時のラブホには回るベッドはないと思う…私は当たったことがありません（笑）。「今でもここにあるよ！」と知っている方、ご一報お待ちしております！

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？

抜き足、差し足、忍び足……

ギシッ！！

「！！」

慌てて歩みを止めた。

音を立てないように歩いていたつもりが、施設が古いのか。誰もいない廊下に派手な音が響き渡った。

皆さま、こんばんは。いかがお過ごしでしょうか。

荒井美千子は今、女子の宿泊棟の廊下にいます。何をしてるのかって？　見ての通り廊下を歩いている訳ですよ。え？　前回の拉致られた件はどうなったって？　実はあれから少し時間がたっておりやす、へェ。え？　お楽しみのシーンを飛ばすな？　いやいや、そりゃ、年齢制限をしていないのでねぇ、そこんとこは勘弁してくださいよぉ。それに、そんな大したことを書けない作者でありやすからね、ましてや●●（ピー）シーンなんて、ねぇ？　え？　そんなのいいから、詳しく聞かせろ？　まぁまぁ、落ち着いて。その前にこの目の前のミッションをコンプリートしないといけないんスよ。なんせ、たった今、教師が寝泊りする部屋の前を突破したばかりでして。これから目的地である裏口の非常出口のところまで行かないといけないんスからね……。

……などと独り言をしている場合ではない。第一私は誰に報告してるのか。

（くそぉ……なんで私がこんな夜這いの手引きなどしなきゃならん

の！）

もし誰かに見つかったらエライことである。しかし、ヤらねば、ヤられる。今後の中学生活がこのミッションの成功に全てが掛っているので、何としてもやり抜かねばならない。背に腹は代えられないというやつである。

私はやっとの思いで目的地に到着し、周囲を確認した。非常出口の内鍵の施錠を……とそこで、ハンカチを出し、おもむろに内鍵に当てて解除した。別に指紋を採取されるわけではないとは思うが、念には念を入れる。

ガチャっ！

その音にビクッと動きを止め後ろを振り返ったが、幸いにも人は通っていなかった。

ホッとし、再び扉のノブに手を掛けゆっくり開けると、さっきまで私を拘束していた男がサッとドアの隙間越しに姿を現した。こちらに向かってギラっと鋭い視線を超至近距離で投げつけている。

（ヒィィッ！）

急に妖しい光を湛えた眼球が現れれば、そりゃ驚くってもんである。どうやら既にドア付近に待機していたもよう。

『遅ぇ！』

「……大変申し訳ございません」

……わざわざ危ない橋を渡って協力してやってると言うのに。

「指図」と「文句」だけは素晴らしく発達しているが、「お礼」と「感謝」という文字はどうやら進化の過程で退化してしまったようだ。

『……誰にも見られなかっただろうな？』

（中二のくせして、何故迫力だけは一級品……）

顔が片側だけしか見えてないというのに。無駄に威圧感がある類人猿に確認されると、私は慌てて首を縦に振った。それを合図にしなやかな動作でドアの内側に滑り込む尾島。その姿はどっからどう見ても街中で暴れる為に山から下りてきた不埒な猿。

『よし、よくやった。……いいぞ、入れ！』

滅多にないお褒めの言葉だが、素直に喜べないのは何故であろう。

尾島は後方に控えていた連合軍の同士に中に入れと合図した。次々と男子が非常口から侵入しては近くの空き部屋に入って行く姿に背を向け、

『あっしはこれで用済みでやんスね。ここいらでおいとまさせてもらいやす』

……と、さっさとこの場を退散しようとしたら、肩をむんずと掴まれた。

『全員無事に入るまで、オマエは人質だ。ついでにそこで見張ってろ』

「……」

尾島は振り向く私に「そこの廊下に立ってろ」と顎で指図した。

私は仕方なく頷いてT字の廊下の角でソワソワしながら見張りについた。

（ううう～早くしてくれぇ！！）

背後の物音にハラハラしながら、このミッションから解放されるのを今か今かと待っていた。

＊＊＊＊＊＊

さて、前回のお話から冒頭のお話しまでの大事な部分を割愛させてもらったわけではない。

尾島に拉致られた後、私が落ち着いて話ができるようになるまで、かなり時間を食ってしまったらしい。なので彼らは焦っていた。

しかも、当初は私を拉致るつもりはなかったそうだ。詳細はこうである。

毎年恒例の「桃色ハプニング大作戦」。

代々男子の間で受け継がれているこの作戦を、もちろん尾島達を筆頭に、今年も決行することとあいなった。各クラス、女子のところに忍び込む希望者を募りメンバーが決定すると、残る男子に囮と援護射撃を頼んで先鋭部隊はミッションを開始した。

自分たちの宿泊棟を抜けるのは問題なしだ。もちろん玄関などから堂々と出るわけがない。非常出口やベランダ、一階の者は窓から出るのである。もちろん周囲を見渡し先生がいないのを確認してから、である。

ここまでは良い。問題は宿泊棟の間に立ちふさがるグラウンドである。ここには御存じの通り、ナチスドイツ軍が徘徊しており、普通にゾロゾロ立って歩いていては箕輪（ヒトラー）の放った教師達（ドーベルマン）に見つかってしまうので通れない。

ではどうするのか？

『歩腹前進でいくんだよ』

ハッハッハ、そんなバカな！

……と言うような顔をしたら、敵の包囲網を決死の覚悟で潜り抜け

てきた連合軍の皆様に睨まれた。よくよく見れば男子全員前が若干汚く、冗談ではないことを物語っていた。彼らは本当にやったのだ。お陰で女子の宿泊棟にまで無事到達し、お楽しみの覗きスポットを堪能することに成功する。

まぁ、その堪能した部分は濁し、口には出さなかったが。

しかし私にはすぐわかった、残念ながら顔が全て物語っていたから。彼らの顔は妙に赤くてスッキリした表情だった。思わずジロリと睨むと、全員気まずそうに視線を逸らした。

『さて、お宝全裸も見れたし、いよいよ女子の宿泊棟の中に忍び込むか！』

……と意気揚々と侵入口である非常用裏口に向かったまでは良かったが、実際行ってみれば鍵がかかっていた。代々受け継がれた秘伝の教えを忠実に守ったのに、何故鍵がかかっているのか？

答えは簡単だ。中に手引きする女子に話をつけるのを忘れたからである。

これぱっかりは、協力者（スパイ）がいなければさすがの連合軍も無理なのだ。もちろん正面から入れるわけもない。

『……おい、オマエ女子に言ってなかったのか？』

『は？　オレは知らないぜ。オマエ言ったんだろ？』

『ええ？　俺はとっくにオマエが言ってるものと……』

連合軍は慌てた。

それよりこんなところで、「オマエが」「オマエが」「オマエが」などと責任のなすりつけ合いをしている場合ではない。勢いとヤンチャが売りの先鋭部隊は（こういうことに進んで参加する奴は、大概クラスでもヤンチャで品行方正・頭脳明晰から程遠い奴らばかりである）、無い知恵をなんとか絞って解決策を練った。その結果、

女子が数名個室シャワーを使うのを思い出したのだ。その彼女達と接触して、中から鍵を開けてもらえばよいと結論を出した。二一世紀に入った今なら携帯のメールでチョチョイと送れば済むことだが、この時代は携帯電話など夢のまた夢という時代だった。かろうじてあったのは無線やトランシーバー。奇襲作戦を盛り上げるアイテムとなりそうだが、たかだか女子の宿泊棟に忍び込むのに、いちいち「～です、オーバー！」などのやり取りはハッキリ言ってマヌケである。

連合軍は「善は急げ！」と女子宿泊棟の裏手にある草むらに潜伏して、個室シャワーを使い終わった女子の帰りを待った。

……しかし、待てども待てども女子は来ない。今年は運が悪かったのか、個室シャワーを使った女子が少なく、連合軍が彼女らの存在に気付いた時は、すでに宿泊棟に戻った後だったのだ。そのことを知らない連合軍共が待ちくたびれて諦めかけたその時、呑気に考え事をしていた私（カモ）が通ったのである。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？

私（カモ）を見て一瞬連合軍の幹部達は躊躇した。
そりゃそうだろう。連合軍の最高司令官である尾島（マッカーサー）を筆頭とした幹部達と私は、数時間前まで最悪の関係だったからだ。果たして彼女に頼みこんで素直に「いいよ」と快く引き受けてくれるか甚だ疑問だ。むしろ逆に密告され捕虜になる可能性が大だった。
再び諦めモードに入った連合軍。
……が、代々続いているこの奇襲作戦が自分たちの代だけ中止して撤収するなど、プライドの高い最高司令官が納得する筈もなく。私（カモ）を力づくで捕獲し脅して共犯にしてしまえばいいという考えに達したのだ。

『どうせ地味でドンくさい荒井美千子のことだから、ちょいと脅せばコロっと言いなりよ』

実に物騒で失礼極まりない話である。
しかし連合軍は尾島（マッカーサー）の意見に頷いた。言いだしっぺである最高司令官と幹部達自ら捕獲に乗り出し、作戦は見事成功！　……だったのだが、ここで誤算が生じる。思った以上に捕虜が暴れ、泣きだす始末。さすがに暗闇の中で、か弱い女子生徒を手篭にするのはマズイだろと仏心を出したのが失敗だった。危険を承知で懐中電灯をつけ安心させようとしたのが仇となり、突如現れた裏番の顔に捕虜がビックリして白目向いて気絶してしまったのだ。お陰で私が起きるまで5分のロスタイムができたという。もちろん無理矢理起こしてもパニックになる始末。

『別になんにもしないから、とにかく落ち着け！！』

裏番の御言葉に、落ち着けるか！！　と文句を言いそうになった。
大体背後から羽交い締めして口を塞いだ挙句、草むらに連れ込むなんて……どう見てもまっとうな人間のすることじゃない。本気でリンチか貞操の危機かと思ったのだ。あの時の恐怖ったら、味わったものでないと、女でないとわかるまい。涙目で睨むとさすがに連合軍はバツの悪そうな顔をしたが、ここで時間を食ってられない、と思ったらしい。
未だに懐中電灯を顎の下から照らしながら、目の前でヤンキー座りをしていた桂龍太郎が、強硬突破に出た。

『ボインに頼みがある』
『おおお断りします』

目の前の亡霊は途端に険しい顔になった。
けど私は日ごろの彼らの行いから、どうせロクなことではあるまいと反射的に口応えしてしまった。非常にマズイと思ったが、時既に遅し。出てしまった言葉は取り戻せない。もしなにかされたら大声を出し、雄臣推薦の痴漢撃退装置の紐を解除するつもりだった。
さっさと逃げようと立ち上がろうとした私に、いまだ背後から抱きついている尾島に引っ張られ、目の前の桂龍太郎に肩を押し込まれた。いよいよポケットに忍ばせた警報機の出番だと取りだす前に、後ろの最高司令官に頬をガシっと抑えられ、痛いほどグリンと後ろを向かされた。
（イデデデ！！）
……どうでもいいが、首がグキっと嫌な音がなった。それに、腰に回されている腕が徐々に上へ上へと上がってきてるのは気のせいだろうか。ちなみに風呂上がりの上に、こんな大事件に巻き込まれると思わないので、ガッチリタイプのブラではなく、生地が薄めの可愛いピンクのレースが付いているブラである。　非常に危険極まりない。

『……いいか、良く聞けよ、ヒョットコ！　大人しく交渉に応えるなら危害は加えない。約束する。しかし俺達の交渉を断った場合、この先の中学生活がどうなるか、わかってるよな？　それが嫌だったら、俺達に協力するしか、ねぇよな？　おっと、ここで暴れて大声を出しても無駄だぜ。この状態で見つかれば、オマエも立派な同罪だ。つーか、絶対道連れにしてやる！』

完全に脅しである。

それにもう既に危害を加えている状態で何を言うと文句を言いたいが、この時点で捕虜に選択権はない。私は仕方なく頷くと、連合軍は安堵のため息を漏らした。やっと頬を押さえている尾島の手も外れ、「ヒョットコ」から解放されたが……なにより首と頬が超痛い。

『そんじゃ、交渉開始だ。わりぃんだけどよ、女子の宿泊棟の一階の奥、大浴場へ行く廊下の突き当たりを右側に行って、さらに奥に非常用の出入り口があるんだよ。けど鍵がかかっていて外から入れねぇんだ。そこで、ボイン、オマエの出番だ。そこのカギを中から解除しろ。いいか、誰にも見つからないようにしろよ。途中センコーの部屋がある筈だ。そこは特に気をつけて行け。以上だ』

なにが「以上」だ、裏番よ。

そんな高等なミッション、この地味でドンくさい私にできるとお思いですか？　……という不安そうな顔を裏番に向けると、裏番は無言で頷き「健闘を祈る」と返してきた。後ろの最高司令官はよいしょと立ち上がり、私の脇に腕を通して持ち上げ立たせてくれた。そしてクルッと自分の方に向けて、肩にポンと手を置く。

『そういうことだ。全ては君の腕に掛っている。このミッションが

無事達成されれば、君の1組での学校生活は保障される。この俺様が約束しよう。なんなら昨日のこと、俺様自ら噂をばら撒いてもいい。東雄臣に彼女がいるってな。大体な、チュウも悪いんだぜ？あんな紛らわしい態度とるからこんなややこしいことになるんだよ』

『……』

オマエにだけは言われたくない、そう思った。

『ま、そうだよな？　確かにあの男とチュウじゃなぁ～どう見ておかしいと思ったんだよ！　気の毒だけどさ、幼馴染ってそんなモンだよ。ハッハッハ～』

『……』

既に尾島啓介という名前は、「マル秘！！　美千子のイ・ケ・ナ・イ☆ブラックリスト～迷わず瞬殺したい人間達～」に掲載済みだが、たった今瞬殺優先順位第1位の雄臣を抜いてトップに躍り出た。

そうとも知らない目の前の司令官の瞳には、数時間前まで感じていた冷たさは既になく、好奇心旺盛で悪戯好きな少年の輝きが戻ってきている。おまけにずうずうしい態度まで。

『お、そうだ。さっきの歩腹前進の時、ここケガしたんだよな。確かオマエ絆創膏持ってただろ。カレーん時、星野（かずゆき）に渡していたもんな。遠慮せずに出せよ。しょうがねぇから、俺様ももらってやるぜ』

『……』

厄介な大物妖怪がもう一人増えた。

そっと見えないように星野君に渡した筈なのに……あの距離で一瞬の出来事を見ていたとは。わかっていたが、普通に人間ではない。無言で絆創膏を取りだし渡すと、ごっそり持ってかれ、『他に怪我した人～』と勝手に配布する始末。私はそれを複雑な気持ちで眺め

ていた。
（事態が悪くなってる……いっそのこと、今までの最悪の関係の方が良かったのでは）
私は不安と不満で胸を一杯にしながら、満天に輝く星空を見上げた。

＊＊＊＊＊＊

「つ、疲れた……！」

やっと連合軍から解放された私は、ヨレヨレな姿で自分の大部屋へ戻った。
リラックスと身体を綺麗にするためにシャワーを浴びに行ったのに……連合軍のせいで髪は乱れるわ、服は汚れるわ、最悪である。
部屋に入ると既に奥住さんと光岡さんの姿はなく、大人しめな感じの女子が数人いた。彼女たちは部屋に入ってきた私を遠くから眺めていたが、私は極度の疲労の為、挨拶する余裕もなく静かに自分のカバンのところに戻り洗面道具をしまった。
（2人とも、先に行ったのかな）
乱れているであろう髪型を整える為に手鏡を覗けば、私はすっかり生活に疲れた中年のオバハンのような顔をしていた。ボサボサに乱れた髪、目は充血し、涙の痕まである始末。しかも髪を止めたいた黒いクリップが拉致られた時に落ちたのか、いつの間にかとれていた。
（あ～あ、探しにいくのも面倒だし、あんな暗いところもう行くのヤダし……。それより、絶対和子ちゃん達に何かあったのかとツッコミ入れられるなぁ。あ、行く前に顔を洗わなきゃ！）
少しでもマシになるように、髪に念入りに櫛を通した。

「あ、あの……荒井さん」

背後から弱弱しい声を掛けられ、後ろを振り向くと、二人の女の子が立っていた。それも少し複雑な表情をしながら。

「……は、い？」

「……あ、その……えっと、奥住さんと光岡さんがね？　先に2組に行ってるからって、伝言頼まれたの。帰ってきたら、3階の『百合の間』に来てねって、言ってた」

「あ、ありがとう」

普段ならありえない光景だった。

誰かさんのせいで、クラスの連中は男女問わず私に話かけるなど滅多にない。これがいつもの私だったら、それこそ尾島に拉致される前だったら、飛び上がって喜んだかもしれない。けれどもこの時の私は疲労困憊の状態でグッタリしていた。我がままを言わせてもらえば、このまま2組に行かず寝てしまいたいくらいだった。なので、お礼の声も覇気がなく素っ気なくなってしまったのだ。けれどそんな私の態度を彼女達は何を誤解したのか、ますますバツの悪そうな顔をして顔を見合わせた。二人のうちの一人、縄跳びで一緒の回し手だった「鈴木さん」が私の前に座った。

エイプｔｏキャンプｄｅハプニング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

鈴木さんは俯いていたけど、おもむろに顔を上げ苦しそうな切ないような表情で私を見た。

「あ、あのさ。荒井さん、気にすることないよ。原口さんと成田さん、尾島君達に気に入られようとして、荒井さんにあんな態度なだけだから。ほら、荒井さんと2組の宇井……さんと笹谷さんだっけ？　尾島君達と仲良さげでしょ？　だから気に入らないんだよ。それに今日の縄跳びだって、私達、結構頑張って回したのに。あんな文句言ったのも、多分悔しいからだと思う。だから、彼女たちのことは気にすることないよ」

「は？」

目の前の鈴木さんが熱く語るので、目が点になってしまった。確かに目の前の彼女たちは原口グループではない。しかもクラスで大人しい感じのグループに入る子達だ。いったい急にどうしたというのか。それに……何を誤解してるのか、和子ちゃん達と尾島は決して仲良くない。むしろ犬猿の仲と言っていい。

「あ、あの……今日の油の件、ごめんね？　私、怖くて……。私が隣に回さなきゃ、あんなことにならずに済んだのに。私も悪かったけど、いくらなんでも、成田さんと尾島君達の態度、あれはないと思う」

「え？」

今度は田中さんが鈴木さんの隣に座り込み、涙声で謝っているのをポカーンと見てしまった。

「ごめんね、私達、助けてあげることができなくて。そうだよね、荒井さんいつも尾島君達にあんな酷い態度取られたり、桂君と噂されたり、三年の女子に呼び出されたり……平然として頑張っているけど、平気な訳ないよね？　本当にごめんね」

とうとう鈴木さんと田中さんはグスグスと泣き始めてしまい、今度は私の方が面喰ってしまった。

「あああの、2人とも、一体なにがどうして……」

「ううう、グスッ……だって、荒井さん泣いてたんでしょ？　だって目赤いし、涙の痕が」

「ほ、本当に、ごめんなさい！」

「……」

言えない。

まさかその尾島や裏番達に拉致られた恐怖で泣き、脅された揚句、今後の中学生活を掛けて夜這いの手引きまでしましたとは。

私は引き攣り笑いをしながら、激しく誤解している彼女たちに「あああああの、大丈夫だから、気にしないで」と慌てて慰めた。確かにあの時は辛かったが、もうその辛い日々とお別れが来そうだ。……たぶん。……きっと。

「あ、荒井さんって、本当にすごいね。私だったらもう学校来れないかも」

「うん、そうだよね、尊敬する」

「……ハハ、そ、そんな、大袈裟な」

「それに、さっき伏見さん凄かったよね！　荒井さんには悪いけど、ちょっとスッとしちゃった。成田さんって、ちょっと、ね？　あと、佐藤君もかっこよかった！　さっすが佐藤君よね！」

「本当！　荒井さん、羨ましいなぁ。なんか佐藤君の口調からして知り合いっぽかったけど、一緒のクラスだったの？」
「それに、ほら……東先輩とも噂もあるでしょう？」

鈴木さんと田中さんは涙を引っ込め、ウットリとした表情で言った。
（いや、別にその2人とは、まったく何にもないんだけど……って、そうだ！）
私はここぞとばかり、自分の身に降りかかっている誤解を解くため、昨日入手した最新情報を漏らした。

「あああのね、みんな誤解しているようだけど。東先輩、彼女いるから。前の学校の人だって。だから私、全然関係ないよ」
「「「「「「え～っ！　うっそぉ！！」」」」」」

目の前にいる田中さんと鈴木さん以外に、遠くに離れていた、数名の女子からも同時に悲鳴が上がった。

「……」

（聞いてたのか……）
一斉に私に群がる女子達。少し前までは決してあり得ない光景に、私は心の中でそっと溜息を吐いた。

＊＊＊＊＊＊＊

「……ふぅ」

トイレで顔を洗い、顔を上げてタオルで拭うと、疲れた顔が鏡に映った。

（あ～あ、一晩、いや二晩ですごい年を取った感じだな。絶対十年分の気力、使い果たしたよ）

大きな溜息を吐くと、タオルをお菓子や水筒などが入っている袋に入れた。雄臣の話題を聞き出そうと迫ってきた鈴木さん達から逃げるように出てきたので、髪の毛もまとめずにダラッとのばしたまま。ヌボ～とした顔のまま鏡を覗き込み、髪をピンと輪ゴムでトップにまとめてトイレを出た。

なんとかマシな感じまで仕上げたのだが、目の充血はどうにもできなかった。重い足取りで和子ちゃん達のところに向かうが……唯一キャンプで楽しい時間の筈なのに、あまり気が進まない。

（疲れたな。一応顔を出すだけで早めに部屋に戻ろう）

自分の部屋の前を通り過ぎながら廊下をトボトボ歩いていると、先にある隣の大部屋から黄色い声が聞こえた。そこは原口美恵と成田耀子がいる部屋である。この声の感じからして、おそらく尾島達がいるのだろう。

ついさっきまで拉致された出来事がまるで夢のようだった。

頭の中で連合軍の先鋭隊員達の顔が浮かんでは消えていく。あの先鋭部隊には、佐藤君と星野君の姿はなかった。居れば絶対にあんな無茶なことはしないだろう。例えそれが地味で鈍臭い私に対してであっても。

（そうよ、やっぱり紳士は違うんだよね。でも……田宮君はいたな）

そう、田宮君は尾島の傍にいた。同じ部活の後藤君とも仲の良い彼は、最近では星野君や桂君に代わって「ロクでもないんジャー」に入隊しそうな勢いだ。今日のカレーの油事件の時も……悲しいが尾島や原口達と一緒の態度だった。オマケに連合軍のメンバーに混じっていたという事実に、正直落胆の色を隠せない。

（もっと紳士っぽい人柄を想像していたのに。人って見かけによらないんだな。いくら目尻に皺があって、私好みの顔でも、ハァ。）

再び大きな溜息を吐いた。

どうやら恋というのは、夢見る間は人を幸せにするものだが、実際はかなり厳しいもので、そう上手くいかないものらしい。現に今の私には、どうも山野中の伝説の一つである「桃色ハプニング」から程遠いようである。

（それなのに、そのほど遠い私が「桃色ハプニング」作戦に加担せねばならぬとはっ！）

最も縁がない者がその手引きをしなければならないこの現実。この世はなんと無情で皮肉なのだろう。まったく、一体誰がこんなしょうもない作戦とネーミングを考えたのか。「桃色ハプニング」というより、「もういいよ、ハプニング……」と是非改名して欲しい。

しかも今日カレーのときにあれだけ酷い扱いを受けたにも関わらず、いや、中二になってからずっとなのだが、そんな敵同然な奴らに手などを貸してしまったお人好しぶりに、正直自分でも飽きれてしまった。

（私って、相当マヌケでオメデタイだろ？）

なんだか無性に腹が立ってきた。

プリプリと怒りながら歩いていたら、真横の成田耀子と原口美恵のいる大部屋がガラっと開いた。

急に開いたので、私はビックリして音の方を見てしまった。

中から開けたのは「ブキミちゃん」こと伏見かおりだった。彼女の背後に部屋の中が見え、中にいたメンバーも音にビックリしたのか、話を止めてこちらを見た。

案の定、中には尾島達がいた。

小関明日香まで。

輪の中心にいる、尾島と一瞬目が合った。

が、彼が何か言おうと口を開きかけたところで、私は慌てて開いた襖から廊下へプイッと視線を戻し、

『あああぁっしは部屋の中を見てませんぜ！　ましてや夜這いしにきたクセモノがわんさか居るなんて間違っても言いやせん、へぇ！！』

……というように、その場から立ち去ろうとした。けれどもその前に、その尾島や男子の視線と女子の厳しい視線が遮断される。

バン！！

なんとブキミちゃんが勢いよく襖を閉めたのだ。

「荒井さん！」
「ハッ、ハイィ？」

いきなりブキミちゃんはメガネを上げながら一歩ズズイと踏み込んできた。その顔は笑っておらず、不機嫌さが滲み出ている。私は後ろめたさ満載の為か、声が裏返ってしまった。

「悪いけど、荒井さん達の部屋に行かせてもらえるかしら？　ここの部屋、うるさい誰かさん達が押し掛けてきたせいでゆっくり休めないの。……いったいどうやって忍び込んだのかしら。非常に迷惑なのよね」

ギクッ。

その原因に一枚噛んでいたりして。何気にブキミちゃんの鋭い視

線が痛い。眼鏡越しなのに。

「あ……う、うん。どうぞ」
「助かったわ」
「い、いえ」

圧倒的に人を寄せ付けぬオーラを放ちながら、ツカツカ歩いていくブキミちゃん。その姿を恐る恐る見送っていたが、ハッとカレーの時のことを思い出し、私達の部屋に入ろうとした時、思い切って声をかけた。

「あ、あの！　伏見さん」
「なに？」
「カ、カレーの時なんだけど……」
「カレー？」
「そそその、油、ありがとう。助かりました」

丁寧に頭を下げると、ブキミちゃんはそんな私をジッと見た。彼女の視線が痛いくらい刺さり、あまりの気まずさにどうやってこの場の会話を終わらせようかと考えを巡らせながらモジモジしていると、ブキミちゃんは急に例の不気味な笑顔でニヤリと笑った。

「……いいのよ。それよりワタクシの方が頭を下げなければ。名前間違えてごめんなさい。さっきも言った通り、昔のクラスメートに似てたの。横顔なんかソックリで、思わず間違えてしまいました。だから悪気はないの、信じてくれるかしら？」

「あ、う、うん……」

「よかった」

ブキミちゃんは口に弧を描き、まだこちらをジッと見てる。さすがにこれ以上和子ちゃんのところへ行くのが遅くなってしまうとマズイと無理矢理理由をつけて、会釈だけしてその場を後にしようとしたら、今度は逆に私の方がそのハスキーボイスに呼び止められた。

「荒井さん」

「は、はいっ！」

「今までに……似てるって言われたことないかしら？ワタクシが間違えた『桃田さん』っていう人と。特に仲の良い『笹谷さん』辺りに」

ドキッ。

既にその貴子から言われてたりして。何気にブキミちゃんの微笑みが怖い。滅多に見れないのに。

「いっいっいえっ！　そそそんな名前、ききき聞いたこともございませんっ？！」

「……そう。てっきり聞いているかと思ったわ」

「ハッハハハハ」

「今度是非聞いてみて？　面白い話が聞けるかもしれませんわ」

「……ハ……ハ……」
「もっとも、荒井さんにとっては迷惑極まりないでしょうけど」
「……」

フッフフフ……とギラリと歯列矯正を見せながら笑う、ブキミちゃん。
私は引き攣り笑いをしながら、その場から即効退散しようとしたら、再び「ねぇ」とブキミちゃんに呼び止められた。

「余計なことかもしれないけど。もし、お友達のところに行くんだったら、髪、下ろした方がいいんじゃないかしら」
「え？」
「首筋に『赤い噛み痕』ついてるわ。見掛けによらず意外とヤりますのね？　お相手はいったいどこの誰なのかしら？」

一瞬、ブキミちゃんの言っていることがわからなかった。
けれども彼女はニヤニヤしながら、自分の耳の後ろの首筋辺りをトントンと指で叩き、「ココよ」とジェスチャーをしている。

「え？　か、噛み……痕？　……っ！！」

ブキミちゃんが指している同じ場所に手を当てながら呟いている途中、ボンっと急に顔が熱くなった。　その噛み痕が、「いつ、どこで、誰に」つけられたか思い出してしまったからだ。
（アアアイツめぇっ～！　噛み痕って、痕がつくくらい噛みつきやがってぇっ～！！）
犯人は間違いなくあの男に違いない。
ずっと私の後ろにいた男は尾島だったから。こんなところに思いっきり痕を……誰かに見られたら（既に一人、しかもブキミちゃんに見られているが）、エライこっちゃである。特に奥住さんや和子

ちゃん、ましてや原口や成田、それにチィちゃんに見られたらマズイ。なんとしても隠し通せねば！

私はその場でアップしていた髪に手を伸ばし、ゴムとピンを急いで取った。とりあえず髪をおろせば噛み痕は見えない。

「あら、自覚はあるのね。……フフ」

「！！」

しまった……墓穴を掘ったらしい。

「あああああの！　こっこっこっこのことはっ」

私は思いっきり挙動不審満載な口調になってしまった。しかしこのまま放って置くわけにもいかない。熱意を込めて縋るようにブキミちゃんに近づくと、彼女は益々残酷な微笑みを湛えた。

まるで「妖怪人間ベム」に出てくるベラ様のようなお顔で、目元も口元もギラっとさせながら声無く笑う。

「わかってますわ。『二人だけの秘密』……ってことね？」

シーンとした廊下に低く響く意味深なブキミちゃんの声に、私は音と風が出るほど何度も頷いた。

「あら、一人忘れていたわ。その噛み痕をつけた、『３人の秘密』ってところかしら？」

ブキミちゃんはわざわざ私の耳元で囁いた。私は顔面蒼白になり、無意識のうちに再び噛み痕を抑えた。眼鏡越しに見る彼女の視線は、相手の隙を一瞬たりとも逃がさぬ狡猾な獣のよう。

「そうそう、忘れてました。荒井さんに渡すものがあったの」

獣……いや、ブキミちゃんはまだニヤリとしながら、手に持っていたカバンからスッと黒いモノを出した。

「これ、荒井さんのじゃない？」

そう囁いて私の目の前に差し出したのは、拉致騒ぎのときに落とした筈の、私の黒いクリップだった。私はビックリして「あっ！」という大きい声を上げると、彼女はさら色濃い笑いを披露する。

「落ちてたわ。個室シャワーへ行く道の途中で」

「ふえっ？！」

「実はワタクシも急にアレになっちゃって、個室シャワーへ行きましたの」

「え？」

「帰り道に懐中電灯照らしながら歩いてたら、偶然見つけました。確かシャワーに行く時、これ付けていたでしょ？」

「……あ、ありがとう……」

「いいのよ。そうよね、いくらなんでも全裸をタダで見られるなんて、納得いきませんわよねぇ。こういう時は個室シャワーに限りますわ」

「いっ？！」

私はブキミちゃんのセリフに目をひんむきながら彼女の顔をマジマジと見詰めた。私の顔にはこう書いてあっただろう。「何故覗きスポットのことを知っているのか」と。

ブキミちゃんはクイっと眼鏡を上げた。

「親切な部員が教えてくれました。『彼』には感謝しなくては」

「……カ、レ……って、まままさかっ？！」

『彼』に該当する人物の顔が頭の中を飛び交う。鬼神・修羅というその名の通り、色々な表情を次々と貼り替えながら漂う姿は、亡霊よりも性質が悪く恐ろしい。

「『彼』って、ほんとうに素晴らしいですわ！　お付き合いしている人がいるなんて非常に残念。ま、そんなのはワタクシにとってどうでもいいことだけど」

「……」

そう言った彼女は妖艶な微笑みを浮かべながら、顎に手をやった。生まれて初めてみた彼女の艶めいた笑顔にドキっとする荒井美千子。まるでマフィアの情婦のような印象を受けるのは何故だろう。やっぱりその筋とのご縁が深かったりするのだろうか。

「でも、なかなか落ちそうになくて。のらりくらりとかわして、まるでいくら求めても掴めない『風』のようですわ」

「……」

「もしくは難攻不落の要塞ってとこかしら」

でもワタクシ、ゾクゾクするの。ああいう裏表がある男。

顎に当てた手を、まるで涎を拭くように顔の縁をゆっくりなぞる、ブキミちゃん。

それはまるで、暗闇に潜む、愛の狩人（ラブハンター）・黒い雌豹。

（ややややや！　こんなときにキャッチフレーズなんて命名しとる場合でないからっ、私！）

私はゴクリと唾を飲み込み、鬼神・修羅を『風』というポエマーなブキミちゃんを黙って見た。

（ヤヤヤヤバイよ、雄臣、アンタ完全に見抜かれてるよ！）

よりによってブキミちゃんが、雄臣の真の姿を見抜くとは……予想外の展開に思考が追い付いていかない。いや、ある意味大物同士、下々には理解できない何か相通じるものがあるのか。

ブキミちゃんは無言しか通せない私の手を取り、スッと私の落としたクリップを静かに私の手に握らせた。

「実はワタクシ、『彼』に頼まれていますの」

ブキミな容姿とはほど遠い、艶を含んだハスキーボイスが耳元で囁る。

「荒井さんって『大事な妹』なんですってね。『荒井美千子に何かあったら、よろしく頼む』って言われているの。だから、今日のカレーの時も……そう言えば理解していただけるかしら？」

「……」

「このワタクシが尾島や原口みたいなお子様を相手にするのは気に入らないけど、これも『彼』の為だから、仕方なく、ね？　いずれは荒井さんとも姉妹のような関係になるかもしれないし。これからも仲良くやっていきましょう？」

「……」

「大丈夫よ。今日の事は内緒にしておいてあげますわ。ましてや尾島達に草むらに連れ込まれたなんて『お兄さん』や原口達に言いませんから」

「●△×÷@π&%#！！」

「ワタクシって何故か人の弱みを握ってしまうことが多々ありますのよ。でも、くだらない記憶はすぐ忘れてしまう性質だから、荒井さんには是非大船に乗った気持ちでドンと構えて欲しいですわ」

フッフフフフ……オホホホ～！！

狡猾な黒い雌豹は、不気味な笑いと異様な空気を残して部屋に入って行った。

「……」

私は青褪めた顔をしながら、無言で彼女が消えた襖を眺めていた。

――ここにも妖怪が一人、と思いながら。

＊＊＊＊＊＊＊

ここから先は蛇足になるのだが。

宿泊施設の廊下でブキミちゃんから知りたくもない事実を色々聞かされた私は、完全に放心状態だった。

フラフラしたまま和子ちゃん達が待っている「百合の間」へ向かい無事友達と合流できたが、前日の夜から続く睡眠不足と色々な意

味で疲労状態だった私は、彼女らに『雄臣には彼女がいるらしい』情報を投下した直後、「真っ白に燃え尽きたぜ……」とホセと対戦した矢吹●ョーさながら瞳を閉じて爆睡してしまった。消灯時間になって奥住さんと光岡さんが起こしてくれたそうだが、ピクリともしなかったそうだ。結局そのまま目を開けず朝までグッスリで、気が付けば和子ちゃんと貴子の間に寝ていたのであった。

一方、見事「桃色ハプニング大作戦」を大・成・功～！　……させたかのように見えた連合軍。だがそうは問屋が卸さなかった。

結果から言えば、結局尾島達は先生に見つかり、一晩じゅう正座と反省文の刑に処せらた。もちろん全員捕まったわけではない。各クラスに散らばった連合軍達、ころ合いを見計らって撤収した者は無事男子の宿泊棟に戻った。しかし尾島達は消灯が差し迫っているのにも関わらず、ずうずうしくも、

『今帰ったらかえって危険だ！　このまま女子の寝床で夜を明かして、明け方戻ろうぜ！』

などと不埒な意見を言いだしたのだ。もちろんそんなオバカな意見を率先して言う奴は一人しかいない。

先生が各部屋に見回りに来るという情報が流れると、慌てて女子の布団の中に潜り込む男子生徒達。しかし、原口美恵と成田耀子のいる部屋にだけ集中すれば、そんなベタな方法で見つからぬ方がウソってもんである。すぐに機転を利かした尾島は何を思ったか、原口美恵が止めるのも聞かず数人連れて隣の部屋に移った。そこへちょうど奥住さんと光岡さんが和子ちゃんの部屋から戻ったタイミングと重なり、無理矢理彼女たちと共に部屋に押し入った。そこは私を含め1組の中でも大人しめの鈴木さんや田中さんがいる部屋。突然の男子の訪問に大人しい乙女たちは黄色い声を上げ、ブキミちゃんは目を吊り上げたが、事態は先生の見回りが迫る刻一刻を争う事

態。無理矢理布団にもぐりこんだまでは良かったが、ある一人の男子のせいで見回りに来た先生にバレてしまう。

いくら布団にもぐったところで、１８０センチの後藤君のデカイ身体が、女性サイズに見えるわけなどないからだ。

どうでもいいが……まったく、アホすぎるとしかいいようがない。

そして――。

後日このキャンプ場に一本の匿名の電話が入った。

その電話の内容に驚愕しつつもキャンプ側は当初、「どうせ悪戯電話だろ?」と取り合わなかった。しかし、「一応念の為に調べておくか」と宿泊棟の大浴場とその周囲を点検したところ、外から覗ける死角があることが判明したのだ。すぐ外から覗けないよう補強し、後輩が次の年このキャンプ場へ行った時は既にお宝生全裸は拝めなくなってたそうだ。そのうち山野中二年の遠足は時代とともに場所も内容も変わってしまうのであった。

ちなみに、キャンプ側はその情報を教えてくれた電話の主に謝罪とお礼をしようとしたらしいが、匿名だったので結局連絡を付けることはできなかった。

ただわかってることは、声の主はどうも男ではなく女で、低くハスキーで不気味な声だったと後に関係者は語る。

「ごめんなさいね、荒井さん。この『体育祭運営委員用のプリント』を全部2つに折ってくれるかしら？　終わったらここの机に置いて下さい」

不気味な声が数名の生徒しかいない2年1組の教室に響いた。

声の主である伏見かおりこと「ブキミちゃん」の含みのあるニヤリとした笑いに、私は目を逸らしながら慌てて頷いた。言われた通りにプリントを一枚ずつ取って丁寧に折って行く。

……どうも最近、ブキミちゃんと純粋な気持ちで接することができない。

何処に居ても纏わりつく視線を感じ、逐一行動を監視されているような気がする。隣の彼女は私の心を知ってか知らずか、隣の席でピッタリ席を付けて同じように作業を始めた。

「悪いですわね。生徒会の仕事を、期末試験前の大事な時期に手伝ってもらちゃって」

「い、いえ……」

「でも、荒井さんは先日『体育祭サポート委員』に決まったから、逸早く委員の内容をＧＥＴできて、いいわよね？」

「……」

「そうだわ。どうせならこの失敗作のやつ、あげる。今から目を通しておいた方がいいんじゃないかしら？　なんせ男子の体育祭サポート委員が『アレ』じゃあ……ねぇ？」

先月末無事「生徒総会」を終わらせ、生徒会副会長に就任した彼

女は、ピリピリしたムードを漂わせることなく、ニヤリと笑いながら印刷が薄くてよれているところがあるプリントを私に手渡した後、窓際の方にある机に向かってクイッと顎で差した。私もその方向へゆっくり顔を向けたが、ブキミちゃんの黒い笑顔とは程遠い苦虫を噛み潰した顔で眺めた。

その机は一番端の窓際、前から五番目の机。隣の席の女子は噂好きなベリーショートの子。

「……」

机の主は既にこの教室には居なかった。

帰りの会が終わった途端、掃除もほったらかしで友人たちと教室を飛び出して行った。試験一週間前にも関わらず、体育館でバスケなんぞを熱心にやっているに違いない。噂では、サッカー部は続けるけども、バスケ部にも助っ人として顔を出すそうだ。どうやら掛け持ちでやるらしい。

「本当に荒井さんって、気の毒ですわね。ま、私は『原口』なんかより、体育祭サポート委員が荒井さんで大いに助か……いえ、嬉しいですけど」

「……」

「只でさえ男子のサポート委員が尾島なのに……『悪魔』に加えて『悪女』が揃って委員だったら、私も一緒にサポートする学級委員として辛いところだったわ。贅沢を言わせてもらえば、本間君があの時に休んだのは痛かったですわねぇ」

「……」

憂いを含んだ声を吐きだしながら遠くを見つめるブキミちゃん。

私はブキミちゃんの言葉に心の中で大きな溜息を吐いた。どうや

ら私は、身近にいる図々しくて傲慢な「神」だけでなく、天にいる本物の「神」にも嫌われているらしい。

（……神様、こんな地味で鈍クサイ乙女をいじめて、楽しいのですか？）

きっと神様は、「志村けん」か「加藤茶」に似ているに違いない。『は？　あんだって？　とんでもねぇ、わたしゃ神様だよ』……などとボケたおしているのだろう。それか「神様」でなくて、ブー高木の「雷様」なんだろうか。

次第に怒りが込み上げ、フルフルと震えるのを懸命に抑えたが、思わずプリントを勢いに任せて乱暴に折ってしまい、ブキミちゃんから「もっと丁寧に」と指導が入った。

＊＊＊＊＊＊＊

キャンプが無事終了し、一学期のメインイベントが終わると、あとは夏休み前の期末考査や個人面談以外これといって目立った行事もなく、いつも通りの面白みのない授業と部活の波風立たぬ日々が続いた。

しかし、私にとってこの「面白みのない授業と部活の波風立たぬ日々」は、「暴れ太鼓を乱舞する祭りだワッショイ！」に匹敵するほどの狂喜であった。

何故なら、今だに忘れられぬ悪夢のようなあの波乱に満ちた「二年のキャンプ」から帰った私を待っていたのは、その前とは比べ物にならない程の平和な日々であったから。

私に「疲労困憊」という思い出だけを残したあの忌々しいキャンプ。

大縄跳びでは成田曜子や原口美恵達に文句を言われ、カレー作りの時は完全にシカトされ、シャワーの帰りには拉致された揚句夜這いの手引きをさせられ、トドメは鬼神・修羅と裏で繋がっているこ

とが判明した、雌豹・ブキミちゃんに弱みを握られ……まったく、恐ろしいキャンプったらありゃしない。思い出すだけで震えが走る。

そのキャンプが終わり次に日に登校してみれば、雄臣自ら宣言した「俺、彼女いるんだぜ！」情報が既に学校中に広がっており、妹を含めた女子生徒達を落胆させていた。一方、あれだけ騒がれた私と雄臣の噂はあっと言う間に一掃され、まるで始めからそんな事実なかったように、ものの見事に消滅していく。

『東君と荒井美千子か……よくよく考えれば、そんな筈ないわよねぇ？』

……などという目線と囁きと共に。

まったくもって失礼な話だが、ここはグッと堪えた。さすがに学校生徒の大半を我がブラックリストに載せるには、いささか無理があったからだ。お陰で女バレの部長・平畑先輩（アマゾネス）からの度が過ぎるゴマすり作戦は無くなり、態度が急激に冷えたが。まぁ、錦戸先輩（ラフレシア）率いる女バス軍団の厳しい視線が無くなったので、プラスマイナスゼロだ。逆にアマゾネス先輩から特別扱いを受けずに済むのはかえって喜ばしいことだった。あからさまに部長自ら特別扱いの部員がいると、周囲の空気は悪くなるし、後輩にだって示しがつかない。

そして何より劇的に変化したのは、１組での私のポジションだった。

私に対して男子の態度が急に軟化し、女子も一部だが、大人しい鈴木さんや田中さん達との交流が増えたのである。間違っても荒井美千子が急に「激カワ♪」になったわけでもなければ、女子に積極的に話しかける明るい性格になったわけでもないのに、何故（なにゆえ）か。

それは、１組のボス猿こと「尾島啓介」の態度のせいであった。

尾島はあれだけ私のことを冷たい目で「近寄るな！」と睨んで避

け続けてきたのに、その厳しい視線と態度が急に無くなったのだ。
あの男一人の態度でこうもクラスメートが激変するとは……まったくもって恐ろしい男、いや、猿である。中学生且つ猿のクセにここまで人を動かす力があるなんて、尾島といい雄臣といい、ロクでもない男しか私の周りにはいないらしい。女難ではなく、それこそ男難な相でもあるのだろうか。
……と言っても、いきなり男子達の態度が柔らかくなったところで、「桃色ハプニング大作戦を共に乗り切った同士よ！！」などとそこまで馴れ馴れしくなったわけではなかった。その証拠にキャンプで以降も、相変わらず尾島達とは口をきいていない。よくよく考えてみれば、普通に学校生活している地味で鈍臭い女子が、男子と話す機会などそう滅多にあるわけないのである。
去年あれだけ尾島と関わり合いが多かったのは、彼に対抗する和子ちゃんや幸子女史が傍にいたのと、単に振り向けば常に後ろにいたからにすぎない。
それに比べて今現在私と尾島の間には、何層もの見えない壁がある。それは、原口美恵や成田耀子であったり、尾島や私を取り巻く友人達であったり、今までに尾島自ら撒いた態度であったり、そして、最近何故か交流が増えに増えまくっている、横でプリントを折っている鬼神のスパイ……いや、「ブキミちゃん」であったりした。
さすがの尾島もそれらを無理に取っ払って、私をからかって遊ぶ余力はないようだった。

非常に喜ばしいことだ、平和万歳。
それに、ここが重要なのだが、私は尾島から受けた仕打ちを忘れたわけではなかった。あれだけの嫌がらせを受けたのに、急に掌を反されたからと言って、すぐに許せるほどお人好しでもなければ忘れっぽいわけでもない。今でもカレーの時のことや、あの夜の公園のバスケットコートでの一言や、クラスで受けた無視攻撃の事を思

い返せば胸がズキンと痛み、ザワザワと嫌な感情が湧いてくる。もう二度とあんな思いをするのはゴメンだった。だから私は、尾島を取り巻くグループに対して、よっぽどの用事が無い限り一切近づかないことを決め込んでいたのだった。

B&M～冷たい視線は「あっても」苦労、「なくても」苦労・前編～（後書き）

m&mでもない、B&Bでもない。B&M。（ブキミちゃ禿コ）

「もう二度と尾島と関わらない」

何度もそう誓ったが、今度こそ正真正銘固く心に誓った。

例え尾島達男子の厳しい包囲網が解けても、「油断せず警戒を怠らず隙を与えず」の調子で、接触をせぬよう細心の注意を払っていた。それこそ私自身も目立たぬよう細々と生きていた筈！　……なのに。

それなのに――。

原口美恵と成田耀子達の視線だけは相変わらず厳しいのだからやりきれなかった。

彼女達が面白くない原因はわかってはいたが、今の私にはどうすることもできないのが辛いところだ。どうして私の行動に反比例して事態は悪い方向へ進むのか。原因があるなら誰か教えて欲しい、切実に。

現時点で、その彼女たちが面白くない大きい原因は２つあった。

そのうちの一つは、勉強と部活中心とする学校生活の中で唯一オアシスの時間である、ランチタイムであった。

＊＊＊

キャンプ前までは、ほとんど２組でお昼をしていた荒井美千子。

奥住さんが我が１組に２組の和子ちゃん達や１０組の幸子女史を何回か呼んだが、前にも説明した通り、私達も尾島達も悪女達も１００％険悪なムードになるので、私は丁寧に頭を下げて、なるべく１組でランチをするのを避けるようにしてもらった。１組に行きた

がっていたチィちゃんには悪いと思ったが……とてもじゃないが、彼女の為に1組で毎日お昼を食べるなどと、ましてや彼女の恋を応援する気になどなれなかったのだ。

何故なら、チィちゃんの恋のお相手が、厄介事の中心人物だったからである。

どうやらチィちゃんは、去年の暮れに例のお好み焼き屋で尾島と接触した時から恋を温めてきたらしい。なんでも手作りのケーキを褒められたのがキッカケだそうだ。和子ちゃんや幸子女史、私に遠慮して言いづらかったらしいが……どうにも堪え切れなくなって、二年になって一緒のクラスになった幸子女史に思い切って打ち明けたそうだ。そして、とうとうチィちゃん自ら、キャンプ前の雨上がりの放課後に恋の宣言をした。

チィちゃんの恋は私達に大きな衝撃を与えた。

それと同時に、彼女の恋に意見が真っ二つに分かれる。

和子ちゃんや貴子、加瀬さんや光岡さんは、チィちゃんの恋に難色を示した。もちろん理由は「相手が悪すぎる」というものだ。私も問答無用で反対派だった。だって、尾島と関われば私が受けている仕打ちをそのままそっくり受けることになるから。こんな思い、絶対友達に味わってほしくない。

どう見ても前途多難な恋に、反対派の和子ちゃんが先頭を切って異を唱えると、チィちゃんは困ったような悲しそうな顔をした。これにはさすがに和子ちゃん達もバツが悪そうに黙ってしまう。それもそうだろう。「恋」というのは理屈ではない。当人が「それでも好き」と言えば、どうすることもできないのだから。

逆に幸子女史や奥住さんは、反対するどころかチィちゃんの恋を応援する気マンマンだった。

『チィちゃんなら優しくて小さいから、尾島もそう無碍に扱わないよ！　カップルになれば、逆に守ってくれるんじゃない？　それに見た目も尾島とバランスいいし、お似合いだよ！』
『原口じゃなくてチィちゃんと付き合った方が、面白いじゃん！　原口どんな顔するかね？　ヒヒヒ～』

前者が幸子女史で、後者が奥住さんの意見である。
強く推す二人の姿に負け、そのうち和子ちゃんは何も言わなくなってしまい、他の三人も「まぁ、仕方ないか」とチィちゃんの恋をそっと見守るようになった。
一方私は、反対も賛成もせず始終無言を通した。曖昧な笑いで誤魔化し、自分の口から話題を盛り上げるような無責任なことも一切言わなかった。何も言わないどっちつかずの私にチィちゃんは何か言いたそうにしたが、何も聞かずそっとしておいてくれた。私がどんな目にあっているのか知っていたからだろう。酷く申し訳なさそうな顔をしていた。私はそんなチィちゃんの心遣いに感謝しつつ…心の中ではチィちゃんからこの話題に触れられないことに安堵した。何故だろう。この話題になると胸ズキンと痛み、モヤモヤして落ち着かなかったから。

そんな微妙な状態が続いていたのだが、キャンプから帰っきて尾島の態度が一変すると、奥住さんと幸子女史は、

『ここは思い切って解禁でしょ！　さっそくプロジェクトを開始しないとね?!』

……などという強気な発言を言い、「なんるべく尾島の目にチィちゃんの存在を植え付けるプロジェクト」を発動させたのだ。
そういういきさつで、１組で頻繁にお昼を食べるプロジェクトが

開始された。
　和子ちゃん達や幸子女史達が我が1組に頻繁に来るようになると、尾島達はキャンプ前とは違って、一年の時のように和子ちゃん達にチョッカイをかけるようになった。しかし、騒ぐのはいつも幸子女史や奥住さんばかりで（和子ちゃんと貴子は完全無視）、肝心なチィちゃんの印象を植え付けるどころではなくなってしまうのだ。それでもチィちゃん本人は気にしている風もなく、静かに笑って楽しんでいる様子。それに幸子女史と奥住さんはプロジェクトの目的を忘れたりしなかった。以前和子ちゃんや貴子が執行していた荒井美千子の株上げ大作戦を、そのままチィちゃんの株上げ大作戦に変更し、尾島達が私達の席の傍で食べる時は、チィちゃんのお弁当をベタ褒めした。それにつられて尾島達男子がこちらの席に覗きこむ。オマケに幸子女史と同じクラスの小関明日香も乱入してきて、チィちゃんの隣に仲良く並んで、お弁当をツマミ食いする始末。……余計なリスがもれなく付いてきたが、どうやら作戦は順調の意図を辿っている模様。

――ところがどっこい。
　世の中そんなに甘いわけがなく、ここで大きな問題が生じる。この光景を面白くないと睨んでいる女生徒達の存在がいたのだ。言わずと知れた原口美恵や成田耀子達である。

　初めは尾島達が先にチョッカイかけているので、さすがに彼女たちも「んもぅ！　他の子に話しかけちゃイ・ヤ☆」……などと彼女気どりで注意することはできなかった。それこそ鬼の形相で私達の方を睨むだけで我慢していたようだが、とうとう堪忍袋の緒が切れたらしく、尾島達男子がいない時間帯を狙って、奥住さんや私に苦情を申し立てた。

『ちょっと、休み時間うるさいのよね！』

『そーよ、せっかくイイ気分でお昼を食べているのに、食事がまずくなるのよ』
『それにさぁ、他のクラスの子をあんなに沢山入れていいと思ってるの?!　すごい迷惑なのっ』

ほとんど自分達が相手にされないから嫉妬丸出しの意見を捲し立てられ、私は途方に暮れた。
一言、「お嬢さん、それだから尾島に振り向いてもらえないのではないでしょうか?」とよっぽど原口美恵に言ってやりたかったが、言ったところで「そうよね〜」と素直に聞き入れてくれる相手でもない。怒りがさらに倍々ゲームで返ってくるだけならまだしも、物を隠されたり、便器に顔を突っ込ませられるなど、イジメの見本のような危ない目にあわされたらたまったものではない。それに、「二年が終わるまでは一緒の教室に暮らさないといけないので、我慢……」と、かろうじて言葉を噤んだと言うのに。
しおらしく反省をしている振りをしながら無言で通す私の横で、無謀……いや大胆にも「だからなに?」という奥住さんの態度は余計悪女達を煽った。

『あら、やっだぁ。別に学校の規則で他の教室で食べちゃいけないってルールはないでしょぉ?　第一さぁ、尾島の従兄妹の小関さんはどうするのぉ?　しょっちゅう1組にきてるじゃな〜い。それにチョッカイかけてくるのは男子で、私たちじゃないしぃ〜。それを私たちに意見するの、筋違いってもんでしょぉ?　それにそんな暇があったらさぁ〜さっさと尾島君にでも告ったらど〜ぉ〜!』

どうせフラレるでしょうけどぉ!

……とは付け足さなかったが、目は口ほどに物を言っていた。

このセリフに私の大きい身体と寿命が縮んだのは言うまでもない。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・前編～（前書き）

17日で公開一周年となりました、皆様ありがとうございます！

（……こんな生活、きっと二年で終わるわよね？　……ていうか、本当に終わるんでしょうね……。いや、確実に終わらせねば。クラス編成って、どうやったら裏工作できるんだろ？　やっぱ先生に賄賂を送らねばならないのだろうか。手っ取り早くお中元、お歳暮から責めてみるか？？）

そこまで考えたところでハッとした。どうも先程から思考が危険……いや、あらぬ方向へいってしまう。悪い方へ悪いほうへ考えてしまうそんな自分に叱咤し、プリントを折る作業に集中集中と気合を入れれば、相変わらず淡々と不気味な様子を醸し出しているブキミちゃんが、トントンとプリントを揃えていた。

「それにしても、ウチのクラス奥住さんを始め……荒井さんの周りの友達って賑やかですのね」

「え？」

今まで考えていた思考を読んだかのように、ブキミちゃんの口から奥住さんの話題が出たので、私はビックリして隣を見た。彼女の手元を見ると、折り目正しく折られてあるプリントがいくつも積み重ねられている。明らかに私よりも作業のピッチが速い。

「ほら、最近隣のクラスの笹谷さん達や１０組の……中山幸子さん、でしたっけ？　よくこのクラスに来るようになったでしょう？……益々１組が賑やかになったものね」

ブキミちゃんはバシッと整えたばかりのプリントで机を叩くように置いた後、ギラっとメガネを輝かせながら（もちろん本当に輝か

せているわけではないのだが、不思議とそのように見える）クイッとメガネを上げた。どうもその仕草は彼女の癖なようで、最近よく一緒にいる為か目に入ることが多い。私はブキミちゃんの意見にギクっと身体を縮め、「ごごごめんなさい……」と慌てて頭を下げた。

「あら、どうして荒井さんが謝るのかしら？」

「え、だって……に、賑やかというより、ももしかして、騒がし……いんじゃないかと……思いまして……ハハハハハ」

「そうね、確かに」

ブキミちゃんのズバッと遠慮ない意見にグッと息が詰まった。

「でも、1組（ウチ）の男子達の方がもっとうるさいし。それに奥住さんや中山さん達にいちいちチョッカイかけるんだから仕方ないわ。決して大人しい荒井さんのせいではありません。気にしてないわよ」

「……ハハ……」

（気にしてるんだな……）

ブキミちゃんは否定してるけども、熱烈歓迎とは程遠いようだ。最近殺気だっている原口美恵や成田耀子達とは違う意味で、彼女も騒がしいランチタイムに納得できないようである。

そうなんスよ～尾島達には私らも困ってましてね～！

……などと言いながら朗らかに笑いたかったが、この場では引き攣り笑いしか出てこなかった。

「……」

私は俯きながらプリントを折ることに集中し、今度こそ、確実に、

さっさとこの作業を終わらせることを目指した。

「そういえば。荒井さんのお友達といえば、隣の2組の『笹谷さん』も体育際サポート委員では？　彼女去年もやっていたから、なにかあったら彼女に聞くといいわ。2組の学級委員は……たしか『宇井さん』でしたよね？……良かったですわね。ほら、ウチは『佐藤君』は頼りになるけど…当のサポート委員相方が全然頼りにならない男だし。荒井さん、頼んだわよ？」

「……ハイ」

――『体育祭サポート委員』。

なんて憎い響きなのだろう。

私は心の中でガックリと項垂れた。

何故ならこれが悪女達の機嫌が悪いもう一つの理由だったからだ。

それは、建てつけの悪い校舎にシトシトと雨が降り注ぎ、期末テストも迫った七月上旬の梅雨のある日。つい先日のホームルームでの出来事である。

散々揉めに揉めた挙句、結局最終的にはジャンケンで委員が決まり、私と類人猿がサポート委員をやる羽目になった時から、悪女達……特に原口美恵の視線が益々厳しくなり殺気だっているのだ。まったく原口美恵も大袈裟だ。別にジャンケンで私に派手に負けたからと言って、尾島と永久に別れるというわけでもなかろうに……。

（それにしても……原口美恵相手に無駄にストレート勝ちしてしまった私の右手、空気読めよ！！）

思わずその右手が恨めしくて、グッと握った拳に文句を言ってはみたが、決して私の右手も私自身にも罪はない。ましてや臨んだことでもない。

大体原口美恵も尾島にアプローチしてる暇があったら、ジャンケンに勝つ必勝法にでもアプローチしてればよかったのだと心の中で悪態つきながら、ホームルームの時のことを思い出した。

＊＊＊＊＊＊＊

雨のせいか、試験前のせいか…ジメっとして憂鬱な雰囲気が漂う、その問題のホームルーム。

先生に一任された学級委員達は、席を立って教卓に向かった。

『それでは、＜第●回・山野中秋季体育祭大会＞の体育祭サポート委員を選出したいと思います』

学級委員であるブキミちゃんがメガネをクイッと上げ、教卓からクラスメートをねめつけ……じゃない、見渡した。

その他のクラスメートはダルそうに私語をしながら、明らかに「メンドクサイ」という雰囲気を隠そうともしない。それもそうだろう、体育祭は夏休み明けの2学期の行事であり、今の段階では実感が湧かないからだ。

その時、ブキミちゃんの横に立っている同じく男子の学級委員である、佐藤伸君がバンバンと教卓を叩いた。

『オラオラ、オマエら良く聞けよ！　これから体育祭サポート委員の大まかな仕事を、伏見から説明してもらうから。伏見、お願いできるか？』

佐藤君はやる気のない返事を上げる生徒達に対して「しょうがねぇなぁ」というように顔を顰め、ブキミちゃんをチラッと見た。ブキミちゃんは頷き、低いハスキーボイスを淡々と教室内に響かせた。

その内容は、

一つ、体育祭サポート委員は男女一人ずつ選出すること。
一つ、生徒会役員、通年の体育委員は体育祭サポート委員から外すこと。（体育祭の運営メンバーになっている為）
一つ、学級委員も体育祭委員から外すこと。（体育祭サポート委員と共にサポートメンバーになっている為）
一つ、体育祭委員と共に、色別対抗リレー・応援合戦のメンバーの選出をすること。
一つ、軍旗・応援合戦等のアイデアを各色別でまとめ、提出すること。

……などである。
ブキミちゃんが一通り説明すると、クラス内は一層ダルそうな雰囲気に包まれた。

『誰か立候補する人、いますか？』

ブキミちゃんの問いかけで、今まで騒がしかった教室は急にシーンとなった。お互いに顔を見合わせ、「こんな面倒なこと……やる奴いるのかよ？」というふうに目配せをしている。もちろん私も俯いて学級委員の二人と目線を合わせないようにした。「ま、期待はしてなかったよ」というように佐藤君が溜息を吐き、ブキミちゃんがトントンと教卓を指で叩きながら仁王立ちしている姿が目の端に映る。

『……仕方ありません、手っ取り早くクジ引きにしましょう。先生、それでいいですか？』

待つだけ無駄というような口調で、先生に指導を仰いだブキミちゃん。急に聞かれた我が１組担任・社会科歴史担当の青島（チンタオ）先生は、

穏やかな動作で手を上げ「いいぞ、それで。こっちは気にするな」という合図を送った。その合図を受け、佐藤君はサッと「クジ」が入った二つの紙袋を教卓の下から出した。何気に用意がいい。

再び教室内は文句と非難で騒がしくなったが、『文句のある奴にやってもらうぞ！』という佐藤君の一言で生徒達は不満を飲み込んだ。

『それでは体育委員の後藤君と成田さん以外の人、クジを引いて下さい』

佐藤君とブキミちゃんはそれぞれ紙袋を持ちながら窓際の席、つまり私の方に寄って来た。その紙袋の中のクジを順番に引いて行くのだろう。私がブキミちゃんがズイと前に出した紙袋に手を入れようとしたその時、甲高い声がそれを遮った。

『すみませ～ん！』

生徒達がざわめく教室に、鼻にかかった耳障り……じゃない、可愛らしい声が響き渡った。その声にクラス中の視線が集中する。声の主は教室の中央辺りに座っている「成田耀子」だった。

『……あら？　成田さん、何かご意見でも？　それともあなたが委員を決めてくれるのかしら？』

進行を妨げられ明らかに機嫌の悪いブキミちゃんが、メガネをクイっと上げながら低いハスキーボイスを轟かせる。それに対して成田耀子は、“そんな訳ないでしょ！”と睨んだ後、「ちょっと提案があります！」と鋭い目線と間逆な甘い声を上げた。

『いっつも出席番号の早い人からクジを引くのは不公平かと思いまーす。たまには、最後の方の人から引いてはどうでしょうかっ！』

ブキミちゃんにガンを飛ばしたまま発言する成田耀子の意見に、教室内はまたざわめきだした。反対する者、賛成する者、再び騒がしくなった生徒達に佐藤君が「おい、静かにしろよ！」と声を掛ける。

……が、成田耀子の意見に原口美恵は「それ賛成～！」と同意し、女子のボスナンバー1・2の意見にその他の女子は抵抗できずに黙っている。オマケに廊下側の出席番号後半の生徒も賛同し、益々混乱した。

私は伸ばした手を引っ込めてブキミちゃんと佐藤君を見た。すると佐藤君は「どうする？」というような顔をブキミちゃんへ向ける。

そのブキミちゃんは、「うるさい雌豚共め！」……という意味はこめられているかどうかはわからないが、あまり感じのよろしくない視線を悪女二人に向けた。しかし反論するだけ時間の無駄だと思ったのか、無言で佐藤君に目配せしながら出席番号の最後尾の席までツカツカ歩き、クジ引きが開始された。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・中編～（前書き）

お食事中の人（それ以外の人にも）には不適切な文があります。お許し下さい。

『それでは、1組の体育祭サポート委員は、男子は「星野君」、女子は「荒井さん」に決定しました。両者席を立って下さい。皆さんも拍手をお願いします』

ブキミちゃんのハスキーボイスによる最後の判決と、その後に続くやる気のないクラスメートの拍手が教室内に響き渡った。

彼女のセリフの中に時々見え隠れする弾んだ口調は気のせいなのか。……いや、気のせいではない。その証拠にブキミちゃんの口元に滅多に見れない奇妙な笑いが浮かんでいる。それは、

“……フフフ、本当に良かったわ。サポート委員が操りやすいメンバーで”

……という、あからさまな安堵を隠しもせずに、ニヤリとした眼と口をこちらに向けている。

私は学級委員に促されて、一番最後に引いた「アタリ」というクジを握りしめながら席を立った。本当なら沢山あるクジの中から選べた筈なのに、成田耀子の提案のせいで運命が大きく枝分かれしてしまったのだ。

（くそぉ……あの「悪女」らめぇ～余計なことを言ってくれて、どうしてくれよぅっ！）

最後の最後までジリジリさせられ、私の後ろの席の子がハズレがとわかった時点でマジでそう思った。紙袋の中に一つだけ残されたクジ。引かなくてもクラスの女子の顔が全員喜びに満ち溢れていたら、最後の1枚は当然「アタリ」と決まっている。が、早い段階で

男子の「アタリ」を引いたのが星野君だとわかっていたので、悪女に対して抱いた憎しみは少しだけ静まった。そしてパートナーがあの星野君で良かったと心底安心した。運が悪かった、仕方がない程度で諦められる。

それでも不安は拭い切れない。体育祭を運営する通年の体育委員は「後藤君」と「成田耀子」であり、両方ともは尾島の取り巻き中心人物だからだ。それでも彼らは体育祭運営そのものが担当になるし、きっと忙しくてそれどころではないはず……多分。

それより、サポートするメンバーは星野君の他、学級委員の「佐藤君」と「ブキミちゃん」。そのうちブキミちゃんは生徒会も兼ねているので実質活動するのは三人だとは思うけども、その男子二人が最も安心できて気兼ねなく心から協力できる人物なので心配ない。確か佐藤君と星野君は以前も同じクラスだったから知らぬ仲でも無いだろう。それに女子の方の選抜メンバーを決めるのも、ブキミちゃんさえいれば、成田耀子に対抗できる。

（……それに、2組の「学級委員」は和子ちゃんだし。生徒会ＯＢとして日下部先輩も手伝うから、貴子も「サポート委員」を今年もやるって言ってたっけ……ちょっとはマシかも！）

俯いた顔を起こして学級委員の方を見れば、二人とも「よろしく頼むな」という顔をして頷いてくれた。星野君の方を確認すると、やはり彼も「しょうがないよな」という顔で苦笑いだった。その表情を見て私を嫌がっている感じではないのでホッと一息ついた、その時。

異議あり！

その声は背後から聞こえた。

低くて耳障り……だけじゃない。怨念が籠ってそうな呪いの言葉

が、「俺（私）じゃなくて、本当に良かった～！」という安堵の雰囲気が漂う2年1組の教室を切り裂くように突き抜けた。

それはさながら「ギャートルズ」に出てくる、叫び声が石になって襲ってくるような感覚。どうやら「いぎあり」という文字の石が、学級委員に直撃したらしい。その証拠に二人は突然のダメージ（によるのかわからないが）になんとも顰め面である。

もう既に耳に染みついている声と殺気の方向に恐る恐る振り向けば、1組のボス猿が怖いほど真剣な顔で、どこかの独裁者のようにピンと腕を伸ばし手を上げていた。普段授業中には絶対お目見えしない姿だ。

（オォオイ！　ななんでアンタが異議を申し立てるのよ！）

せっかく平和なメンバーで落ち着いたのに……これ以上何が御望みなのか。もしや、お猿さんが大活躍できる体育祭という神聖な競技の委員が、荒井美千子だと気に入らないってか?！

私は（心の中で）目を光らせた。

同時に即座に立ち直ったブキミちゃんの目もギラっと光った（気がした）。それは、

“……ほほう、非常にムカつくわ。猿のくせにイチャモン付けるとはいい度胸ね”

……という御立腹な様子を隠しもせずに、眼鏡を上げながら厳しい視線をボス猿に向けている。無論（心の中で）私も。

バチバチバチッ！

小さくざわめく1組の教室を横切る一本の導火線。
それはボス猿である孫悟空と、その猿を押さえつけようとするオカッパ眼鏡の三蔵法師から放たれており、中央で派手に火花を弾かせてる。どうでもいいが、最近こんな光景ばっかりだ。

『……あら、尾島君。それはどういう意味かしら？　それともなに？　この結果に御不満でも？』
『御不満もなにも、男子は今日一人欠席者がいるだろ、「マイケル」だよ！　もしかしたら星野（かずゆき）がクジ引く前に、そのマイケルがアタリを引いたかもしれねぇじゃねぇか！　不公平だから、マイケルが学校きたらやり直しした方がイイんじゃないでしょうかぁっ！』
『マイ……いえ、「本間君」が休みなの仕方ありません。諦めてください』
『それじゃ星野（かずゆき）が気の毒だろーがっ！』
『それなら何故クジをやる前にそのことを言わなかったのかしらっ？　後から言われても迷惑なのよ！』
『～っっ！　そ、そ、それじゃ公平じゃねぇだろっ！』

段々ヒートアップしていく妖怪……いや、尾島とブキミちゃん。
尾島の意見に悪女と取り巻き達は「そーよ、そーよ！」と同意していたが、尾島以外の男子には微妙な空気が流れていた。せっかく無事委員が決まったのに、今更やり直しなんて冗談じゃないという空気が。そりゃそうだろう、万が一もう一度やり直しになった場合、今度は自分にその厄介な役割が回ってくるかもしれないのだから。しかもパートナーは「荒井美千子」。自分で言うのもなんだが、体育祭という派手な行事に選抜された委員にしては非常に微妙な人材だ。しかし「やり直し」意見を豪語するのは、裏番とは違う意味で学年一厄介なボス猿。結果、だれも意見ができない。
（こんな時にが休むなんて……まったく間が悪いよ、本間君！　…

…ってもしかして……またわざと？）

自分が考えたついた思考に顔が歪み、本間君の気も間も抜けた顔が頭の中を横切った。

＊＊＊

マイケルという名の愛称で2年1組に在籍している、こんな大事な時に休んだ「本間君」。

しかし彼はハーフどころか、「本間マイケル」という名前でもなければ、「パォッ！」などと雄たけびを上げるわけでもない。生粋の日本人である本間君の正式なフルネームは「本間厳太（ほんまごんた）」と言う。冗談のようだが、本名だ。そんな本間君が初めて尾島とご対面した時、

『ホンマにゴンタか？！』

などと尾島からバカにされ、笑われていた。

普通なら佐藤君のように苦笑しながら『やめろよ』と対抗するか、一年の時に一緒だった「グリコ」や「ノグティー」のように不本意だけども黙りこむか、「ツルちゃん」のように青筋を立てるか……ともかく、尾島のあだ名命名の心をくすぐる反応が何かしらあるもんだが、本間君の場合は皆と少し違う。彼はなんと反応を示すどころか、尾島の爆笑に対して欠伸で返したというツワモノだったのだ。

しかもこの本間君、「厳太」などと厳つい名前とは程遠い身なりと雰囲気であり、彼の事を言葉で表現すれば以下のような言葉が出てくる。

ダルイ。

メンドクサイ。

やる気がない。

天然くるくるパーマ。
万年寝太郎。
ヘコキ虫。

……まだまだ上げればキリがないが、まぁ、こんな感じである。
こんな感じの本間君は授業でもやる気を見せるどころか、思いっきり眠気を披露して先生に何度も何度も注意されていた。たまに起きたと思えば、直後にオナラをかます始末。

『マイケル、クセぇよ！　屁なんかすんな！』

もしくは、

『マイケル、またかよ！　屁なんかすんな！』

この台詞は一年を通して我がクラスで飛び交う最も印象深い言葉となるのだが、本間君はそんなことを言われてもどこ吹く屁……じゃなく風で、屁だけにヘラヘラ笑っていた。しかし彼の後ろと隣に座っている生徒はたまったものではない。
しかもその本間君は、時々学校を休むクセがあった。それも学校の行事がある時や、大事な決めごとをしなければいけない時に限って狙ったかのように本間君の席が空いているのだ。（もちろんキャンプも休んだ）その理由は様々で、病欠の時もあれば、単なる寝坊の時もあり、親戚が危篤だという時もある。１年からそんな感じで、一体何人の親戚が生死の境を彷徨ったかわからぬ程だ。
学校に来れば来たで、いきなり靴下を脱いで背もたれに干すという意味不明な行動を取る本間君。
どうも彼は大の靴下嫌いらしく、常に素足に直で上履きを履いていた。（間違っても石田●一のような無駄な色気や、ましてやセレ

ブ感などとは当然無縁である）たまにその上履きすら脱いで教室を歩いている時があった。野生児丸出しで、某ネコ型ロボットの寄生虫……ではなく、友人である「野比の●太」のような「本間厳太」君が生み出す奇怪なエピソードはこれだけではなかった。

そう、あれはキャンプ後の抜き打ちで行われた身体検査の時――。欠伸で返されたことを根に持った尾島の悪戯のせいで、靴下を隠された本間君。ピンチである。しかしこんなことで本間君は慌てない。彼は何を思ったのか、靴下を探そうとはせず、ノートを一枚破き上履きに挟んで薄い縞模様の靴下に見立てるという偉業をやってのけたのだ。奇跡的にも一瞬パスしそうになったが、結局先生にバレた。暫く無言だった先生は、ボーっと立ってる本間君に対して注意どころか「靴下、探しておけ」という静かな一言を残してスルーした。

一方、派手なTシャツを着るな、この短ランはなんだ、カラーはどうした、裏ボタンを「乙杯羅武（オッパイラブ）」などといういいかがわしいものを付けるんじゃない、大体そんなものを何処で手に入れたんだ！　……などといういくつものお叱りを受け、「平等じゃネェ！」と文句を言う尾島に対して検査した先生のお言葉はこれだった。

『尾島よ。オマエの数ある校則違反と本間の靴下の件では、そもそも罪の重さ……いや、次元が違うんだよ。それにな？　本間が取った行動をよくよく考えてみろ？　バカバカしいながらもあの発想の豊かさと何食わぬ顔で検査を受けた図々しい度胸は、称賛に値するだろうが！　あのやる気のないダラけてトボけた本間がだぞっ？！』

『……』

検査した先生は本間君の行動にいたく感心したせいもあるが、その日の授業で本間君の靴下が背もたれにぶら下がっていることを既に確認していたそうだ。

余談だが、先生達は例え本間君がたまに何処かヘフラつき、教室以外で寝ていて授業に出席していなくとも、その靴下の有無で本間

君の出欠席を把握しているとのことだった。
　ちなみに尾島の「乙杯羅武（オッパイラブ）」という裏ボタンはスルーする訳にはいかず、没収となった。尾島は渋々「世界征服」という裏ボタンを代わりに使用してるらしいが、しつこく「特注だったんだぞ、乙杯（オッパ）羅武（イラブ）返せ！」と先生に訴えており、現在交渉中だそうだ。ま、特注だろうがなんだろうが、そんな宇宙一くだらないことはどうでもよい。つーか、そんなものを特注すること自体問題だ。大体「世界征服」という裏ボタンも笑えないだろ。
　ともかく、ある意味大物的な本間君の行動の数々に、さすがの尾島も「クッ、負けたぜ……」と素直に本間君に頭を下げ詫びを入れた。それに対しても堂々と欠伸で返し、「気にしてないから」という寛大な……というよりむしろどうでもいいよ的な態度の本間君。尾島はそんな本間君になにかキラリと光るものを感じたのだろう、それからは「我が同士よ！」と彼を認めた。
　それからというものの、「マイケル、マイケル」としきりに面白がって話かける尾島に、鬱陶しそうに流す本間君。
「そんなツレナイ態度すんなよぉ、マイケルぅ」とさらに食い下がる尾島（バブルス）に、とうとう諦めて答えてやってる本間君（マイケル）。
　主従関係が逆なのでは？　……と思うありえない奇妙な友情関係が、ここに成立したのであった。

　一日中寝ている以外はオナラをかまし、一体学校へ何しに来ているかわからず、やることなすこと見た目通りでイメージを裏切らない本間君の生活は一体どうなっているのか。非常に気になるところではあるが、不思議と彼の生活スタイルは謎に包まれたままだ。
　それもその筈、本間君は中学に入る時に「群馬の富岡」からこの地に引っ越してきたらしく、過去の本間君を誰も知らないのだ。
　この時点でもう勘のいい読者はお気付きだろう。

　本間は「富岡」から引っ越してきた。

富岡。
マイケル富岡。
マイケル。

以上が、尾島が本間君に「マイケル」というあだ名をつけた過程である。

バカバカしいが本当だ。本間君は「マイケル・ジャクソン」とも、「マイケル富岡」とも似ても似つかない存在ではあるが、何故か我が1組の間で「マイケル」の愛称で親しまれているのであった。

＊＊＊

本人がいないところで「マイケル」の名前が飛び交う2年1組。

（……いや、ここは本間君がいなくて正解だろ。むしろ本間君がアタリを引いたらエライこっちゃだよ！）

多分この教室にいる生徒達が同じことを思っただろう。無論、学級委員や担任（チンタオ）も。とうとうこのどうしようもない争いを止めたのは、黙って聞いてた佐藤君だった。いつもの温厚で爽やかな雰囲気とは打って変わり、再び教卓を叩きながら「いい加減にしろよ！」と怒鳴ったのだ。

『悪いけど尾島、今日までに委員を決定しなきゃならないんだ。だから大人しく従え！』

どうやら佐藤君には、尾島のボス猿威力（パワー）など効かぬようだ。彼は学級委員の威厳をふるわせ、尾島に向かってビシッと「異議」を却下した。そう言えば……誰にでも平等で温厚な佐藤君だが、クラスの足並みを乱す奴には、例え仲間であっても迷わず意見を言う揺るぎない精神を持つ一面があったことを思い出した。

『はぁっ？　マジかよっ、カッコ！』
『そのカッコってやめろ！　……そうか、わかったよ、尾島。そこまでこのクジが不満なら、オマエに委員をやってもらう！　意義を唱えたんだから、文句はないよなっ？！』

以外にも未だに「カッコ」というあだ名を根に持っている……じゃなく、少し機嫌の悪い佐藤君がポロっと出した意見に、私を含めクラス全体が「えぇっ？！」とどよめいた。

（ささき佐藤君！　なななんてことをっ～！）

私は「そりゃ横暴ですがなっ！」という顔で慌てて佐藤君の方を見た。

委員のパートナー名が、「星野」と「尾島」ではかなり……どころではない、雲泥の差がある！　ありすぎる！！

私のこの時の心情を詳しく説明すれば以下のようになる。

新婦の父（佐藤君）に引かれ、バージンロードを厳かな気分で歩いている新婦（荒井美千子）。神父（伏見かおり）の前で待っている旦那様は、数億円を稼ぎ出すプロ野球選手の穏やかスマイルの新郎（星野君）。そんな二人は「これからも一緒に力を合わせて子作り……じゃないっ！　体育祭サポート委員をやると近います！」と宣言した後、誓いの濃厚キス……いやいや、熱い青春のハグを交わしてメデタシメデタシとなる筈が――。

「一緒に委員やりぬこうぜ！」という熱いスクラムを組むようにガバッと抱擁していたが、何故か新郎は私のボインに密着するように身体を擦り付け、オマケに尻を撫で回している。新郎の異変を感じとり、少し顔を上げてパートナーを見上げてみれば、そこには同じ白い燕尾服だけどもシルク素材の紫のシャツをインして、どうみても不埒な商売で稼ぎまくっているチンピラスマイルの新郎（尾島）

にすり替わっていた。

……という感じだ。

これではいくら鍛錬を積み重ねた荒井美千子さんでも、あまりの衝撃に驚きもするってモンだわい。まぁ、手っ取り早く言えば、今まで晴天だった空が、曇りなどというまどろっこしさを飛ばしていきなり「台風」が来た心境だ。しかもかなりの大型だぞ！

（じょじょじょ冗談じゃない！　これ以上争いごとに巻き込まれるのはゴメン被る！）

それこそこちらが「異議あり！」の旨を唱えようとした、その時。

『私、体育祭サポート委員、立候補します！』

原口美恵の鋭い声が私の背中に突き刺さった。

彼女の力強い「恋人宣言」に、教室内に黄色い悲鳴が飛び交い、冷やかしと口笛の嵐でどうにもできない状態になった。私は「ガッチャ！　これ幸い！」というように、笑顔と揉み手で「いやいやいや、原口美恵さんにこの体育祭サポート委員を譲りますんで、ゲヘヘ」と言おうとしたら、前方から機嫌が最高潮に悪いブキミちゃんの魔光線と背後から刺す人間以外……そう、猿の殺気に動きを封じられてしまった。とうとうこの騒ぎに終止符を打ったのは、今までノホホンと見ていた担任の青島（チンタオ）先生。

『いやいやいや、今年の生徒は積極的だな～。そんなに委員やりたけりゃ、四人とも前へ出ろ。ここは恨みっこなしでジャンケン三回勝負にしよう。三回先に勝った方がメデタク委員決定ー』

『『『『……』』』』

（……おい。この時点で委員を希望してるのは原口だけだろ、青島（チン）先生（タオ）よ……）

どうみても四人の心中を無視した鶴の一声（チンタオ）で委員選抜方法が決定し、それぞれの思惑を秘めた温度差のある男女四人が、大勢が見守るギャラリーの目の前でジャンケンの勝負を行った。

――その結果。

男子は温度が高い方の「尾島啓介」が勝利し、女子は温度がマイナスの方の「荒井美千子」が勝ったのであった。

紙袋に残った最後のクジを引いた私は、この時一つの教訓を得る。

「残りモノには福がある」という諺は、必ずしも全ての事態において適用することではないということを――。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・後編～（後書き）

本間君、この先も出番があるといいなぁ。出したいなぁ。

8月15日の乙女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち？

ミーン、ミーン……
ジジジ……

開けっぱなしの窓から、蝉の鳴き声が聞こえてきた。その大合唱ぶりが午後の茹だるような暑さをさらに煽っている。外に出て空を見上げれば、澄み切った青空に厚い入道雲が浮いているに違いない。

「あ～暑いねぇ……」

私は缶ジュースについていた水滴から目を離し、横になって雑誌を片手に扇ぎながら呟いている和子ちゃんを見た。和子ちゃんが「暑い」と言うとおり、外は三十度を超える夏真っ盛りだが、私達が今居る部屋はかなり上の階数にある為、窓から入る風のお陰で幾分か涼しい。マンションの八階ともなると風通りが良いのだろう、その証拠に薄いレースのカーテンを大きく波立たせている。そのまま寝てしまえばきっと身体も冷えてしまうに違いない。この部屋に招待してくれた貴子は、玄関を開ける時申し訳なさそうに、

『ごめんねぇ、ウチ、ちょっと暑いかも。クーラーが故障しててさ。今お盆時期だし修理が来週なんて、ホント最悪』

……とぼやいていたが、部屋を通り抜ける風の他に、扇風機とジュースもあるので問題なかった。

それでも暑がりの和子ちゃんには厳しいのか、この場にいるのが女子だけなので、Tシャツの裾をガバっと持ち上げ、臍を見せながら雑誌でバサバサと音を立ててTシャツの中に風を送り込んでいる。

「ちょっと、和子！　暑い暑い言ってないでさっさと宿題写しちゃいな。ゴロゴロしてると夕方になっちゃうよ」
「……ん～そうなんだけどさぁ。こう、メンドイっていうかぁ……」

幸子女史が食べ終わったアイスの棒で、やる気のない和子ちゃんのわき腹を刺していた。ちなみにアイスの棒はハズレだったみたいだ。和子ちゃんがやっと起きるような仕草をしたと思ったら、うつ伏せにまた寝ころんでしまった。仰いでいた音楽情報雑誌「ＰＡＴｉ・ＰＡＴｉ」をペラペラめくり始める。もう、和子！　と幸子女史が苦笑いした時、今迄台所でなにやら作業をしていた貴子がお盆に人数分のスイカを乗せて部屋に入って来た。

「お待たせ～冷えてるよ」

スイカを持ってきてくれた貴子は、ショートパンツにタンクトップ姿という涼しげな恰好をしていた。スラリと伸びた綺麗な足が羨ましい。私だって背が高くて決して足は短くないというのに……やはり太さの問題だろう。小学生の時よりは痩せたが、まだまだスタイル抜群の貴子には程遠い。その貴子は大分伸びたサラサラな髪を二つに括っていた。なんでも来週の夏祭りで浴衣を着る時に結い上げたい為、切らずに我慢しているのだそうだ。

「待ってました！！」

赤く熟れたスイカを見て叫んだ和子ちゃんは急いで雑誌を閉じて飛び起き、机の上に広げていた勉強道具を急いで片づけスイカの為にスペースを開けた。

＊＊＊

「あ～あ、夏休み、もう半分過ぎちゃったねぇ」

スイカを食べおわった和子ちゃんは、しみじみと言う言葉がピッタリな憂いのある言い方で呟いた。私も最後の一切れを口に入れながら頷き、幸子女史も「ハァ」と溜息をついた。貴子はスプーンを置いてテーブルの上にあったテレビのリモコンに手を伸ばし電源を入れると、白黒の古い映像が映し出された。ラジオを目の前にして泣いている人や、神妙な顔をしている映像。流れてくる音は、パチパチとノイズが入ったラジオから流れる昭和天皇の肉声。

『朕(ちん)深く世界の大勢と帝國の現状とに鑑(かんが)み、非常の措置を以て時局を収拾せむと欲し……』

厳かな声が静かな居間に響き渡る。壁に掛けてある日めくりカレンダーの「１５」という数字が目の端に映った。今日は終戦記念日なので、その特集をやっているのだろう。

「……もう１５日だもんねぇ。それよりもさぁ、来週の山野神社のお祭りどうする？　今年もみんなで行くよね？　貴子は？」

幸子女史がテレビから目を離し、スイカの種を一か所に丁寧に集めながら聞いてきた。

「やっぱ日下部先輩と、行くの？」

和子ちゃんは扇風機の前を陣取り、涼しい風を目一杯受けている。冷たいスイカも食べたので暑さが治まったのか、眠たそうなトロンとした目を細めながら言うと、貴子は「あ～うん……」と少し言葉を濁して、私の方をチラっと見た。

「いーなぁ。私も少年隊のヒガシのエスコートでお祭りにでも行きたいなぁ」
「そうよねぇ。あ～あ、どっかに東先輩みたいな人、いないかなぁ……」

幸子女史は溜息と共に呟くと、和子ちゃんはビクッと身体を震わせ、その後ガックリ肩を落としてしまった。それを見て幸子女史はマズった！　と思ったらしい。「あら、やだ、じょ、女子だけの方が気楽でいいじゃん?!」と慌てて弁解した。私もバックアップするように、「そそそうだよ！　一杯美味しいの食べようよ!!」とフォローする。和子ちゃんは寂しそうに背を向けたまま、無言で小さく頷いた。

「「「……」」」

（……やっぱ、まだ引きずってるのか……）

和子ちゃんの落胆ぶりを見て、そっと息を吐いた。

私があのキャンプで雄臣に彼女いるらしい情報を落とした時、和子ちゃんと幸子女史はあからさまにショックを受け、ガッカリしていた。特に和子ちゃんは暫く元気がなかった。その証拠に、いくら尾島がランチタイムにチョッカイ出そうともほとんど上の空状態で、尾島を無視していたというより存在すら目に入ってなかった様子だ。その姿は見た私達は、「和子ちゃん、本気（マジ）だったんだ……」と改めて思い知らされた。いつも元気な和子ちゃんが落ち込んでいる姿は本当に気の毒で、私も心が痛んだが、告白する前に雄臣がカノジョ持ちと判明して良かったと思っている。だって、告白した後に彼女がいるとわかったら……、もし付き合うことができても、後々大好きな人が人間じゃなく鬼神・修羅だとわかったら……私ならショックだ。大体あの鬼神・修羅に和子ちゃんはもったいないくらいだ。それに、一筋縄ではいかない雌豹（ブキミちゃん）も雄臣を狙ってるし、むしろ変な

争いごとに巻き込まれなくて良かったと思った。

7月に入ると和子ちゃんはやっと少し元気を取り戻し、再び少年隊のヒガシ一筋となった。「宇井和子を励ます会」として皆で行った原宿でゲットした、ヒガシのプロマイドを眺めては「浮気してゴメンネ」とボソリと呟く和子ちゃん。皮肉なことに、少年隊のヒガシと同じ「東」がつく雄臣。最初から「俺、付き合ってる彼女がいます！」と言っておけば、罪もない乙女達をこんなに翻弄せずに済んだのに。まったく、あの鬼神・修羅め……腹立たしいことこの上ない。

平和な日々を過ごす為、これ以上私達に近づいて欲しくないのだが……世の中そうは上手くいかないらしい。

「ねぇねぇ、ミチ。お祭りって……東先輩来るの？　なにか知ってる？」

幸子女史の言葉に私の頬は引き攣った。貴子は私の方を見て再び目配せした後、少し微笑みながら話に集中させる為テレビの電源を切った。

「そのお祭りと東先輩のことなんだけど……美千子」

私は言いたいような言いたくないような複雑な顔で小さく息をついた。雄臣の話題になると、どうも顔が引き攣ってしょうがない。和子ちゃんは黙って背を向けたまま扇風機の風を受けていたが、身体全体が一語一句逃さぬよう敏感になっているのは嫌でもわかった。できればこのことを言いたくなかったが……妖怪が生意気にも足軽に命令、いや、懇願して来たので、私はつい先日雄臣と（無理矢理）約束させられたことを渋々口にした。

「……も、もしかして、東先輩……私達と一緒に来る、かも……」
「「えっ？！」」

私の溜息混じりの言葉に、幸子女史と和子ちゃんが同時に声を上げた。私にとっては有り難くない展開だが、彼女たちにしたら予想外の幸運な展開だったのだろう、思いっきり声が上ずっていた。和子ちゃんがクルッと扇風機に背を向けピシッと正座をしながら身を乗り出してきた。私は貴子にチラリと目配せすると、貴子は頷き遠慮がちに口を開いた。

「実はね？　私、日下部先輩からお祭り一緒に行こうって誘われたんだけど……こう、二人でお祭りに行くなんて……恥ずかしくって……。ほら、山野中の生徒がほとんど来るじゃない？　その中を堂々と二人で行くのは、ちょっと……。それだったら皆で行かないかって、日下部先輩が言ってくれて……」

貴子は顔を赤くしながら、徐々に声を弱めて言った。その後を追うように私が捕捉を説明し始める。

「ほ、ほら、東先輩と日下部先輩って仲がいいでしょ？　だだだから、日下部先輩が東先輩に話したみたいで……貴子とみんなで行かないかって……」
「「うっそぉ！！」」
「あ、で、でも、いい色々とオマケがついてくるの！　妹とアラタも一緒に……あああとねっ？！　他にも」
「「ギャ～！！！」」

全部言い終わらないうちに、幸子女史と和子ちゃんは奇声を上げた。「あああの、それでですね……」とまだ大事な続きがあるのに、抱き合っている二人には声が届かないみたいだ。貴子の方を見れば、

彼女ははにかんだ笑いを浮かべている。私は和子ちゃん達の興奮が収まるまで辛抱強く待つことにした。

8月15日の乙女たち？（後書き）

雑誌「ＰＡＴｉ・ＰＡＴｉ」、今でもあるみたいですね！菩提樹も中学生の時買って読んでました。今も素敵なミュージシャンが多いですが、この話の舞台である８０年代後半から９０年代にかけてはバンドブームで、花形ミュージシャンが目白押しでした。懐かしいです。（＊＾―＾＊）

8月15日の乙女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち？

我が町にある山野神社は規模はそう大きくないのだが、由緒正しくかなり古い神社である。

その神社で毎年行われる夏祭りは、山野中に通う学区の子供達の心くすぐる夏のメインイベントの一つでもあった。盆踊りのやぐらが立ち、神社までの細い道に所狭しと露店が並び、数十発だが花火も上がるのだ。

私は毎年山野神社で夏祭りが行われているのを知ってはいたのだが、実は中学に入ってから初めてこのお祭りに行った。小学校まで友達がろくにいなかった私には、一緒に行く相手がいなかったからだ。お祭りなんて、小さい時に行った母の実家の近くのお祭り以来で……初めて友達同士で行くお祭りに私は心を躍らせた。

お祭りという空間はなんとも不思議なもので、普段見あきている学生服から私服や浴衣姿という違った姿をお披露目することもあって、生徒達に自然と気合いのスイッチを入れてしまうようだ。何故か照れ臭さと嬉しさが入り混じった甘酸っぱい気持ちになってしまう。友達同士妙にハイテンションで、祭りでクラスメートや知り合いを見つければ、学校ではさほど交流があるわけでもないのに大袈裟に歓びあったり挨拶をかわしてしまう、なんとも摩訶不思議な空間。そして好きな人を見かけた時のあのなんともいえない高揚感……まさしく祭りは青春の一ページに相応しいシチュエーションであり、そんな一時を和子ちゃんや幸子女史、奥住トリオ達と七人で分かち合ったのは去年の話である。

……では今年は？

残念ながら「青春の一ページ」が「地獄のダメージ」となりそうな予感に内震える、荒井美千子。

事の発端は貴子が話した通り、日下部先輩が貴子を夏祭りに誘い、『二人きりは、ちょっと……生徒も多いし……恥ずかしいし』と渋ったところから始まる。年下の可愛いカノジョ思いの日下部先輩は『そっか……』と残念そうにしながらも、その意見を取り入れるという年上としての配慮を見せた。しかし、例え品行方正・成績優秀のデキた日下部先輩でも、年頃な普通の中学生男子である。「二人きりでイチャイチャ☆ルンルン」とまではいかないが、やっぱりそれなりに愛しのカノジョとラブラブしたいというのが本音だろう。毎回図書館でデート&学校と家への送り迎えだけでは一行に二人の仲は進展しない。その相談を受けた雄臣は、『それじゃあ……』とある提案をしたのだ。その結果、私が安西先生の塾へ言った時、妹がレッスンをしている間に雄臣から有り難くない相談をもちかけられることになった

安西家のダイニングで英語の構文をブツブツ暗記していると、雄臣がおもむろに向かい側に座った。

『ミチ、夏祭りの日には開けとけよ』

『……え？』

『え？　じゃないよ。祭り、一緒に行こうって言ってんの。好きなものを買ってやるから、その代わり浴衣着てこい。そうだな……やっぱ紺生地で帯は赤か黄色だな。もちろん髪はアップにしろよ』

『はぁっ？！』

『はぁ？！　……て、オマエね、せっかく俺様がデートを誘ってやってるというのに……と言いたいところだが、今回はちょっと違う。日下部とその彼女も一緒だ。ほら、笹谷貴子ってオマエの友達だろ？　そいつらのお供だよ。女の方が日下部と二人で行くのを渋ってるんだと。なかなかガードが固いらしいな」

『ちょ、ちょっと、デート……って、その前に貴子のこと悪く言わ

ないでよ！　ま、まだ中学生だから、当然でしょ？！　……そそその、きっと……恥ずかしいんだよ……』

『だから俺達がサポートしてやるんだろ。あの二人、見た目より結構奥手みたいだからな。最初だけお膳立てして途中でバックれようぜ。俺達が急に居なくなってもいざその場になったらなんとかするだろ、子供じゃないんだし。そしたら二人で神社の境内の裏へ回って花火でも観賞しよう。ちょうどカップルが寝そべられるところがある。いや、それより祭りなんて暑苦しい場所からさっさと引き上げて、涼しい俺の部屋で熱いことをしてもいいしな』

『あああの、雄兄さん！』

『あぁ、心配するな、その日安西叔母さん達遅くまで二人っきりでデートなんだと。年頃の男の子が二人いるからイチャイチャできないらしい。もしかしてそのまま何処かでお泊りコースかもな。ちょっと早いが、いい機会だからこの際俺たちもグッと奥まで親交を深めようぜ』

『……グッと奥まで……って！　ななな何を言ってるんすかっ！！』

『バカ、誤解すんな。熱いと言ってもキス程度で留めてやるって。いきなりセックスなんてミチにはハードル高すぎるだろ？　徐々に段階踏んでやるから心配しなくていい。なんせ俺は忍耐強い男だからな。まぁ、その場の雰囲気に流されても……っていうのもアリか。ああ、浴衣が乱れるなんて気にするなよ、俺は浴衣の着付けもできるからアフターケア万全だ。もちろん家まで送るし、オヤスミのキスも忘れないしな。年上っていいだろ？』

『……オヤスミのキスかぁ……って！　そそういう問題じゃないですよねっ！！　（つーか、いっぺん死んでこい！！）』

思いっきり先まで想像してしまい、ご丁寧にもオヤスミのキスまで思い浮かべた私のイタイ思考はこの際置いといて。

一体何処で浴衣の着付けなんて覚えたんだとか、この町に来たば

かりのくせになんで神社の境内裏の事情まで知ってるんだとか、ツッコミどころは満載だが、要は日下部カップルとWデートをしようということだった。今年に入ってから二度目の貞操の危機に直面しそうな私は、急いで貴子に連絡を取り詳細を確認した。電話に出た貴子は申し訳なさそうに、『あー巻き込んじゃった？　……ゴメンね？』と謝り、ボソボソと語り出した。日下部先輩と二人で出掛けるのは構わないのだが、なるべく山野中の生徒達の居ないところがいいということと、二人の姿をあまり見られたくないということを。

『ほ、ほら、日下部先輩人気あるし、あんまり他の人に刺激を与えない方が……ね？　それに、私は友達同士皆でワイワイやるほうが楽しいし……』

『……』

貴子の気が乗らない弱弱しい声を聞いて、それ以外に理由があるんだな……となんとなく気付いてしまった。もしかして貴子は「山野中の生徒達」というより、「山野中のある生徒」に見られたくないのだろう。あの学校一手に負えない裏番で金髪な男一人に。

私は貴子の胸中を思い、複雑な気持ちになった。できればあんな裏番さっさと忘れて日下部先輩と愛を育んで欲しいのだが……そうスッパリ忘れられるものでもないのだろう。心のどこかで、あの男に誤解されたくないと思っているのかもしれない。和子ちゃんと同じくらい元気のない貴子の声に、私は何も言わず貴子の提案を受け入れた。

……が、それと私の貞操は別の話である。四人でWデートなどありえない。あっていいわけがない。この状況を如何にして打破するか悶々と悩んでいたところ、タイミング良く救いの手が意外な方向から伸びてきたのだ。

それは安西先生主催の「英語強化合宿」でのことだった。

安西先生がやっている英語教室。私と妹の真美子は先生のご厚意で英語を習っているのだが、本家大元は主婦が対象の勉強教室だった。英語好きな主婦が集まって「結婚して子供を産んでも勉強心は失せずにやっていきましょうよ！」というコンセプトの元、集まっているらしい勉強会。

本家の主婦たちは毎年夏に、「英語強化合宿」と言う名の英語漬けのカリキュラムをやっているそうなのだが、これに私も妹も飛び入り参加することになったのだ。

合宿と言っても、本当に泊まり込みをするわけではない。なんせ主婦ばかりなので皆さまそれぞれ家庭があり、それをおろそかにするわけにはいかないから、九時―三時の六時間だけだ。それでも内容は本格的。その間はなるべく日本語不可でカリキュラム（スピーチやプレゼン、ディベート、ゲームなど）をこなすという、かなりハードなものなのだ。妹は渋っていたが、私は緊張しつつも楽しみで仕方がなかった。

合宿日当日、安西家に行ってみれば、主婦達と荒井姉妹の他に雄臣やアラタも参加することになっていた。部屋に入った途端、雄臣は主婦の皆さまに「目の保養になるわぁ」と囲まれていたのだが、その中に信じられないメンツが混じっていたのである。

『ごきげんよう、荒井さん』

……と挨拶しながら、雄臣の隣にちゃっかり座ってメガネを光らせているブキミちゃんを発見したときにゃあ、ビックリして飛び上がってしまった。大体夏休みだと言うのに「妖怪人間ベム」の横に「ベラ」が揃っていたら普通に驚くだろ。

そんなこんなで六時間耐久レースが無事終わり、緊張も解けてくつろいでいる時に、ブキミちゃんがお祭りの話題を私達に振ったのだ。

『皆さんは山野神社で開催されるお祭りにいらっしゃいますわよね？』

まるで伏見家主催のホームパーティーのような口ぶりで言うブキミちゃん。

あながち嘘でもない。なんせ地元の権力者・伏見一族、出している寄付金もハンパないだろう。

私は何も考えず貴子達カップルと行くと言おうとしたら、殺気の矢が前方から飛んできて顔面に刺さった。矢が放たれた方向へ顔を向けると雄臣が「余計なことは言うな」と脅し……いや、目で訴えている。ブキミちゃんは気付いたのか気付かないのか、メガネをクイッとあげながら口元に弧を描き、普段では考えられない柔らかい口調で言った。

『四人だけではなくて、是非お友達も連れてみんなでいらして？ＶＩＰ席に喜んでご招待しますわ。ジュースも食べ物も全部フリーですのよ』

伏見一族の権力を振りかざしながら「四人」なんて具体的な人数を出し、私に「雄臣を一人占めすんなよコラ、私も混ぜんかい！」と牽制をかけるブキミちゃん。一体何処から貴子カップルとのＷデートの情報を入手したのだろう。それとも今ここにいる荒井姉妹と雄臣、アラタのことを指しているのだろうか。できればそうであってほしい。

ともかく、私にとっては「Ｗデートから逃れられる！」と渡りに船だった。愛想笑いを張り付けた雄臣以外の三人は素直に喜び、真美子などは雄臣と一緒に行けるキッカケができたのに浮かれて、「それじゃみんなで一緒に行こう！」と宣言した。こうして私達はブキミちゃんのご招待を受けることになったのだった。

8月15日の乙女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち?

「……お祭りの件、ゴメンね?」

貴子は食べおわったスイカや種を一つのお皿を集めながら、ボソリと呟いた。

「……あー、い、いいよ、みんなで行った方がお祭りは楽しいよ、ね? そ、それにブキ……や、伏見さんも誘ってくれたし」

私は机の上を台布巾で拭きながら、こっちこそ色々オマケが付いてくるから……と慌てて付け足した。

「……本当に?」

「ほ、ほら! 和子ちゃん達も喜んでたしね? ……きっと奥住さん達やチィちゃんも大丈夫だと思う」

「そっか、なら良かった。いや、美千子から電話来た時、ちょっと不安そうだったでしょ? だから迷惑かけたかな~と思って……」

貴子は上目使いで私を見ながら遠慮がちに言った。私はギクッと身体を震わせ机を拭く手を止めたが、すぐに「そんなことないよ!」と引き攣った笑いをしながら慌てて手を動かした。貴子は何か言いたそうにしていたが、何も言わず少し笑って、集めたお皿をお盆に載せて台所へ運んで行った。

私は貴子の後ろ姿をボンヤリ眺めながら聞こえないように息を吐いた後、カーテンを揺らしている窓の方へ視線を向けた。外は夕焼けで赤く染まり、貴子の家の居間に西日が差している。外からはヒグラシが鳴く声が聞こえ、夏の終わりを感じさせる何とも言えない寂しいような気持ちになった。

もうこの部屋には和子ちゃんと幸子女史はいなかった。

先程やっと和子ちゃんが宿題を写し終わり、意気揚々として「また部活でね！」と幸子女史と一緒に帰って行った。貴子が住んでいるマンションのベランダから二人を見送った時、和子ちゃん達はこの部屋に来た時とは打って変わって元気が漲っており、力強く手を振りながら暑さもなんのその、自転車を豪快に漕いで帰って行った。夏祭りの件が二人を元気にしたのだろう。

思いがけず雄臣達と一緒に行くことになった夏祭り。

真美子やブキミちゃんの招待を受けるなど余計な要素は付いてくるが、和子ちゃん達にとって雄臣と一緒に行くことが大事なので、その他のオマケは関係ないのかもしれない。さすがにブキミちゃんの名前を出した時には「伏見さんかぁ……」と不安そうな顔をしていたが。

和子ちゃん達はおそらく「８９３のような男が出入りしている」という例の噂を心配しているのだ。正直言って私もその真相を確かめられるほど親しくなったわけではなく、聞く勇気もなかった。本音としてはやっぱり気になるところだったが、それはもっとお互い仲を深め、親友になってから聞く内容だ。私としては永遠にそんな機会をもてなくても構わない。これ以上親交を深めてドツボに嵌るのも勘弁願いたい。

『そういえば、ミっちゃんって夏休み前頃から伏見さんといること、多かったよね～』

和子ちゃんが不思議そうに言ったので、私は咄嗟に「そ、そうかな？　気のせいだよ」と顔をヒクヒクしながら適当に誤魔化した。実は弱みを握られていて……などと言えるわけがない。それでも、三年のオネェ様方にターゲットされるよりはブキミちゃんの方がず

っとマシだった。いくら不気味な変り者で、不穏な噂が絶えず、人の弱みを握りまくっているとしても。彼女は私に雄臣との橋渡しをお願いすることもなければ、呼び出してネチネチ厭味を言うわけでもなく、ちゃんと自分の権力と地位を使いまくって雄臣をＧＥＴしようとする姿勢だけは褒めてあげたい。……まぁ、荒井美千子じゃ役に立たないことを悟っているのだろう。

「ねぇねぇ、私達もそろそろ買い物に行こっか？」

貴子が台所から声を掛けてきたので、私はわかったと言って、汚れた台布巾を台所に持って行った。

＊＊＊

「……夕方なのにまだ暑いね」

「……ん」

夕焼け空を眺めてポツリと呟いた貴子に、私は短い返事を返しハンカチで扇ぎながら頷いた。マンションから出る前に思いっきり制汗スプレーを吹きかけたけど、効いているんだが効いてないんだが……汗で流れているので、意味がないような気がする。

私は貴子と一緒にスーパーに向かっていた。今夜の夕食の買いだしの為だ。

「今日、残念だったね、和子ちゃん達」

私は暑さで半ばボーっとしながら貴子の方を向いて言った。貴子はカツカツとサンダルを鳴らし、財布が入っているらしいポシェットをいじりながら「そうだね」と少し笑った。

私はこれから貴子の家にお泊りすることになっていた。和子ちゃ

ん達も誘ったのだが、二人とも「さすがにお盆だし、家族で送り火をするから、今回は残念だけど……」と帰って行った。チィちゃんは数日前から田舎に行っていて、私だけが貴子の家にお世話になることになったのだ。

「世間はお盆だもんね、仕方ないよ」

「……ほ、本当に今日泊って大丈夫だった？　せ、せっかくのお盆なのに……」

「いいよいいよ、気にしないで。どうせ姉貴と二人きりだし、父さんは病院だし……全然遠慮しなくていいって！　それよりさ、美千子を誘って良かったのかな～と思って。家族みんな、実家に帰ってるんでしょ？」

「……う……ん、そうなんだけど」

私は貴子の言葉に弱弱しく笑った。

貴子の言うとおり、私の両親と妹の真美子は父親の実家へ帰省していた。父の実家は東京の奥多摩なので特別遠いというわけではないし、小学生まではお盆と年末年始には恒例のように帰っていたのだが、中学生になってからは「部活や勉強があるから」「友達との付き合いがあるから」とお盆だけは帰らなくなってしまった。本当は正月も遠慮したいくらいだったが、さすがに年始だし親戚一同集まるので、自分だけ勝手に欠席するわけにはいかなかった。

父方の実家に行きたくないのは、それなりに訳がある。私は物心つく頃から父方の実家が苦手で、なんとなく居心地が悪かったのだ。私と母は何故か父方の祖父母や親戚とそりが合わず、良い関係が築けなかった。真美子は凄く可愛がるのに……それはまるで多恵子小母さんが私達家族に接するのと同じような感覚だった。それでも小学校までは我慢してついて行ったが、中学に入ったら義理のお付き合いはもういいだろうと判断し、母には悪いと思ったが一緒に行く

ことを辞退した。母は笑顔で一生懸命馴染もうとして頑張ってはいたが、私は途中からそんな努力も止めてしまっていた。始終無表情で黙りこんでいる子供……後々考えてみれば随分可愛げのないガキだったと思う。でもぞんざいに扱われれば、そんなものだろう。大体小学生の分際で愛想笑いに長けて世渡り上手の方が普通じゃない。歓迎してくれない所へわざわざ顔を出す今年の正月は本当に苦痛だったが、お年玉の為に我慢した。バイトができない中学生の身としては、お年玉が大きい収入源だったからだ。

「でも良かったんだ、行きたくなかったから」

「……え？　そう、なの？」

私の声が珍しくどもらず、硬くて険を含んでいることを感じたのか、貴子は少し驚いて目を丸くながら、慌てて言った。

（……あ、やだ、いけない）

貴子は関係ないのに……ちょっと配慮が足りなかったなと思い、私は話を逸らすべく明るい口調で、「ご、ごめんね、そ、それより泊らせてくれてありがとう」と頭を下げた。いくら誘ってくれたとはいえ、こんなお盆の時期に泊めてくれるなんて助かったから。もちろん家で一人というのも楽だけど、友達と一緒の方が楽しい。それにこんな娘でも親が一応心配したので、貴子の提案は有り難かった。

「そ、そういえばお姉さんは？　夜帰ってくるなら、一人分多めに用意しておいたほうがいいかな？」

「うん、一応ね。母さんのお見舞いに行ってから、友達と会うって言ってたから、きっと飲んでくるかも。久し振りだからって、ハメ外さないでくれるいいんだけど……」

貴子は苦い顔をしながら、「ちょっと酒癖悪いんだよね……」と

溜息を吐いた。

貴子のお姉様は、以前にも紹介した通り、かつてはこの辺りを牛耳っていた泣く子も黙る伝説のスケバンとして名を轟かせたツワモノだった。

その名を笹谷厚子（ささやあつこ）という。名前の通り、仲間に対して情も信頼も厚く（熱く）、族のヘッドも頭を下げるほどの凄味と器量と懐の深さを持ち合わせ、ケンカをすれば天下一品。あの桂寅之助ですら敵わないというのは有名な話らしい。五年も年が開いていると言うのに、妹の貴子が、まったく面識もないその筋の人に「笹谷」の名前を出しただけで、拝まれたり逃げ出したりされるそうだ。

私はお姉様のかつての雄姿を写真で拝見させてもらったが、なんか、こう、コメント出来なかった。……というよりコメントしようがなかった。だって、どの写真もスカートが地面に着くほど長いものをお召しになり、ヤンキー座りで斜め４５度の角度で睨んでいる写真ばかりだったからだ。しかも金髪のスパイラルパーマ（けっしてソバージュという可愛らしい名前のパーマネントではない）で、眉毛ほぼナッシングのガンたれ＆マスクを付けて顔の半分以上隠れていれば、どんな顔かコメントする方が無理ってもんである。そんなお姉様は中学を卒業と同時に不良から足を洗い、可憐な女子高生に生まれ変わった。実はそれには訳がある。

お母さんが身体を壊して倒れたのだ。

貴子のお母さんはもともと身体が弱く病院通いだったそうだが、お姉さんが中学三年、笹谷さんが小学四年生の時にとうとう大きな心臓の発作を起こして倒れてしまう。それからは入退院の繰り返しだそうだ。現在も入院中で、何回か貴子と一緒にお見舞いにいったのだが、初めて病室に行きその入院患者の名札を見た時は……驚きを通り越して動揺し、呆然としてしまった。

その名札には「笹谷妙子（ささやたえこ）」と書いてあったのだ。

8月15日の乙女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち?

雄臣の亡くなったお母さんと同じ名前を持つ貴子のお母さん。

貴子のお母さんは貴子に似ていて、とても綺麗な女の人だった。いや、貴子がお母さんに似てるというべきか。ベッドの上で一生懸命笑みを浮かべながら見舞いに来た貴子を気遣う姿は、なんだか切なくて、見ていてとても心苦しかった。時々透き通って見えるほど存在が儚く、魂が薄いと言えばその雰囲気をわかっていただけるだろうか。実際今のところ退院は難しく、見通しもたっていないと言う。私は多恵子小母さんのことを嫌でも思い出してしまい、いつのまにか笹谷さんのお母さんを多恵子小母さんの姿に重ねていた。

『もしかして、あなたが美千子ちゃん? 貴子から話を聞いてるわ。これからも貴子のことをよろしくお願いします』

そう言いながら微笑む貴子のお母さんは、まるで聖母マリア像のように神々しく、複雑な思いもあって直視できないほど眩しかった。

(もし、多恵子小母さんが貴子のお母さんみたいだったら……、私の人生も変わっていただろうか? 雄臣との関係も、もう少しマシだったのかな)

そんなこと考えたところで時は戻らぬし、自分が取った行動を無かったことなど出来はしないのに。表面は笑顔を張り付けて貴子のお母さんと話はしていたが、心の中では愚問を繰り返すばかりだった。

今更だったが、多恵子小母さんの時にろくに見舞いに行けなかった償いを埋め合わせするように、そして一日も早く元気になっても

らうように、貴子が誘ってくれる時は何時でも一緒に病院に足を運んだ。

そして貴子のお姉様は、そんなお母さんが倒れた日を境に一代決心をした。

実は貴子のお姉様と貴子は半分しか血が繋がっていない。お姉様はお父さんの連れ子で、貴子のお母さんとは血が繋がっていないのだ。そんな複雑な事情もあって、一時お姉様は道を逸れてしまった。けれども貴子のお母さんは、お姉様がどんなにヤンチャをしても決して見離さなかった。いくら暴れて相手にケガをさせようとも、何度も学校に呼ばれたり警察沙汰になろうとも、黙って頭を下げお姉様に一言も愚痴や文句を言わなかった。それどころか、身体が弱く不甲斐ない母親でごめんなさいと謝るだけだったそうだ。お姉様はその頃、思春期という難しいお年頃ということもあって、最初は義理の母親を無視していたが、次第に心の中で義理の母への反発と申し訳なさが葛藤し始めた。そんな複雑な心境がピークの時であった中学3年の時に、とうとう突き付けられたお母さんの危篤。たくさんの医療機材がお母さんの身体に付けられている姿を目の前にした時、最初に泣き叫んだのは貴子やお父さんではなく、厚子お姉様だった。その瞬間からお姉様は生まれ変わり、涙と鼻水でキッチリ施していた化粧が落ちたグチャグチャな顔を天に向けて思いっきりガンを飛ば……いや、一つの願掛けをした。

『真っ当な道を歩むから、神様……どうか、どうか、この義母（ひと）の命を救わんかいっ！』

あまりの迫力に神も怯んだのか、この願いは無事聞き届けられ、お母さんは命を取り留めた。

そういうわけでお姉様はスケバンの名を捨て、身なりはそのままだったが、中身は普通の女子中学生にかろうじて戻り、勉学に打ち

込むようになった。もともと根性は据わってるし、努力家と言うか強運の持ち主と言うか……ともかく持ち前のカリスマ性と頑張りで、高校は無理と教師から太鼓判もなんのその、たった半年で他の生徒が学んだ中学の勉強を制覇し、見事都内の高校に合格したのだ！県内の高校に進学しなかったのは、お姉様の名前がその筋の人にとって知らない人がいない程有名だったため、バレたらなにかとマズイだろということで東京にしたそうだ。

その高校も今年の三月に無事卒業し、短大の看護学科に合格したというのだから、人間先の事はわからないものである。本当は医学部に進みたかったらしいが、さすがにそれは無理だったらしい。それでも御両親は大層大喜びしたそうだ。十分親孝行だと言われたお姉様は未来のナイチンゲールとなる為、現在看護婦への道を歩み中と言うわけである。私はその話を聞いて素直に感動してしまい、身体の弱いお母さんの為だろうと思うと涙が出てきてた。別に会ったこともなければ、五歳も年上な元スケバンなのに「良くやった！更生してアンタえらいよ！！」と上から目線で褒め称えてしまった。もちろん心の中でだ。

実はそんなお姉様と生で会ったことがなかった私。この突如舞い込んできた恐ろしい、いや、素晴らしい記念日に内心緊張しまくっていた。呑気に褒め称えている場合ではなかろう、荒井美千子よ。

「そ、そういえば、お姉さんと会うの初めて。き、緊張しちゃう」
「そうんなことないよぅ。すっごい気さくだからさ、気楽にしててよ！　お酒入るとちょっと手に負えないけどね」
「……手に負えない……」
「そうなの、未成年のくせにお酒が好きでね～。虎ニィが飲むのもきっと姉貴がキッカケだと思う。昔無理矢理飲ましていたからね」
「……なるほど……」

ハハハと無邪気に笑う貴子の横で、私はモヒカン頭の元裏番とスパイラルパーマのスケバンがコンビニの前でヤンキー座りをしながらビールを乾杯している姿を思い浮かべてしまい、さらに嫌な汗がジワリと吹き出すのを感じた。

「ハハ……お、お姉さん、お酒飲むなら何かオツマミも用意したほうがいいかな」

「いいよいいよ、帰ってこないかもしれないし」

「そ、そうなの？　（ちょっと、安心だったりして！）」

「あ、でも、今日父さんいないから、もしかして仲間連れてくるかもしれない。けど無視していいから」

「……な、仲間ね……（もしかして、ヤバかったりして……）」

それよりも仲間などを引き連れてきたら、無視など言語道断、絶対全員にキッチリ挨拶しなければいけない気がする。それこそ後で「あんとき挨拶しなかったテメェに、こっちからわざわざ出向いて来てやったぜ、感謝しな！！」などとお礼参りの挨拶を返されたのではたまったものではない。

「オツマミより酒がないほうがマズイのよ、ウチの姉貴は。ないと機嫌が悪くなって暴れるんだよね～」

「……あ、暴れるですか……」

「飲んでも暴れるし、手に負えなくて。だから仲間が来てくれた方が面倒にならずに済むの」

「……手に負えない……」

「ちょっと顔と身なりは怖い連中だけど中身は気さくだから、大丈夫心配しないで！　それにバッチリ酒は常備しているし、万が一姉貴が暴れても、仲間が全部被害被ってくれるからさ」

「……ハハハ……」

「なんなら私達も少し飲んじゃう？」

「え……えぇっ？！」
「フフ、冗談だって！　あ～なんか楽しみ！　それにキャンプ以来じゃない？　こうして友達同士料理して泊るのって！」
「そ、そうだね。今年から部活の合宿も無くなっちゃったし」
「合宿ね～懐かしい！　今年から全面禁止になっちゃったもんね。ちょっと残念だったなぁ」
「ウン、ホントだね」

そうなのだ。去年の夏、酔っ払いが中学校に乱入して来たせいで、今年から部活の合宿が中止になってしまった。あれからもう一年経つなんて、月日が過ぎるのは本当に速い。その間に私の周囲は目まぐるしく変わった。それこそ去年の合宿の時は、隣の貴子とこうして並んで歩くことなんて想像もつかなかった。だって、彼女は原口グループの中心人物だったのだから。その他にも色々な縁が増え、雄臣やらブキミちゃん、尾島達……妖怪の顔が頭の中で浮かんでは消えていく。特に尾島（サルヤロー）。まったく運命とは皮肉なもので、田宮君に恋心を募らせていた去年はバスケ部と体育館使用時間が前後で重なることはほとんどなかったくせに、田宮君への恋心を諦め、尾島がバスケ部を掛け持ちした途端、バスケ部と練習が重なることが多くなったのだ。

8月15日の乙女たち？（後書き）

文中に「看護婦」とありますが、このお話は８０年代後半の為、その時代に合わせた呼び名で書いてあります。現在は「看護師」です、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

8月15日の乙女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち？

夏休み前までほとんど口をきかなかった私と尾島は、ただのクラスメートとして淡々と日々を過ごしていた。それが夏休みに入った途端、ブキミちゃんがいないせいなのか、部活の練習で顔を合わせるたびに私に話し掛けてくるようになったのだ。それもどうでもいい小言ばかりで、嫁を苛める姑ばりのくだらない内容のオンパレード。ハッキリ言って、ウザイし迷惑だった。

『おい、ブルマに毛玉ついてんぞ、プラネタリウムのつもりか？ちゃんと星座になってねぇじゃねぇか！』

『チュウさぁ、すね毛くらい剃れよ！　蝶子を見習え！　男に負けてるなんてありえないだろ？！』

『オマエな、白いTシャツにピンクのフリルがついたブラジャーなんかしてくんなよ、透けて見えるだろうがっ！　ほら、あれ、ベージュのスポーツタイプにしろ！！』

（オイ、一体オマエは何処を見ていやがるんだ、このエロ猿！）

毎回毎回顔を合わすたびにセクハラまがいな捨てゼリフを吐き、元裏番や雄臣に似てきてるぞとツッコミを入れたくなるような小言を言う尾島。

（ここで断わっておくが、私のすね毛はそんなにぼうぼうと生えている訳ではない。そりゃちょっとは伸びていたかもしれないが、あくまで「ちょっと」である。決して蟻んこができるほど伸ばしている訳ではない！）

それを見たバレー部の後輩達は、普段は私のことを先輩と思ってないようなナメタ態度を取るくせに、こんな時は近寄ってきて顔と運動神経だけはよろしい尾島に群がる始末。それも他の女バレの連中と女バスの皆さま方から睨まれているにも関わらず、だ。

『やだ～尾島先輩のエッチィ、スケベェ～』

そんな死語同然な黄色い声を出す女バレの後輩をからかってはキャーキャー言われている尾島。

猿の鼻の下が伸びに伸びまくっている姿は見ているだけで不愉快極まりないので、とっとと現場から撤収し完全無視を決めるというのが、ここ最近の私の行動だった。大体いちいち相手にするのも疲れるし、何故か訳もなくイライライライライラ！　……いや、そんなことより、その姿をチィちゃんが後ろからジッと見てるもんだから、下手に誤解を招くようなこともできないからだ。

（チョッカイ出すなら、チィちゃんや原口にでもやれよ！）

それこそ人のブラやブルマなどを観察する空しいことをしなくても、愛の告白をされちゃったり、レモン味のファーストキッスや禁断の青い果実なムフフまでもれなくついてくることだろう。

しかも頭が痛いことはそれだけではなかった。尾島の小言に続けというように、あの小関明日香も一緒になって、悪乗りをするのだ。

『ほんとだ～ブルマに毛玉が付いてるよ～私が取ってあげる～』

……と言ってブルマを引っ張ったり、

『ミっちゃんってすね毛伸ばしてるんだ？　男らっしぃ～！』

……と感心しながらジロジロ眺めまわしたり、しまいには、

『相変わらずオッパイおっきいねぇ！　羨ましいぞぉ～エイッ！！』

などと言いながら一発でブラのホックを外したり……マジで笑え

ない。
　しかも隙を狙って「だ～れだ！」といいながら目ではなく背後から胸を掴んで揉むのだから勘弁してほしい。さらに触ったその手を「ミっちゃんのオッパイの感触」などと言いながら、尾島の頬や胸にこすりつけるのだ。それはまるで、小学生同士がやる実にくだらない「ヤベ、荒井美千子菌ついちまった！」というような具合に。
もちろん尾島が黙ってヤラレているわけはなく、顔を赤くしながら怒り出す始末。

『明日香ぁ！　テメェ、勝手に俺のボインっ……い、いや、そうじゃなくって……と、ともかく勝手に馴れ馴れしく触んじゃねぇ！！』
『やっだぁ、啓介ったら。ちょっと身体触ったくらいで怒んないでよ～』
『怒るわっ！　大体、ちょっとじゃネェじゃねぇか？　ドサクサに紛れてガッチリ掴んで揉みやがって！　俺だって揉んだことないっ……あ、いや、その、なんだ……と、とりあえず謝れ！！』
『なによ、そんなにガッチリ触ってないじゃん。身体にちょっと触ったぐらいでいちいち目くじらたてないでよ、手で擦りつけたくらいで大袈裟ぁ。女じゃあるまいし、自意識過剰ぉ～！　でもぉ意外と柔らか～いんだねぇ』
『や、柔らかいっ？！　そそそんなに柔らかいのかっ？！！』
『やぁねぇ、そんなに興奮するところじゃないでしょぉ。本当啓介のほっぺたって本当に柔らかいねぇ。え～い、つまんでのばしちゃえっ！』
『……は、ほへほほっへは……へ（……あ、オレのほっぺた……ね）って、イテェんだよっ、明日香ぁ！』

　などというクソ面白くない夫婦コントを披露し、その姿を見ながら女バレの皆さんとバスケ部の皆さんが笑って一騒動になるのであった。さらに最悪なことに、原口とチィちゃんはそれを見て複雑そ

うな顔をしているのだ。
（小リスよ、アンタ原口やチィちゃんと普段仲いいんだから、もうちょっと空気読めよ！）
笑っている集団に背を向けながら心で突っ込みを入れるが、考えてみれば私が心配することではない。しかし、その原口の複雑な思いが結局怒りとなって私に返ってきたり、チィちゃんの心配を取り除くために私が余計な気を使わなければならない事を心配しなければいけない私は一体なんなのだろうか。

（……結局私に被害が回ってくるんだよね）
想像するだけで落ち込んでしまうほど実に憐れで可哀想な自分の現状に、私は段々紫色になっていく夕焼け空を見上げて思わず大きな溜息を漏らした。

「ハァ」
「ど、どうしたの、美千子？　大きな溜息吐いちゃってさ」
「ううん、なんでもない……。生きるって大変だなっと思って」
「……は？」
「なんか『とかくこの世は儘ならぬ』という言葉が浮かんだの……」
「美千子……。そ、そうだ！　今日の夜さ、ホットプレートがあるから思い切って焼肉にでもしない？肉なら姉貴も大好きだしね！」
「……え？　焼肉？」

貴子は落ち込んでいる私を元気づけるように一生懸命明るい声で言った。さらにお姉さんは大の肉好きだという情報を披露し、軽くキロ単位でいけるという物騒な……いや、豪快な言葉に上手いコメントが浮かばず「ワ、ワイルドなお人だね」というのが精一杯だった。会うのが益々不安になってきたが、「焼肉」の言葉で元気になる私も人の事を言えた義理ではない。夕焼けに向かって「今夜は焼肉！」と宣言し、長い影を作りながら私達はスーパーへ向かったの

であった。

8月15日の乙女たち？（後書き）

尾島は相変わらずイタイ勘違いをしてるようです。ところでスネ毛を処理するタイミングっていつだと思いますか？この長さならギリギリＯＫ！…などと思っていた、いや現在も思い続けている私は乙女失格でしょうか。

8月15日の乙女たち～オマケ～（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
ＰＧ１２指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち～オマケ～

この15日の夜、貴子の予想通りお姉様とその仲間達はアジトにご帰還……いや、マンションにご帰宅し、私は皆様とご対面することとあいなった。

台所のダイニングテーブルで貴子と二人、焼肉をつつきながら部活の事やコイバナに花を咲かせていると、開いたままのベランダに続く窓から微かに物騒な音が聞こえてきた。平和に暮らしている限り絶対ご縁のないあり得ない音は、確実にこちらに向かっているらしく、次第に大きくなっていく。

……ラリラ、パラリラ、パラリラっ！

そんなベタな音が夜の住宅街に響き、音がピタリとやんだと思ったら急に轟く無数の爆音。マンションの八階であるにも関わらず、ここまで聞こえる排気ガスの音のすごさに無言のまま窓の方を見ていると、貴子はなんのためらいもなく席を立ってビールなどのお酒を用意し始めたのだ。

それから間もなく玄関の扉が勢いよく開かれ、とうとう笹谷厚子お姉様が若干酔っ払い気味の様子でご登場した。それも、湘●爆走族のような連中に身体を支えられ……いや、少々暴走チックな友人を脇に引き連れて。

『あ、いらっしゃ～い』

普通に笑顔で挨拶する中学二年生の貴子に、「ウィッス、今日もお世話になりまっス！！」と礼儀正しく頭を下げるどう頑張っても品行方正とは程遠い強面のオッサン顔で、頭が鬼ゾリ&パンチ&レ

インボーカラーの暴走族達。その驚きといったらまるで「ひょう●んべストテン」には、

『まさか本物の歌手は出ないだろう～』

……と思っていたのに、モノホンのＣ－●－Ｂが出てきてあらまびっくら仰天！　てな感じだ。そんな派手系部下達を顎で後方に下がらせ、千鳥足気味で私の前に立ちはだかったお姉様。

『アンタが噂の貴子の友達だね？　貴子や妙子から話は聞いてるよ。見舞いにも来てくれたらしいじゃないか。オマケに寅之助（アタイの手下）や尾島達が大変お世話になってるようで……今後とも変わらぬお付き合いをどうか夜露死苦っ！』

『ハハハハィ！！　こここちらこそ、たたた貴子には大変おおおおお世話になってますっ！！』

どんな噂だろう……などと思ったことはさておき。

私は精一杯の力を振り絞って九十度の角度で頭を下げ、キッチリ挨拶をさせてもらった。目の前の生お姉様は、少し目が据わって胸倉をを掴みそうな勢いだったが、貴子と同じワンレンのサラサラロングヘアーで、トレンディドラマの大御所である「Ｗ浅野」の片方と似た感じのお人であった。漢字は違うが名前も同じだし、普通にしていたらしっとり美人……の筈なのに。なにか、こう、色々と残念だ。

『……ほぅ、地味なわりには、なかなかいいボインもってんじゃねぇか。なぁ、オマエらっ！』

『『『『ウィッス、揉んでみたいッス！』』』』

『バカヤロウっ、中坊相手に犯罪だろうがっ！　オマエらは適当にオッパイ饅頭でも食っとけっ！　……すまねぇなボイン、こいつら

には手を出させねぇから安心しな。でもな？　ボインに目が行っちまうくらいは許してやってくれよ？　なんせヤリたい盛りの「てぃぃんえいじゃぁ」だからよ～。目の前にデカイボインがありゃ触りたいってのが男っつーもんよ』

『『『『ひどいや姐さん、そりゃないッス！』』』』

『いいか、オマエら。残念だが世の中思い通りにいかねぇってのが現実でよ、実際はそんなに甘かねぇんだ。よってオマエらはボインを眺めるだけで我慢だ。その我慢が明日への活力（走り）に繋がるってもんよ！』

『『『『キツイや姐さん、拷問ッス！』』』』

『つーわけでボイン、これからもアタイの大事な妹と仲良くしてやってくれ、な？　困ったことがあったらいつでも相談に来な。アタイに任せりゃ怖いもんなしさ、なぁ、オマエらっ！』

『『『『さすがは姐さん、最高ッス！』』』』

『フハハハ！　オマエら、本当にカワイイ奴らだなっ！　貴子、酒だ、酒と肉だ！！』

「厚子（あつこ）」というより、「アッコ」と呼んだ方がしっくりくるようなお姉様は、「アッコに●まかせ！」というニュアンスの頼りがいある大物ぶりを発揮し、すぐさま「者ども、やっちまいＮＡっ！」的な号令で大宴会を開始させた。

それからの私は、厚子お姉様と暴走族達に交じってタンクトップを盛り上げている、そろそろＥカップブラにしようか的な胸の辺りをガン見されながら和気あいあいと焼肉を食べるという、三回目の貞操の危機という名の拷問……もとい、貴重な体験をすることとなった。気が付けば、肉を焼く＆お酒を奉仕するホステス係になっていた荒井美千子。しまいにはいくら食べても腹が満たされずに飢えている猛獣系暴走族……じゃなく、育ち盛りのティーンエイジャーな派手系男子達に酒のツマミを追加するため、おかずを作ったり、おにぎりまで握ったのであった。

この打撃的……間違えた、刺激的な大宴会は夜中まで続き、深夜になって私と貴子が寝室に引っ込んだ後も終わらなかった。次の日起きてみると、お姉様と仲間たちは居間で鼾の大合唱しながら雑魚寝をしていたが、以外にも台所はすべてキレイに片づけられ、宴会の跡はキレイさっぱりなくなっていたのだ。「片づけてくれたお礼に」と貴子と二人で全員分の朝食を用意し、若干中二にして立派な飯炊き女……というか、厚子部屋のおかみさんと化した荒井美千子。朝食が全部そろう頃には、のそのそ起きてきた部下たちの姿にも目が慣れ、普通にご飯とみそ汁を出していた。人間というのは意外と環境に適応できる生き物らしく、それに驚いたのは何をかくそう私自身だった。

完全ダウンしていたお姉様の代わりに、熱い太陽が降り注ぐ昼間がまったく似合わない部下たちを貴子と笑顔で送り出した後、私と貴子はお母さんのお見舞いへ行き、再びマンションへ帰ってきたら、復活した厚子お姉様が待ち構えていた。

『ボイン、ここに座れ！』

酔った時とはまた違った迫力を持つ素面のお姉様は、いきなり「いかにしてイイ女を作り上げるか」という講義をしだし、これぞ「女の六道」（絶対地獄を見ない道、餓鬼呼ばわりされない道、畜生と地団駄を踏まない道、修羅場に勝つ道、人間女豹道、本命の天上天下唯我独尊になろう道）を懇々とレクチャーしていく。その授業内容は、

『男を撃ち落とす１０の必勝法』
『これであなたも男に貢がせる女！』
『掴んだ男を離さない為に～男の育て（操り）方と寄りつく虫（女）

の駆除方法～』
『正しい女豹のあり方～アバズレ女と色気のある女の違い～』
『必読！　女豹と雌豹、小悪魔と困ったチャンはここが違う！！』
『実録シリーズ・これが女豹の実態だ！　～狩るも狩られるもあなたの心意気次第～』

……などなど、後のハウツー本の先駆け的な、中学生には必要ないんじゃないかなーというほどの濃い内容であった。講義の後は実践編として、男と二人っきりの場面や浮気相手と鉢合わせした場面などを想定し、厚子お姉様推薦の豹柄の勝負服やビキニなどを着せられ、将来美容関係の仕事に就きたい貴子に顔をいじられ、本番さながら実習が行われた。どんな逆境にも負けない清く正しい女豹としての厳しい指導を受けた荒井美千子。ここだけの話だが、厚子お姉様直々に伝授してくれた「史上最強の女豹ポーズ」は、数年後見事に効果を発揮し、最終的にはサンタを完全に再起不能（ノックダウン）にさせるほどの驚異的な威力を見せることになるのである。

女豹レッスン修了書として厚子推薦勝負服、またの名を要らなくなった古着を授与され、笹谷姉妹に見送られた後の帰り道、また一歩大人の階段を登ったこの２４時間の出来事を不思議な感覚で思い返していた。

それは――。

厚子お姉様は仲間想いの熱いハートの持ち主で、部下達はそんなお姉様を慕っていて絶対的な存在だということ。その部下達は貴子の言うとおり意外と気さくで、礼儀正しいシャイなお兄さん達だということ。昨夜はおかずを作った私そのものが、夜のオカズにされそうな現場だったということ。厚子お姉様や部下の皆様は私のことを結局最後まで「ボイン」呼ばわりしていたこと。そして、厚子お姉様は血が半分しか繋がらない貴子を随分と大事にしており、お互い信頼関係を築いている姉妹関係がちょっぴり羨ましかったこと。

この出来事は中学を卒業し何十年経っても強烈な夏の思い出として、私の心の中に深く刻まれるのであった。

8月15日の乙女たち～オマケ～（後書き）

笹谷厚子、最強です。

C－C－B、懐かしいです！菩提樹も好きでした。当時友人が関口さんの脱退最後のライブ、確か読売ランド？に行ってその時の写真を見せてもらった記憶があります。ちなみに仏教でいうところの六道は、「地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道」です。こんなん書いてたからパソコンがイカレるというバチがあたったのかなぁ、私。ホント笑えない。（－”－；）

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

「東先輩、焼きそばなんていかがです？」
「雄兄さん、はい、ジュース。喉乾いたでしょう？！」
「東く～ん、カキ氷冷たくて美味しいよぉ！　イチゴ味なんて、どう？」
「イチゴなんてそんな甘ったるいの、東君は好きじゃないわよ！　こっちのレモンのほうがさっぱりしてるわよね～？」

湿気と煙と暑い空気が籠る野外に張られた来賓客用（VIP席）テントの中。
付き合いだけは無駄に長い幼馴染である雄臣の周囲には女が群がっていた。目の前の机の上にはズラリと食べ物が並べられ、よくみると夜店で売られているものは一通り揃っており、ご丁寧にスーパーボールや金魚まで置いてあった。

「いやぁ、困ったなぁ。そんなにいっぺんに食べれないなぁ」

雄臣は頭を掻きながら朗らかに笑っているが、目は笑っていない。その証拠に向かい座っている私に目線だけはこちらに向け、「黙って見てないで助けろよ！」という救援信号を瞬きで送っている。が、私は敢えて気づかぬ振りをした。第一雄臣に群がって火花を散らしている女性陣の中に堂々と介入する勇気もなければ、人の恋路を邪魔して馬に蹴られるのも嫌だからだ。しかも馬などという生易しい連中じゃない。ベラ（ブキミちゃん）、リンダ（真美子）、ラフレシア&アマゾネス（先輩たち）という厄介なメンバーなので、この場合とことん無視のほうがいいだろうと目を逸らした。それに私は今それどころではないのだ。何故なら……。

「お嬢ちゃん、全然食べてないじゃないか！　ほら、遠慮せずどん

どん食べなさい。ピチピチの若いモンが遠慮なんかしちゃいかん！」
「そうだぞ！　……いやぁ、かおりのお友達にこんな子がいたとはねぇ。美千子ちゃん、その浴衣とっても色っぽいよ～。今時の中学生は発育がよくて大人っぽいからオジちゃん困っちゃうな」
「いやいや、伏見先生、まったくそのとおりですな。私もあと二十年若ければ、ハッスルしちゃうところですよ」
「「「ワハハハ～！」」」

そう、何故なら私は今、来賓客の席に座っていたＵＳＢ（ウザイ・セクハラ・バーコード）に囲まれていたからである。決して後に普及する「補助記憶装置」の略などではない。大体こんなオヤジ連中、即効記憶から消去したいくらいだ。それこそＪＡＣ（ジジィ・あんまり・近づくな）であり、ここは是非とも同じＪＡＣ繋がりな千葉真一様の素晴らしいケリで蹴散らしてほしい。しかし、現実は非情だ。私は両隣に座っているジジイな連中を無碍にはできるほど世渡り上手な大人ではなく、只の山野中学校２年１組普通女子だったため、ここから撤収できず大人しく座っていた。こんな変態ジジイ共だが、平平凡凡の道を歩いていれば決して接点がない程ステイタス満載のお偉いさん方であって、市会議員のブキミちゃんの祖父を筆頭に、なんとか委員や団体の会長の肩書を持っている人たちだったりするのだ。

「あああの、そそそんなにお腹すいてませんので……」

両隣から迫りくるオヤジの攻撃をかわすだけで精一杯の私は、祭りのために夕飯を抜いてきた空きっ腹に力を入れつつ、無理して微笑みながら一生懸命抵抗した。よって目の前で睨んでる雄臣を助けている場合ではない。逆にこっちが助けて欲しいくらいだ。
まったくこんなオヤジな連中を喜ばすために、暑い・面倒・動きにくいという浴衣なんぞを着てきたわけではないのに、どうしてこ

うなってしまうのだろう。雄臣の言葉にうかうか浮かれて着てきた罰が当たったのだろうか。こんなことなら私も目の前で雄臣にベッタリぶら下っている真美子のように浴衣を辞退すればよかった。涼しい・手軽・動きやすいという文明開化の素晴らしいとこ取りの洋服にすれば、少なくとも鼻緒の部分がすれている足の痛みは気にしなくてよい。数日前の自分の行動が悔やまれる。

お盆明けに家族が奥多摩から帰ってくると、私は母に浴衣のことを尋ねてみた。そうすると母が昔着ていた大人向けの浴衣が一点だけあるとことが判明したのだ。一着しかない紺生地で団扇柄の風情ある浴衣。真美子と取り合いしたら絶対負けるであろうと思っていた私は、いつものように身を引いて浴衣を真美子に譲ろうとした時、逆に真美子から「お姉ちゃん、浴衣着ていきなよ」とアッサリと言われたのだ。

『え、ええ？　いいの？』

『いいよ、お姉ちゃん着ていけばいいじゃん。せっかく夏祭りだし。そういえば去年、浴衣着なかったでしょ？　だから今年は着ていきなよ！』

『あ、ありがとう！』

『いいのいいの。私、背が高くてスタイルいからさ、多分この浴衣短いんじゃないかなぁ。それにみんながみんな着ていく浴衣なんかより素敵なサマードレスの方がお祭りで目立つじゃ～ん？　そんなお古よりオニューなのを買ってもらう方が断然いいしぃ！　パパぁ、白いコットンのドレスがほしいんだけど、買ってもい～い？　あとサンダルもぉ！』

やられたと思った時は既に遅く、私の目の前には風情……というより、急に古臭く見えた虫干ししてある浴衣と真美子が父にベッタリ甘えている憎い姿だけが目に残ったのであった。

それでも実際浴衣を着付けてもらい、髪の毛をアップして鏡の前に立ってみれば、意外と悪くなかった。なによりも浴衣の柄のせいか洋服より胸が目立たないような気がしたので、それでヨシとしたのだが……。

（結局ジジィ共を喜ばせただけじゃん！！）

まったく、前も横も自分勝手な妖怪ばかりで祭りどころの騒ぎではない。まるで祭りに捧げる為の生贄になった気分だ。実際この場の私と雄臣は生贄同然であろう。それこそ私以外は生贄を遠慮なく貪る連中ばかり。少し前迄にいた、まともな和子ちゃん達はもうすでにここにはいないのだから。

「……」

数十分前までは確かに一緒だった和子ちゃん達。

それこそブキミちゃんに発見され、このテントに引き込まれるまでは和気あいあいとしながら朗らかな気分で祭りを楽しんでいた私達だったのに。残念ながら現在はそれぞれ散り散りバラバラの解散状態だった。

約束通りブキミちゃんの招待を受けた手前、挨拶して「ハイ、さようなら～！」というわけにはいかず、黙ってテントに滞在した私達だったが、まず貴子と日下部先輩がサッカー部の三年生達に連れて行かれた。その次にアラタが無理矢理同じ陸上部の子たちに連れ去られる。アラタはしきりに真美子の方を気にしながら不安そうに私を見たが、当の真美子は雄臣しか目に入っておらず、私は頭を横に振り、気にせずに行けと目くばせをした。アラタは名残惜しそうだったが、この際新しい世界に飛び込むのもありだと思う。アラタの手を引いたのは男子だったが女子も結構いて、恥ずかしそうに話しかけた子は意外と可愛かった。

（むしろ目の前の鬼神・修羅より誠実でイイ男だと思う）

アラタは背が低くて運動はイマイチだけど、超がつくほど頭がよい。なんせK成中に受かったくらいだ。当初は塾に通う予定だったが、結局あの箕輪が顧問の陸上部に入部し、怒鳴られながらも長距離走選手として部活をサボることなく黙々と走りこんでいた。その姿はこの年のボストンマラソンに優勝した瀬古選手のようだ。雄臣の話では、その真面目な人柄が受けているらしく、クラスでも部活でも上手くやっているとのことだ。

以上の三人が抜けると、今度はその抜けた穴を埋めるようにラフレシア&アマゾネス（先輩たち）が乱入してきたのである。雄臣狙いの手強い女が四人になると、それまで雄臣をキラキラした眼で見上げて少ない会話を楽しんでいた和子ちゃんは、途端に意気消沈して黙ってしまった。いつもはリーダーシップをとるほどの積極性溢れる人柄は、さすがにバレー部部長がいる手前、同じ部活の後輩としては思う存分発揮できなかったようだ。

そこを狙ったようにタイミング良く表れた、お呼びでないＵＳＢのオヤジ三人衆。

和子ちゃんは激しく落ち込んでいた分、セクハラまがいの言葉と行為に怒りを倍増させた。宇井和子・乙女な十四歳且つ女子バレー部レギュラー控え選手で類まれな殺人スパイクを繰り出す彼女は、その力強い掌をボロい机に向かって振り下ろし、灰皿や食べ物が乗っていた紙皿をひっくり返すという暴挙に出てしまったのだ。「しまった！」と思った時には雄臣を含む全員の驚いた視線が宇井和子に集中した後だった。中でも一番びっくりしたのは当の本人だろう、その証拠に涙目で固まる始末。私はオヤジ共に怒り燃やし、それこそ「三匹が斬る！」ではなく「三匹を斬る！」の心境だったが、相手は物騒な連中と繋がっている伏見一族のドンが混じっているのだ。ここはグッと堪え、

『や、やだぁ！　ここ蚊が多いわぁ。なんだか痒～い』

……などという苦しい言い訳しながら、何度もバンバンと机を思いっきり叩いてこの場を取り繕う荒井美千子。

『皆様が蚊に刺される前にィ、ミチコはもっと蚊取り線香を増やしたらいいと思うのぉ。ね？　オ・ジ・サ・マ（ハート）』

……などと上目づかいで強請るように言ってしまった荒井美千子。

先週レクチャー受けたばかりの厚子お姉様直伝、『男を撃ち落とす１０の必勝法』に従って人生初のお色気を発揮させ、隣で若干固まっていた加瀬さんに「すぐ撤収しろ！」と合図し見事脱出させたまでは良かったが……。初級お色気攻撃、その名も『Ａ・ＨＡＮ（アハ～ン）』は即席だったにも関わらず、以外にもオヤジの心にクリティカルヒットしたのは誤算であった。結局私一人にジィさん共が集中し、この有様。たとえこの状況が自分で蒔いた種であったとしても、納得いかない荒井美千子なのであった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

※三匹が斬る！…１９８７年の１０月に放送されていた時代劇ドラマのタイトルです。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

君との距離は天の川よりも遠く？

私は無性に悲しくなり、そっとため息を吐いて目の前の小さいボールに入っている金魚を眺めた。明るい灯りの下の金魚は、幻想的というよりも妙に物悲しさを誘った。私の暗い気持ちなど知りもせずに金魚は無邪気に泳ぎ続けている。これどうするんだろと普通に疑問を抱き、ブキミちゃんに尋ねようと彼女の方へ顔を向けたら、不機嫌さを瞳に宿した鬼神・修羅と目が合った。

（……だから私にどーしろというんですか……）

思わずジロリと睨み返すと、雄臣は鋭い眼光を緩め、フッと口を綻ばせて笑った。

机を挟んで熱っぽい瞬きだけで合図する男女二人。

恋人同士であればこれほど恋を盛り上げるロマンチックな仕草はなく、この簡易性のボロい机の距離すら天の川のように遠く感じるだろう。しかし現実はそんな甘いものではない。お互い救援を訴えるモールス信号と化していた。

（おい、織姫。そんな酔っ払いジジィ共に愛想振り撒いてるんじゃない。適当に誤魔化してこっちに来い！）

（……それはこっちのセリフです、彦星殿。第一どう見ても私のほうが危険極まりないでしょ。こういうときは男が女を助けるものよ）

（オマケに『男を撃ち落とす１０の必勝法』掲載の初級お色気攻撃、その名も『Ｕ・ＦＵＮ（ウフ～ン）』を使いやがって……一体何処でその安全確実異性狩猟方を取得した？！）

（雄兄さんは知らなくていいことです。それより『Ｕ・ＦＵＮ（ウフ～ン）』ではありません。それは中級で、初級は『Ａ・ＨＡＮ（アハ～ン）』です）

（……上げ足を取る生意気な幼馴染には御仕置が必要だな。俺の御仕置きは厳しいぜ？　泣く娘も喘ぐ、夜通しカーニバルだからな。

しかも俺の目の前で他の男にお色気攻撃を使った分も含め、三日三晩ノンストップの刑を追加してやる。今から楽しみだよ、俺好みの女豹に調教してやるから覚悟しておけ！）

（普通にイヤですよ。しかも中学生の言葉とは思えません）

（いやぁ、一度言ってみたかったんだよ。ミチも門外不出の女豹養成特殊訓練を受けたなら、ささやかな男のロマンぐらい察しろよな。それより、そんなＵＳＢ野郎は放っておけ。どうせ今日一夜限りの儚いご縁だ。問題はこっちの方だよ、なんせ中学卒業まで顔を合わせなきゃならないんだからな）

（……うわぁ、七夕ネタといい、ＵＳＢといい、女豹の件といい……。ねぇ、私時々雄兄さん怖くなるの。これって考えすぎかしら？）

（そりゃお互い様だろ。この会話が成立している時点で俺もミチも人間という領域から逸してるんだよ。もしくはニュー●イプってとこか。愛が成せる偉大な力っていう可能性もあるな。どれでも好きなのを選べよ、ララァ）

（誰がララァですか！）

（私のことはシャア・アズナブル大佐と呼んでほしい、ララァ・スン少尉よ）

（……落ち着け、私。……私はマトモ、私は普通、私はただの地味な女子中学生！）

（ハイハイ、わかったよ。ようはミチの心の中は駄々漏れってことだよ。そんなことより目の前の問題から目を逸らしている暇があったら、さっさと助けろ。このままじゃ５Ｐになっちまう）

（そんなの知りません。自分で撒いた種でしょ。自分で刈り取って下さい。それになんで私が雄兄さんの尻拭いをしなきゃならんのでしょう）

（呑気に尻拭ってる場合じゃないぞ。それにな、俺は愛想を振り撒いただけで、愛情は振り撒いていない。おかしいな、愛情はミチ限定だった筈なのになぁ）

（そんな愛情は振り撒かなくて結構ですので、むしろこのジジィ共

を退場させてもらえませんか？）
（そうは言ってもなぁ。大体それはミチが悪いだろ、そんな色っぽい浴衣姿で来るからジジィ共が群がるんだぜ？）
（スミマセン、浴衣着てこいって言ったの確かアナタでしたよねっ？）
（なーんだ、そういうことは会った早々に言えよ、俺のために浴衣着てきたってさぁ。恥ずかしがり屋さんだな、ミチは。あのな、女は素直と愛嬌が大事なんだぞ？　スキルアップ作戦番外編だ。またひとつ成長したな）
（……どうしたらそんなアバンギャルドな思考になれるのか是非教えていただきたいでございますわ、雄兄さん）
（褒めるなよ、照れるじゃないか）
（どんだけオメデタイんですか）
（ま、俺は広いビジョンと自由なイマジネーションを持っている男だからな。心情としては今すぐにでもそのコツを手とり足とり腰取り教えてやりたいところだが、この状況ではかなり厳しい。人前でそんな破廉恥なマネもできないし、野外プレイも趣味じゃない。なんせ俺のイメージが崩れる）
（なんならそのビジョンとイマジネーションとやらで、この状況を崩してみてはいかがでしょうかっ！）
（……おいおい、今すぐ撤退したい気持ちはわかるが、慌てるんじゃない。ここは深呼吸して逸る心を落ち着かせるんだ。いいか、敵は二手に分かれているうえに、ものすごい速さで進行する凄腕の連中ばかりなんだぞ。興奮して自分を見失っていたら、冷静な判断を下すどころか相手のペースに飲み込まれてしまうじゃないか！　ここは連中の動きを精細且つ迅速に分析しつつ、いかにして敵を欺きながら穏便に脱出する方法を捻出するのが先決だ。我々はなんとしてでも無傷で生還しなければならないのだよ、水島上等兵！）
（えぇっ？！　なに、ここ、戦場だったりするのっ？！　それより、少尉から上等兵に降格かよっ！）

（曇りなき眼（まなこ）で周囲を観察してみろ。どう見てもここは立派な戦場だろ。水島……いや、美千子、一緒に日本へ帰ろう！）

（……私は竪琴など弾けませんよ。第一ここはビルマではなく、まぎれもなく日本です）

（あたりまえだろ。とりあえず今後の対策を綿密に練るので、今夜私のテントに来い。ついでと言ってはなんだが、身体の相性の方も綿密に練ろうじゃないか。力を合わせて敵陣を突破する前に、上官と部下という名の垣根を取っ払ってみたくはないかね？）

（よくもまあ、そこまでこの状況をオチョくる余裕がありますね）

（単なるジョークだよ。ちょっとは付き合えよな、ノリの悪い奴は社会に出たら苦労するぜ？　ここは勉強だと思って適当にかわすんだ。大体な、俺達はあと十年もたたないうちに社会の荒波に揉まれるんだぞ。社会人になればこんなこと日常茶飯事なんだよ。残念だが人というのは人無しでは生きていけない生き物だからな。ほら金八先生も言ってるだろ？　「人間」っていうのは、人と人の間で生きているから「人間」っていうんじゃないかなってさ）

（どうしてこの状況から金八ネタになるのっ！　目の前の問題から目を逸らしてるのは、むしろ雄兄さんでしょ！）

（怒った顔もいいけどな、ミチ、女は顔……いや、笑顔だ。それにこのシチュエーション、遊び感覚で現実逃避でもしてなきゃやってられねぇだろ）

（……やっぱり遊んでたんですね）

（誤解するな。俺はミチに対していつでも本気だ、お前との関係を遊びと思ったことはない！）

（もういいです。伏見さんにトイレの場所でも聞いて、ここから脱出しようかな）

（おっと、冗談はこれぐらいにしてそろそろ本題に入るか。さて、我が軍が極秘ルートで入手した情報によると、もうすぐ敵の動きを完全に足止めする照明弾〈花火〉の前に、陽動作戦〈余興〉として大太鼓の演奏が真後ろの舞台で始まる予定だ。いいか、ここからが

最重要機密事項となる。貴様もそのおくれ毛が色っぽい頭に叩き込んどけ！）

（なんか不本意だけど、とりあえず、イエス、サー！）

（我が隊の後方から寄せ太鼓の音が轟いたら即出陣する。敵が太鼓の音に気をとられ、一瞬の隙ができたところを迷わず突け、一気に敵の包囲網を突破するのだ！　名付けて『七人の侍』！　……もとい、『七人から去りたい』大作戦だ！　やれるな？）

（……わざわざ遠まわしに説明された気がしますが、了解であります！　それにしてもそんな大事な情報を掴んでるんなら最初に言ってくださいよ。雄兄さんは話がいちいち長い気がします、サー！）

（しつこく長引かせて相手を翻弄させるのが俺の十八番（おはこ）でな。よかろう、偉大なるこの任務を無事遂行できた暁には特別報酬として、俺の自慢の「とっておき」を体験させてやろう）

（なんだか卑猥に聞こえるのは自分の気のせいでしょうかっ！）

（ほぉ、さすがは私の部下だ。解読不可能と謳われた我が暗号（メッセージ）を読み取るとは……。想像した以上にスキルアップ作戦の効果が順調に表れているようだな。上官且つ未来の夫としては非常に喜ばしい展開である。ミチ、俺のエスコートで大人の階段登りきる日もそう遠くはないぜ？）

（誰が未来の夫よ、何がエスコートよ！　そんな階段登るより、この怪談みたいな状況をなんとかするのが先決でしょっ……サー！！）

（無論、その件に関して異論はない。さて、世紀のカウントダウン〈太鼓のリハーサル〉が始まろうとしている。それでは諸君、作戦開始時刻まで各自持ち場にて待機せよ。脱出成功後のランデブーポイントは鳥居の下とする。最後に……なんとしても生き延びて祖国の土を踏めっ、貴様らに言えることは以上だ！　“Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ　ｔｏ　ｙｏｕ　ａｌｌ”〈健闘を祈る！！〉）

（アイアイサー！）

人間離れした瞬きの動きで敬礼を交わす……いや、情報を交わす

男女二人。

雄臣がさりげなく大太鼓がある舞台裏に時折視線を投げつけているところを見ると、瞬きで交わした情報は嘘ではないらしい。「パチパチパチ」という瞬きだけで、よく全ての内容が把握できたなと自分自身に感動してしまった。それからの私は、オヤジ共の言葉に目もくれず、雄臣達が座っている後方の舞台で用意されている太鼓にのみ意識を集中させた。ギュッと机を握りしめ、煙草と増えた蚊取り線香でもうもう煙るテントから舞台を凝視し、脱出の瞬間を今か今かと待っていたのだった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

※シャア・アズナブル大佐、ララァ・スン少尉…言わず知れた、ファースト●ンダム参照。すみません、趣味に走ってます。普通に好きなんです。

※水島上等兵…「ビルマの竪琴」参照。懐かしいなぁ。現在はご存じの通り、ビルマではなくミャンマーです。

※Ａ・ＨＡＮ（アハ～ン）→お色気初級編
　Ｕ・ＦＵＮ（ウフ～ン）→お色気中級編
　Ｉ・ＹＡＮ（イヤ～ン）→お色気上級編
　ＢＡ・ＫＡＮ（バカ～ン）→お色気特級編
…その他、多数あり。

※寄せ太鼓…攻め寄せる合図に打ち鳴らす太鼓。せめだいこ。押し太鼓とも。

ほとんど二人の会話だけに終わってしまった。なんだか…本当にいろいろとすみません。この回だけ見た人はどういう話かわからないだろうな～。（；一＿一）自分で書いていてなんですが、おかげで話が進みません。グスン。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

「ゴメン、荒井さん。もう少し待ってて」

周囲の賑やかな声と激しくなってきた大太鼓の演奏のせいだろうか。わざわざ耳に寄せられた囁き声に緊張してしまった。私は慌てて声の主に頷くと、彼はいつもの無表情なまま氷水に浸っていたラムネを私に手渡し、「飲めよ」とジェスチャーした。受け取ったラムネは冷たく、人ごみの中を縫うように小走りしてきた身体には気持ち良かった。お金を渡そうとバックの中に手を入れ小銭を取り出して顔をあげた時には、彼はもう既に背を向けてダンボールの箱からぬるい缶ジュースやビールを氷水に浸しながらお客に対応していた。私は小銭を握りしめ、後で渡そうと、ありがたくラムネのビンを傾け飲み始めた。冷たい飲み物がカラカラに乾いた喉を潤していく。

（あ～生き還った……！）

豪快に飲んでいた途中でハッと我に返り、夜店が並ぶ明るく賑わっている通りに慌てて背を向けた。安全確保の為、丸椅子を片手で持ちながら客から見えない死角の位置まで静かに移動する。少しでも通り過ぎるお客の目に自分の姿を映さぬよう縮こまり、うつむいたまま地面の砂利に目をやった。視界の中に入るのは、団扇柄の紺の浴衣と脱いである赤い鼻緒の下駄と自分の素足。慣れない下駄を履いたせいで鼻緒が当たっていた部分が擦れて赤くなっていた。とくに親指と人差し指の間が痛い。一応絆創膏は貼ってあるが、汗ですぐ取れそうなのであまり意味がないかもしれない。それに片方の下駄の鼻緒も怪しい。足さばきが難しい和装で無理矢理走ったせいなのか、変なところに重心がかかったせいなのか、新品なはずの下

駄の鼻緒が取れそうなのだ。せっかくいろんな意味での戦場から脱出し、無事祖国の土を踏めそう……いや、祭りと花火を楽しもうと思ったのに、これでは楽しむどころではないかもしれない。

（なんか、疲れちゃった……やっぱ帰ろうかなぁ）

私はラムネのビンを左右に軽く振って、カラカラ鳴るビー玉の清々しい音を聞きながらため息を洩らした。

＊＊＊

数十分前、来賓用テントの中で雄臣とお互い目くばせした後、余興の太鼓が始まるのを今か今かと待ち構えていた私と雄臣。

戦の合図であるホラ貝……いや、司会の人がいろいろとこの余興を説明し始めると、以外にも隣のＵＳＢな人達はその司会者に集中し始めた。さすが来賓のお偉い様方。花火の余興として迎えた大太鼓の演奏者達であったが、半分は来賓の方々に楽しんでもらおうと用意したイベントなのであろう。さすがにそれを無視して女子中学生を相手にするわけにはいかないらしい。そのあたりはさすがプロというか、ＴＰＯをわきまえているというか、大人しく太鼓の余興の方に神経を傾かせていた。

『ラッキー！！』

……とは言わなかったが、大太鼓の演奏が始まると、私は静かに隣のＵＳＢなお偉い様方に「ちょっと……友達が待っていますので」と表面は残念そうにしつつもニコやかに挨拶をしてその場を後にした。

それでもゴッドファーザー・伏見は性懲りもなく、「お膝の上においで」……ではなく、いや、確実にそのような意味が含まれてい

たが、「友達も連れておいで」という言葉を残してやっとこさ解放してくれた。ネッチョリとした視線が胸のあたりに絡まった気がするが、ＴＰＯをわきまえた大人の振る舞いをしたことに免じて、気がつかなかったことにしてやろう。

それでもまだ油断はできなかった。なんせ厄介なＵＳＢ連中を突破できたとしても、もっと複雑極まりない大御所が残っていたからだ。この場合、ＵＳＢよりもこの味方の上官の方が相当に手強いし、始末が悪い。

背後をチラリとみれば、まだ雄臣は脱出できずに苦戦していた。情報を提供してくれた手前、救出に向かってあげたいが、ここで戻れば全滅である。

『一人でも多く生き延びて祖国の土を踏んだ方がいいだろう！』

……などと勝手に判断した上官思いの私は、嬉々と、間違えた、泣く泣く背を向け、戦線から離脱した。「いやぁ、本当に残念、無念だなぁ！」とスキップをしながら。

これが幼稚園くらいのガキなら、「雄兄ちゃ～ん、美千子トイレ怖いのぉ。一緒についてきて～」などと甘えながら揃って撤収も可能だが、今それをやったらいろんな意味であらぬ誤解を生むお年頃である。ましてやそのままトイレへ引き込まれたのでは元も子もない。よって、ここはある意味一人でなんとかできる凄腕の上官の力を信じた方が無難である。それにあんな危険極まりない上官と一緒に行動をして自爆する気はサラサラないので、ランデブーポイントもしっかり無視するつもりでいた私は、のんびり祭りでも楽しみつつ和子ちゃんを捜そうかなと思っていたのだ。

（フフフ、あの強力な四人から脱出するのは至難の技。骨は拾ってあげるから心配しないで、雄臣！）

「バイビー☆」などと言う死語を吐きながら、ウィンク片目に投げキッスで今生の別れの挨拶でもしてやるかと、余裕のヨッチャン気分で後ろを振り向いたとき、信じられない光景に目を剥いた。ムカつくことに、天はさらなる試練を荒井美千子に与えたいらしい。なんと雄臣が席を立っており、こちらに向かって強行突破をしそうな勢いだったのだ。

上官はギラついた目を私に向けていた。それはまるで、もう助からないなら私を含めたこの場にいる全員を道連れにしようと、無線でこの辺り爆撃して焼き払ってもらおう的な程、切羽詰まっている感じだ。

荒井美千子、何度も遭遇して「史上」なんて言葉が日常化している史上最悪のピンチ！

私はこの光景を見て見ぬふりをし、急いで戦場に背を向けて走り、人ごみ（ジャングル）に紛れ込んだ。浴衣姿が多いこの中に紛れば迷彩服代わりになって探すのが困難になる！　……と思ったまではよかったのだが、慣れない下駄で走っている途中でコケてしまったのだ。幸いだったのは、膝をついた場所がまるで味方の救援部隊のごとく現れた、同じ軍隊飯を食った同期生……ではなく、クラスの同級生である星野君がいたことだった。

『……えっ？　モモっ！……あ、荒井さん？　どうしたの？！』

星野隊員は傷ついている隊員を解放する衛生班……もとい、ジュースを売っている夜店の売り子をしていた。目を見開き暫く固まった後、酷く驚いた様子で何か叫びながら私の前にしゃがみこんできた。その様子は真剣そのもので、自分が本当に負傷兵になった気分だ。私はその星野君の大袈裟な態度に驚きつつも、自分が無事に脱出できた実感を味わいたくて、同じ祖国の匂いがする同期の頼もし

い腕に縋りつきたいところだったが、こんな人ごみ溢れる店前でそんな恥ずかしい真似が出来る筈もない。代わりに相当焦った顔で背後を気にしていたら、星野君は私の気持ちを察してくれたのか、私の足元を見た後「荒井さん、こっち」と夜店のジュース売り場の後方に避難させてくれた。

星野君は同じく売り場で売り子をしていたオジサンらしき人に声を掛けると、私は慌てて頭を下げた。そのオジサンは生真面目な顔で会釈を返してくれた。その固い様子から、もしかして迷惑だったかな……と思っていたら、星野君はオジサンとの会話を終わらせ、丸椅子を持ってこちらに来てくれたのだ。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

『な、なんか、忙しい時にごめんね、星野君……』
『いいよ。けどどうした？　なんかあったのか？』
『い、いえ、たいしたことじゃなくて……戦場から脱出したと思ったら、鬼神・修羅が追ってきたものだから……』
『えっ？！　センコーが露出したと思ったら、奇声を発しながら追ってきた？！　なんだよ、それっ？！』
『ヒョエー！　ちちち違くてっ！　……え、その……そ、そう！　貴子や和子ちゃん達と逸れちゃって、アハハ』
『なんだ、ビックリした。深刻な顔で言うから、マジかと思った』
『……ハハ……』
『貴子や宇井さん達ならさっき見かけた。多分花火がよく見えるスポットに移動したんじゃないか？』
『そ、そう。あ、和子ちゃんは……貴子と一緒だった？』
『いや、別。貴子はサッカー部の連中、ほら、日下部先輩達と一緒。宇井さんは奥住達と一緒』
『奥住さん達と……って、えぇっ？　加瀬さんと和子ちゃん二人きりじゃなくてっ？！』
『あぁ。啓介や明日香達もいたから、なんかすごい大所帯だった』
『……ゲロゲロ』
『ゲロゲロ？』
『ややや！　えと、その、ゾロ……そう！　ゾロゾロ歩いて行ったのかなぁ～なんて！　アハハ～！！』
『あぁ、大人数だったからな。そういうえば、なんで荒井さんだけ一人？』
『……え～その～話せば三話分に跨ると言うか、すごく長くなるというか……。ブキ……いや、伏見さんと向こうのテントにいて、色々とその……』

『ふ～ん』

私は言葉を濁しながら、和子ちゃんが奥住さんと合流する羽目になってしまった事実に、舌打ちしたい気持ちになった。

今回私たち仲の良い八人は、当初みんなで行くはずが、日下部先輩や雄臣、ブキミちゃんからの招待、それに真美子達が加わったせいで、グループが二手に別れてしまった。幸子女史とチィちゃんは同じくクラスのよしみか、部活の時に小関明日香から「お祭り一緒に行かない？」と、思ってもみないな誘いを受けて尾島達と行動を共にすることになったのだ。チィちゃんは意外な展開に胸を弾ませ、顔を真っ赤にしながら「どうしよう緊張する」と身体を震わせていた。そのお誘いの場面を見ていた原口達は唖然としていたが、小リスに「じゃあ、女バスと女バレ仲良く行ってみよう！」と無垢な笑顔を向けられたので、何も言えないようだった。その原口にトドメを刺そうと幸子女史と奥住さんは「よっしゃ！　尾島とチィちゃんを一気にイイ雰囲気に持っていくで！」と鼻息を荒くする始末。

『東先輩も捨て難いけど、望み薄だしね。それに伏見さんのところはちょっと……。それよりチィちゃん一人じゃ可哀そうだよ！』

『そうそう！　原口達からチィちゃんを守らないとね！　それにこっちのメンツのほうは断然面白そうだし？　ヒヒヒ！』

これは幸子女史と奥住さんの意見だった。この二人の言う通り、尾島（ヤツ）のいるところに必ず原口美恵&成田耀子の影ありだから、チィちゃん一人では絶対苦戦を強いられるだろう。でも幸子女史と奥住さんのバックアップがあればなんとかなるかもしれない。……かなり難しいとは思うが。

一方、これに賛同しなかったのは私と貴子と和子ちゃんである。貴子は日下部先輩と約束していたし、和子ちゃんは雄臣と一緒に行

きたかったし、私は……どちらも嫌だったが、両天秤に掛けた結果、貴子と和子ちゃんについていくことにした。それに雄臣の前では大人しくなる和子ちゃんのバックアップをする人も必要だろうと思ったから。……そもそも、小リスのお誘いに私たち三人が入っていたか怪しいところだ。

光岡さんと加瀬さんの二人は迷った結果、結局光岡さんは尾島達に、加瀬さんは和子ちゃん達についていくことになり、祭りで会いましょうということになったのだ。

私は盛大なため息を呑みこみ、一難去ってまた一難という言葉を噛みしめつつ、なんで「ロクでもないんジャー」の一人である星野君が一人ここでジュースを売っているのか疑問に思った。

『え、えーと、そ、そういう星野君は、なんでここに？　サル……ゴホン、尾島君達と一緒に行かないの？』

『俺は家の手伝い。俺んち酒屋だから、こうして売り子をしてるわけ。あそこにいるの、俺の爺さんなんだ』

『え？！』

私はビックリして、お客さんにジュースやらビールを売っている男の人の後ろ姿を見た。さっき私に向かって会釈してくれた人だ。色が黒くて適度に筋肉が付いているガッシリとした体格の……将来星野君はこんな感じになるのだろうかと思わせるような人だった。確かに角刈りにしている髪の毛は白いものが混じっているが、私の想像するお爺さんやさっき迄一緒だったＵＳＢの連中とはかけ離れており、見た目も若いし、てっきりお父さんかと思ったのだ。私は星野君のお爺さんらしき人の背中と星野君を思わず見比べてしまった。

『え、お祖父さん……なの？　なんかすごく若い……』
『……あぁ、よく言われる。この神社来るとき、商店街らしきところ通ってきただろ？　端に酒屋があったの気付いた？』
『……ん～そういえば……あったような気が……』
『そこ、俺の家』
『そ、そうなんだ……って、星野君は仕事なんだよね。ごめん、迷惑駆けて本当にスミマセン』

私は改めて頭を下げて謝った。本当ならばすぐここを出て星野君を巻き込まないようにするのが常識人としての行動だ。……が、今動けば、雄臣に発見される可能性が大だった。上官を撒くにはここから動かずひっそりと隠れていた方が無難だ。星野君に迷惑が掛かることを重々承知していたが、意を決してお願いをすることにした。

『あ、あの……迷惑ついでに申し訳ないけど、仕事の邪魔をしないようにするから、暫くここにいさせてもらっても、いい？　もう少ししたら適当に出ていくので……』
『それは構わないけど、大丈夫？　つーか下駄、ヤバくない？』
『え？』
『ほら、鼻緒が取れそうだ。それに足擦りむいてるだろ。ちょっとこのイスに座ってろ。俺もう少しで終わるから、宇井さん達のところに行くなら一緒に行こう』
『え、そんな、わわわ私なんかと、悪いからいいよっ、ブラブラしながら和子ちゃんを探すしっ』
『そんなこと気にしなくていい。俺もどうせ合流する予定だったし。それに啓介達がいるところ、たぶん通常の花火スポットよりもちょっと上のほうだから、たぶん荒井さん見つけられないと思う。それにそのゲタ、なんとかできるかもしれない』
『……はぁ……』

（……いや、大変ありがたいんだけども……）

私は話が変な方向へ言ってしまったことに不安を覚え、再び引き攣り笑いをした。星野君は「遠慮しなくていい」と私を気遣うように言ってはくれているが、私が心配していたのは、和子ちゃん達が尾島と合流しているという点だった。原口美恵や成田耀子、それに小関明日香やチィちゃん達を侍らせ、ハーレムの頂点に立っている尾島（ボスザル）の姿なんぞ見たくもないし、あんな男を巡って火花を散らしている中に行くのも遠慮したかった。さっきまで十分戦火の渦中にいた荒井美千子。それが怪我が癒えた途端また戦場に送りだされるとは。いっそのこと、

「スマン、宇井！　捜索しても発見できなかったし、タイムオーバーで一時撤退を余儀なくされた……（ごめんね、和子ちゃん！　探しても見つからなかったし、時間も遅かったから帰ってきちゃった～）」

……などと言って祭り事態をバックれることも考えていたのだ。それなら危険な上官からも確実に避難できる。それに星野君と二人で行動するなんて、またあらぬ噂を立てられるんじゃないだろうかとそっちの方がよっぽど心配だ。この場合、荒井美千子より、星野一幸の方がより打撃が大きいだろう。どうせ噂になるなら貴子とかチィちゃんみたいな可愛らしい子がベストだ。なんせ実家が酒屋の未来のプロ野球選手。ここは断然活舌が悪い私より、見目麗しいアナウンサーがお似合いだ。

星野君は私の不安もよそに、珍しく口の端を僅かに上げて椅子に座るよう促したのだった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

星野、積極的だぞ！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

君との距離は天の川よりも遠く？

月明かりが静かに振り注ぐ、何かが起こりそうな熱い夜――。
一人の孤高なスナイパーが、確実に獲物を撃ち落とそうと狙いを定めていた。銃に装填されている弾は最後の一発、これを外せば後が無い。
男は片目を瞑り、全身を強張らせ、その額には僅かに汗の粒が浮き、ゆっくりと一筋流れる。ライフル銃を構えている男は青年と呼ばれる年にはまだ遠いが、銃を持つ腕には血管が浮いており、しっかりと筋肉もついていた。

「よ～く狙うんだぞ～」

スナイパーの気を裂こうとしているのか、オッサンが横から気の抜けた声を掛けた。しかし、男はオッサンに目もくれず意識を集中させる為に息を吸って吐いて……クッと止めたその瞬間、運命の引き金を引いたっ！

パァン！
ビシッ！
ドサッ！

銃弾が発射される音、弾がターゲットに命中する音、狙った獲物が落ちた音が次々と賑やかな夜店に響き渡った。

「「よし！！」」

歓喜の声がスナイパーである男と、物陰に隠れながら「たこ焼き」をパクついていた女から発せられた。この運命の瞬間を傍観していた周囲の人からもヤンヤと拍手が起こる。

「ハイ、アタリ～。坊主なかなかやるね。ほい、ビーチサンダル。……しっかしこんなのが欲しいなんて、最近の中学生は変わってるなぁ」

射的のオッサンが首を傾げながらブツブツと呟いていたが、スナイパーである男は戦利品のビーチサンダルを素直に受け取り、女に向かって獲物を高々と上げた。女は素直に喜んでいる彼の笑顔に応えるのが照れ臭くて……ちょっと恥ずかしそうにはにかみながら、「たこ焼」き片手に合図を送った――。

ここまで説明が長く、しかもクドくなってしまったが、なんてことはない。女というのはもちろん物陰に隠れていた私こと荒井美千子であり、この息を飲む暗殺計画……いや、射的を終え、ガッツポーズをしながら口の端を上げクールな笑いを浮かべた男は星野君である。

（ううっ、星野君ありがとう！　これで安心して歩けるよ～）

私はいまだに「たこ焼き」を頬張りながらも、この痛い下駄から解放されると思うと涙が出てきた。決して熱い「たこ焼き」のせいではない。

先程星野君の仕事が終わり、「啓介達の所へ行く前にちょっと寄り道する、いいか？」と連れてこられた場所がこの射的場であった。

（その前にお腹が激空きだったので、たこ焼き屋に寄ってもらった）

一体何をする気であろう頭を捻っていたら、いきなり射的をやり始めたのだ。まぁ、場所が射的場なのだから当たり前と言えば当たり前だが。

『え？　射的って……星野君、何か欲しい物があるの？』
『見てればわかる。まだ残ってて、ラッキーだったな』

星野君はつぶらな瞳をキラーンと光らせ（多分）、お目当ての獲物を狙いだした。構えた銃口の先にはビーチサンダルがぶら下がっており、フックにぶら下がっている紙の部分を集中的に狙い始める星野君。私はそこでやっと、彼が射的場に来た目的がわかったのだ。
（「そのゲタ、なんとかできるかも」と言っていたのはこのことだったのかぁ！）

私は改めて感心してしまい、星野君の機転と頼もしい仕事っぷりに、今すぐ物陰から飛び出して抱きつきたい衝動に駆られた。もしここが人がごった返す祭りじゃなく、しかも雄臣に追い回されている身分でなければ、「ダーリン、ワンダホーっ！！」などと言いながら「たこ焼き」を放り出し、首根っこにかじりついてホッペにチューのご褒美を差し上げていただろう。

もちろんそんな欧米的な御挨拶は想像だけで終わった。

第一星野君が暑苦しいどころか超迷惑だろうし、二人とも控えめを美徳とする立派なジャパニーズだからだ。オマケに「たこ焼き」を放り出すのが惜しいほど空腹状態であった。

射的を終えた星野君は、敵大将の首を片手に一仕事を終えた武士（もののふ）の熱気を漂わせながらこちらに向かってきた。その姿は心なしか光を背負って神々しい！　……と言いたいところだが、実際は提灯の明りである。

「これ履けよ。こっちの方が下駄よりマシだと思う」
「あああありがとう！　本当になんてお礼を言ったらいいのか……」
「別にいい。それよりビーチサンダル、残ってて良かったな。さっき祭りの準備してる時、通りかかったら珍しい景品ぶら下げているから覚えていたんだ」
「そ、そうなんだ」

おそらくそれは作者の都合だろう、そんなことはさておき。
星野君はベリッと袋を破ってビーチサンダルを取り出し目の前に置いてくれた。祭りだからだろうか。そのビーチサンダルを置く姿も勇ましく見えた。まるで信長の草履を懐で温めておいた、尾島（サル）…違う！　豊臣秀吉的な心使いを感じた。
（神様……なんだかビーサンがガラスの靴のような錯覚を覚えるのは私の気のせいでしょうか！）
勝手にシンデレラのような気持ちで一人ミュージカルの如く盛り上がっていたら、星野君は意外とアッサリとした感じで「さ、啓介のところへ行くか」とゴミをクシャクシャに丸め、素晴らしいコントロールで近くの屑籠へ投げ入れた。

「……」

星野君の言葉と一連の動作で急に現実の世界に戻された荒井美千子。王子にガラスの靴を履かせてもらえるシンデレラの甘い感動の場面な筈が、「おーい、大丈夫か？　ダメだこいつ、完全に死んでれら～」並みのオヤジギャグ状態になったのを誰が責めることができよう。オマケに履いたビーサンが、浴衣に合うはずのないゴツイ男ものだったのも予想外であった。私は無言でそそくさと履けなくなった下駄をビニール袋に入れ、星野君と祭りの会場を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

ドンドンドン、ピ――……ッ……。

先程まで煩いほど耳に響いていた、祭りの大太鼓やお囃子の音が遠くなっていく。提灯の明りからも遠ざかり、周囲が暗くなってきた。僅かな外灯らしい裸電球が一定の間隔で吊るされているが、心

もとない。
私は新しく履き替えたビーサンを踏みしめながら小高い山を登っていた。かろうじて階段らしきものがあり人が通れるところらしいが、ほとんど獣道状態で時々草が足に纏わりついてくすぐったい。それでも下駄よりはマシだった。なんせ同じ鼻緒の部分がタオル生地でできているもので柔らかくて幾分かマシだったからだ。下駄でここを登った浴衣姿のお嬢さん方はさぞや大変だったろう。私は団扇片手に扇ぎながら和装のせいで慣れない足さばきをしていたら、前を歩いている星野君が後ろを振り向いた。

「大丈夫、荒井さん」
「……あ、うん。な、なんとか」
「浴衣じゃこの道は辛いよな。後少しだから」
「そう……？」

後少しの言葉にホッと安堵の溜息を吐き、一歩足を踏み出した。…が、星野君との会話は少なく、ほとんど無言で黙々と道なき道を登っていた。別に沈黙が苦しいと言うわけではないが、さすがにダンマリも落ち着かない。ここは男性から話題を振って欲しいところだが、相手はあの星野君。寡黙な修行僧のようなお方にそれを求めるのは酷かろうと、思い切って私から声を掛けてみようと試みた。
（そうだよね、キャンプの時は普通に話していたし、あの時の調子で行けば……）

「そ、そういえば、夏休みどこか遊びに行った？」
「……え？」
「ほ、ほら、田舎とかプールとか……何処かに出かけた？」
「いや、何処にも。店の手伝いと野球」
「……そ、そうなんだ。大変、だったね……」
「あぁ、そういえば一回だけ啓介達とプールに行ったな」

「そ、そう！　何処の？」
「山野公園の市営プール」
「……そう……」
「……」
「……」

どうやら第一陣の攻撃は盛り上がりを見せず、撤退を余儀なくされた。しかしこんな程度のダメージで引き下がっては、女豹特殊訓練を受けた荒井美千子様の名が泣く。というより、厚子お姉様に顔向けできない。ここは「何処に遊びに行ったの？」のA作戦ではなく、「宿題終わった？」のB作戦で攻めてみることにした。

「そ、そうだ！　夏休みの宿題ってもう終わった？」
「宿題？」
「わたし、感想文だけが残っちゃって。ほ、星野君は何読んだの？」
「いや、まだ決めてない」
「……。あ、わたしは芥川龍之介の『杜子春』にしようかと思って……今読んでるんだけど……」
「そう」
「……」
「……」

言うまでもなく第二陣も突破口を掴めず、すごすご引き下がる荒井美千子。敵もなかなかやりよる、さすが「隊員一融通が利かない無口な朴念仁」と貴子が太鼓判押すだけのことはある。若葉マークどころか「仮免中」の札をぶら下げているウブな女豹じゃ、食指が動かない……いや、ウンともスンとも言わない筈である。
（本当は野球の話題でも触れればいいんだけど、全然わからないしなぁ。つーか、今年の甲子園出場校すらわからないし……もう、いいか。無理に会話しても苦しいだけ、もうすぐ目的地に到着するだろ）

私は話題を提供する努力をやめて、団扇を扇いでこの山登りに専念することにした。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

数々の試練に美千子、あえなく撃沈の模様。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

（結構登ってるけど、一体どこまで登るんだろう？）

私は星野君の背中を見た後、太鼓の音が聞こえる下の方へ視線を移した。ぼんやりと明かりが見える山野神社は、大野小学区にある「銀座通り」などという完全に名前負けしている小さい商店街を抜けたところにあった。（ちなみにその商店街の中に星野君の実家・酒屋がある）その先を行くとさらに少し入り組んだ細い道に入り、道は緩やかな坂を上る様に続いている。道の終点には木々で覆われている山野神社の大きい赤い鳥居が構えていた。祭りの夜店は鳥居までの細い道と弊殿までの参道に並び、今私達が登っているのは弊殿の裏のさらに奥の小高い山の部分だった。この山の裏側が大野小の裏側に続いているらしい。

（……って、まだなのかなぁ。さすがにキツイなぁ）

やっぱり和子ちゃんのところではなくて貴子の方を探せば良かった。いや、あのまま帰れば良かったかなと溜息を吐いたところで、今度は星野君の方から話しかけてきた。

「……ごめん、荒井さん。俺と話しても面白くないだろ」

「え、えぇっ？！　そそそんなことはっ！　……あっ、今の溜息はそういう意味じゃなくてですねっ！」

「いいよ、無理しなくて」

「あああの、本当ですって！　だだ第一、私も似たようなモンで……って、別に星野君が面白くないと言うわけじゃっ！」

「ハハ！　別にそんな一生懸命弁解しなくても。それより荒井さんは素で面白い。行動、天然入ってるし。夏休み中、啓介や明日香と顔を合わせる度に荒井さんの様子聞いた。……ゴメン、普通に笑ってしまった」

「は？」
「女バレって結構バスケ部やサッカー部と顔を合わせるんだろ？　そんときの事、良く話すから。あの二人」
悪いけど貴方も十分天然入ってますよ！　……的なプロ野球志望星野君プレゼンツ、超剛速球並みの「ストレート」がズドォン！　と私の耳（ミット）に入った。お陰で今迄登って来たこの小高い丘から危うく滑り落ちるところだったじゃないか！
「……」
星野君が披露したとんでもない事実に、怒りのボルテージが徐々に上昇し始めた。星繋がりで星飛●馬並みの炎を瞳に宿すどころか、このまま夜空に瞬く花火になりそうなほど炎がマックスまで燃え盛っている荒井美千子。一体あの連中がどこまであることないこと……いや、ないことないことを喋っているのか隅々までチェックを入れたいところだが、その内容を星野君の口から披露されるのは拷問プレイと言わずとして何と言うのか。私はそこまでＭではない。
（……あ、あ、あの妖怪「ミニマムコンビ」め～！　どどうしてくれよぅっ！！）
ちなみにこの場合、「ミニ」の方が尾島で、「マム」のほうが小関明日香だ。そんなことはさておき。
私は思わず団扇をギュッと握り、もう少しで二つに折ってしまうところだった。いや、団扇よりバットが折れるほど千本ノックを「ミニマムコンビ」に打ち込みたい。もしくは厚子お姉様から頂いた、ＵＳＡ星条旗柄のビキニとテンガロンハットを装着して「Ｙｅｅｈａｗ！」と叫びながら暴れ馬に跨り、ロープであの二人をつないで「市中引き回しの刑」を執行するべきだ。ここは将来の為にも、荒井美千子自ら日米親善大使となるべく、このドリームダイナマイトコラボレーションをやっとくか！　と本気で思った。

「それに先週末連日で貴子の姉ちゃんが『まるやき』に来て、荒井さんのこと言ってたし」
「えっ？！」
「先週の土曜の夜、酔っ払った厚子姉ちゃん達と会ったろ？　あれ、『まるやき』で飲んでたんだよ、俺達もいたんだ。その後厚子姉ちゃん達と楽しく焼肉パーティーしたんだって？　貴子と二人でホステスして……もてなしてくれたって厚子姉ちゃんから聞いた時はビックリした。結構名の知れたヤバイ連中ばかりだから、みんな荒井さんが相当ビビったんじゃないかって笑っ……心配してた」
以外な方向から来た二投球目の「カーブ」な事実に、今度こそ足を踏み外し少し滑り落ちてしまった。
「……」
やっぱりヤバイ連中だったんだと、自分の目に狂いはなかったと、私は正常だったんだということが判明した。だからといって、なんの特典にもなりゃしない。しかも星野君は誤魔化していたが確かに聞こえた。ホステス扱いに、ビビったことを笑われた、と。どうみてもそれがまっとうな人間の反応なのに。いや、あんな連中に常識を求める方が間違っているのか。
それにしても……あの『まるやき』に勢揃いした物騒な連中のメンツを想像しただけで鳥肌が立ってしまった。真夏なのに。ここは是非ビート●けし大先生に「こんなお好み焼き屋はイヤだ！」という形で『まるやき』を紹介してほしいくらいだ。こんな風に。
……さ、というわけではじまりました、「振り向けば、君がいた。

」！　今日も張り切って「美千子メモ」やっていきたいと思います！　今日のテーマはずばりこれ！

『こんなお好み焼き屋はイヤだ！』

さぁ、さっそく行ってみましょう。まず初めはっ？！

『赤髪ピアスのヤンキー兄ちゃんが店員だ』

これは困りますね、人に威圧感を与えるだけではありません、コイツ本当にお好み焼き焼けるのかコノヤロって感じですね。最初は爽やかにキャベツ切ってるんですがね、そのうちメンチも切っちゃってね、メンチだけでなく指も切っちゃってね、お好み焼きを食べたら指が出てきちゃった、あらビックリ仰天！　なんてバカヤロ！　なんてね。ま、そんな危ないことあってはいけませんがね。さて次は、

『二股かけた金髪男がいる』

これはマズイですね、中学生の分際で二股かけちゃぁいけません。こういうヤツは一度同じ目にあった方がね、世の為ってもんですよ！　二股かけて余裕ぶっこいていたら逆に二股かけられちゃってね、身も蓋もナイなんっつって～！　バカヤロ！　なんてね。さ、次は、

『オカマが店長だ』

これはなんなんですかね。いや、オカマっていってもね？　華奢でキレイ系ならいいんですよ？　でもね～こうガタイが大きいとねぇ、逃げ出したくなるってもんでしょ？　あの身体で、「オ～カマ～ン！！」なんてね、誘われたらね、縮みあがっちゃいますよ。え

？　ナニが縮むって？　そりゃナニに決まって……バカヤロ！！
さ、次行ってみましょう、

『猿がいる』

　これも最悪ですね！　信じられません、大体猿ってお好み焼き食べるんですかね？　え？　雑食？　や、いっそのことバナナでも与えていればいいんじゃないでしょうかね？　「私、猿がいるだけにここを去る（サル）わ」なんてね！　いますぐここを退散したいのはこっちですよ、コノヤロ！　さて次は、

『厚子（アッコ）が酔っ払って暴れている』

　これは笑えません！　グテングテンに酔っているアッコほど恐ろしいものはありませんからね、おまけにね、妙に絡まれちゃってねぇ、そんなん手下や猿で勘弁してくれよってな感じですね、それこそ手下に「アッコをおまかせ！」なんてね！　バカヤロ！　……ハイ、さて次は、

『暴走族の集会所になっている』

　これは怖いですね～、普通お好み焼き屋は集会場にはなりません、ハイ。なんの為に集まってるんですかね、お好み焼き屋だけに「ヤキいれるぞコノヤロ」なんてね、全然笑えません。というわけでそれでは今週も張り切って「振り向けば、君がいた。」行ってみましょう！！

……という感じだ。いやいやいや、脳内コントをやっている場合じゃないだろ、荒井美千子よ。

「大丈夫、荒井さん?!」
「……ななななんだか急に眩暈が……」

私はクラクラする意識をなんとか持ちこたえた。この場合重要な点は足を滑らせたということではなく、私の行動が逐一尾島を取り巻く環境に筒抜けという点の方がより重要且つ問題であった。
(ももももしや、あの女豹訓練の件も既に筒抜けとか? まさかあの時に結構ノリノリで撮影したビキニの女豹ポーズの写真まで出回ってるなんてことは……ややや、そんな! まさか、ねぇ?!)
一人虚しく空笑いをする荒井美千子。調子に乗って被写体となったことを後悔したが、既に過ぎ去った帰らぬ日々よ。ここは「まさかあんな個人的な恥ずかしい写真、本人の許可なく人に見せるなんてしないよね~? ていうか、たしかあの使い捨てカメラ、私がキッチリ回収した筈だし!」……と自分に言い聞かせ、厚子お姉様の人間性と道徳性を信じて全てを委ねることにした、その時。

「そう言えば、眩暈で思い出した。啓介が厚子姉ちゃんから何か見せられた時、鼻血吹いて眩暈起こして倒れてたな。あれ、一体なんだったんだ?」

三投球目は、未回収の使い捨てカメラもしくはポラロイドがあったという素晴らしい「オチ」を彷彿させる『フォーク』がズバーンと決まった。美千子(バッター)は見逃し三振でアウト。あまりの悔しさにこっちが鼻血ブーもんだ、チキショー!
(尾島め……いっそのこと、そのまま出血多量で天に召されれば良かったのにぃ!)
恥ずかしさで死ねると言うのはこのことだろう。それこそ恥ずかしさなど知らぬ童心にかえり、このまま神社の境内まで「ヒャッホウ!」と叫びながら一気に滑り下りたかったが、そういうわけにも

いかない。これからその尾島と顔を合わせなければならないと言う事実に顔から火が出そうなほど真っ赤になってしまった。

「……それにしても、荒井さん。今日店の前で会った時は一瞬見間違えた」

星野君は立ち止まり滑り落ちた私に手を差しのべながらポツリと呟いた。自分の恥ずかしい事実で頭が一杯だった私は、急に腕を取られたことに驚き、彼の熱い手の体温にドキッとした。薄暗くて表情がわかりにくい彼の顔を恐る恐る見上げる。

「本当にビックリした」

「……ななな何が……？」

星野君の熱っぽい視線が私に降り注いだ。

「隊員一融通が利かない無口な朴念仁」というキャッチフレーズの星野君とは思えぬ積極的な行動に、私は内心動揺しながら、「……もしや……これは告白されちゃったりするのでは？！」などと身構えてしまった。何気に星野君のことまんざらでもないんじゃん、私？　と逸る……というか早とちりする心にホクホク、いや、ドキドキしながら。

（考えてみれば、星野君って優しいし、背も高いし、野球も上手で運動神経もいいんだよね。なんせ真面目だから、浮気なんて問題外だろうし。これは絶対お買い得だよねぇ？　良く見ればカッコイイとまではいかないけど、男らしい顔してるし。なんてったって、未来のプロ野球選手だし！　……今迄モテなかったのが不思議だよな

ぁ）

この短い一瞬で呑気に星野君の分析と勝手に都合のよい夢を託していた私だが、何故星野君の名前が女の子同士の間で騒がれないのかは後々知ることになる。この年頃の女の子は目立つ男の子に夢中になったり、あからさまにモテそうな男の子の名前を上げたりするもんだが、その実星野君みたいな男の子の方が地味にモテるし、本命度の確立が高いのである。それこそ後の同窓会などで「……実は私、あの時星野君が好きでさぁ」「あ、私も～！」などというパターンが多かったりするのだ。

「荒井さん、良く似てたから」
「……は？」

星野君の一言は、私の勝手でオメデタイ思考から現実に引き戻すほどの力を持っていた。彼の言葉に籠められた思いのようなものが、彼の瞳と私の腕を握っている手から溢れ出し、徐々に私の鼓動を速めていく。

「こういうのって、『デジャブ』っていうんだろうな。三年前に戻ったみたいで」
「……さ、三年前……って？」
「荒井さんてさ、もしかして『モモタ』って言う人と……」

星野君がある名前を言った途端、私は食い入るように目の前の彼を見つめてしまった。

逆に私を見下ろしている星野君の眼差しも何かを必死に訴えているような、一生懸命探し出すように真剣で――。

『……なんでその名前が君の口から出てくるの？』

頭では星野君に問いかけているのに。

実際は口は開きかけているだけで、言葉は喉もとで詰まり、音となってこの世に吐き出されなかった。

ザッザッ、ガサガサガサッ！

星野君が言おうとしている先の言葉を聞きたくない、この状況から逃げ出したいと動揺する私の心を見透かしたのか。

木々や雑草が揺れる音と足音が上から聞こえてきた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

とうとうやってしまいました、「たけしメモ」。すみません、絶対何処がで出したかったんです。お付き合いくださいまして、ありがとうございました。ｍ（＿）ｍ

そしてまさかの急展開……星野君の数々の意味深な言葉は？また足跡の正体は？！次回へ続く！！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

「あれぇ？　一幸（かずゆき）じゃん。こんなとこで何してんの」
「「っ！！」」

私達は弾かれたように声の方へ顔を向けると、月明かりと一定の間隔でつるされている裸電球だけの薄暗い闇の中から、人が現れた。
良く見ると私達とそう変わらない年頃の男の子が三人。
星野君はハッと我に返り、咄嗟に私の手をパッと離した。私も手を握られた姿を他人に見られたのが恥ずかしくて胸の前でギュッと両手を重ねると、星野君は私の前に出て庇うように楯になってくれた。ナイトのような星野君の行動に感動する反面、この男の子たちが来る直前までの出来事を思い、心の中がザワザワとして……嬉しい気持ちが半減し、落ち着かないような、複雑な気持ちになってしまった。

「あんだぁ？　星野のコレ（小指）かぁ？」
「シニアやってるくせにカノジョ持ちかよ！　三年や監督に知れたらヤベェんじゃねーの？」

私達の一連の動作を誤解したのか、男の子達はニヤニヤしながら近づき、星野君の肩を小突きながら私たちの前に立ちはだかる。

「なになに？　二人は何処までススんでらっしゃるのぉ？」

いえ、ススムどころか、どうやら私の勘違いだったようで……などと心の中で反省し思いっきり落ち込んでいたら、彼らは下卑たイヤらしい表情を浮かべてゲラゲラと笑った。

（ちょっと……なんか嫌な雰囲気だな。この人たち、もしかしてヤバイんでないの？）

彼らがシニアと言ったということは、この男の子達は星野君と同じシニアの仲間なのかもしれない。けれども山野中では見掛けない顔だった。こんなにガラが悪ければ嫌でも目立つだろうし、桂龍太郎とつるんでいる筈だ。けど彼の仲間にこんな連中はいない。

マヌケにも今頃自分たちが置かれているこの状況が非常にマズイのではないかと悟り、心配になってそっと斜め後ろから星野君の顔を覗き見れば、思った以上に険しかった。どうやら予感が的中しそうなほど、背中越しにも彼が緊張しているのがわかる。星野君が断れないような難題でもふっ掛けられたら……と心に不安が過ったその瞬間、坊主の男子達の中から一人ズイっと前に出てきた。「え？」と思った時には、にゅっと伸ばした手で私の腕を掴み、グイッと星野君の背後から引っ張り出された。

「いっ？！　……ああああのっ！」

「一幸（かずゆき）、ちょっくらこの女貸せよ。後でちゃんと返してやるからさぁ」

私はゲームのソフトかっ！　……と叫び声をあげそうになるのをグッと押さえ、物騒な発言をした男子生徒を睨みあげたが、すぐその勢いは消え失せてしまった。

その男子は、星野君も含め全員坊主であるメンツの中で、唯一髪の毛が長くチリチリパーマかかっており横にフワッと広がっていた。暗い中でも茶色く染められているのがわかる。整えられた薄い眉に、大きいネコ目で目尻がキュっと上がっており、ヒョロっとした中背で、ロックバンドのボーカルのような出で立ち。一瞬見た感じはまるでこの年の秋にメジャーデビューしたユ●コーンのボーカルのようだ。

良く見ると優男風で軽い雰囲気を醸し出していたが、石原……じゃなかった、厚子軍団を見てその筋に免疫が付いていた私には、何故かヤバイ雰囲気をビシバシと感じた。オマケに星野君以外の野球坊主達はニヤニヤと笑ったまま口を出そうとはしない。青春ど根性を突っ走る野球少年どころか、同じ中学生（カタギ）とは言い難い彼らの行動に、私はオロオロと星野君とチリチリ男の顔を交互に見た。

星野君は相変わらず険しい顔つきのまま、滅多にお目に、というか、お聞きにかかれない低いドスの効いた声でチリチリ男に言い放った。

「……やめろ、丈一朗（じょういちろう）」

「あ、なに、その怖い顔！　マジで一幸のカノジョ？　そうなの？　ボインちゃん」

誰がボインじゃい！　……などと言える立場ではない。

チリチリの答えにくい問いに、私はこの場を逃れられるなら「そうだ」と首を縦に振りたかったが、そんな恥ずかしい嘘を言える筈もなく、弱弱しく項垂れるだけだった。例えなにか言っても彼らを刺激する材料にしかならないだろう。こんな奴らと鉢合わせになるくらいだったら、雄臣のほうが数倍もマシだったと早くも一人で脱出したことを後悔し始めた。

「ボインちゃん、俯いちゃってどうしたの～？　あれ、もしかして、二人はまだ熱い合体はしてないの？　一部接触だけ？　まさか、この暗闇の中でこれから始めちゃう段階だったとかっ？！」

「おい、丈一朗！」

「そっかぁ、これからだったのかぁ！　あーでもね？　ダメダメ！　一幸はヤメテおいたほうがいいって！　こいつ頭が固いのなんのって！　や、悔しいけど、アッチはデカいし、それこそガチガチにカタイかもしんないよ？　でも性格はコイツのオヤジと違ってすっ

げぇクソ真面目だから面白くねぇんのよ！　それよりオイラとどう？　ボクちゃん最近日照り気味でさ～こう潤いが必要だったりするワケ！　ここは一つオイラと一緒に花火でもじっくり鑑賞してさぁ、ついでにそのボインでオイラの相棒にドカンと恋の花火を派手に打ち上げさせて欲しいワケよぉ！　オレの言うこと、おわかり？」

「……」

（……軽い、いくらなんでも軽すぎるだろっ！）

まるで全ての言動に羽が生えているかのようだ。それにどう見たって地味で鈍くさい女子にオアシスを求めるほど日照りが酷いとも思えない。まるでルパ●三世のように女を口説くチリチリは性懲りもなく私の肩に腕を回し、恐ろしくもチッスをする寸前まで顔を覗きこんでいる。

夏なのにサムイボが立った。

私の知っているロクでもない連中と同じ香りがプンプンするこの男から逃れたくて、引き攣り笑いをしながら身体を捩じらせ、彼から一定の距離を取るのが精一杯であった。しつこく近付いてくるチリチリの髪がくすぐったい、というか、鬱陶しいこと極まりない。

「いい加減にしろ、丈一朗！　マジでやめとけ、啓介に見つかったら殺されるぞっ」

「はぁっ？　あんで啓介のマヌケが出てくんのよっ？　……って、あらら。もしかしてボインちゃ～ん、地味な割には一幸の他に啓介も相手しちゃってんの！　マジ啓介もなぁ～アイツ明日香だけじゃ物足りないのかよ！　まぁ、明日香は貧乳だからなぁ、気持ちはわかるけどぉ。今も上で会ったばっかだけどさぁ、なんか相変わらず原口もベッタリだし？　それにちっせえ女も侍らせてたぜ？　いくらなんでも手ぇ出しすぎだろっ、どんだけ飢えてんだ！　あ～ダメダメ！　啓介なんてやめとけ！　アイツは手を付けるだけ付けてその気にさせた挙句、キッチリ回収しない鬼畜、鬼畜生だから！

女の敵のような男よ？　それにアッチも至って極普通、並みサイズよ！　松竹梅のど真ん中のタケ！　あ、背丈は相変わらず伸びねぇけどな！　その点オイラはテクニックがあるし？　中の上だし？　女の子には優しいし？　それこそ気持ちは特上の上よ！」

マシンガンのように吐き出されたチリチリの言葉に星野君以外の野球坊主達は爆笑し始めた。

私は彼の言葉にビックリして、目を見開きポカンとバカみたいに口を開けて彼の顔を眺めてしまった。が、徐々にその言葉の意味が頭の中に浸透してくると脳味噌がグツグツと煮えたぎり、手にぶら下げていた下駄をグローブのようにはめ、そのオツムも髪の毛も言動も軽いチリチリのボディと顔にそれぞれ重い一発を叩きこみたい衝動に駆られた。

（なななによ……あのミニマムコンビってそういう破廉恥な関係だったの？！　いや、それよりなんで私があんな類人猿を相手にしなきゃならないのよっ！）

顔を真っ赤にしながら心の中で思いっきり悪態ついた後、イライラの根源であるチリチリの手から逃れようと腕を振り払ったが、生意気にもチリチリのわりには力が強くてビクともしない。

「やめろ、その言い方！　荒井さん、困ってるだろ！」

「へぇ、このボインちゃんは『あらいさん』ってゆーんだ。どう？　カタ物の一幸や伸びない竹サイズの啓介より、オイラの方が絶対お得だって！　ああ、オレ、『伴（ばん）　丈一朗（じょういちろう）』ってゆーの。聞いたことない？　結構この辺でも有名だから、山野中でも知れ渡ってると思っけど～」

私はその名前を聞いた時、自分の腕を掴んでいる人物を今世紀最大の珍動物を発見した時のような目で見てしまった……と思う。

（ばばば、伴（ばん）　丈一朗（じょういちろう）？！）

何故ならこのチリチリの言うとおり、その名はこの辺りにある中学では知らぬほど有名な名前だったからである。もちろん有名と言えば、山野中の裏番である桂兄弟もそうだし、それこそ貴子のお姉様である笹谷厚子も然り。けれどもそれと同じくらい有名だったのが、この「伴　丈一朗」という男であった。

この伴丈一朗、彼は山野中学区の隣に位置する「河田中学校」に通う中学二年生の男子である。

三度の飯より女好きで、女はとりあえずヤッとけ的なノリらしく、河田中女生徒の半分は既に御手付き済みどころか、このスケコマシをめぐって女同士が流血する事件が続出！　……などの噂が流れていた。

来るもの拒まず「ドントコイ！」の傍迷惑な伴丈一朗は、売られたケンカも色気も大小構わず買い放題。逆にキレると男女見境なく半殺しという物騒な男として、当時河田中きってのワルと有名だったのだ。そして、この番長ではなくバンジョウこと「伴　丈一朗」と、裏番な「桂　龍太郎」。この二人は同い年であるが故に好敵手として騒がれ、彼らは「山河（さんが）の二狼（にろう）」と呼ばれてこの付近の中学生に恐れられていたのである。ちなみに名前の由来は、二人とも名前の最後に「ろう」がつくからだそうだ。

もとよりこの河田中は物騒な連中が多く、学校のレベルも治安も低いと評判で、この付近に住む住民から敬遠されるほどの学区だっ

た。実は大野小へ通う学区の子はこの河田中と山野中の学区の境目に位置する子が多かった。境目に住んでいる親御さんの強い希望で中学を選べるようになった結果、子供を山野中に行かせる人が多いのだが……例外がいたらしい。ちょうどこの伴丈一朗達のように。

「あ、その様子だと聞いたことある、みたいな？　ボクチャン的には是非いい噂だといいなぁ。んじゃ、自己紹介はしなくてよろし？　そうそう、ボインちゃんのお名前は？　まさか、『アライボイン』じゃないよね？」

「ちちち違いますっ！」

「んじゃ、お名前何てぇの？」

「え、ななんでそんなこと……」

「……オイ。名前を聞かれたら、素直に答えるって山野中では教えてねぇのかよっ？！」

「ヒィッ！！　……アライ、ミチコ……デス。ドウゾヨロシク……」

「よぉし！　なかなかイイ模範的な挨拶だぞぉ、『アライチチコ』君！」

「『ミチコ』です！」

「プッ！　いやぁねぇ奥さ～ん、ジョークですって！　なんだ、地味な割には意外と面白いじゃ～ん？　ボインちゃん絶対処女でしょ？　いやぁ、こういうタイプ、オイラ初めてだなぁ。よし！　いい機会だからこの夏派手に合体して、河田中と山野中の『友好の懸け橋』となろうぜ！」

（ババババカヤロウっ！　なにが『友好の懸け橋』よっ、それに結局『ボイン』呼ばわりじゃん！）

それこそ「猛攻の押し出し」でそのニヤついている頬に紅葉マークができるほど力士並みのツッパリを決め、土俵（急斜面）から蹴り落としたかった。だてに厚子部屋の飯炊き女をやったわけじゃな

い。チリチリ頭を掴んで投げ飛ばす勢いで「超絶お断わり！」の返事を入れようとしたその時。私の希望がそのまま、いや希望以上の出来事が実現した。

「……んのぉぉぉっ、エロ丈一朗ぉ！　その手を離しやがれぇっ！！」

何処からか聞きなれたボス猿の雄たけびと共に、一陣の疾風が走り抜けた……ような気がした。

ザザザと勢いよく草を踏みしめる音がした後、「チェストォっ！」という気合の満ちた声が轟いた思ったら、ドスッ！！　……という派手な音が響いた。伴丈一朗は叫び声に振り向くと同時に前に吹っ飛び、その身体を咄嗟に星野君が支えたのだ。もちろん伴丈一朗に身体を掴まれていた私にもその余波が来てしまい、よろめいて草むらに倒れ込んでしまった。

「……あぁ、ワリィ！　その、なんだ……大丈夫か？　チュウ」

シュタっと綺麗に着地したボス猿こと尾島啓介は、伴丈一朗の背中に派手な飛び蹴りが決まったことに唖然としている私に向かって、全然悪いとも大丈夫とも思ってなさそうな気楽過ぎる声を掛けた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

とうとう出ました、「伴　丈一朗」！今後ともよろしくお願いします。

ロックバンド・ユニ●ーンのボーカル……菩提樹はすごいファンです！恐れ多くて名前は出せません、チキンなのでお許しください。

そしてファンの方、大変申し訳ございません。これはあくまでも参考程度、完全なフィクションなので文中の人物と色々下品な言動は本人と全く関係ありません！ご了承くださいませ！ちなみにこの映像から「伴丈一朗」の雰囲気をいただきました。←

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝Ｃｆ２ＷＲｅ－Ｅｖ８Ｕ＆ａｍｐ；ｆｅａｔｕｒｅ＝ｃｈａｎｎｅｌ＿ｖｉｄｅｏ＿ｔｉｔｌｅ

同じく実際に存在する「河田中」の関係者の方にもお詫び致します。

文中の人物や団体・施設などの名称は全て架空のものです、実在のものとは一切関係ありません。ｍ（＿＿）ｍ

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

君との距離は天の川よりも遠く？

伴丈一朗に迫られていた、というより、完全におちょくられていた時に飛び蹴りと言う形で乱入した尾島。

その煽りを食らってか弱い乙女が草むらに倒れ込んだというのに、あの男（サル）ときたらっ！

『……あぁ、ワリィ！　その、なんだ……大丈夫か？　チュウ』

というより、

『ワリィワリィ、遅れちまった！　目覚ましが鳴らなくてよぉ～』

……などと待ち合わせ場所に余裕で一時間遅刻してきたけど全然悪いと思ってないよこの男！　的なノリの軽さで謝った。

それどころか、倒れた私に手を差し伸べて起こすことなんぞよりも、再びキツイ二発目をチリチリに浴びせたかったらしい。着地した態勢からクルッと回って回し蹴りでトドメを刺そうとした。残念ながらチリチリはすぐにしゃがみこんでそれを避け、しかもその奥にいた星野君も身体を逸らして顎スレスレのところで尾島の蹴りをかわして叩（はた）いた。チリチリはその隙に体制を整え、立ちあがった勢いで尾島のボディに一発叩き込もうとしたが、寸でのところで星野君に羽交い絞めにされ、拳は虚しく空を切った。

ということで、現在ファイティングポーズを取りながら睨み合う、尾島啓介と伴丈一朗。

殺気がビリビリして、その迫力も半端じゃない。二人はまるで縄張り争いをするニホンザル（尾島）とオランウータン（チリチリ）

のボスのようだ。どうでもいいが、彼らの運動神経はどうなっているのだろう、中二のくせに末恐ろしいものを感じる。
　この緊迫した空気を破ったのは、星野君から無理矢理身体を引き剥がしたチリチリの方だった。

「テメェ、よくも……背後から御挨拶とはやってくれるじゃねぇか。挨拶は正面からキッチリ礼儀正しくってママから教わらなかったのか？　ん？」
「あぁ、ワリィワリィ。挨拶する前に蹴り心地が良さそうな背中が目に入ったもんだから、ついな？　試しに飛び上がったら、予想違わずキレーに決まっちまってよ。すまねぇなぁ、足が長くて！　オレもほとほと困ってんだ」
「ハッハ！　……マジもんで笑えるぜ。足の長さより、背丈の長さを心配した方がいいじゃねぇの？　尾島君」
「相変わらず頭わりぃな。背丈は長さじゃなくて高さっていうんだぜ？　それに背丈の心配は残念ながら無用でよ。現在のオレは育ち盛りでな、ここんとこ順調に伸びてるんスよ。それより伴君の方がヤバイんじゃないんスか？　小卒からあんまり変わってねぇようですけど？」
「……そりゃこっちのセリフだよ。そっちこそ相変わらず口だけは達者なところは小卒から変わってないようで？」

　どうも同じ種族……いや、顔見知りらしいが親友とは言い難い言葉でお互い牽制し合う、『サル目・かろうじてヒト科・どうしようもないエロ属』な二匹。ブラックスマイルを浮かべながら「隙あらばこの拳、迷わずお見舞いしてやるぜっ！」と身構えている。
　それを黙って見ていた星野君は、溜息を吐きながら唖然としてる私の方に近付いて声を掛けてくれた。

「大丈夫か？　荒井さん」

「……はぁ」

（そ、そうだよ、普通はコレだよね？　見よ猿共！　女たらしこむより先に、この心遣いを学べ！　……なんだけど）

心の中では二匹にしっかり文句を言いつつ、奥底ではさし伸ばされた星野君の手を見て騒動に巻き込まれる前の彼とのやりとりを思い出してしまい、その手を取るのを躊躇してしまった。決して類人猿が見てるからではない。「……あ、大丈夫だから」と、星野君から目を逸らしつつ起き上がろうとした途端、今度は猿二匹、お互い睨み合ったまま揃って勝手なことを言いだした。

「ぅぉらぁっ、一幸！　今までチュウと何してやがった?!　店の手伝いとか言ってその実イチャコラなんて聞いてねぇぞっ！　チュウもなんでドテチンと一緒じゃなく一幸とこんなところでモタモタしてんだっ！　いいからこっちに来い!!」

「啓介チャンよ、そりゃチと違うな？　ボインちゃんは今さっきオイラと花火を見る予定にメデタク変更となりまして？　オマエみたいなガキの出る幕じゃねぇのよ？　童貞ヤローは大人しくスっこんで、一人寂しく右手と仲良くイチャコラでもしてな！」

「あんだとっ?!　オレがガキならテメェは赤ん坊じゃねえか！　帰ってママのオッパイでもしゃぶってればいいんじゃないでちゅかねぇ！」

「……コノヤロ……テメェだけはマジ勘弁ならねぇ！　昔からイけ好かなかったんだよっ！　ボッコボコにして病院送りじゃ、ゴラァ！」

「上等じゃねーの！　その腐った髪の毛全部引っこ抜いて、ツルッツルなテメェのオヤジとオソロにしてやるぜっ！　パゲになったついでに仏門にでも入って一から出直してこいやっ!!」

どんどんエスカレートしていく、ラスボス並の迫力ある戦い。

「アッハッハ、この二人とっても面白〜い、じゃなくて、怖〜い☆」

……などと言いながらリングの外で菓子でも食って呑気に観戦といきたいところだが、私も少し噛んでいるようなのでそうもいかないだろう。

ここは一つ「そんな……私の為に争っちゃイヤ！」と言って滅多になれないヒロインになりきり、間に入って止めた方がいいのだろうか。それとも女豹特殊訓練のお色気攻撃を発動しながら、「フフフ……私の為に争うなんて、なんて可愛らしい坊や達なの！　気が済むまでファイトするがいいわっ！」と自らレフリー役を買うのがいいのか。いや、ここはイチかバチか特級編の「ＢＡ－ＫＡＮ（バカ〜ン）」の上をいく特殊砲撃、「ＣＤＡＳマグナム（チョット・ダケヨ・アンタモ・スキネ）」を発砲し三人仲良くまとめて「友好の懸け橋」となるべきか。

私は牙を剥いている二匹の猿を黙って見定めた。

脳内協議の結果、満場一致で全ての案件は却下となった。むしろ「即効で駆け足」で逃げた方がよかんべ！

「ごめんね、大丈夫。ありがとう」

私は星野君にそう言いながら自分の力で立ち上がり、とりあえず浴衣を整えた。ここは、その、アレだ。目の前の二匹には「勝手にするがよい」と通達し、星野君には正直に「疲れたから帰る」と頭を下げ、縄張り争いが激化している物騒な猿山からとっとと下山した方が無難だろう。

そんな私の雰囲気を察したのか、「星野君、本当に色々とありがとう。ゴメンね、やっぱり貴子を探すことにする」と言って神社の方へ戻り始めた途端、猿二匹はビックリした顔をして、オマケにビ

ックリするほどの俊敏さで私の前に立ちふさがったのだ。

「あ、待って、ボインちゃん！　オイラもちょうど下りるところだったから一緒に行こうぜ！」

「はぁ？　誰がテメェなんかと行くかっ！　オレがっ……いや、ドテチンがっ、ずっと待ってたんだぞ！　チュウはさっさと上に登りやがれ！」

「ちょ、ちょっと……！」

両腕を引っ張られる荒井美千子。猿だから加減ができなのだろうか？　女性相手にしては力入れ過ぎじゃ、ボケぇ！！

「ボインちゃん、悪い事は言わない。この啓介（オトコ）だけは絶対ヤめとけ、な？　不幸になること間違いナシ！　あぁ、そうそう、一応忠告しとっけど、一幸と龍太郎もオススメしないよ？　この三人には、小悪魔明日香がもれなくセットで付いてくるから。な？　啓介チャン？」

「はぁっ？！　ななな何を言って……お、女をとっかえひっかえヤッてる、オマエにだけは言われたかねぇっ！」

「お～やだやだ。『ヤッテル』なんて女性の前で恥ずかし！　それに男の嫉妬はみっともないぞぉ、尾島君！　オイラは龍太郎みたいに二股もしなけりゃ、啓介のようにどうでもいい女にあちこち手を付けて本命には素っ気ない鬼畜じゃねぇモンよ。その時の恋に一筋！！　ちゃんと決着（ケリ）を付けてから次へ行くからね？　ここは中身も外見も素晴らしいオイラに全てを委ねたまえ、ボインちゃん！」

「バカ言え、誰が鬼畜だ！　それにテメェの場合、中身も外見も素晴らしいじゃなくて、スケコマシだろーがっ」

「……あのさぁ。大体啓介には上で待ってる女共がいるだろうよ？　それこそ仲良く風呂まで入った明日香チャンや修旅の時に布団の中でイチャコラしてた原口も待ってるんじゃ～ん。そいつらで両手

が一杯で、ボインちゃんのオッパイまで手が回らないデショ？　ボインちゃん、今の聞いた？　この男はね、そういうどうしようもないヤツなんですよ？」

「ふふふふざけんなぁっ、テメェ！　どうでもいい過去のことをベラベラベラベラ喋りやがってっ！」

チリチリと尾島の変に焦っている言葉に、私はゆっくり二人の顔を見比べてしまった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

段々エスカレートします。

※「チョット・ダケヨ・アンタモ・スキネ」……かつてドリフターズの加藤茶がやったコントネタ。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

（……あ、あれ？　な、なんか今、ものすごいことを……聞いたような？）

私はポケーっと尾島の顔を見たが、尾島は私の方は見ようともせず、慌ててソッポを向いた。その横顔はまるで悪いことをした時に見つかった子供のような、居心地の悪そうな、気マズイ顔――。

（……ちょっと、なんで目を逸らすのよ……それともっ？！　風呂と布団でイチャコラは事実ってわけぇ？！）

私は思ってもみない衝撃の事実により、まるで自分自身が活火山のような感覚に陥った。奥深い地底の底の底から徐々にマグマのような灼熱の溶岩が噴き出すのを感じ、それが足元から頭の先に向かって急激に登り詰めるのがわかった。なぜこんなにも身体中が煮えくり返るのか理由はわからないしわかりたくもないのだが……。

（そう、そういうわけねっ！）

猿、いや、猿以下であるミジンコ並みの尾島に「フケツよ、フケツ！　アンタなんか最低っ！」と罵りながら胸ぐらを掴んで往復ビンタをお見舞いし、「やっぱり大砲じゃなく竹並みだったのねっ！　この嘘つき！」的な下半身にケリを入れて、日ごろの恨みつらみを晴らしたいところだが、残念なことに今の私ではそれを執行する勇気もなければ、その権利もない。

しかし、睨むだけならプライスレス！　なんてったって「マク●ナルド」だってスマイル￥０の時代！　ここはスマイルではなくミサイルを打ち込む勢いで、思う存分怨念の籠った超スペシャルビームをお見舞いしてやった。

「いいぞぉボインちゃん、その調子！　それにホラ、尾島君も否定しないでしょ？　そういうことで啓介はその手を離せってぇの、シ

ッシッ！　ボインちゃんはオイラが責任もってラブも相棒も注入しとくから心配すんな！」

「注入……って、ババババカヤロウぅ！　っざけんなっ！　どぅあれがっテメェの萎びたラブと相棒を注入させるかっ！　それはな、このオレ様の役っ……あ、いや……やく、やく……そうだっ！　『焼くも返すもアナタ次第！　『まるやき』はそんなお客様を応援します！』でお馴染みの『まるやき』オーナー・蝶子がテメェの顔を久し振りに拝みたいってよ！　只今開店十周年記念の為、お好み焼き全品半額キャンペーン中だっ！　今すぐ祝辞を述べに顔を出してきやがれっ！」

「おいおい、オマエは『まるやき』の回しモンか？　それよりなんでオイラがあんなオカマに会いに行って祝辞を述べにゃぁならんのよ！　オイラの専門は１００％女子、おわかり？　おっ、そうだ！　ボインちゃん、せっかくだから一緒に寄って行くか！　オーナーは人間じゃないけど、ここは肝試しだと思ってさ、な？　なんてったって夏だしなっ！　背筋も凍る店長を見て一先ず悲鳴を上げたら、ちゃんとオイラにしがみつくんだぜ？　そんでさ、二人のホットな愛で仲良くお好み焼きでも焼こうじゃないの！　『ほら、この鉄板をごらん？　燃えるように熱いだろ？　これがオイラの気持ちさ！』『まぁ、なんて熱いの……丈一朗様ったらステキ！』『おっと、あぶねぇ。オイラに近付いちゃぁ火傷をするぜ！』『いいの、チチコは丈一朗様の愛で焼かれたい！』『ハッハッハ、チチコも罪な女だな。仕方がない……ふっくらと焼けたお好み焼きのようなオマエのボインに俺の愛を刻んでやろう……。覚悟しなっ、オイラの相棒（ヘラ）が火を吹くぜ！』『いやあぁぁん、丈一朗さまってば、すごぉぉい！』……というわけで、残念ながらこの先はよい子も読んでる可能性が高いから打ち止めだ。残りは各自で想像するように！　な？　ボインちゃん！」

「……」

（……コイツ、本当に中学生なんだろうか……）

大体、な？　と問われたところで何と答えればいいというのだろう。いや、いっそのこと『まるやき』ではなく『まるこげ』にするべく、私の愛（マグマ）で本当に「チリチリ」にしてやるべきなんじゃないだろうか。それより『まるやき』は十周年らしい、一体ベティちゃんは幾つなんだろう。いやいや、そんなことより『チチコ』って誰だよ！！

「……コロス……よぉぉっし、決定だぁっ！　テメェを生かしちゃ絶対世の為になんねぇからな！！」

「いやだなぁ尾島君、野蛮な男は女子に嫌われるぜぇ？　大体さぁ、ボインちゃんは啓介のなんなのよぉ、カノジョなんですか？」

伴丈一朗が厭きれたように吐きだした言葉に、私を含めこの場にいた……というより、私と尾島はピキーンと固まった。尾島（キングコング）は口元をグッと詰まらせ、私（ゴジラ）は足元から咽喉まで吹き出したマグマが放射能熱線炎となって発射！　……はされず、むしろ逆流したせいで動悸が激しくなるのを感じた。

（え、え、そそそんなカノジョなんて冗談じゃない！！　だだだ大体ね、コイツとは只のクラスメートというか？　それ以下でも以上でもなくてっ？　特に特別な関係ではないというかっ？！　……そもそも尾島はいつも私のことをからかって遊んでるというか……）

聞かれたわけではないのに、言い訳するように心の中で慌てて答えてしまう荒井美千子。一方、尾島からは一切言葉は発せられず、ムスっと不機嫌そうに黙ったままだ。この沈黙がなんとなく嫌で、なんで黙ってるの、いつものように調子よく答えなさいよと言葉ではなくて目で訴えつつ、固唾をのんで尾島を見つめた。

いつものような調子でけなされるのだろうか、と思いながら。
いや、たぶんそうなるんだろう、とも思いながら。
けれども、私は心のどこかで、尾島がどんな答えを出すのかドキドキしながら待ち構えていた。一体この動悸はなんなのだろう。

とうとう尾島は大きい溜息を吐き、外国人のように頭を振りながら大袈裟に肩を竦めた。

「ハァァァっ?!　な、なんなのよって、そんなこと、いちいち伴君に答えなきゃならんのですかね?　その義務はあるんですかね?　それよりそんな宇宙一くだらねぇこと、オマエに詮索される覚えはねぇんだよっ!　それともなにか?　そんなにオレ達の関係を聞きたいのですか?　そんなに知りたきゃ教えてやんよ、耳の穴かっぽじって良く聞きやがれ!」

尾島は急に元気になり、おどけた調子で捲し立てた後、ニヤリとした表情でフンと鼻を鳴らした。
私の鼓動は破裂しそうな勢いで、余興の大太鼓のように、ドンドンと暴れていた。

「この荒井美千子はな、オレの奴隷なのよ。おわかり?　オレのお陰でクラスで息してられるのよっ。だからオレに逆らうことはでき

ねぇし？　オレの言いなり、絶対服従って訳ナンですよ？　よってオメェとチュウは今後一切一生死ぬまで接点が無い訳ナンですわっ！　ここまで説明すればおわかりですかね、頭が弱い伴丈一朗君！」

尾島の早口で捲し立てた言葉は、私の心を貫いた。
――いや、粉々に砕いた。

尾島は確かに言った。
宇宙一くだらないことで、絶対服従の奴隷。
クラスで息していられるのは、尾島（コイツ）のおかげ――。

「おい！　よせよ、啓介っ！」
「ブッ！　ハァ？　なんだよそれぇ～？」

私は尾島を見続けることができず、顔を上げ続けることすら困難で俯いてしまった。
せっかく抗議してくれた星野君の言葉でも立ち直ることができず、深い傷を癒すこともなかった。それどころか、その怒鳴り声すら虚しく感じてしまった。ましてや、伴丈一朗のわざとらしく目を丸くした後の爆笑は、奈落の底に突き落とされたようで……耳触りと言わずしてなんであろう。

（……何がそんなにおかしいの？）

徹底的にバカにされ、笑い者にされているというのに……何故私はその加害者達に大人しく両腕を掴まれてアホみたく黙っているのだろう。

言いたいことを言われ、ボケっと突っ立ったまま何も言い返せない自分が情けなかった。いつも腹の中ではごちゃごちゃ言うくせに、肝心な時に何も言えない自分に腹が立った。心の底から呪いたくなった。

「呑気に笑ってないでとっとと帰りやがれっ。その笑いっつーか、存在すら目障りなんだよ！」

「アッハッハ！　ククク……いやぁ、別に尾島君が目障りでも一向に構わないですよ、オイラは。それよりもさぁ、頭が弱いのはオマエの方でないの？　オイラはボインちゃんが啓介のカノジョかどうかって聞いたんですけど？　別に二人の関係を丁寧に説明しろとは言ってないんですけど？　ま、そこまで言うならカノジョじゃねぇんだろうなぁ！　大体カノジョだったらさぁ、こんな最低な扱い、ありえないし？　余計な邪魔もの引き連れた挙句、他の女侍らせてハーレム状態にするわけねぇもんな？　もしオイラが女でさぁ、カレシにそんなことされたらマジ殺すね。迷わず股間蹴り上げるね。一生使い物にしてやらないぐらいの素晴らしいケリをキレイに決めちゃうねっ！」

「丈一朗もやめろ！　キリがネェだろ！」

「っるせぇんだよっ、一幸は！　さっきから聞いてりゃイチイチ口

挟みやがって……ほんとにオマエもさぁ、もっとオヤジさんみたいに人生軽く、気楽に生きろよ？　そんなんじゃお袋さんみたくいつかは派手に頭がスパークしちまうぜ？　あ～バカらしっ！　さ、ボインちゃん行こうぜ。女を奴隷なんて言ってる奴や呑気にその友達やってる頭の固いヤツなんて無視無視！　おっとぉ、その前に一幸クンに一言アドバイス。この尾島君、カルシウム足りないんでないの？　頭に血が昇って怒りっぽくなってるよーだから？　明日香のところにでも連れて行って、オチチあげるよう言ってやんなさいよ。ついでにさぁ、二人とも貧乳明日香チャンに一発抜いてもらった方がエエんでな」

伴丈一朗の言葉は途切れた。

彼は最後まで言えなかった。というより、言うことができなかった。尾島啓介の右ストレートがもろ顔面に入ったから。

遠いところで悲鳴が聞こえた。

それが自分の口から出た悲鳴だと認識したのは、写真の連写のように目の前の景色が、勝手に熱くなってる男達の顔がスローモーションのように変化した時。自分の身体が、傾いた時。

拳をまともに食らった伴丈一朗は、その拍子に彼の手が私の腕から離れ、後ろに倒れた。

一方私は、尾島が殴った拍子に私の腕を勢いよく引っ張り、急に離してくれたお陰で遠心力によって階段の下の方に背中から放り出されたのだ。浴衣のせいで足は思うように動かず、一旦足をついた

が着き方が悪かったのか、グキッと嫌な感触と痛みが体中に広がった。

支え損ねた身体は、まるで動けないオモチャのように落ちていった。

転げ落ちる身体と傷つけられた心、果たしてどちらが痛いのだろうかと頭の隅で考えながら。

ぼやける視界には、星野君らしき人が手を伸ばす姿。

伴丈一朗に向かって大声で叫びながら飛び掛かった尾島が、星野君の叫び声でこっちを振り向いた姿。

――そして。

木々の間から見えた、真っ暗な夜空に咲き誇る一発目の鮮やかな花火だった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

文中に新燃岳の噴火で被害を被られた方々、またその関係者に不快な表現があったことをお詫び申し上げます。m（＿）m

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

「……美千子、大丈夫？」

貴子が私の顔を下から覗きこんで、ギュッと手を握った。

溢れた涙を吸い過ぎて最早役目を果たしてないハンカチを膝の上に置き、浴衣の合わせの部分を整えながら黙って頷いた。さっきまで泣いていた目を指で覆う。貴子の顔を見た途端、中学生にもなってワンワン泣いてしまった恥ずかしさで、彼女の顔をまともに見れない。髪がほつれている項に、日下部先輩の心配そうな視線が刺さるのがわかった。それにせっかくの二人のデートを壊し、花火どころではなくしてしまったことも申し訳なくて、ただ項垂れることしかできなかった。「私に構わずお祭りを楽しんで」と送り出したいが、今はそんな気遣いも口も回らなかった。身体も心も酷く疲れ、座ることしかできなかった。いまだ濛々と煙っている来賓客用のテントの中で、静かに座っていることしか――。

目線を合わせなくても二人が酷く心配しているのが、何か言いたそうに、何が起きたのか知りたそうにしているのがわかったのだが……。

今は。今だけは。

できればそっとしておいて欲しかった。

申し訳ないが、貴子や日下部先輩に言いたくないし言えなかった。正直言える状態でもない。

「荒井さん、お待たせしてごめんなさいね？」

砂利を踏む音の後に、落ち着いた低いハスキーボイスが聞こえた。ドンドンと頭上で響く花火の音に負けないくらいの存在感を、ドッ

シリと響かせながら。

「……」

先刻から、神社の裏山での出来事が壊れたレコードのように頭の中でリピートしていた。頭がパニック状態で考えがまとまらないまま、私は泣きはらした顔をブキミちゃんに向けた。ブキミちゃんは私の泣き顔を眼鏡の奥からジッと見た後、ニヤリ……ではなくて、初めてじゃないのかというほど慈悲深い笑みで頷いた。

「……いいのよ。それより少しは落ち着いたかしら？　歩ける？」

「あ、あの……私っ！」

「何も言わなくていいの。荒井さんが気にすることではないのよ？　あなたは被害者なんですもの。それよりも今は御自分の身体を心配したほうがよろしいのではなくて？　足、痛いのでしょう？　お疲れの様子だけど、悪くならないうちに急いだほうがいいわ」

ブキミちゃんは私の背中にそっと手を添え、顔を覗き込みながら小さい子供を諭すように言い聞かせた後、私をゆっくり立ち上がらせた。

「……荒井さん、伏見の言うとおりだよ。足、結構腫れているし、もしヒビでも入っていたら大変だ。ここは伏見に甘えさせてもらって、急いで彼女の病院へ行ったほうがいい。な？　貴子」

「先輩……。そ、そうだよね。美千子、伏見さんと日下部先輩の言うとおりだと思う。……和子達には……言っておくから……」

日下部先輩は貴子の肩を抱きながらしっかりと頷き、貴子は最初語尾を震わせながら言っていたが、徐々に顔を苦しそうに歪め、浴衣をギュッと握った。

「……そうね。笹谷さんには是非、荒井さんは怪我をしたので東先輩と帰るということをお友達にお伝えしてもらうといいわ。でないと、ないことないこと……いえ、歪んだ事実を伝えられてしまう可能性が大きいものね。『彼女』に」

ブキミちゃんの慈悲深い笑みは「最早用済み」と言わんばかりに消え去り、いつもの不気味なスマイルに変貌し意味深な言葉を残した。

「……え？　『彼女』？　……って何？　一体誰よ？　あ、あのさ、伏見さん、ちょっと聞いてもいい？　美千子に何があったの？　一体何がどうなってっ？！」

貴子はブキミちゃんの言葉にサッと顔を強張らせ青くした私を見逃さず、眉根をキッと寄せてブキミちゃんに問いかけた。ブキミちゃんはいつもと変わらない澄ました表情でチラッと貴子を見た後、瞼を閉じた。

「……悪いけど、今は笹谷さんに説明している時間はありませんの。後日荒井さんから直接お聞きになるといいわ。もしくは、丘の上で呑気に花火を観賞している仲の良い幼馴染達に御尋ねになれば早いかもしれませんわね。もっとも、」

誰ひとり本当のことは言えないでしょうし、言わないでしょうけど。

そういいながら眼鏡の奥にある閉じていた瞼をゆっくり開き、瞳

をキラリと光らせて貴子を射抜いた。その確かな力強さに驚いたのか、貴子はハッと息を呑み、それから徐々に目を見開いていった。

「……おさななじみ……」

「お互い出来の悪い幼馴染を持つと、苦労しますわね。笹谷さんの御心中、お察ししますわ」

不気味なハスキーボイスを吐き出す割りには鮮やかな赤い唇を持つブキミちゃん。口角を上げてニヤっと笑い、目を細めた。

恐ろしくも貴子はそれだけですべてを察したようだ。「そう、そういうこと……」と唇を噛み締め、今度は彼女のほうが目をギラギラさせながら神社の裏に聳える小高い山を睨んだ。

（……ちょちょちょっと、ブキミちゃん！）

『このことは他言無用』とあの場にいた全員に固く念を押した本人（ブキミちゃん）が、掌を返したように笹谷さんには詳細を報告してヨシと言ったことに私は驚いて目を丸くした。

「……ふふふ伏見さんっ！　あああのっ！」

「あら、笹谷さんだけならよろしんじゃなくて？　荒井さんだって自分の心の内を理解してもらえる方が一人でもいた方がよろしいでしょう？　笹谷さんは周囲に振り回されず、冷静且つ公平な判断ができる頭の良い方ですから。上手く荒井さんの心を汲み取ってくれる筈よ。そうですわね？　笹谷さん」

私はブキミちゃんに本心を見透かされ、押し黙ってしまった。

本当なら……「ちょっと足を滑らしちゃって。でも大丈夫！」といつものように愛想笑いを披露し、何もなかったこと主張して貴子を巻きこまないようにするのが本当だ。

けれども――。

今の私には、そんな心遣いをする余裕もなければ、ブキミちゃんの言葉を否定することもできなかった。この悲しいような虚しい気持ちを誰かに吐きだしてしまいたかった。今夜一気に降りかかってきた、いや、中学入学当初から少しずつ心の奥底で蓄積され淀んだ泥のような感情を、きれいに洗い流してしまいたかった。

ブキミちゃんの言うとおり、私は貴子に神社の裏山で起こったことを話してしまうだろう。

いや、この様子だと貴子はもうある程度察しがついているのかもしれない。裏山で花火を見ている連中を待ち伏せし、片っ端から血祭りに上げるんじゃないかと冗談にならない不安が過ったが、傍に日下部先輩がいる限り、とりあえず祭りの間は大丈夫だろうと無理矢理自分を安心させることにした。それに今日のことは、一晩経ってお互い冷静になったところで話すほうが無難だ。今話したら、私も再び泣き出すに違いない。

ブキミちゃんは貴子の憤怒の形相に満足したのか、声にならない笑いを漏らしながら頷き、すぐにもとの生真面目な能面のような顔に戻って私の腰に腕を回した。

「さぁ、荒井さん。タクシーが来てるから行きましょう。出来のよい幼馴染（おにいさん）が首を長くしてお待ちかねよ」

ブキミちゃんはまるで既に貴子と日下部先輩など見えぬかのように私にだけ微笑み、私の腕を取って歩き出そうとしたその時。

スッと私の前に威圧感のある影が立ちふさがった。

条件反射で身体が震えた。

顔を見ないよう俯いているというのに、その瞳の中には目を合わせるだけで逆鱗に触れるような、彼の瞳の色と同じ灰にするほどの仄暗い青い炎が灯っているのが気配だけでわかった。

「……遅いぞ、ミチ。待ちくたびれたから迎えに来たぜ」

「……」

有無を言わせぬ低い雄臣の声に私は益々項垂れ、妖怪人間ベムとベラに連行されながら人間界……、いや、山野神社を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

『丈一朗ぉぉぉ、テメェ！！』

伴丈一朗に一発叩きこんだ尾島啓介は完全に頭に血が上ったのか、私の腕を勢いよく引っ張った後そのまま放り出して、奇声を発しながら伴丈一朗に飛び掛かった。馬乗りになり、胸倉をつかんで二発目をもう片方の頬に決めたところで、星野君の叫び声がこの薄暗い急斜面に響き渡った。

『危ない、荒井さんっ！！』

私は小さい悲鳴と共にむなしく階段の下へ転げ落ちそうになるのと、彼らが揃いもそろって驚愕した表情をしながらこちらを見たのが同時だった。

私は衝撃と痛みに備えるため条件反射で咄嗟に目を瞑った。花火の残像が閉じた目に残っているのを感じながら、これから身に降りかかることをただ手をこまねいて待つことしかできなかった。

（絶対痛い）
（浴衣完全に汚れる、洗濯できるよね？）
（まさか神社の弊殿まで転がるなんてことは……）
（こんなアホな姿を見られるなんて）
（神を怒らせた罰なのかな）
（打ち所が悪かったらどうしよう）
（完全に足捻った）
（いっそのこと、今まであったことこのまま全部忘れてたら）

一瞬の間に様々なことが頭の中に過ぎり、それを人事のように考えていた私を待っていたのは――。

背中を打つ痛みでもなければ、階段を転げ落ちる衝撃でもなかった。いや、衝撃はあった。けれどもその前に階段の下の方から勢いよく駆けてくる音と多数の叫び声が聞こえ、叫び声の中でもこれだけはしっかりと聞こえた。

『ミチっ！』

昔より少し低くなったけど、聞きなれていた声色。私の名を呼ぶ叫び声とともに背中にドンっという衝撃を感じ、一瞬ウッと息が詰まった。それでも階段を転げ落ちる気配はなく、自分の体は確かに止まっていた。身体をしっかり抱き止められている感触がハッキリしたときには、「助かった」という安堵と「もし転げ落ちていたら」という恐怖が混ざり合い心臓の鼓動が最高潮、汗がどっと吹き出た。恐る恐る瞼を開けたそこには。

私を見下ろす、すべてを灰にするような燃えたグレーの瞳。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

『召し捕ったり！！』

雄臣は声にこそ出さなかったが、無表情のまま二人にしかわからない程度にそう唇を動かした。

私の瞳を通り越して脳みそまで射抜くグレーの威圧的な瞳は、

「待たせてすまない、プリンセスよ！」

……という白馬に乗った王子様というより、

「身体を張って助けたこの借りは、必ず同じ代価（ボディー）で払ってもらおうか！」

……などと叫びながら掻っ攫う、ガーゴイルに乗ったサタンそのものだった。

私の全身に震えが走った。

雄臣はそんな私を無視して急にニッコリと笑い、「間に合ってよかった」と言いながら一息ついた。恐怖の為か突然の事故にか、いまだ硬直状態にある私をゆっくり立たせた後、ポンポンと背中を叩きながら「怪我はないか？」と聞いてきた。

私は何が何だか訳が分からないまま、なんとか頷いたまでは良かったが……震えていた左足に重心を置いた瞬間、足首に鋭い痛みが走り思わず顔を顰めてしまった。

『？！　……どうした？　痛いのか？』

『あ、あ、足が……』

『足？　……歩けそうか？』

『わ、わからない……』

雄臣はしゃがみこみ、私の左足首の様子を見たが、この暗い中では詳しい状態を見ることができず、小さく舌打ちしながら再び立ち上がった。

『チッ、仕方がないな……』

その言葉と共に私の視界はグリンという音がなるほど一転し、宙に浮いた。なんと、横抱き、いわゆる御姫様抱っこというやつをされたからだ！

『●×▲〒☆◇α＆％¥っ！！』

『しっかりつかまってろ』

『ちょちょちょちょっと！！』

『暴れるな。今落ちたら二人とも一緒にあの世行きだ。ま、それもオツだけどな。二人で仲良くお手手つないで三途の川でも渡ろうぜ。なんでもお花畑があるそうだからな。それにここは神社だし、きっと神様だって申し訳なく思って天国にでも行かせてくれるだろ。まぁ、俺としては違う意味でミチを天国へ連れて行ってやりたいが、さっきも言った通り野外プレイは趣味じゃない。というわけでここからとっとと退散して、続きは安西叔母さんの家に着いてからのお楽しみだ。なに、ちょっとの辛抱だよ。それぐらいは我慢できるよな？』

『なっなっ何が我慢よっ！　冗談はやめてくださいっっ！！』

『それよりもミチ、もう少し痩せろ。いくら俺でもかなりキツイ。これからは胸だけを集中的に発育させるんだ』

『おおおおろしてっ、おろしてぇぇ～！！』

『……なんだよいきなり。我儘な女はいつか愛想尽かされるぞ。俺の綿密な指導の許で、スキルアップ作戦を一から鍛え直したほうが

いいんじゃないか？』

『おおお願い、お願いっ！！』

『……まったく、しょうがないなヤツだなぁ。ま、今日のところはこれくらいで勘弁してやるか。どうやらふざけている場合じゃないみたいだしな。それに、殺気が半端じゃない坊やもいることだし？』

雄臣はわざとらしくため息を吐いた後大人しく私を下におろし、私の肩を抱きよせながらゆっくり上の方へ挑戦的な視線を送った。その先には私たちの様子を固唾を飲みながら唖然と見守っていた同級生と河田中の連中がいた。品行方正の優等生である筈の雄臣（オトコ）が、聞き違いじゃないかという過激な発言と大胆な行動をしているのを目の当たりにしたからなのか……しばらく白けたような、呆けた異様な雰囲気が薄暗い木々の間を漂った。が、この沈黙を破ったのは星野君だった。心配そうな強張った顔を私の方へ向けながら。

『……あ、あの、荒井さん、大丈夫……か？』

『あぁ！　もしかして君が星野君かい？　君のお祖父さんから話は聞いたよ。すまないねぇ、ミチが迷惑掛けたうえに大変お世話になったようで。今後このような面倒を掛けぬよう、俺からミチにお仕置き兼しっかりと言い聞かせておくから』

『お仕置きって……。あ、いや、そんなことどうでも……。そうじゃなくて、足、もしかして怪我』

『あぁ、ミチの怪我のことは君が心配してくれなくても大丈夫。俺が引き受けよう。それにこれは不慮の事故ってやつだ。大体ミチがハッキリした態度で君達のお誘いを断り、さっさと下まで降りて来ればこんな面倒なことにはならなかったんだからな。自業自得ってやつだろ。むしろ君には頭を下げ礼を言わなくてはいけないな。下駄だったらそれこそ足首がイっていただろうからね。だから君は心置きなく御友人と一緒に花火でも鑑賞してくれないか』

『……』

星野君の言葉は雄臣の迫力ある棒読みのセリフに遮られた。星野君は眉根を寄せながら黙って鬼神・修羅の仄暗い眼光を受け止め、何か言おうと逡巡していたようだが、結局何も言わず口を引き締めたままだった。雄臣の言葉にますます居た堪れなくなった私は、自分が情けない上に星野君にまで迷惑をかけた事実に打ちひしがれ、目頭の辺りが熱くなるのを感じ項垂れてしまった。

『……おい、東っ！　……先輩。いくらなんでもそりゃねぇんじゃねぇのっ？　チュウは別に何もしてっ……！！』

星野君の代わりに口を挟んだのは、尾島だった。彼の怒りを含んだ声色と物騒な雰囲気が、伴丈一郎から雄臣へ移り、その姿に私の心臓がドキンと高鳴り反射的に顔を上げたが、彼の言葉も最後まで発せられずに途切れた。殴られていた伴丈一朗が正気に戻り、馬乗りになっている尾島を殴り倒したからだ。

『お、尾島君！』

『啓介！　おい、丈一朗も、もうやめろ！！』

私と星野君が叫んでも、二人はゆっくり立ち上がり体制を整えながらお互い睨み合ったままで、怒りが静まることはなさそうだった。

『啓介、テメェ……あぁっ、クソっ！　おかげで少しイッちまったじゃねえかっ！　……ったくよぉ、オイラとしたことが……あ～あっ！　マジもう勘弁ならねな……ぜってぇぇぇっ、ブッ殺す！！』

『……チッ……上等じゃ、かかってこいやっ！　今のオレはすげぇ機嫌悪いからなっ！　徹底的にやってやんぜっ！！』

『いい加減にしろ、二人とも！！』

星野君の制止も聞かず、怒鳴る伴丈一朗と唾を吐きだしながら応戦する尾島。二人が掴みかかって殴り合いを始めそうになるのを止めたのは――。

ある女性の叫び声。

『ダメだよ、啓介！』

声は上から聞こえた。

その声で二人が怯んだ隙を狙って、河田中の連中と星野君、上から叫けびながら駆け降りてきた小関明日香によって二人は引き離され、寸でのところで事なきを得た。

尾島啓介の背中に抱きついているのは、陽気で呑気が売り物のいつもの子リスとは打って変わり、全力で止めに入る真剣な小関明日香。

『こらぁ、離せっ！　明日香ぁ！』

『バカ！　啓介、外で暴力沙汰はマズイって！　やるなら蝶子の店の中だけだよっ、約束でしょっ？！』

『あらあら、尾島く～ん、明日香ちゃんにかばわれちゃってぇ、うらやましいこってっ！　テメェがそんな腰ぬけだとはなぁっ！』

『丈一朗もやめなよっ！　大体なんでこんなことになってるの？！どうせいつものように馬鹿らしいことで喧嘩でもしたんでしょ？もう、二人とも小学校のときから全然成長してないじゃんっ！』

『『うるせぇっ！！』』

突如現れた小関明日香を、私は雄臣の影からただただ見守っていた。

彼らはなにやら言い合いを続けていたが、少し雰囲気が変わり殺気が薄れたことだけは私にもわかった。話の内容はある言葉以外一切私の耳には入ってこなかったが。

（……「馬鹿らしいこと」……か。そっか、尾島は小関明日香の言うことは聞くんだね……）

自分の考えたことが身体に染み込んだ途端、咽喉がギュッと縮み苦しくなった。そして、自分の身体に風が通り抜けるような虚脱感に襲われた。

胸がザワザワするその光景は、まるで自分が最も見たくない映像のようで……、何故私はこんな拷問にかけられているような気持ちにならなければならないのだろうか。

ひどく気分が悪くなり、見続けることが苦痛だったため雄臣の影に隠れた。もう帰ろうと雄臣の腕を引っ張り階段を降りようとした時。

スッと音も気配もなくいきなり私の隣に並んだ人影。

『……あらあら、小関明日香さん。「馬鹿らしいこと」とは聞き捨てなりませんわねぇ。荒井さんに失礼ですわよ』

薄暗い木々の下に響く、不気味なハスキーボイス。

『それよりも……このような場所で花火をご鑑賞とは、皆様変わったご趣味を持ち合わせておりますのねぇ』

花火の光が周囲を照らし出す。そこには眼鏡をギラリと光らせ、うっすらと微笑を湛える「伏見かおり」がいた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

雄臣とブキミちゃんはストーカーだと判明した！
美千子の恐怖度が2、上がった！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

ブキミちゃんは夜空から降り注ぐ月光と花火の色とりどりの光を浴びながら、天使の輪が並みじゃない黒髪をサラッと揺らして、ニヤリと笑った。

『あら、なんだか穏やかな雰囲気じゃありませんのね？　せっかくお爺様が日ごろお世話になっている市民の為にと、多大に寄付した打ち上げ花火ですのに。……花火そっちのけでこんなところで呑気に物騒なお戯れとは、これじゃお爺様が可哀そうですわ。ねぇ、荒井さん？』

澄ました顔でものすごいことを言ってのけた、ブキミちゃん。私は俯いたまま彼女の言葉を黙って聞くことしかできず、同意も否定もできなかった。でもその彼女の凄味の利いたセリフを真っ向から噛みついたのは、意外なことに尾島啓介でなく、伴丈一朗だった。

『うるせぇっ！　さっきからワケわかんねぇ奴ばっかりしゃしゃり出てきやがって……部外者はすっこんでろっ！　大体先に足と手を出したのは啓介（そっち）なんだよっ！　俺はやられた分はキッチリ倍返しでお礼する主義でな。しかもすぐやらねえと気がすまねぇ性質（たち）なんだよっ！』

『おやめなさい、伴丈一朗。アナタの事情など、どうでもいいことよ。バカバカしい』

『あんだとっ？！　……フン、そっちこそそんな呑気なこと言っていいのかよ？　こんな暴力沙汰、バレたらヤバイのは山野中（そっち）ではないですかねぇ？　啓介、これが明るみにでれば山野中のバスケ部とサッカー部、謹慎はおろか、試合や大会出場停止決定だろ。なんせ先に暴力を振るったのはそっちだからな。オマケに承認が数

多くいるし？　ココにも証拠があんだよっ。えぇ？　どうするよっ？！』

伴丈一朗は殴られた自分の頬をさしながら急に勝ち誇ったように叫んだ。

彼の言葉はこの場にいる山野中の生徒達を硬直させるには十分だった。尾島は拳を思いっきり握りしめたまま唇をかみしめ、星野君や小関明日香の顔は真っ青のまま固まっている。これ以上ないくらい張りつめた空気を一蹴したのは、花火のように鮮やかなブキミちゃんの高らかな笑い声だった。

『オホホホ！　あら、そのようなこと、大した問題ではありませわ。よく考えてみてもごらんなさい、貴方達河田中の方々が御心の内だけに留めていただければ済むだけのことです』

『はぁっ？！　……カオリぃ……てめぇっ！』

『あら、相変わらず怖い顔。それに頬が腫れたなんて、何を今更。そんなことケンカに明け暮れている伴丈一朗にとっては日常茶飯事で大した問題でもないでしょ。それこそ、尾島啓介共々そこら辺のノラ女（ネコ）に噛みつかれたと適当に言っておきなさい。お二人とも袖にした女性が多いのだから、誰も疑いやしませんわ。それよりももっと冷静におなりなさい。どうせアナタだって真実が明るみにでれば大変困るでしょう？　「山野中の尾島啓介ごときにヤラレました」……なんて口が裂けても言えないのではなくて？　それとも？　無敗の伴丈一朗には土がついたと自ら触れまわる、自虐的な御趣味をお持ちなのかしら？』

『カオリぃぃっ！！』

『……呼び捨てはやめて、気分悪いわ。「親しき仲にも礼儀あり」って言葉、貴方の貧弱なボキャブラリーに加えて下さるとありがたいですわね。あぁ、その前に「親しき」という言葉自体、語弊があるわ。私としたことが、あなたととっくに縁を切ったのを忘れてま

したわ。……でも他人なら尚更礼儀は弁えるもの。ま、そんなこと今はどうでもいいでしょう。それよりもこの騒ぎ、ワタクシ大変困りますの。伏見家次期当主である伏見かおりの輝かし履歴に暴力沙汰を起こした中学を卒業したなんていう汚点を残したくないのよ。わかるでしょう？』

『テ、テ、テメェの事情なんか知るかっ！　勝手にほざいてろっ！』

『……そう。なら、仕方ありませんわね。納得していただけないならこうしましょう。今シニアで持ち上がっている問題が何か御存じ？』

『なんだぁっ？！　いきなり……って……オイっ、まさかっ！』

『あら、御存じのようね。なら話は早いわ。あのシニアの練習場に新しい福祉施設を建設する予定があがってますの。これから日本は高齢化社会を進みますのよ、医療に携わる伏見としては今後に備えて万全な体制で臨みたいというのが本音でしてね。でもアナタも知ってる通り、お爺様は大の野球好きでして……野球を愛する少年と監督の為にあの広いグラウンドを残してやりたいと、良い設備を残してやりたいと苦しい選択を迫られ御心を痛めていますわ。あんなに広くて便利な場所にある球場、どこを探してもこの付近にはないでしょうねぇ。しかも無償で！　そして私は伏見本家の跡取り娘……ここまで言えばおわかりですわね？　全ては私の心一つでどうにでもなりますのよ。よって今日起こった出来事はすべて儚い夢物語と思っていただければ幸いですわ。あなたも大事な家族の為にも、ね？』

『こ、このやろうぅっ……！！』

『まぁ、わかっていただけて嬉しいわ！　やはり持つべきものは幼馴染ですわね。それにしても残念だわ、小卒以来一年半ぶりにこうして会話ができたのに、直接口をきくのが今日で最後なんて！』

『……ッ！』

『さて、他の方も同様、このことは他言無用です。どこからか漏れた時には……そうですねぇ、残念ながらあまりよい結果にはならな

いでしょうねぇ。ま、別に私はそうなっても構わないですけども。あぁ、ごめんなさい、荒井さんにとっては非情に納得できない結末でしょうけど、ここは頭の悪い哀れ子羊たちに恩を売る……あら、違ったわ。彼らのあまりパッとしない将来を思って、目を瞑ってさしあげて、ね？　そういうわけでこの話はこれで終了よ。今すぐ解散して花火にでも集中してくれるとありがたいですわねっ！』

ブキミちゃんの鬼のように冷ややかな眼光と容赦ない低いハスキーボイスが小高い山に轟いた。

＊＊＊＊＊＊＊

タクシーの中から流れる光、テールランプをぼんやり眺めていた。光が少しぼやけて見える。おそらく瞳にうすらしょっぱい水の膜が張っているからだろう。足の痛みは動かさない限り体には響かなかった。けれども少し違和感が残る。氷水でしっかり冷やしたし、湿布を貼ってガッチリ包帯で巻いているのでこれ以上は悪くならないだろうが……しばらく安静という医者からの通告を受けた。残りの夏休みはおろか、新学期が始まっても部活と体育は休みだろう、もしかしたら体育祭も見学かもしれない。

時間外にも関わらず伏見さんが顔を利かせてくれたおかげで、彼女の実家である伏見病院の先生に診ていただき、丁寧に手当された。診察料もレントゲンも大量の湿布薬も無料、おまけに大量の包帯付き。私は慌てて家族に電話して保険証とお金を持ってきてもらおうとしたが、ブキミちゃんは一切受け入れなかった。

『あ、あの、お金……！』

『いいのよ。たいした検査もしていないし、荒井さん一人から料金取ったところでうちの病院には微々たる収入だもの』

『……。で、でも、なんだか悪いし……』

『フフフ、別にかまわないわ。それにお爺様も是非にとのことだったので。それより、知り合いがおいたをしたばっかりに荒井さんを巻き込んでしまって……私からもお詫びを申し上げます』

頭を下げたブキミちゃんに私は慌てて顔をあげてもらった。こちらが頭をさげこそはすれ、してもらう義理などなかったからだ。

『ああの、全然伏見さんのせいじゃないしっ！　それどころか、借りを作っ……いえ、逆にまた助けてもらった感じ……みたいなっ』

『いえ。それでは私の気が収まりません。帰りのタクシーも用意させていただくわ』

『ややっ！　いいですって！』

『遠慮なさらなくていいのよ。それでなくてもお爺様のお気に入りと認定された方を「病院出たらハイさようなら」なんてできません。お礼というなら是非、お兄様と御一緒に我が伏見本宅へ遊びに……ね？　お爺様と二人して首を長〜くして待っていますわ！』

『……』

『あぁ！　それよりも私には大野小の恥さらしが大事な妹になる人に怪我をさせたのが口惜しくて……あまりにも情けなくて涙が出てきそうだわっ！　荒井さん、大野小はあんなバカばっかりではないの！　その点を是非、待合室で待っているお兄様にアピールしてもらえることを心より願っています』

『……あ、ハイ……』

私は固く手を握られながら、ブキミちゃんの満面な笑顔をがっちり正面で受け止めた。この時点で雄臣にブキミちゃんの株上げ大作戦とお宅訪問が決定事項となった。「結局それか……」とガックリ肩を落として病室を去る私に掛けたブキミちゃんの言葉は、ズシンと心に突き刺さるものだった。

『荒井さん』
『ハ、ハイィっ！』
『ひとつ忠告しておくわ』
『へ？』
『……お付き合いをするお友達は選んだほうが身のためよ。あの連中に関わっていると傷つけられるどころか、そのうち身を滅ぼすこと間違いないわ。是非とも笹谷さんのように遠のくのが利口というもの』
『……え？　あ、あの……連中って……。ば、伴丈一朗、とか……？』
『あの男などはもってのほかですっ！荒井さんもあんな男のことはキッパリ忘れておしまいなさいっ！』
『ヒィッ！』
『ゴホン……荒井さん、世の中は広いのです。この世の半分は男なのですっ！　あんな連中じゃなくても素晴らしい人はたくさんいるのよっ。この伏見かおりが断言するわっ』
『あ、あの……伏見さん……いつもとキャラが……』
『心配なさらなくても、私は冷静です。これからも友人として、困ったことがあればいつでも相談に乗るわ。伏見一族、一丸となって荒井美千子のバックアップに努めさせてもらいますからっ』
『……』

目の前で診察室の引き戸が徐々に閉まり、「気に入らない奴がいればすぐさま抹殺してやってもよろしくってよ」と微笑んでいるブキミちゃんの顔が、フェードアウトしていくのを黙って見ていた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

美千子は最強のスポンサーを得た！
美千子の運が５、下が……上がった！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

（……一体今日はなんていう日だろう、色々ありすぎだろ……）

私は流れる景色から正面運転席のほうへ視線をずらし、ため息を吐いた。今までずっと黙っていた隣の雄臣がこちらをチラッと見て、私に寄り添うように間合いを詰めてきた。

「なんだミチ。足、まだ痛むのか？」

「（ち、近っ！）……あ、いえ、ううん、違う……足はとりあえず大丈夫」

「まったく、ミチもあんまり心配掛けるなよな。捻挫程度で済んだからよかったものの、骨が折れてたらどうするつもりだったんだ？」

「ご、ごめんなさい……。雄兄さんにも迷惑かけちゃって」

「いいんだよ、そんなことは気にするんじゃない。それにしても親御さんこれ見たらビックリするぞ」

「え、そんなこと……ないよ。真美子なら、ともかく……」

「真美子？　なんでマミが出てくるんだ？」

「……ううん、な、なんでもない」

「……」

（真美子だったら、きっと心配するだろう。でも私はどうかな……）

そのセリフは頭の中を過っただけで、口から出ることはなかった。今さらだったが、雄臣に自分の醜い僻みを知られるのはかなり抵抗があったから。

「何言ってんだ。マミもミチも関係ない。親は普通心配するもんだろ」

「……そう、だよね……」

私は低い声で呟いた。上手く誤魔化したつもりだが、なにか含みがあるように聞こえたかもしれない。これ以上突っ込まないでくれと無言を決め込む私に、雄臣はハッとため息をついて、ポンポンと私の頭を軽く叩いた。

「……あんまり僻むな。残念ながら親子でも相性っていうのはあるんだよ。大丈夫、ミチはよくやってるさ、空回りだけどな。ま、たとえ『子の心、親知らず』とも、俺は知ってる。心配するな。もう少し大人になれば自分の心に折り合いをつけられるようになるさ。それでなくともミチはこの俺様と伏見の素の姿相手に堂々と渡り歩いているんだからな」

「……雄兄さん……。そういえば、伏見さんから伝言です。イチ、大野小卒業ノ生徒ハ愚カ者バカリデハ非ズ、クレグレモ貴公ノ御心ニ留メラレタシ。ニ、是非トモ伏見家本宅ヘ遊ビニ来ルコト切ニ願ウ、首ヲ長クシテ待ツ候」

「……ミチ。いくら云いづらい内容だからってな、不自然な箇条書きで物を言うんじゃない。それにそれが慰めてやってる未来の旦那に対して言うセリフか？　妻自ら夫に向かって他の女のところに通へなんてあまりにも酷い仕打ちだろ。女豹認定剥奪されるぞ」

「誰が妻ですか。そんなツマンナイ冗談はやめてください」

「そのセリフ、熨斗だけでなくリボンも付けて返してやる」

「優しい雄兄さんならきっと行ってくださると信じてます！」

「無視すんな。それにな、非常に残念だがその日限定で東雄臣という男はこの世に存在しない。そういうわけであと夜露死苦」

「ちょ、ちょっと！　なにが『ヨロシク』ですかっ？　どうせなら『ヨロコブ』勢いで行ってやってくださいよ！」

「一応考えてやったがな、1ミクロンも満たないうちに意識が真っ白になるほど全身全霊で身体が拒否ってな。一瞬『未知との遭遇』並みの体験をしたかと思ったぜ。チッ、どうせならミチの裸体と遭

遇したかったなぁ」
「どんだけイヤなんですか！　それより雄兄さんは本当に中学生なんですか？　まさか……その未知との遭遇とやらで既に人間ではないんじゃっ？！」
「なんかムカつくが、いい質問だぞ。よく言われるんだよ、俺は『神の落とし子』じゃないかってな。だが万能な俺様でもできないことはあるらしい。いやはや自分でもビックリだよ」
「……。（どちらかというと神ではなく、『悪魔の申し子』でしょうが）」
「なかなか言うじゃないか。地味な割にはそういう命知らずなとこ、嫌いじゃないぜ」
「ヒョエー、バレとるがなっ！」
「ま、伏見とは適当に合わせておけ。本人も楽しんで……心配しているんだよ、ミチのこと」
「やっぱり楽しんでるんですね、伏見さんは」
「いちいち絡むなよ。それにどうやら俺は本命ではないらしい」
「は？」
「気にするな、とりあえず伏見の件はこれで終了だ。ともかくな、ミチのオヤジさんに対するその気持ちというか、イライラやら焦燥感はわかるよ。俺も最近父さんとシックリこなくてな」
「え……えぇっ？！　東小父さんとっ？！　な、なんでっ？　ああああんな素晴らしいお父さんのどこがっ？！」
「その言い草、俺の方に何か問題があるように聞こえるのは気のせいか？」
「……いえ。トンデモアリマセン」
「あのな。才色兼備の俺だって色々とあるんだよ。似ているが故に相手の気に入らない部分が余計に目につくんだ。そもそも似ている者同士が上手くいかず反発するのは自然の法則だろ、磁石がそのいい例だな」
「似てる、ですか……」

「なにか不服か？」
「……いえ。ソックリデゴザイマス」
「だから父さんの転勤は正直有難かったんだ。離れるにはちょうどいいタイミングだったんだよ。もちろん、こっちに来たのはミチに償いをする為もあったけどな。ほら、こうしてミチの生活を翻弄させ……ウオッホン。身体を抱擁することもできそうだし？」
「ぅおおおいっ！　何気に漏れてるぞ、本心！　しかもどっちもイヤなんですけどっ！」
「冗談だよ。あのな、もう少し人生に余裕を持てよ？　おっと、また話が逸れたな。まぁ、なんだ。オヤジさんのことは気にするなってことだよ。それにさ、なにか『理由（わけ）』があるかもしれないだろ？
……子供の俺達にはわからない理由が。それこそ『親の心、子知らず』かも、な。そんなことよりミチは適当に立ち回っていればいい。それを考えたら今日のケガはちょうどよかったんだ。俺の監督不行き届きで大事なミチをケガをさせた責任をとらせていただきますと、オヤジさんに堂々とミチを嫁にするぞ宣言をしておこう。ミチ、そう遠くないうちに荒井を出て東美千子になりそうだぜ。それにな、親子の確執なんて離れてしまえば、意外と上手く冷静に対処できるもんだ」
「……」

いつものように横暴で勝手な言い草だったが、慰められているんだなと感じることはできた。
どうやら今隣にいるのは鬼神・修羅ではなく、出会ったころの優しい雄臣らしい。そっと私の肩を抱き寄せ、子供をあやす様にポンポンと叩く手も、純粋に暖かかった。
まるで奇跡が起きたようだ。今この瞬間、雄臣はだんだん似てくる多恵子小母さんの面影が完全に消え、健人小父さんと同じ優しさが溢れているのがわかった。
怪我をさせられ、酷いことを言われ、疲れ切って壊れたハートが

温泉につかったように癒されていく。

今日は本当になんていう日だろう。

好きな人に階段から落とされ、滅多に優しさを拝めない人から慰めてくれるなんて。明日は雪が降るんじゃないだろうか。

――あれ？

――私、今……なんて？

「だから、アイツらだけはやめておくんだ」

雄臣の声が急に強張り肩を掴む力が籠ったことに我に返り、今考えていた疑問が消えてしまった。顔をあげると、すぐ目の前まで迫っているグレーの瞳と目が合った。さっきまでの優しさは消え失せ、冷たい……というより真剣な眼差し――。

「あのチリチリ頭は別にいいとして、俺としたことが……もう一人伏兵が潜んでいたとはな。思ってもみないダークホースに正直焦ったぜ。けどな、ミチ。冗談は抜きにして『アイツら』だけはダメだ。いいな？　これ以上関わるんじゃない。今なら大丈夫、まだ間に合

う。十分引き返せる。いいか、アイツらはしょぼい机どころか、天の川よりもはるか遠い場所にいるんだ。一旦渡り始めたらたどり着くまでかなり遠い。いや、途中でのたれ死ぬか、たとえ辿り着いてもその頃には身も心もボロボロだ」

雄臣の顔が強張っている。

そんなに怖い顔をするほど、一体何がダメなのだろう。何でボロボロになるのだろう。

――なんで？　何がダメなの？　なんで伏見さんと同じことというの？

「……ミチも本当は気づいているんじゃないのか」

俺がダメだというその理由を――。

私たちを乗せたタクシーは夜道を静かに走り抜け、大野小学区から山野小学区へさしかかった。

花火はすでに終わり、夜空には風が運んできた雨雲が徐々に迫っていた。

星も天の川も澄んだ夜空さえも……全て覆い隠すように。

挫折がもたらしたもの？

英語英文タイプ部の部室である、多目的教室という名の物置き兼空き教室の窓は全開だった。教室に入ってくる風が身体を撫でていくが、全然涼しくない。聞こえてくる運動部の掛け声に覇気が感じられないのは、すでに日が傾いている時間帯にもかかわらず、昼間の熱がグラウンドにこもっているせいであろう。

九月になっても相変わらず続く猛暑。連日夏休みと変わらない茹だるような暑さの中で授業を受けるのは辛いものがあった。それはお昼休みも、部活の時間である放課後も同じである。しかも左足に巻いている包帯が余計に暑さを増殖させているような気がする。

汗が首筋を垂れていった。

それはあくまでも暑さのせいであって、この状況に緊張しているからではない。私は手元のハンカチで汗をぬぐいながら、何故この教室にいるのだろうと自分自身に問うた。通常ならこの時間はバレー部員として練習に勤しんでいる筈であった。それこそ外から聞こえる運動部の掛け声をこうして教室の中で聞いている立場ではない。

「……というわけで、本日付で荒井美千子さんが我が『英語英文タイプ部』に入部することになりました。では荒井さん、一言お願いします」

ハスキーボイスであるブキミちゃんの紹介によって読者の方々には疑問が解決しただろう。私も改めて自分の境遇を「あぁ、そうだった」と他人事のように受け取った。

なんでこんなことになったんだっけと思いつつ、でも決めたのは自分だよねと突っ込み、そもそもバレーの練習も足を怪我したせいでできないんだったと自覚した後、ガタンと椅子を引いて左足に重心を掛けないよう立ち上がった。

目の前に座っている生徒は、全員揃いもそろってメガネをかけていた。さまざまな種類のメガネをキラリと光らせている真面目な部員達の視線が私に集中する。これが結構迫力があるのだが……ここは引きつりスマイルを全面に押し出しつつ、ニコやかに挨拶することに徹した。

「あ、荒井美千子と申します。ここの度は部長でありクラスメートでもある伏見かおりさんと、担当顧問である梨本先生、及び東先輩の推薦をいただきまして、この二学期から『英語英文タイプ部』に入部することになりました。部活を掛け持ちという立場上、皆様にもご迷惑を掛けるかと存じますが、どうか卒業までよろしくお願いします」

一通り挨拶を済ませ頭を下げると、疎らな拍手が返ってきた。それも仕方がなかろう。なんせ部員は私やブキミちゃんを含め、二年生は三人、一年生は二人の全部で五人しかいないからだ。夏休み前にはもっと部員の数が多かったはずだが……例の幼馴染が引退した途端、この部活本来の姿に戻ったらしい。

「ありがとうございます、荒井さん。改めて『英語英文タイプ部』へようこそ！　皆様もご存じの通り、荒井さんは引退した東先輩のお知り合いでして、すでに英検3級をお持ちの人よ。皆様の英語向上意欲を刺激し、また高めて下さると私も期待をしています。新たな仲間を迎え、この部活動でお互い実りある時間を共有していけるように頑張りましょう！」

ブキミちゃんの淡々としつつもヤル気の満ち溢れた言葉と気合の入った不気味スマイルに、再び部員の拍手が返ってきた。私はいまだに引きつり笑いを顔に張り付けていたが、心の中では盛大にため息を吐いた。

＊＊＊

「本当に助かったわ、荒井さん。東先輩も引退してしまったでしょう？　幽霊部員は出てくるし、私を含め部員も覇気がなくなってしまって困っていたの。やはり英語は実践、会話がものをいいますものね？　それにこうして英語に興味を持ち、しかも結果を残す部員がいるのといないのとでは、クラブ活動の気合も違うというものだわ」

私の歩調に合わせながら横で歩いているブキミちゃんは、相変わらずのハスキーボイスを人気の少ない廊下に響き渡らせていた。その声は水を得た魚のように自信に満ち溢れている。私は頭の片隅で、私一人入ったところでそんなに変るもんかいなという気持ちで「はぁ」と生返事を返した。彼女のオーラに圧倒されつつも、そう言ってくれるのは純粋に有難いとも思った。褒められて嬉しくない人はいないだろうし、しかも相手は1年の時に一緒だった片岡君（ツルちゃん）に引けを取らないくらい学年でも1、2を争う才女だ。例えそれが下心アリアリというのが見え見えでも。

「荒井さんの参加できる活動日が木曜日だけというのは非常に残念ですわ！　気が向きましたら、是非とも火曜も参加してください。タイプライターも使い放題ですので、今から慣れておいたほうがよろしいんじゃなくて？　それとも普段からワープロなどでローマ字入力に慣れているのかしら？」

「……え、え？　ローマ字？　ワープロ？　な、なんで？」

「あら。だってゆくゆくは海外に留学なさるおつもりなんでしょう？　留学した先でのレポート等提出物は、ほとんどタイプで打つことになりますもの。直筆などありえませんわ。直筆など読みにくいと敬遠する教授もいらっしゃるそうよ」

「えぇ？！　そ、そうなのっ？　……って、それより……な、なんで留学のこと……」

「オッホホホ……いやだわ、私ったら！　安西小母さまに内緒にしておいてねと言われたことをうっかりしゃべってしまって！　でも、荒井さんの顔を見ればダダ漏れ……ッホン。荒井さんの英語に対するヤル気を見ればわかるわ」

「ヤル気……ですか……」

「なんでも小さい頃から英語に興味がおありとか？　東先輩のお父様の背中を追いかけて、将来は外資系のお仕事をご希望されるの？」

「……って、ななんでぇっ？！」

「私も東先輩のお父様を写真で拝見しましたが、とっても素敵な方でしたわ！　荒井さんの初恋って聞いた時には大いに頷いてしまいました。あんな素敵なお父様を見れば、他はカス同然というもの。もちろん東先輩を除いてですが。あぁ、ワタクシ、荒井さんの初恋が実ることを切に願っているわ！」

「……実る……って、なな何を言ってるんスか？！」

「あら？　だって東先輩のお父様は、お母様がお亡くなりになった後もいまだ独身なのでしょう？　東先輩自らこうおっしゃってましたわ、『父さんは一生結婚はしないんじゃないかな、母さん一筋だったと思うしね。俺みたいな大きい息子もいることだし、なにかとんでもない間違いがあったらマズイだろう？　まぁ、そうやってノコノコ東家に乗り込んでくる雌豚を切り裂くのもまた一興』……んっ、ううんっ！　オホホホ！　えーと、ともかく現在恋人の影はないとのことです。ならば荒井さんにも十分後釜……いえ、入り込む余地があるではありませんか！　私達はあと2年も経てば１６歳、法律的にも結婚できる年なのです。それこそ１８歳にでもなれば２０歳以上の年の差なんてそう大した問題ではありません。現に私のお爺様にも、３０歳～４０歳年下の愛人がごろごろおりますから。なんでも壮年の殿方は若い方がより好みらしいですわ、それも年を重ねるとその傾向が強いそうよ」

「さ、さいですか……」

「そうなれば……荒井さんとは姉妹ではなくて、『本当の親子』になってしまいますわねぇ。この先のワタクシの未来、バラ色のような予感がするわっ！　……フフフッ、オホホホ～！！」

ブキミちゃんの高らかな笑いが廊下に響いた。

私は意外と好奇心旺盛だったのか、それとも単なる怖いモノ好きだったのか……雄臣とブキミちゃん、健人小父さんと私、仲良く手を取り合って微笑んでいる壮大な夢を試みた。四人が和気あいあいとそれぞれの子供を抱えている的なショットを思い浮かべたところで、雄臣とは違う意味での未知との遭遇を体験するところであった。それこそ強烈な弾丸ショットを受け、体中がハチの巣のようになった感覚に心臓が軽く悲鳴を上げそうになった荒井美千子。慌てて壮大と言うより壮絶な夢から頭を振って正気の世界に戻る。が、目の前に引かれた自分の人生のレールがバラ色ではなくバラバラに崩れ、電車（わたし）が脱線の被害にあう幻の残像が消えない。

（こ、こわっ！　いかんいかん、正気に戻れ、私！）

大体「東小父さんとムフフ！」なんてありえないし、そんな恐れ多いこと考えるだけで罰が当りそうだ。……というか、東小父さんの方から即「ごめんなさい」と断られるだろう。恐らく雄臣だってそんなこと許さないはず。それこそ多恵子小母さんに化けて出てくるよう、悪魔に魂を売り渡すかもしれない。ていうか、すでに悪魔だった。それより鬼神ではなく死神となって、大鎌振りあげて自ら出動すること間違いないだろう。

ただでさえ東小父さんと恋人らしき人達の仲を邪魔してきた雄臣の姿が、鮮明且つリアルに思い浮かべられるのに……その修羅場の中を自ら好んで飛び込むバカが何処にいるというのだ。恐ろしや恐ろしや。

（東小父さんと二人きりで会ったその瞬間、確実に消されるね……って、おいおい。何考えてるんだ私！　自分を追い詰めてどうする

よっ？！）

私はブキミちゃん高笑いに対して弱弱しく「ハハハ」と笑いながら、見えない作者、いや、神様に向かって「私の人生、掻き乱すな！」と苦情を申し立てた。去年の暮れから仏壇のお供え物やお線香、神棚の榊や定期的な掃除を欠かしていないというのに……いよいよ墓参りでもして先祖の供養をしなければならないところまで切羽詰まってきたらしい。

（……でも、荒井家の方の墓参りには行きたくないなぁ。近いけど、あそこの親戚とは折り合いが悪いし……。母さんの方の「渡部（わたべ）」はどうだろ？　……って言ってもずっと御無沙汰だし遠いし、一人じゃ無理だよね？　第一、父さんがあんまりいい顔しないから行きにくいしな）

完全に対策の糸口が途切れた事実に、心の中でハァと吐息をついた。ついでに荒井家の親戚の顔を筆頭に、「あんまりいい顔しない父さん」の顔も思い出してしまった。複雑そうな、不機嫌そうな、怒っているような……ともかく、感じのいい顔ではないことは確かだ。私が言うのもなんだけど、普段優しく顔が整っているだけにそのギャップは激しい。いつからそんな顔を見せるようになったのはわからないが、少なくとも小さい時は普通に可愛がられていた、と思う。私は俯いて怪我をして引きずっている左足をそっと見つめた。

捻挫がもたらしたもの？

あの祭りの日、雄臣と二人タクシーで家に帰ると、両親が玄関で私達の帰りを待っていた。どうやら雄臣とブキミちゃんが家に連絡を入れてくれたらしい。雄臣に抱えられるように帰宅した私を見ると、母は安堵の表情を浮かべた。一方父は、「オマエは一体何やってるんだ」という呆れた言葉と少し不機嫌な表情で出迎えた。頭の中で思い描いていた通りの父の態度に一瞬萎縮した後、すぐにモヤモヤした感情が湧きあがったが……それはこの年頃の子供がいだく、親の言うことが鬱陶しいという感情だったのかもしれない。父に対し「好きでこうなったんじゃない」と抗議しようとした途端、雄臣は私の一歩前に出て「いいから任せとけ」と目配せをした。

『俺がついていながら申し訳ありません』

少しムッとした私の代わりに雄臣は両親に頭を下げ、怪我の診断を簡単に説明してくれた。怪我をした理由は、「下駄で裏山を登った為、踏み外して足を捻った」ということになっていた。納得いかなかったが、真実が洩れたらややこしいことになるかもしれないと私は仕方なく黙認した。もどかしい自分の立場にイライラして無言を決め込む私に父は何も言わず、逆にしっかりとした態度の雄臣に向かって笑みを浮かべてお礼を言った。

『すまないな、雄臣。娘が迷惑かけてしまって、助かったよ。それとそんなに気にしないでくれ、な？』

『……いえ、一緒にいると約束したのに、離れたてしまった俺の責任です。ミチに何かありましたら、一生面倒みる覚悟です』

『いやいや、そんな大げさに考えなくても！　それに美千子に君はもったいないよ。……でも、さすが雄臣だな。責任感強いところは

君の母さんにそっくりだ。その姿を彼女が生きているときに見れたのなきっと喜んだろうに……』

『……そんな。天国で見ている母さんに恥ずかしくない男になるよう、努力はしているつもりですが』

『そうか。そうだよな。大丈夫、雄臣はちゃんとやっているよ、健人と多恵子の自慢の息子だもんな』

私は雄臣と父の会話をまるで他人事のように聞いていた。――いや、聞くようにしていた。

ただでさえ疲労困憊な状態なのに……こんな余裕のない時に多恵子小母さんのことや雄臣を褒め称える言葉を聞くのは正直キツかったのだ。しかし心の中である程度予想していたことだったので、さほどショックも受けずに済んだのが唯一の救いだろう。それとも、雄臣の滅多に見せないやさしさと私の心情を理解してくれたという事実に安心したせいなのだろうか。

『あなた……もうそろそろ。美千子も疲れているだろうし。雄君、ここまでどうもありがとう。今から送って行くわ』

母が間に入ってくれたおかげで、私は苦痛の時間から免れた。雄臣と父に部屋まで連れて行ってもらい、母が雄臣を車で送りに二人が部屋を出た後、部屋に残った父親は無言を通す私に、後日雄臣と伏見さんに重々お礼を言うようにと言って居間へ降りて行ってしまった。

部屋を出ていく父の後ろ姿を見ながら、タクシーの中で雄臣が言った言葉が何度も自分の中で繰り返されていた。

時間が経てば本当に心の中で折り合いをつけられるようになるのであろうか、と。

押しつぶされそうな虚しさを感じることはなくなるのだろうか、と。

そして、

『大丈夫か、心配したんだぞ』

その一言だけでもいいから欲しいと思う私は贅沢なんだろうか、と――。

＊＊＊

「……さん、荒井さんっ？！」

すぐ傍で名前を呼ばれ身体を揺すられた私は、そこで初めて自分が廊下につっ立ったまま、左足を凝視していたことに気付いた。

ハッと顔を上げれば、ブキミちゃんが心配そうな顔をして私の顔を覗いている。どうやら私の意識は何処かへ飛んでいたようだ。ここが学校の廊下で新学期が始まった数日後の放課後だということが、ブキミちゃんと目が合った途端瞬時に頭の中に刷り込まれた。

「荒井さん、どうかしました？　……もしかして、足、まだ痛むの……？」

不気味なほど低いハスキーボイスに私は慌てて顔を振って、「だ、大丈夫！　ちょっと、考えことを……あ、あんまり暑いから」そう言って愛想笑いを浮かべた。前を見るといつの間にか廊下の突き当たりにある出口に差し掛かっていた。この出口は2年1組があるボロ校舎に向かう渡り廊下に続いており、外から眩しい光が差しこん

でいる。
　ブキミちゃんは私の顔をジッと見詰めた後、「そう」と一言残して再び歩き始めた。私も彼女の後を追うように引きずりながら歩き出すが、不規則な足音がやけに自分の耳に付いた。

「……足の具合、順調に回復して良かったですわね。捻挫は特に安静に限るわ。保体の時間はもちろんですが、今月一杯はバレー部も見学なのでしょう？」
「あ……それなんだけど、実は私、バレー部のマネージャーをすることになっ」
「まぁ！　そうですのっ！　……フフフ、作戦成功……」
「え？　作戦？」
「いえ、なんでもないわ。単なる独り言です。荒井さん、マネージャーをやるのですか！」
「う、うん。ちょうど怪我してるし、この際いい機会だからどうかって顧問の岩瀬先生から提案されて」
「ホホホ！　それなら火曜も『英語英文タイプ部』に出て頂けるわね！」
「あ、あの、それは、まだちょっとわからないんだ。ほら、貴……笹谷さんと交代でマネージャーやるんだけど、それがどの曜日になるか決まってなくて」
「は？　交代でマネージャー？　あら、笹谷さんもマネージャーをやるのですか？」
「……笹谷さん、色々と事情があるみたいで、毎日部活に参加するのは、ちょっと……」
「……なるほど。そうでしたわね。笹谷さんのお母様、お身体の具合がよろしくないんですってね」
「……」
　ブキミちゃんの恐ろしく生真面目で落ち着いた声色に、私は無言

で渡り廊下から見えるグラウンドに視線を向け、バレー部のコートがある方角を目で追った。

＊＊＊

お祭りの翌日、部活が無い日曜日だったので和子ちゃん達は早速見舞いに来てくれた。夜に降った雨は上がり、湿気と熱さでムンムンと熱い日だった。

『……どうしてこんなことになったの？』

和子ちゃんは私の姿を見ると酷く心配した様子で聞いてきたが、結局私は本当のことを言えなかった。雄臣が両親に話した通り、

『星野君から和子ちゃん達が神社の裏山の頂上にいるらしいと聞いたので下駄であの神社の裏山を登ったら、鼻緒が切れた拍子に踏み外し、足を挫いた』

……ということにしたのだ。実はこの時点で貴子にも本当のことは伝えておらず、結局真実を伝えたのは夏休みが明けてからだった。別に貴子に言いたくなかった訳ではない。むしろ話を聞いてもらいたいくらいだった。しかし一晩中眠らないで様々なことを考えた結果、こういう話は軽々しく話さないほうがいいんじゃないだろうかという結論に達した。なんせ内容が暴力沙汰だ。万が一どこからか漏れて、伴丈一朗が言ったように尾島の所属するバスケ部やサッカー部が何らかの処分を受けたら、チィちゃんが悲しむしだろうし、原口美恵や成田耀子にバレたら何されるかわかったもんじゃない。それにブキミちゃんが言っていた。シニアのグラウンドの件をどうこうするという物騒なことを。もしそんなことになったら、私一人ではとても責任を負いきれない。あんなに星野君が野球を頑張って

いるのに（多分）、甲子園・プロ野球の夢を取り上げてしまうなどできなかった（おそらく）。

無理矢理引き攣り笑いをしながらみんなに説明する私を見て、一人静かに佇み無理に聞いてこようとはしない貴子に、私は心の中で謝りつつ感謝した。おそらくブキミちゃんの言葉で大体の察しはついていたのだろう。

一方、和子ちゃんや幸子女史は、私の説明に眉根をよせ、なにか聞きだしたそうにしていた。

『……ねぇミっちゃん、本当になにもなかったよね？　……ていうか、その足、尾島（あのバカ）のせいで怪我したんじゃ、ないよね？』

『っ！！　……え、え、え、ななななんで、おおお尾島っ？』

『……いや、あのね？　尾島（あのサル）、誰かと喧嘩したかもしれないんだよね。もちろんミッちゃんじゃないとは思うけど……もしかして、伴丈一郎って奴と一戦交えたかも……』

『は、はぁ？　ばばば、伴丈一朗？！』

『そうそう！　実はあの河田中のワルが花火スポットにいてさぁ！　ミチも聞いたことあるでしょ？　伴丈一郎！　なんか髪の毛が茶色の変なチリチリでさぁ、雰囲気がちょっとヤバイの。ちょうどミチが山を登っている時だと思うんだよね、坊主二人従えていた伴丈一郎や尾島がさぁ、神社の方へ下りて行ったの。会わなかった？』

『えええっ？！』

思いっきり狼狽える私に、和子ちゃんと幸子女史は「だって……」と顔を見合し、浮かない顔をした。彼女達の後ろにいたチィちゃんは息を飲むように私を見ていた。さらに後ろにいた貴子は特に口を挟まなかったが、伴丈一朗の名前が出た途端、横を向いて「チッ」と舌打ちをして親指を噛みながらブツブツなにか言っていた。その横顔は険しく物騒な悪態を吐いていたような気がしたが、私は見て見ぬふりをした。というより、焦っていてそれどころではなかった。

『……あのさ。尾島が山を下りて私たちのところに戻ってきた時、すんごい形相だったんだよね。頬に殴られた跡というか、口元が赤かったの。何かあったのかって諏訪や後藤君が聞いてもずっとダンマリだしさ。そのうち「うるせぇ！」ってすごい剣幕で怒鳴ってまた山を下りちゃうんだもん。一緒に来たあの星野君も怒った様子で何も言わないし、小関は慌てた様子でまた尾島を追いかけちゃうし、訳わかんないよ！　それに……花火スポットで伴丈一朗達と鉢合わせしちゃった時さぁ、尾島、ちょっとヤバイ雰囲気だったんだよね？　イラっとしちゃってさ。ほら、あの伴丈一朗って、裏番と仲悪いって噂でしょ？』

誰が聞いているというわけではないのだが、真剣な顔で声を潜める幸子女史の話に、私は震えを抑える為ベッドの上でタオルケットをギュッと握った。

捻挫がもたらしたもの？

和子ちゃんや幸子女史の話によると、和子ちゃんと加瀬さんはＶＩＰ用テントから脱出した後、チィちゃん達を交えた尾島軍団と夜店で遭遇し、小関明日香に誘われて結局合流することになったそうだ。テントに残してきた私には悪いと思ったらしいが、後で迎えにこようと思って尾島達の後にそのままついていくことになった。

大人数で神社の裏山を登り、例の花火スポットに着くとそこには……なにやら雰囲気が悪い先客がいた。伴丈一郎達である。噂だけで実物を見たことない和子ちゃんやチィちゃん達が「誰だろ？」とお互い顔を見合わせていると、原口美恵や奥住さんが小声で「……伴丈一朗……」と呟いた。その途端大野小以外の生徒達に驚きという名の衝撃が走った。それも当然だろう。前にも話したように、伴丈一朗はこの辺りで大変有名な人物だったからだ。それがどうしたことか。小関明日香はそんなワルを目の前にしても怯む様子を見せるどころか、物騒な連中に気軽に声を掛けたらしい。

『あれぇ？　丈一朗じゃん！　こんなところで何やってんの？』

河田中のスケコマシこと伴丈一朗に堂々と近付いて下の名前で呼ぶ、小関明日香。

他の女子連中はゴクンと息を飲み少し緊張した面持ちでそれを見守っていると、伴丈一朗は尾島率いる集団を一瞬目を細めて一瞥したが、すぐにヘラヘラした笑いを口元に浮かべた。

『……おやおや。山野中の小関明日香サンじゃぁねぇですかぁ。なに？　みなさん団体で花火鑑賞なの？　金魚のフンみたいにゾロゾロゾロゾロ……ご苦労なことですなぁ！』

『なーに言ってんだか。男三人で寂しく花火観賞だからって僻まな

いでよぉ』

『バカ言え、んな訳ねぇだろ。……あぁ、なるほど！　明日香チャンにはオイラ達がやっているこの神聖な儀式がなんだかわかんねぇんですね？』

『あのね、わかるわけないでしょ！』

『あらま。しょうがねぇなぁ、いいか、聞いて驚くなよ？　オイラ達はね、宇宙人とコンタクトをとるという偉大な事業をこの裏山から仕掛けていたわけですよ！　手始めにあの美しい月に住んでいるという、かぐや姫をヤっつけようかとかと思いましてね？　こうして祈ってるわけナンですよ、ハイ』

『……アホらし。いっそのこと宇宙人に洗脳されて人生やり直せばぁ』

『アッハッハ！　かぐや姫のように貢物をくれるオトコがいないからってオイラに当たるなよぉ。ま、宇宙人との交信はオメェをからかった冗談だわな。仕方ねェ、どうしても知りたそうだから教えてやるか！　実をいうとオイラはね……この祭りで運命の女神と会えますようにって満天の星空に祈っていた訳よぉ！　なんでも女子学生のバイブルである「マイバースディ」という占い雑誌によれば？　オイラはこの夏に運命的な出会いがあるというありがたい掲示が出てるらしいんだなぁ。どっかで見なかった？　オイラのボインな女神ちゃん！』

『アンタほんとムカつくよね。知るわけないでしょ、そんなこと！』

『あらら、冷たい。ま、明日香チャンだけは絶対ありえねぇな。だって……いやホント相変わらず悲しいくらい貧乳ですなぁ……』

『だっ、誰が貧乳よっ！　見たことないくせに失礼な奴ね！』

『……あのねぇ。君だけには言われたくないのよね？　失礼なのはお互い様でしょーが。オイラの神聖な願いと祈りを鼻で笑いやがって、よくもまぁそこまで言えたもんだ！　まったく……その貧乳、いい加減なんとかしたほうがいいんでないの？　誰も揉む奴がいなけりゃ、是非幼馴染にでも身内にでも揉んでもらって今から大きく

してもらいなさいよ！　な、啓介チャン！　あぁ、けど揉んでもらったからって大きくなるとは限らねぇけどなっ！』

ギャッハッハ～と笑う伴丈一朗に小関明日香は「うっさいのよ、髪形も頭もおかしな奴に言われたかないわ！」と怒鳴り返し、その身内である尾島に「ちょっと、なんとか言ってやってよ！」と応援を頼んだ。しかし当の尾島や諏訪君、後藤君はムスッと黙ったまま「そんな奴（バカ）ほっとけ」とチリチリを無視してその場にしゃがみこんで持参した食べ物やジュースを飲みだしたのだ。伴丈一朗はククと笑い、特に気を悪くする様子もなく……意外とあっさりとした様子で尾島に話し掛けた。

『よぉ、啓介！　相変わらずいっぱい女連れてんなぁ。両手に花で羨ましいこって！　ここは是非、オイラの女神ちゃんになりそうな女子、一人わけてくんないかな～』

伴丈一朗はチィちゃん達や原口美恵、成田耀子のほうを見てニヤニヤ笑った。一瞬女子の間に緊張が走り、チリチリから全員視線をそらすのを見て伴丈一朗は、「あんだよ、女子全員無視かよ。冷てぇなぁ～」と大袈裟なため息を吐いた。それを今まで黙っていた尾島は急にニヤリとした笑いを見せたらしい。フンっと鼻で嗤って伴丈一郎を見上げた。

『ククク、残念だったなぁ。大体女神なんてそんなもんいるわきゃないだろ。宇宙人と交信してたほうがよっぽど手っ取り早いんじゃねぇのぉ』

『……あらぁ～夢がないのね、啓介チャンは。心優しく男を包み込むボインな女神を求めるのは男として当然じゃないの！　この際百万歩譲って君の取り巻きで我慢してやるか。山野中にはそういう慎ましやかなボインの女神はいないのかね？　どうなのよ、啓介チャ

ンよ？』

『……うるせぇよ……そんな女、山野中にいるわけねぇだろーがっ！』

ギロリと伴丈一朗を睨みあげ不機嫌極まりない声で言った尾島の失礼なセリフは、女性陣の心に吹雪（ブリザード）を吹かせた。が、自らその女神だと伴丈一朗の前で立候補する勇気もなかったので、渋々押し黙まる。

『大体な、優しく男を包み込む慎ましやかなボインで心の中が駄々漏れの地味な女を、誰がテメェなんかに紹介するかってんだよっ！　アイツはな、オレのっ！　……あ、いや……オレ、オレ……お～！　やっぱオレンジジュースは最高だよな！！』

『……はぁ？　何言ってんの、啓介チャンは。もともと悪いとは思ってたけど、よけい頭おかしくなったんでないの？　それにさぁ、オイラそこまで言ってねぇんだけど？』

『ううるせっ！　そっちこそ、悪いのはその変な頭と顔だけにしろっつーの！　テメェはさっさと夜店にでも行って女神でもメガネでもナンパしとけっ、メンドくせぇっ！』

『……ほぉ。な～んか引っかかるけど、ま、いっか！　ともかくどっかにそんな女いたらまわしてくれ、な？　それより龍太郎と貴子はどうしたよ？　一幸もいねぇじゃん？』

伴丈一朗は尾島の睨みとふて腐れた態度を真正面から受け止めつつ含み笑いをしながら見下ろしたが、尾島はふぃっと視線を逸らし「知らね」と素っ気なく答えただけで、口を噤んだままだった。二人に漂う微妙な雰囲気に、ハラハラしながら見守るその他大勢。

『そりゃ、残念。じゃぁここから退散するかぁ。……確かにここにはオイラの女神はいなさそうだし？　しょうがね、夜店で物色する

しかねぇなっ！』

伴丈一朗は女子のみなさんを舐めるように見た後、そう捨て台詞を吐いてギャハハと笑った。その後クルリと尾島に背を向け、取り巻きの坊主頭を連れて山を下りていったのだった。

＊＊＊

『……というわけなのよ！』

いつのまにか私が寝そべってるベッドに座り込みながら、興奮した面持ちで詳細を話していた幸子女史。私は「そ、そうだったんだぁ～」と素知らぬ振りをして、さも大ニュースを聞いたかのように驚いた表情を作った。

『そうなのよ！　で、その後尾島がさ、なんかマズイだのヤバイだのブツブツいいながら暫く考え込んじゃってさ。そうかと思えば急に立ち上がって、大便行ってくるなんてデリカシーのない言葉吐きながら下りちゃってさ～。そんで戻ってきたら口元が赤くなっていたわけ。だからてっきりあの伴丈一朗と一悶着あったのかと思ったのよね』

『……へ、へぇ～。でででもね？　いくらなんでも……ねぇ？』

『そうだねぇ。裏番じゃあるまいし、まさかねぇ？　それじゃぁどっかで転んだんかなぁ。ぶっ、カッコわる！　あ、それよりもさ、あのチリチリ頭の伴丈一朗！　まったく失礼極まりないったら……尾島もあの裏番のお兄さんも軽いし失礼な奴とは思っていたけどぉ、あそこまで酷いのは見たことないわ！　……って、なんかゴメン、チィちゃん……』

伴丈一朗氏の軽さを極めた数々の行動に怒れるあまり余計なこと

を色々口走った幸子女史は、慌ててチィちゃんに謝った。チィちゃんは「いいよいいよ」と顔の前で手を振りながら可愛く否定していたが、急に心配そうな顔をして私の方を見た。

『……じゃぁ、ミっちゃんは尾島くん達とは会わなかったんだね……？』

クリクリの可愛らしい瞳を潤ませながら念を押すチィちゃんに私は音と風がなるほど頷いた。真実を話し、こんな可愛い小動物を泣かすなど、いったい誰ができよう。

『ううううん！　会わなかった！　全力で会ってません！　……わわわ私、登り始めたところで怪我したからっ？　ははは恥ずかしいんだけど、泣いちゃうくらいすごく痛くて、すすすすぐ引き返して雄兄さんと伏見さんと病院に行ったし？！　そ、そう！　伏見さんに聞けばわかるよっ！』

『……あ～伏見さんかぁ。でも話すのは遠慮したいなぁ。ねぇ、チィちゃん？　そっかぁ、そうだよねぇ。いくらなんでもミチの足の怪我と尾島の口元の怪我、全然接点がなさそうだもんねぇ？　大体ミチと尾島が取っ組み合いの喧嘩なんてのもありえないしね。それにそんなところ東先輩がみたら絶対放って置かないし？　……でもビックリしたんだよ！　花火が終わって神社に降りたら、貴子がミチは病院に行ったなんていうんだもん。ま、伏見さんと一緒に病院はちょっと遠慮したいけど、東先輩に支えられて行ったのは羨ましいなぁ！　ね？　和子？』

急に話を振られた和子ちゃんは、私の怪我の過程云々よりも、自分がテントでしでかしたことを思い出したらしい。雄臣の目の前で殺人スパイク並みの力量を披露してしまったことに対して激しく落ち込み始めた。慌てて慰める幸子女史。そのおかげで話は違う方向

へ行ったことに私は心の底からホッとし、話の間中疼いていた足の痛みも和らいだ気がした。

捻挫がもたらしたもの？

ブキミちゃんが私の腕をとって段差のある部分の歩行を手伝ってくれた。

さっきまでボンヤリ眺めていたバレー部のコートはプレハブの用具室で遮られ、自分たちの教室があるボロイ校舎が目の前に見えた。

「それにしてもマネージャーの件、ワタクシも岩瀬先生と同じ意見です。荒井さんにあっているような気がしますわ！　荒井さんお優しいから、選手として闘争心剥き出しで試合に臨むって感じじゃないもの。これこそ怪我の功名というもの」

「……そう、かな？」

「そうです！　やはり、顧問の梨本先生にお願いしてよかったわ。荒井さんが英検三級を取ったと聞いた時からずっと我が『英語英文タイプ部』へ引きずり込もうと……勧誘しようと温めてまいりましたの。ワタクシと東先輩が何度も頭を下げて、梨本先生から岩瀬先生に裏から根回ししてもらうよう……頼んでもらうようお願いしていたのよ？　荒井さんが部活を掛け持ちできるようマネージャーに指名しろ……いえ、掛け持ちできる許可もスムーズに下りましたし、よかったですわね。オホホホ！」

「……」

（なるほど、ね……そういうわけか）

夏休み明けの始業式の日、私がバレー部顧問の岩瀬先生にいきなり呼び出されてマネージャーに抜擢された理由がわかった。どうやら「足を怪我して暫く動けないから」だけではないらしい。それしてもよく梨本先生（リポーター）がそんな面倒なことを引き受けたなと思ってしまった。……まぁ、妖怪人間たちから集中攻撃されればひとたまりもないだろうが。

（マネージャーかぁ……）

私は引退した3年のマネージャーがやっていた仕事に思いを巡らせた。後輩に支持しながら部活の準備を整え、救急箱やテーピングの補充、顧問に練習メニューの確認、パートナーがいないところの穴埋め……ようするに都合の良い雑用兼パシリだ。そういえばこうして考えてみると、三年の元マネージャーや二年の部長の原口が私をこき使ってやらせていたことと変わりないことが今更ながらに判明した。

「それにしても、笹谷さんもマネージャーですか。てっきりバレー部のレギュラーになるかと思ってたわ」

「う、うん。そうなんだよね」

もちろん顧問を含め、私も部員もそう思っていたが、マネージャーを希望したのは貴子のほうだった。それは言わずと知れた家庭の事情の為である。お姉さんが勉学のために家を出ている今、平日は貴子とお父さんがお母さんのお世話をしていた。さすがにお父さんは仕事があるので、ほぼ貴子がその役割を担っているといっても過言ではない。本当は部活を退部することも考えたらしいのだが、それを岩瀬が反対した。貴子はセッターとしての素質があり、退部させるのは惜しいほどの逸材だったのだ。しかしその貴子は厳しい事情を抱えている身。貴子を手放したくない岩瀬は泣く泣く彼女の希望を受け入れ、マネージャーとして残すことにしたのだった。

『笹谷、部活をやめるは簡単だ。だけどここまで来たんだ、引退まで続けてみないか？　毎日参加するのは難しいかもしれないから出来るときだけで構わない！　マネージャーとしてでもいいから参加してくれ、な？　もちろん他にもマネージャーを考えてる奴がいるから、気軽に構えてくれればいい。それに部活に籍を置けば内申書の点数もいいだろ？』

そういった訳で貴子はバレー部を退部することなく、在籍することになった。

一方岩瀬に呼び出された私は、熱心に貴子を留める情熱の半分以下の口調でマネージャーを宣告された。

『荒井怪我してるし、しばらく動けないだろ？　いい機会だから、笹谷と一緒にマネージャーをやってくれ。なに、今まで通りにやってくれればいいから。それに、英語英文タイプ部からも勧誘受けているそうだな。マネージャーならなんとか掛け持ちできるだろ？　是非入部してこい！　それに聞いたぞ、東と梨本先生から。英検三級受かったんだってな？　すごいじゃないか！　その能力、生かしたほうがお前のためだぞ？』

『は、はぁ……』

なんだかこの時点で私の『英語英文タイプ部』への入部は既に決まっていたようだ。

どう見ても貴子の都合に合わせる形で、たまたま私が怪我をしていたからちょうどよくマネージャーにしちまおう、ラッキー！　……的な雰囲気が漂っていたが、黙って引き受けた。もともとレギュラーでもなければ、背が高いくせにスパイクをブロックするのも怖いヘタレな部員だったので、戦力にならないことも自覚していたからだ。それに、確かに前々から梨本（リポーター）に会うたび、そして特に怪我をしてからしつこく雄臣に、『英語英文タイプ部』に入部しろと迫られていたのだ。私はこのバレー部顧問の一言で、『英語英文タイプ部』に入部することを決めた。

＊＊＊

「危ない、荒井！」

「荒井さん、前！」

男子の声とブキミちゃんの鋭い叫び声に思考がバチンと弾けて体が硬直した。その直後、私の前を白黒のボールが横切った。ボールは学校の周囲を囲んでいる金網にガシャーンと派手な音を立ててぶつかり、その反動で私たちが歩いている渡り廊下のほうへコロコロ転がってくる。転がってきたのはサッカーボール。どうやら目の端に映っているのはサッカー部員らしく、狭い場所でパスの練習をしていたようだ。「あの男」が在籍しているサッカー部のほうへ顔を向けるのが怖かったが、確か今日はバスケ部の赤黒ジャージを着ていたことを思い出した。直立不動のままギギギと音が鳴るようにボールが飛んできたほうに顔を向けると、私に向かって怒鳴ってきた男子であろう人物がこちらに走ってくるのが見える。

「荒井、大丈夫かっ？！」

走ってきたのは、三年が引退してサッカー部の新キャプテンになった佐藤伸君だった。水も滴る……ではなく、汗をキラキラさせて相変わらず学年一モテ男の威力を発揮している。その姿に見惚れつつも体が固まったまま動かない私に代わって、ブキミちゃんがサッカーボールを拾い、佐藤君に投げた。

「佐藤君、危ないですわ。荒井さん、足を怪我をして上手く動けないんですから、気を付けてもらわないと」

「すまねぇ、ちょっと強く蹴りすぎちゃってさ！　荒井、大丈夫だったか？」

「……ハイ」

「ごめんな？　……それよりさ、なんで二人してこんなとこで……って、あっ！　もしかして体育祭のサポート委員？！　……あれ？　今日だったけか？」

佐藤君は一瞬「ヤベ、オレ忘れてたか?!」というような顔をしながら慌てて聞いてきたが、ブキミちゃんは無表情のまま「今日じゃないですわ」と言い、「それは明日です」とも付け加えた。

「それよりも佐藤君、荒井さんは既にサポート委員ではありません。足の怪我で辞退し、雌ブ……いえ、立候補した原口さんと交代したのを忘れたの? ね、荒井さん?」

「……はぁ」

不気味なほど低いハスキーボイスだったが、嬉しそうに弾んだ口調で説明するブキミちゃんの意見を肯定するように、私は佐藤君に向かって曖昧に笑った。

「あ~そうだったよな! ……すっかり忘れてた。そっか、そうだよ……原口と尾島だよなぁ。……つーかさ、本当にあの二人で大丈夫かよ?」

心配そうに言う佐藤君にブキミちゃんは「知りませんわ、そんなこと」とたいして興味もなさそうに淡々と答えた。二人の様子を上の空で見ていた私は、ある名前が出たせいで頬が強張るのがわかった。

捻挫がもたらしたもの？

「ゲッ、そんなこと言うなよ、伏見！　……あ～やっぱさぁ、最初に決まった通り、星野と荒井がよかったんじゃないか？　いや、原口と尾島が悪いってわけじゃねぇよ？　でも相方が原口じゃ尾島の独壇場だろ？　なんか滅茶苦茶になんねぇかなぁ。それにさぁ……最近の尾島、こうピリピリしてるっつーか、機嫌悪いっつーか、落ち着かないってゆーか、ちょっと変なんだよ。サッカーの練習のときもそうだけ、バスケんときもすげぇ殺気立ってるらしいぜ？　尾島の立てた練習メニューで男バス全員へバッてゲロ吐きだってよ。違う意味で部員潰しっつーか、アイツの体力いったいどうなってるんだろ？」

佐藤君は腕を組みながら頭の上にはてなマークを浮かべたが、ブキミちゃんは「それがどうした」と鼻で嗤った。

「そんなことどうでもいいことです、佐藤君。それに尾島君が変なのは昔からで、今に始まったことではありません。いいじゃないの、仕事さえキッチリとやってもらえば、それで結構なのでは？」

「けどさ、伏見。そうは言ってもよ」

ブキミちゃんの言葉に佐藤君は顔を曇らせ、私に向かって不安そうに目配せしたが、私は苦笑いを無理矢理張り付けることしかできなかった。

「佐藤君もこの際彼らに押し付け……いえ、任せてみたらどうです？　通年の体育委員が後藤君と成田さんだから、彼らを焚き付けたら仲良く四人でうまくやってくれるのではないですか？　私はそれでも一向に構いません。第一体育祭など興味ないですもの。それに

ワタクシ、生徒会の方の仕事が忙しくて、それどころではないの。だから佐藤君、頼むわね？」

「おいおい、無責任なこと言うなよ！　……まぁ、確かに俺一人頑張っても、どうせ尾島の独壇場だろうけどさ。……って、ところでサポート委員じゃなければ、荒井と伏見、こんなとこで何してるわけ？」

佐藤君が目をパチクリしながら聞いてきた素朴な疑問に、私はなんて答えようか逡巡していたら、ブキミちゃんが「よくぞ聞いてくれました！」というよう顔を輝かせズズイと前に出てきた。

「あら、佐藤君、いい質問ね！　フフフ……荒井さんはね？　今日付けで『英語英文タイプ部』に入部しましたの！　今部員の初顔合わせと活動が終わって教室に戻るところでしたのよ？」

ブキミちゃんのさらに弾んだ声に、佐藤君は今度こそ「えぇ？！」と驚いた。

「はぁっ？　荒井ってバレー部やめて、『英語英文タイプ部』に入部したの？！　マジでっ？！」

佐藤君の信じられないというような口調に、私は慌てて「ちちち違う！　違うって！」と訂正した。その後、簡単にマネージャーの件と『英語英文タイプ部』に入部した経緯を説明すると、佐藤君はへぇとボールの上に足を乗せて転がしながらナルホドと頷いた。

「……そっかぁ。荒井、女バレのマネージャーと掛け持ちでやるのかぁ。『英語英文タイプ部』に入部するなんていうから、やっぱあの『東先輩』っていう人とデキてるのかと思ったぜ！」

「「違いますっ！」」

私とブキミちゃんは同時に否定したので、佐藤君は「な、なんだよ、仲良くハモッてんな～」と朗らかに笑った。

「まぁ、そりゃそうだよな。先輩が引退してから入部するんだから、そりゃないか。それにしてもさ……オレからしたら考えられないぜ、授業以外で放課後も勉強するなんてよ。しかもオレ、英語まったくダメだからさぁ、ハッキリ言って拷問だな」

「あら、そんなことありませんわよ？　勉強も慣れですわ。この際いい機会だから、佐藤君も荒井さんのように掛け持ちでどうです？　いつでも入部歓迎よ」

ブキミちゃんの思ってもみない勧誘に、佐藤君は目を見開き首を振って「うわ、冗談じゃねぇよ！　そんなのぜってぇ無理！」と言いながら後ずさりした。その焦っている姿がなんだかおかしくて、私は数日ぶりに引きつった愛想笑いではない笑い声をあげた。佐藤君はそんな私に顔を向け、自身も切れ長の目を細めて笑った。

「……なんだ。荒井、元気じゃん」

「え？」

私は佐藤君の唐突な言葉に目が点になった。意味が分からず佐藤君の顔をジッと見詰めれば、佐藤君は目元というかこめかみを掻きながら、「あ、いや……ちょっと、な」と言葉を濁して私の顔から一旦視線を逸らし、困ったような照れたような何とも言えない微笑みを浮かべた。言おうか言うまいかとソワソワした後こちらを窺うようにそっと顔を向けた。

「いや、あのさ……荒井、なんか最近フラフラしてねぇか？　ちゃんと食ってる？　一日中ボーっとしてること多いし、夏休み明けた

らなんか痩せてるっていうよりゲッソリして、ふわーっとしてたから正直びっくりしたんだよな。俺の勘違いかなと思ったけど、他の奴らも言ってたから、やっぱ気のせいじゃないんだと思ってさ。それにその足、捻挫だっけ？　大丈夫なのか？」

私は佐藤君の言葉に唖然としたまま彼を見つめていたが、捻挫した足のことを聞かれていると半テンポ遅れて理解した後、慌てて頷いた。

「そっか。でも、捻挫は油断せずきっちり直しておいたほうがいいぜ？　結構厄介なんだよ、寒くなるとシクシク痛むことがあるし。俺も昔やったところ、今でも冬の時期になるとなんとなく痛くてさ。雪降ったりすると特にな」

「……そう、なの？」

「そうそう甘く見ない方がいい……って、ヤベ！　呑気にしゃべってる場合じゃなかった！　じゃぁオレ行くわ、気を付けて帰れよ！」

佐藤クンは自分が長話をしていることに気付いたのか早口で捲し立て、慌ててサッカー部員の方へ走って行ってしまった。

私はお礼も言えずに黙ったまま佐藤君の後ろ姿を見送っていると、隣のブキミちゃんが「……ほんと、佐藤君っておやさしいですわね」と呟いた。私は黙って頷きながら、心の中に優しい爽やかな風のようなものが静かに吹き込まれるのを感じた。目の奥と頬が徐々に熱くなっていくのがわかる。

（佐藤君、心配してくれたんだ……）

思ってもみなかった佐藤君の心遣いは、奥底で淀んでいる心と疼く左足の痛みを和らげた気がした。

「彼が女生徒に人気があるのも頷けるわね。一年の時からクラス内でもすごかったのよ？　荒井さん、ご存じでした？」

ブキミちゃんは、私の火照っている顔を見てクスリと笑いながら意味深な目配せをした。私は小さい声で「小学校の時もすごい人気だったよ……」と俯きながら彼女の言葉を肯定した。

「そうでしたか、小学生の時からですか。……それにしても、荒井さんが羨ましいわ。佐藤君みたいなまともな同級生と一緒に小学校時代を過ごすことができたなんて。例え成績があまりパッとしなくとも、あの素晴らしい性格ですべて許せますわね。むしろ完璧じゃないところが母性本能をくすぐるというところでしょう。……それに比べて、大野小出身の生徒はロクな人物がいなくて。本当、情けないったら」

ブキミちゃんは低いハスキーボイスで吐き捨てるように言い、サッカー部の練習から目を逸らして歩き始めた。私は彼女の言葉に対して何も答えず、天使の輪が素晴らしいおかっぱ頭を眺めながら、彼女の後に続いた。

挫折がもたらしたもの？

佐藤君の言うとおり、怪我をしてから残りの夏休みをベッドの上で過ごしていた私は、ボーっと流された日々を送っていた。

暑さのせいで食欲が湧かないのか、はたまた他の理由があるからなのか――。

何か食べなきゃと思うのに、食べ物が喉に通らないのだ。身体はフラフラするし、力も入らなくなってきたので、これはマズイと頭の中ではわかっているのだが……身体が言うことをきかなかった。さすがに学校が始まると少し食欲も戻り、自然とお腹が空いてきたときは自分でも笑ってしまった。人間というのは何をせずとも息をしているだけで腹が減るらしい。当たり前のことだが、妙に実感してしまった。おかげで佐藤君の指摘通りガクンと体重が落ちこんでしまい、喜んでいいのやら悪いのやら。

それに加えて、毎日雄臣がやってくるのも気分が盛り下がる原因となっていた。

『俺がもう少し痩せろと言ったからダイエットしてるのか？　嬉しいけどな、無理はやめろ。不健康なダイエットは身体によくないんだよ。それにバストが小さくなったら元も子もないだろうがっ！　オレはな、こう部分的に痩せろといったんだ。たとえば腰！　たとえば背中！　たとえば二の腕！　ようするに胸と腿と尻はそのままキープしつつ、ボンッキュッボンッを目指すんだよ、わかったな？！』

『……（この人、完全に欲望丸出しだがや……）』

こんな調子で人の部屋に上り込んでは熱弁する雄臣。

しかも真美子が部活に行っているときに狙って来るのだから、何か善からぬことを企んでいる確信犯としか思えない。唯一救いなの

は、私の部屋にはクーラーがないので、部屋の窓やドアを全開にしなければ十秒も持たない密室完全不可ということろだった。

『南向き部屋・日差し良好！』

……などという優良物件の見本のようなマイルーム万歳。

雄臣に対する気持ちが夏祭りを境に徐々変わってきたとしても、私の奥深い底の底の闇の部分を知っているのは雄臣ただ一人だとしても、連日こんな調子で人の生活を掻き乱し、静かに過ごすはずの休みを潰されていたんでは、彼に抱いた感謝の気持ちも萎えるってもんだ。おかげで元気が出るどころか、なけなしの気力と体力を削がれて上の空状態が新学期突入してからも続いてしまった。

その結果、私の足の怪我というか行動に不安……いや、心配した担任の青島（チンタオ）先生が、始業式の翌日、私以外に学級委員や通年の体育委員を集めるて「体育祭のサポート委員を他の奴に変更しようと思うが、どうだ？」と提案してきたのだ。

そりゃ当然だろうなと思ったが……想像以上にショックを受けている自分に驚いた。女バレのマネージャーの件もそんなに打撃を受けなかったというのに。

青島先生からの提案に対して、学級委員のブキミちゃんがなにか言おうと口を開く前に成田耀子はすかさず手を挙げ、「先生！　私から提案があります！」と素早く先手を打った。

『荒井さんの代わりは、立候補してくれた原口美恵さんにやってもらうべきではないでしょうか？　すでに時間も差し迫ってますし、これから選出するなんてクラスメートにとっても迷惑ですし、時間ももったいないです。やはりここは最初からヤル気のある人にお願いした方がいいと思います。それに前もって原口さんに確認とりま

したが、是非引き受けますとのことです！　ね、後藤君？』

成田耀子は同じ体育委員である後藤君に対し、顔を少し傾けてベストポジションをキープしつつ、満面な笑顔で意見を言った。その後ブキミちゃんの方に向かって不敵な笑みを浮かべ、「文句があるなら受けて立つわよ、このオカッパメガネ！」などという強気なオーラを発した。

しかもその内容は、私が怪我したことで皆に多大な迷惑をかけ、まるで委員の仕事をヤル気がないみたいな言われよう。この時ばかりはさすがの私も幽体離脱気味の魂が戻り、イライラという名の人間らしい感情が湧いた。生まれたての小鹿のようにフラフラになりながらも、思いっきり成田耀子の顎に向かってアッパーカットを捻じ込みたい衝動に駆られたが、そんなことはできるはずもないので大人しく黙るしかなかった。

（この怪我だって、好きで捻挫したわけじゃないのに）

声を大にして言えないもどかしさ。しかもその原因である男は隣で明後日の方向を見ながら、生意気にも不貞腐れている様子。私が不愉快な感情に悶々としている間に、成田耀子の意見を沈黙で受け止めたブキミちゃんは、怖いほど無表情な顔を彼女に向けた。何か言おうとしていた佐藤君を制止し、急に口元をニヤリと歪ませる。

『……そうですわね。それでいいんじゃないですか？　学級委員はサポート委員のそのまた補佐ですもの。体育委員の方々がそれでよければ、私は別に構いませんし、お任せします』

『えぇ？！　お、おいっ、伏見！』

『いいではないですか、佐藤君。……って、あらら、いけない。当のサポート委員の方々を差し置いて勝手に進めてしまったわ。やはりここは先にサポート委員に意見を聞かないといけませんわよねぇ？　尾島君はどうですか？　この決定でよろしいのかしら？』

ブキミちゃんは最初に「アンタ達で適当にやってくれちゃっていいから」というニュアンスのセリフを棒読みで言ったが、佐藤君の意見を黙らせた後、さも今気付いたかのようにわざと意味深な流し目でサポート委員の尾島に話を振った。声が掛かるまで不機嫌さを隠さず黙り込んでいた尾島は、その時初めてゆっくりとブキミちゃんの方に顔を向けた。それはまるで……。そう、キャンプの時の再現。ズガーンなどという効果音付きの殺人光線と共に、一瞬机を蹴りあげるかとビビるほどの迫力。尾島の方を見ないように前を向いて目の端で彼の行動を追っていた私にも、その殺気は気配でわかった。

『……別に、好きにすればいいんじゃねっ？　誰でも同じっしょ？』

尾島の低い声が隣から聞こえてきた。

委員など誰でも同じというような、別に私じゃなくてもいいような言いぐさ。その尾島の吐き捨てる口調にやり場のない憤りを感じる！　……筈なのに。私はどこかおかしいのだろうか。心のどこかで、いつの間にこんなに低い声を出すようになったのだろうとバカなことを考えてしまった。私が知っている、声変わりしていない少し高い声じゃないことに狼狽えてしまった。それに、座っている座高もいつのまにか同じくらいで、隣に座っている男の存在が急に大きく感じられた。そんなこと悠長に考えている場合じゃないのに。

怒りと焦燥と苛立ちと不安が絡み合い、今にも破裂しそうなほど波打っている心臓。それも背中と手にじっとりと汗をかくほどに。

『……ですって、成田さん。誰でも同じなら原口さんで構わないそうよ、良かったわねぇ。そういうわけで先生、このような意見が出ていますが、どうでしょうか？』

ブキミちゃんはこの場にいた全員に息を飲ませるほどの尾島の眼

光を薄気味悪いスマイルで跳ね返し、その矛先を成田耀子とその様子を黙ってみていた担任に流した。どうやら尾島の意見も聞かず勝手に話を進めていたらしい成田耀子は、慌てた様子で「べ、別に私は……」と口ごもり、担任である青島先生は寄りかかっていた黒板から身体を起こした。

『よし、わかった。反対する者もいないから、それでいくことにするか。荒井もいいよな？』

青島先生は頭を掻きながら「原口美恵をサポート委員決定する」の旨を言い渡したが、確認の意味なのか。最後の最後で私に話を振った。隣に座っている男を除いて全員の顔が私に集中する。私はこんなわかり切ったこと答えるのも億劫だった。「どうぞご勝手に」と言ってさっさと教室を出ていきたかったが、そういうわけにはいかない。

喜（成田耀子）怒（尾島啓介）哀（佐藤伸）楽（伏見かおり）、そしてどうでもいいような表情（後藤洋、青島先生）の顔をぐるりと見渡し、この居心地悪い場所から抜け出すように、口を開いた。

『……ハイ。申し訳ありません、みなさん、よろしくお願いします』

私は静かな声で、けれどもハッキリと答えた。

静かに頭を下げながら、意識は怪我をした足首を含め左側に集中していた。

左隣の男が僅かに震え、ジャージのポケットに入れていた両方の拳をグッと握ったのがわかるほどに神経を張り付めていた。

ジャージの中に潜んでいる、見えない尾島のガッツポーズが憎らしかった。

新学期に入ってから、一言も口を利いてない尾島。
再び始まった、尾島達と会話を交わすことがない日々。
周囲も私と尾島たちの間に微妙に漂う「余所余所しさ」という名の違和感を感じ取り、再び腫れ物に扱うように接するクラスメート。
ようするに、一学期の状態に戻ってしまったのだが……以前と違うのは、立場が逆転したように私のほうがあからさまに尾島達を視界に入れないよう無視していた。

――今ならまだ大丈夫、間に合う。

いったい何が間に合うというのか。
わかりそうでかわからない、この不可解な感情。けれど、雄臣の言葉を無視できずにいた。尾島の視線を感じるたびに、何度か話し掛けてこようとする気配を感じるたびに、雄臣の言葉が私を追い立てた。

いつのまにか背中で尾島を拒否していた。

……なのに。

それなのに、私は――。

何故息を顰めながらも全神経張りつめるようにして尾島の気配を追ってしまうのだろう。

無視しているのは自分なのに、遠くに感じてしまうのを寂しいと思ってしまうのだろう。

心のどこかで、いつもの調子で私に話しかけて欲しいと願ってしまうのだろう。

あの祭りの日からずっとずっと、私は心を持て余している。自分の気持ちが見えず、晴れそうで晴れない霧のような中を彷徨っていた。

山野中体育祭！～準備はつらいよ・前編～

「荒井さ～ん。これ、テープ剥がれちゃったんだけどぉ」

ガタガタっと建付けの悪い教室の戸を忌々しそうに無理矢理開けた後、まっすぐに私の席まで来た女子が言った言葉がこれだった。

私はビクッと身体を震わし、書いている学級日誌からそっと顔をあげると、教室に入ってきたクラスメートが見下ろしていた。ニヤニヤしながらテープが剥がれたと苦情を言ったのは、原口美恵の取り巻きの一人。よっぽど機嫌がいいのか、それとも相手が荒井美千子だからおちょくっているのか。私の前に手に持った学ランをにゅっと差し出し、剥がれた部分を力強く指した。

「ほら、ここ！　なんでこんなに簡単に剥がれるわけぇ～？」

「……え？」

「練習中に剥がれたみたいよ。尾島、すごい文句言ってた」

私はシャーペンを置いてそのテープが剥がれたというところを見ようとしたら、バサッと乱暴に学ランを日誌の上に置かれた。

その学ランの背中の部分には「闘魂」と金色のテープが貼られている。その「闘魂」という文字のテープがところどころ剥がれているようなのだが、どうみても粘着力が弱くて剥がれたものではない。まるで爪を使って無理矢理剥がしたような……たぶん無理矢理剥がしたのだろう。

（ていうか、このクソ暑いのに剥がれるほど学ラン着て練習やるなよ。本番前の仕上げの時にだけ着ろ！）

まぁ、そんなことはどうでもいい。問題は、なぜそんな苦情が私のところにやってきたかということだ。だってこの学ランにしっかりとテープを貼りつけたところを、私はこの目でしかと確認した。

貼った本人が「やった、できた！」と満面な笑みで宣言し、学ランをこれでもかというほど抱きしめていたのだから間違いない。その時に目の前にいる取り巻き其の一も見ていたはずだ。なんせ取り巻いている主（あるじ）がやったものなのだから。

ということは、答えは一つ。完全に嫌がらせである。

私はわからぬよう舌打ちしながら、どう見ても規格外である学ランを眺めた後、取り巻き其の一の顔を見た。地味な荒井美千子がジロッと見たからだろうか。思わぬ行動に彼女は一瞬「な、なによ」と少し動揺した。

「あ、あの……私、尾島……君の学ラン、担当してないというか……（つーか、原口が私に触らせなかったでしょ）」

「は？」

「こ、これ貼ったの、原口……さんだよね？　だって、尾島君のでしょう？（アナタも見てたでしょ）」

「はぁ？！　……じゃぁ、何？！　美恵が悪いってわけぇ？！」

「……あ、いや……（どう見てもそうでしょ）」

「そういうことじゃん！　あのさぁ、そんなのどうでもいいから、さっさと直してよ！　一組の応援団の準備担当、荒井さんでしょ？　美恵がアンタの代わりにサポート委員やってあげてるんだから、これぐらいしてもいいんじゃないの？　どうせ体育祭参加しないんだからさぁ、暇でしょ！」

「……（コノヤロ）」

フンと鼻息荒くしながら捲し立てる礼儀も慎みも知らない取り巻き其の一に対して、私は心の中で盛大なため息を吐いた。

随分と勝手な言いぐさである。目の前の女子は原口美恵がサポート委員を「やってあげてる」とぬかしていたが、こちらから頼んだわけではなく、勝手に成田耀子と口裏合わせたのは原口だ。それに私は暇しているどころか、今は非常に忙しいのだ。なんせメデたく

二学期の席替えで隣の席になった、同じ日直である佐藤君が応援合戦の練習で出払っているため、学級日誌の彼のコメント欄の部分に心を込めて代筆しているところだった。それにブキミちゃんの補佐として、通年の体育委員並みにこき使われ……いや、動いている。そのうえ応援合戦に出る人たちの学ランの背中にテープを張って装飾したり、軍旗などの準備を無理矢理押し付けられ、ほぼサポート委員の仕事を半分請け負っている状態だ。どこをどうしたら暇などと言えるのだろう。

私は怒りを通り越し、諦めの極致になっているのを押し隠くすように息を飲んだ後、そっと声を掛けた。

「あの……」

「なによ！」

「え、えーと、本当にいいのかな？　わ、私が尾島……君の学ラン直しても」

「えっ？」

私は今後憂いの無いように、取り巻き其の一に念を押した。間違っても後から「尾島の学ランに勝手に触んないでよ！」と原口から苦情を言われたのではたまったものではない。幸いにも教室の後方には、各クラスごとに用意する体育祭用の軍旗の作成ため、数人生徒が残っていた。作業をしながらも息を顰めながらこちらの様子を伺っているのがわかる。彼らは何もせず見て見ぬふりを決めることはわかっていたが、一応私が確認したという承認ぐらいにはなってくれるだろう。

もう一度尾島の学ランをチラッと見た後、「どうすんの、ホントにいいんでしょうね？　後で文句言うんじゃねぇぞ？」と念を押した視線を向けた。そうすると取り巻き其の一は焦ったのか、強気な態度を崩し慌てて、私には関係ないというように明後日の方向を向いた。

「い、いいんじゃないのぉ？！　だって尾島が荒井さんにやらせろって……言ったから……。と、ともかく、私は持ってきただけだから！　早々に直して、尾島に……ダメ！　美恵に渡してよね！」

取り巻き其の一は言うべきことを言ったと思ったのか、クルッと踵を返して足早に教室を出て行ってしまった。辺りにシーンとした気まずい雰囲気だけを残して。

私はやっと喉元まで出かかっていたため息を吐き、日誌の上に乗っている尾島の学ランを手に取って剥がれているところを一応確認した。テープが貼ってある背中の部分を光にかざし目を皿のようにして見ると、何度も爪で引っ掻いたのか、いくつもの筋ができていたし、妙にテカっている。

（やはり無理矢理剥がしたな……あの、類人猿め！）

思わずその学ランをビリビリに切り裂き焼却炉の中へ突っ込んで灰と煙にしたいところだが、そんなことは間違ってもうら若き乙女がやることではない。残りの学校生活を登校拒否で過ごすわけにもいかないし。

とりあえず目の前の日誌を完成させようと、邪魔だと言わんばかりに佐藤君の机の上に尾島の学ランを置かせてもらった。キラッと光ったので何となく目を向けると、学ランの内側がベロッと剥き出しになっており、『乙杯羅武（オッパイラブ）』の裏ボタンが無駄に存在を主張していた。どうやら無事返却された模様。ここは心を鬼にして生活指導の先生に再びこの裏ボタンを献上し、優等生としての株上げ大作戦の足しにしちまおうかと考えたところで人の気配を感じた。

「荒井……さん？」

弱弱しい声の方に顔を向けると、クラスでも物静かな鈴木さんと田中さんが不安そうな面持ちで立っていた。あんな苦情を堂々と言

われた私よりも、ダメージを受けたような顔をしている。２人の顔を見たら、文句に言われたことに落ち込むという感情も麻痺している自分が悲しくなった。

「……あ、はい？」

「あの……軍旗の絵、完成したんだけど……。あとはマイケル君に『字』を入れてもらうだけで……」

「ほ、ほんと？！」

私がパッと明るい声を出すと、２人は安心したようにぎこちない笑みを浮かべて頷いた。作業していた教室の後方を見たら、残りの軍旗制作係の人たちも立ち上がって出来上がった軍旗を広げて見せてくれた。そこには赤い生地に翼を広げた目の鋭い鷹の絵が描かれていて、素人の私から見てもかなり良い出来栄えだ。私は原口の取り巻きに文句を言われた事など吹っ飛び、立ち上がって「あ、ありがとう、助かりました！」と鈴木さんや田中さん、そして軍旗を持っているクラスメートに頭を下げた。本当は外国人のお偉いさんよろしく、「いや～助かったよ！　お疲れお疲れ！」といいながら大袈裟な握手を交わしハグをするか、「Ｈｅｙ、ブラザー、その軍旗ＮＯ、出来栄えＤＯＩＹＯ！　期限に間に合い、ご機嫌ＳＡＩＫＯ！」などと韻（ライム）を効かせながら軽快な音楽に乗って拳同士をガチンコしつつこの喜びを分かち合いたいたかった。しかし、いつものように想像だけで終了。仕上がりを確認するために改めて軍旗を手に取ってみると、いやぁ本当、中々の上物である。

「す、すごいよ！　これ、軍旗の部門で優勝するんじゃないかな？」

私が素直に絶賛すると、鈴木さんたちは照れたように笑い「そんなことないよ」と謙遜した。まるでスカジャンの背中に刺繍してあ

るようなインパクトのあるこの鷹の絵に、大胆に書いた習字の字を書き込めば、本気で軍旗の部門での優勝も目じゃない気がする。そこまで考えたところで、ふと肝心な……というか、この教室にいるべき人がいないことに気付いた。

「……そ、そういえば、マイ、いえ、本間君は？　確か掃除のときはいたよね？」

私がキョロキョロと教室を見渡しながら言うと、鈴木さんたちは顔を見合わせ「あ～マイケル君ね」と曖昧な笑いを浮かべた。

「さっきまでいたんだけど、最後の補修をしていたらいつの間にか居なくなちゃって。でも、ほら。靴下とカバンはあるから、まだ帰ってないよ？　尾島君に呼ばれたか、多分どっかで寝てるんじゃないかなぁ」

「……」

こんな切羽詰っている肝心な時にいない本間君。相変わらず何考えているわからず、自由人で予想を裏切らない彼の行動に顔が歪んだ。まったくあんな男の言いなりになるなんて……最初の頃に欠伸で返した強者ぶりは何処へ行ったのだろう。本間君（マイケル）のくせに「ＢＡＤ」どころか、最近ますます猿（バブルス）に押され気味だ。似てるのはあのパーマかかった髪の毛だけ、しかもかかり具合が若干弱めというなんとも締まらない始末。素晴らしい踊りと共に「ＢＡＤ」を歌えなんて言わないから、せめてその半分だけでも頑張って欲しい。

何はともあれ、軍旗を完全体にするには彼を奪還せねばならなかった。仕事の終わった鈴木さん達に残ってもらうのは悪いので先に帰ってもらうよう促した後、鼻息荒くさっさと日誌を終わらそうと机に向かおうしたら、有難いことに鈴木さんたちが「私達が探してくるよ」と嬉しい提案をしてくれた。

「ほ、ほんと？」
「うん、どうせ暇だし。それに……荒井さんやることあって、大変でしょ？」

鈴木さんたちは心配そうに、学ランと日誌が置いてある私の机の方に目配せした。

「文字の位置やアングルなどは私たちが直接本間君に伝えた方がいいし、最後の仕上げもみたいし、ね？　もしかしたらもうこっちに戻ってきてるかもしれないし。……けどあの本間君が字が上手なんて、なんか意外だよね～」

私は鈴木さんたちを一緒に「そうだよね」と苦笑いをした。
そう、意外や意外にも本間君は書道の段を持っている人で、その道のコンクールの入選常連客なのだ。あの眠気を漂わせた、くせ毛頭のヒョロヒョロ小僧にそんな力が隠されていたとは正直驚きだ。
『芸は身を助ける』という言葉を地で生きている男・本間厳太、見た目を見事裏切る１４歳。どうせなら是非行動も裏切ってほしい。寝てていいから、おとなしく教室にいてくれ。
本間君の件は鈴木さんのご厚意に甘えることにし、私はさっさと日誌を書きあげて青島（チンタオ）先生に提出するため教室を出た。

山野中体育祭！～準備はつらいよ・前編～（後書き）

マイケルのＰＶって、どれも名作ですよね！　私は「スリラー」「Ｓｍｏｏｔｈ　Ｃｒｉｍｉｎａｌ」に次いでこの「ＢＡＤ」が好きです。でも、とんねるずのノリさんがやった「ＢＡＤ」のパロのほうが印象深いのは何故だろう……。

山野中体育祭！～準備はつらいよ・後編～

明後日に控えた山野中の体育祭に、学校中が浮足立っていた。

日誌を届け、その帰りに梨本先生（リポーター）と遭遇し、「お、ラッキ～！英英部の部室見てきてくれるか？　ついでに閉めてきてくれ」と余計な仕事をプレゼントされた私は、バタバタ走るように歩く生徒たちと廊下ですれ違った。どうやら体育祭の準備をしているらしく「廊下を走ってはいけません」という教えをギリギリの線ですり抜けている感じだ。屋外からは様々な音楽が聞こえ、色別対抗応援合戦の練習が熱心に行われているようだ。渡り廊下から見えるグラウンドではリレーの練習をしている。

普通に歩けるようになった左足を見た。

足の怪我はほぼ完治し、生活するのに支障をきたさない程度に歩けるようになったが、病院の先生からは決して無理しないようにとお達しがあったので、競技の参加は諦めた。もともと運動神経もいいほうではないので、むしろクラスのお荷物にならずに済むと安堵したのだが……その代わりに余計な雑用がまわってきたのは計算外だった。

その雑用とは、体育祭サポート委員がやるべきである諸々の面倒な仕事の類、各クラスで用意しなければいけない軍旗や応援合戦で使う小物の手配である。本来ならば、それらはサポート委員がクラスのみんなに仕事を配分するのだが、その肝心なサポート委員２人が面倒なことを私にすべて丸投げしたのだ。結局彼らがやったのは、全員リレーの滑走順を決めたり、色別対抗リレーの出場選手と応援合戦のアイデアや人材の選出だけ。

委員を原口美恵と交代してから一週間も経たないうちにこの有様。相変わらず幽体離脱気味で、力が入らないボーっとしてたような私の心にも、さすがに「怒り」という名の泉が湧きだした。そのおかげでしっかりと魂が定着し、荒井美千子見事復活！　それにいつま

でも無視攻撃で逃げるわけにもいかないので、仁王立ちの二人に毅然と立ち向かった。

何故だろう。真正面から尾島と対峙した途端、心が高揚した。しかし原口と二人仲良くピッタリ並んでいる姿に気分が急転直下……無性に腹が立ち、代わりにイライラが急激増加！

『ちょっと！　私、サポート委員外れたんですけど？　これはどういうことっ？！』

……残念ながら、か弱い私にはこのような強気の意見は言えなかった。恐る恐る「担当を外れた私がやっていいのか」という控えめな抗議と強気の（つもり）目線でサポート委員二人に対抗すれば、反撃は倍になって返ってきた。

『あぁ？！　元々、チュウの仕事だろうがっ！　他の連中は体育祭で活躍するのに、オマエは見学じゃねぇのよ！　体育祭は皆でやるもんなんだよ、それぐらい協力しろや！』

（誰のせいで見学になったと思ってんのよっ！　この下半身竹並みのエロ猿！！）

あの祭り以来、久しぶりに言葉を交わした尾島と私。

命令口調で「協力しろ」のセリフの時には、苛立ちも最高潮。ますます反撃の炎がカァっと身体に燃え上がった。一本の導火線で結ばれた私と尾島の視線は、その役割を違えず瞬時に中央まで発火して爆発した。

吐き捨てるように言った尾島のパワーハラスメントに対して、やつれてクマが酷い目でさらにギロリと強く睨むと、尾島は一瞬「ギクっ」と怯んでプイッと視線を逸らした。

『は、原口もチュウに仕事回せよっ！』

憎い捨て台詞を残したが、負け犬のごとくドカドカと不機嫌そうに去る尾島。

脳内で「勝ったぁ！！」と勝利の拳を突き上げた後、命令だけでまったく役に立たないキンケシ並みの尾島に「筋肉バスター」をキメたところで、目を吊り上げている雌豚……いや、原口美恵が入れ替わりで忌々しそうに面倒事を追加した。

『というわけで、荒井も協力してよね！　まず応援合戦だけど、我が一組に属する赤組は学ランでやることになったの。その学ランの背中の部分を装飾するから、「闘魂」という文字を金色のテープで貼ってくれる？　あ、そうそう、尾島の学ランは私がやるから！　そういうことで、他の人の分は荒井が学ランを回収してよ。ああ、あとクラス軍旗の件お願いね？　赤組のシンボルは鷹よ。それをこの赤い生地に書いてほしいの。内容は……荒井に任せるわ。それじゃよろしく』

尾島が命令したことをいいことに、得意げに言い放つ原口美恵とその隣で嗤っている成田耀子。当然3対1じゃ勝てる筈もなく、私は無言という形で引き受けざる負えなくなった。

尾島たちが私に仕事を押し付けたと事後報告を受けた学級委員の佐藤君は、正義感丸出しで抗議の声を上げた。が、尾島にのらりくらりとかわされ、煙にまかれてしまう。ブキミちゃんは殺気を伴いながら生徒会としての仕事をこなしており、それどころではない。

仕方ないと思いながらも……正直本当に困ったことになったなと頭を悩ませた。

しかし哀れな子羊を神は見捨てなかった！　その様子を黙ってみていた鈴木さんと田中さんが、「私たち美術部だから」と軍旗に鷹の絵を描く仕事を自ら名乗り出てくれたのだ。そして、以外にもあ

の本間君（マイケル）が書道の段持ちであることを佐藤君が教えてくれたので、学級委員の二人に付き添ってもらい、本間君の何も考えない性格に付け込むようにゴリ押しでお願いすることに成功した。残った学ランの件は、型の見本がすでに出来上がっていたし、学ランを回収して裏にテープを貼ればそれで済む。幸いにも奥住さんが応援合戦のメンバーに入っていたので、尾島を除く全員分の学ランを集めてくれた。ほぼ問題なく仕事が順調にいったので安心だったのだが……どうにも納得ができないというのが本音だ。大体サポート委員2人のあの態度、人に物事を頼む姿勢がなっちゃいない！

『ごめんな、荒井。結局仕事やらせる羽目になって』

すまなそうに頭を下げた、隣の席の佐藤君。

『そんなことありやせん、アニキぃ！』

……ではなく。いつも通りどもった声だけど、尊敬&真心をこめて「兄貴と崇める佐藤君の為ならば」と、誰かさんとは大違いの態度で協力する意を伝えた。学年一モテ男の佐藤君の頼みだ、ここで快く引き受けなければ女がすたるってもんである。

私は足の心配もしてくれたお礼も含めて、こういう時こそ普段は邪魔なEカップになりそうな谷間を寄せてチラリズム全開のサービスショット！　……などの破廉恥な行為はしなかったものの（そんな度胸もない）、中学生らしく恥じらいつつも厚子お姉様推奨である「下品に見えないお色気スマイル」をサービスした。

女豹特殊訓練の成果を何気にお披露目する荒井美千子。

しかし、残念なことに佐藤君には効かなかった。お色気という名の見えない初々しいプルプルしたハートが、佐藤君の一点の曇りもない爽やかなビッグスマイルに弾かれてあらぬ方向へ飛んでいっているのが見えた。しかもあらぬ方向に飛んだハートは、佐藤君の前

の席に座っている星野君にも思いっ切り弾かれていた。その証拠にチラリとも後ろを見ようとしない。

（……。あ、その……あれよね？　同級生の男子にはまだ早かった、のよね？）

ここはひとまず無理矢理自分を納得させた。だってほら、まだ二回目だし。なんといっても女豹特殊訓練は奥が深い。いくら修行を重ねた熟練者でも道のりは険しく、男の数だけゴールがあると厚子お姉様は力説していた。それを考えれば初心者マーク付きの私のお色気などはホクロ毛以下かもしれぬ。どうやら今後の課題を練り直さなければいけないようだ。

――ところがである。

佐藤君に投げつけたお色気のハートは違うところにも飛んで行ったようで、どうでもよい人物に、しかも間違った方向に効果が発揮されてしまった。

しつこくも再び後ろの席、というか、佐藤君の後ろの席に落ち着いた尾島に直撃し、有難くない化学反応を起こしたのだ。猿のいる後方八時の方角からたちまち漂い始める不穏な黒い空気。ヤツが着ているこれまた真っ黒なＴシャツに派手に描かれた『ＫＩＳＳ』のメンバーのような髑髏顔で、『ＫＩＬＬ』の気配をこちらに送っていた。まぁ、わざと尾島に見せつけるように、お色気初級編の攻撃『Ａ・ＨＡＮ（アハ～ン）』を佐藤君に発動したのだが。

『テメェ……オレの時とはえらい態度が違うじゃねぇかっ、コノヤロ！』

『当たり前でしょ！　アンタと佐藤君とじゃ、月とスッポンなのよ、フンっ！』

ここでも若干ニュー●イプの素質を発揮する荒井美千子。「安全

●帯」という名とは無縁な、殺傷能力ＭＡＸである尾島の「熱視線」に、雄臣によって鍛え上げられた鉄壁の防御で防ぐ私の背中。私と尾島の間にはベルリンの壁、もしくは朝鮮半島の３８度線並みの国境が聳え立っているのであった。

＊＊＊

（あの類人猿めっ！）

奴の目に余る行動がチラついてイライラする。

ブキミちゃんよろしく、ツカツカと廊下を歩きながら尾島を悪態ついても一向に怒りが納まらなかった。

（何故あんな奴のために、貴重な放課後を使わなきゃならんの？いっそのことあの学ラン、「闘魂」の文字を全部剥がして「シスコン」と貼りかえてやろうかっ）

廊下の突き当たりにある英語英文タイプ部の戸を、閉まったままなのか確認もせずに怒りに任せて乱暴に開けようとすると、扉が開かないばかりか、その勢いで指先と爪を引っ掛けてしまった。

「～～～っ！！　（つ、爪がぁ～）」

泣きっ面に蜂よろしく、怒りと爪が剥がれそうな痛みをおさえようと暫くやり過ごしていたら、中から「キャッ」という小さな悲鳴と「ガタン！！」という音が聞こえた。

（えっ？）

目の前の扉に耳を澄ましたが、音はもう聞こえてこない。だからって無視してそのまま帰るわけにはいかない。妙な音、しかも悲鳴らしきものがしたのにこのまま放っておくのが躊躇われた。

（……中に部員がいるのかな？　でも今日は活動してない筈だし。それとも、気のせい？　いやでも……）

確かに物音は聞こえた。もしかして誰かが部室に用があってきたのかもしれない。一応確かめておくかと持っていた鍵を穴に差し込んでそっとあけてみた。

カラカラカラと自分の教室とは違ってスムーズに扉を開けると、フワッとした風が漂ってきた。窓も開いているみたいだから閉めようと、中に入って窓の方へ視線を投げれば……。

旗めいているカーテンの前で、不自然に立つ男女が一組――。

『またオマエか！！』

……などという目でこちらを睨んだのは、金髪の強面顔。衣服が若干乱れている桂龍太郎は、大袈裟なため息を吐いた。

山野中体育祭！～準備はつらいよ・後編～（後書き）

「キン肉マン」、近所の子が我が家に集合し、テレビにくぎ付けなって見てました。素晴らしいアニメでした。菩提樹は密かに「ブロッケンＪｒ」ＬＯＶＥです。

ちなみに「ＫＩＳＳ」はヘヴィメタの有名なロックバンドの名前です。平成生まれの子は知ってるか不安……。

山野中体育祭！～吐息を漏らす少女・前編～

『競技プログラム●番、二年男子による「棒倒し」が始まります。皆様拍手でお迎えください！』

生徒によるぎこちないアナウンスが競技場に流れた。

入場門から上半身裸の青い短パン姿に、チーム色の鉢巻を頭に巻いてある二年男子が入場してくる。生徒の待機所、特に各色の二年生のエリアにいる女子からの黄色い声援があがった。トラックの周囲を張り巡らしているロープの前を陣取り、飛び越すほどの勢いだ。

私は少し離れたところでポツンと座り、血気盛んな淑女の皆さんから視線を外して空を見上げた。そこには雲一つない真っ青な空が広がっていて、その空を彩るように頭上を交差し旗めいている万国旗。無意識に国旗と国名を照らし合わせる、荒井美千子。

（……あの赤地に星のマークって、どこだったっけ？　中国は確か星のマークが左端だった筈。じゃぁ、ど真ん中にデカい星が一つあるコレはどこの国？）

そんな疑問が私の脳内を横切った。それが「ベトナム」の国旗と後になってわかるのだが、たくさんある国旗の中でもひときわその星が頭の中に映し出される。そういえば国旗に描かれているマークって、星が入っているものが多いなと思ったところで、その星がつく男の子が頭の中に思い浮かんだ。

（新学期始まってから全然喋ってないんだよね……）

隣の席の佐藤君の前に座っている星野君。時々プリントを回すときや、佐藤君やその後ろの猿と話すときは後ろを向くけど、私の方は一切見ない。……私の方が避けていたというのもあるから、そのせいもあるのだけど。

『普通にしてろ、わかったな?!』

あの日の放課後、金髪強面は他人事のようにそう言ったが。

(……どう普通にしろっていうのよ。ひと月も無視しちゃったあとじゃ、どうにもならないじゃん。祭りの時に迷惑掛けちゃったお詫びもなんとなく言いそびれちゃったけど、今更だもんね。佐藤君に続いて、こんな私に優しくしてくれる男子なんて貴重だから、本当は仲良くしたいかな~なんて下心がないわけではないんだけど……。でも、でも、彼が優しかったのは……)

そこまで考えて私は勢いよく首を振った。

(やだ、私ったら何考えてるんだろ。最近ホント、なんかダメダメなんだよなぁ。……それより、もう関わらないと決めたんだから、このままそっとした方がお互いの為なんだよね。雄臣だって、そう言ってたし)

何かがこみ上げてくる気持ちを抑えるように、再び空を見上げた。今度は星が入ってない旗を意識的に見ていれば……。

「ちょっと、ミっちゃん! なんでボケッと空なんか見てるの? 前行って応援しないの?」

「大丈夫、美千子? ちゃんと朝食べてきたでしょうね?」

私の両隣にドスンと誰かが座った。私は驚いて二人の顔を見ると、そこには心配そうに見ている同じ赤の鉢巻をした和子ちゃんと貴子がいた。

「っ!!」

貴子の顔を見た途端、いきなり強面全開の「桂 龍太郎」の顔が重なり、ブルルと身体が震えた。

「あああれは偶然です！　狙ったわけではありませんっ！」
「「はぁっ？」」
「……あ。いや、その……アハハハ！　あ、応援ねっ？　だだだ大丈夫！　赤組優勝間違いなしっ！　おっとぉ、競技は三年男子だっけ？　ほら、貴子、チームは違うけど、日下部先輩応援するんだよね？」

私は慌てて誤魔化すように手をかざしながらトラックの方を眺めたが、青い短パンの集団が目に入ったとき、「あ、ヤベ、そういえば二年の競技だった」と心の中で呟いた。

赤チームである「1・2・3組」と緑チームである「6・7・8組」が決戦が始まっていた。ちょうど緑が支えている棒の上の方に、赤の鉢巻をしている攻撃隊の男子生徒が飛びかかっているのが見える。その素早い猿のような動きをした赤組の切り込み隊長が、遠目でもわかってしまう私っていったい……。よっぽどあの男が憎いのか。

「……猿が木登り……ややや！　ほ、ほら！　すごいよ、赤組！　もう緑組の棒倒れている！　こりゃ幸先いいねっ。アハッ、アハハハハ！」

再びごまかし笑いをする私に、両隣に座った二人は「大丈夫か？」というような不安そうな顔から、棒倒しの競技の方向へ意識を向けた。そこでパンパンとスターターピストルが競技終了の合図を響かせ、赤組勝利のアナウンスが流れると、勢いよく立った和子ちゃんも前方にいる女子の皆様もワァっと歓声を上げた。

「やったぁ！　さっすが、猿！！　こういう時だけしか大活躍できないもんね、1組の類人猿は！」

和子ちゃんが大声で言った後に「カカカ！」と笑うと、前方で黄色い声援を送っていた一部の女子がこちらを振り返り、ジロリと睨んだ。顔を合わせてヒソヒソと囁き合っている。どうやら和子ちゃんの言った言葉がカンに触ったようだ。

私は睨んだ天敵二名とその仲間たちから目を逸らし、「マズイよ、和子ちゃん」と体操着の裾を引っ張ると、貴子も和子ちゃんに続くようにクスクス笑った。

「ま、そうよねぇ。これが体育祭じゃなくて模試のテストだったら、間違いなく尾島（マヌケ）は活躍できないわねぇ。運動神経に全部栄養取られて、脳ミソまで回ってないみたいだし？」

「やっだぁ、貴子ったら！　当たってるだけに否定できないのが残念だわ～」

「「アハハハハ～」」

「……」

澄み切った青空に向かって高らか、いや、朗らかな笑いをする友人たちに私は何も知らないふりを決めることにした。それでも周囲にいる赤組二年女子の皆様は、下を向きながら笑いを堪えている。やはりみんなも同じことを思っているのか、それとも体育祭という行事に心が緩み解放されているのか。

そうこうしているうちに、「４・５組」の黄色組と「９・１０組」の青組の対戦が始まった。攻撃隊は両組とも奇声を発しながら対戦相手の棒に突進し、「我こそが真っ先に飛びついたるで！」の勢いだ。そんな血気盛んな男子生徒たちの群れから離れたところに、青い孤高の狼がいた。よく見ると、黄色の頭に青い鉢巻をした大柄の強面男がヤンキー座りをしながら一人佇んでいる。手を叩いて、いかにもかったるそうに応援する桂龍太郎。競技に参加するのが面倒だからって自分だけ楽するなんて、なんて不良で図々しくて高飛車

で破廉恥でっ！　……いや、そんなことはどうでもいい。元々あんな二股男にヤル気を求める方が間違っているのだ。

以外にもそんな桂龍太郎の応援が効いたのか、勝負の結果は青組の勝利。優勝決定戦は、赤の鷹と青い狼との一騎打ちとなった。

山野中体育祭！～吐息を漏らす少女・後編～

「わぁ～どっち応援しよう……赤組応援したいけど、青組は東先輩のチームだし。ね、貴子はどっち応援する？！」

和子ちゃんは本気で悩んでいるようで、興奮した赤い顔で貴子の方へ振り返ると、ある一点を睨んでいた貴子は怒ったような顔から、急にへにゃりと苦笑いした。

「あ～うん。迷うよね」

「やっぱぁ？！　あ～あ、私も青組がよかったな。幸子とチィちゃんが羨ましい！」

和子ちゃんは青組の応援席である右側のずっと先を見ながらため息をついた。

奥住さんの裏情報によると、雄臣と日下部先輩がいる3年11組を含む青いオオカミ軍団は、応援合戦、競技共々なかなか逸材が揃っており、今年度体育祭の優勝候補ナンバーワンだった。私としてはどのチームが勝っても構わないのだが、せめて軍旗の部門だけは、我がクラスに勝利をもたらしてほしいと思った。こうして他のクラスの軍旗を見てみるが、我がクラスのように完成度が高いものは見当たらない。贔屓目かもしれないけど。

（だって、鈴木さんと田中さん、それにあのマイケルが頑張ってくれたんだから！　これぐらいは私の仕事が報われてもいいよね？）

現在奥住さんの手で振られている2年1組の軍旗。

一昨日の放課後やっと完成し、昨日の朝のホームルームの時間に青島（チンタオ）先生から軍旗作成チームである鈴木さんたちやマイケルが前に呼ばれ、軍旗のお披露目公開となった。思った以上の出来具合で、クラス全員を唸らせるほどの作品に、私もクラスメートと同様賞賛

の拍手を送った。

『見てみぃ！　ワイらが作った軍旗じゃい、文句ある奴はかかってこんかい！』

……と心の中で天狗になる荒井美千子。私が仕上げたわけではなかったけど、資料集めや作成過程には関わっていたので、自分のことのように誇らしかった。

しかし、体育委員やサポート委員は鈴木さん達やマイケルだけにお礼を述べ、私は完全なる無視。ちょっと……いや、かなりムカついたうえに落ち込んだけど、あのメンバーなら仕方ないだろう。別に褒められるためにやったわけではないし。そのかわり、学級委員とあの青島（チンタオ）先生に「荒井、よく頑張ったな。ありがとうな」とお礼をもらった時は嬉しくて、ちょっと涙ぐんでしまった。

どうやら神様は気紛れだけど存在するようだ。

「あ～っ、バカ！　気を抜くな！　早く倒せ！」

和子ちゃんの罵声と大袈裟な身振り手振りで、軍旗から競技の棒倒しの方に意識が行った。いつの間にか赤組と青組の勝負が始まっていたらしく、今にも赤組の棒は倒れそうだった。しかしその赤組の棒を守っていた一人の男子が飛び出す。全身に闘志に燃やしているその赤い鷹……いや、どちらかというと猿は防御隊から攻撃隊に勝手に移ったようだ。人数合わせの為に青組の棒に助っ人として参加している先生方、青組の生徒を思いっきり踏み台にして青組の棒に飛びかかり、上から踏みつけて倒してしまった。その塊の横で、呑気に指をさしながら爆笑している桂龍太郎。

瞬く間に形勢が逆転し、あっけなく試合が終了した。競技終了の合図が鳴り、盛り上がる赤組の生徒たち。青組を応援していた筈なのに万歳三唱する和子ちゃんに、私と貴子は顔を見合わせて微笑み

合った。

『参加してくださった先生方、ありがとうございました！　これで二年男子の競技・棒倒しを終了します、二年男子退場します！　次は三年女子の競技による四人五脚です。二年女子は入場門の方へ集合……』

アナウンスと共に音楽が流れ、二年男子はトラックを一周するために走り出した。ますます黄色い声を上げる二年女子の皆様。二年の赤組隊長的な尾島が赤組（ホーム）の傍にくると、三年男子から身体や頭を叩かれたり、原口たち女子の手に「バチン！」とアイドルさながらタッチをしていた。

「……ったくさぁ。あ～ゆ～ことするから、あの尾島（オトコ）は調子に乗るっていうんだよ！」

和子ちゃんの呆れながら言ったセリフに私も大賛成だった。女子と呑気にタッチングしている猿のデレッとした締まりのない顔が無性に腹立たしくて、尾島がこちら（かどうかわからないが）を見て「どやっ！」顔をしたときには、思わず「だ・か・らぁっ？　フンっ！」と勢いよく明後日の方を見てしまった。大体アンタ一人の力じゃないし！　と心の中でブーブー悪態ついていると、隣の貴子が急にぷっと噴き出した。

「ちょっとぉ、貴子、どうしたの～？　急に笑い出しちゃってさぁ」

和子ちゃんがねぇねぇと貴子の身体を揺らしても、貴子は「なんでもな～い」を繰り返すだけで、顔をニヤけたままこちらに意味深な目配せをするだけ。私は貴子に自分の行動を見られたのが無性に恥ずかしくて、ソッポを向いたまま何となくソワソワしてると、青

組の最後尾でダラダラ走りながらもこっちに顔を向けている金髪男と目があった。

桂龍太郎（デ●ルマン）が向けている目線は、完璧なまでに私（ターゲット）をロックオンしており、今にも熱光線（デビルビーム）を発射するほどの勢い。ていうか、出ている。どうやら私の行動と考えは、抜群な透視力（デビルアイ）によって完全に筒抜けのようで、相当お怒りの御様子。

『……おらぁ、ボイン！　なに思いっ切り無視してブーブー悪態ついとるんじゃいっ?!　普通にせいゆーとるのに、あんときの約束、よもや忘れたとは言わんじゃろうのうっ?!』

『!!』

（あばばばば……!）

あまりの迫力に私の脳内ではエセ広島弁をかます、デ●ルマン。心なしかオーケストラの前奏が素晴らしい「デ●ルマン」のオープニングが迫るように聞こえてくる始末！　その緊張感はさながら「ジョーズ」並みだ。いますぐ速攻あの金髪男の名前も、一昨日あの部室であった事も一切合財忘れてしまいたい衝動に駆られた。

「……ちょっと、貴子。猿の友人の桂龍太郎、こっち睨んでるよ？……なんか怖いんですけど」

「和子……あんな奴、怖くないわよ！　負けずに私たちも倍にして睨み返すのよ!!」

「え～そりゃヤバイよ、貴子～」

「……」

私は異常に反応する貴子の胸中を思い、一昨日のことがバレたら殺されるなと、彼女の陰に隠れながらハァと吐息を漏らした。

山野中体育祭！～吐息を漏らす少女・後編～（後書き）

山野中体育祭！～悪魔が迫りてミチビビる・前編～（前書き）

この話は過激な表現と発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

そして、「山野中体育祭！～吐息を漏らす少女・後編～」訂正箇所あります。詳しくは活動報告「訂正のお知らせ？」をご覧ください。

申し訳ありません。

山野中体育祭！～悪魔が迫りてミチビビる・前編～

「はぁ～」

ここは誰もいない二階のトイレの個室。やっと体育祭の熱気と桂龍太郎の視線から解放されて、ホッと息をついた。

二年女子による団体競技・「綱引き」参加のため、和子ちゃんや貴子は入場門のほうへ行ってしまった。男子が退場門のほうから応援席に帰ってくる前に、私も席を立ってフラフラと本部席のほうへ行くことにした。二年男子しかいない応援席に一人ポツンと座っているのはどうも落ち着かない。あの猿に何か言われるのも御免被りたいし。

なにか手伝う事がないかと生徒会の人たちに聞いてみたが、当のブキミちゃんは競技に参加のために不在、現会長の片岡君（ツルちゃん）や日下部先輩達に特に仕事はないよと言われたので（すでに私は生徒会の人たちにとって顔パスである）、自分の教室がある一番端の校舎のトイレに来てしまった。近くの校舎にすればよかったのだが、生理だったのでロッカーに押し込んだナプキンを取りに行くためだ。それに今は一人になりたかった。誰もいない校舎は怖いし、いつも使う一階のトイレは古いのか調子が悪く「使用禁止」になっていたが、逆にここまできて用を足す人はいないし、落ち着くにはもってこいだろう。

狭い個室の中でボケッと考えていた。「普通にしてろ」って一体どういう風にすればいいのだろう、と。そもそも私はこれが普通だ、と。そして、貴子は桂龍太郎の新しいカノジョの存在を知っているのだろうか、と。

そう。一昨日、あの日の放課後――。

私は、とんでもないところに出くわしてしまったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊

『……あ、私、先行くね？　……またね、龍君』

女生徒の赤く濡れて光った唇から漏れた言葉が、妙に生々しかった。

彼女の言葉に「おう」と気の抜けたように返しながら、セーラー服のスカーフを持ち主に渡した桂龍太郎。彼女はスカーフを受け取り、そそくさと直しながら足早に私の横を通り過ぎた。すれ違い様に香った彼女の制汗剤の香りと、タバコと男性用のコロンとが混じったような匂いがやけに鼻についた。女生徒は私の方を見向きもせずに教室を去り、あっという間に見えなくなった。

（え？　え？　え？）

疑問符を頭にたくさん浮かべた私は、彼女の後姿をボケーと見送りながら、いったい何分固まっていたのだろうか。

いまだに入口のところで足に根が張ったように突っ立っていると、桂龍太郎が少し伸びた金髪をくしゃりと掴んだ後、大きい溜息を吐いてこちらにズンズンと歩いてきた。その顔をはどうみても、

『大変長らくお待ちしておりました！　ネバーランドへようこそぉ！』

などと歓迎している永遠の少年・ピー●ーパンのような親しみとは程遠い。

それどころか「いますぐそのボインをピタパンのようにペシャンコにしてやるぜっ、夜露死苦！」という感じだ。いつものように、

非常にマズイ展開である。大人の味も知り尽くし、もはや少年ではない桂龍太郎は、この神聖な「英語英文タイプ部」で破廉恥な大人の行為をしようとしていたとことろをバッチリ見られた私に制裁を加えるため、今まさにこちらに向かって進行中！

あわわわ……と混乱しているうちに、この不良なピー●ーパンはとうとう私の目の前に立ちふさがり、むんずと腕を掴んでグイッと教室の中に入れて、ピシャンと戸を閉め鍵をかけた。彼は無情にも、「え、ちょ、ちょっと……」という私を無視して、ネバーランドではなく教室の奥へどんどん引っ張っていく。

（えぇっ？　なに？　なななんで教室の中に引っ張り込むの？　な、なんで鍵閉めるわけぇっ？！　……ままままっまさかっ、私にあの女子の身代りをしろとかっ？！）

思いっ切りパニクっている私を無視して、桂龍太郎は手を乱暴に放してジロリとこちらを睨んだ。

『おいっ！』

『ヒョェッ！』

『なぁ～んで、オメーはいつもいつもっ！』

『ごごごっご、めんなさいっ！　で、でもっ、かかか勘弁してくださいっ！　わ、私には心に決めたサ……違う！　きき金髪碧眼がいてっ！　……って、あわわわっ、な、なにもアナタ様がイヤというわけではないですよ？　……ホントはイヤ……ってウソ、独り言ですっ！　あ、ほら、だだ第一、私地味でドン臭いですしっ？　きき今日は下着が、その、ガガガガッチリタイプのスポーツブラで、上下ともバラバラでしてっ！　ごごご期待には添えないのではないのかとぉっ！　そっ、それにハジメテですので、面倒なこと極まりないですっ！　ハイ！　し、し、しかもっ、きょきょ今日は一日目でしてっ、そんな気分にはっ！』

『はぁ？』
『いいいいくらなんでも、酷過ぎますぅっ！』
『おい、ちょっと待て』
『ぜぜぜ是非他の方をあたって……って、あ、あれ？』
『何言ってんだ、ボインは』
『……あ、あら？』

桂龍太郎は強面だが、訳が分からんというような複雑極まりない顔をしていた。
（……アイヤ……もしかして、やっちまった……？）
もしかしてどころではない。桂龍太郎の表情を見る限りでは、私は完全に誤解をしていたようだ。自らとんでもない大胆な発言を口走ったオバカな自分が、あまりにもイタイ……。全身が一気に赤くなってくるのがわかった。穴があったら入りたいが、ここにあるのは机や椅子、タイプライターだけ。しかも、穴ではなくて「アナコンダ」みたいな男しかいない。
（……ここは笑って誤魔化すしかないだろ）
ハハハ～と乾いた笑いを漏らすと、桂龍太郎は大袈裟なため息を吐き、「なんか、激しく萎えちまった」と呟きながら天井を仰いだ。
眉頭を抑えながらいかにも「ひと仕事してお疲れ！」というサラリーマンのように指で揉んでいる。いや、実際は一仕事し損ねたのだが。
この様子だと、どうやら私の貞操は死守できそうだった。非常に喜ばしいことではあるが……積み重ねてきた女豹としての実績を、真っ向から否定されたような気がするのは何故であろう。
（……安心なんだか、失礼なんだか）
暫く眉間の皺をほぐしていた桂龍太郎は、頭をガリガリ掻きながらジロリとこちらを見下ろした。うぅ、フツーに怖い……。
『あのさぁ……オメー、ここに何しに来たワケ？　まさか、いつも

のように邪魔しにきんじゃねーだろーなっ？！』
『……邪魔……って、とととんでもないっ！　１００％偶然っ、ＳＯかもね！　ですっ！』
『……』
『っ！！　（しまったぁ！　ドン引き？！）』
『……あ～大体なぁ。学校中が体育祭の準備してるってゆーときに、狙ったかのようにこんなとこ来んじゃねぇよっ！　それにさぁ、確かボインはサポート委員ってやつだろーがっ？！』
『（スルーかよっ！）えぇっ？！　な、なんで知って……あ、いや、そ、それは……あの、足の怪我で、原口……さんと交代しまして……』
『あぁ？！　足の怪我で交代だぁ？！』
『ヒィッ！　あ、あの、けけけ決して私のせいではありません！　担任からの提案でしてっ、ハイッ！』
『……チッ、それも原因かよっ……』
『え？』

桂龍太郎はチラッとこちらを一瞥した後、「……つーかここまで鈍いのって、どーよ」とぼやきながら乱暴に椅子を引っ張り、ダルそうにドカリと座った。椅子の背もたれに両腕を掛けその上に顔を伏せている。強面の顔を見えないことをいいことに、私はホッと息をついてやっと冷静な気持ちが取り戻せた。シーンとした教室にカーテンが大きくはためく音がした拍子に、ここの教室に来た本来の目的を思い出した。その目的を果たすためには、桂龍太郎に出て行ってもらわないといけない。私は動かない桂龍太郎に向かって、努めて冷静に且つ穏便に、しかも控えめにその旨をきりだした。

山野中体育祭！～悪魔が迫りてミチビビる・前編～（後書き）

シブガキ隊の中で、誰のファンかという議論を友達としたことがあります。菩提樹はヤッくんファンでした。ちなみに「１００％…そうかもね！」よりも「ＺＯＫＫＯＮ命（ラブ）」の歌に痺れる菩提樹です。

山野中体育祭！～悪魔が迫りてミチビビる・中編～（前書き）

この話は過激な表現と発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

『あ、あの……ノックもせずに、戸を開けたのは……すみませんでした。決して邪魔するつもりはなくて……その、ご、ごめんなさい。こ、ここに来たのは、顧問にこの教室の戸締りを頼まれたからで……それで、悪いんですけど……ここの教室を閉めたいのですが……あの、オヤ……いえ、桂君？』

彼は私の呼びかけに少し顔をあげた。再び睨まれるかと思い身構えたが、彼は意外にも苦笑というか、「オマエ、ホントにアホだな」的な残念顔をしていた。睨まれずに済んだとホッとした半分、その憐れんだ顔がなんだかカチンとくる。俗にいうカンに触るってやつだ。こっちは低姿勢で謝っているというのに。

『な、なにか？』

『クク……別にぃ。……やっぱ「ハジメテで面倒極まりない」んじゃん。おかしいと思ったんだよな～ボインがあの東って奴と？　ハッ！　ナイナイ！　大体色気のイの字も出てねぇもんよ！　完全にアイツの考えすぎだな』

『え？』

『ああわりぃ、こっちの話。ま、心配すんな。オレは丈一朗と違ってボインに手を出すほど飢えてねぇから。つーより、わりぃけどオマエは完全守備範囲外。だからボインがご期待に添えない下着を身に着けよーが？　処女で面倒極まりないだろうが？　生理一日目だろうが、興味ねぇのよ。まぁ、自ら告白したその度胸に免じて、クク……こ、今回は特別に聞かなかったことにしてやんよ？』

『……』

完全に誤解していた私の言動を蒸し返され、さらに顔を赤くした

まま横一文字に口を閉じてしまった。思いっ切り忘れてくれていいのに、なんでこの破廉恥男はしっかり覚えているのだろう。数分前に戻れるなら、余計なことを捲し立てる自分に確実にドロップキックを決めたいところだ。いや、その前に教室のドアを開けずそのままスルーしろと言うべきか。

桂龍太郎は完全に身体を起して「ギャッハッハ～！」とひとしきり爆笑した後、背もたれに片手で頬杖をつきながら、私を見上げた。

男の顔からは既にスマイルという文字はきれいさっぱりなくなっており、いつもの強面顔だ。この男は３６５日年中無休で怖い顔だが、なぜか輪を掛けたように恐怖度が漲っている。その三白眼から放たれるギラッとした視線が、いやに真剣みを帯びているからなのか。ギクリとしながらも、よくこの男とチッスできた貴子や、それ以上のことをした晴美先輩、教室から走り去った女子に賞賛を送った。どこをどうしたらこの男とそういう雰囲気になれるのだろう？

一体この男は女子と一緒にいるときどんな言葉を吐くのだろうか？　……などと不埒なことを考えてしまった。

『……それよりさ。先月の祭りの時の尾島（ケースケ）と丈一朗（スケコマシ）の喧嘩に、ボインが関わってるんだって？』

桂龍太郎が眼光をさらに強めながら言った言葉は、私の不埒な考えを綺麗に吹き飛ばした。

暫く二人とも固まっていたが、その緊張を切り裂くように、カーテンが私と彼の間を遮るように大きく揺れた。パタパタとはためくカーテンが鬱陶しいのか、桂龍太郎はチッと舌打ちしながら乱暴に振り払った。私はその音で我に返り、彼から無理矢理視線を逸らして逃げるように開いたままの窓を閉めに行った。ドクドクと逸る心臓を片手で抑え、ゆっくりと窓を閉める。完全に閉まると急に教室の中はシーンとなった。僅かに応援合戦の音楽が窓越しに聞こえて

きたが、窓が開いた時よりも妙にリアルだ。
何も言わないまま窓際に佇んでいる私に痺れを切らしたのか、桂龍太郎は再びため息をついて、「ま、んなこたぁ、どうでもいいか」と呟いた。

『オマエ、そんときのこと誰にも言ってねぇだろうな？』
『……』

彼の問いにはすぐ答えられなかった。頭の中が真っ白になってしまい、適切な言葉が思い浮かばなかったから。しばらくカーテンを握りながら「なんて答えたらいいんだろう」と焦り、「もう貴子に話しちゃったよ」と桂龍太郎に言ったらどういう反応を示すかと震えていたら、ふと重要なことがポッと頭に浮かんだ。
そういえば――どうして桂龍太郎は、尾島と伴丈一朗が喧嘩したことを知っているのだろうか。確かブキミちゃんがあの場にいた全員に口止めした筈なのに。
でも、出所はなんとなく予想がついた。おそらく尾島や小関明日香に違いない、桂龍太郎は彼らの尤も親しい幼馴染、だから気軽に話したのだろう。どこからか事実が漏れるかもしれないのに、そんな気軽に話して……と思ったが、それは私も人のこと言えた義理ではなかった。実際に貴子に話してしまったのだから。でも、例えブキミちゃんの許可が出たとはいえ、こんな大事なことを人に話してしまった罪が多少なりとも軽減された気がした。
私が頭の中で思考を巡らせていたら、桂龍太郎は黙り込んでいる私に苛立ったのか、いきなり汚い上履きを履いた足で近くの机を乱暴に蹴り上げ、大声で怒鳴りつけてきた。

『おい、ボイン！　聞いてんのかよっ！』
『ヒィッ！』
『まさかっ、本当にペラペラと喋ってねぇだろうなっ？！』

『まままさかっ！　そ、そんなこと……言って……ません……』

完全にビビってはいたが、そこはきちんと否定しておいた。

（だって、言えるわけないでしょうーがっ！）

おそらくコイツらの悪口を堂々とペラペラ言えるチャレンジャーは、ブキミちゃんや伴丈一朗（チリチリ）だけだろう。第一こんな不良がバックについている尾島達を敵に回して、何の得になるというのだ。それこそ百害あって一利なしだ。その証拠にケンカの件で尾島が学校に呼び出された気配はないし、ケンカの噂だって立ってないではないか。シニアのグラウンドが移ったという話も聞いてない。大体貴子に話すのも時間が掛かったというのに。

私はそっとカーテンを離し、意を決して桂龍太郎の方を振り向いた。

『あ、あの……本当に言ってません。こっこここれからも、もちろん言いませんっ！　……あ、あ、あの祭りの日のことは、も、もう忘れたので……だから……』

あなた達もこれ以上私に関わらないで欲しい、とまでは怖くて言えなかった。でもそれっぽい真意は伝わったと思う。何様だ、とか言われそうだが。とりあえず、「このお話はどうかこれで終わりにしてくだせぇ、ゲヘヘ」という手もみニュアンスの視線を送って頭を下げれば、桂龍太郎はひどく真面目くさった表情をしていた。いつもの強面ではなく、いや、もともと怖いのだが、呆れているわけでもなく、嘲笑しているでもなく……僅かだがきまり悪そうな顔だった。

『……なら、別にいいんだけどよ。まぁ、尾島（ケースケ）がキレたのがわりぃんだし……けどな？　もし喧嘩の件がどこからか漏れて、その原因がボインだったら、女でも容赦しねぇ。だからさっきの言葉、絶対

守り通せ。いいな?』

最後にギラッと睨まれ、私は慌てて頷いた。桂龍太郎は確実に口止めをできたことに安心したのか、軽く吐息をつくその仕草に思わずムッとしてしまった。

(……別にそこまで念を押さなくてもいいじゃない。私ってそんなに口軽く見えるわけ?)

しかも私は完全に巻き込まれた被害者だ。そこまで言われる筋合いはない、と思う。

非常に心外で、さっさとこの不機嫌極まりない状況から解放されたかった。話が終われば二人ともここにいる必要はない。逆にこの場面を誰かに見られ、再びあらぬ誤解を生まれたらたまったものではない。桂龍太郎にとっととこの教室から出て行ってもらいたくて、教室内の全部のカーテンをわざとらしく丁寧に閉めた。

山野中体育祭！～悪魔が迫りてミチビビる・後編～（前書き）

この話は過激な表現と発言が出てきます。ＰＧ１２指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

『あ～、ボインさぁ』
『……なにか？』

（結構しつこいな……それにいい加減ボイン呼ばわりはやめて欲しいんですけど）
心の叫びは人それぞれ自由。聞こえないことをいいことに思いっ切り悪態ついた後、まだ話すのかとひそかに舌打ちをしながら、表面的には大人しく先を促した。しかし持っていた鍵をわざわざポケットから出して意図的に手の中でガチャリと鳴らし、「さっさと出ていけ」アピールだけは忘れない。桂龍太郎はそんなわたしの行動を知ってか知らずか、華麗に無視するようにボンヤリとした顔で教室の入り口の方に顔を向けていた。

『や、尾島（ケースケ）を無視すんのはわかんだけどさ。……なんで星野（カズ）まで無視する……って、ま、こりゃどうでもいいか。それより星野（カズ）の噂、誰かから聞いたのか？　丈一朗（スケコマシ）の奴、ボインに何か言ったのか？』
『は？』

少しずつ眉根を寄せて声を低くする桂龍太郎に、私は今度こそ訳がわからないという顔をした。
（星野君を無視？　何だそれ？）
この男は一体何を言っているのだろう。何故ここで星野君の名前が出てくるのか。確かに尾島は意図的に無視していた。それは目の前の男も認めているし、当然……だと思ってる。だって奴隷呼ばわりされた挙句、階段から突き落とされたのに、一言も謝りもしない奴にホイホイ愛想振り撒くバカがどこにいるというのだ。たとえ謝る隙を与えなかったとはいえ、その気になればいくらでも出来る筈

だ。けど星野君は……無視されているのはどちらかというと、私の方だった。星野君とは始業式始まってから目も合わせてない。席が前になってもだ。「あの祭りの時のこと」を不用意に口に出さないためか、雄臣の言葉に怒ったのか、どちらにしてもお互いの為に良くないと思った結果の行動に違いない。

（それに噂？　伴丈一朗（チリチリ）が私に何か言ったのかって、何を？）

何故この男に責められるような事を言われなければならないのだろう。それこそ「筋違い」じゃないだろうか。

『……べ、別に無視なんて、してませんけど……。それに、噂……って？』

こちらも恐る恐るだが負けずに眉根を寄せれば、桂龍太郎は私の顔をたっぷり時間を掛けて眺めた後、「聞いてなきゃ、いいんだ」と言いながらやっと立ち上がってくれた。

星野君の噂ってなんだろうと気になったが、それよりもこれで教室を閉められるとホッとした私は、足で乱暴に椅子を戻そうとする彼に「あ、やります！」と積極的に雑用を引き受けた。そんな気を遣わなくていいから、早く出て行って欲しい。できればこの日を境に、いや、未来永劫縁が切れても構いやしませんぜ、オヤビン！

『まぁ、アイツあれでも反省してんだよ、結構応えてんだぜ？　せめて普通の態度で接してやれや』

『え……？』

『機嫌悪くなるとホント手が付けられねぇからなぁ……普段調子イイ分、一回落ちると性質が悪いんだよ。クソっ！　いいか？　ともかくなんでもいいから普通にしてろ、わかったな？！　そんで「まるやき」が平和を保てる……ってなんだよ、そりゃ？　ボインのせいでウチが被害被るってどういうこった？！　マジ面倒ったらありゃしねぇ』

『は、はぁ……』

桂龍太郎は欠伸をした後、う～んと伸びをして首をコキコキ鳴らし始めた。私は彼の言葉の意味がイマイチ掴めず、ここは適当にごまかそうと生返事をした。が、次の言葉を聞いたときには、思わずこの男を窓から突き落として、「火曜サス●ンス劇場」の犯人役を自ら体験するところだった。犯行現場が崖じゃないのが口惜しいわい！

『ほら、そのマズイ愛想笑いしろなんて贅沢言わねぇから、せめて地味で鈍臭い態度で構わない……ってそりゃいつもかっ！　ブハッ！　ククク……いやぁ、ボイン、なんかヤベェんじゃねぇの？　この分だとオメー、一生処女だぜ？』

『……（アンタのような男を相手にするくらいなら、一生処女で構わんわっ！）』

『ヒャハハハ！　あ～悪いこたぁ言わねぇ。心に決めた金髪碧眼なんてあきらめろ？　それこそ処女喪失より確立低いぜ？　ここは言い寄ってくれる男で手を打っとけ？　ま、そんな奇特な男、いるわけねぇかっ！　……って、ヤベ。いたよ、身近に。いや、でもまさかマジでこのボインと？　アイツとコイツが××（チョメチョメ）……ブハァ！！　ヤベェ、超ウケるなっ！　ギャッハッハ～！』

『……（くそぉ～絶対極上金髪碧眼と結婚して、「ジャストメリィド（新婚ホヤホヤ）」の缶カラつけたオープンカーでこの町を凱旋パレードしたるわいっ！　腰抜かすんじゃねーぞ！）』

『あぁっ？　なんか言ったか？！』

『いえ！　なにも！　今日もお勤め、ご苦労さんですっ！』

『……』

桂龍太郎はフンと鼻で嗤った後、呑気に口笛を吹きながら教室の扉までゆっくり歩いて行った。とりあえず、

（みてろよ……いずれ女豹のゴールド免許を見せびらかしながら、「ハイヒールでグリグリ&お舐めっ！」の刑にしてやる！　首洗って待ってろやっ！）

……と、デビ●マン（の背中）に思う存分女豹としての宣戦布告も通達したので、一応気は済んだ。ふ～やっとこれで教室を閉められるし。でもこの男と教室を出るタイミングを一緒にするなんて冗談じゃないと、用もないのに机と椅子を整えたり、タイプライターを少し動かしたり、部活で使うラジカセを違う場所に移動したりとやり過ごす荒井美千子。そのうち派手に扉が閉まる音が聞こえ、今度こそこの教室には私一人きりになり、脱力したのだった。

＊＊＊＊＊＊

（このこと貴子が知ったら、怒るかな？　……いや、悲しむよね……）

桂龍太郎と二人っきりになったことを知ったら、前科があるだけに今度こそ絶交だろうか。いや、その前にもっと重要なことがある。

（問題は、桂龍太郎と一緒にいた女生徒との関係のほうだよね……）

今のところ、あの女生徒と桂龍太郎との噂は立っていない。そんな大ニュース、奥住さんが見逃す筈ないからだ。一昨日、英英部の部室から走り去った女生徒、彼女はおそらく三年生だ。一年生ならネームをつけている筈だし、二年生にあんな顔の人はいなかった。よくよく考えれば、あの顔は何回か見たことがることに気付いた。小関明日香や彼女の先輩である、女バス部長の飯塚さんとよくいる人だ。女バスの三年だろう。どうやらデビ●マンは年上がお好みらしい。……まったくもってイヤラしいっ！

（いやいや、そんなことより……ともかく！　私は何も見ていない。

そう、見ていない！　一昨日英英部には行かなかった！）

　無理矢理自分に暗示をかけ、ハハハと空笑いした。そうだ、何もかも忘れてしまえ！

（あら？　忘れるって、何を？　……そうそう、荒井美千子、その調子だぞ！）

　自分の中でしっかり解決させて安心した後、個室を出て手を洗っていると、誰もいないトイレに音楽と生徒のアナウンスがわずかに聞こえた。どうやら二年生女子の競技である綱引きが終了し、退場するようだ。次の競技である一年女子の大縄跳びと三年男子の入場門集合もアナウンスされている。

（そろそろ戻るか。三年男子の騎馬戦も見たいし。ていうか、雄臣絶対見てたかチェック入れてくるよね……）

　ハンカチで手を拭いながらトイレから出て階段から降りようとすると、階下から走る音が聞こえ、ギクリと立ち止まった。こんなところに何故生徒が？　……と恐る恐る顔を出して覗けば、赤いラインの体操着を着た生徒達がバタバタと昇降口に向かっていくところだった。

「なんか……上で音しなかったか？」

「マジかよ？！」

「いいから！　集合かかってるし、いくぞ！」

（……あれ？　あの人、達……あぁ、一階のトイレに行ってた……のかな？　でも使用禁止だし。あ、だからか）

　おそらく使用禁止になっていたから慌てて他の校舎のトイレへ行ったのだろう。

　私は何も疑いもせず、すぐにそのことを忘れた。再び貴子のこと

を思いながら、沈んだ気持ちで階段を降り始めたていた。

――数時間後、私はこの校舎に来たことを後悔することになる。今見た光景のせいで、とんでもない事件に巻き込まれるなんて……どうすれば、この時の私に想像できただろう？

山野中体育祭！～狙われた学ラン？～

「……ちょっと、ねぇ？」
「どうなってんの？」
「なんかマズイんじゃね？」
「先生（チンタオ）に言った方が……」

ボロい校舎の中にある、１組の教室は騒然としていた。
午前中のプログラムがすべて終了し、生徒達はお昼を取るため各教室に戻った。競技の興奮を残しつつ和気あいあいとお弁当を食べている筈が、現在この１組の生徒はお弁当をつまむどころか、和やかな雰囲気とは程遠い不穏な空気に包まれているのだ。

「その事実」が判明したのは、つい先ほどのことだ。

最初に気付いたのは、午後一で行われる応援合戦に参加する奥住さんで。同じクラスの男子から拝借した、学ランの背中に貼ってある「闘魂」という文字が剥がれてないか最終チェックを入れるため、全員分の学ランを一まとめにしてある段ボールをとろうとしたが、指定の場所にないことに気付いたところから始まった。朝、教室を出るまでは、確かに段ボールは教室の後ろにある茶色のボロいロッカーの上に無造作に置かれていた。しかし、奥住さんがロッカーの上を見たときには、埃以外なにもなかった。不思議に思った奥住さんは、同じ応援合戦のメンバーであるもう一人の女子に段ボールのありかを聞いた。

『ねぇ、学ランが入った段ボール見なかった？』
『え？　見てないよ？　ロッカーの上じゃないの？』

その女子はロッカーの上を目配せしたが、あるはずのところにないので、驚いた声で「あれ？　確かに朝までは……」と焦った様子で周囲を見渡した。教室内をぐるりと見回しても、それらしきものは見当たらない。奥住さん達は急いで呑気に弁当広げている尾島達男子のところへ確認しに行った。もしかしたら、応援合戦に出る残りの男子三人、尾島、諏訪君、田宮君が既に学ランを段ボールから出しているかもしれないと思ったからだ。が、奥住さんが学ランの行方を聞くと、尾島は眉根を寄せた。何を言ってるんだ、と。

『……え？　尾島達が持ってるんじゃないの？　じゃぁ、なんで……』

『んなの、知るかよ！　学ランはロッカーの上に置いてあるだ、ろ……』

尾島を囲んでいる男子と奥住さんはロッカーの方を見たが、当然そこには何もない。そこで初めて、非常事態だと気付いた応援合戦のメンバーは青くなり、尾島は乱暴に席を立ち上がって「学ランを探せ！」と大声あげながら教室中を探し始めた。その様子に他の生徒達もお昼を中断し、何となく自分のカバンの中や机の中、ロッカーを見た。しかし、五人分の学ランを入れるスペースなどそうそうあるわけがない。　一番怪しい掃除用具入れや教卓の下にもないとわかると、奥住さんが慌てて隣のクラスに出向いて、和子ちゃんに「1組の応援団用の学ランが紛れ込んでないか」と聞きに行った。しかし、答えは「否」。いよいよ本格的に学ランがなくなった……いや、盗まれたことがクラス中に浸透すると、生徒達に緊張が走り、冒頭に至るのである。

＊＊＊

「くそっ……どこのどいつだよ、こんなふざけたことすんのはっ！！」

尾島がたれ目と形のいい眉毛を吊り上げながら、教卓を思いっ切り蹴り上げる音が教室中に響いた。

その音と尾島の迫力に全員竦み上がり、息をする音さえも許されないような空気が張りつめた。私は教卓を中心に集まっているクラスメート達の後方から、この只ならぬ雰囲気を見守っていた。隣にいる光岡さんにそっと視線を送れば、「ヤバイよね……」という顔をしている。

そう、本当にヤバイ。

結局あれから学ランを探し回ったが、1組にも隣の2組にも、ボロ校舎のトイレや焼却炉まで確認したがどこにも見当たらなかった。探している間にも時間はどんどん過ぎていき、昼休み残り十数分の時点で、「学ランが盗まれた」ということが1組の生徒達にとってほぼ決定事項となっていた。

だが、私を含め大半の生徒は、心のどこかでそんなバカなと思っていたと思う。このクラスから学ランを盗むなんて、ありえないことだからだ。だって、1組の応援団のメンバーの中に、学年、いや学校一厄介な「尾島」がいることを知らない生徒は、おそらくこの学校にはいないだろう。それに、こんな無謀なことして見つかったら、ただでは済まないこともわかっている筈だ。

（それにしても犯人凄いな、よほど度胸があるんだなぁ。でも……いくらなんでも、これは卑怯じゃない？　しかも全員分の学ランを持っていくことはないよね？）

悪いが既に私の中では、原因は「尾島」を狙った犯行だろうと決めつけていた。こんなこと気まぐれでやる人はいないだろうから、犯人は相当恨みを抱えているに違いない。でも尾島が憎いからってこれはいただけない。

私は苦労して「闘魂」の文字を貼った努力が泡になったことと、

尾島が受けた……いや、奥住さん達が受けた被害に対して怒りが湧いてきた。

（……いやいや、そんな場合じゃないよね？　この際学ランが見付からないことを前提に対策を考えたほうがよくない？　予備の学ラン……持っている人なんていないわけないか……。あ！　もしかして、学校側にいくつかあるんじゃないの？　没収した学ランとか……先生に事情を話して貸してもらえばいいじゃん！　やっぱ一昨日念のために「闘魂」のテープを余分に作っておいて良かったぁ～グッジョブ、私！　三つあるから今から残りの二つを直ぐに作成して手分けして貼れば！）

頭の中で思いついた名案を尾島に！　……いや、非常に怖いのでやめておこう。こういう時こそ、学級委員に伝えようとブキミちゃん！　……は生徒会の人達とお昼していて不在なので、佐藤君に相談するかと近寄ろうとしたら、その行動を完全にフリーズさせる言葉が尾島の口から発せられた。

「おい……今日体育祭始まってから昼までに、この教室、いや、この校舎に来た奴いるか？！」

尾島はギラギラと光らせた目で教室の生徒をねめつけた。

彼の一言にクラスメートはお互い顔を見合わせ、「え？　来てないよね？」とか「いや、ここ応援席から遠いしよ……」と確認し合った。いかにも「オレ、私は犯人じゃないよ」というニュアンスを含んでおり、犯人扱いされるなんて冗談じゃないというのが見え見えだった。

尾島の言葉に固まった私は、名案を進言する余裕も消え失せていた。それどころか、クラスメートや尾島の姿を見れなくて、黙ったまま俯いた。……僅かに震えながら。

「やめろ、尾島！　今は犯人捜しをしている場合じゃないだろっ？」
「ちげーよっ、カッコ！　そうじゃねぇよ！」
「カッコじゃない！　……あ、いや、ともかく！！　もう時間がないから応援合戦に出る尾島達は先に食えよ？　幸いにも赤組の応援合戦は最後だし、それまで多少時間があるだろ？　その間に他の連中は手分けして学ランを探すんだ。色別対抗リレーの選手以外はもう出番がないから、昼飯は交代で食えばいい。みんなそれでもいいよな？　それと、担任に報告……」

尾島の物騒な質問を遮ったのは佐藤君だった。彼の顔は強張っていたけども、学級委員らしく冷静な声でテキパキと生徒達に支持を出している。なんとなく話題が逸れたので私は少しホッとし、今度こそ思い浮かんだアイデアを言ってみようと佐藤君に近付こうとしたら、尾島の横にいたある女子と視線があってしまった。

（……え……な、なに？）

尾島の横には、そこが自分の指定場所かのように原口美恵がいた。

彼女は険しい顔で私を睨みながら、険を含んだ声で「ちょっと待って、佐藤！」と遮った。１組の生徒達は突然の制止に、彼女に括目する。なにか事件を解決する突破口や情報を掴んでいるのでは？　という期待を寄せる視線が原口美恵に集中した。

私は急激に自分の体が冷えていくのがわかった。
第六感がエマージェンシーの警告音を頭の中でワンワン響かせる。しかし、どうすることもできず……私を凝視している原口美恵から目を逸らせず、小刻みに震え出す身体。

原口美恵の妙に通る声が、１組の教室に静かに響いた。

「……荒井。午前中さぁ、この教室に戻ってきてたでしょ？　それってなんで？　その時には学ランが入った段ボール、ロッカーにあった？」

予想を違えず、彼女の口から出た言葉は、事件を解決させる魔法の言葉ではなく、地獄に突き落とす呪いの言葉であった。

『……荒井。午前中さぁ、この教室に戻ってきてたでしょ？　それってなんで？　その時には学ランが入った段ボール、ロッカーにあったの？』

原口にそう言われた時、私は鈍器で頭を殴られたような衝撃を受け、目の前が真っ暗になった。全身を覆っていた震えは、機能がすべて麻痺したように止まり……まるで自分が銅像になったかのようだ。

しかし、それは私だけではなく、クラス全員がそうだった。

私に集中する生徒たちの無数の目。ご丁寧にも私は一番後ろにいたので、全員分の視線を受けている。しかも、その目はどう見ても親しみのこもった目ではない。まるで犯人を見るような、疑いの目。

ゆっくりと視線を彷徨わせ、最後に焦点を合わせた、そこには――。

原口の隣にいる尾島と目が合った。ヤツは私の顔を恐ろしいほど無表情な顔で見ていた。何を考えているのかまったく読めない。が、少なくとも私のことを信じている顔には見えなかった。

（うそ……お、尾島も私を疑うの？　私が盗んだと思ってるの？　私が気に入らないから？　ムカつくから？　無視してたから？）

私はこの降って沸いた最悪の事態と尾島の顔に、次々と湧き上がる悲観的な……いや、積み重ねられた尾島と私の最悪な関係の事実に、どうしようもないほど打ちのめされていた。

――尾島に犯人と疑われた。

治まった震えが堰を切ったように溢れ、全身へとなだれ込む。咽喉の奥に襲う、ギュウと捻じれるような痛み。ダメ、落ち着け、私は何もしていないと自分を励ましても、どんどん押し寄せる恐怖感と絶望感。そして、熱くなる目頭。

（……どうして？　なんで私がこんなこと言われないといけないの？　なんで尾島に疑われなきゃならないの？）

もう限界だった。

自分の感情を抑えるのが精一杯で、顔面蒼白のまま俯くことしかできなかった。

私の行動が余計に疑惑を深めたのか、徐々にざわめく生徒達。ヒソヒソ声の中には「え？　犯人って荒井なの？」という声まで出てくる始末だ。

（違う……私、そんなことしない！）

教室内の空気に押しつぶされる前に、今すぐにでも逃げ出したかった。でも、足が鉛のように重たくて全然動いてくれない。

（なんでよ……もうやだ……なんでこんなことばっかり……）

『トイレに行っただけ』

たったその一言が言えないなんて――。

（……言えば、わざわざこの校舎のトイレに来た理由を答えなきゃならない……尾島の前で生理用のナプキンを取りに来たなんて！　そんなの言えないよ！！）

その時、心の中にもやっとしたものを感じた。

（あ、あれ？　……この校舎のト……イレ……？　……え？）

ずっとずっと奥の方をチクリ刺す、違和感。

「……ちょっと、荒井！　それ本当なの？　本当なら、なんでこの校舎に戻ってきたのよ！」

「アンタが犯人じゃないの」という原口美恵の失礼な意見に、今度は成田耀子が追い打ちを掛けるように責める口調で詰った。既に犯人が私だというのが決定事項のような言い草。

「っ？！　……え、あ……ち、ちがうっ……！　私じゃっ」

成田耀子の言葉に弾かれたように頭を上げて、慌てて言い返した……が。

（私じゃない！　でも……そんなことより、もっと大事な――）

得体の知れない何かが心に引っ掛かっていた。まるでところどころ空いているパズルのピースがなかなか嵌らない感覚と同じ……。

（もう少しでわかりそうだったのに！）

咄嗟に言い返した自分の言葉のせいで、出掛っていた答えが有耶

無耶になってしまった。「黙ってて！」と文句言いたいところをグッと抑え、私は頭の中で午前中の自分の行動をもう一度プレイバックさせてみた。おかげで恐怖とか絶望とか涙どころではなく、自分の記憶に集中したくて、目を瞑り両手を合わせるように鼻と口を覆う。

私の一連の動作に生徒がざわめき出したが、それには構ってられなかった。

（……たぶん、私はとても重要なことを見落としている！）

「あ、荒井ちゃん！　……ちょっとぉっ、成田！　その言い方はいくらなんでも酷いんじゃないのっ？！　それに原口も原口だよ！　大体なんでアンタが、この校舎に荒井ちゃんが来たことを知ってるのよ？！」

成田耀子の厳しい問い詰めの口調にカチンと来たのか、私の行動を見て泣いてるように見えたのか、奥住さんが慌てて助け船を出してくれた。なかなか的を得た切り返しに、私も思考にダイブしている頭の隅で唸り声をあげた。そう、何故私がこの校舎に来たことを原口が知っているのか、それも大いに疑問とするところだぞ！

原口は痛いところをつかれたのだろう。一瞬顔を強張らせたが、すぐに体制を整え、奥住さんに噛みついた。

「だ、だって、2組の宇井と貴……笹谷に、このボロ校舎に行ってたみたいな内容、荒井が話してたの偶然聞いたんだもん！　……それに、『トイレ』ならわざわざこんな端の校舎まで来ることないでしょ？　だったらおかしいじゃん！」

『トイレ』ナラワザワザコンナ端ノ校舎マデ来ルコトナイ――

そう……そうなのだ。トイレならわざわざこんなところに来る方がおかしい。私はたまたま教室に取りにくるものがあって……。

「で、でもさ！　それこそおかしくない？　例え荒井ちゃんが本当にこのボロ校舎に来てたとしてもよ？　仮に本当に学ランを隠した犯人だとしても、わざわざこの校舎に来たことを宇井と笹谷に言うかな？　こういう時は、違う校舎に行ってたって言うんじゃない？」

自ら疑われるような言動、普通しないよね？」

「そうだよっ、光岡の言うとおり、おかしいじゃん！　もし私が犯人だったら、そんなヘマはしないわね！　それにさぁ、そもそもあの学ランだけど。背中のテープを貼る作業、誰かさん達に押し付けられて苦労して貼ってたの、一体何処の誰よっ！　荒井ちゃんだよ？　もし荒井ちゃんが応援団の学ランを隠す度胸があるなら、アンタ達に仕事を押し付けられた時点でキッパリ断ってるとおもうけどっ！　大体私も応援合戦のメンバーになってんのよ、荒井ちゃんが友達にそんなことする訳ないでしょ！」

パァァァァツー！！

奥住さんの熱いセリフに（何か引っ掛かりがあるのはこの際置いといて）、二人の「マイフレンド・フォーエバー！」な友情に、荒井美千子はリオのカーニバル並みに激しくハイな状態になった！

信じる者は救われる！
天網恢恢疎にして漏らさず！

神様、雷様、ありがとう！　本当にありがとう！
ダチッて最高！　オマエらに死ぬまでキメるぜ、コモエスタァー（元気ですかぁー）！！

私は感激のあまり、「どんだけ荒井美千子がＹＯＵ達の友情に感動したか」というパッションを即興で意味不明なポエムにしてしまった。このナマモノ的でホットなエモーションを、すぐにでも奥住さんと光岡さんに贈呈したいところだが、あいにく事態は深刻を極め、刻一刻を争う事態。この場で披露できないことが本当に残念でならない！
……まぁ、奥住さんにしてみれば、「貴方に捧ぐ愛の詩（うた）！」なんかより、「あっと驚く噂ネタ☆」のほうがより彼女のパッションに響くだろうが。

「……だ、だけど……じゃ、なんで荒井はこの校舎に来たのよ？　だって、一階のトイレ「使用禁止」だし！　ていうか、私、なにも荒井が犯人って言ってないじゃん！　ここに来たなら、なにか見なかったのかなぁ～と思ってさ……」

ナニカ見ナカッタノカナァ～ト思ッテサ――

そうなのだ。
なんで私はこの校舎来たのだろう？　――取りに来るものがあったからだ。
一階のトイレは「使用禁止」だったのに？　――だから二階のトイレを使ったんじゃん。
あの時、何か見なかったのか？　――なにか……私はあの時、何

を見た？

（……あの時、私が二階から……見たものは？）

この校舎のトイレではなく、違うところの校舎のトイレへ行くため昇降口へ走り去る――

その時、突然ガタンと建付けの悪い扉が乱暴に開いた。
全員扉を振り返ると、そこには殺気立っているブキミちゃんが仁王立ちしていた。「面倒を持ち込みやがって、このアホどもがぁ！」というように、メガネも歯列矯正の歯もオカッパ天使の輪もギラリと光らせながら。
その後ろには、今まで学ランを探し回っていたのだろう、息の荒い星野君が立っていた。

「……ちょっと、皆さん、こんなところで何をやっているのですか！　今は犯人などどうでもいいでしょ！　そんなくだらないことしたって何も解決などしません！　他の人はさっさとお昼を済ませなさい！　佐藤君はどこですか？！」

メガネをクイっと上げ、低いハスキーボイスでがなりたてながらズカズカと教卓に近付くブキミちゃん。その迫力と言ったら相当なものだったが、その足を止めたのは彼女よりも殺気立っていた男。真っ赤な顔で「ドォン！」と黒板を思いっきり拳で叩いた尾島だった。

「うるせぇ……うるせぇよっ！　くだらねぇことじゃねぇんだよっ

！　れっきとした盗難だっつーの！　それに、オレはこの中に犯人がいるってぇ意味で言ったんじゃねぇっ！　１組以外のヤツがこの教室に入るなんてありえねぇ、ましてや、１、２組以外の連中がこの校舎にくることはまずねぇんだよっ！　だから他の連中がいるのを見かけた奴がいるかって意味で聞いたんだよっ！　そいつらを締め上げりゃぁ、すぐにでもわかんだろーがぁっ！！　……大体なぁ、１組……つーより、このチュウが、んなことできるわけねぇだろっ！！」

（……え？）

尾島の叫び声に、私は反射的に顔を上げ目を見開いた。私は未だに顔に手を当てたまま唖然と尾島を見た。

（……う、うそ……し、信じてくれた……？）

尾島はブキミちゃんに怒鳴った後、ギッとまっすぐ私を見た。

（え？　えぇぇっ？！）

ザワっと鼓動が跳ね上がった。

尾島はその勢いのまま、クラスメートをかき分け勢いよくこっちに歩いてきた。その光景は、一昨日の桂龍太郎の放課後の一件を思わせたが、不思議と怖いとは思っても、嫌だとは感じなかった。私の目の前で止まり、その勢いのままガッと掴まれる私の肩。

「おい、チュウ！　本当にこの校舎に来たのか？　なら、いつ来た？　そん時オマエ、何か見なかったか？　教室に段ボール、あったのかよっ？！」

その顔はいつものように自信たっぷりではなく、怒りと不安と焦りと……瞳が僅かに揺れていた。私はその尾島の顔をただただ黙って見ていると、ある顔が一瞬頭の中で通り過ぎた。そのぼんやりと浮かんだ顔は、夏前くらいから放課後の尾島の身近にいる顔。二階からそっと覗きこんだ時に見えた――。

1、2組以外ノ連中ガコノ校舎ニ来ルコトハマズネェンダヨッ――

「やめろ、啓介！　そんなの後にしろ！　応援団そろそろ集合だし、赤の団長、辺見さんだろ？　とりあえず行って事情を話しとけ……」

ソロソロ集合ダシ――

『なんか……上で音しなかったか？』
『マジかよ?!』
『いいから！　集合かかってるし、いくぞ！』

（あ……）

私の中で、何かが弾けた。
まるで何十万ボルトの雷が身体にズガーン！　と打たれるような

衝撃が――。

「あ……あぁ～っ！！」

星野君が私と尾島の間に入り、私の肩から尾島の手を剥がすのと、私が滅多に出さない大声を上げたのが同時だった。

山野中体育祭！～狙われた学ラン？～（後書き）

なんか、もっと文章うまくなりたい。これを書いていて、ミステリーなどはダメだなと悟った菩提樹です。……いや、どれもダメなんですけどね……あ、なんだか心に寒い風が……。

「三年の連中が……この校舎にいた？！」

並んで歩いている佐藤君の驚いた声に、私は小さく頷いた。

佐藤君の言葉に、前を歩いていた二人の男子生徒が振り返り、それを合図に四人の足が止まる。私以外の男子生徒三名は眉根を寄せながらお互いの顔を見合わせた。

ここはガランとしたボロ校舎の廊下である。ほんの数分前までは何人かの生徒がいたが、現在この校舎には私を含めた四人の生徒以外誰もいない。

先生から急きょ借りた規格外の学ランに、文字のテープを貼る作業を手伝ってくれた星野君、学級委員の佐藤君、体育委員の後藤君だけだ。

「……マジかよ……この校舎に他の学年のヤツがいたのか」

腕組みをしながら低く唸った佐藤君の声が、静かな廊下に響いた。

＊＊＊＊＊＊＊

昼休み。残り時間があと僅かという時、心の奥底に引っ掛かっていた事実をやっと思い出した私は、滅多に出さない大声を教室に轟かせてしまった。

再び全員の視線を一身に浴びた、荒井美千子。

だがそんなことを気にしている場合ではない。やっとの思いで絞り出した記憶を、その勢いのまま驚愕した顔の尾島と星野君に速報！　……しようとした。

が、尾島の顔を見た途端、この校舎から慌てて出ていった三年男子の顔と、お祭りでの出来事……尾島が突然キレて暴力沙汰を起したという立派な前科を思い出してしまい、慌てて口を噤んだ。

（危ない危ない……第一、あの三年生達が犯人とは限らないじゃない！）

しかも彼らが盗んだという証拠はない。あくまでも可能性の問題だ。先走って三年生を問い詰め、もし違っていたら冗談じゃ済まされない。それに素直に犯行を認める可能性は低いし、逆に因縁をつけられて本当に暴力沙汰になったら……それこそ大事になってしまう。そんなのはお互いの為にならない。

（もし、今頭に血が昇っている尾島が、この校舎から出て行った三年生が誰だが知ったら、絶対マズイことになる……とりあえず、今はダメだ！）

『……おい、チュウ？　なんだよ……なんか、知ってんのか？　なんか見たのか？！』

『っ！』

私は尾島の声で現実に引き戻されるまで、頭の中で「どうすれば穏便に済ませられるか」という計算をものすごい勢いで弾き出していた。ともかく、この時点で学ランがすぐに見つかる確率はゼロだったので、尾島が知りたいであろう真実をこの場で伝えることは控えたのだが……。

（神様！　どうか、どうかこの答えを「ご明算！」と言ってくれ！）

私は挫けそうになる心をなんとか落ち着かせ、清水の舞台から飛び降りるように、可能性の高い解決策を提案した。

『あああの、そそそうじゃなくて……そ、そう！　い、急いで2組と3組、いや、先生の所へ行って、予備の学ランがあるか、きき聞きに行った方がいい……と思う！』

『……は？　は……ぁぁぁぁっ？！　何ってるんだぁ、チュウ！』
『な、なんだ？　なんだよ、荒井、急に……』

尾島の迫りくる鬼のような形相と佐藤君の戸惑いの顔に、精一杯勇気を奮い立たせた。

『ヒッ！　や……あああの、だ、だから……い、今から学ラン見つけるのは難しいんじゃないか……と思って、じ、時間がないし……。ももももちろん学ランも探すけど……そそそれより！　２組と３組に予備があるかどうかわからないけど、学校には没収された学ランやら、卒業した先輩方の学ランくらいあるんじゃないかな？　そ、それ借りて、テープを貼った方が速いんじゃないかと……。よ、よ、予備のテープ、念の為に三つ作ってあるの！　い、今から残りを急いで作るから！　手分けして貼れば、なんとか間に合うから！　ね？！』
『ね……って、オマエ……』
『あ……そっか！　なるほどな……確かにそっちの方が早いよな……わかった！　おい、伏見！　俺、先生のところへ行ってくるから、ここを頼む！』

犯人のことに関して言うのかと思っていた尾島と佐藤君は、いきなりトンチンカンなことを言い始めた私に最初は戸惑っていたようだが、佐藤君の方は提案した意味がわかると「でかした！」という顔になり、急いで先生のところへ報告しに行った。奥住さんや星野君も弾かれたように「２組と３組、他のクラスにも学ラン持っている人がいるか聞いてくる！」と聞きに行ってくれた。

『あ……お、おい！　……ちょっ……っと待てぇ！　それよりも、チュウ！　オマエ、この教室に来たんだろ？　そん時のことはっ？！』

『っぃ！』

「私も手伝う！」と言ってくれた光岡さんと一緒に、急いでテープが入っているカバンのところへ行こうとした私を、尾島の手が引き留めた。

グイッと手首を掴まれた勢いで振り向けば、尾島はさらに眉間の皺を増やし、憤怒の形相を目の前まで近づけてきた。掴まれているのは手首だが、すぐにでもそれがボインに……いや、胸ぐらに移動しそうだ。

（ヒョエッ～！！）

正直殺気立っている尾島はものすごく怖かった。掴まれている手首も、もの凄く痛い……。しかし、文句を言っている場合ではない。刻一刻を争う非常事態なのだ。

『ごごごめんさい！　……あ、いや、そうじゃなくって……ああああの……確かに、私はここの教室に来まし……た。けっ、けどっ！　その時段ボールがあったかどうかは……正直記憶があやふやでして……そ、その、覚えてないというか……』

とうとう私は、「この教室に来た」ことだけは正直に告げてしまった。私の告白に再び教室内がどよめいたが、そんなことは気にしてられなかった。本当に肝心なことはその後のことなのだが、それを言うのは万策尽きてからだ。

（これでいいよね？　大丈夫だよね？　お、お願い、尾島……今は大人しく引き下がって！）

私は今まで尾島を無視していたことも忘れ、これ以上ないくらい熱意を込めて無言の訴えを試みた。

非常に恐ろしくもあり、恥ずかしくもあったが……思い切って尾

島の目をしっかりと見据えた。それこそ掴まれた尾島の手に逆に縋り付くくらいに。こんな時こそ「ニュー●イプ」の力を！　女豹としての成果を！　……おっと、これは関係なかったが、以外にも必死の願いは神に聞き届けられたらしい。

尾島は徐々に目を見開いたまま私の手首を無意識にギュウッと力を込めたが、それ以上は何も言わず、黙ったままだった。

『……そんなことは後です、尾島君！　今は荒井さんのアイデアが優先事項よ！　さぁ、皆さんは急いでお昼をとってください！　念の為、手の空いた方から学ランの捜索を手伝ってもらいます！　さぁ、特に応援団の方、さっさとお昼をとって！！』

幸いなことに、ブキミちゃんのハスキーボイスが二人の緊迫した空気を破ってくれた。

ブキミちゃんはざわめくクラスメートを解散させ、有無を言わさないような的確な指示を出し、彼女自身も佐藤君の後を追いかけた。

『そ、そうよ、尾島！　お昼食べて時間まで学ラン探そうよ、ね？』

原口美恵は猫なで声で尾島と私の間に割り込んで無理矢理手を引き剥がし、「荒井は早くテープやっちゃって！」と噛みつきながら、後藤君や諏訪君と共に尾島の背中を押した。こうして事態は意外な方向へ収まり解散となった。

山野中体育祭！～狙われた学ラン？～

緊急事態にも関わらず、学ランは奇跡的に五着揃った。
佐藤君とブキミちゃんから事情を聞いた先生（チンタオ）は、事態が事態と知り、卒業した先輩方の学ランを三着貸してくれたのだ。残りの二着は、奥住さんと星野君が聞きに行ってくれた2、3組の生徒が学ランを持っていたので、お願いして借りることになった。五着が1組に集まると、学ランの捜索は一先ず打ち切りになり、ほとんどの生徒は胸にモヤモヤを残しながらも、ホッと胸をなで下ろして応援席に行った。最終的に教室に残ったのは応援団員五名の他に、体育委員二人、サポート委員の原口、学級委員の佐藤君、製作するのを手伝ってくれた星野君や光岡さんだった。

『さぁ、急いでやるぞ！』
『ちょっと、まったぁ！』

一斉に取り掛かろうとした私たちを止めたのは、尾島。その尾島からは既に「学ランがない！」という焦燥感や苛立ち、険しさが抜けていた。間一髪のところで学ランが揃い、ピンチを潜り抜けたからだろう。それどころか世界を手中に収めた大魔王のような余裕とオーラが漲っていた。どうやら熱くなるのも速いが、冷めるのも速いらしい。

『どうしたんだよ、尾島』

佐藤君が時間がないんだよと少しイライラしながら聞くと、尾島はニヤリと例の悪魔のような黒笑（ブラックスマイル）を湛え、ダンと拳で机をたたきながら力説しだした。

『いいか？　俺が尊敬する「イノキ、ボンバイエ！」でお馴染みの猪木大先生には悪いが、「闘魂」の文字を今から貼り付けるなんて面倒だ。画数が多いからな！　それにこんな気持ちで「闘魂」に向かい合うなんて、猪木大先生に申し訳ねぇ……そこでだ！　学ランを盗んだ犯人にオレたちから熱い「ボンバイエ（メッセージ）！」を送ってやろうぜ！　あぁ、ここで解説しておくが、そもそも「ボンバイエ」とは、かつて猪木大先生と対戦した偉大なるモハメド・アリの』

『『『『『オイっ！』』』』』

いらん解説をする尾島に、星野君以外の男子全員と奥住さんから綺麗なツッコミがビシっと入った。女性陣も朗らかに笑い、切羽詰っている割には穏やかな空気が流れたが……そんな余裕をブッこいている場合ではない。どうでもいいが、この時尾島のセリフにより二つのことが判明した。一つは、三年の先輩方を差し置いて、尾島（コイツ）が面倒な「闘魂」含め、赤組の応援合戦の内容をほとんど決めたんだなということ。もう一つは、赤組の応援団長である男バス元部長・辺見さんは、尾島の先輩であるにも関わらず、後輩（サル）にボスの座を奪われたんだろうということだ。いや、喜んで臣下に下ったのか。

（どちらにしてもしっかりしろよ、辺見先輩！　……いや、それより弁当食べるのも返上し、この短い時間で残りの闘魂の文字を途中まで作り上げた私の立場をどうしてくれるよ！　サクッと変更すんな！！）

尾島はふざけているのか嫌がらせなのか、さらにニヤリとした顔で「猪木大先生」のうんちくをお披露目しようとしたが、偶然にも荒井美千子一人だけが引き攣り笑いではなくイラっと険しい顔（フェイス）で、金色のテープを鷲掴みにしている姿が目に入ったのだろう。慌てた様子でゴホンと咳払いした。

『あ～その、なんだ。……ま、ぶっちゃけ、応援合戦で目立とうって訳よ！　まぁ、任せとけ！』

尾島が提案した言葉に全員顔を見合わせた。

『おい、チュウ！　ちょいとこっち来て、オレの言うとおりテープを貼れや！』

尾島の命令（呼びかけ）に、私はさらに口元をヒクつかせた。

＊＊＊＊＊＊

応援団のメンバーは学ランが仕上がると、学ランが無くなった時とは打って変わったニヤけた顔で、弾丸のように飛び出して行った。テープを貼る作業を手伝ってくれた人達、特に成田耀子と原口美恵も応援合戦を観戦するため足早に応戦席へ向かった。私は「早く行こう！」と言ってくれた光岡さんに、片付けがあるからと先に行ってもらうと、最後に教室に出ようとした佐藤君達に声を掛けた。最初は例の目撃証言をブキミちゃんに言おうとしたが、どう見ても尾島と友好的じゃないし、仕事で出払っていたのでどちらにしても無理だったから。

真剣な顔で「相談事が……」という私に佐藤君達もなにか勘付いたのだろう。応援席に戻りながら、私は佐藤君達に話を切り出したのだ。

「……おいおい、じゃあ、なにか？　荒井はこの校舎に他の学年のヤツがいたのを知っていて黙っていたのかよっ？！」

「ッ！！」

「おい、後藤（ヒロ）！」

沈黙を破った後藤君の険を含んだデカい声に、小さい悲鳴を上げて縮こまった。星野君が鋭い声で制してくれたので、恐る恐る顔を

あげると目の前にいる後藤君はチッと舌打ちをし、「わ～ってるよっ！」と吐き捨てた。ただでさえ上背があるせいで威圧感が半端ないのに……さらに眉間に皺の寄せたままニコリともしない顔に軽くビビる荒井美千子。やはり尾島や桂龍太郎の仲間だけのことはある。

背の高い男の人って、実は優しくて穏やかで無口な人が多いんだよ！

……的な展開がお約束であるはずなのに、なぜかそんな少女マンガな設定からは程遠い後藤君。前々から感づいてはいたが、どうも彼の私に対する態度が、尾島や小関明日香に対する態度と少々……いや、だいぶ違う事実に、シュンと気分が落ちてしまった。別に優しくしろとまでは言わないから、敵意というか、「オメェのすべてが気に入らねぇ」丸出しの態度はなんとかならないのだろうか。

（そんなに図体デカいくせに、こんなか弱い乙女に大声を上げるなんて……しかも中二にもなってこの態度は、いささか大人げないんでないの？　大体アンタは体育委員なんだから、さっさと仕事行けよ！）

私が心の中でブツブツと文句を言っていると、佐藤君は組んでいた腕を解きながら私の顔を見た。

「……荒井は本当に三年生がこの校舎にいたのを見たんだな？　見間違いじゃ、ねぇよな？」

佐藤君の念を押した質問に、私は再び小さく頷いた。

「つーか、荒井さぁ。見たんなら見たって、昼休み尾島が教室で聞いたときにそう言えばいいだろ？！　どうして黙ってたんだよっ！

！」

「後藤（ヒロ）！　そんな言い方したら、荒井さん何も言えないだろ！　……ごめん、荒井さん。その時のこともっと詳しく話してくれるか？」

星野君が後藤君の怒鳴り声に再び喝を入れた。淡々としながらも優しい口調で先を促してくれたので、ようやく安心した気持ちで口を開いた。

「あ、あの……二年女子の綱引きが始まる少し前に……この校舎の二階のトイレに……来て……その……。ほ、ほら、一階のトイレ、使用禁止でしょ？　で、でね？　トトト、トイレから出て階段を下りようとしたら、走る音が聞こえて……」

「「走る音？」」

「そ、そう！　こ、この廊下を走る音。ビ、ビックリして、恐る恐る下を覗いたら、その……赤いラインの体操着来た男子三人が、昇降口に向かって走っていくのが見えて……」

「「……」」

「は、初めは、その先輩たち、この校舎のトイレに来たけど、使用禁止だから急いで違う校舎に行ったのかなぁ……って思って。で、でも……考えてみれば、三年生がわざわざこの校舎のトイレに来るなんて、お、おかしいよね……？」

「「……」」

「そ、それに、その先輩方、すごい慌ててたみたいで……『二階で音がしなかったか』とか『集合かかっているし、いくぞ』って言いながら……多分……。あ、でも、その時三年男子の騎馬戦の集合かかっていたから、急いでて走っていたのかと思って、特に気にもせずにいたんだけど……。」

「「……」」

「で、でも、みみみ見ただけで、その人たちが犯人って……確証は……その、ないから……下手なことも言えなくて……」

恐る恐る告白する私の声が廊下に響いた。話し終わると三人とも黙り込んでしまい、廊下は再び静寂に包まれるが……。

「でもさぁ。それっておかしくね？」

後藤君が私をジロリと見下ろしながらボソっと漏らした。

「大体さぁ、さっき原口や成田も言ったように、そもそも荒井はなんでこの校舎のトイレなんかに来たんだよ？　トイレならここまで来ることねぇだろ？　それは荒井自身もさっき言ったよな？　それからしてワケわかんねぇんだけど？」

思いっ切り怪しんでいる後藤君の口調に、私はウッと言葉を詰まらせ俯いてしまった。この校舎に来た理由を言えないでモジモジしていると、後藤君は大袈裟なため息をついた。

「なんだよ、答えられねぇのかよ。……じゃぁさぁ、三年を見掛けたって言うなら、そいつが誰だか言ってみろよ。ちゃんと見たんなら、当然言えるよな？」

（ちょ、ちょっと……）

後藤君が私に対して親しみを抱いていないことはわかっていたが、ここまで疑われるなんて正直ショックだった。

（なんでそこまで疑うの？　私の言うことが信じられないってわけ？　……なによ、そんなにこの校舎に来たことを知りたけりゃ、言ってやろうじゃないの！　……って、それができれば苦労はしないんだよね。大体男子の前で生理用のナプキンを取りに来たなんて言えるわけないでしょ！　百歩譲って後藤君に知られても大したことないけど、星野君や佐藤君に聞かれるなんて絶対イヤだし……どう

しよう……。それに、三年生たちが誰だか知ったら、アンタ絶対腰抜かすよ？　バスケ部内で問題起こしたらどうすんの？　新部長の田宮君にいきなり問題を抱えさせる気？　それにせっかく尾島の為を思って黙ってたのに……って、あ、あれ？）

そこで私の思考はハタッと止まった。

おかしい。そもそもなんであんな奴隷呼ばわりする奴の為に、私がこんなに悩まなければならないのか。喧嘩しようが問題を起こそうが私には関係ないではないか。それに今回は祭りの時と違って、シニアのグラウンドがどうこうなどという物騒な問題は絡んでいない。

（な、なによ……クラスのみんなに疑われ、後藤君や悪女達に責められた私は、言われ損じゃないのよ！）

自分でも訳が分からず、イライラと恨みつらみが右肩上がりで上昇中！　……の頭を捻っていると、昇降口から足音もなく人影が近づいてきた。

「後藤君」

不気味な低いハスキーボイスが廊下に響き、その声でこの場にいた四人は数センチ飛び上がった。

「女性に向かってその質問は失礼というものですよ。これだからデリカシーのない男性は……本当最低ですわねぇ」

後藤君が吐いたよりも大袈裟なため息がブキミちゃんの口から漏れた。

開いた昇降口の方から大太鼓の音と生徒が張り上げる応援の叫び声が僅かに聞こえてくる。午後一のプログラムである応援合戦は、佳境に入っていた。

山野中体育祭！～狙われた学ラン？～（後書き）

ちなみに「ボンバイエ！」とは「やっちまえ！」という意味らしいです。マイ☆ダーリンが昔、「ボンバイエ」の意味を知り合いに問うたところ、携帯メール制限文字いっぱいになってボンバイエの解説が返ってきたとか。何気にウザッ！　と思った私も、ちゃっかり猪木大先生のファンです！　余談ですが、昔通っていたジムで、猪木大先生のテーマ・「燃える闘魂」の曲を掛けながらスタジオプログラムをやっていたインストラクターがいたなぁ。（実話）

「それよりも、みなさん、早く応援席に戻ったらいかがですか？赤組の応援合戦、始まってしまいますわよ」

声の主はサラサラな髪の毛を耳にかけ、歯列矯正をしている歯を見せながらニヤリと笑いかけた。

「「「「……」」」」

神出鬼没のベラ……いや、ブキミちゃんの登場で、私たち四人はゴクリと喉を鳴らしその場に固まっていたが、逸早く我に返ったのは後藤君だった。ブキミちゃんがススッと傍まで近付いてくるのと同時に彼はゆっくりと腕を組み、「ハッ」と鼻で嗤いながら顔をブキミちゃんから逸らした。

「……おいおい、いきなりなんだよ。失礼で最低なのは人のことを『デリカシーのない男性』呼ばわりするそっちだろうーが。それにさぁ、俺は別に失礼な質問なんて一個もしてないぜ？　この校舎に来た理由だとか、三年の顔を見たんなら誰だったとか……こんなの大した質問でもねぇだろ？　ったく、訳わかんねぇ！」

ブキミちゃんは後藤君の吐き捨てたセリフにピクッと口元を引き攣らせ、彼の嘲笑っている横顔を無表情のまま凝視した。二人の間に漂う友好的ではない空気に、どうしていいかわからずオロオロとする私。とりあえずこの場を取り繕う為、走り去った三年について答えた方がいいだろうと後藤君の方を見た。彼が信じるかどうかは別として、少なくとも私よりは走り去った三年をよく知っている筈だし、きっと尾島を宥めつつ穏便に事を運んでくれるだろうと思い

ながら、二人の間に割って入ろうとしたその時。
突然ブキミちゃんが口元に手の甲を当てて、高笑いを響かせた。

「オホホホホ～！　何を言うかと思えば……フフフ。アラアラいけない、大変失礼致しました。急に笑い声を上げて申し訳ありません。あまりにもお鈍いので、この伏見かおり、思わず不意を突かれてしまいましたわ！」

「はぁっ？！」

「後藤君が訳わからなくとも、ワタクシはいっこうに構いません。大体アナタに女生徒の心の機微まで理解しろという方が無理な話ですものね。まぁ、あの尾島君の御友人ですから？　仕方ないと言えば仕方がないというところかしら。『類は友を呼ぶ』という言葉をご存じ？　ホント、昔の人は上手いことを言いますわよねぇ」

「オイ！　伏見、そりゃどういう意味だよ！」

ブキミちゃんの血の気が引くような逆襲に、後藤君が一歩前に出て低い唸り声をあげた。私よりも背の低いブキミちゃんに食って掛かろうとする大柄な後藤君は、血の気を引くどころか相当頭に血が上っているようで、どうやらいつも尾島を宥めすかすほどの器量と余裕がないようだ。星野君は後藤君を止め、佐藤君も「おい、伏見……」とブキミちゃんを咎めたが、二人の表情はなんとも微妙だ。私も正直なところ、どういう顔をしていいかわからなかった。なんせ星野君も佐藤君も「あの尾島」の御友人だ、下手なリアクションはご法度である。

一方堂々たる意見をビシッと決めたブキミちゃんは、佐藤君たちの微妙な表情や後藤君の怒りもなんのその、「唾を飛ばさずに、冷静にお話ができないものかしら」と顔を顰めて体操着を掃っていた。その行動に後藤君はカァッと顔を赤らめ、「な、なんだとっ！」と怒鳴り返したが、ブキミちゃんは怯むどころか感じのよろしくない微笑みを口元に湛えている。マフィアのドンのような態度でドンと

構えている余裕なブキミちゃんに圧倒され全員口を噤んでしまうと、彼女はメガネをクイッと上げてさらに色濃い不敵な笑みを浮かべた。

「この際ハッキリと申し上げておきますが。後藤君にしても原口さんにしても、この校舎に来たくらいで荒井さんを責めるのは、いささか性急すぎるのではありませんか？　ワタクシに言わせれば、大事な学ランをロッカーの上などに無造作に置いたままにしておいた応援団員の不始末が原因だと思いますけど？　それこそ各自でしっかり学ランを管理していれば、このようなことにはならなかったのでは？　そもそも何故1組の学ランだけが狙われたのですか？　標的にされるほどの原因が応援団員の誰かにあったのではないですか？　……荒井さんを責める前に、そちらのご心配をされたほうがよろしいんじゃなくて？」

ブキミちゃんのハスキーでリスキーな正論すぎる意見に、さすがの後藤君もグッと言葉を詰まらせた。

「それに……この校舎に来たのは荒井さんだけではないかもしれません。ある事情を抱えた1、2組の女生徒なら何人か来ている可能性がありますね」

「「「ある事情？」」」

ブキミちゃんの至極真面目な意見を、男性陣は揃って復唱した。

ブキミちゃんの自信に溢れた数々の言葉に、最初は「その通り！」と心の中でウンウンと頷いていた私だが、次第に話が怪しい方向に逸れていきそうになるのを察知すると、心臓の鼓動が早くなりだした。

（……ままままさか、生理のことを暴露する気じゃないでしょうね？！）

私はこれ以上の説明無用です！　光線をブキミちゃんに放ったが、

いつものように弾かれ自分に返ってきた。どうやら彼女は私の意図を酌む気はないらしい。

「そうです。女性ならばやむ負えぬ事情です。荒井さんはそのやむ負えぬ事情で、『あるもの』を取りにこの校舎に来たのです。ここまで言えば、保健体育の授業を受けたアナタ達ならお分かりになるでしょう？　そうですわね？　荒井さん」

「……」

私は顔を真っ赤にしながら俯くと、ブキミちゃんは「やはりそうでしたか」と納得したように頷いた。が、鈍い後藤君は納得できなかったらしい。ナゾナゾのような、『乙女のヒ・メ・ゴ・ト☆』的なわかりにくい暗号会話にイラついたのか、星野君の腕を振り払って更に前へ出てきた。

「おいっ！　結局適当に誤魔化してるだけじゃねぇか！　そんなんで納得できるわけねぇだろ！」

「……普段授業を適当に誤魔化している割には意外としつこいですのね。粘着質で女性の気持ちを酌むことができない鈍い男性は、いざという時意中の女性に嫌われてしまいますわよ？　……わかりました、いいでしょう。そんなに知りたいのであれば、親しくしている女生徒、あぁ、１０組の小関明日香さんでしたか。彼女にお尋ねになってみたらいかがです？　『２８日周期、もしくは一か月前後の周期で出血する女性特有の生理現象とは何か』と。まぁ、質問した時点で変態扱いされるでしょうが。無論ワタクシはそうなった方が愉快……ゴホン、そうなっても構いませんことよ？　でも悪いことはいいません、おやめになることをお勧めしますわ……って、あら。私ったら……オホホホホ～ッ！　ついウッカリと答えを漏らしてしまいましたわっ！」

ブキミちゃんは荒井美千子の気持ちを酌まなかった自分の行動は棚に上げ、後藤君を堂々と「しつこくて空気の読めないニブチン男」呼ばわりした後、ご丁寧にも正解をポロッと漏らしたうえに、高笑いでまるっと誤魔化し……いや、納めた。

「それよりも荒井さん、三年の男子生徒を見たというのは本当ですか？　もしそうなら、彼らは学ランを持っていましたか？」

瞳をキラリと光らせながら何事もなかったかのように私に話を振ったが、こっちは恥ずかしくてそれどころではなかった。ますます茹でダコのように真っ赤になり、口をきつく閉じるだけだ。どうやら男性陣もブキミちゃんの言葉の意味がわかったらしい。三人とも「あ……」と小さい声を漏らした後、徐々に頬を染めたり気まずい顔をしながら、落ち着かない様子で視線を彷徨わせた。その様子に益々縮こまる荒井美千子。一体この羞恥プレイはなんなのだろう。軽く拷問だぞ、ゴラァ。

「……あらあら。やっと後藤君たちにも理解していただけたようですわね！　これで荒井さんが昼休みに、クラスメートの前でこの校舎に来た理由を話せなかった訳も、ワタクシが『デリカシーのない男』と言った訳もおわかりいただけたかしら？　荒井さん、誤解が解けたようですわよ？　良かったですわねぇ！　さて、そんなことより、荒井さん。先ほどの質問に答えていただけますか？　三年の男子生徒は何人居ました？　お顔はわかりますか？　学ランを手にしていましたか？」

「……」

ニヤリと不気味スマイルで笑いかけるブキミちゃんの口を塞ぎ、ここから二人揃って撤収を試みたかったが、仮にも誤解を解いてくれた恩人である。しかし私は声を大にして言いたい。超有難迷惑だ

と。とりあえずこの場にいる全員を「生理」などという話題から速攻離脱させる為、私は気まずい雰囲気を打破するように、急に空元気な声でブキミちゃんの質問に答えてみた。

「そそそうよね！　か、隠された学ランを見付けなければ解決にはならないですわよねっ！　え、えっとぉ、先程報告した通り、ワ、ワタクシは二階のトイレで……ッホン！！　いえ、二階にいたときにですね？　だ、誰もいない筈なのに、下の廊下を走る音が聞こえて、に、二階からから覗いて見たときは、さ、三人の男子生徒が昇降口に走っていくところでしたわっ！　顔は……一応見たことがあるけど、名前までは……ゴメンナサイ。あ、でも、所属していた部活は、わ、わかる……というか……。あ、それに、学ランだけど……ももも持ってなかったと思いますっ」

私は相当焦っていたのか、ブキミちゃんの口調が移ってしまい、変な言葉使いになってしまったが……仕方なかろう。それよりも男性陣の空気がサッと変わったのは有難かった。これでやっと確信に迫れるってもんだ。長かったぞ、オイ。

「……そうですか。持ってませんでしたか……」

ブキミちゃんは「ロダンの考える人」のように真剣な表情で一点を見詰め暫く熟考モードに入っていたが、急に顔をあげて私たちをグルリと見回した。

「確信はありませんが、荒井さんの話から推測すれば……学ランはこの校舎にあるか、校舎の周辺にある可能性が高いです」

「「「「えぇっ？」」」」

名探偵・ブキミちゃんの推理に、四人の驚愕した顔が集中した。

山野中体育祭！～幸福の赤いハチマキ？～

『応援合戦に参加した皆様、お疲れ様でした。どのチームも迫力のある熱い応援合戦でしたね。先生方や来賓の方々による応援合戦の審査結果は閉会式に発表され、各チームの得点に加算されます。この後は三年生による全員リレーです。最終種目である色別対抗リレーに出る選手は入場門の方へ……』

私はグラウンドに響くアナウンスを聞きながら、生徒会の人達が待機しているブースを出て来賓席のテントへ向かった。生徒会のブキミちゃんに頼まれて、ＰＴＡの役員の人達や校長先生にお出ししていた湯呑を回収するためだ。

本部席があるテントの周辺を先生方や生徒会役員、体育委員が忙しなく動いていたので、私は彼らの邪魔にならぬようそっと来賓席へ近づいた。頭を下げながらお茶を回収し、お盆を持ったまま何となくグラウンドに目を向けると、トラックを囲むように座っていた生徒達の興奮冷めやらぬ姿が目に入った。どこもかしこも赤組の応援合戦の話題でざわついている。それもそうだろう。赤組の応援合戦……いや、２年１組の応援合戦代表である生徒五人は、観客席に余計な謎と熱気を残したのだから。この後に続く三年の全員リレーと、色別対抗リレーというフィナーレを締める花形競技と相まって、盛り上がりも最高潮になっているみたいだ。

「……」

ぼんやりと応援団の人達が去った退場門の方へ視線を向けたら、学ランを着た赤組の応援団がその場で制服を脱いでいた。気温は低いが日差しが強いので、動いて熱くなったのだろう。中でも、我がクラスの応援団員は同じ赤組の応援団はもちろんこと、他のチーム

の応援団、おまけに数名の先生からも囲まれていた。そして、尾島の友人達が駆け寄るのが遠目でもわかった。

（あ～あ、やっぱり。でも……大丈夫だよね、後は彼らに任せておけば。ていうか、もう私関係ないし、これ以上巻き込まれたくないし。とりあえず無事応援合戦が終わって良かった）

一先ず嵐は去ったかなと退場門から目を放し、事務のオバチャンのところへ回収した湯呑を運ぶために職員室のある校舎に向かおうとしたら、なんと至近距離にブキミちゃんが立っていた。喧噪のなかでもよく響く低いハスキーボイスで私の名前を呼びながら。

「荒井さん」

「ヒィッ！」

あまりにも近かったので、私はびっくりして仰け反り、もう少しで回収した湯呑を来賓席に座っているお偉いさんの頭へ投げ返すところだった。それにしても……気配を殺して近付いてくるブキミちゃんのこの癖、なんとかならないのだろうか。これだけ近かったら普通気付く筈なのに、一体どうなっているのだろう。軽く人間の能力を超えている。

「湯呑、ありがとうございます。助かりますわ。忙しいから猫の手も借りたいくらいでして、オホホ」

「……あ、い、いえ。ひ、暇なので……。これ片づけに行きマス」

「まぁ、悪いですわねぇ！　ついでに今度は役員の方に麦茶を出すので、給湯室からグラスを」

「……了解シマシタ」

「本当に申し訳ありませんねぇ。荒井さんがいつもいつも積極的に手伝ってくれるから、ワタクシもついつい甘えてしまって……オホホホ！」

「……ハハ、積極的……」

「学ランの件も、荒井さんの一計で危機を乗り越えることができましたし、さすが素晴らしい東先輩の幼馴染ですわね！　同じクラスメートとして、部活の仲間として、そしてなによりも未来の妹として、ワタクシも誇りに思いますわ！」

「……イモウト……」

「ホホッ！　あぁ、盗まれた学ランは、探せばいずれ見つかるでしょう。後はあの者たちで勝手に……いえ、任せておけばよろしいですわ。荒井さんは後藤君や原口さん達の失礼な態度など、キレイスッパリ忘れてくださいまし！」

「……え？　ええっ？！　い、いずれって……や、さっき伏見さん、校舎に学ランがあるって……」

ブキミちゃんの「もう学ランのことなど、どうでもいいわい」的な言葉に、思わず上ずった声を上げてしまった。あのボロ校舎の廊下で、後藤君たちと対決……いえ、話していたブキミちゃんは、

『いいですか、皆さん。もし学ランを盗んだのが荒井さんが見たという三年生達ならば、走り去った彼らの手に学ランがあったはずです。この校舎から持ち出した後に再び犯行現場に戻るなんて、そんなバカなリスクをする必要がありませんからね。ならば答えは一つ、この校舎にまだある可能性が高いです。あるいは窓から投げ捨てたか……。あ、そうそう。この廊下を走っていたということは、学ランはこの一階ですわね。二階なら、トイレに行っていた荒井さんと鉢合わせしてしまいますもの』

……と言っていたのに。それを聞いてすぐ男性陣は廊下の窓やら教室の窓から外を覗いたが、学ランらしきものはなかった。とりあえず私と星野君以外は仕事があったので、犯人のことを少し話しをした後、学ランの捜索は閉会式が終わってからと解散になったのだが……。

「あらあら、いやですわ～荒井さん。あの意見はあくまでも推測であり、荒井さんの証言によってワタクシが導き出した仮説に過ぎません。ま、ほぼ１００％正解でしょうけども。大体荒井さんが見たという犯人は、男子バスケ部の三年で尾島君や田宮君の先輩なのでしょう？　田宮君は関係ないとして、あの尾島君に対して恨みを持った挙句の犯行ならば……って、おそらく１００％そうでしょうが。ともかく、そんな相手ならば頭脳もそう大したことはありません。それこそ『類は友を呼ぶ』、もしくは『五十歩百歩』というやつでしょう。解決できぬほどの複雑なところに隠したり、もうすでに学ランはない……などの大事になるなんてことはまずありえませんわ。大体そこまで巧妙に考えて犯行を実行する人物ならば、学ランを盗むなんて雑で幼稚なことはしません。もっと上手く、綿密に計画を立てます。ワタクシならば誰かの弱みを握り、その者にすべてを委ね、自分の手を汚すようなことはしませんわ。いえ、それ以前に尾島君を相手にするなど時間の無駄というもの。そんな暇があったら、ドウジョウ掬いをやっていたほうがよっぽどマシですわ」

「……」

ブキミちゃんの相変わらず切れ味鋭すぎる意見と大胆な犯行計画に荒井美千子、口を挟むどころか一言も発することができない。どうやら、ブキミちゃんにとって尾島は人間どころか猿以下らしい。下手したら地球上の生物として認識していないのかもしれぬ……っていくらなんでもこれは失礼か。それにしても――。

（前々から不思議に思ってたんだけど……いくら尾島が嫌いだからって、ここまでコケにするなんていくらなんでも、ねぇ？　何か訳でもあるのかなぁ？　いつでもどこにいても神出鬼没で尾島から助けてくれるけど、ここまでくるとなんだか……雄臣から私のことを頼まれているから？　いや、でも……）

尾島や彼を取り巻く人達を徹底して「虫けら」扱いをするブキミちゃんの行動に疑問を感じていると、彼女はクイッと眼鏡を上げながら顔を近付けてきた。その距離、僅か数センチである。……近いよっ！

「荒井さん、余計な詮索は無用です。間違っても親友のアナタに多大な恩を売って東先輩の懐に入ろうなんて狡い手、ワタクシは断じて使いません！　単にワタクシが太陽より熱くて海より深い大きな愛を持ち合わせているだけですわっ！」

「……（結局雄臣絡みか……）」

「ようするにアナタを悪の餌食から救いたいだけなのです！　以前にも忠告した通り、あの連中には関わらない方が身の為ですよ。荒井さんはそれを黙って受け入れてくれれば……っ！！　チッ、余計なヤツが……ったく！」

「は？　『チッ』……って、ふ、伏見さん？」

ブキミちゃんは人の気持ちを読んだ挙句、知らぬ間に親友になった彼女から要らぬ親切を押し付けられ、「幻聴か？！」と疑うほど話の途中で口調が変わったことに驚いた私を、くるりと方向転換させて無理矢理校舎の方へ押した。

「あらいやだわ、荒井さん！　長々と話してしまいました！　さぁさぁ、こんなところで世間話などしている場合ではありません。私は忙しいのです！　麦茶が入っているウォータージャグはここにあるのでグラスを取ってきてください、速攻で頼みますわ！！」

「や、あの、ちょっと……」

忙しいと言う割には私をそのまま校舎ほうまで押したブキミちゃん。まるでこの場から追い出すように、忙しいテントの周辺を後にした。

「グラスはそこの茶箪笥にあるわ、適当に持って行ってね～」

事務のオバチャンに笑顔で言われたので、私も笑顔を浮かべながらお礼を言ってお盆にグラスを乗せた。茶箪笥の扉を閉めて給湯室から出ようとすると、オバチャンは「あら！」という言葉を私の背中にかけた。

「あらいやだ、あなた2年1組なのね！　もしかして例の赤組応援団員と同じクラスの子？」

私は振り返り、なんで私のクラスがわかったのかと驚いた表情をしていると、「だって、背中にゼッケン貼ってあるし」と口に手を当てて目じりを下げながら教えてくれた。

「オバチャンも応援合戦見てたのよ～。毎年応援合戦と男子の競技だけは見ちゃうわねぇ。目の保養ってやつかしら？　なんか若いっていいわよねぇ、青春って感じで！　オバチャンもあの頃に戻れるもんなら、戻りたいわぁ～」

「は、はぁ……」

「そうそう、赤組の応援合戦！　ありゃ一体なんなのかしらね？五人だけ背中の文字が違うんだもの～。『犯人　イマ　スグ　デテコイ』なんて、なんだか穏やかじゃないわねぇ。……あぁそうそう、1組の担任の青島先生と学年主任の先生がなんか学ランがどうとかって騒いでたけど、それと関係あるの？」

「……ど、どうなんスかねぇ……」

穏やかじゃないなんて言うわりには、目元を好奇心で一杯にした

顔を近付ける事務のオバチャン。私は尾島の提案により、急きょ変更した学ランの背中の文字のことを思って顔を歪めた。

ヤツがテープを持っている私に支持したのは、「闘魂」という文字ではなく、「犯人　イマ　スグ　デテ　コイ」などという、犯人や先生の怒りを煽る言葉。赤組の応援団がグラウンドへ入場し、三年、二年、一年の順に横一列に並び、観客席や来賓席に背中の文字を見せると、観戦していた生徒や先生たちは「何事か」とざわめき立った。だって、赤組応援団全員が「闘魂」の文字なのに、二年一組のところだけ違う文字で物騒な文章になっていたのだから。

私はハハハと空笑いし、「一体なんのことやらアッシにはサッパリですわ、ヘェ！　それより仕事がありやすので、これにてドロンいたしやす、ゲヘヘ☆」と適当に誤魔化しながら給湯室を出た。

「使ったグラスは洗って片づけといてねぇ！」

背中に追加の仕事を受けながら――。

＊＊＊

（……はぁ、疲れたな……ていうか、疲れることばっかりだ）

給湯室を出た途端、大きいため息を吐いてしまった。

なんだか競技に参加している生徒よりも、疲労が酷いような気がする。いままで緊張していたからなのか、知らず知らずのうちに全身に力が入っていたらしく、節々が酷く凝っていた。おまけに気が緩んだ途端、急に空腹感が襲ってきた。そういえば……例の学ランのせいでお昼を食べ損ねたのを思い出した。

（あ～あ、学ランのせいでこんな目に……とんだ災難だなぁ）

グルグル鳴り出した胃のあたりを摩りながら、渡り廊下に続いて

いるドアを開けようとお盆を片手と胸の下で支えた直後、勢いよくドアが開いた。

ガンッ！！

「ゴォァッ！」

「あ、ワリィ」

本当の災難は意外なとこからやってくる！　……じゃなく。

急に開いたドアは持っていたお盆に派手に当り、その勢いのままお盆ごと私の鳩尾に決まった。思わず震えたまま前屈みになってしまい……相当痛くてどうしようかと思ったが、お盆を持っているのでどうにもならない。私の胃の付近は空腹を忘れるほど見事なダメージを受けたが、お盆もグラスも無事だったのは不幸中の幸だった。頭の隅でホッと息をつき、「誰だ、勢いよく扉を開けたのは?!」と半泣きのままユラリと頭を上げた。大体「あ、ワリィ」で済む痛さではないわっ！

「あ！　テメェ、こんなとこにいやがったのか！　応援席にいるかと思ったのに、ブキミなんかと一緒にいやがって……探したんだぞ！」

「ゲッ！！　……あ、いや、おおお尾島?！　……君」

ドアを開けた人物が全てにおいて我が不幸の元凶だったものだから、素っ頓狂な声をあげてしまった。しかも謝った相手が私だと分かった途端態度が激変するとはなにごとか！　……と怒ろうとしたが、目の前に立っていた尾島は私が彼の名前を呼び捨てにした時点でジロリと睨んできたので、反射的に文句は引っ込み、口調を改め

てしまった。
　尾島はキョロキョロと周囲を見渡した後、「ちょっと来い！」と私の腕を引っ張った。

「え？　え？　あ、あああの、私、仕事が！」
「んなの、どうでもいいだろ！　オレだって時間ねぇんだよ……こっちだ！」

　尾島は階段の下の狭いスペースへ無理矢理私を押し込んだ後、逃げ道をふさぐように目の前に立ちはだかり、私の顔を見下ろし……いや、この日本語は間違っている。だって見下ろすほど背は高くない、ほぼ同じと言っていい。かろうじてちびっと目線が上なだけだ。
（い、一体何なのよ？　こんな人気のないところに……って、え？）

　誰もいない狭い場所で二人きり――。

　本日二度目のご対面、しかも至近距離に立っているではないか。周りに誰もいないせいか、いやな緊張が全身を覆ってきた。かろうじてお盆が盾になっているが、こんなお盆やグラスではいざというとき大した防御力にはならない。一体何のためにこんなところに……と無駄に不安を大きくしていると、尾島は黙ったまま私の顔からフイッと視線を逸らした。
（え？　え？　なに？　なんなの……って、ハッ！　やっぱ学ランの件？　上級生を見たのに黙ってたことを怒ってるの？　や、だって、あれは……。あっ！　それとも学ランを探しておけってか？　どうせまた暇だろとか因縁をつけて……）
　心の中であれこれ考えながら何を言われるのかと身構えていると、尾島は顔を逸らしたままゴクリと喉を動かし、すぐに「ハッ」と息を吐いた。

「……チュウ」
「ななな何んでしょぉうっ？！」

緊張のあまり声が裏返った自分が情けない。でも条件反射でそうなってしまうのだ……トホホ。

「佐藤（カッコ）や後藤（ヒロ）から学ランの件、聞いた。オマエ、あの校舎で三年を見たんだってな」
「っ！　……あ、いや、その……」
「しかもその三年、バスケ部っていうじゃねぇかよ……クソ！」
「……」

尾島の最後の言葉はとても悔しそうで、相当怒りがたまっていたのか、階段で斜めになっている壁を拳で「ドン！」と叩いて俯いた。どうやら尾島は、あの校舎に三年生がいたということも、その三年生が自分の先輩だったということも聞いてしまったようだ。見えない尾島の顔はきっと傷ついてるに違いないと思うとズキっと心に痛みが走り、見掛けた三年生がバスケ部の人達だったと話したことを後悔し始めた。

＊＊＊

ブキミちゃんがボロ校舎の廊下で素晴らしい推理を披露した時、彼女の嫌味にドン引きしていた男性陣も「なるほど！」と感心し、一斉に教室や廊下の窓を目指し外を確認しだした。しかし既にご承知の通り、学ランらしきものは見当たらず、落ちている気配もなかったのだ。後藤君は再びブツブツ言いだしたのだが、

『……わかりました。ここまできたらハッキリさせたほうがよろし

いですわね。先生に頼んで、念のため鍵が閉まっている二階の教室を全て開けてもらいましょう。鍵が盗まれた、という可能性も無きにしもあらずですから』

……というブキミちゃんの言葉でやっと納得したようだった。一先ず捜索は一旦打ち切りとなり、各自の持ち場へ戻ることになった。私や星野君は係がないのでここで話し込んでいても構わないが、あとの三人は体育祭運営委員に関わっているのでまだ仕事があるのだ。

（シメシメ……みんな仕事だから、私が見た三年生の件は星野君にそっと伝えればいいか！　星野君ならバスケ部じゃないし、客観的且つ冷静に尾島へ伝えられるよね）

胸を撫で下ろしながら、他の三人と別れたら速攻星野君に伝えようと決めた途端、横槍を入れたのはまたしても後藤君で――もう仕事に行って欲しいのに、しつこくも訪ねてきたのだ。

『そういえば、荒井が見た三年って、何処のどいつなんだよ？　それ、まだ聞いてないし。確か名前わかんないけど、部活はわかるって言ったよな？』

私に対する疑惑は収まったみたいだが、声は堅かった。まぁ、それはどうでもよい。こっちも後藤君が苦手……というか、親しくなれそうもない種類の人物であるように、彼にとっても荒井美千子はあまり近寄りたくない存在なのだろう。苦手な人というのは、男であっても女であってもあまり関係ない。ダメなものはダメなのだ。

私は彼の問いに一瞬どうしようかと迷ったが、正直に答えてしまおうと思った。ここで黙っていたら、また怪しまれるし。でも正直盛大なため息ものだった。折角穏便に済ませられそうだったのに……私は仕方なく口を開いた。

『バスケ部……』
『え？』
『だ、だから！　バ、バスケ部なんだけど……』
『……は……あぁぁっ？！　なんじゃそりゃっ？！　荒井……デタラメじゃねぇだろうなぁ？！』

まさかバスケ部の名前が出るとは思わなかったのだろう。後藤君はブキミちゃんに浴びせた怒鳴り声よりも遥かに大きい声を上げた。あまりの迫力に完全硬直してしまったが、事実なので前言撤回することはせず、彼がさらに文句を言う前に全部言ってしまおうと、早口で捲し立てた。

『やっ、あの、だ、だからっ、ももも元部長の辺見先輩という人といつも一緒にいる人！　え、えーと、ほら、髪の毛が茶色で、こっちの頬に黒子があって、ちょっと猫背で、いつもズボンのポケットに、こう手を入れて歩いているというか……。ほほほら！　だいぶ前になるけど、キャンプの前の夜、図書館に隣接してある公園のバスケットコートで会った時のこと覚えてる？　たたた確かその時にも、その人いたから。お、覚えてて！　そ、その……』
『……マジかよ……』

身振り手振りで説明する私に後藤君は吊り上げた目をぐにゃりと下げ、怒鳴り声どころか、その声は手の平を返したようにトーンダウンし始めた。むしろこっちがびっくりするほど急に勢いがなくなり……すっかり苦い表情のまま黙り込んでしまったのだ。しかも後藤君を諌めようとした星野君の顔が、後藤君とは逆に険しさが浮かび始めたのも穏やかじゃなかった。見る間に様子が変わった二人を佐藤君が心配そうに声を掛けても、答えるどころか黙り込んだままだった。それはまるで、犯人に心当たりがあるような――。

『フッ……フフ、オホホホホッ！　あらあら、そうですか……バスケ部の先輩！　万が一にもその方々が犯人ならば、誰を狙った犯行かは一目瞭然というところかしら？　……それにしても、良かったですわねぇ、そのバスケ部の三年生を見かけたのが荒井さんで！　他の方がそれを見ていたら、今頃とっくに尾島君に伝わって、暴力沙汰などというややこしい事態になっている可能性が高かったのでは？　どうやら彼は頭に血が昇りやすい性格のうえに前科があるようですし？　ですわよね、星野君、後藤君？　……荒井さんの冷静なご判断に感謝しなくてはねぇ、ホホホホホ～！』

『『『『……』』』』

笑い声は上げているが目は笑っていないブキミちゃんにロックオンされた後藤君と星野君は、益々口元をギュッと結ぶだけで何も言わなかった。

（……やっぱり三年生を見掛けたなんて、体育祭が終わってから言えばよかった。いや、男バスの先輩だって正直に言わないで、適当に誤魔化していれば……）

今頃になってバカ正直に話してしまったことを悔やみ、気が付けば私の口は勝手に開いていた。

「……あ、あの……が、学ランならすぐ見つかるよ！　だだだだって学校以外に持ち出されたなんてまずあり得ないし。なんか、あの校舎内にあるってブ……いえ、伏見さんも言ってたし！　念の為先生に言って二階の教室を開けてもらうって……ね？　音楽室と理科室の鍵、持ち出されたかもしれないし……。私が見た先輩達もたまたまあの校舎にいただけかもしれないし、もしかして見間違いってことも……」

私の言葉はすっかり慰めモードになっていた。奴隷呼ばわりしたヤツを励ますなんて、どうやら空腹のせいで頭が混乱状態になっているらしい。尾島はゆっくりと顔をあげた後、フンと鼻を鳴らし口の端をぐいっと上げた。

「……ったく、チュウに気を使われるなんてよ。マジ笑えねぇな」

「え？」

「学ランのことは、もうどーでもいいや。なんとなく、原因はわかってるしよっ。んなことより、問題はそこじゃねぇんだよな」

「……え？　え？　そこじゃないって――」

「そうだ。オレ様が言いたいのは、な～んでチュウはそんな大事なことを真っ先にオレに、言わねーのよ」

「っ！！　あ、いや、そ、それは……」

尾島は親指で私と自身のことを順番に指しながら言った。しかも声色がどんどん下がっていくにつれて、私の体温と安全度も徐々に下がっていく。まさか「ヤダァ決まってるジャ～ン、絶対暴力沙汰になると思ったからぁ、ウフ☆」などと正面切って言えるわけがない。

「こんの、バカヤローがっ」

眉間に皺を寄せ、吐き捨てた低い唸り声に、私は完全に固まってしまった。お盆分の距離に立つ男は腕を組み、トントンと足を鳴らしながらイライラした様子を隠さない。言い訳はおろか、謝ることさえ怖くて震えながら俯くことしかできなかった。

「ったくよぅ！　いいか？　そういう重要なことは、まずオレ様に言うんだよ！　なんでオレじゃなくて、後藤（ヒロ）や佐藤（カッコ）に言うんだぁっ？！　オメェはな、オレ様のオンナッ――！　……あ、いや、オン、オン……あっ！　おおお温水な！　そうだよっ！　こういうアチィ時こそ、温水だなっ！　体操着に汗染みて気持ワリィから、温水でも浴びてサッパリしてぇところだぜ！　なっ？！」

「……は？」

お盆にまで震えが伝わり、グラスがカチカチ鳴っていたのに、音が完全にピタリと止まった。

絶対怒鳴られると思ったのに――最後のセリフは一体なんなのだろう。今まで説教モードだった尾島が急に焦ったように話を全然違う方向に変えたので、私は顔をあげて僅かに眉根を寄せながら彼を見た。ついでに汗が思いっきり染みていると宣言した体操着を着ている尾島から控えめに一歩下がった。が、またもや睨まれたので、渋々半歩だけ戻っておいた。

「まぁ、なんだ。しょうがねぇ、今回だけは見逃してやる！　なんせオレ様は猪木大先生に次ぐ熱い闘魂の持ち主だからな！　だけどな？　次からは真っ先にオレ様だけに報告しろっ、いいな？！」
「……」
　別にアンタの許しなどなくてもよいよとツッコミを入れそうになったが、ギリで寸止めに見事成功。しかも許すのに猪木並みの闘魂が必要なのだろうか。それよりこんな事件が頻繁に起こってはたまったものではない。是非次がないことを願いたい。
「つ、ついでに言っとくけどな……今後一切、オレ様以外のヤローに気軽に話しかけるんじゃねぇっ！　まずはオレを通してからにしろ！　ましてや、女豹特殊訓練の成果をお披露目するなんてもってのほかだ！　わかったなっ？！　や、どうしてもっていうなら？　し、仕方がねぇから、オレだけには特別に許可してやるっつーか、むしろ特級編までみっちり付き合ってやってもいいっつーか……」
「は？」
「ババババカヤロウッ！　『は？』じゃねぇ！　と、ともかくっ、オレ様の言ったことを忘れるんじゃねぇぞ！」
「……ハァ」
　尾島は何を興奮しているのか、どもった挙句、パっと横を向いた顔は真っ赤だった。気のせいか女豹がどうのこうのとゴチャゴチャ言っていたみたいだが……後半は聞き取りにくかったなどと進言すればまた文句を言われるに違いないと思い、ここはスルーしておいた。要は尾島にとって、学ランが盗難にあったことは既にどうでもいいことになっており、自分が常に一番先に情報を掴んでないと気が済まないということだけはわかった。
　とりあえず学ランの件は落ち着き、説教が済んだようなので、適

当に頷いてこの場から退散することにした。それより早くグラスを持っていかねば、ブキミちゃんの機嫌を損ねてしまう。そんなことになったら目の前の尾島より厄介だ。尾島だってこんなところでのんびり油を売っている場合ではないだろう。最後のフィナーレを飾る、色別対抗リレーに参加することになっていたはずだから。

「……あ――」

「あんだよ！」

「ヒッ！　いや、その、あの、も、もうそろそろ、色別対抗リレーが始まるんじゃないでしょうか……私もグラスを持って行かないと……」

そろそろ行かないとお互いマズイことになりやすぜ、ダンナ！……などという気持ちを込めながら尾島の顔を見れば、「わーってるよ」と不貞腐れた態度で口を尖らせた。けれども一向に動く気配はない。

（こりゃ、ダメだ。先行くか）

「あの……他に用事がなければ、私はお先に失礼して――」

「待てよ、チュウ」

尾島は横を通り過ぎようとした私を、不貞腐れたままの態度で呼び止めた。本当に唇を尖らせ、前を向いたまま腕を組んでいる。

「……い、一回しかいわねぇからなっ。よく聞いとけっつーの！」

ヒュッと息を吸って吐き出された言葉は――。

祭りんときは、悪かった。

階段下の狭い空間に響く、尾島の低い声。

（……え？　「祭りんときは、悪かった」……って……え？）

彼の妙に通る声は、私の動きを完全に止めてしまった。
いや、彼の声が思った以上に低い云々のせいじゃない。その言葉の内容のせいだ。

（いま、尾島なんて言った？　確か……悪かったって――）

「あ、あんときは？　頭に血が昇ってたっつーか……。わ、わざとやったわけじゃねぇけど、怪我させたのはかわりねぇからよっ！　さすがに無視したままっつーのも？　その、目覚めが悪いっつーか、なんつーか……ていうか！　……左足、もう平気……なのかよ……」

尾島の声が段々小さくなるにつれて、彼の顔は真横に立っている私とは真逆の方向へ逸らされた。私が何も答えず唖然としたまま彼の真っ赤になっている耳と形のいい後頭部を凝視していると、尾島は急にグリンと勢いよくこちらを振り返った。

（え？！）

その顔はどうみても真っ赤なお猿さんで――。

これが丸坊主だったら茹でダコというところだが、もちろんそんなことは言えない。しかも向けられた顔は言葉の内容からかけ離れていて、たれ目も吊り目になるという異常現象が起きている険しい

顔だった。

（な、何か……嘘……）

私の中で得体のしれない何かがこみ上げてきた。

信じられないことに、あのクラスのボス猿が、人のことを奴隷呼ばわりしていた男が、顔を真っ赤にして謝罪をしたうえに、人の怪我の具合を心配しているらしいのだ。羞恥の為か目も若干潤んでいる尾島の顔をアホみたいにボケーと眺めていると、徐々に口元が緩んできた。私が変に何かを我慢している顔が尾島には気に入らなかったのだろう。さらに眉間に皺を寄せた。

「あああんだよ！　人が謝ってるのに、何にも言わずボケッと見てんじゃねぇよ！」

尾島は一生懸命悪態ついていたが、なぜか怖いとは感じなかった。なんと言っていいのか――それは悪いことをしたのはわかっているけど、謝るタイミングを逃した酷く意地っ張りの小さな男の子のようで。いつも余裕綽綽で人のことをからかったり、バカにしたりするいつもの態度からは考えられないくらい好感が持てるものだった。

（やだ……ちょっと、なんだろこれ……）

私はここで笑ったらマズイと思い、一旦お盆に視線を落として息を吐き、堪えていた笑いや唇がにゅっと横に広がりそうな妙な力を逃がした。普通の顔をするのがこんなにも難しいなんて。でも決して悪い気分ではなかった。それどころか次第に鼓動が早くなる。

尾島が心配してくれたことが素直にうれしいと思った。

不思議なことに佐藤君のときとはくらべものにならないくらい温かい、いや、むしろ熱すぎるほどの感情が体中を巡っている。気が付けば尾島の赤い顔が私にも伝染していた。

「……あ、うん、ごめん、ね？　あああ足は、だ、大丈夫。もう平気で、今日の体育祭は念の為に、その、参加しなかっただけだから」

するっと素直な言葉が出た。

引きつり笑いなんかではなく、自然に笑っている自分がいた。

尾島も「そ、そうかよ……」と言ったきり口を閉じてしまい、私も何て言っていいかわからず妙な沈黙が流れたが、決して嫌な気分ではなかった。どちらかというと、ずっとこのままでいたいような、もっと話をしたいような、でも逃げ出したいような——酷くもどかしくて言葉にするものも難しい。

何か話したいのに話題が出てこなくて俯いたままモジモジしていると、横にいる尾島が動く気配を感じた。

「チュウ……あのさ……！」

「ははははいっ！」

掠れた尾島の呼び声に弾かれて顔を上げた私は、これ以上ないほどどもった声で返事を返してしまった。

いつのまにか尾島の切羽詰ったような真剣な顔が、ブキミちゃん並みの至近距離まで迫っていた。

（どどどうしようっ？！）

あり得ない距離にドキドキも最高潮になっていた。お互い探るように視線を絡み合わせ、まるで何かが起こりそうな――。

ガチャ……バタン！！

「「っ？！」」

近寄ったまま動かない私たちの間に漂う、言葉に表せない空気をバサーッと一刀両断し現実に引き戻したのは、渡り廊下へ続く校舎の扉が開き、閉まる音だった。

山野中体育祭！～幸福の赤いハチマキ？～（後書き）

きたーーっ！！　……でもやっぱり邪魔が入る二人。

山野中体育祭！～幸福の赤いハチマキ？～（前書き）

読者様によっては少し気味の悪い表現が出てきます、虫関係がダメな方、申し訳ありません。ｍ（＿）ｍ

階段下の狭いスペースで、お互いの顔を近くまで寄せていた私と尾島。

一瞬時間が止まったかのようにピタリと固まっていたが、校舎の扉が派手に閉まった音で弾かれたように絡み合った視線をパッと逸らした。

（ななな何やってんの、私は！）

何もやましいことはしていないのに、変に言い訳したいような、逃げ出したいような気分……。

（オバカ！　今はそんな事考えている場合じゃないでしょ？！）

そうだ。うかうかしている時間はない。こんな狭い場所で二人っきりでいるのを誰かに見られたら、それが原口だったら……大変マズイことになる。私は尾島に「リレーに行った方がいい、先にここから出て」と言おうとしたら、それより早く校舎に入ってきたらしき人物の声が聞こえた。

「おい、尾島（ケイスケ）、いるのか？！」

どうやら声の主は星野君のようだった。

彼がこっちの方へ歩いてくる気配を感じると、私だけではなく尾島も息を飲んだ。どうしようと尾島の方に視線を向けると、尾島は何を思ったのか、シーッと人差し指を口に当てた。「こっから出るな」と小声で囁き、廊下側から見えないように私の身体を階段で斜めになっている壁に押し付けた。「いいな？」と念を押す尾島に私が何度も頷いた後、彼はサッと身を翻して廊下に出た。

（……って、あれ？　なんで隠れなきゃいけないの？）

星野君なら普通に出ていけばいいのに、と思った。だって、彼な

ら変にからかったり、冷やかしたりはしない筈だから。それに尾島の友達だし。

そんなことを考えていると、二人の話し声が聞こえてきた。

『尾島(ケイスケ)！　そんなとこでなにしてんだ、リレーの集合場所に行けよ！』

『あんだよ、星野(カズ)かよ。いや～応援合戦で声張り上げたら喉がカラッカラでさ！　事務のオバチャンにいつものように麦茶を拝借して戻ろうとしたらな？　いや、そこで足がメチャ長くてデカイ例の黒い蜘蛛を見かけてよ～！　ほら、この間授業中に出ただろ？　青島(チン)先生(タオ)が捕獲し損ねたあの気味悪いヌシだよ！　相変わらず逃げ足が速いのなんのって、そっちの階段の下の非常口の方へ「シャカシャカ」ってさぁ～思わず追いかけちまった』

『……なにやってんだよ……。そんなの追いかけるなよ、気持ちワリィな』

（◆▽＊$＃&%@っ？！）

尾島は適当に誤魔化すために言ったのだろうが、私は青島先生(チンタオ)の歴史の授業中に出没し、大騒ぎになったあり得ない大きさの生物を思い出し、危うくここから飛び出すところだった。まさか本当にいないでしょうね？！　……と周囲を見渡してしまった荒井美千子。できればそんな話題出して欲しくなかったが、以外にも星野君には効いたようだ。尾島が不自然な場所から出てきたことに深く突っ込もうとはせず、嫌そうに窘めた声が聞えた。

『それよりこれ、尾島(ケイスケ)のハチマキだろ。応援合戦の後、学ラン脱いだついでに取ったのか？　後藤(ヒロ)は仕事があるから、一応頼まれて預かったんだけど』

『おっ、サンキュー！　……って、なんでこんなにハチマキ汚ねぇんだ？！』

『落ちてたみたいだぞ。派手に踏まれてたらしい。……で、荒井さんは？』
『いっ？！』
（えっ？！）

――前言撤回。
（なんか速攻バレとるがな！）
いきなり確信をついた星野君。彼の淡々とした問いに対して、尾島は返事を詰まらせた。

『……は……ぁ？！　なななんで、チュウ？！』
『だって、そこのドアのところに尾島（ケイスケ）と荒井さんの靴があるし。荒井さんグラスを取りに行ったみたいで、戻ってこないと伏見が怒ってた。麦茶飲んだなら、会っただろ？』
『ゲッ！』
（ゲッ！）

いろんな意味でゲロゲロ！　……的な私は、息をひそめて事の成り行きを見守るしかなかった。今更「ジャーン！」なんて効果音＆ポーズ付でここから出るわけにもいかないし。それより私がここにいるのが既にバレバレなら、隠れている意味がないうえに、それこそ「アヤシイことをしてました、エヘ☆」と自らバラしていることにならないだろうか。いやいや、そんなことよりブキミちゃんが怒っている方が問題だ。ゲロゲロなどと思っている場合ではない。私（カエル）に狙いを定め、蜷局を巻きながら舌をチロチロしている大蛇なブキミちゃんの幻が目の前にチラついている。
（なんか私、非常にヤバいのでは……）
最近蛇関係の人物（デビ●マンとベラ）と縁がありすぎだろと思っていた時、尾島のわざとらしい笑い声が聞こえた。

『ア、ハハハ！　あ、チュウね？！　チュウなら、ささささっき偶然バッタリあったかな！　え、えーと……そう！　学ランの犯人をあのチュウが見たって後藤達が言ったから？　仕方なく一応確認をとっていたんだよな！　や、誤解すんなよ？　オレだって好きこのんでこんなところにチュウと二人っきりでいたんじゃねぇぞっ？！　だだだから、別になんもやましいことなんてなんもしてねぇから！　ちなみにチュウはションベン行ったぜ？　ハハハハハ！』

『……ふぅん……』

尾島が慌てて捲し立てた言い訳と引き攣り笑いを、星野君は「Ａｈ，ｓｏ（あっ、そう）」といかにも信じてない的な相槌でスルーした。最初は尾島の言葉を肯定するように頷いてはいた私だが、徐々に心の中に砂塵が吹き荒れ、星野君がスルーした時には、砂嵐が巻き起こり先が見えない憤りと不愉快さで一杯だった。

（ほぅ、そうですか……。すみませんねぇ、好きでもない私と二人っきりなってしまって！　な、なによっ、大体こんなところに連れてきたのはアンタじゃないのさっ！　それにそこまで二人でいたことを否定しなくてもいいじゃないのよっ！　大体どうして誤解されちゃマズイのよ？！　しかもションベンって失礼な！）

原口に見られたらマズイと慌てた自分のことは棚に上げ、尾島の「偶然こんな事態になりました！　不可抗力であります！」な態度に、今度は恐怖ではなく怒りでお盆の上のグラスをカタカタ鳴らしてしまいそうな荒井美千子。今すぐにでも尾島にこのグラスとお盆を派手に投げつけたい。おかげで足の怪我のことを謝られたことや、僅かに淡いピンク色の雰囲気になった二人の時間などは跡形もなく吹っ飛んでしまった。

（バカヤロ！　もう絶対、絶対、二度とあの猿と二人きりになるも

んか！　……嬉しかったのに、せっかく素直に好きだなって思ったのに！　……って、や、やだ！　何考えてんの、私！）

何故ここで「好き」なんて言葉が出てくるのか。

（ち、違うよ！　「好き」とかじゃなくって……そう！　「好感が持てる」の間違いじゃん！）

カーッと身体中が熱くなった。ずっと心の奥底で発火し熱を含んだ煙がモクモクと立ち上ったせいなのか。この苦しくむせるような感覚は、今にもわかりそうな答えが見えないからなのか。それとも、見えそうになるのを恐れているからなのか――。

とりあえず頭の中で煙を一生懸命払っていると、急に雰囲気がガラリと変わった星野君と尾島の低い声が聞えてきた。

『……それより、ちょうどよかった。他の連中がいないうちに言っとく。尾島（ケイスケ）、学ランの件、もうこれ以上騒ぎを大きくするな』

『あぁっ？　なんだよ急に……それに騒ぎを大きくするなって、どういうこった』

『間違っても制裁なんて考えるなってことだ。そんなことすれば要らぬところに火の粉が降りかかる』

『あんだよ、星野（カズユキ）……じゃぁなにかっ？　このオレに、あの「クソ野郎」から売られた喧嘩を黙って見過ごせってゆーのかよっ？！』

『そうじゃない！　……けど、あんな幼稚なイタズラなんかほっとけ。さっきの応援合戦で充分だろ。それに、せっかくの荒井さんの好意が無駄になる』

『はぁぁっ？　なんでここにチュウが出てくんだよっ！』

『荒井さん、きっとこうなることがわかってて、昼休みの時わざと尾島（ケイスケ）に言わなかったんだ。あの時、あの校舎に三年がいたって正直に言っていれば、みんなから疑われずに済んだのに』

『オレは疑ってねぇ！！』
『わかってる！　……それより騒ぎが大きくなれば、余計な事態を招く。もしあの連中が、自分たちを見た人物が荒井さんだと知ったら、荒井さん、トバッチリ受けないか？　昔、俺らが受けたような嫌がらせ、されないか？』
『あぁっ？！』
『あの連中がやらないって保障、あるのか？』
『バカ言え！　だからその前にキッチリと落とし前を付けさせるんだろーがっ！　第一チュウに手を出してみろ……今度こそ、ボッコボコにすんぐらい締め上げるってんだよっ！』
『尾島（ケイスケ）！！』
『うるせぇっ！　オレに命令すんじゃねぇっ！』
『そうじゃない！　……けど万が一喧嘩になって、それが明るみになったらどうする？　せっかくバスケをヤル気になったのに、バスケ部はおろか、サッカー部まで巻き込んだらどうする？　それこそあの連中の思うつぼだろ。それに……荒井さんはそんなことをして欲しくないから、尾島（ケイスケ）に黙ってたんじゃないのか？　あの時原口や成田達に疑われても、尾島（ケイスケ）やクラスの連中の前じゃなくて、わざわざ佐藤や後藤（ヒロ）にこっそりと教えたんじゃないのか？』
『……わーってるよ……んなこと、星野（カズ）に言われる前からわかってるんだよっ！　けどなぁ……クソぉっ！！』

昼休みの時、尾島が黒板を叩いた時のような激しい音が聞こえてきた。でもそれ以降は、二人の会話は私の耳にまったく入ってこなかった。
再び身体が震え出しそうになるのを一生懸命堪えるのに、精一杯だったから。

その震えは――恐怖でも怒りでもなく、信じられないことに、感

動によるものだった。

二人の会話の内容は物騒であり、怒りを剥き出しにした発言は鋭いナイフのようで……正直ものすごい怖かった。

でも――。

感情の赴くまま、なんのためらいもなく突っ走ることができる尾島。思った通り冷静に対処してくれた星野君の落ち着きのある態度。例え言い合いになっても、二人の間に、いや彼らの周囲に存在する確かなな絆（もの）。

見たことのない、男の子の世界。

苦手で、意地張って見ようとしなかった、尾島を囲む世界。

そしてなによりも……ギュウッと心が捻じれるほど切なかったのは、私の気持ちを酌んでくれた星野君の数々の言葉と、まるで私になにかあったら守ってくれるような尾島のセリフ。

（嬉しい――）

さっきまで感じていた煙のようなもどかしい気持ちは、吹っ飛んでしまった。

代わりに湧き出てくる愛おしいような温かい気持ちは、紛れもなく確かなものだった。思い過ごしでも勘違いでもなかった。しっかりと全身全霊で感じていた。

私は認めざる負えなかった、

彼らの魅力を。彼らの周りに人が集まる理由を。
怖くて、鋭くて、凶暴で、苦くて、でも暖かくて……そんな彼らの世界を覗いてみたい気持ちを、放って置けないと思ってしまう気持ちを。

私はいつの間にか座り込んでしまい、歪んで見えるタイルの床をジッと見つめていた。

山野中体育祭！～幸福の赤いハチマキ？～（後書き）

蜘蛛の件は実体験です。授業中に出没し、生徒も先生も震撼させたありえない大きさ。虫嫌いの私としては、衝撃的な映像でした。ストーブの排煙溝らしきところに逃げたのですが、それ以来行方知れず……卒業まで二度と会うことはありませんでした。

『それでは第２位のチームを発表に移りたいと思います！　１位と２位のチームはかなりの接戦でした。両チームとも追いつけ追い越せの勢いで、首位争いを展開した結果……第２位は総合得点３３０点で、赤組チームです！　そして優勝は、３５０点で青組です！　おめでとうございます！』

アナウンスを担当していた生徒は、終盤に差し掛かりだいぶ小慣れてきたのか、タップリ間を開けてから結果を発表した。

２位の順位が確定された時点で赤組の生徒たちは落胆の悲鳴を上げ、離れたところにいる青組の生徒たちは、大歓声を上げた。それに追い打ちをかけるように発表された青組の優勝。

『第２位の赤組応援団長、表彰台の方へお願いします！』

私の周りからワァッと歓声が上がった。

優勝は逃したが、２位という結果に満足したようにたくさんの拍手と口笛が、表彰台に上る赤組応援団長の辺見先輩に送られた。辺見先輩は周囲に乗せられたように、壇上へ上がった途端ガッツポーズを決めて生徒たちにアピールしている。それを見ながら、「このドスケベ！！」などと訳の分からないヤジを送っているのは、少し斜め前に立っている男。ヤツの前に立つ諏訪君と一緒にふざけた声援を送る男。

熱い――。

動いてもないのに、拍手をしているだけなのに、その男の声を聞くだけで頬が熱くなった。

『それでは最後に優勝した青組の応援団長、表彰台の方へお願いします！』

生徒のアナウンスの後に聞こえた、「貴子！」と叫ぶ和子ちゃんの声で熱が僅かに散った。

隣の2組の男子の列を隔てて立っている和子ちゃんの方を向けば、満面の笑顔だった。和子ちゃんの前にいる貴子の顔を見れば俯いて苦笑いをしており、和子ちゃんから「顔を上げろ」と急かされている。私も壇上のマイクの方へ視線を移すと、賞状を授与するときの定番の音楽が流れ、壇上に上がっている校長先生が生徒会の人から優勝旗を渡されているのが見えた。すぐに青組応援団長の日下部先輩も壇上に上がり、校長先生から優勝旗とトロフィーが手渡されると一斉に強くなる拍手。私もクラスの最後尾でその様子をボンヤリと見ながら拍手を送っていた。

まだ、熱い――。

異常に身体が火照っていた。

この熱さは、体育祭のクライマックスを飾る色別対抗リレーの前から、湯呑を給湯室に置きに行った後で「あの男」と話をしてから酷くなった。そして、閉会式をしている今も尚燻り続けている。全身を駆け巡るこの熱は、どうやらを「あの男」を見る度に、そして、私の首に掛けてある汚いハチマキを意識するたびに濃度が増すのだ。

尾島の汗が染みて、踏まれた汚いハチマキを首筋に意識する度に。

＊＊＊＊＊＊＊

尾島と星野君が話しているのを息を顰めながら聞いていた私は、頬に流れた温い涙を指で拭った。

尾島が壁を蹴った後も二人は少し言い合いになっていたみたいだが、大きい怒鳴り声をあげることはなく、そのうち星野君の「先に戻ってる。早く入場門へ行け」の言葉を最後に声が聞えなくなった。

てっきり尾島も一緒に行くと思ってたのに……確実にこちらに近付いてくる足音に現実に引き戻された。どうしようと意味もなく焦る心。それは、二人の会話を盗み聞きしたからなのか。まだ尾島は怒っているかもと恐れているからなのか。それとも……。

『チュウ』

さっきまで怒鳴っていた声とは打って変わり、静かな声だった。名前を呼ばれると、私はビクッと震えてさらに顔を俯かせてしまった。目に溜まっていた涙はもう拭ってしまったが、まだ涙目になっているだろうと思うと恥ずかしくて、顔をあげて尾島を見ることができなかった。上から聞こえてきた溜息にさらに縮こまっていると、空気が動くのが分かった。目の端には尾島の足しか見えなかったのに、しゃがみ込んだのか、膝に腕をかけているのが見える。ヤンキー座りをしている尾島の手には赤いハチマキ。星野君が言ったように、派手に踏まれた汚いハチマキ。顔を見れずにハチマキばかり見ていると、下からヌッと顔をのぞかれた。

『おい。チュウのくせにシカトしてんじゃねぇよ！』

『っ？！　ち、ちがうっ！　シカト……なんて、してな……い』

尾島の口調がいつもの調子に戻っていたので少しずつ顔を上げると、そこにはやっぱりいつもの生意気そうな顔。人を小バカにした

ような、いたずら小僧のような、ろくでもないことを考えているような、ニヤリと口の端を上げている顔。普段は憎たらしいその顔と声に、なぜだろう、ホッと安心してしまった。

『ったくよぉ。なーに泣いてんですか！　チュウが学ラン取られたわけじゃあるめぇし。あ～もう星野（カズユキ）は行ったから、チュウも行け？　……おっと、その前にここで話したこと、内緒な？　ついでに、オマエが校舎で見た三年のことは忘れろ。誰かにしつこく聞かれても無視だ。いいな？』

私は慌てて頷いた。

『よし。あと知ってるのは、後藤（ヒロ）と佐藤（カッコ）と星野（カズユキ）と……伏見（ブキミ）か。ヤローはいいとして……ッチ、まーた厄介なのに首突っ込まれたぜ。あの女、神出鬼没でホントうぜぇな。妖怪かよっ！』

『……』

「アンタがそれを言うか」とは言えず、とりあえず無言で通していると、尾島は真面目くさった顔で私の顔をジッと見た。――と思ったら、突然にゅっと伸びてきた尾島の手。ギョッとして身体を仰け反らせると、その手は私の頭を優しく撫でた……と思ったら、そのまま押すようにグイッとハチマキを掴んで後ろにずらした。おかげで頭ごと首を後ろに引っ張られ、気が付いた時にはハチマキを取られていた。

『ちょっ、な、なに？！』

『いちいちうるせぇなぁ、チュウは。ハチマキ取っただけだろうが！　え？　なになに？　是非このハチマキと汚い尾島様のハチマキを交換したいって？　仕方ねぇな、そこまで言うなら交換してやるか！』

『え……えぇっ？！』
『しょうがねぇ。オレ様はチュウので我慢してやっかな～』
『はぁっ？！』
『……あのな。競技にも出ず、ただボケッとつけられているだけで全然活躍の場がないこのチュウのハチマキを、少しでも昇華してやろうっていうこのオレ様の親切心がわからんかね？　相変わらず鈍臭いね、君は！　こう、もっと上手く空気を読め？』
『……（そういうアンタは空気を読むどころか、読み間違えてるだろーが！）』
『なんか言ったか？！』
『……いえ。た、ただその汚い自分のハチマキをするのが嫌なだけなんじゃないかと……』
『バカヤロ！　そこは読まなくていいンだよ！　いいか、良く聞け？　このオレ様のハチマキにはな、汗と汗と汗がっ！　……あぁ、鼻水もついてたっけか？　ともかく！　３倍濃縮の汗と将来有望であるオレ様の青春の欠片が詰まった貴重なハチマキなんだよ。心して受け取れや！』
『汚なっ！　……あ、いや、その……や、そそそんな困るって！』
『バカ、ここは遠慮するところじゃねぇンだよ！　ま、オマエの哀れなハチマキをして、トップを走ってやりますから？　有難く思えってことだ！　つーわけで、リレー絶対見逃すんじゃねぇぞ？　じゃ、オレは行く』

急にすくっと立ち上がった尾島。彼の手にある私のハチマキを慌てて掴もうとしたが、ドジョウのようにスルッと逃げられた。汚い自分のハチマキを私の頭の上に残して。

『クク、美千子じゃなくてニブ子だな』
『っ？！』

急に下の名前を呼ばれたので、ドキーっと心臓が跳ね、バカみたいに唖然としたまま尾島を見上げてしまった。その隙に笑いながら階段下から飛び出して走り出した尾島。私が後を追って慌てて廊下に出たときは、既に扉の所で靴を履いていた。

『お、尾島！　ちょっと、待って！』

『オレ様の活躍見て腰抜かすなよ、チュウ！』

尾島は片目を瞑りながら舌を思いっきりグイッと出し、両手でサムアップをビシっとキメた後、扉の向こうに消えた。

＊＊＊

それから私は、異常に早くなる鼓動を持て余しながら、グラスを急いで本部席の方へ持って行った。

ブキミちゃんに怒られると覚悟していたが、幸いなことに生徒会の人達はそれどころではなく、閉会式に向けての準備でてんやわんやだった為、私のことはすっかり忘れられていたみたいだ。とりあえず持ってきたグラスに麦茶を淹れて、役員席に運んだ。配り終わると同時に、体育祭のメインイベント、色別対抗リレーが始まる。

音楽に合わせ入場門から出てくるリレーの選手たち。

各クラスから男女一名ずつ選ばれた先鋭部隊が所定の位置に待機した。

私は来賓席の横からこっそりとトラックを窺っていた。

用事が終わったので応援席に戻っても良かったのだが、なぜか戻

る気にはなれなかった。
――だって、私の居た場所は、来賓席の前にあるトラックを挟んでちょうど選手が待機する場所が見えたから。誰にも邪魔されずにそっと一人で、選手達を見れたから。

選手の中に混じっている貴子と目があった。こちらに気付いたのか、一生懸命手を振っている。私もそっと手を振りかえすと、貴子の仕草で気が付いたのか、私のハチマキをしている男もこちらを見た。

（尾島……）

また心臓が跳ねたのはどうしてだろう。なぜ鼓動が早くなり、指先が震えてしまうのだろう。

恥ずかしくて、不自然に目線を逸らしてしまった。
私を見てたんじゃないよねと思い、後ろや周囲をキョロキョロみたが、誰もいなかった。
（き、気のせいだよね……そうだよ、自意識過剰なんだよ、私ったら！）
ハハっと笑い、もうこっちを見てないだろうと、もう一度そっと尾島の方を見れば……。

（……ど、どうして――）

この喧噪の中、真っ直ぐにつながった一つの線。
尾島はやっぱり私の方を見ていた。

今度は逸らさなかった。逸らせなかった。

この時の私は、貴子でもなく、青組のアンカーの襷（たすき）をして何か言いたそうにして眉根を寄せている雄臣でもなく、尾島だけを見ていた。

各色の一年生がスタートラインに立ち、ピストルの合図で一斉にスタートをしても、一瞬気を取られただけで、また目で尾島を追ってしまった。

仲間を応援する尾島から、時々私の方を見る尾島から目を離せなかったから。

熱いグラウンドを次々と滑走する選手たち。

赤と青が接戦だったのに、途中で赤組の選手がバトンを落とすと、歓声と悲鳴が沸き起こった。

最下位に順位が下がった赤組は、2年2組の代表である笹谷貴子にバトンが回ると、彼女がぐんぐんと追い上げ、3位を走っていた緑組の女子を抜かす一歩手前まで近付いた。そして、貴子から二年の最後の滑走者である男子にバトンが渡る――。

『貴子、急げ！！』

そう叫んだ尾島。バトンを貴子から受け取った瞬間、バトンゾーンから電光石火の如く飛び出した。

私の目は、初めてトラックを走る選手に向けられた。

コースにそって疾走する、尾島の背中に釘付けだった。

活躍の場がなかった私のハチマキを靡かせがら、あっという間に3位の緑を抜かし、コーナーに差し掛かる尾島。赤組の応援席の近くまで走って来た時には、2位の黄色の選手と並んでいた。

ここからでも原口美恵が前を陣取って一生懸命応援しているのが見えた。

今なら彼女の気持ちがわかる。わかりすぎるくらい、わかる。

とうとう最後のコーナーに来た尾島は、前を走っている青組の選手の背後に近付いていた。どんどん距離が縮まる赤と青。トップを走る青組の選手は、確か陸上部。学年で一番の俊足の持ち主。それにも引けを取らぬ尾島の足。

『ま、オマエの哀れなハチマキをして、トップを走ってやりますから?』

(……本当に?)

いつもの調子いい冗談だと思っていたのに。

いつのまにか——私のためであって欲しいと祈っている自分がいた。

気が付けば、私は首に掛けている尾島の汚いハチマキに触れていた。なんとなく恥ずかしくて頭にはつけられなかったハチマキ。心の中で、あと少し、あと少しと声援しながら、そのハチマキを握っ

ていた。握りしめたところからジワジワと熱くなった。

（頑張れ……頑張れ、尾島！）

祈るように両手で鉢巻を強く握りしめた刹那、赤と青が並んだ。
その光景は私にはスローモーションのようで――時間が止まったかのように見えた。何も音が聞えなかった。

そして、とうとうバトンゾーンの手前で赤が青を追い抜かし、尾島がトップに躍り出た瞬間――。

『赤組が青組を抜かしました！！』

実況中継のアナウンスと今日一番の生徒達の歓声が私の中に飛び込んできた。

尾島はその勢いのままバトンを三年に引き継ぐと、バトンゾーンから流れるようにコースを逸れて失速し、フラフラになりながらその場に座り込んだ。

尾島に群がる滑走済みの赤組の選手たち。
ますます赤と青はデッドヒートを繰り返し、佳境に入る色別対抗リレー。

でも、私の視線は――。

トラックを走っている選手ではなく、相変わらず仲間から激励を受けて叩かれている尾島に注がれていた。

青組のアンカーである雄臣が赤組を抜かして劇的にテープを切っても、私には尾島の姿しか目に入らなかった。

山野中体育祭！～オマケの学ラン盗難解決編～

ここで無くなった学ランの行方が気になる読者様の為に、事件の顛末を述べたいと思う。

結果から報告させてもらえば、学ランは体育祭終了後その日のうちに見つかった。しかも一階の「ある部屋」で発見されたのだ。

体育祭が終わり、佐藤君がボロ校舎の二階の教室を開けてもらおうと担任の青島（チンタオ）先生にお願いしたが、先生方は片づけ等で手一杯だったため、先生が来る前に再度一階の捜索を試みた尾島達。

今度は隣の二組の人達にもお願いして教室をよく調べてもらい、さらに鍵が閉まっていた一階奥の「生徒会室」も徹底的に調べることになった。生徒会室を調べると聞いたブキミちゃんは眉を顰めたが、彼女自身「二階を調べましょう」と言った手前、この部屋を捜索しない訳にはいかなかった。そして、ここで意外な事実が発覚する。

現会長の片岡（ツルちゃん）君が生徒会室の鍵を開けたのだが、扉が開かなかったのだ。

ボロい校舎なので、建付けが悪くて扉を開けるのにちょっとしたコツがいるらしいのだが、どんなに頑張っても開かなかった。感触から言ってどうやら扉に何かが引っ掛かっているとのこと。開けるには扉ごと取り外さないとダメということが判明し、どうしようかと顔を見合わせていると……傍にいたブキミちゃんは怪しい宗教団体の祝詞のように低いハスキーボイスを轟かせた。

『……なるほどね。そうですか。どうやら窓を調べた方がよさそうね』

眼鏡と歯列矯正の歯をギラリと光らせたブキミちゃん。どうやら

彼女は、自分の聖域（テリトリー）が事件によって荒らされたかもしれないことに、いたくご立腹のようだった。

足音を立てずにものすごい速度で闊歩するというスゴ技を披露し、校舎の外に出て裏手に回ったブキミちゃん。

弾かれたように彼女の後に続く尾島達。

生徒会室の窓の下にある花壇に入り込もうとしたブキミちゃんは、ここでも名探偵ぶりを発揮し、ある重要な手掛かりを発見する。普段誰も来るはずのない花壇の土に足跡を発見したのだ。さらに閉まっている筈の窓に手を掛ければ、その窓はカラカラといとも簡単に開いた。

『フッ……フフフ、そういうことですか……』

後ろで黙って固唾をのんで眉根を寄せていた尾島達は、ブキミちゃんがおもむろに振り返り、般若……いや、花のような笑顔で「入れ」と顎で合図すると、花壇の足跡を消さないようブキミちゃんの注意を守りながら、一斉に窓に手を掛けて一気に攻め込んだ。ガサ入れ開始から数秒も経たないうちに――。

『……あった、あったぞ！！』

まるでお宝を発見した海賊のごとく、狭い生徒会室には歓喜の雄叫びが響いた。

そう、学ランは生徒会室の奥の方に段ボールごと無造作に転がっていたのである。急いで中身を確認すれば、学ランは無事だった。しかし、犯人は用意周到にも学ランの背中の「闘魂」の文字を所々剥がし、生徒会室の入口は引き戸のところに机を置いて開かないように細工してあったのだ。

意図的で悪質な犯行に、一組の生徒、特に応援団員や体育委員は怒りを露わにしたが……被害者の中心人物である尾島が扉を塞いで

いた机を蹴飛ばすと、その場にいた全員が黙ってしまう。そんな重い空気を破ったのは、冷静沈着な手強いスゴ腕名探偵・伏見かおり。

『どうやらこの校舎に侵入したのは、少なくとも三人以上だったようですね。彼らは生徒会室の鍵を開けて中に学ランを隠し、三人は生徒会室の入口から出て鍵を掛け、残りの生徒は中から扉を机で塞いだ後、窓から出たというところかしら。花壇に足跡も残っていますし、まず間違いないでしょう。足跡のサイズからいくと、どうやら男性のようですわね。２６センチはありましたから。さて、尾島君。アナタとしては自ら制裁を加えたいところでしょうが、残念ながら生徒会室の鍵を勝手に持ち出されたという由々しき事態が起こった以上、生徒だけで解決するには、いささか手に余る事件だとワタクシは考えます。ここは“あの時のように”勝手な判断で動くのではなく、先生方に詳しい事情を説明して支持を仰ぎ、大人しく処遇を待つというのが正しい判断だと思いますが、いかがです？　既に赤組の応援合戦で、事件は半分以上露見したも同然ですし。先生方もさすがに黙ってはいないでしょうから』

ブキミちゃんは色々意味深な言葉を残しながらチラリと尾島に視線を流すと、尾島は何も言わず槍の先のような鋭い視線でブキミちゃんを一睨みしただけで、思いっ切り音を立てながら生徒会室の扉を開けて出て行ってしまった。

＊＊＊

ブキミちゃんと佐藤君は尾島達に宣言した通り、事の顛末を先生方に報告した。

この時応援団の人達もその場にいたのだが……報告を受けた青島（チン）先生（タオ）は、そんなに騒ぐほど重要な事件と思っていなかったらしい。これがごく普通の生徒だったら「山野中でイジメ発覚か？！」と深

刻な事態になるところだが、狙われたのが学年一のお騒がせ男だったからなのか、

『まぁ、見つかって良かったな！　それにしても、手の込んだことやるなぁ。悪戯にしちゃ、ちとやりすぎだぞ？　犯人はよっぽど暇だったんだな。ハハハハハ』

……などと笑い飛ばしていたそうだ。さすがに尾島がいる手前、「そうですよね、酷いですよねぇ。ハハハハハ～」と朗らかに返す人はいなく、全員黙ったままだったということだ。

事件は一応解決したが、生徒会室の鍵を勝手に持ち出されたのは事実なので、先生達は一応犯人と思われる人物と目撃した私を呼び出した。それを聞いた尾島は、「体育祭も終わったし、学ランも見つかったからもういいだろ?!」と消極的な意見を言い周囲を驚かせたが、事が事なので結局彼の意見は却下された。

呼び出された犯人達は事件の関与を否定した。

私が先生に話した目撃証言にも、「勘違いだ、証拠があるのか」で一蹴されてしまった。逆に「生徒会室にあったのなら生徒会の連中がやったのでは?」ととぼける始末。しかし生徒会の人達は全員グラウンドで仕事していたというアリバイがあったため、その意見は聞き入れてもらえなかったみたいだ。すると今度は、「目撃したヤツが怪しいんじゃないか」など言いだしたのだ。思いもよらぬ反撃に動揺しまくりの荒井美千子、いつものようにピンチ！　……が、神はここでも哀れな子羊を見捨てなかった！　私以外にも彼らがボロ校舎から出ていくところを目撃した人が何人かいたのだ。しかもその時間帯に彼らが応援席に座っていない事実も発覚。更に花壇の足跡と、生徒会役員である一年男子が、犯人の友人と思われる人物に生徒会室の鍵を渡したことが決め手となった。

その一年生は、片岡君（ツルちゃん）の命令で生徒会室の鍵を職員室に戻そうと

校舎に向かったところ、体育委員らしき三年の先輩から、「用具倉庫の鍵を返しに行くから、ついでに返しておく」と声を掛けられたそうだ。一年生は自分が後輩だし、先輩の分も返しに行くと言ったが、「一年男子、集合かかっているぞ」と言われ、先輩の行為に甘えてお願いすることにした。忙しさの中ですっかりそのことを忘れていたが、生徒会役員が疑われ、ブキミちゃんからひとりひとり尋問を受けたときにそのことを思い出したのだった。

こうして全て証拠がそろうと、とうとう犯人たちは観念し、犯行を認めた。

その後犯人たちは、先生方の形だけの説教を聞くだけで、特に重い処分を受けることはなかった。反省文と学校の周囲に落ちているゴミを拾うという奉仕活動を言い渡されただけだ。それでも一応、先生達は学ランを隠すほど悩める事情を抱える犯人達からひとりひとり犯行動機を聞いた。事件に関与していた人物は全部で五名いたのだが、そのうち生徒会室の鍵を一年の役員から受け取り犯人に渡した人物は、「友達に頼まれたから」だそうで、まさかこんな事件になっているとは露知らず、非常に慌てたらしい。残りの四名、私が目撃した三名と窓から脱出した人は頑なに口を閉ざし、結局最後まで何も言わなかった。その四名は全員バスケ部だったので、先生方も部活の先輩後輩同士でなにかあったのだろうと、後は部活の顧問も交えて彼らで解決することとなったのだが、先生方は犯人よりも、被害にあった尾島やその友人である桂龍太郎の行動を警戒していた。「犯人と揉めるんじゃないか」と。しかしそれは杞憂に終わったようだ。

その後尾島と犯人達の間には特に何もなかった。……あくまでも「表面上」のはなし、ではあるが。

この先述べることは噂であって、本人達全員から直接聞いたわけではないのでこっそりと皆様にお伝えしたい。

私が校舎で見かけた犯人達、中でも辺見先輩の友人で唯一顔を覚えていたバスケ部の先輩は、小学校時代に尾島とバスケのポジション争いをしていたという過去があったようだ。二人はそのころから何かと衝突することがあり、その宥め役が辺見先輩と後藤君だった。たまに小関明日香が宥めに入ると余計に険悪になり、その先輩が大野小を卒業するまで連日一触即発の状態が続いたという。どうもその犯人は小関明日香のことが気になる存在だったようで……彼女が尾島に味方し、いつも傍にいるのも気に入らない原因の一つだったらしく、廊下で星野君が言ってたように、尾島の友人たちに嫌がらせをしていたみたいだ。

中学に入り、尾島がサッカー部に入ったおかげで一年の最初の頃は特に何もなかったのだが、文化祭あたりから再び雲行きが怪しくなる。文化祭のリハーサル時に尾島のバスケのプレーを見てお熱を上げ、のちにバレンタインのチョコを渡した当時二年バスケ部女子が、またもやその犯人の気になる女の子だったのだ。好きになった子を二度も尾島に奪われ（？）、急にバスケ部に復帰した尾島に大きな顔をされ、友人の辺見先輩は尾島を可愛がるとくれば、犯人が尾島を恨んで学ランを隠すのも無理はないのかもしれない。私に罪を着せようとしたその根性は気に食わないが、同情には値する。それでも尾島にしてみればいい迷惑だろうが。

彼らがその後どう折り合いをつけたのかは知らない。この時点で犯人たちは既に部活を引退しており、尾島と接触する機会も無くなっていたので、特に部活内で揉めるなどということもなかった。ただ――辺見先輩とその犯人は疎遠になったらしいが。

そのうち学ランの事件を話す人はいなくなり、秋の気配が濃くなり寒さが感じられる頃には、生徒達からすっかり忘れ去られてしま

うのであった。

「ありがとう美千子ちゃん！　こんなおいしそうな差し入れをしてくれて、いつもいつも悪いわねぇ」
「い、いえ！　喜んでくれて光栄です」

持ってきたケーキの白い箱を開け、目尻をくしゃりとさせて笑った安西先生に、私はとんでもないと手を思いっきり振った。相変わらず東小父さんに似ている極上スマイルに顔が緩む荒井美千子。安西先生はそんな私の締まりのない顔から部屋にある壁時計に視線を移した。時間を確認すると嬉しそうにこちらに振り返る。

「よければ美千子ちゃんも一緒にお茶していかない？　ちょうど私たちもそろそろ休憩にしようかと言ってたところなのよ。ねぇ、みなさ～ん！　教え子がお菓子をもってきてくれたのよぉ。一段落していたら、食べましょうよ！」

安西先生は区民センターの一室であるこの多目的室にいる人達に声を掛けると、作業をしていた人達は「まぁ！」と顔を綻ばした。次々と手を止めてこちらにやってきたのは、先生や自分の母親ぐらいの年齢の女性ばかりだった。この部屋に入った時から感じていた化粧品独特のいい香りが、彼女たちが近付くと更に強くなった。

「このお菓子、見て見て！」

彼女たちに声を掛ける今日の安西先生はいつも以上に美しい。普段はナチュナルメイクだが、今はバッチリ化粧を施しキッチリと仕事をしているワーキングウーマンだ。英語の先生とは少し違う雰囲気……そう、デパートの化粧品売り場の売り子さんのような華やか

さを身に纏っている。新色の化粧品を紹介し、メイクをお披露目する販売員の顔だった。

安西先生に「お茶を入れる準備をするわ」と声を掛けた人もやたらキレイな人だった。綺麗に化粧を施しているところをみると、その人も販売員さんなのだろう。二人以外の人達はお客さんや誘われたお友達のようで、先生を含め全部で7名ほどいた。

（聞いていた人数より少ないな……）

箱に入っているお菓子の数はちょうど十二個。全部で十名ほどお客さんが来ると言ってたのに……でも足りないよりマシかと思っていたら、安西先生は改めて私のことをみんなに紹介してくれた。妙齢の女性たちの前で頭を下げつつ、「み、皆様でどうぞ」とお菓子の入った箱に手を添えると、女性陣の皆様は大きめの白い箱に規則正しく鎮座している「シュー・ア・ラ・クレーム‘シーニュ’」を覗きこんで感嘆の声を上げた。白鳥の形をしたシュークリームはどうやら好評らしい。

「これ、もしかしてあなたの手作り?!」

安西先生よりも年配だと思われる、首にケープを巻き、完全に化粧を落としたすっぴん顔の女性に問われると、私はギョッとしながらもぎこちなく頷き、「ハイ。あ、でも、母にも手伝ってもらいました」と答えた。

私の言葉に目を丸くした中年の女性はホォとため息をついた。

「……やっぱり女の子はいいわねぇ。うちなんて男三人だから、こういうお菓子なんて普段まったく縁がないもの！　例え作っても、きっと無言ね、無言。むしろ感想聞いたら　ろくなこと返ってこなさそうだわ」

「それわかるわ～！　挙句の果ては『これだけ?』なんて言うのよ

ね～」

「そうそう！　腹一杯になんないとか言い出すしねぇ。カップめんとか勝手に出してくるし。オマケに身体大きいし、部屋汚いし、服脱ぎっぱなしだし、平気でオナラするし、すね毛濃いし、朝全然起きないし。まったくどうして男の子ってああなのかしら？」

「「「「「ホントよね～！！」」」」」

どうやらここにいる女性の大半はご家庭に男の子がいるらしい。眉毛がないメイク途中やすっぴん丸出しのまま「カカカカ」と豪快に笑っていた。

「……」

コメントなんぞ百年早い若輩者の私としては、無言のまま引きつり笑いをするしかなかった。そのまま静かにしていると、安西先生もフフっと笑みを零しながら「ホント、そうよねぇ」といいながらウンウン頷いて同意していた。

「あら、でも安西さんのところの息子チャンは、全然違うでしょ？」

「そうよぅ！　それにほら、あの素敵な甥っ子さん！　あ～んな息子がいたら、オチオチこんなすっぴんで家の中もうろつけないんじゃない？」

この年頃のオバチャンがよくやる招き猫のように手を動かす仕草に、なぜか確固たる年季をひしひしと感じる荒井美千子。安西先生も見た目は若々しく美しいのに、やはり子供をもつ主婦だからか。同じような仕草で返してもなぜか違和感を感じられなかった。さすがなんだかんだで２４時間休む暇もないスーパー主婦達。恐るべし、ザ・オカン。

「そりゃ雄ちゃんに対してはねぇ。さすが甥っ子でも、やっぱり気を使うわ。でも、アラタの方はね、そうでもないのよ？　最近なんて何考えているかさっぱりわからなくて、困りモノなのよね～。中学生になってから全然話し相手になってくれないし。何か聞いても、『あぁ』とか『うん』とか『そう』とかしか言わないのよ？　そのうち『ウザい』とか言われるんじゃないか心配で～」

「そうそう！　わたしも『ババァ』って言われた時は、さすがにビビったわ！」

「それを考えると、やっぱり女の子は最低でも一人は欲しいわよねぇ」

安西先生が頬に手を当てながらフゥっとため息をついているのを見て、「そうなのかな」とアラタの顔を浮かべた。

（……アラタ、ねぇ。別に普通だと思うけど。……あ、でも、やっぱりちょっと話す機会はなくなったかなぁ。なんか、真美子ともあんまり喋っていないみたいだし。いいのかなぁ、このままで。だけど……当の真美子があれじゃぁねぇ）

相変わらず雄臣命の真美子（リンダ）。でも構ってもらえないせいか、最近拗ね気味だ。その愚痴をアラタにぶちまけたいようだが、当のアラタは忙しくて相手にしてもらえないようで、益々機嫌が悪かった。考えてみれば、私も一学期までは英語のレッスンの度にアラタと少し話しをしていたが、二学期になってからは話すどころか顔を合わせることがなくなってしまった。先生の話によれば、部活でクタクタになって帰ってくると、すぐ夕ご飯とお風呂、あとは部屋に戻って少し勉強をして速攻寝てしまうのだそうだ。それでも相変わらず成績は一人だけ群を抜いて学年トップ。一体いつ勉強してるのだ？！　と驚いて安西先生に聞いてみれば、返ってきた答えは早朝勉＆週末勉。ようするに週末と朝早く起きて時間を作り勉強をしている

らしい。確かにそんなストイックな生活をしていれば、幼馴染と話す時間すら惜しいだろう。これが好きな相手で、しかも相手も自分に好意を持ってくれると確信できれば態度が違うだろうが、残念ながら真美子はアラタに恋の矢印を向けていない。

（考えてみればアラタも年頃の男の子なんだよね。そうそう都合よく相手をしてられないか。女子と気軽に話すなんて恥ずかしいっていうのもあるだろうし）

どうもアラタは私にとって小さいころの姿のまま成長しておらず、デキの良い可愛い弟という感覚から抜け出せない。しかし彼だってもう中学生。これからぐんぐん頭角を現し、凄い男になるやもしれぬ。いや、確実になるだろう。私が知りえる男性の中では一番の有望株には間違いあるまい。人柄も将来性も、だ。それこそ従兄妹の雄臣にも引けをとらないのではないだろうか。

（雄臣かぁ……）

私は思わず渋い顔をしてしまった。

ダイヤモンドの野獣たち？

相変わらず外面完璧の品行方正な優等生で、学校のアイドルと化している雄臣。

だが、私と二人きりの時は毎度おなじみの鬼神修羅を発揮しているのも相変わらずだった。今でも英語のレッスンで顔を合わせればすぐに本性がずるむけ。先日だって――。

『おい、ちゃんと英語やってるか？　今のうちに中学必須単語＆熟語をすべて叩き込んでおけ。日本人がいくら英語を勉強しても身につかない訳がわかるか、圧倒的に単語数が足りないんだよ。あと場数だな。ま、これは仕方がないことだが』

『や、やってます！』

『フン。英検三級取ったくらいでいい気になるなよ。英英部にはちゃんと行ってるんだろうな？』

『い、行ってます！』

『よし。ならバレー部なんてさっさとやめちまえ。大体マネージャーなんてパシリじゃねーか。それより一緒に勉強でもやろうぜ。そっちもア・テストが控えてるだろ？　手伝ってやるから、俺の受験勉強も手伝え。なーに、ミチにとっても来年の受験対策になるし、一石二鳥だろ。ついでに俺と一緒に社会勉強も始めてみるか！　名付けて、「大人の社会科見学を体験しよう！　～女体の神秘・あれこれ～」だ。若干保体よりだが、気にするな。まったく……こんなナイスアイデアが浮かぶ自分が怖いぜ。これぞまさしく天才だな！』

『――ねぇ。雄兄さんは品行方正の優等生の筈ですよね？　受験生ですよね？　そんなことしてる暇なんぞありませんよねっ？！』

『照れるなよ。ちょっとした息抜きだからさ。ほら、小出し小出しにしないと……色々と溜まるだろう？』

『溜まるねぇ……って、ななななに言ってんスかっ？！』
『バカ、ストレスのことだよ。まぁ、その想像はあながち間違っちゃいない。地味で鈍臭いわりには、なかなかの耳年増だな……スキルアップの補修でも受けたのか？』
『そんな眉根を寄せた本気（マジ）顔で聞かないでくださいよ。第一そんな補修、一体何処でやってるんスか』
『いいぞミチ、その調子でいけ！　ん～そうか。ミチにはまだまだ禁断の果実は早いかと思っていたが……そこは慣れだな、慣れ。心配するな、次第に良くなる』
『オ願イダカラ人ノ話ヲ聞イテクダサイ』
『ミチ、これも夜の為、人の為だ。慈善事業だよ。ほら、テレビでも言ってるじゃないか！　「一日一発！」ってさ』
『そりゃ、「一日一善」でしょうがっ！　しかも「夜の為」の「よ」の漢字が違うよ！』

日本●舶振興会も真っ青な言葉を吐く雄臣、日本政治界のドン・笹●良一もビックリである。
これでは「戸締り用心、火の用心」じゃなく、「とにかく用心、素の雄臣！」だ。いっそのこと高見山に代わって荒井美千子自ら派手に大太鼓を叩き、街中を練り歩いてやろうか。
（ったく……油断も隙もありゃしない！）

――しかし、しかしである。

二人きりの時はこんな感じだが、不思議なことに学校では以前のようにしつこく私を追い回して脅す……いや、掻き乱すことは少なくなってきた、と思う。あくまでも「思う」程度だが。体育祭以来不用意に学校で声を掛けたり、人の教室にまで来るなんてことはなくなった。それも当然だろう、なんてったって彼は受験生。本腰で受験勉強をしなければならない立場である。それに、ここのところ

週末は予備校と頻繁に東小父さんと住んでいたマンションがある地元の東京O区に帰っているみたいだった。ライクなカノジョと逢瀬でもしてるのだろう。私のことで時間をとられている場合ではない。（ヨシヨシ、いい傾向だぞ！　大体私だって雄臣に構ってる場合じゃないし。もうそろそろア・テストの対策を本格的にお願いしなきゃ）

先日から先生に言おう言おうと思っていたお願いごとを思い出し、一言声かけてから今日は帰ろうと先生の方へ向けば、主婦の皆様はまだ井戸端会議に花を咲かせていた。

「やっだぁ、安西さんならまだまだイケるって！　私の知り合いなんか、４５歳で出産したんだからぁ！　今からでも遅くはないんじゃない？　もう一人がんばりなさいよぉ。上の子とだいぶ離れてるから、息子ちゃんも面倒見てくれるんじゃないの？」

「う～ん、でもこればっかりはねぇ」

「そうよねぇ。フフフ、やだぁ、一人じゃ無理だものねぇ？　今日さっそく、旦那さんに頑張ってもらったら？」

「あらら、なんか羨ましいわ～」

「「「「「ホホホホホ～！！」」」」」

安西先生を含めたオバサマ方の意味深な笑い声が区民センターの一室に響き渡った。

「……」

まだまだ女豹の若葉マークをつけている私には到底ハードルの高い話である。今は女豹よりも勉強だなと思う荒井美千子なのであった。

＊＊＊

「そ、それでは先生、失礼します……」

部屋の入口のところで頭を下げると、「ごちそう様～」「次、楽しみにしてるからね～」と声を掛けられた。新作メイクをバッチリお顔に乗せて戦闘準備をしている女性の皆様に笑みを送って出て行こうとしたら、安西先生が手を拭きながら残ったシュークリームが入ってる箱を持って見送りに来てくれた。

「今日はこれ、どうもありがとう！　ごめんね、無理矢理お茶に誘った挙句、顔をイジちゃってぇ。えーと、これから今日来るはずだったお友達のところへ行くのよね？」

「あ、ハイ。今日は来れませんでしたが、今度お願いしますって言ってました。ひ、暇だしそんなに遠くないので、この新作の試供品をさっそく持っていこうかと……きっと喜ぶと思うから」

「あらやだ、こっちこそいい宣伝になるから、ありがたいわ！　でもホント残念だったわねぇ。また冬にも『●●化粧品のメイクアップ講習会』やるから、その時は是非来てねと伝えてくれる？　そうそう、雄ちゃんから聞いたわよ？　雄ちゃんのお友達のカノジョらしいじゃないの～しかもキレイだって！　なんだか会うのが楽しみだわ、ウフフ！」

「……ハハ。つ、伝えておきます。ではこれで……あっ、先生。すみませんが、母の化粧品の件、お願いします」

「わかったわ、いずみちゃんには注文が届いたら電話するから！　ん～それにしても……やっぱり若いっていいわねぇ。化粧しなくても、眉と目をイジっただけでしっかりと映えるものぉ！　美千子ちゃん、目がパッチリ二重で大きいから、十分だわぁ。あぁでも、唇はその透明に近いリップ程度で留めておいてね？　口紅ベッタリとか頬紅ザックリとか睫毛バッサリとかダメよ？　『おかちめんこ』になって、とってもマズイことになるから！」

「……」

（先生……その美しい顔で『おかちめんこ』という言葉はちょっと……）

一歩間違えれば卑猥になりかねない言葉を口にした先生に、荒井美千子、軽くショックだ。が、そこはいつもの気遣いナンバーワンの精神で愛想笑いに徹した。尊敬する先生の手前、中学生なので普段は化粧しないなんてハッキリ言えないし。とりあえず、やりすぎると私の顔は『おかちめんこ』になってとってもマズイことになるらしい。ここは今後の為に貴重なアドバイスとして素直に受け止めることにする。

「そうそう！　もしよければこのシュークリーム、そのお友達に持って行ってあげたら？　せっかく美千子ちゃんが作ったんだから喜ぶと思うわよ？」

「え？　で、でも……」

「いいわよぉ！　……って、あ、ごめんなさいね？　折角持ってきてくれたのに、私ったら失礼よね――」

「いえ！　そそそそんな！」

「そう？」

「……（何気に切り替え早いな）」

「余った数が中途半端だから、もう一個って言っても全員分行き渡らないし。どうかなって思ってぇ」

「……い、いいんですか？」

「いいわよぉ、遠慮しないで？　お友達にも是非この力作、見せてあげなさいな！　しかしホントいずみちゃん……やだわ、すぐ名前が出ちゃう！　ふふ！　お母さんに似て、お料理上手になってきたわねぇ」

感慨深い溜息をついた先生に、私は「いえそんな……」と頬を染

めて俯いた。安西先生のような人に差し入れを喜ばれたうえに、褒められるなんて。こちらこそ恐縮ものだ。

お言葉に甘えてシュークリームの入った箱を受け取り、今度こそ安西先生に頭を下げて部屋を後にすると、先生は「アビィエントォ（またね）！」と女優のように優雅に手を振って仕事に戻っていった。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

「一日一善」のＣＭ、覚えている人いますか。内容は今の時代にこそ必要な言葉ばかりかも。……最近の若い子は知らないだろうなぁ。ＣＭはＹｏｕＴｕｂｅで見れます。←

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ＬｐｘＧｍｐＩ－３ｃｃ

ダイヤモンドの野獣たち？

区民センターの薄暗い建物から出ると、緩い日差しが眩しくて僅かに目を細めた。空を見上げれば晴れているが雲が多く、すっかり秋の色が濃くなっている。公共施設の独特のにおいから解放されてスッと息を吸うと、新鮮な空気が肺で一杯になった。季節は１１月。空気は少し冷たかったが、特に寒いと身体を縮めるほどではなかった。ハァっと息を吐くと、私の息のせいではないのに、カサカサと落ち葉が風に煽られ、転がるように移動する。

「……さて、貴子のところへ行こうかな」

もらったばかりの化粧品の試供品と余ったケーキの入った箱を持ち直して、区民センターの入口の前にある扇状に広がった緩やかな階段を登った。階段を登りきるとちょっとした広場が見え、子供たちが遊具で遊んだり、ボール遊びをしていた。ふと顔を横に向けると、広場の端にあるバスケットコートが目に入る。

懐かしい場面が頭を過った。

遠足のキャンプ前に雄臣と歩いているところを見られ、散々嫌味を言われた不愉快な思い出。今はそのコートに山野中の生徒はいない。かわりに小学生らしき子供たちがゴールめがけてお遊びでシュートしていた。

「……」

ボールがゴールの籠に入り喜んでいる子供たちを見ながら、今日部活が終わって用具を片付けていたときのことを思いだした。用具倉庫の傍にある、体育館から出てきたメンツと鉢合わせした時のことを。

訳もなく顔が熱くなるのを振り払うように、パッと視線を逸らして後ろを振り返って目線を上げると、多目的室の窓がいくつか見えた。左端の一室が私が先程までいた部屋。今でもオバサマ方が歓談をしながら、安西先生から一生懸命メイクアップレッスンを受けている。

（貴子、せっかく楽しみにしていたのに……）

貴子の残念そうな顔を思いだして、ふぅと息を吐いた。

実は母と一緒に来る筈だった、安西先生が販売員をやっている化粧品メーカーの商品お試しのイベント。しかし、母はどうしても外せない町内役員の用事が入ってしまい、私だけが行っても仕方がないので、メイクに興味がある貴子を誘ってみた。案の定二つ返事でOKをもらったのだが……これまた貴子も用事の入ったお父さんの代わりに病院に行くことになってしまったのだ。

中学生一人で化粧品のイベントに行っても仕方がないので、断るつもりだったのに。いつの間にか私が急遽忙しい母に代わって差し入れのお菓子作りも代打することになったのだ。それがなければ、今頃私は――。

（差し入れに行かなきゃ、試合見れたのに……。けど、無理して試合見てたら、折角早起きして作ったシュークリームが無駄になっちゃったものね）

今頃「練習試合」を見て一生懸命応援しているであろう友人たちを思い、一人苦笑した。

無理矢理頭から「練習試合」のことを追い出し、バスケのコートを見ないように広場の端にそって歩いた。区民センターの入口に向かうと、入り口を挟んで広場の反対側に見えるのは、金網で周囲が囲われている広いグラウンド。どうやら草野球をやっているらしく、野太い掛け声が聞える。

（もうそろそろ、貴子も病院から帰ってきてるころだよね。部活の帰りにそのまま行くって言ってたし）

私は午前中の部活の練習中に貴子と話した内容を思い出し、ぼんやり化粧品の試供品が入っている袋を眺めた。

最近貴子の元気がない。本人は明るく振る舞っているのだろうが、傍から見たら空元気なのがバレバレだった。

お母さんの容体が夏からずっと芳しくないのだ。

部活に参加する日も日に日に減り、今は週に一回程度。今日みたいな日曜の午前中だけで、平日はほとんど顔を出してない。今日も部活が終わったらすぐに帰って行った。久しぶりに二人きりで話した貴子によると、家を出ているお姉さんが近々帰ってくるかもしれないとのこと。せっかく入った学校をどうするかで家族と揉めているそうだ。休学にするか、それとも学校が遠いので退学し、比較的近い医師会の準看護婦の学校に入って一から始めるか……。どちらにしても、本人達にとって辛い選択には変わりない。

貴子の力になってあげたかった。けれど、私には何もしてあげることができない。時々お見舞いに行って、こうして差し入れしたり、話を聞くことしかできないのだ。

彼女の心を芯から支えてあげられる人が傍にいればいいのに、と思う。もちろん私はそのつもりだったけど、こういう時ってその…同性じゃなくて、違う意味でホッとできるような優しい男の人がいいんじゃないだろうかって思うのだ。苦にならず甘えられて、温かく包んでくれる人なら尚いい。できれば、それが日下部先輩であって欲しいのに――。

（なんか、遠慮してるんだよね……貴子）

一回だけ貴子のお母さんの病室で顔を合わせた日下部先輩。

貴子の話によれば、先輩は結構頻繁にお見舞いに来てくれるのだそうだ。申し訳ないからいいと言っても、「そんなこと気にするな」と爽やかに返す日下部先輩。中学三年生なのに、なんてデキた人なのだろう。でも貴子はなんだか辛そうだった。本人も気にしないでと言うのだから甘えればいいのにと思うが、貴子としてはそうもい

かないのだろう。確かに実際貴子の立場になったらそう思うかもしれない。なんだか申し訳なくて。だって、彼は受験生なのだ。

（……それなのに。あの幼馴染の連中や原口美恵ときたら……昔のよしみで一回くらいは見舞いに来てもいいんじゃないだろうか）

かつては仲良くしていたはずなのに。

特に原口美恵と小関明日香、そして最近女バスの三年と付き合い始めた金髪強面男。二人の姿をぼんやりと遠くから見ていた貴子の傷ついた横顔が頭から離れない。なんだか無償に頭にくる。もどかしさにイライラしたところで、フッと自嘲した。

（何言ってんだが……私だって人のこと言えないじゃん）

ちょうど三年前、私だって同じことをしていた。幼馴染のお母さんが入院していたのに、ロクに見舞いも行かなかった。それどころか、雄臣のお母さんが母を詰るのを見て、「二度と行くもんか」と思っていたのだ。もう先は長くないことを知っていたのに。

雄臣は私が貴子のお母さんのお見舞いに行ってることをどう思っているだろうか。多恵子小母さんの時は全然来なかったくせにと、今更偽善者面かよと鼻で嗤っているだろうか。

（私がやってることって、自己満足ってやつなんだろうな）

今の自分と、三年前の自分の取った行動を比べると苦笑しか出てこなかった。もちろんあの頃の不安定さは、すべて自分のせいとは思っていない。そこまでお人好しでも自虐的でもない。あの当時の父と母が、ギスギスピリピリしていて家族全体が今にも切れそうなもろい吊り橋の上を渡っているような感覚だったせいもある。しかし――。

（……って、やめよ。そんなこと考えたところで、時間が戻るわけじゃないし）

この際偽善者でも何でもいいじゃないか、と思った。それで貴子の気が少しでも晴れて元気になれば結果オーライだ。ようするに、誰かの支えになればそれでよい。そのためのシュークリームと試供品に視線を落とし、無理矢理口元に笑みを浮かべた。気合を入れる

ように背筋をしゃんと伸ばして歩く。負の感情を弾き飛ばすように。

その時――カッカッカッとコンクリートの上をスパイクで走る音が聞こえた。その音に被せるように……。

「Ｈｅｙ！　そこのカノジョ！！」

突然聞えてきたのは、私を纏っていた真面目な雰囲気を無理矢理剥ぐような力強い掛け声。

（……はっ？！）

私は頭に疑問符を浮かべながら、一応周囲を確認するように見回した。もし呼びかけたのが私じゃないのに振り返ったら、非常に恥ずかしいし。

「やっだな～ユーだよ、Ｙｏｕ！　両手に荷物抱えた、そこのＥカップボインのカ・ノ・ジョ～！　よければオレッちの熱いタマで愛のキャッチボールしながら親睦を深めな～い？！」

いきなりズッコケそうになった。バナナも石もないのに。

普段でも滅多にお目にかかれないナンパのひな型のような口説き文句。所々声の主の人間性が色濃く出ている内容がこれまた残念極まりない。大体ここは如何わしそうな親睦を深めるより、まず「お茶しない？」が基本だろ。いやいや、そんなことより。

（どぅあれが、ボインじゃっ！！）

私はカッと目を見開き、ガバっと後ろを振り向いた。そこには、爽やかに手を挙げながらこちらに向かって走ってきてくる、野球のユニフォームを着た背の高い男。ユニフォームには「大野ゴールデンカップス」などというこれまた微妙なチームのネーミングが堂々と男の胸を飾っている。残念ながら野球帽を目深に被っているので、顔が見えない。しかし、帽子からはみ出している髪の毛が……。

（……赤い髪……）

激しく嫌な予感がした。

アホな口説き文句で声を掛けてきた野球青年は帽子をおもむろに取った後、その手を振りながら強面の顔を満面な笑顔にして近寄ってくる。青年の赤い髪と耳にある派手な金銀のピアスは秋の色づいた木々に溶け込み、哀愁を感じさせるどころか奇襲を試みるためにわざと迷彩化にしたとしか思えない。

（あわわわ……ななななんであのオトコがここにぃっ？！）

大概厄介ごとというのは、しまった！　と思った時点で既に遅い。もう二度と会わないと思っていたのに。どうしてくれよう。このままあの男を無視していくにはバッチリ目が合いすぎてしまったではないか。「アバヨ！」などと言って走って逃げるには、私の足では遅すぎる。しかし相手の青年はこちらに近付くにつれ、何故だか

勢いとオーラが段々と下降気味になった。私の目の前まで来たときには、何かが違う、納得しかねるという険しい顔。

「……オイ、どういうこった？　思ったよりも地味じゃねーか！！」

私の頬が思いっ切り引きつった。

しかもこの男は、私のことを思いっきり忘れているようだ。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

赤髪ピアス、再び参上！

『……オイ、どういうこった？　思ったよりも地味じゃねーか？！』

ほぼ一年ぶりに会う赤髪ピアスこと桂寅之助先輩は、思いっ切り失礼な言葉を幼気（いたいけ）な中学二年生の女子に投げつけた。

いや、自分が地味なのは重々承知しているつもりだ。しかしこうも正面きって突きつけられれば、いくら控えめな私でも傷つくってもんである。私はムスッと黙っていると、赤髪ピアスは「おや？」というように目を細めた。脱いだキャップで首のあたりを軽く叩きながら私の姿をジロジロと眺めるうちに、その顔が段々と険しくなっていく。なんとなくヤバイ雰囲気に慌てて愛想笑いを浮かべると、赤髪ピアスは私の引き攣ったイタイ満面な笑顔を無視し、もう一歩間合いを詰め顔を近づけた。

「なんか……オマエ、どっかでオレと会ったこと――」

「いえ！　初めてです！　初対面です！　まったくもって会ったことがないであります！」

私は赤髪ピアスが言い終わる前に敬礼する勢いで一気に否定の旨を宣言し、うろ覚えの記憶を呼び起こさぬよう、すかさず封印させもらった。ていうか一生忘れとけ。

「そうだっけか？　なんか引っ掛かんな……」

目の前の赤髪ピアスはもう一度首を傾げながら思いっ切り眉根を寄せたが、ここは相変わらず厄介な弟と同じ強面の桂兄に向ってヘラッと引き攣った笑いで誤魔化した。二人の間に微妙な空気が流れ

たが、赤髪ピアスは単細胞だったのか意外にあっさりと「ま、いっか！」と思考を放棄し、ガシリと私の肩を掴んだ。

「仕方ねぇ、この際地味なのはその豊満なボインに免じて大目に見てやるか！」

「ええっ！　なななんでそうなるのっ？！」

「ははぁ～なるほどなるほど、わかったぞ！　もしかしなくてもチミ、オレっちのファンだな？　追っかけだな？！　もぅ、水くせぇなぁ～。気を引くためにこんな遠巻きから見てたり、恥ずかしいからって声掛けてもわざと無視したり、やることがいちいち回りくどいっつーの！　そんな照れなくてもオレの雄姿を応援させてやるから！　おぉ？！　もしやその手に持ってるのはオレの為の差し入れですな？！　地味な割には意外とやること王道だな、オイ！」

「ヒョエー！　思いっきりズレとるがな！」

赤髪ピアスはぽろっと出た私の言葉をろくに聞かず、般若の笑いでドーンと私の背中に紅葉マークを施した。どうしたらここまで勘違い……いや、プラス思考ができるのか。地味地味と連発された怒りより、そのオメデタイご機嫌な脳みそをこさえている赤髪ピアスがちょっぴり心配になった。

「さ、こっち、こっち！　どうせだから特等席で見学させてやるって！　大丈夫大丈夫、ボールが当たらないようにオレがガッチリ全身全霊でその貴重なボインを守ってやるから！　でも万が一の場合の時は勘弁な？　残念ながら部外者だから保険はおりねぇけど、その気になれば相手からチョチョイと賠償金を巻き上げるぐらいの物騒な連中がチームに揃っているから安心したまえ！　あ、それとも？　いっそこのまま二人っきりで愛の逃避行がいいとかっ？　地味なくせに言うこと大胆だな、オイ！　や、困ったなぁ～今オレっち、カメラマン且つ助っ人で草野球のバイト中なんだよね？　あと少し

でこんなショボいゲーム終わらせるから？　ガッツリとバイト代せしめたら、ほら、そこの近くの『ホテル・ダブルスプラッシュ！』でダブルと言わず夜通しで熱いスプラッシュといくか！　ちなみに、ほぼ鏡張りの『魅惑のミラーでムラムラルーム』がオレっちのオススメ！　是非この素敵空間で二人の未来を語り明かしたいところだがよ？　燃えすぎちゃって語り明かす暇がないのがこの部屋の難点なんだよな～。まったく、罪だよな、鏡って！」

　罪なのはアンタの頭だよ。

……とは言わず、かろうじて耐えた自分、スゴすぎる。しかし心の中で自画自賛している場合ではない。その間にも性懲りもなく私の肩を掴みながらズルズルと引きずる赤髪ピアス。その姿はさながら、

『いいから、いいから！　ちょっとだけ、な？　何にもしないから、入るだけ！　ためしに、入口から出口へ通り抜けるだけ！』

『えぇ～！　で、でも……やっぱりぃ～』

……などと付き合ったばかりのカノジョをなんとか宥めすかしながら強引にラブホの入口に連れ込むお調子者のカレシの図、そのものだ。

　私が口を挟む隙を与えぬままフェンスにあるグラウンドの出入り口のところまで無理矢理引っ張られると、さすがの私も本気で慌てた。

「い、いや！　そそそうじゃなくてっ！　私用事がありまして……ちょ、ちょっと本当に困ります！」

「今更カマトトぶんなよ、にあわねぇぞ！　……って、あれ？　やっぱ、おかしいぞ……このどもり具合、どっかで聞いたことが――」

　キラーンと目を光らせながら赤髪ピアスがこちらを見下ろすと、

ガシャンと金網を掴む音が真横から聞こえた。私と桂寅之助先輩が音の方向へ顔を向けると、そこには――。

「寅ニィ、何やってんだよ?!　チェンジだから早くグラウンドにっ……て、あ、あれ……?　なっ、なんでっ?!」

金網越しに強い口調で赤髪ピアスに言ったのは、同じ「大野ゴールデンカップス」のユニフォームなどを着ている、色黒坊主でつぶらな瞳の――。

「ほほほ星野君?!」

「荒井さん?!　……って、どうしてここにっ?!　や、だって、今日、バスケ部の『練習試合』見てんじゃ……」

毎度おなじみのどもった私の驚いた声に、星野君はそのつぶらな瞳を大きくしながら驚愕の表情を浮かべると――。

「あっ――――――!　思い出したぞ……テメェはあんときの犯罪まがいのボイン!!」

赤髪ピアスは足軽の封印をいとも簡単に吹き飛ばしてしまった。

＊＊＊

「しまっていこうぜ～」

「うぉぉぉぉ～い」

ダイヤモンドの軸になる捕手がおもむろに立ち上がり、マスクを

取りながら野太い声を掛けると、グラウンドに散っている「野球少年」……じゃなかった。「野球中年」の皆様は手を振りながら声を返した。回も終盤に差し掛かっているので、若干気力が足りないのは気のせいではない。

現在試合は六回の裏。一塁側ベンチである「大野ゴールデンカップス」の攻撃。バッターボックスに入るのは――。

「寅之助！　ホームランじゃ、ホームラン！」

「一発叩き込んで、トドメをさしてまえぇっ！」

「ほうや！　愛しのミチコチャンに下半身のバッドを叩き込む前にここいらで一発いいとこ見せろや！」

聞き捨てならない声援が一塁側に座っているプレイヤーズベンチから放たれた瞬間、私は遠慮がちに飲んでいたスポーツ飲料を豪快に噴出していた。少し鼻にも逆流したとようで一人激しく咽ていると、私の隣に座ってスコアをつけていた星野君がビックリしながら「大丈夫か？！　荒井さん！」と慌てて背中を摩った。しかし反対に並んで座っていた巨体の男は「きたねっ！」と仰け反る。

「……」

悪いのは自分だが、さすがに「汚い」とハッキリと言われムッとしてしまい、思わず隣の巨漢を睨んでしまった。しかし相手は中学生のくせに図体がデカイうえに短めのモヒカン&眉毛なしでヒゲあり。「あんだぁ？！」というような顔で睨んできたので、瞬時に私のファイティングスピリットは消失し、自動的に愛想笑いが顔にセットされた。大体こんな悪役商会みたいな男に勝てるわけがないだろ、空気読め私。

それよりも口から噴出した汚水が、膝の上に置いてある預かったカメラにかかってないか慌てて確かめた。とりあえず目だった飛沫

はかかってなかったのでホッとし、一応ササっとふき取った。危ない、危ない……この少し古くて高そうなカメラを水浸しにしたら、バッターボックスにいる赤髪ピアスからバッドを投げつけられるだろう。

「バカヤロッ！！　誰が『愛しのミチコチャン』だっ！　そのボインはな、オレの女（スケ）でもなんでもないっ」

ズバーン！

「ストラ～イク！」

桂寅之助先輩はベンチの野次に怒鳴り返したようだが、途中で途切れた。言い返している間に相手チームの投球がキャッチャーミットど真ん中に決まったからだ。余計なシャウトをしたせいで、審判の間の抜けた「ワンストライク」の声がグラウンドに響く。

バッドを構えた赤髪ピアス男は一瞬唖然としたが、すぐにキャップから覗く目を光らせながらギロリと一塁側のベンチを睨んだ。なんでも現在は「山野中の鬼夜叉」から「美園の赤鬼」という通り名を賜っているらしい。どちらにしても物騒な話である。

「オイ、ゴラァッ！！　テメェらが変なこと言うから貴重な一球を見逃しちまったじゃねぇか！　一幸（カズ）、相撲力士（すもうりきし）、そのロクでもねぇジジィ共を黙らせろやっ」

桂寅之助先輩は外野の先のフェンスではなく、味方のベンチに向ってビシっとバットを翳した。赤鬼の顔から察するに、スタンドではなく、この屋根がかろうじてついているショボいベンチにボールを叩き込みたいようだ。しかしベンチに座っている野球中年は赤鬼の苦情をギャハハハ～という大爆笑で軽くあしらった。

ダイヤモンドの野獣たち？

（……困ったな。厄介な奴らに捕まっちゃたかも）

私は桂寅之助先輩から目を逸らし、ハァと溜息を吐いてしまった。さっきまでは人のことを一生懸命口説き落としてたくせに、星野君の呼びかけですっかり一年前の記憶を呼び起こしたらしく、私に対する態度が１８０度変わってしまったのだ。

『……やっぱりどこかで見たと思ったら！　そうだよ、その鈍くさくて地味な雰囲気……去年の暮のキャベツもまともに切れない犯罪まがいのボインじゃねぇかっ！　やいやいボイン！　テメェよくも素敵なオレ様の顔をすっかり忘れ、初対面なんて抜かしやがったな？　おぅおぅ、オレ様を忘れた落とし前、キッチリつけてもらおぅじゃねぇのよっ。とりえずこの差し入れらしきケーキの箱は没収しとく！　ついでにオレ様の助手と肩もみでもやってもらおぅかっ！』

『えぇ？！　そそそんなっ！　そ、そりゃお互い様というもんじゃ……』

『ダアホ！　言っとくけどな、この桂寅之助様が本気（マジ）で怒ればこの程度じゃ済まねぇぜ……なんならオレ様のスゴさ、今すぐこの場で味あわせてやってもいいんだぜ！！』

『ヒィっ！　まままさかっ、公衆の面前で健全な小説には載せられないアンナことや、コンナことを……』

『そうそう～アダルティな読者様のハートをがっちり掴むアンナことや、コンナことをだな……って、オィッ！　ヤれるわけねぇだろ、こんなところで！　思わず想像してウットリ夢見ちまったじゃねぇか！』

『……あのぉ、それは私のせいになるのでしょうか……』

『当たり前だ！　ともかく！　そのＥカップに成長したボインに免

じて、この程度ですべて帳消しにしてやろうってんだ。オレ様の慈悲深い心に感謝するんだな！　それともなにか？　そのボインを思う存分堪能させてくれるとでも言うのかよ？！』

『助手と肩もみ、喜んでやらせていただきます！』

ものの数分で決着がつき、ていうか、星野君が慌てて中に入ってくれたので大事にならなかったのだが……荒井美千子はすっかり赤髪ピアスのジャーマネという名のパシリと化していた。

が、待ち受けていた試練はこれだけではなかった。

赤髪ピアスと星野君（言っておくが、星野君は桂先輩に命令されて渋々）に連行されてベンチに入ってみれば、さらなる厳しい試練・その一がお出迎え。その人物が……

「ひでぇよ、寅之助さん！　オレは『相撲力士（すもうりきし）』じゃねぇ、『相模（さがみ）力（つとむ）』！！」

……そう叫んだ隣の男である。

生意気にも赤髪ピアスに物申すほど勇敢でモヒカンの巨漢な彼は……っておいおい、なんだか韻（ライム）を効かせたラップにでもできそうだぞ。やらないけど。そのかわり、

『あぁ、一字多いけど、一瞬見たら漢字似てるよね！　しかもそのモヒカン、マゲのつもりですか？！　ヒャハハハハ！』

……と心の中で爆笑するぐらいは許してもらいたい。ともかく、そんな彼は髭が生えているクセに私と同じ中学二年生だった。

「くそぉ～俺は力士じゃねっつーの！」

いつまでも根に持つしつこいタイプの相撲力士こと「本名・相模力（さがみつとむ）」は、桂寅之助先輩の言葉に相当臍を曲げているようだ。いつの間にか人が丹精込めて作ったシュークリームを勝手に取り出し、遠慮なく頬張りながら悪態ついていた。（もう赤髪ピアスに捕まった時点でシュークリームは諦めた）

こう言っちゃなんだが、手にしている白鳥がヒヨコに見え、口の端から白鳥の首がひょっこりはみ出ているその姿は残酷な光景以外何物でもない。しかも文句を言いながら口から放たれているシュークリームの残骸。丹精込めて菓子を作った私の努力が、こんな仕打ちで一瞬に消えたこの事態を哀れと言わずしてなんというのだろう。

「きたねっ！」などと私を罵倒できる立場ではなかろうよ、相撲力士よ。

私の背中を摩っていた隣の星野君はため息を吐いた後、相撲力士と煩くヤジっているオヤジに声を掛けた。

「力（つとむ）、食いながらしゃべるな。それに玄さん達、声掛けたら寅ニィ打てない」

星野君は苦い顔だが落ち着いた声で私の隣の力士と野球中年たちを諫めると、ヤジの中心人物らしきオッサンである「玄さん」と呼ばれた人は、耳に掛けていた煙草をつまんで口に咥えながらニヤっと笑った。唇の間から覗かせている、ギラッと光る金歯とヤニのついた黄色い歯が、色黒パンチパーマのお顔に華を添えている。一見殺伐とした光景だが、あまりにも絶妙な具合でマッチングしすぎて、いっそ清清（すがすが）しさを感じさせるほどだ。

「……」

確実に只者ではない、試練・その二であるこの「玄さん」という人は、本名「鬼頭玄造（きとうげんぞう）」と言い、大野商店街振興会長且つ「大野ゴ

ールデンカップス」の監督であった。
どっからどう見ても名前の雰囲気を裏切らず、

『むしろ「きとう」というより「おにがしら」だろ！』

……などとツッコミを入れたいほど、あこぎな商売そしてそうなヤクザ風を醸し出している玄さんは、これでも商店街の中にある「鬼頭不動産」の社長である。

そんな存在自体が神がかり的な「玄さん」こと鬼頭社長は、日曜という書き入れ時にも関わらず、試合以外の休日は煙草のかわりに赤ペンを耳にさして競馬場をうろついているんだそうだ。「大野ゴールデンカップス」という名前も、「一年の計は元旦でなく金杯にあり！」という競馬ファンのゆるぎない情熱から命名したと自慢していた。そんなどうでもいい情報を頭の中で流していると、玄さんは球場内のベンチなのに堂々と口と鼻から煙を吐き出し、ケッと鼻で嗤った。

「バカ言え、そう簡単に寅之助に打たせてたまるかってんだ！　こっちはな、金が掛かってんだよ！　ったく……ヒットの数だけバイト代弾むなんて言わなきゃ良かったぜ。大体な、こんな声援ぐらいで動揺するたぁ、自称百戦錬磨の寅之助もまだまだ修行が足りねぇだろぅよ?!　それよりな、酒屋のボン（星野君のことだ）。優男も結構だけどな?　ボケーとしてると隣のミチコチャン、本当に寅之助にヤラれちまうぞっ！　ややや、モテモテだねぇ～ミチコチャン！」
「……」

玄さんの言葉にベンチの選手は爆笑ったが、私は鼻のところをハンカチで抑えながら「ハハハ」と引き攣り笑いをするしかなかった。
本当は、

『オラァ！　誰が好き好んでアタイがあんな赤鬼にヤられなきゃならんのよっ？！　むしろここは鬼退治やろ！　桃太郎(アタイ)自ら、再起不能になるまで殺(ヤ)ってやるわい！』

……と言いたいが、言えない。

なんせこのベンチに座っている「大野ゴールデンカップス」のメンバーが、玄さんだけでなく、これまた見ただけでドン引きするような雰囲気の持ち主ばかりだからだ。

どう見てもカタギとは程遠い、オールバックだの、金髪の長髪だの、眉毛なしのスキンヘッドだの、金色のアクセサリージャラジャラだの、歯が欠けているだの（決して入れ歯や差し歯の注文待ちとかではない）……如何にも、

『若い頃、絶対色々ヤラかしましたよね？』

……というタイプのオジサマたちばかりだった。

ともかくそんな連中相手では、中学生の女豹初心者が太刀打ちできるわけがない。

隣の星野君は苦い顔をしながら小さい声で「ごめんな、荒井さん」と謝った。別に星野君が悪いわけではないので愛想笑いで誤魔化していると、再び聞こえてきた「ツーストライク！」という審判の声。バッターボックスの桂寅之助は見事なほどの空振りをしており、チキショー！　とホームベースに向ってバッドを振り下ろしていた。その姿は金棒を振り回し暴れまわる赤鬼そのもの。全然笑えない。

「オラオラ、寅之助、真面目にやれぇ！　ここで塁出ねぇとバイト代ピンハネすんぞっ」

「「そうじゃ、そうじゃ！　ピンハネじゃ！！」」

ヤニ男・玄さんが追い打ちを掛け、他のプレイヤーがさらに煽った。「じゃかぁしいっ！！」とバッターが怒鳴り返した次の瞬間、三投球目が放たれる。

カキーン！

そこそこ速い（らしい）相手の投球をバッドに当てた赤鬼は一塁に向って走った。球は意外に伸び、ボールはセンターオーバー。赤鬼は一塁ベースから二塁へ。その間、センターは慌ててボールを拾いセカンドへ送球されるとワンテンポ遅れるようにスライディングで滑り込む赤鬼。判定は？

「セーフ！」
「やった！」

星野君は純粋な野球少年らしく素直に片手でガッツポーズをとった。メンバーも「ヒヤヒヤさせやがって！」と文句を言いつつもやんややんやの拍手を送っている。しかし……星野君がセンターオーバーのツーベースと呟きながらスコアブックに書き込むと、すかさず横から玄さんが口を出した。

「ボン」
「はい？」
「『センターオーバー』じゃない。ありゃ相手の『エラー』だ。スコア、書き直せ」
「えぇっ？！　でも、あれはどう見てもヒットじゃ」
「ボン！」
「……了解」

星野君は再びため息を吐きながら消しゴムをかけると、反対側に

座っている相撲力士は遠慮なく爆笑した。ヒットが相手のエラーに変わったことも知らない桂寅之助先輩は、呑気に？サインをベンチにアピールしている。おそらくバイト代のピンハネが免れたと思っているのであろう。事実を知ったらどうなるのか。その先はあまり想像したくない。

「さ、大野ゴールデンカップス、本日のクリーンナップ登場だ！惚れるなよ、ミチコチャン！　ワンアウト二塁か……総二朗、絶対打てよ！　セコイ小細工せずに思いっ切りかっ飛ばせや！　おら、一幸も力も準備しろ」

玄さんがこっちを向いて声を掛けると、星野君は頷きながら立ち上がり、スコアブックを玄さんに渡した。隣の力と呼ばれた相撲力士も急いで最後のシュークリームを頬張る。私は隣の圧迫感から解放され、ホッと息をつきながら改めてグラウンドに目をやった。

視線の先には、次打者が待機するサークルからバッターボックスに入る三番打者の男の子。試練・その三である、総二朗と呼ばれた男。

私はその男から視線を外し、俯いてひざ元の桂寅之助所有のカメラをジッと見た。バッターボックスの男とは似ても似つかない、しかし人を「チチコ」呼ばわりするところはソックリな総二朗の兄を苦々しく思い出しながら――。

ダイヤモンドの野獣たち？（前書き）

お待たせしまして申し訳ありません。そして訂正のお知らせです。
「ダイヤモンドの野獣たち？」の「現在試合は四回の裏。」の部分を「現在試合は六回の裏。」に訂正させてもらいました。ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

「ありがとうございました！」

グラウンドに爽やか……ではない中年の濁声がこだました。二チームの選手たちは帽子を取り、頭を下げて握手をした後解散。それぞれのベンチの方へ戻ると、相手チームへエールを送るために円陣を組み、小気味よい大声を張り上げた。

試合結果は6対2で大野ゴールデンカップスの勝利だった。

……というより、勝っても不思議じゃないと思う。だって、こっちはナインの中に、元気ハツラツなティーンエイジャーが四人もいて、しかも全員野球経験者なのだから。

そう――意外なことに、本日カメラマン兼助っ人として参戦した桂寅之助先輩は、リトルリーグ経験者だった。相撲力士こと相模力は、星野君や諏訪君と同じリトルリーグのチームを経た後、河田中の野球部へ入部（容姿からしてたぶん現在は退部と思われる）。星野君は言わずと知れたシニアの職人スラッガー。そして最後の四人目、またの名を三番目の試練である総二朗と呼ばれた男は、同じくリトルを経た後、中学一年生のくせして現在シニアの控え投手。

（……オイオイ、こりゃどう見ても反則だろ）

いくら人数が足りなかったとはいえ、オヤジ中心の草野球に若いバリバリの現役選手を投入するとは……さすが鬼頭組長、いや、鬼頭社長監督。見た目通りやること結構えげつない。

それでも、私がくる直前までは同点だったというのだから、今回の相手は強かったのだろう。それがあの桂寅之助先輩がセンターオーバーを放った後から試合の流れは変わった。次の三番打者である総二朗はフォアボールで一塁へ、本命四番打者の星野君は内野安打。あっという間に一死満塁。トドメは見た目をまったく裏切らない、「ドカベン」ならぬドデカイ相撲力士が放った特大ホームランで一

気に4点追加。その後は抑えられてしまったが、次の7回表の相手の攻撃が無得点の時点で、ゲームセットというわけである。

（やっと終わったよ！　今のうちどさくさに紛れて退散しとくか。貴子の家に行くの遅くなっちゃうしね）

グラウンドを見れば、勝者の大野ゴールデンカップスがトンボがけをしていた。やっているのは、もちろん若者オンリー。ドン引き物騒中年連中は悠然とベンチに戻ってきた途端、「終わった終った」と殴り込みが終わったヤクザのように一仕事終えた満足顔でグラウンドを去っていく。

（シメシメ、ナイスタイミング！　アイツらが仕事をしているうちに、玄さんに急いでいるので帰りますって言えば万事ＯＫだよね？　星野君に挨拶したいところだけど、どうでもいいオマケが三人もいるからな……。そうだ！　玄さんに伝言を頼めばいいか！　もしこっちに気付いたら頭を下げればいいもんね。それに星野君は明日学校で一言謝れば――）

ウンウンと一人納得し、自分の分のトンボがけを押し付ける赤鬼と相撲力士の小競り合いを横目で見ながら、ベンチに戻ってきた玄さんにいそいそと近付き声を掛けた。

「あ、あの……お疲れ様デシタ。し、試合も終わりましたし、用事があるので、これで失礼を……」

「おう、嬢ちゃん、ありがとな！　いや～愛ある熱烈な声援ぶりにオイちゃん思わず下半身まで痺れちゃったぜ！」

「……。い、いや、愛……が込められていたかどうかは……イマイチ自信がありませんが……」

「わけぇのに謙遜するなって！　それよりこれから『まるやき』で

打ち上げだから、嬢ちゃんも来い！　やっぱ酒の席には華がねぇとよ～」

「……（わたしゃ、コンパニオンかい！）」

「あ、心配すんな？　いくらなんでも中学生には手を出さねぇよ、犯罪になっちまうもんな！　残念ながら女は『もどき』の蝶子しかいねぇが……って、や、蝶子も心根は意外と悪くねぇんだよ？　けど見た目がバケモノじゃなぁ～」

「……（人のこと言えないのでは……）」

「な～に、蝶子と酒屋のボンもいるから、寅之助もそうそう嬢ちゃんに手ぇ出せねぇだろ。だから安心しなっ。ハッハッハ～！」

「……それはそれは心強い……（わけ、あるかっ！！）」

大変なことになった。

本当に今更だが、どうして私の周りには人の話を聞かない&勘違い連中が集まってくるのか。この玄さんを始め、赤鬼にブキミちゃん、それに雄臣――。何か悪い霊にでも取り憑かれているとしか思えない。ここは墓参りより、思い切って除霊を頼んだ方がいいのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、私の言葉を思いっきりスルーした玄さんは、「これ持ってくれや」とスコアブックを私に押し付けて、グラウンドの出入り口があるフェンスへ向かって歩き出してしまった。迫力に負けて思わず「ウィッス！」と素直に受け取ってしまったところで、ハッと我に返る荒井美千子。

「ヒョェっ！　ちがっ！　わわわ私、これから大事な用事がありましてですねっ！」

慌てて玄さんの後を新入りの舎弟のように付いていくと、それを引き留めるように、若がしらである赤鬼に後ろから大声で怒鳴られた。

「こぉらっ、ボイン！　オマエはまだゲームセットじゃねぇ、こっちに戻ってこい！」
「ヒっ！！」

赤鬼の咆哮に条件反射で振り返ると、怖いお顔で睨みながらこっちにこいと手招きしていた。どうやら赤鬼は最後の最後まで私をコキ使うらしい。
（気付かぬふりしてそのまま玄さんについて退場すれば良かったのに……振り向いた私のバカ！）
そうは思っても後悔先に立たず、だ。まぁ、この時点で赤鬼の言葉を無視してバイナラできるようであれば、はじめからグラウンドに引っ張り込まれてはいない。
これ以上怒鳴られるのも嫌なので急いでベンチに戻ると、いきなり赤鬼のデカいスポーツバッグと古い一眼レフカメラを肩と首から提げさせられた。

「ションベン行ってくるから、オレの荷物頼んだぜ」
「……なんとなくそんな予感はしてました」
「おぉ？！　ボインのくせに先を読むとは、オマエも意外と隅には置けないな、オイ！」
「……お褒めに預かり光栄デス」
「よしっ。とりあえず駐車場まで運べ。いいか、このカメラはオレにとって命と言ってもいい代物だ。特に慎重に扱えよ。それこそ女の身体を撫でるようにソフトでナイーブなタッチを心掛けろ。間違ってもいきなり乱暴に鷲掴みしたり、理性を欠いた野獣のようにハァハァと涎なんか垂らすんじゃねぇぞ！」
「……コレ、単なるカメラですよね？」
「バカモン！　な～にが単なるカメラ、だ！　まさか……使い古しのくたびれた女、いや、カメラだからって、軽々しく取り扱ってい

いなんて思ってたんじゃねぇだろうなっ？　だとしたら、ドえらいミステイクだぞ、ボイン。ピッチピチの真っ新な女子大生を味わうのもいいけどな？　だからといってお互いイイトコロをすべてを知りつくしている、大技小技が巧みな古女房をないがしろにする奴は男とは言えねぇ。新旧両方平等に愛でてこそ、真の男っつーもんよ！」

「……それって、俗にいう二股っていうやつじゃ――」

「バ、バカヤロ！　勘違いするなよ？　あくまでもカメラの話だよ、カメラの！　ともかく、このカメラはオレの分身だと思って大事にしろ。なんせこのカメラにはな……隣のテニスコートでプレイしているお姉さま方のパンチラ・サービスショットが納められているんだからな！」

「……それって、俗にいう盗撮っていうやつじゃ――」

「そうそう～盗撮ってバレぬようギリギリの際どい角度で迫るのが至難の業で――って、アホンダラ！　思わず自分の怒鳴り声でションベンをチビりそうになったじゃねぇか！　ヤベェヤベェ、こうしちゃいられねぇ。ションベン漏れちまう～」

どうやら相当尿意を我慢してたらしく、まるっと誤魔化すように超ダッシュで行ってしまう赤鬼。あまりの早業に大荷物を下げながら、

『いっそのこと、お姉さま達からパンチ並みのサービスショットを、急所ギリギリの際どい角度に思いっきり打ち込まれればいいのに』

……などと心の中でツッコミを入れつつボケーと突っ立ている私を、さらに追い打ちを掛ける男がズンズンと近寄ってきた。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

相変わらず話的には進展せずにごめんなさい……なんだか赤鬼と足軽の章みたくなってきた。（^―^；）

「これも持てよ」

不躾に声を掛けられた方に顔を向ければ、至近距離に目尻がキュッと上がっている険しい顔の男がいた。

「……え？」

「え？　じゃねぇよ、チチコ。片手が空いてるからまだ持てるだろ」

髪型は彼の兄に全然似ていない。髪はわずかに茶色だが、チリチリどころか野球少年らしく短くスッキリとして坊主に近い。しかし目元はスケコマシな兄にそっくりだった。よく見ればうっすらと鼻にちりばめられているそばかす。

ニコリともしない伴総二朗は、感じのよろしくないセリフと共にグイッと救急箱を私に押し付けた。思った以上に強く押し当てられた場所が痛い。

あまりの態度の悪さに何も言えず唖然としていると、何も反応しない私にイライラしたのか、無言で救急箱をドンとベンチの上に乱暴に置いた。

「ほんじゃ、よろしく」

フンという捨て台詞と共にスタスタと歩いていく伴総二朗。

そしてそれを黙って見送ることしかできない私。

（ちょ、ちょっと……なんなの？！　もうちょっと言いようがあるでしょうが！　私よりも年下のくせに、生意気な！）

カッと怒りが沸き起こり、とても目上の人にものを頼む態度ではない彼の背中に、思わずその救急箱を投げつけるところだった。ど

うやらこの「大野ゴールデンカップス」のメンバーは、星野君を覗いて全員、地味で鈍臭い女性を思いやる気はないようだ。

その一連の様子を見ていた星野君は、さすがに頭に来たのだろう。いつも以上に目を吊り上げながら、「おい、総二朗が持てよ！　力（ツトム）も手伝え！」と怒鳴った。それでも総二朗は、シニアの先輩である星野君の言葉も完全に無視。相撲力士などは、

「そんな重いもんじゃねぇだろ。むしろチチコのそのデカいチチより軽いんじゃねぇの～？　今更救急箱一つ増えたからって大したことねぇって。いけるいける！」

……と軽く言い放ち、ガハハと笑いながら人の横を通り過ぎていく。

そんな二人の言動に、星野君は普段からは考えられないような舌打ちをしながら「アイツらっ！」と悪態つき、盛大なため息を吐いた後、私の方を見て頭を下げた。

「荒井さん、ごめん。本当に」

「え、あ、い、いいよ！　ほ、星野君のせいじゃないし……」

「いや、荒井さんを巻き込んだ俺にも責任ある。そのせいでアイツら、特に総二朗のせいで嫌な思いさせた。普段はここまでひどくないんだけど、ちょっと、とっつきにくいヤツでさ……って、これ、全然言い訳にならないな」

「……そ、そんな、ハハハ」

愛想笑いで誤魔化したが、心の中ではとっつきにくいどころか、とっつかまえてとっちめてやりたい衝動に駆られた荒井美千子。しかし相手はこれまた厄介なチリチリこと「伴丈一朗」の弟。代打として兄が仕返しに来ても困るので、生意気な態度は私の寛大な心で不問にいたすことにした。

例え、いけ好かない態度で乱暴に救急箱を押し付けられただけでなく、初めて伴総二朗に会った瞬間、「だれ、この女」というセリフと共に睨まれたり、「荒井美千子です」と名乗ったら名乗ったで、初対面の上級生を「チチコ」呼ばわりしたうえに、「部外者は立ち入り禁止だぜ」と顎で追い払う仕草をされたとしても、だ。

考えるだけでグツグツと煮えたぎった怒りが沸き起こるが、培ってきた我慢というスキルでなんとか沈めた。それに、こんな忌々しい出来事はさっさと記憶の底へ葬り去るのに限る。もう金輪際このグラウンドに近づかないと決めたし、一生会うこともないだろう。いや、ないようにする。

それより、普段からあんな生意気な態度で学生生活大丈夫なのか？　……と余計なことを考えてしまった。が、すぐそんな気遣いも無駄だと悟る。同じ河田中であるスケコマシな兄と、彼の隣で歩いている相撲力士がバックに付いていれば、支障などあるはずがない。まったく……山野中の狼も問題だらけだが、河田中の狼兄弟もろくなもんじゃない。兄が「チリチリ」なら、弟は「チクチク」といったところか。

一人でプンスカ怒っていると、星野君が一番大きいプラスチックボックスの上をトントンと叩いた。

「荒井さん、その救急箱俺持つから。このボックスの上に乗っけて」

「え？　え、でも……」

（……確かその箱には、キャッチャーマスクやプロテクターのほかにも結構道具が入っていたんじゃ――）

とてもじゃないが、そんなことできなかった。それでなくても重そうなのに……さらに荷物を押し付けたら、完全に嫌な女になってしまう。前を歩いている二人がそう言ったら、遠慮なく投げつけるように渡すけど。

「だだだ大丈夫！　た、確かにそんなに重くないし。駐車場までなら」
「……そうか。なら、お願いしてもいいか？　ホントわりぃ。正直助かる」
さすがに星野君もそのまま私の好意を受け取った。お互い顔を合わせると、どちらからともなく苦笑いを浮かべた。だって、私たちの顔には、「あの連中に何言っても無駄だ」と悟っているのがありありと浮かんでいたから。
私は片方に化粧品が入っている紙袋とスコアを持つと、もう一方で救急箱を持ち、荷物を持った星野君と歩き始めた。
「そういえば、なんで荒井さんはここに？」
「え？」
急に問い掛けられた星野君の声に、早く荷物を届けてさっさとオサラバと逸る心が少し緩んだ。
「寅ニィのせいとはいえ、結局グラウンドに連れ込んだ俺が言うのもナンだけど。荒井さん、区民センターに用事があったんだろ？今更だけど無理矢理引っ張り込んで大丈夫だったか？」
「あ、あぁ……それはですね……」
私も今更だったが、今日この区民センターに来たワケを簡潔に説明した。母の知り合いが化粧品のイベントをやるので、母の代わりに差し入れに来たこと。本当は貴子も一緒に来るはずだったのだが、都合が悪くなり一人で来たこと。桂寅之助に拉致られ……いや、声を掛けられた時は既に用事が終わり、帰るところだったこと。これから化粧品の試供品を貴子の家に届けること。一通り説明すると、

星野君は「へぇ、そうだったのか」といいながら抱えている箱を持ち直した。

「化粧品のイベント、か。……そう言われてみれば荒井さん、その手に持ってる袋――」

「えぇっ、ややややっぱ、わかる?!　い、一応派手にならない程度には抑えてもらったんだけど……って、べべべ別に今日は学校じゃないから化粧は校則違反じゃないよねっ?」

化粧などと似合わないことをやった恥ずかしさで、星野君が言い終わる前に慌てて言い訳をすると、星野君は「え?」と眉根を寄せた。

「化粧?　荒井さん、化粧してるのか?」

「え――」

「そうか、今は中学生でも化粧するのか。初めて聞いた。てっきり大人の女の人というか、オバサンだけかと思った」

「……オ、オバサン……ね……」

星野君は私の超勘違いと言う名のヘナチョコ投球をいとも簡単に捉えると、鋭いスゥイングで容赦なく打ち返した。おかげで女豹熟練度が大幅ダウンの荒井美千子。

いや、この場合落ち込む方が間違っている。だって、星野君のような朴念仁度が……違う、男気のレベルが高い人に、「いつもと違う自分にを気付いてもらいたいわ☆」なんて方が図々しいのだ。

(そ、そうよ。こんな軽い化粧程度じゃ普通気付かないわよねぇ?)

一瞬でも、

『せっかく軽く化粧をしてもらったのに、男性陣誰一人突っ込んでくれないなんてどういうことっ?』

……などと思った自分がおこがましい。
そんなことより、またしても重要なことが一つ判明した。私の顔はやりすぎても「おかちめんこ」になるが、化粧の度合いが軽くても代わり映えしないという事実が。自分の顔をどうすればマシになるか……などという新たな深刻な問題に直面していたら、再び「それよりさ、荒井さん」と声掛けられた。

「ハ、ハイ？」
「今日部活だったんだろ？　バスケ部の『練習試合』どうだった？」
「え？」

チラッとこちらを見ながら言った星野君の言葉に、深刻な問題などはすぐに吹き飛び、かわりに心臓がドキッと跳ねた。しかし『練習試合』という単語に過剰反応したのは一瞬で、すぐにモヤモヤとしたスッキリしない、どちらかというと嫌な気分になった。

「……『練習試合』……ね」

自分でもあまり感じのよろしくない声を出しているのがわかった。おそらく顔も引き攣っているだろう。複雑に歪んでいる顔の筋肉を、どうにかして治めようとしているから、逆におかしな顔になっているに違いない。

（できればその話題、出して欲しくなかったな）

そうは思っても、星野君は「あの男」の友達だから、今日の『練習試合』のことを話題の一つとして出すのは自然だし、仕方がないことなのかもしれない。

けれども、一方では受け入れ難く、重い鉛を飲み込んだような感覚だった。

それとも、これ以上口を開くのが億劫と言った方が正しいのか。

「尾島（ケイスケ）、今日の練習試合のこと、うるさく言ってたろ？」

「……はぁ。そ、そんなこともありました、ネ……」

「え？　あれ？　もしかして……荒井さん、応援行かなかったのか？」

「あ……うん。だって、えーと、ほ、ほら。わわわ私、用事があって……区民（ココ）センターに来たし、それに――」

そこまで言ったところで、慌てて口を噤んだ。

（やだ……そんな、言えるわけないじゃん。「私は声掛けられてない」なんて。そんなの単なる僻みだし）

もう少しで余計なことを言うところだった口をキュッと結びながら自嘲していると、星野君はゴクリと息を飲みと「まさか――」と呟いた。

「バスケ部の試合、全然見なかった、とか？」
「……うん」
「やっ、でもっ、バスケ部の連中には会っただろ？　なんか言われただろ？！」
「……後輩と部活の片づけをした時に、体育館前でバスケ部は見掛けた、かな。でも何も……あっ、そういえば、その時女バレの後輩にはなんか言ってた。……ほら、いつもの感じで勧誘してたよ、尾島君。ハハハ」
「後輩……」
「うん。わ、私はミーティングの後、そのまま貴子と帰ってきちゃったから？　だ、だからその後輩が見に行ったかどうかはわからないけど」
「……」
「で、でも、他のみんなはたぶん残って応援しているよ？　奥住さんや幸子さんに……それにチィ、いや、茅野さんとか。も、もちろん原口……さん達も。ほら、尾島君、昼休みに奥住さんたちにしつこく、いや、熱心に誘ってたでしょ？　だ、だから彼女たちも一生懸命応援するって言ってたし。きっと盛り上がってるんじゃないかなっ！　ハハハハハ」

私はマンガのように頭を掻きながら……って、生憎頭を掻くことは両手が塞がっているから無理だったので、そのかわり朗らかな笑い声を上げた。
いや、上げたはずだ。そうに決まっている。
心の中に渦巻いていた、「私は誘われなかった」などというチンケな僻みは、とっくに遠い地平線の彼方まで流した筈だから。
星野君は私の顔をジッと見た後、「ん～」と唸った。「え？　なに？」と聞いた私に、彼は無言のまま片方の口元だけグイッと上げ、困ったような何かを含んだ苦い顔で笑った。

「盛り上がる……か」
「ギャ、ギャラリーが本当に多かったから、士気が上がってきっと勝ったんじゃないかな。……どっちにしろ試合に来た相手のチーム、気の毒かも」
「そりゃ、どうかな」
「え？」
「マズイな」
「な、なにが？」
「でも自業自得か」

そう言った後、星野君はますます歪んだ笑いをしただけで、何も答えずただ黙々と歩くだけだった。

＊＊＊

日曜日の今日、山野中体育館は朝から賑わっていた。
男バス女バスとも合同練習試合として、他校から2校も来ていたせいだ。
この時代は日曜・祝日しか休日がなかったというのに、貴重な休日である体育館の周囲には、多数のギャラリーがわんさか。その中には我が女バレも含まれていた。たかが練習試合なのに何故か。もちろん、それには理由がある。

『11月●日の日曜日、我が山野中バスケ部の練習試合だ！　張り切って応援するように！』

星野君の言う通り、2年1組のボス猿こと尾島は、ホームルームの前や休み時間、昼休みに放課後と教室内でうるさく宣伝しまくっていた。

いや、別に宣伝するのは構わない。それがたとえ、ウザいを通り越して迷惑の領域になっていたとしても、だ。

大体尾島はイベントごとがある度にそんな感じだった。一年の時はもちろんのこと、二年遠足の時も「女子棟に忍び込む」と宣言していたし、体育祭の時はサポート委員のくせに、自ら応援合戦やリレーの代表に割り込んでいた。

つい先日終わった文化祭の準備も、中心になって偉そうにクラスのみんなに支持を出していた。文化祭最終日の後夜祭もどきなどには、生意気にもステージの上で、辺見先輩率いる三年のバックバンドをこさえたボーカル。さまざまな曲をお披露目したミニコンサート、しかもこれが結構うまいもんだから、憎たらしいったらありゃしない。

しかし、問題はそこではない。

では何が不服なのかと問われれば、私はこう答える。

最近、尾島の様子がまたおかしいからだ、と。それも「私限定」で。

体育祭前まではお互い気まずかった。

一時はこのまま口きかないまま卒業していくかなと思っていたほどだ。

それが体育祭の時に起きた思いがけない事件のおかげで、尾島と正面から話す機会が持てた。それどころか、彼はぶっきらぼうながらもちゃんと謝ってくれたのだ。

あの体育祭の日に二人きりで話したあの時間は、私たちの間にある壁を少し崩した、と思う。少なくとも私はそう感じた。

だから私は、体育祭の翌日から尾島に対して頑なな態度を改め、普通にするよう心掛けた。

それはデビ●マンから「普通にしてろ」と脅され……いや、アドバイスされたせいもあるが、リレーで披露した尾島の俊足に素直に

感動したせいもある。

周りの女子と同じように、さすがの私もあの時の高揚感は中々冷めず、おかげで警戒心は緩みっぱなしだった。そりゃ、からかわれたり、無視されたことは忘れていなかったし、思い出せば決していい感情は沸かなかったけれども、お互いギスギスした気持ちのまま無視し合うよりは数段の進歩かなと思ったから。

それに、個性（アク）が非常に強い2年1組で無事学生生活をやっていくには、悔しいけどどうしても尾島の存在を無視できないことを、嫌と言うほど思い知らされたから。

仲良しこよしとまではいかないけれど、去年のような関係――つまり小競り合いは多いけれど、普通のクラスメートとしてやっていけるんだと、このまま無事に二年を過ごせるんだとホッと胸を撫で下ろした。

尾島にチョッカイ出される日々が始まっても、原口美恵と成田耀子がいい顔をしないとわかっていたけれど、心のどこかで「それでもいいか」と思っていた。

思っていたのに――。

体育祭が終ると、尾島の人気はうなぎ登りだった。文化祭が終わるころには、その人気は不動のものになった。

その勢いは、学年一のモテ男・佐藤君をしのぐほどだ。

学校一モテる雄臣や日下部先輩がいる3年11組の教室の前には、意味もなく人が通り過ぎたり、他のクラスからの訪問率が多かったが、この離れ小島のボロ校舎にある2年1組にも同じ現象が起こり始める始末。

尾島はこの事態にだらしなく鼻を伸ばすかと思いきや、意外と普通で以前と変わらぬ態度だった。ていうか、以前から鼻の下など伸びっ放しだから、変わらぬ態度かどうかは甚だ疑問だ。元々お調子

者と言うか騒がしかったので、今更だし。
ただ、女子に呼び出される回数と男子から激励のチョップという洗礼が増えただけ。
それ以外はいつもと変わらぬ風景だった。
いつものように原口や成田耀子のグループに取り囲まれ、後藤君や諏訪君らの悪友とバカ話しながら笑いあい、退屈しのぎに本間君（マイケル）をからかって、小関明日香にやり込められては不貞腐れ、桂龍太郎と一緒にいれば遠巻きに眺められ、奥住さんや幸子女史にチョッカイかけては追いかけられると、それを見た和子ちゃんと貴子は厭きれてため息を漏らし、授業中騒ぎ立てては先生の取り締まりゾーンの中心となり、相変わらず五教科の成績は芳しくなく下の下。
これが私の知りえる尾島を取り巻く世界すべてだった。
多少周囲は賑やかになったけれども、いつもと同じ光景の筈だった。
筈だったのに――。
認めたくないけど、決定的に違う部分があったのだ。

ダイヤモンドの野獣たち？

尾島の態度がおかしいのに気付いたのは、いつだろうか。
チュウと呼ばれるどころか、私だけが声を掛けられないことに気付いたのは。

無理矢理面倒事を押し付けたり、後ろの席から小舅のような小言を言ったり、ちぎった消しゴムを投げたり、宿題見せろと強引にノートをむしりとったり、掃除のときにわざと人の前でゴミを捨てたりしなくなったのは。

私一人の時、尾島は絶対に近付かなくなった。
誰かが一緒の時だけ、話し掛けてくる。朗らかにしゃべっているように見えるが、その実私と尾島の間に直接的な会話はない。
たまに目が合えば、尾島は慌てて顔を逸らした。怒ったように顔を赤くしながら。

バスケの練習試合の宣伝の時もそう。
原口や成田耀子を始め、ブキミちゃんを除いたクラスの女子ひとりひとりに宣伝していたのに。もちろんお昼をしに来た幸子女史やチィちゃん、それこそ犬猿の仲の和子ちゃんや貴子にまで声を掛けていたのに。
話の流れで私の番になると、急に目を泳がせる尾島。タイミングよく用事を思い出し、慌てて去る尾島。

だから。
なぜかシクシクと痛む心を少しでも和らげるため、先手を打って尾島を視界に入れないようにしたり、入らないようにするのは当然で

はないだろうか。
いくら「練習試合」の観戦を尾島に直接勧誘されなかったからとはいえ、見学するのは自由なのだから、勧誘関係なく少しでも観戦すればいいのに、意地を張って差し入れの予定なんか入れたり、しかも「貴子を元気づけるため」なんてとってつけた理由を自分に言い聞かせるのは、仕方がないことではないだろうか。

尾島からは以前のような嫌がらせはない。男子と話せば相変わらず鬼の形相で睨まれるが、それ以外は冷たい視線もない。
その代り、いい意味でも悪い意味でもターゲットにされることは無くなった。いや、むしろ避けられていると思うのは、私の勘違いだろうか。
おかげで原口や成田耀子のあからさまな陰口もない。
至って平和な日々。これこそ私が望んでいた中学生活。

けれども――
元のような関係でいいと、むしろ戻れることに少し安心した私の思いは、いったい何処にいけばいいのだろう。

＊＊＊

「――いさん。荒井さんっ！」
「え？　あ、は、はいぃっ？」

星野君の呼びかけ声で我に返った。
どうやら思考のダイブをしていたらしい。辺りを見回せば、２年１組の教室でもなければ、体育館でもない。区民センターの駐車場だった。星野君の方見れば、両手に抱えていた荷物をその場にどさ

りと降ろしている。
　星野君はあれ以来すっかり黙り込んでしまい、二人とも無言のままここまで来た。おかげで嫌なことを思い出してしまったけど、話すのも億劫だったのでかえって良かったかもしれない。

「ごめん、荒井さん。本当に助かった」
「ハァ……あ、い、いえ。お役に立てて光栄デス」
「それ、預かるよ」

　星野君が手を差出したので、持っていたスコアブックや救急箱を手渡した。そのおかげで片手が空き、肩にかけていた桂寅之助の超重いバッグを降ろすことができた。
　ゆっくり歩いていた星野君と私以外の選手は、とっくに駐車場で寛いでおり、車の前で一服していたり、その場で着替えをしている人もいた。
　私を怒鳴りつけ、荷物を押し付けた赤鬼なんぞは、どうみても正規の造形から逸脱している、改造しまくりの戦車みたいなバイクの前で、ヤンキー座りをしたまま堂々と煙草を燻らせている。

「……」

　しかもぐるりと駐車場を見渡さなくとも、すぐに目に付くくらい近くにある公衆トイレ。
（なによ……トイレ、駐車場から超近いじゃん！　荷物を持ったまま行けばよかったんじゃないの？）
　さっきからイライラと嫌な気分が続いているせいなのか、見るもの聞くもの全てが気に食わない。
　脳内でお宝ショットが詰まったこの高そうなカメラを地面に叩きつけ、密かに乱暴に降ろした赤鬼のスポーツバッグを、サンドバッグの代わりにして一人ムエタイをすることで鬱憤を晴らしていると、

玄さんが「大野ゴールデンカップス」のメンバーに徴収をかけた。

「ごめん、荒井さん。ちょっと行ってくる。悪いけど、もう少し待っててくれるか？」

星野君の念を押すような声を聞いた途端、ハッと脳内ムエタイから、本来既に完了している筈の自分の用事を思い出した。

（ヤダ……こんなところで想像力膨らませて、油を売ってる場合じゃない！　このチャンスを逃せば後はないぜ、荒井美千子！）

少なくともこの瞬間を逃せば、野獣共から脱出するのが難しくなるのは確かだ。それこそ車などに乗せられたら（まるで誘拐）、そのまま『まるやき』に連行されてしまう（もはや拉致）。

私はブルっと身体を震わせ、ブンブンと頭を振りながらジリジリと星野君から離れた。

「イヤイヤイヤ！　ほ、ほら！　私、貴子の家に行かないとっ！　み、皆さんはこの後『まるやき』に行くんでしょ？　なら、これにてサヨナラということで！　皆さんには星野君から一言伝えてもらえればいいから、ね！」

私は「お邪魔虫はこの辺で速攻退散しやすぜ、アニキぃ！」というように、歪んだ変顔スマイルで両手を振って後ずさりをしつつ、「どうか達者で暮らしてくだせぇ、ゲヘヘ☆」と敬礼しながら爽やかに退場しようとすると、星野君の大きな手がガシリと両肩に乗った。

ヒィッ！　とビックリして、大胆にも両肩に乗っている星野君の手を見た後顔を上げれば、滅多に見れない相当焦った彼の顔がそこに。

シチュエーションが違えば、今の星野君の顔はなんとかチッスに持ち込もうと意気込んでいる、切羽詰った青春真っ盛りの中二男子

そのもの（思いっ切り失礼）。だが、実際は違うだろう（当たり前だ）。

どちらかというと、ヘナチョコ見習い魔導士（荒井美千子）と、そんな弟子を連れた偉大なる魔導士の師匠（星野一幸）。二人は魔獣退治に魔窟へ向かったはいいが、魔獣を目の前にして屁っ放り腰の弟子がいきなりトンズラしようとしたので、無理矢理連れ戻す師匠と言ったところか。

「ダメだ、荒井さん！」

「かかか勘弁してください！　わ、私の未熟な力では、あの猛獣らに効くかどうかっ」

「え？　たわわの魅力なカラダでは、愛のモーション破が効くかどうか？　荒井さん、大丈夫か！」

「ワァァオッ！　ややや、色々と違いますよって！　あ……その、こちらの妄想でして――」

「ゴジラの暴走？」

「……ハハ。モウイイデス」

「なんか良くわからないけど、それより荒井さん。このまま帰るのは非常にマズい。荒井さんが草野球の試合に来たことはすぐバレる。寅ニィも玄さんも力（つとむ）もいるから、絶対荒井さんの話題出てくると思うし。だからせめて『まるやき』に顔を出して、直接会って事情を説明した方が後々憂いがない。『あっちの試合』を見ないで『こっちの試合』を見たなんて知ったら――もうこの際嘘でもいいから、『試合見た』と一言言ってもらえれば！」

「嘘？　でででも、草野球の試合なら本当に見たから、嘘じゃないんじゃ」

「草野球……や、そっちの試合じゃなくって！　いいから、とりあえず待ってて、な？」

「えぇっ？　ちょちょちょっと！　あの、あのですねっ！」

私の必死の叫び声も虚しく、星野君は無口どころか、いつもより多すぎる訳が分からん台詞を早口で捲し立てた。あっちこっちそっちってどっちよ！　と問い詰める前に、非常に慌てた様子でそそくさと走って行ってしまう星野君。

（そ、そんな～！）

手を伸ばしたまま固まった後にがっくりと脱力すると、急に疲れがドッと襲ってきて、その場にしゃがみ込んでしまった。

（朝から部活だったしな。それに見知らぬ人に多く会ったせいかもしれない。オマケに先程から、扱き使われっ放しだし）

片手にぶら下げてある化粧品の袋が妙に重たかった。本当は軽い筈なのに、今日は貴子に届けることができないかもしれないという現実が重たくさせているのか。

暫くそのままだったが、しゃがみこんでいるのも疲れたので、一先ず赤鬼のサンド……いや、スポーツバックを戦車みたいなバイクの傍に置いて、どこかに座ろうとカバンを持ち上げると、あちこちの方向からあらゆる名前を呼ばれた。

（えっ？！）

そう。言葉通り、あらゆる方向から、違う名前を呼ばれたのだ。

「おーい、ボイン！　荷物持ってこい……って、あぁ？」

「待たせてごめん、荒井さん！　……って、ゲっ！」

「あれ？　美千子ちゃん、なにしてるの？」

「あっ、寅ニィにと星野（カズ）だぁ！　あれぇ？　ミっちゃんまでいるぅ！」

でも次の言葉にはぶったまげた。

「チュウ……テメェ！　なんでこんなところにいやがるんだぁっ」

目が点になってしまった、荒井美千子。

いつの間にか「大野ゴールデンカップス」のミーティングは終わっていたようだ。だから、桂寅之助先輩と星野君に声を掛けられたのはわかった。

しかし、他の掛け声は？

いくつかのありえない掛け声にゆっくり振り向けば、お馴染みすぎる、しかしこの場にいるはずのない見知った顔達がそこにあった。私を呼んだ人たちは、私の名前を呼んだはいいが、それぞれ思い思いの顔を浮かべている。

それは驚愕だったり、笑顔だったり、不思議顔だったり、怒りだったり。

だから、赤鬼のカバンを肩から滑り落としてしまったのは仕方がないことだと思う。

ましてや、「ボイン、てめぇ！」と赤鬼に怒鳴られても、謝るだとか、急いで拾い上げる余裕などありはしない。

振り向いたそこには、赤鬼に引けを取らぬ憤怒の形相の尾島を中心とする、バスケ部のデカミニコンビがいた。

「やっだぁ、美千子ちゃん！　デートだったら、そういえば良かっ

たのにぃ！　もう、水臭いんだからぁ」

どう見ても思いっ切り勘違いをしている、とびっきりキュートなスマイルと共にウィンクを投げた安西先生も。

ダイヤモンドの野獣たち？

あらゆる方向から名前を呼ばれた私は、慌てて赤鬼の荷物を拾い上げ、どうしようとオロオロ辺りを見回した。

呼ばれた私も相当困惑顔だったと思うが、私を呼んだ安西先生以外の人たちはもっと不可解な顔をしながら、面識がない安西先生に注目していた。当の先生は自分が注目されていることなど知らずに、大荷物を抱えながら女優のような笑顔でこちらに近付いてくる。

（な、なんで安西先生が駐車場（ここ）に？　……って、車で来たからだよね）

ぐるりと駐車場を見渡せば案の定、マリ先生の愛車である真っ赤なジープの四駆が置いてあった。

とりあえず最年長の先生を優先するべきだと思い、なによりもデートなどという勘違いを訂正するため、星野君や桂先輩たちに「失礼します」と言う意味合いを込めて少し頭を下げた後、安西先生の方へ走り寄った。先生のいる方には尾島たちがいるが、特に何もアクションは起こさなかった。私が呼ばれていることはわかっているだろうし、なにより無視し続けたのは尾島（あっち）なのだから構わないではないか。

「せ、先生！　お仕事は終わったんですか？」

「えぇ、今さっき終わってね？　これから帰るところなんだけど……って、美千子ちゃん……それ、どうしたのっ？」

安西先生は目を見開くと、非常に驚いた顔で私の顔とぶら下げている荷物を何度も見比べた。

「え？　あ、いや、これは……」

確かに先生が目を丸くするのも無理はない。だって、とてもじゃないがデートにしてはあるまじき姿だったから。肩にはスポーツバッグを下げ、首からはカメラ、両手には自分のカバンと化粧品が入った紙袋を持った私は、まるでじゃんけんに負けた小学生が友達の分のランドセルを次の電柱まで持たされるの図、そのものだ。

「え～これはその、知り合いの荷物を預かってまして――」

私は持ち主である赤鬼の方をチラリと見ながらしどろもどろに答えると、先生は微妙に険しい顔を安堵に変え、ホッと胸を撫で下ろしたようだった。

「……そうよねぇ。だって、美千子ちゃん、そんな荷物今日持ってなかったものね？　そう、お知り合いの荷物なの……そうよ、私ったら！　だってこれ、まさか美千子ちゃんがこんなの持ってるはずないわよねぇ！　やだわ、私ったら、考え過ぎ！」

先生は自分に言い聞かせるように何度も頷いていたが、視線は私の胸元に釘付けだった。先生の視線を追って胸元の古い一眼レフカメラをジッと見下ろせば、先生は急に私の肩を掴み、「それよりも美千子ちゃん！」と少し焦ったような声で話しかけてきた。

「そんなことより美千子ちゃんったら、水臭いんだから！　お友達のところへ行くなんて言っちゃって、デートならそう言ってくれればもっと本格的にメイクしたのにぃ。で？　どの子が美千子ちゃんの“ｂｏｙｆｒｉｅｎｄ”なの？」

「@&$●×#▽☆＊っ！」

先生は周囲にいる男子をキョロキョロ眺めながら、素晴らしい発音で“ｂｏｙｆｒｉｅｎｄ”などというこっ恥ずかしい単語を口に

した。その様子はまるで先生自身もティーンエイジャーのようで、親友同士が気になる男子を告白し合う時のようなウキウキ顔。今にも荒井美千子と手を合わせてキャーキャー言い合うほどの生き生き振りだが、あいにくそんな単語に値する男は何処にもいない。

近くにいるぶすくれている男（サル）があらためて目の端に映った突端、何故か色々な意味で居たたまれなくなった。訳もなく野球少年の中に“ｂｏｙｆｒｉｅｎｄ”がいるなどと尾島に誤解されたくないだとか、

『荒井美千子にカレシぃ？　ケッ、そんなことあるわけねぇだろ！』

などとバカにされたくないと思ってしまったので、急いで否定の旨を強く告げた。

「ちちち違いますって！　誤解です、誤解なんです！　たまたま偶然にっ」

「あら？　ちがうの？　……あぁ、そういうことね！　まだ“ｊｕｓｔ　ｆｒｉｅｎｄ”なんでしょ？　もしやこれから進展――キャアッ、どうしよぅ、先生まだ心の準備ができてないわ！」

「……いや、先生……なんか、それはもっと違うというか……わ、私は強引に引っ張り込まれただけでして」

「キャー！　いきなり引っ張り込まれて強引にっ？！　最近のジュニアハイの子たちは随分積極的なのね！」

「ヒェー！　解釈が激しく明後日の方向にっ」

急にギラギラとした視線が全身に突き刺さった。発信源を追わなくともそこにボス猿がいることはなんとなくわかる。例え姿が見えなくても、軽く青筋を立たせている尾島の幻が見える自分が恐ろしい。一方、目の前の安西先生は目をキラキラとさせていたが、何か思うところがあったのか、すぐにキリリと顔を引き締めなおした。

「でもね、美千子ちゃん。中学生でそういうお付き合いはあまり感心しないわ。せめて中学卒業するまで待たなきゃダメ、ね？　せめて“ｋｉｓｓ”くらいに止めておかないと。ほら、イマイチ日本の教育はティンエイジャーに対して、正しい性の知識を説明することを避けている節があるでしょ？　だから先生があらためて言っておくわ！　そりゃ先生もね？　若い頃は色々とあったし、マムとダッドがうるさくて反抗したこともあるから強くは言えないけれど……でも親になった今、その気持ちがとても良くわかるの。これが息子ならどうでもいいかって感じだけど、女の子となるとリスクも高いし……やだ、今更だけど本気で心配になってきたわ！　どうしよう、美千子ちゃん！　先生どうしたらいいのっ？！」

「ヒャーッ！　一段と話が大袈裟にっ！　そそそうじゃなくって、単なる草野球の観戦でして！　引っ張り込まれたのはグラウンドで、あの、その、クラスメートが試合をやっていたものですからっ」

「私にとっても美千子ちゃんは娘同然だしっ――って、え？　クラスメート？　野球観戦？　あら、強引にって……カレシにじゃないの？」

頭から「絶対恋バナ☆」と決めつけていた先生に、全然違うと首をぶんぶん振って否定した。先生はあれだけ性教育云々を懇々と諭したのに、何故かあからさまに残念そうな顔でショボくれる。

「やだ、私ったら……強引に引っ張り込まれたなんていうからてっきり勘違いしちゃって。もぅ、そういうことは早く行ってくれないとぉ」

「……ハハ、言おうと思ったんですが」

全然聞いてくれないからと弱弱しく抗議しようとすると、後ろから背中をバシンと叩かれた。しかもナンパされた時に叩かれた同じ

場所と数ミリ違わない位置。
（い、痛いよっ！）
あまりの激痛に涙目で見上げれば、泣く娘も黙る殺人（赤）鬼スマイルがズームアップされていた。今まで事の成り行きを黙って見ていたのに、急に行動を開始したのは、「性の知識」と言う言葉に惹かれたからなのか、それとも安西先生の美貌に惹かれたからなのか。凶器そのものの顔を無理矢理愛想良く笑いながら肩を組んでくるもんだから、「ギャァッ！」と腰を抜かしそうになった。

「いや～非常に気が利く我が後輩よ、荷物ありがとうありがとう。この際ボクの大事な荷物を落としたことはキレイサッパリ記憶から抹消してやろう。それよりもこちらのキレイな方はどなたなのかな？　ん？　あぁ！　いきなりスミマセン。ボク、このボインさんのマブダチであり、先輩後輩などというきわめて健全なお付き合いをさせていただいております、桂寅之助と申します。オイ、一点の曇りもないほど真っ新な清い関係の後輩よ。ここは日頃の感謝をこめて、チミの面倒をみている恩人であり師匠であるボクを、ぜひともこの美しいご婦人に紹介してはくれまいか。素晴らしいところがありすぎて何処から説明したらいいか非常に迷うかもしれんが、そこはチミのセンスと心意気に任せたいと思う。しかし、その前に一言言っておこう。いいか、人間というのは見た目だけでは判断できねぇほど奥が深い生きモノだ。これがどういう意味か、わかるな？　そこんとこ踏まえてどうか夜露死苦っ！」

（おいおい……日頃どころか、会うの今日で二回目だろ！）
「師匠」というより「支障」そのものな赤鬼は、原口美恵に負けないくらいの猫なで声を出した。が、どう聞いても猫じゃなく、その名の通り虎。良くて化け猫のような迫力で脅迫している先輩の人となりをどう上手く誤魔化しながら……もとい、美化しながら穏便に言い包めばいいというのか。しかも目の前の安西先生は、「これか

ら何が出てくるんだろう」という珍動物を見るような興味深い目で見ており、赤鬼は期待を込めた目で待ち構えている。

超難問を突きつけられている、超難関なシチュエーションに挟まれた荒井美千子は――

「……ど、同級生のお兄さんです」

超ナンセンスなアドリブで簡潔にまとめてみれば、桂寅之助先輩はスケベ丸出しの緩い笑顔のまま、目にもとまらぬ早業で私の脇腹に鋭い鉄拳をキメた。

ダイヤモンドの野獣たち？

「いやぁ～それにしてもこんな素敵な女性（ヒト）が、このセンスのかけらもないボインさんの……おっと、ヤベェ。あれ？　名前ボインだっけ？　え？　アライミチコ？　サンキュー、星野（カズ）！　そうそう、アマイチチコさんね！　いやいやいや、チチコさんのお知り合いだとは！　いやはや、この桂寅之助、実に運命を感じますっ」

そう言って鼻息荒く安西先生の白魚のようなほっそりとした両手をガシリと握りしめるのは、星野君に人の名前を堂々と確認しただけでなく、途中全然違う名前に変換された挙句結局チチコ呼ばわりしたよこの赤鬼（オトコ）！　……こと桂寅之助。しかも慌てて星野君が訂正したにもかかわらず、このデリカシーの無い赤鬼は全く聞いておらん。

（な・に・がっ、『チチコさん』だ！）

たとえ無駄に「さん」付されたとはいえ、「チチコ」につけるんじゃありがたみは半減、恨みつらみは倍増である。

しかし――冴えないアドリブで赤鬼の期待を大きく裏切った私は、先生から見えないきわどい角度に鋭い鉄拳でどつかれたという過去があるため、思わず首を締め上げそうになる衝動をなんとか堪えた。

……ほら、怖いし痛いのヤダし。

「いやいやホント！　オレも運命感じちゃうッス！」

物騒な敵（ハイエナ）は獲物に狙いを定めた瞬間、次から次へと仲間を呼び寄せ集団で狩りを行うのがお約束というもの。

赤鬼の手の上にリアルグローブのような手を重ねたのは、まだ義務教育中の幕下なくせに生意気な相撲力士こと相模力（さがみつとむ）。

（つぶれるから、先生の手がつぶれるから！　今すぐどけてくれっ）

だがラッキーなことに、被害を被ってるのは先生の手をかばっている赤鬼の手。痛みを我慢して顔を歪めている赤鬼を眺めながら、なかなかジェントルマンじゃないかと感心してしまったが、よくよく考えてみればアレだ。単に先生を独り占めしたいがために他ならない。

「バケェロゥ！　てめえらみたいなガキ共が馴れ馴れしく触るんじゃねぇ！　散れ散れ！　え～ゴホン。申し遅れました。ワタクシ『大野ゴールデンカップス』の監督兼大野商店街でおなじみの、『鬼頭不動産』社長・鬼頭玄造でございます。こんな鼻ったれのガキ共など相手にしなくて結構ですよ？　あなたのような素敵な女性は、ワタクシのようにナイスなミドルが相応しいというもの。美しいアナタの下僕、鬼頭、鬼頭玄造をどうかヨロシク！」

赤鬼たちの小競り合いにズカズカと割り込んできた、色黒パンチなハイエナのボスこと玄さん。ナイスなミドルと言うより『なすびが躍る』などというありえない珍事件のようなお顔で、赤鬼と相撲力士の手を安西先生から無理矢理剥がしながら自己紹介をお披露目した。色黒パンチから放たれる野獣のオーラで部下を牽制しつつ、安西先生には胡散臭い笑みを向けている。白い歯ならぬ金歯をキラリと光らせながら。

「ずりぃよ～横暴だぜ、玄さん！」
「力士のいう通りだ。下僕どころか唐変木のしみったれたクソジジィのくせによぉ、ケッ！」
「じゃかぁしいっ！　ガキはクソして寝る時間だっ、けぇれけぇれ！」

我こそが「安西マリ」の隣に立つ男！　……と言わんばかりに、このこのこのとお互い取っ組み合いでポジション争いをしながら、

俺が俺が俺がと醜い争いを繰り広げる三人。星野君の「恥ずかしいからやめてくれ」という常識人の制止も虚しく、当の安西先生はほんのりバラ色に染めている頬を両手で覆い、永遠の乙女なポーズをとった。

「やん、恥ずかしいわぁ。なんか照れちゃうぅ」

（先生、照れてる場合じゃないのでは……）

なんせ女王のエスコート役を争っている人物は、赤鬼と巨漢モヒカンと色黒パンチ。どうみても街角に貼られている「この顔見たら、１１０番！」のような怪しい三人相手に恥らうなんて、やっぱり先生のツボはいまいち理解不能だ。

（けど、ここはなんとしても私が女王を守り通さねばっ）

とりあえずこの目の前の野獣共を蹴散らすため、ヘナチョコ魔導士から女王の傍に控える王族専属の近衛騎士となって、猛獣共の鼻先に鋭い剣先を突きつけっ！　……ることはできないので、鉄槌を受けていまだに痛い脇腹を摩りながら、先生の横から思いっ切り殺傷力ＭＡＸな熱視線で３バカトリオを懲らしめた。が、そんな荒井美千子の胸中も知らない先生の朗らかなまんざらでもない笑顔を見た途端、何故かやるせない溜息が漏れてしまったのだった。

＊＊＊

赤鬼から鉄槌を受けた私は、改めて言葉を選び直しながら桂先輩を先生に紹介し直した。先生はその派手な容姿の面々に恐れを抱くことなく、素直に「こちらこそよろしく～」と朗らかに頭を下げた。その様子を見て気をよくしたのだろう。今度は相撲力士が巨体のくせに、ホイホイとゴキブリ並みの速さで寄ってきたのだ。

しかも目を剥くほどの強烈な衣装に着替えて。

『そんな服、一体何処の洋品店（死語）で売ってるんスかっ？！』

……というような、ダボっとした派手な紫色の上下。しかもこの涼しい季節に可哀そうなほど汗だくな力士には少々キツイ、水分吸わなそうなテカっているサテン生地。ちなみに幼稚園のお遊戯会的な生地でできているこの衣装（ファッション）の見せ所は、これまた園児には全く無縁である背中に描かれた刺青のような和柄の龍である。

なんとも体質に合っていない奇抜なファッションをチョイスし、どうやらシコを踏む前に軽く道を踏み外しちゃったのね不良（ツッパリ）の相撲力士は、それこそ正真正銘の「張り手（ツッパリ）」を派手にキメながら赤鬼の横から割り込んできた。色々と予想外の出来事をまともに食らった赤鬼と私は、視覚をヤられるという精神的苦痛を受けただけでなく、土俵の外に突き飛ばされる肉体的ダメージを受ける始末。

つーか、力士と呼ばれるからには、ヤンキー服着る前にまわし一本で勝負してみろやっ！　……などと脳内でツッコんどく荒井美千子。

『……いってぇ……って、あぁぁんっ？！　あんでボインまで倒れるのよっ！　てか、預けたカメラがっ！』

遠慮なく人の上に乗って覆いかぶさってた赤鬼は、ガバリと起き上がり大声を上げた。傍から見たらまるで押し倒されているように見える破廉恥な体勢で下敷きになった荒井美千子のことより、私の首から下げていたカメラの安否を先に確認をする桂寅之助。「大事なお宝ショットがっ！」などと悲鳴を上げながら舐めるようにカメラを見回し、傷がついてないことにホッと安堵すると、急にギラリと目を光らせながら被害の元凶である力士を睨んだ。

『ボイン……このケースにカメラを入れとけ！　オラァァっ相撲力士っ！　てめぇ～いますぐ土下座こいて、キッチリ詫びを入れろ

やぁっ！』

『不可抗力ッス。　それより自分は「相模力（さがみつとむ）」ッス！　おい、チチコ。寅之助さんだけじゃなく、オレも紹介しろ？』

『やめろよ、力（つとむ）！　大丈夫か、荒井さん！』

私を踏み台にして起き上がった赤鬼は、白星をキメた力士とタイマンを張りはじめた。

一方争いの発端となった先生は、急いで止めに入った唯一まともな星野君と同じタイミングで、「美千子ちゃん、大丈夫？！」と駆け寄ってきてくれたのだが……。カメラのケースを投げつけられてボー然とした私を起そうとした星野君を見て、急に目をランランと輝かせながら奇声を発した。しかも私の腕を掴もうとした星野君の両手を大胆にとって握手を交わし、そのままグルグル回転する勢い。おかげで私は地面に転がったまますっかり忘れ去られた。

（……まぁ、赤鬼の（サンド）バッグがクッションになったからいいんですけどね……）

『キャァ、どうしよう！　美千子ちゃん、わかったわ！　この人でしょ？！　初めまして、うちの美千子が大変お世話になってますぅ。これからも末永くどうぞよろしくねっ』

『はぁ……あ、いや、それより荒井さんが』

『やだ～優しい上に男らしいじゃないの！　美千子ちゃん、やるぅ！　で、二人はいつからお付き合いを？』

『は？　頭突き合い？』

『え――あらあらもう！』

先生の上を行く超勘違いをした困った顔の星野君と、「好青年の上にユーモアも持ち合せてるなんてなかなかポイント高いぜこの男子！」とさらに喜んでいる先生の暴走を止めるため、ここは自力で起き上がり早めに紹介を強制終了しちまおうとしたら――。

いきなりガシっと腕を掴まれ、ぐいんと引っ張りあげられた。

急に片方の腕に力が入ったものだからビックリして腕を掴んでいる主を見れば、笑顔だけど目は笑っていない不機嫌さＭＡＸの尾島が聳え立っていた。

背後にミニマムコンビの傍らである小悪魔小関明日香、デカいくせに腰ぎんちゃくのような後藤君を引きつれて。

ダイヤモンドの野獣たち？

『ドウモコンニチハ　アライミチコサン。コンナ　ニチヨウビノユウガタニ　グウゼンデスネ。ハハハノハ』

尾島は冥府からわざわざ下界へ狩りにやってきたような死神顔を、ズズイと近付けた。

体育祭以降滅多に合うことのなかったその瞳には地獄の業火が燃え盛り、骨まで残らぬ的な怨念が籠っている。私の腕を抱え込むように絡む尾島の腕の感触と怖いお顔に心臓がバクバク、「もうイヤーン☆」というより、「もうアカン……」と悲鳴を上げていた。

思いっ切り怯える私を見かねたのか、それとも面白がっているのか。小悪魔スマイルの小関明日香は尾島が掴んでいる反対側の私の腕を掴んで立たせてくれた後、私を間に挟んで横からフォローと言う名のチャチャを入れた。

『やだぁ、啓介（ケースケ）ったら怖ーい！　どさくさに紛れてミっちゃんのDカップボインに腕くっつけてヤラシー！』

『アホッ！　ヤラシイじゃなくて柔らかいっ――――て、ババババカヤロゥッ！　オ、オレ様は親切心で助けてやっただけで、決してちょっとでも感触を味わいたいなんて下心はねぇっ！　それにDじゃなくってEっ！　……あ……イー、イー……あ～イー天気だな、今日はっ。ハハハノハッ』

『え～ヘンだなぁ？　どうみても曇りなんですけどぉ？』

『うるせっ！　とととともかく、星野（カズ）や寅ニィに先越されて羨ましいからオレもなどという、やましい気持ちなんて一切ねぇからなっ！』

『……ふ～ん。あっそ』

『……わ、わかりゃいいんだよ……』

『それより啓介（ケースケ）さぁ～前から聞きたかったんだけど』
『あぁ？』
『体育祭終わった頃からぁ、「デキるハンターはこれを読め！　～スゴすぎちゃってゴメンナサイ☆女豹を落とすトドメの１００選～」とかぁ、「奇跡と呼ばれたハンター達　～騙して落として身ぐるみ剥がしてバキュンと一発ヤっちゃえよ～」とかぁ、「月刊ザ・ハンター　～ニブチン女豹大特集！　ワタシ達、こんな仕打（ワナ）ちに弱いんデス～」もあったかな？　これ全部寅ニィのところから勝手に持ち出してたでしょ。何で？』
『ホアァァっ？！　なななっ、なんで明日香がそんなこと知ってんだよぉぉっ』
『だって、啓介（ケースケ）ってエッチ本とかその手の大事なものを隠すところ、いっつも同じなんだもん』
『うわぁぁぁっ、今すぐだまれぇっ！　いっそ消えちまえぇぇっ！　ってか、勝手に人の部屋を漁んなぁっ！』
『あの本、一体何のために使ってたの？　ねぇねぇ、教えなさいよぉ～』
『●＆％▽@■＄＃Д っっ！』

人の横で無邪気に問う小悪魔小関明日香は、宇宙語を叫びながら相当に焦る尾島を荒井美千子ごとユサユサと揺すったのだった。

＊＊＊

「ほぅ～なるほどね。チュウが通ってる英語塾の先生ね。ふ～ん、あっそう。それでこの区民センターに？　お使いできたというわけですか。そんでもって？　ついでに野球の試合観戦などを？　それはそれは～日曜なのにご苦労さまですなぁっ！」
「……」

3バカトリオの小競り合いを苦々しく眺めていた私の前に割り込んできたのは、久しぶりに「チュウ」呼ばわりをしたうえに、嫌味な言葉をオンパレードする尾島だった。

口角をグイッとあげて笑っているように見えるが、その笑顔の奥は言わずと知れたご機嫌斜めの魔王が鎮座している。玉座の上で堂々と不貞腐れながら、「ケッ！」と鼻毛を抜いている幻が見えるのはなぜであろう。

（人のことを散々無視してくれたうえに、試合観戦にも誘ってくれなかった私に対しての言葉がコレですか）

今まで無視していたあの態度は一体何処へ行ったのか。安西先生に紹介するまで小関明日香の言葉に相当パニクった後、真っ赤な顔でダンマリングのまま固まっていたくせに。

『フ～ン、あっそ。いかがわしい本の隠し場所がわかるほど小関明日香は尾島（アンタ）の部屋に入り浸ってるんですか。そんなに仲がいいんですか、へ～！』

……という荒井美千子の超軽蔑な眼差しを見て我に返ったのか。「一体部屋でナニしてんでしょうねアンタら。超不潔金輪際近寄るなこのエロエロ星人どもめ！」的な私の視線を吹き飛ばすように、「もうヤメだ、ヤメ！」と急に怒鳴り散らした尾島。私は一切悪くないのに逆ギレもいいとこだ。

「ホントだよねぇ。だから尾島（ケースケ）があんだけ宣伝してた練習試合にみんな来てたのにぃ、ミっちゃんだけギャラリーの中で見かけなかったんだぁ。ほーんと、あんな綺麗な人の頼みじゃ断れないよなぁ。ね、後藤？」

「んなの知るかよ。一人くらい観客がいねぇからって大したことねーだろ？　第一試合に勝てばどーでもいいし」

尾島の言葉にも厭きれたが、小関明日香のセリフにはもっと開いた口が塞がらなかった。

だって彼女は、尾島が私にだけ勧誘をしなかった現場にいたし、しかも「ミっちゃんには声掛けないの～？」と嫌がる尾島の後を追いかけていた張本人なのだ。なのに今更この台詞。後藤君の場合はもはや問題外で、解説もフォローもする気になれない。むしろここまでくると軽く殺意を覚えるどころか、感心のあまり文句も失せるというものだ。怒りを乗り越え、まるで無の極地に達しそうな己の心。いっそ悟りでも開いて、教祖にでもなったほうがいいんじゃないだろうか。

（試合を見に来ない奴はすべてカス同然な扱いなんて、アンタらどんだけエラいのよ。グラウンドから追い出そうとした伴総二朗の方がまだ筋が通ってるわい。全然可愛げないけど）

「……」

その辛辣な言葉を吐いた伴総二朗はもうこの駐車場にはいない。つい先ほど帰ったばかりだ。

全然可愛げのない伴総二朗は赤鬼や相撲力士とは違い、安西先生を囲む私達を睨むように遠巻きに眺めるだけで近寄ってこなかった。かと思えば、いきなり自分の荷物を担ぎ、私たちの横を通り過ぎながらさっさと駐車場の出入口の方へ歩き出してしまう伴総二朗。しかも赤鬼や力士、シニアの先輩である星野君に挨拶もせずに。

『おい、総二朗！　何処に行くんだよ、打ち上げ来ないのか？』

結局デカミニコンビも安西先生に渋々紹介していると、星野君はもろシカトな総二朗に声を掛けた。しかし総二朗は声を掛けられても完全無視。もう一度声を掛けたらやっとダルそうに振り向いた。

『……もうさっき解散になったでしょ？　これでオシマイですよね？　それに「まるやき」は遠慮しときますよ。関係のない部外者が沢山来そうだし？　だからお先に失礼します。セ・ン・パ・イ』

みんなが注目しているにも関わらず、堂々と慇懃無礼な態度で挨拶をした伴総二朗は、「フン」と鼻で嗤った後、すぐに険しい顔で睨むように後藤君と小関明日香、尾島と星野君、最後に荒井美千子に目線のピントを合わせたらすぐ背を向けて歩いて行ってしまったのだ。

（ちょ、ちょっと、なんで私を睨むのよ！　私は関係ないでしょうがっ）

ズカズカ歩いて去る超失礼なチクチクの背中に文句を言っていると、後藤君が「なんだよ、ありゃ？！」とデカい声を張り上げた。後藤君は睨まれただけだけど、態度が気に入らなかったのだろう。

「星野（カズ）、先輩としてガツンとシめた方がいいぜ？」と再びデカい声で星野君に訴え、同じく小関明日香も「なにあれ。総二朗、感じワル～」と口を尖らせた。が、一番文句言いそうな尾島は「ほっとけ、あんなガキ」と吐き捨て、星野君は険しい顔で黙ったままだった。

当然伴総二朗のおかげで辺りには気まずい雰囲気が漂ったが、すぐに消えた。一旦休戦をしていた赤鬼と力士がハモりながら、「あんな失礼な奴はほっといていいですよ～」と安西先生にフォローをしてくれたからだ。

しかし、二人はお互いハモったのが気に食わなかったのか。再び試合開始のゴングを鳴らし始めたので、伴総二朗の存在はすぐに忘れ去られたのだった。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

文中にあるハウツー本の書籍は実在しません。あくまでもフィクションです、ご了承ください。ｍ（＿＿）ｍそれよりハウツー本ってなんかおもしろいですよね。ちなみに菩提樹のオススメは扶桑社から出ている「大人養成講座」です。かつて新人ＯＬ時代、先輩からこれ読んで大人になれと渡されました。読了後、一歩大人へと近づいた思い出は人生の大切な宝物です。

「お、お手数掛けまして本当にすみません……」

車の助手席に座った私は、あらためて左側で運転している安西先生に頭を下げると、先生は「あらいいのよ」と言ってウフフと笑った。

「今日中にお友達に渡した方が絶対喜ぶわよぉ。それに、アレを学校には持っていくことはできないでしょ？」

ハンドルを握りながら未だにクスクス笑っている先生に向って、「スミマセン……」ともう一度謝りながら座席の足元にあるアレを見た。そこには缶ビールやつまみが入っているスーパーのビニール袋が置いてある。

（……確かに。化粧品もおそらく校則違反だろうけど、お酒は確実にアウトだ）

前を走る車のテールランプに目線を戻しそっとため息を吐いた。

結局私は「まるやき」には寄らず、星野君や尾島達と別れて先生と一緒に帰ることになった。

先生の争奪戦と尾島の説教が渦巻くあの戦線からどうやって離脱しようかと悶々としていたところ、タイミングよく先生が声を掛けてくれたおかげだ。

やっとデートでないことを理解してくれた先生は、私が貴子の家に行く予定だったことを思い出し、「もう行ったの？」と聞いてくれたのが幸いした。少し暗くなりかけていたけど、そんなに遠くないので今から行きますと赤鬼たちに聞こえるように宣言すれば、先生は車を出すと言ってくれたのだ。申し訳ないので一人で行くと辞

退すれば、「差し入れのお礼よぉ」と先生も引かない。まるでランチが終わったオバチャン主婦達がお会計するときのリアクションのように、「いいから、いいから」「いーえ、わるいわ」の勢いで押し問答していたら、赤鬼が何やら私の前に差し出した。

『おら、ボイ……いや、澄み切った青空のように爽やかな関係である後輩のデカイチチコよ。これを持っていけ。貴子んとこなら菓子よりこっちだろ』

色々な形容詞を申し訳ない程度に付けたってやっぱり名前は間違たままどころかもはや原型をとどめちゃいないよこの赤鬼（オトコ）！……が押し付けたのは、クーラーボックスの中に入っていたと思われる缶ビールと乾きもののツマミの詰め合わせが入った袋だった。確かにシュークリームよりお酒の方が喜ばれるだろう。なんせ酒豪が二人もいるし（厚子お姉さまと貴子のお父さん）、物騒な手下（湘南●走族）が集合するのだから。しかしこれがキッカケで、さすがに重いからということで結局車で送ってもらうことになってしまったのだ。

こうして馬車ではなく真っ赤なジープに颯爽と乗った女王（とへタレ近衛騎士）は、別れが名残惜しいハイエナ達と一部まだ不貞腐れているデカミニコンビに「チャオ！」とウィンク付きの挨拶をして悩殺させている隙に、無事野獣の巣窟から脱出することに成功したのであった。

「それにしても意外だわぁ。美千子ちゃんって結構ユニークなお友達が多いのね？」

先生は小関明日香では到底足元にも及ばない、これぞ本家大元の小悪魔というような笑顔でこちらをチラリと見た。

「ハァ……と、友達と言うより、どちらかというと単なる知り合いというか……」
「えーと、ほら！　桂……君だっけ？　随分と親しい感じじゃない？」
「ヒィッ！　ややや っ！　あああの人は単なる友達の知り合いでしてっ、むしろ他人に近いというかっ」
「え？　そうなの？」
「そうですっ！」
「……そっか。でもそれ聞いて先生少し安心しちゃったな」
「え……え？」

先生の方を見れば、眉尻を下げた困った顔で微笑んでおり、素敵な小悪魔はなりを潜めていた。

「あ、別に深い意味はないのよ？　ほら、あのシャイな美千子ちゃんがアラタや雄臣以外の男の子と仲いい姿なんて初めて見たから、なんだか驚いちゃって。それに美千子ちゃんと桂君随分自然な感じで仲良かったし、彼の大事なカメラ……じゃなくって！　荷物！　ほら、荷物預かってたでしょ？　だから親しいのかなって。それにビールもくれたじゃない？」
「ヒェーっ！　ややややっ、かかか桂先輩は全然親しくありませんっ！　縁は思いっ切り薄いデス、ハイっ。会うの今日で2回めですしっ！」

先生の性質の悪い勘違いを正すため、私は思いっ切り頭から否定した。

「ほんとうに？」
「本当ですっ！」

大体人をナンパしときながらパシリへと一転させるという、まるで「しりとり」のような扱いをした挙句、

『今日の報酬だ、心して受け取れ。ちなみに「愛のアマゾン入らにゃソンソン☆奥まで探究ジャングルルーム」もオススメだ。……ったく、オレっちにここまで気を使わすなんてよ。オマエもなかなか憎いね、コンチクショー！』

……などとウィンクをよこしながら人の腕が折れるほど拳でガチンコし、コッソリと手にいかがわしい紙切れ（ホテル・ダブルスプラッシュの平日割引チケット）を握らす男など、仲良くなった覚えもなければ親しい間柄になった覚えもない。

第一思わず受け取ってしまったこのチケットの期限は今月一杯である。どう考えても今月中に使うの無理じゃん！　と思ったところで我に返った。

（なななんで使うこと前提なの！　バカバカ、荒井美千子のバカ！）

おバカな想像ついでに浮かんできた、スケベ顔のハンター（桂寅之助）と尻尾をピシッピシッと鞭のようにしならせ妖艶に微笑む女豹（荒井美千子）が、ジャングルルームで睨みあいながらジリジリと間合いを詰めるという恐ろしい脳内光景をバズーカで吹き飛ばし、「やっぱりお好み焼き屋の給料泥棒店員と紹介しとくんだった」と激しく後悔し始めた私に、先生はふーっと安堵の溜息をついた。

「そ、そう……そうよね！　フフッ、やだ私ったら……うん、そうよ！　美千子ちゃんと桂君じゃ、どうみても合わないわよね～。やっぱり美千子ちゃんには星野君みたいな人がイイと思うわ。なんてったってやさしそうだし。ここは断然カメラマンよりプロ野球選手よ！　そのほうが悟ちゃんもいずみちゃんも絶対安心するし。そうしなさいな、ね？」

「……あ、いや、別にあの人たちはまだ学生――」
「やぁねぇ～たとえばの話よぉ」
「……あ、ですよね……ハハ」

何故か一生懸命星野君を推す先生に、私は引き攣った笑いしかできなかった。
おそらく先生は身内のような目で私を見ているから、健全な付き合いができそうな男子を勧めただけだろう。深い意味はないとわかってはいるが、正直リアクションに困ってしまった。大体お付き合い云々は私にとって早すぎるし、ハードルが高すぎる。それにむこうにだって選ぶ権利はあるだろう。なによりあそこにいたメンバーは誰一人として私を選ばないに違いない。
（星野君、か。やっぱ、尾島……じゃないんだな。仲良くはなかったけど結構しゃべってたのに……）
先生の目から見ても、不貞腐れている魔王な尾島より、魔導士な星野君の方が私に似合っていると言われたことにチクンと胸が痛んだ。
（……って、なんで胸が痛いのよ。かえって喜ばしいことじゃないの？　なにより星野君に失礼だし！　大体説教のクドい尾島（オトコ）なんて、こっちからお断りでしょ）
頭を巡るのは最後の最後までうるさかった尾島の小言。「まるやき」に寄らず私が帰ると言えば、
『はぁ？　なんですと？　これから「まるやき」でオレ様の武勇伝がお披露目されるんだぜ？　自分の用事を優先してバスケの練習試合をシカトこいたチュウはそれを聞かず帰るとおっしゃるんですかっ？　……クソ……せっかくアツアツなお好み焼きをフーフーのア～ンですべてチャラにしようと思ったのに……そうだよ、そんなオレ様の寛大な処置を踏みにじって帰るとはアンタ何様ですかね？！』

……などと途中私的なつぶやきを交えながらくどくど文句を言い出す始末。

（何様もオレ様でもなく大きなお世話様だ、コノヤロ！）

しかし――尾島がいつもの態度に戻ったことにホッとしている自分がいた。理由は多分、あまりにも色々ありすぎて相当疲労が溜まっていたからに違いない。なにしろ尾島の私的なつぶやきが聞こえた途端、明後日の方は向いているが若干機嫌がよくなって鼻の下が伸びた魔王に、アツアツのお好み焼きをフーフーと冷ましてあげるだけでなく、嬉し恥ずかしそうに「ハイ、ア～ン」などと食べさせてあげる、ふりふりエプロンのワイフな荒井美千子が脳裏に浮かんだのだから。

（オイオイさっきからどうしたよ……相当重症だろ、私！　いや、それもこれもあの物騒な連中のせいだ。あの連中と一緒にいればストレスは溜まっても、解消されることはまずありえないからね。……やだなぁ、ストレスって結構怖いんだな）

「あっ！　でも美千子ちゃん、アラタや雄臣もいること忘れないでね？　先生としては、美千子ちゃんにはどちらかの嫁に来てほしいわぁ。雄ちゃんもそりゃ素敵だけど……うちのアラタ、どう？　この際年下でもいいじゃないの、成人したら歳の差なんて関係ないし！　母親が言うのもナンだけどかなり有望株よ？　そのうちノーベル賞なんか取っちゃったりしてっ。そしたらスウェーデンよ、スウェーデン！　どうしよう、授賞式の時何着て行こうかしらぁ～」

ストレスの恐ろしさを身をもって噛みしめていると、そんなことも知らない運転席の安西先生はルンルンと鼻歌を歌いながら、子を持つ親ならば誰でも一度は経験する親バカぶりを発揮した。

雄臣はともかく、アラタは確かに色々な意味でお買い得だろう。しかし当のアラタは地味で鈍くさい幼馴染のことなど伴侶の対象ど

ころか、出来の悪い姉ぐらいにしか思っていないに違いない。が、自分で言うのも虚しかったので、この場では敢えてスルーで通すことにした荒井美千子なのであった。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

ホテル・ダブルスプラッシュではお客様のニーズに合わせて、様々なコンセプトに基づいたお部屋をご用意しております。（総支配人・菩提樹）

☆登場人物《中学2年編》ネタバレありです☆（前書き）

！！注意！！

「ダイヤモンドの野獣たち」まで読んで無い方は、ネタバレ全開です。

☆登場人物《中学2年編》ネタバレありです☆

★主な登場人物・山野中★

●荒井美千子（あらいみちこ）（チュウ、ボイン、チチコ、ミっちゃん）
本編の主人公。山野小出身・バレー部所属。1組。
豊満なバスト（とうとうEカップに発達）の持ち主で、山あり谷ありだらけの鈍臭い地味女子。映画好きで金髪碧眼に弱い面食い。

「どういうわけか、苦手なタイプなほどいい意味でも悪い意味でもターゲットにされやすいタイプ。人を良く見て石橋を叩き過ぎるくらい慎重だが、結局ドツボにハマる事が多い」

●尾島啓介（おじまけいすけ）（チビ猿、野生猿、類人猿、悪魔）
美千子のクラスメート。大野小出身・サッカー部兼バスケ部所属。1組。
黙っていれば色白の可愛らしい男の子だが、その実は悪魔。ややたれ目のハッキリ二重に右目尻に黒子があり。甘いもの好き。ハンター向けマニュアルを真剣に熟読中。しかし本嫌いのうえに途中エッチコラムに目が移る為、肝心なところを読み落としている模様。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の赤担当・通称オジマヌケ。

「態度は横柄でも中身は超純情でお子様。とにかく自分が一番じゃないと気が済まないタイプ。興味のある事や人にはいろんな意味でとことん尽くすが、やりすぎちゃって失敗したり、嫌われて逃げられたりするのがたまにキズ」

●笹谷貴子（ささやたかこ）
美千子の友達。大野小出身・バレー部所属。2組。

髪の毛と目が茶色い、落ち着いた大人っぽい女生徒。美千子の親友で、将来はスタイリストかメイクアップアーティストが夢のオシャレ番長。姉はK県でも知れ渡るほど有名なスケバン・笹谷厚子。母親が病気で入院中。日下部先輩とのお付き合いに戸惑いを感じているようで……。

「さりげなく陰で支えることができる良妻賢母のような女子だが、怒らすともっとも怖く厄介なタイプ。自分のことになると周囲に気を使ってしまい途端に自信がなくなるという一面も」

●宇井和子（ういかずこ）（和子ちゃん、ドテチン）
美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。２組。
部活では殺人スパイクを繰り出す現エースアタッカー。相変わらず少年隊のヒガシの大ファンで、東雄臣にホの字。

「見た目も性格も大柄で友情に厚いガッツな姉御肌だが、中身は超乙女で身なりにかなり気を使う繊細なタイプ。女をバカにするガサツで口うるさい男には異常なほど手厳しい」

●中山幸子（なかやまさちこ）（幸子女史、ヒラメ）
美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。１０組。
痩せてスラッと背の高い女の子。女史と言われる通り成績はいい。宇井和子とは御近所さんで、小さい頃からの幼馴染。チィちゃんの恋の応援団長。その関係で小関明日香とも最近親しい関係に。

「頭がいい割にはそれを鼻に掛けず、遊びも勉強も両方楽しめる人。時々キツイ意見がポロッと口に出してしまうところも。ともかく人の恋路や恋バナが気になり、友達の恋愛事情を把握したいタイプ。隠すのは友情じゃないと思っている節も」

●茅野陽菜美（ちのひなみ）（チィちゃん）
美千子の友達。山野小出身・バレー部所属。１０組。
お菓子作りが得意のおとなしい女生徒。身長１５０センチに成長。
少年隊大好き。
只今尾島啓介に片思い中。最近同じクラスの幸子女史、小関明日香と行動を共にすることが多い。

「やさしく思いやりがあり、人のいいところを見抜きそれを素直に認められる人。なので嫌われることはないし、周囲が放っておかないタイプ。本人は頑張っているつもりでも周りをヤキモキさせ、知らぬうちに手を貸してもらうことが多い。悪いと思いつつ流され依存してしまうことも」

●星野一幸（ほしのかずゆき）（つぶらクン）
大野小出身・外部でシニアリーグに所属。１組。
必要以外しゃべらず、無口の野球バカ。何故か「空耳●ワー」的な聞き間違いが多い。実家が酒屋で、なにやら家庭環境が複雑な様子。
桃田との関係はいかに。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の青担当・通称アホシノ

「何を考えているがわからないが、周囲を冷静に見極め公平に物事を考えられる能力が高く、不言実行を地で行くタイプ。その反面納得したものしか受け入れられないという頑固な一面も。女心に関しては鋭いやら鈍いやら。時々周囲がビックリする程行動が大胆で未知数」

●後藤洋（ごとうひろし）
大野小出身・バスケ部所属。１組。
声も身体（１８０センチ）もデカイ尾島の悪友。元大野小バスケ部。
尾島は無二と親友と思っている。

『大野小隊・ロクでもないんジャー』の桃担当・通称ゴトンマ。

「明るくワイワイと楽しむ空気が好きな人。友情に厚く細かいことは気にしないおおらかなタイプだが、それは明るく気心知れている人限定。消極的で暗い奴は基本努力が足りないと思っているので、途端に見る目が厳しくなる」

●諏訪英行（すわひでゆき）
大野小出身・野球部所属。１組。
尾島の悪友、もちろんアホ。星野、伴兄弟、相模とはリトルリーグで一緒だった。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の黄担当・通称オタンコナスワ。

「周囲にいる優良人材を嗅ぎ分け、その恩恵を上手く利用できる人。或る意味この中では一番中学生らしい男子。一見薄情で調子のイイ男だが何故かカノジョがいて仲も良好。意外なことに五人の中で最初にちゃんとしたカノジョができたのも付き合いが長いのもこの人」

●桂（かつら）　龍太郎（りゅうたろう）（デビルマン）
大野小出身・一応柔道部所属だが幽霊部員。１０組。
山野中の「伝説の裏番」と恐れられた『山野中の鬼夜叉』こと桂寅之助の弟。現在は兄の後を継いで「裏番」を襲名中。こちらは違う意味で学校一の問題児。
『大野小隊・ロクでもないんジャー』の黒担当・通称バカツラ。

「口出しされるのが嫌いで人と群れない典型的な一匹狼タイプ。見たまんま硬派で怖いが、自分の強さを知っているのでやたら滅多に弱い者には手は出さない。女に関しては意外と好みがうるさく、高級志向」

●小関明日香（小リス）
大野小出身・バスケ部所属。１０組。
明るくてポッテリとした唇の小さくてリスみたいな可愛らしいショートカットの女の子。元大野小バスケ部。尾島、桂、星野、笹谷貴子、伴兄弟とは下の名で呼び合う古い仲でもある。尾島とは従姉弟同士で家も隣同士。
問題発言は天然なのか、計算なのか。

「いつも明るく元気ハツラツだが、時々漏らす一言がキツイ。良くも悪くも周囲を引っ掻き回すタイプで通り過ぎた後の残骸がいろんな意味で酷い。滅多に自分の心の内を見せない人」

●伏見　かおり（ベラ）
美千子のクラスメート。大野小出身・英語英文タイプ部部長。１組。
おかっぱメガネで歯列矯正をしている女生徒。通称「ブキミちゃん」
学級委員且つ生徒会副会長で、頭は超つくほどイイが変り者。クラスで浮いている。只今雄臣にターゲットロックオン。
地元で権力の幅を利かせている伏見一族本家の一人娘。伴丈一朗との関係はいかに。

「人の心を読む術に長け、流されずに現実をしっかりと見据えることができる冷静沈着なタイプ。用意周到なうえに堅実に物事を対処し完璧主義。それ故自分が素晴らしいと思うことは大いに認められるが、納得できないものは全てカス同然という手厳しい面も」

●佐藤　伸（カッコ）
美千子や成田耀子の元クラスメート。山野小出身・サッカー部所属で新部長。１組
「顔良し・性格良し・スポーツ良し」と3拍子揃った、元山野小サ

ッカー部所属で学年一のモテ男だった、中学でも記録更新中だが、尾島に抜かれそうな予感。切れ長の目のキリッとした精悍な顔立ちで、いわゆるお醤油顔。

「基本好き嫌いの無い人で天然のタラシ。みんなと仲良く楽しく平和にがモットーだが、不用意に足並みを乱す奴や、人としてそれってどーなの？　という人には声を荒げることも。しかし根っからイイ人なうえに引きずらないタイプなので、争いごとになることは滅多にない」

●田宮俊平（王子）

美千子の思い人。下山野出身・バスケ部所属で新部長。１組。程よく日に焼けて、目尻に皺を寄せて笑う様が爽やかな男の子。元下山野小バスケ部。学年でもモテ男に入る部類。尾島たちと仲が良い。

「ボーっとして天然のように見えるが、その実周囲に気を配り、人より抜きん出ぬよう気を使って2、3番手に徹するタイプ。周囲と調和を大事にし、いい意味でも悪い意味でも目立つのを良しとしないシャイな人。女子とは基本共通の話題がある特定の人以外は苦手で逃げ腰」

●成田耀子

美千子の天敵。山野小出身・バスケ部所属。１組。モテ男には敏感で、自分を良く見せる才能はピカ一。しかし嫌いな奴には容赦なくプレッシャーを掛ける女の子。元山野小バスケ部。小学校の時は「佐藤伸」命だったが、今は「田宮俊平」に乗り換え中か。

「イケてる男性はとことん持ち上げ、自分を魅力的に見せる努力を

絶対怠らない立派な精神の持ち主。それ故イケてない男と嫌いな女にはかなり手厳しいタイプ。あらゆる場面においてメリットがあるかないかで付き合いが変わる人」

●原口美恵（はらぐちみえ）
美千子の天敵其の2。大野小出身・バレー部所属で新部長。1組。
尾島大好き女の子。尾島と美千子の間を疑い、なにかと牽制を掛けているようだが、その牽制先が増えた模様。尾島の態度にイライラハラハラ増量中
元大野小バスケ部。

「普段は責任感のある明るい女子だが、男が絡んだ途端周りが見えなくなるタイプ。好きな男一筋で絶対ブレないが、いいように扱われているとわかっていてもそのまま流されてしまうダメな部分も」

●奥住（おくずみ）さん
大野小出身・バレー部所属の副部長。1組。
奥住トリオのリーダー。ベリーショートの噂好きな女生徒。
東先輩と美千子の間を「怪しい」と睨んでる。「原口美恵」とは肌が合わず、思いっきりチィちゃんの恋の応援副団長。

「活発で物事ハッキリしているが、好き嫌いが激しく時々暴走気味。その反面良いもは良い、悪いものは悪いときちんと言える人」

●光岡（みつおか）さん
大野小出身・バレー部所属。1組。
奥住トリオの一員。
占いが大好き、愛読書（バイブル）は「Ｍｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」。

「基本大人しく、どっちつかずな人。苦手感のある人でもそれなり

に付き合っていける世渡り上手なタイプ」

●加瀬（かせ）さん
大野小出身・バレー部所属。２組。
奥住トリオの一員。

「うるさい男子が苦手で少し神経質な女子だが、だからといって騒がしい雰囲気は嫌いというわけではない。なんとなく嬉しさを素直に表現できない天邪鬼タイプ」

＊＊＊

●本間厳太（ほんまごんた）（マイケル）
中学に上がる時、群馬県富岡市から引っ越してきた。１組。
万年寝太郎のヘコキムシで、面倒事があると学校を休む癖あり。尾島からの度が過ぎるアプローチに少々困惑気味。

●辺見（へんみ）先輩（せんぱい）
大野小出身・バスケ部所属、現在３年男バス部長。
尾島や後藤が所属していた大野小バスケ部の先輩。尾島を熱心にバスケ部へ勧誘していた。女バスの部長、飯塚と付き合っている様子。

●飯塚（いいづか）先輩（せんぱい）
大野小出身・バスケ部所属、現在３年女バス部長。
小関明日香や原口美恵が所属していた大野小バスケ部の先輩。

●錦戸（にしきど）先輩（せんぱい）（ラフレシア）
女子バスケ部３年、雄臣にホの字。

●平畑（ひらはた）先輩（せんぱい）（アマゾネス）

女子バレー部3年部長、雄臣にホの字。

●青島先生（チンタオ）
2年1組の担任。
のんびりおっとりの社会科担当中年教師。

●梨本先生（リポーター）
2年担当英語教師、英語英文タイプ部顧問。

●箕輪先生
2年10組の担任
2年担当体育教師、陸上部顧問。

●一之瀬先生
2年担当英語教師、バトミントン部顧問。

●岩瀬先生
3年担当数学教師、バレー部顧問。

＊＊＊

●荒井真美子（リンダ）
山野中新1年生・体操部所属。美千子の妹。
姉とは違い、胸以外はスタイル抜群で可愛らしいがメチャ気が強い。
山野小のバスケ部員だったが成田耀子とは気が合わない。
ただ今東雄臣を狙い撃ち中。

「世界は私の為に回っているという典型的な女王様。好かれるのと嫌われるのが極端にハッキリしているタイプ。しかし本人は自分大好きのため、他人の目はまったく気にしていないし、自分の良さを

理解できない奴はどうでもいいと思っている人」

●安西（あんざい）　新（あらた）
山野中新1年生、陸上部所属。クオーター。
美千子が通っている英語塾の先生の息子。雄臣とは従兄妹同士。
大人しい少年で、真美子が好きらしい。引っ越しを機に受かった私立を蹴って山野中に進学した。

「この小説の中で唯一まともな男その1。元々実力はある上に、コツコツと積み上げていくことを絶対忘れないと努力の人。礼儀正しく気遣いもできるが、一回決めたり、臍を曲げたりしたらテコでも動かない頑固なタイプ」

●日下部（くさかべ）　孝司（こうじ）
山野小出身・サッカー部所属、現副部長。
生徒会役員ＯＢの優秀な3年生。雄臣と仲が良い。笹谷貴子の彼氏。

「この小説の中でまともな男その2。雰囲気が良くて典型的なイイ人。頭も運動もいい上に容姿も悪くなく、女性を思いやる心を持ち合わせている完璧な男だが、なぜか思い人とはイイ人止まりで順調にいかないタイプ」

●東（あずま）　雄臣（ゆうじん）（ベム）
山野中に転校してきた、3年生。見目麗しいクオーター。
美千子が通っている英語塾の先生のとこに居候することになった先生の甥っ子。母親は数年前に死去、父は海外出張中。安西新（あんざいあらた）とは従兄妹同士。美千子との関係は一時期険悪だったが、現在は小競り合いする仲にまで回復。

「容姿端麗・成績優秀・運動神経抜群と隙の無い完璧な『神』のよ

うなお人。その実裏の顔は『鬼神・修羅』という二重人格。いい意味でも悪い意味でも認めた人にしか本当の顔を見せない。嫌いなヤツには徹底的に追い込むが、大事なものや守るべきものは全力を尽くす。たとえ残酷なやり方だとしても」

＊＊＊＊＊＊＊

★その他の登場人物★

●笹谷厚子（ささやあつこ）（アッコ）
笹谷貴子の5歳年上の姉。
かつては山野中のスケバンとして名を馳せ、マシンを転がせば右に出るものはいないほどのドライビングテクニックを持つツワモノ。
現在は看護短大で看護婦となるべく勉学中の為、家を出ている。女豹教祖と言っても過言ではない。

「飲んでも素面でも周囲を巻き込む厄介なタイプ。礼儀知らずで義理人情をないがしろにするやつにはほぼ半殺しだが、慕ってくるものにはとてつもなく情が厚い人」

●桂（かつら）　寅之助（とらのすけ）（赤鬼、赤髪ピアス）
大野小出身。
桂龍太郎の三つ年上の兄。
口が悪く、どうしようもないエロだが、かつては『山野中の鬼夜叉』『伝説の裏番』など様々な肩書を持ち、先生と生徒達を震撼させた不良。現在は「美園工業高校」へ通学中、通称『美園の赤鬼』。お好み焼き屋「まるやき」でバイトしている。
ホテル・ダブルスプラッシュの常連客。

「酒とケンカにゃ滅法強いが、ガキ以外の女には滅法弱いダメ男。

空気を読まないようでいてちゃんと心得ている大人な部分も。勉強以外は努力せずともオールマイティーにこなしてしまう器用なタイプ。社会適応能力が高め」

●伴　丈一朗（スケコマシ、チリチリ）
河田中の2年生で問題児。大野小出身。
髪は茶色のチリチリパーマ。尾島達と同小だが、旧友というより、ライバル。桂龍太郎と共に『山河の二狼』と呼ばれる。
只今ケンカも恋も無敗記録更新中。ブキミちゃんやシニアとはなにやら関係あり。

「超女好きで誰にでも気軽な一面はあるが、心が伴っているかは怪しい。言動も考えも態度も軽く甘いようでいて……」

●伴　総二朗（チクチク）
河田中の1年生で丈一郎の弟。大野小出身。
容姿は兄に似ているが、こちらは野球少年らしく髪は短い。ソバカスあり。
現在剛速球を投げるシニアの控え投手。

「誰であろうと怯まず剥き出しの牙を隠さない、ある意味自分のスタンスを絶対崩さない人。当然周囲は傷つくが……」

●相模　力（相撲力士）
河田中の2年生でやっぱり問題児。河田小出身。
巨漢のモヒカンでヒゲあり。リトルリーグ所属後河田中の野球部所属だったが、現在は野球をやっていない模様。
相撲だの力士などと呼ばれると怒りだし、いちいち訂正を入れる。

「見た目はアレだが想像できないほどフットワークは軽く、細かい

作業は意外と得意。キレるとしつこく粘着質なタイプ」

●蝶子（ちょうこ）さん（ベティちゃん）
桂兄弟の伯母であり（？）、１０周年を迎えたお好み焼き屋「まるやき」の女性オーナー（？）

「全てにおいて謎」

●鬼頭玄造（きとうげんぞう）
鬼頭不動産社長。大野商店街（別名銀座通り）の振興会長で大野ゴールデンカップスの監督。
色黒パンチで不埒なナイスミドル。

「存在そのものが謎」

●桃田（ももた）
尾島や原口の元クラスメートで、１年しか大野小いなかった、浪花の転校生。
尾島の初恋の相手で、苦い失恋を味あわせる。なにやら星野ともなにかあったらしい。

「あらゆる面でこの小説のキーマン」

●東家両親
●荒井家両親
●安西家両親

＊＊＊＊＊＊＊

★今後の出演予定人物★

●横溝　忍（よこみぞ　しのぶ）
●伴　礼子（ばん　れいこ）
●渡部　遥（わたべ　はるか）

一月は氷解～Ｍｒ．ゴッドの進路・前編～

「……え、え～と、だからこの‘ｔｏ’は前置詞の役割ではなく、この名詞にかかるｔｏ不定詞というやつで、いわゆる形容詞的要素を含んでいるから……」

　要らない藁半紙の裏に書いた英語のセンテンスの内容を説明すると、目の前でウンウン唸っていた和子ちゃんは、眉根を寄せた険しい顔を急に半べそ寸前の幼稚園児のように変化させた。その情けない表情はまるでつい先日迎えたばかりのお正月の福笑いのようで、思いっ切り失敗したお多福になりそうな勢いだ。

「……どうしよう、ミっちゃん」

「え？」

「全然言ってる意味がわかんない。ていうか、もはや何処がわからないのかがわからないよぅっ！」

　そう叫んだ和子ちゃんは、ガバリと英語の問題集に顔を突っ伏して「あ～ん、どうしよぅ～」とくぐもった声を上げた。運動全般は得意だけど国語以外の勉強全般は苦手という和子ちゃんは、特に英語と相性が悪かった。私に言わせれば同じ語学だし、あの活用がちんぷんかんぷんな古文の文法より英語の方が断然楽なのにと思うのだが。本人いわく「古文漢文はロマンがあるけど、英語は実用って感じでツマンナイ！」なのだそうだ。ひそかにロマンス小説が好きな和子ちゃんらしい。

　向かい合って座っている私はそっとため息を吐きながら少し休憩しようかと尋ねると、和子ちゃんは未だ顔を伏せたまま大人しく頷いた。……既にその休憩は3回目なんだけど。

「ちょっと、和子。せっかくこの教室まで来たのにさっきから休憩ばっかじゃないの」
「だってぇ～、ここに来ればちょっとでもあやかれるかと思ったんだもん……」
「気持ちはわかるけど、さっきから全然進んでないじゃない。もう英語は一旦置いといたら？　それより気分転換を兼ねてさ、暗記すれば確実に点数を取れそうな実技科目を今のうちにガッチリ抑えてみるのは？　音楽とか保体とか。それこそほら、得意な国語を完璧に仕上げるとか」

和子ちゃんの隣でペンをクルクル回しながらアドバイスしたのは、「ア・テスト」対策の参考書に赤ペンを引いていた貴子だった。久しぶりに放課後まで残っていられるのは、貴子のお父さんが珍しくまとまった休みを取ってくれたからと教えてくれた。彼女のお父さんは長距離トラックのドライバーさんなので、家を空けるのも長いが一つの仕事が終われば休みの融通が効くらしい。

「ん……そうなんだけど。ちょっとでも英語は良くしとかないと……二学期のテストも散々だったし。三学期の成績は、ほら……内申書に響くじゃない？　それに英語が良くできれば――も、もしかしてよ？　東先輩と仲良くなれるキッカケがデキるかもしれないというか……」
「……」

そっと顔を上げた和子ちゃんは上目づかいの涙目で、しどろもどろ弱弱しく呟いた。
（やっぱり、そこか……）
なんとなく気付いてはいたが、改めて理由を聞けば女性として共感できる反面、「あの鬼神・修羅にそこまでしなくていいよ」と諭したい衝動に駆られてしまう。

「ん～。……でもア・テストまで二か月切ったから、そろそろ追い込み掛けないと」

貴子が綺麗な眉を八の字のように下げると、和子ちゃんも同じように困ったチャンの悲しい顔つきになった。

「ア・テストまで二か月……ということは卒業まで二か月……ということは先輩と会えるのもあと二か月……あ～ん、どうしよぅっ！」

「「……」」

再び半べそを掻きながら机に突っ伏した和子ちゃんを見た私と貴子は、お互い顔を見合わせながらなんとも言えない苦い顔をした後、再び深い溜息を吐いた。

（卒業……か）

和子ちゃんの気持ちがうつったのか、目の前に広げてある「ア・テスト」の問題集を目で追っても全然頭に入らなかった。気分転換をするために席を立って窓から空を見上げた。しかしいつも見上げる空となんとなく雰囲気が違く見えるのは、ここが自分の教室である2年1組ではなく、英英部の部室だからだろう。今朝方から鉛のような色をした雲から小雨が降っていたが、空から白いものがふわりと落ちてくるのが見えた。天気予報通り、雪に変わったようだ。

「あ、やっぱり降ってきたね、雪」

いつの間にか貴子が横に立って窓の外を見ていた。

結局夏から切らなかった貴子の長い髪は既に胸の下あたりまで伸びており、毛先までキレイな栗色だ。今日は雨の為部活が中止なので、長い髪を括らずそのままである。引退してもうるさい三年に見つかれば一言注意されそうだが、当人たちは来月から始まる自分た

ちの高校受験のことで頭が一杯の為、二年生は徐々に服装や行動が最上級生のような自由さが滲み出ていた。

「……どうりで寒い筈だなぁ」

そっと呟いた貴子の横顔は、今二人の眼下に広がっている雪がはらはらと舞い落ちる誰もいない校庭のように寂しそうだった。みんなでワイワイ楽しくおしゃべりするときも力なく微笑むだけ。日下部先輩といる時でさえも。

二学期に入ってからほぼ毎日一緒に下校していた貴子と日下部先輩の姿は未だ健在だ。何度かその姿を見掛けるけれども、何故だろう。とても楽しい会話が弾んでいるとは言えないような雰囲気が漂っていた。もうすぐ日下部先輩が卒業してしまい、離れ離れになることが貴子の表情を暗くしているのだろうか。それとも――？

（……いや。先輩と会う時間は少なくなるし、お母さんも病気のこともあるから不安なんだ。日下部先輩、私立の男子校にサッカー推薦貰っているから、貴子が卒業しても一緒の学校というのは無理だし）

つい先日幼馴染が教えてくれた日下部先輩情報を思い返していると、その情報源である雄臣の姿が嫌でも頭に浮かんだ。

受験が迫っているからか。連日猛勉強の為に神経が研ぎ澄まされ、相変わらずのイイ男っぷりに益々凄味が増している雄臣。

カノジョがいるとわかっているにも関わらず、彼のファンである女子達は三月の卒業に向けてなんとか彼の心を射止めようと躍起になっていた。特に雄臣の進学先については年が明けるまでベールに包まれ、あの手この手で情報を掴もうという必死振り。のらりくらりとかわす本人から情報を得られないので、将を射落とせないなら馬を責めることにしたらしい。その結果、馬の中でも力強い若さが溢れる牡馬の「アラタナヒカリ（安西新）」と、ヨレヨレ負け越し

牝馬の「アライマイチクイーン（荒井美千子）」にオッズ言う名のターゲットが集中した。ちなみに暴れ馬「マミコマッチャウ（荒井真美子）」は、どうにも止まらないほど機嫌がアンダーな為に欠場を余儀なくされた。というより、いつ後ろ足で蹴り飛ばされるか恐ろしくて近寄れないと言ったほうが正しい。

そういうわけで去年の１２月などは、我が一組のモテ男である尾島と佐藤君の二人を差し置いて、圏外からトップテン入りするほど女子の呼び出し攻撃を受けた荒井美千子。宝塚も真っ青な人気ぶりだが、残念なことに彼女たちの期待に応えられるような走り……いや、情報を入手していなかったので、すぐランク外に転落した。

実際当の雄臣は年が明けるまで荒井姉妹やアラタに進学先を黙っていた。あまりにも雄臣ファンがしつこいので、身の安全確保の為に雄臣のことを安西先生に尋ねても、

『ごめんねぇ、雄ちゃんに口止めされてて詳しいことを教えてあげることはできないの。でも……雄ちゃんも色々考えているみたいよ？　なんだか自分でいろんなことを調べているみたいなのよねぇ。ほら、兄さんのマンションに帰ることが多いじゃない？』

……と困った顔で僅かなヒントを残すだけ。唯一教えてくれたのは、今後の進路や生活方針の最終確認をする為、雄臣は年末年始に東小父さんがいるニューヨークへわざわざ出向くということだけだった。

一月は氷解～Ｍｒ．ゴッドの進路・中編～（前書き）

タイトルが変更になりました。申し訳ございません。ｍ（＿）ｍ

一月は氷解～Ｍｒ．ゴッドの進路・中編～

新年が明けてとうとう雄臣が帰国する予定日の三日前。穏やかで平和な年末年始を満喫している我が家に、朝から無言電話という嵐が襲ってきた。

『正月早々なんて不吉な！』

取る度に無言電話だった怒り浸透の父と福袋でＧＥＴした洋服のファッションショーに余念がない真美子に代わって、父のお客が来るために超忙しくおもてなしの準備を手伝っていた私が電話口に出れば、いつかを彷彿させるような応答が受話器越しに滑りこむ。

『――俺だ』

『……だからこのクソ忙しいときにどちらの俺様でしょう……』

『出るのが遅いぞ。それに言葉使いがなっちゃいないな。……まぁいい、手短に要件を言う。明日帰還するから明後日の午後安西家まで来い。なおこの電話は間違い電話であって、決して東雄臣からではない。そういうことで絶対他言無用だ。以上』

ブツッ！　……ツーツーツー……。

『……』

平和な時間は終了した。

新年の挨拶もろくにしない鬼神・修羅的な上官から徴収命令を受けた水島上等兵……ではなく、呼び出しを受けたペーペー新米女豹の荒井美千子は、手強い女豹達（例えば真美子（リンダ）、例えば伏見（ベラ）さん、例えば先輩たち（ラフレシアとアマゾネス））に気付かれずに来いと言う、年明け初っ端から高

等すぎるミッションを課せられた。
なんとか真美子に悟られずに安西先生の家にお邪魔すれば、そこにはニューヨークの香りをプンプンさせながらソファーにふんぞり返っている雄臣がいた。コーヒーを飲みながら堂々と足を組み、優雅に写真を眺めているその姿を見ただけで、自分もマンハッタンが一望できるペントハウスにいるような感覚に陥るから不思議だ。

『よう、ミチ。Ａ　Ｈａｐｐｙ　Ｎｅｗ　Ｙｅａｒ！　俺からの愛の籠ったクリスマス・カードは届いたかい？』
『……ハハハ』

引き攣り笑いをしつつ、「わざわざニューヨークから送っていただき恐悦至極に存じます」と慇懃無礼に返せば、雄臣はニヤリと笑いながら「未来のワイフには当然だろ」といけしゃあしゃあとのたまい、手にしていた写真をテーブルの上にスライドさせた。
（……ったく。な～にが「愛の籠った」、だ！）
安西先生経由で受け取ったクリスマスカードはポップアップ形式のカードだった。
……ただし、カードを開いた途端にミニスカサンタの衣装が肌蹴た片乳（かたチチ）ポロリの巨乳女が、ベッドで寝ている男を襲っているシーンが飛び出てくるという衝撃的なものだが。
内容に問題アリとか、そんな破廉恥な代物をどの面下げて入手したのかとか、問い詰めたいことは色々あるが――中でも尤も重要な問題は、寝込みを襲っている片乳ポロリのグラマーサンタと襲われている男の顔が、女豹顔の荒井美千子とまんざらでもない顔をしている東雄臣の写真（それもつい最近のもの）にすり替わっていたという、憎い小細工が施されていた点にある。
（大体私の女豹スマイル、一体いつどこで激写されたのよっ？！）

『すまない。それは秘密事項だ』

『ワァォッ！　新年早々思考が筒抜けっ！』
『今年のクリスマスにはあの恰好で来てくれ。ついでにガーターベルトと網タイツも忘れるなよ。――しまった！　肝心な煙突がないな……仕方がない、マンションの玄関からで構わないから』
『ななななにが「構わないから」ですかっ！　ていうか中学生の分際で肌蹴たサンタの衣装じゃ飽き足らず、片乳ポロリの破廉恥な格好でマンションまで来いおっしゃるんですかっ？！　公然わいせつ罪で捕まるわっ！』
『な～に、そこは「おいはぎ」にでもあったと言えばいいじゃないか。相変わらずオバカさんだな、ミチは☆』
『その言葉、そっくりそのまま星もつけて返してやるっ！　……って、あ、あれ？』

とんでもないことを堂々とほざいた雄臣に、ビシッと指をさしながら少々論点がズレている怒りを燃やした荒井美千子。が、ある重大な言葉が織り込まれていることに気付き、怒りの熱はすぐに沈下した。

『あ、あの……マンションって、雄兄さん……もしかして――！』

自分の頭に思い浮かんだ考えに驚きを隠せず、危険は承知だったが徐々に口が緩むのも抑えられない。
（ついに……ついにこの時が来たぜっ、ヒャッホー！）
脳内でリン・ゴーンと祝福の鐘が鳴り響くのを止められない荒井美千子――なんせ雄臣が卒業するだけでバンザイものなのに、安西先生宅という私のテリトリーからいなくなると、たった今本人自ら宣言したのだから！
勝利の笑顔を我慢するような私の変顔に雄臣は大袈裟なため息をついた。持っていたマグカップを静かにテーブルに置き、おもむろに前屈みの体制をしながら、腿で腕を支えて指を組んだ。こちらを

睨むように見上げている雄臣の目には挑戦的な光が宿っている。

『……相変わらず心がダダモレでわかり易いヤツだな。まぁ、いい。そんな変顔で笑っていられるのも今のうちだ。こっちは色々と奥の手を準備してるからな。開けてビックリ玉手箱ってやつだ』

『え？　玉手箱？　……ってなんですか？』

『いや、パンドラの箱というべきか――』

謎の言葉を漏らす雄臣に首を傾げたが、当の本人はもうその話題は終わりと言うように「以前住んでいたマンションに戻ることになった」と話題を元に戻した。

『本当に？　本当に戻るんですよねっ？』

『念を押すな。とりあえず卒業までマリ叔母さんのお世話になって、卒業したらO区のマンションに戻る』

『……っていうことは、健人小父さんがニューヨークから帰ってくるんですね？！』

私の嬉々とした叫び声に雄臣は頭を横に振り、そうじゃないと言いながら頭の後ろで腕を組んで再びソファに凭れた。

『父さんはまだ帰れそうもないよ。あと一年は無理だってさ。仕事が長引くようなら、俺もアメリカに行くかもしれない』

『アアアメリカぁっ？！』

『クク……そんなハトが豆鉄砲くらったような顔をするなよ。あくまでも「かもしれない」の話だよ』

『かも、しれない？』

『そう。父さんの出張が長くなるようなら、そういう可能性もアリってなだけ。でも暫くはマンションで一人暮らしをしながら高校へ通うことになった』

『……一人暮らし……』

『あぁ。そもそも父さんのアメリカ出張の話が出たとき、俺はそのつもりだったんだ。マリ叔母さんの家に来る気はなかったんだよ。ある程度のことは一人できたから問題なかったし、それこそ父さんは仕事三昧で家のことなんて俺にまかせっきりだったからな。ほとんど一人暮らしをしていたようなもんだ。こっちに来たのは、たまたまいろんな事情が偶然に重なっただけだよ』

『じ、事情？』

『――そうだ。俺がまだ義務教育の身だったり、叔母さん達がタイミングよく家を買ってそこに空き部屋があったり……その他色々と、な』

『そう、だったんですか……』

リビングの大きな窓から外を眺める雄臣を見ながら、あらためて彼の言葉を噛みしめると、パンパンに膨らんだ風船が勢いよく空気が抜けていくように、心が急激に萎んでいくのを感じた。

（本当に帰っちゃうのか……）

聞いた瞬間はとてつもなく嬉しかった。

嬉しい筈だった。

なのに――心には複雑な感情が渦巻き、焦燥感が募る。

それは決して雄臣がいなくなって悲しいだとか、彼に対する愛情などから湧き上がる感情ではない。正直学校という空間を無事平和に過ごしていくには、彼がいない方が大変都合が良かったからだ。

（……なら、この身体にぽっかりと穴が空いたような、落ち着かないような気持ちは？）

それは多分――お互いを認め合った好敵手（ライバル）に先を越されて置いて行かれるような、大袈裟に言えば兄弟、いや双子の片割れと離れるような感覚に似ているのだ。

雄臣は生活を引っ掻き回す厄介な鬼神・修羅である反面、良くも悪くも「荒井美千子」という人物を認め、真正面から向き合ってくれる唯一の人物であることは、鈍い私でも心のどこかでちゃんと理解していた。一度は最悪な形で絶交になった二人だけど、幸か不幸か再び会う機会に恵まれてみれば、時間が経った分それは意外な方向へと動きだし、新たな関係――お互い本当の顔を、心の奥底にある感情を見せられる相手――が築けたのも確かだった。

それに雄臣は一般的に接すれば非常に頼りがいのある優れた人物であった。勉強面しかり、対人面しかり、生活面しかり。一緒にいればその完璧な人となりに感化され、自然と礼儀正しい言葉と態度を学ぶだけでなく、まるで自分もそのような人物になったような気にさせられるから不思議だ。おかげで最初はなんとなく恰好だけで入っていく人も、最終的にはそんな自分が恥ずかしくなり自然と勉強に力が入ってしまう。実際勉強面に関してかなり助けてもらったのは事実で、英検3級に合格したのも彼による力が大きかったのだから。

そして――、

『マンションで一人暮らしをしながら高校へ通うことになった』

おそらくコレが最大の理由だろう。

雄臣の一人暮らし宣言は、私の中で燻っている「ある願望」を刺激するのだ。

この街を出て新天地へ向かいたいという、私の強い願望を。

一月は氷塊〜Ｍｒ．ゴッドの進路・後編〜

一人暮らし――。

なんて魅力的な言葉なのだろう。

物心つくころから憧れていたが、本格的に意識しだしたのは雄臣が安西先生の家に来てからだ。彼が実際に家元から離れ、安西先生の家にお世話になっている姿を目のあたりにして、夢のような曖昧な思いに現実味が増した。それはまるで、真っ白なキャンパスにさまざな色を塗るような感覚だった。

もちろん他にもさまざまなキッカケはあったが……約一年ぶりに東京の奥多摩にある父さんの実家へ行って元旦を過ごしたことが画龍点睛となった。

荒井家では親戚一同必ず元旦には顔を揃え、大人も子供も関係なく正月を祝うのが毎年恒例の行事となっていた。

妹は毎年楽しみにしていたが、私は行きたくなかった。それでも仕方なくついて行ったのは、お年玉という魅力的な目的のために他ならない。なんせ親戚が多いのでもらえる数も半端ないのだ。

――しかし。着いてから一時間も経たないうちに後悔する羽目になった。

毎回毎回そうなのだが、こちらから挨拶したり話しかけたりしても妹と全然違う素っ気ない態度で余所余所しくされたり、手伝うと言えば「アンタは座っててていいよ」とぞんざいに返されたり……。

（なぜ私だけなんだろう？）

いつものように自分の態度の中に原因があるのかと散々自己分析をしながら探ってみた。去年の夏に帰省しなかったのがいけなかったのかなとか、もしかしたら私の遠慮するような、話しかけるのを

待っているような態度もいけなかったのかなと思ったが……原因はいつもの如くわからず仕舞いで終わった。父方の親戚とはやっぱり折り合いが悪いんだと再確認しただけ。

結局私だけは親族との会話はほとんど皆無で、居心地悪いことこの上なかった。

午前中は耐えたがとうとうお昼過ぎたころには我慢ならず、お年玉(もの)ももらったので一人で帰ってきてしまった。「明日友達とお参り(もらう)行く約束しているから、それにア・テストの勉強もあるし」などともっともらしい理由をつけて。案の定親戚は「なんだコイツ」という白けた顔をし、母は申し訳なさそうな、父は憮然とした顔をしたが、理由が勉強となると強くは言わなかった。ア・テスト様様だ、K県万歳。

一人で正月の閑散とした電車に揺られながら、涙でぼやける景色を黙って眺めていた。荒む心は、早く大人になりたい、そればかりを望んでいた。大人になれば家族や親せきに縛られず、自分の好きなように生きれる。あんな狭苦しく息の詰まるような環境じゃなくて、自分らしく生きる居場所を見つけることができる。

（……あと四年だ。四年さえ我慢すれば荒井家(ココ)から出られる）

できれば雄臣と同じく中学を卒業した時点で実行に移したいところだが、どう考えても我が家の現状では無理だった。父は転勤がないサラリーマンだし、なによりも一人暮らしはお金がかかる。私一人にそんなお金を掛けられるわけがない。だから公立に行きながらバイトで資金を稼ぐことを考えていたのに……雄臣のせいで女子高に行かざる負えなくなりそうだったので、バイトは半ば諦めていたのだ。

しかし、雄臣がO区に戻るなら――。

（……そうよ。雄臣がO区に戻るなら、公立を進学先の候補に入れ

ても大丈夫なんじゃない？　そしたらバイトもできるし！）

雄臣がいなくなることにチョッピリへこみ、一人暮らしを先越されると焦燥感で一杯だった心も、先の見通しが立ったことでなんとか気分が落ち着き、徐々に上がってきた。未知なる私の人生（キャンパス）に、輝かしい未来という名の絵が虹色のクレパスで次々描かれる幻が見える！

『というわけでさ、父さんは都立でも私立でも好きなところに行けって言ったから、俺は共学の私立にでも行くことにするよ。都内でも私立の共学ならミチも進学できるだろ？』

『……はぁ、それはいーですね～。共学の私立ですね――って、えぇっ？！　わ、私も？！』

組んでいた足をダイナミックに組み替えながら言った雄臣のセリフは、呑気に芸術を爆発させながら仕上げた素晴らしい私のキャンバスを切り裂いた。

『当たり前だろ。第一都立はY市に住んでるミチには無理じゃないか。それよりわりと近くにレベルの高い私立の学校があるんだ。●●学園、知ってるだろ？　あそこなら父さんも文句は言わないだろうし、いいよな？』

『ななな何故にして私も行くこと前提なってるの！』

『何を今更……あぁ、照れてんのか！　バカだな、俺達は将来を誓い合った深い仲だろ？　なんせお互いすべてを曝け出して洗いっこした間柄だもんな』

『健全な読者に誤解を招くような発言はお控え願います。ただ単に小さいころ一緒にお風呂に入っただけでしょーがっ！』

『やはり昔の記憶じゃ不満、か。ならすぐにでも記憶を塗り替えるため風呂場へ……といきたいところだが、さすがに安西家（ココ）じゃまず

い。さてどうするか――そうだ！　ちょっと行ったところに「ホテル・ダブルスプラッシュ」があるんだ。なんでも浴槽プレイを重視した、「Ｈｏｔな秘湯でもっと愛して☆アッチもアチアチ温泉ルーム」という部屋があってかなりオススメらしい。さっそく行ってみようぜ。なーに、父さんからごっそりお年玉せしめたから金の心配はするな』

『……おいおい。どっかで同じようなセリフを聞いたことがあるのは私の気のせいですかね』

『なにぃっ？　もうすでに「温泉ルーム」を知っているというのかっ？！　中学生にくせに、なんて破廉恥な！』

『いつも無視するくせに、なぜそこにだけ反応するんスか。つーか、そんな中学生を誘った雄兄さんも中学生でしょ！　それに大変申し訳ありませんが、そのような場所で浴槽プレイする気もなければ、照れているわけでもありません。ましてや将来も誓い合ってません！　それより、私には雄兄さんの行く私立なんて無理ですって！　だだ第一、そこまで成績追いついてないし！』

『そこの高校、結構制服が可愛いんだよな。紺のブレザーにチェックのスカートでさ。俺は断然セーラー服よりブレザー派。セーラー服は脱がせにくくていけない。あ、そうそう。恋人同士はお互いのネクタイを交換し合うらしいぜ』

『……ハハハ、ま～た全然聞いちゃいないよ、この人（こうなりゃアッシは地元の公立、最悪の場合は女子高へ進ませてもらいやす、ゲヘヘ☆）』

『あぁ、ミチの親父さんには公立や女子高より俺と一緒の高校へ進学させたほうがいいって言っといたから。いっそ俺のマンションで同棲するっていうのどうよ、ゲヘヘ☆』

『Ｏｏｏｏｏｏｏｐｓ！　わかっちゃいたが、やっぱり人間じゃないよこの人！　中編の後半部分で色々褒め称えた私の気持ちを返せ！』

『結婚前に互いを知るというのも大事なことだろ。ま、例えミチに

問題はあったとしても、それは徐々に調教し……直していけばいいか』

『無視なうえに問題は私だけですかいっ』

『でも父さんはあんまりいい顔はしないかもなぁ。その時は先に婚約でもして……そうだ！　この際無理矢理既成事実でも仕込んで納得させようぜ。我ながらナイスアイディアだな！』

『ヒェェェ～ナイスどころか犯罪臭が漂ってるよっ』

『……ったく。父さんもいい気なもんだよ。息子を自分の妹に押し付けといて、自分はニューヨークで優雅な独身気取りの生活を送っているんだからな。おまけに相変わらず変なのもウロウロと寄せ付けているみたいだし。油断も隙もありゃしない』

『ハイッ、ハ～イ！　そこまで言うならいっそ雄兄さんがアメリカに行って健人小父さんを見張ったらいいと思いますっ！　ねっ、ねっ？』

『バカ言え、息子にまで色目を使うあんな頭悪そうな化け物がうろつくアパートに住めるかよ。しかしそのまま放って置くのもマズイな……万が一にも父さんと揃って帰国だけじゃ飽き足らず、いきなりあなたのママよなんて俺はゴメンだぜ。やっぱり悪い芽は早め早めに摘み取っておかないといけないよな』

『そうなのよ！　悪い虫は早め早めに駆除した方が後々憂いがないって雑誌「ａｈａｎ・ａｈａｎ（アハン・アハン）新春女豹特大号～狩って狩られるこの一年～」の特集記事でも――って、何言ってんだ私！　だだだ大体こんな遠いところから一体何ができるんスかっ？！』

『……おい。駆除がどうのこうのと言った勢いはどうした新米女豹よ。そんなことよりミチも協力しろ。将来はおまえの義父（とう）さんになるんだからな。ここでとんでもない部外者が乱入したら余計ヤヤこしくなるだろ？　ほら、遺産の問題もあるし。今のうちから徐々にプレッシャーを掛けて精神的に追い込んでやろうぜ。敵の電話番号は既にＧＥＴ済みだ。まずは連日無言電話攻撃から始めるとするか』

『うわぁ……何気に電話番号を入手しただけでなく、遠く離れた地から無言電話たぁ、地味にワルで陰険ですな』
『だろ？　ほら、昔から言うじゃないか。「小さな悪からコツコツと」ってさ』
『明らかに間違ったコツコツでしょ、それっ！　ていうか我が家の無言電話はやっぱり雄兄さんかっ！』

夏に「父親としっくりこない」と言っていた割には、筋違いの悪に手を染めるほど父親を心配している雄臣。それに目の前のテーブルには、受験生のくせにかの有名なロックフェラーセンターのスケート場でスケートをしていたり、ゴーストバスターズに出てくる図書館の前で呑気にポージングしている写真が広げられていた。これを撮影したのはきっと健人小父さんに違いない。
（きっといろいろ注文つけたんだな……）
だとしてもこんなにたくさん撮ってくれるなんて、なんだかんだ言っても仲がいいじゃないかと思った。あまり写真を撮らない我が家と比べるのもなんだが、しっかり愛されていると思う。
（まぁ、撮られるたびに何故かブサイクさが前面に出る私にとっては、我が家の写真事情はありがたいことこの上ないけど）
それでも正直羨ましかった。父との関係が平行線どころか離れていくほど悪くなっていると感じる私にとっては眩しい関係だ。
写真をジッと見る私に雄臣はフンと笑って、「なかなか上手いだろ」と呟いた。あらためて一枚一枚写真を手に取って見れば、雄臣の言う通り本当に上手く撮れていた。スナップのアングルが思っても見ないところから撮られている珍しいものもある。まるでプロのカメラマンに撮ってもらったような芸能人の写真集みたいで、このまま写真を引き伸ばして壁に飾っても十分アートにもなるだろう。
さすがは健人小父さんという気持ちを込めて、私は素直に頷いた。
『……なんせプロ仕込みだからな。だいぶブランクはあるが』

雄臣の言葉に「え？」と顔を上げれば、目の前の彼は一瞬瞳に力強い光を宿したが、すぐに目を伏せてフイッと顔を背けた。

『なんでもない。ただ単にモデルがいいだけだろ。素材が良ければどんな料理も大概うまいもんな』

『ソレモソウデスネ』

『棒読みで答えるんじゃない。それより好きな写真選んでいいぞ。生徒手帳にでも挟んで肌身離さず持っていればお守りにもなるからな』

『なるほど、魔除けですね』

『お守りだ。仕方がない、ミチには一枚３００円で売りつけてやろう』

『金取るんかい！』

新米女豹と鬼神・修羅の会話は、いつの間にかニューヨークのペントハウスから正月の漫才寄席の舞台に変化したという、毎度バカバカしい展開になったのは言うまでもない。

ちなみに――。

アイドルのプロマイドより割高だった雄臣の写真を手に入れることはなかった。

それは決してお金がなかったからというセコイ理由ではない。魔除けどころかその写真自体に怨念が籠ってそう恐ろしやとか、健人小父さんと一緒に写っているものを選んで雄臣は切り取ってしまえばイイじゃ～んとか、これから誕生日が来る和子ちゃんへのサプライズプレゼントにしようぜイエイッとか、前々から脅されていた伏見さんとの取引材料に使っちゃえよホゥッ！　……などという邪な思考が読まれたからである。

おかげで「ニューヨークのお土産、オマエだけ無しな」と脅された荒井美千子。土下座してなんとか許しを請えば、雄臣が取り出してきた土産は予想以上のものだった。

『こっ、これはっ――！』

『そうだ。ニューヨークと言ったらコレだろ。遠慮せずに開けていいぞ』

満足そうに頷く雄臣が差し出したのは、ビニールに入った白いブツ――ではなく、Tシャツだった。

正直土産に関してはセンスがイマイチという前科があった為（奈良・大仏の提灯）、彼がどんなものをチョイスするのか不安を拭いきれなかったが……誰でも一度は見たことがある「アイ・ラブ・ニューヨーク」のロゴの一部、英語の‘I’の文字と真っ赤なハートが見えた途端に不安は塵となって吹き飛んだ。漫才の寄席から再びペントハウスに戻る安西家のリビングルーム。

これ欲しかったんだよ～とルンルン気分で早速ビニール袋からTシャツを取り出して広げてみれば――。

確かに「アイ・ラブ」の部分は記憶と違わない形だった。しかし――「NY」の部分にプリントされている「AY」とはなんぞや？

『……こ、これは？』

『そうだ。「AY」って言ったら「東雄臣」だろ。遠慮せずに着ていいぞ』

『バッタもんかい！』

『マグカップもあるぞ』

『揃えるな！』

やっぱり漫才の寄席だった安西宅のリビングルームには、荒井美千子の派手なツッコミが響いたのであった。

一月は氷塊～Ｍｒ．ゴッドの進路・後編～（後書き）

文中にある雑誌やＴシャツ、マグカップは架空のものです。ご了承くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

一月は氷解～Ｍｒ．タイガーの写真・前編～

「……千子……、美千子？！」

急に肩を揺さぶられ、ハッと目を見開いた。声の方を見れば、そこには「ザ・魔除けスマイル」の雄臣はおらず、眉根を寄せた貴子がいた。「あ、あれ？」などと呟きながら思わずキョロキョロと辺りを見回せば、そこは漫才の寄席でもなければペントハウスでもない。廊下の突き当たりにある狭い英英部の部室。その証拠にタイプライターやラジカセ、鍵付きの戸棚には都心の大きな書店でしか手に入らないような洋書が並べられていた。どうやら得意の思考ダイブをまたやってしまったようだ。

「どうしたのよ、美千子。さっきから妙な百面相になってるけど」
「……ハ、ハハハ。な、なんでもないよ。ちょっとヤなことを思い出しちゃって……」
「ヤなこと？」
「うん……写真の件は私も悪いし仕方ないけど、」

あのお土産はヒドいんじゃないかと思って――と言いそうになったところで口を噤んだ。写真やお土産の話は脳内で進行していたことで、隣の貴子が知る筈がない。慌てて「な、なんでもない！」と叫んで引き攣り笑いでなんとか誤魔化し、それよりも休憩を終わらせて勉強の続きをやろうと貴子に告げれば、今度は貴子が急にハッと顔を強張らせた。徐々に整っている綺麗な眉毛を下げていく。

「もしかして――」
「え？」

貴子は気の毒そうな表情で私の顔を覗き込み、まるで労わるようにそっと背中に手を添わした。

「もしかして、まだ『あの写真』のこと気にしているの？」

「は？　『あの写真』――って、どどどうして写真のこと知ってるのっ？！」

脳内思考を読まれた驚きで大声を上げれば、貴子が「え？」と聞き返した。

「や、だって、あの日の放課後私も1組にいたでしょうが」

「あああの日の放課後？」

「やぁねぇ、美千子！　ほら、先日の放課後にさ、明日香がわざわざ1組に持ってきた写真（ヤツ）だよ。尾島（マヌケ）達が散々好き勝手なコメントを言った……寅ニィが撮った、玄さん達との写真のこと！」

「玄さん……あぁ、『そっちの写真』ね」

思考を読まれたわけではないことにホッと息をついていたら、後ろから「ドン！」と机を叩く大きな音が聞こえた。狭い教室に響いた音にびっくりして振り返れば、机に伏せていた和子ちゃんはムックリ起き上がっていた。さっきまで眉も目尻も下がっていたのに、今は思いっ切り吊り上げながら両手の拳を机の上で震わせている。どうやら哀愁漂うお多福からご立腹なお多福に変貌を遂げたようだ。

「ミっちゃん、あんな連中の言うことなんて気にしなくていいからっ！　大体なんなのよ、あの尾島（サル）は！　人の不幸写真をネタにして笑いを取るなんてサイテー！」

和子ちゃんの「不幸写真」という言葉を聞いた途端、嫌な記憶が蘇ってきた。思い浮かぶのは、登校時に出会った山野中の裏番こと

デビ●マンの脅し文句と、ミニマムコンビが揃って教卓に立ち、大々的に不幸写真を黒板に貼りつけて勝手に脚色した内容を演説する姿。

「ミっちゃんに対してあんな言いたい放題……男の風上にも置けないっつーのよ！　これだからデリカシーのないガキは嫌いなのよっ」

「か、和子ちゃんっ！」

再び拳で机を叩く和子ちゃんのおかげで、遥か彼方に吹き飛んでいった「不幸な写真」の記憶。私の代わりに怒りを燃やしてくれる、デキた友達の心遣いに感動して何も言えない荒井美千子の頭上には、天使の祝福が降臨中！

「いくら明らかにロクでもないオッサンに囲まれたミっちゃんの引き攣った笑顔が変顔で面白いからって、あれはないわよねっ！」

「……か、和子ちゃん……」

励まされているはずなのに、なぜか心に吹きすさぶブリザード。羞恥と怒りですべて燃やしたいほど、出来上がった写真の内容が事実だけに何も言えない荒井美千子の頭上には、シベリア寒気団が南下中……。

「しかも、『荒井美千子はオヤジ好みらしいぜ！』なんて……そんなバカげたことを言いふらすなんて信じられない！」

「ハハハ……」

もう笑うしかなかった。

（オヤジ好み、ね）

最近になって荒井美千子にまつわる形容詞――地味、鈍臭い――に次いで新たに加わった言葉だ。ま、あながち間違ってはいない。

ただし、オヤジはオヤジでも「東小父さん」のような味のあるステキなナイスミドル限定だが。

大体オヤジというよりオジヤのような、ゴチャっとしたわけわからんナスビ踊る中年までＯＫ、カモ～ン！　などという寛大な心は持ち合わせていない。

貴子は和子ちゃんの怒りに押されて一応は頷いたが、すぐにフフフと忍び笑いをした。

「……あ～まぁ、そうなんだけど……確かに尾島（マヌケ）は酷いけどね？　でもあれは、嫌がらせとはちょっと違うというか」

「え～なんでよ、貴子ぉ。どう見てもミっちゃんに対する嫌がらせじゃん。始末悪いでしょ、あれは」

同意してくれない貴子に和子ちゃんが不満を漏らす。私も和子ちゃんに続くようにウンウンと頷くと、貴子は苦い笑いをしながら「チッチッチ」と人差し指を立てて横に振った。

「いや、あれはね？　嫌がらせじゃなくて、どちらかというと死守、よ」

「「ししゅ？」」

「そう。美千子が誰とも引っ付かないようにワザと言ってるワケよ。オヤジ好みって悪い噂を流しておけば、男子は誰も寄りつかないでしょ？」

クルっと回る子猫のような瞳をキラリと光らせた貴子は、意味深な視線を私に流した。ドキッと心臓が跳ねる私の横で、和子ちゃんは「なにそれっ」と悲鳴のような声を上げた。

「死守ぅ？！　やっぱりどう見ても嫌がらせじゃん！　ミッちゃんが男子に近寄れなくするためだけにあんなあることないこと言うな

んて……どんだけエライのよ、あの尾島（サル）は！　ていうか、何様？
それに男子を死守するなんて、気持ち悪いんですけどぉ！　ホモかっつーの！　それでなくとも田宮、ミっちゃんのこと驚いた顔で見てたよ？　アレ、絶対に誤解してるよ」

「ヒエェェ～！」

和子ちゃんの口から知りたくもない事実が飛び出し、今度は私が悲鳴を上げる番だった。

もう田宮君とどうこうなろうなどという気持ちは――ちょっとだけ、ある。が、ほぼ諦めているので見ているだけで十分満足できると思っていたけど……正直自分好みの王子からドン引きされるのは辛いものがある。ガックリと落ち込み、和子ちゃんが座っている机の前にしゃがみ込むと、貴子は私の頭を撫でてくれた。

「や、死守する対象は男子というより……まぁいいや。それより美千子、そんなに落ち込まないで？　田宮くんもそのうち忘れるって！　それよりホントに始末が悪いのは尾島（マヌケ）じゃなくて寅ニィのほうだから！　いい、美千子。脅されたからって、あんな写真絶対に買っちゃダメよ？！」

今度は化け猫のようにくわっと瞳を見開き、ギラリと光らせながら怒鳴った貴子。私は慌てて何度も頷いた。

＊＊＊

その事件は正月休みが明けて間もない、三学期のある晴れた日に起こった。

不思議なことになぜかその日は、朝からロクでもないことが続いた。

我が家の黒電話が鳴り響――きはしなかったが、朝方まで小説を読んだせいで、思いっ切り寝坊をしてしまったのだ。こんな日に限って頼みの綱の母は早朝から出かけ、妹の真美子は朝練で母より早く登校していた。

呑気に明け方まで本を読んでいた自分を罵りながら、猛ダッシュで学校の裏門向えば……前方に黒電話と言うよりロクでもない戦隊の黒のポジションを名乗る学校一厄介な男が、肩で風を切りつつダラダラと歩いていた。一瞬怯んだが、既に予鈴は鳴っていたし、コッソリとヤツの後ろをストーキングしながら校舎に入るまでジッと待つだとか、わざわざ正門に回っている時間はない。一世一代の決心で、伸びた金髪をリーゼントに整え、指定外のつぶれた学生鞄と超短ラン&ドカン、槍の剣先かと思うほど超尖っている靴をお召しになっているデビ●マンの横を完全無視の勢いで走り過ぎた荒井美千子。

――が。

旗のついたポールに飛びつく赤い帽子を被った髭のオッサンのように、ゴールの達成感を味わったのはほんの束の間だった。5メートルも開かないうちに、

『ゴルゥァア！』

……と言う声が背中に投げつけられたのだ。「これぞ巻き舌！」という見本のような素晴らしい発音で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0310j/

振り向けば、君がいた。

2011年11月28日09時47分発行